

県道浪江鹿島線関連遺跡発掘調査報告 1

植松C遺跡



2018年

福島県教育委員会
公益財團法人福島県文化振興財団
福島県土木部

県道浪江鹿島線関連遺跡発掘調査報告 1

うえまつ
植松 C 遺跡

序 文

埋蔵文化財は、それぞれの地域の歴史・文化に根ざした歴史的遺産であると同時に、それを活用することにより、地域の歴史・文化を正しく理解し、愛着をもって次の世代に伝えていくべきものです。福島県教育委員会では、埋蔵文化財の適切な保存及び活用に取り組んで参りました。

南相馬市原町区の県道浪江鹿島線整備事業計画地については、埋蔵文化財の保存のための協議を行い、現状での保存が困難な箇所に関して記録保存のための発掘調査を実施することとしました。

本報告書は平成28年度に発掘調査を実施した、南相馬市原町区上北高平字植松に所在する植松C遺跡の調査結果をまとめたものです。今回の調査では、縄文時代前・中期の遺物が多量に出土する遺物包含層と、平安時代の掘立柱建物跡及び竪穴住居跡を確認しました。

この成果が、地域の歴史を解明するための、また県民の皆様の文化財に対する理解を深めるための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査及び報告書作成に御指導と御協力をくださった福島県土木部、南相馬市教育委員会、公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に、厚く御礼申し上げます。

平成30年3月

福島県教育委員会

教育長 鈴木淳一

あいさつ

公益財団法人福島県文化振興財団では、福島県教育委員会から委託を受けて、県内の 大規模な開発に先立ち、開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。今回の南相馬市内における県道浪江鹿島線整備事業に関連する遺跡の発掘調査も、こうした事業の一つです。県道浪江鹿島線は、双葉郡浪江町から南相馬市鹿島区を結ぶ路線であり、整備事業が完了した暁には、当該地域の交通渋滞が解消されることが期待されています。

本報告書は、平成28年度に発掘調査を実施した南相馬市原町区に所在する植松C 遺跡の調査成果をまとめたものです。植松C 遺跡では、大量の縄文土器や石器とともに、縄文人の食滓とみられる動物骨が出土しました。また平安時代では、隣接する植松廃寺跡に関連するとみられる大型の柱穴を有する掘立柱建物跡と、竪穴住居跡が確認されました。本報告書の成果を、地域文化の理解を広め、郷土の歴史を研究する上での基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、この調査に御協力いただきました関係諸機関ならびに地域住民の皆様に、深く感謝を申し上げますとともに、当財団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成30年3月

公益財団法人 福島県文化振興財団

理事長 杉 昭 重

緒 言

- 1 本書は、県道浪江鹿島線整備事業関連調査において、平成28年度に実施した南相馬市植松C遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書には、以下に記す遺跡の調査成果を収録した。

植松C遺跡：福島県南相馬市原町区上北高平字植松 遺跡番号：212500437
- 3 当遺跡発掘調査事業は、福島県教育委員会が福島県土木部と協定を締結して実施し、調査に係る費用は福島県土木部が負担した。
- 4 福島県教育委員会は、発掘調査を公益財団法人福島県文化振興財團に委託して実施した。
- 5 公益財団法人福島県文化振興財團では、遺跡調査部の下記の職員を配置して調査にあたった。

副 主 幹 今野 薫 文化財主事 神林幸太朗
- 6 本書の執筆は、担当職員が分担して行い、各文末に文責を記した。
- 7 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図、ならびに福島県土木部相双建設事務所が作成した工事用地図を複製したものである。
- 8 本書に掲載した自然科学分析は、次の機関に委託し、その結果を掲載している。

放射性炭素年代測定 株式会社 加速器分析研究所
出土動物遺体の同定 株式会社 バレオ・ラボ
- 9 引用・参考文献は執筆者の敬称を略し、各章末にまとめて掲載した。
- 10 本書に収録した調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 11 発掘調査および報告書の作成に際して、次の機関および個人から協力・助言を頂いた。(順不同)

南相馬市教育委員会 藤倉ゴム工業株式会社
公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
荒 濱人 川田 強 小林謙一 藤本 海 堀江 格 森 幸彦

用例

- 1 本書における遺構図版の用例は、以下の通りである。
- (1) 方位 表記がない遺構図は、すべて本書の天を北とした。平面図における座標は、平成23年3月11日に発生した「東北地方太平洋沖地震」による歪みを補正した平面直角座標系のIX系の数値を示している。
- (2) 縮尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (3) 標高 断面図および地形図における標高は、海拔標高を示す。
- (4) 土層 基本土層はアルファベット大文字のLとローマ数字、遺構内堆積土はアルファベット小文字のℓと算用数字を組み合わせて表記した。
- (5) ケバ 遺構内の傾斜部は「↑」、相対的に緩傾斜の部分には「↓」、後世の擾乱部や人為的な削土部は「⇄」の記号で表現した。
- (6) 用例 挿図中の網点は以下を示す。これ以外は同図中に用例を示した。
 焼土化  柱痕跡  柱の当たり
- (7) 遺構番号 当該遺構は正式名称、その他の遺構は略号で記載した。
- (8) 土色 土層注記に使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著、農林水産省農林水産技術会議事務局他監修『新版標準土色帖』に基づいている。
- (9) ピット ピット番号に付した()内の数値は、検出面からの深さ(cm)を示す。
- 2 本書における遺物図版の用例は、以下の通りである。
- (1) 縮尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (2) 番号 挿図ごとに通し番号を付した。文中における遺物番号は、例えば図1の1番の遺物を「図1-1」とし、遺構図・写真図版中では「1-1」と示した。
- (3) 注記 出土位置・層位および調査時の取り上げNoを、遺物番号右脇の()内に示した。
- (4) 土器断面 胎土に纖維混和痕が認められる土器には▲を付した。須恵器は断面を黒塗りとした。粘土紐の積上げ痕は、一点鎖線を入れて示した。
- (5) 計測値 各挿図中に示した。()内の数値は推定値、[]内の数値は遺存値を示す。
- (6) 用例 挿図中の網点等は以下を示す。これ以外は同図中に用例を示した。
 黒色処理
- 3 本書で使用した略号は、以下の通りである。
- | | | | |
|------------|-----------------|-----------|------------|
| 南相馬市…M S C | 植松C遺跡…U E M · C | 堅穴住居跡…S I | 掘立柱建物跡…S B |
| 土坑…SK | 溝…SD | 特殊遺構…S X | 土器埋設遺構…S M |
| 柱穴・小穴…P | 遺構外堆積土…L | 遺構内堆積土…ℓ | グリッド…G |

目 次

序 章

第1節 事業概要と調査に至る経緯	1
第2節 地理的環境	2
第3節 歴史的環境	4
第4節 遺跡の位置と地形	9
第5節 調査 経過	9
第6節 調査 方法	11

第1章 調査成果

第1節 遺構の分布と基本土層	13
遺構の分布(13)　　基本土層 (13)	
第2節 壘穴住居跡	17
1号住居跡(17)　　2号住居跡(22)　　3号住居跡(25)　　4号住居跡(34)	
5号住居跡(37)　　6号住居跡(39)　　7号住居跡(41)　　8号住居跡(47)	
9号住居跡(48)　　10号住居跡(50)　　11号住居跡(53)	
第3節 掘立柱建物跡	54
1号建物跡(54)　　2号建物跡(56)　　3号建物跡(58)　　4号建物跡(60)	
5号建物跡(62)　　6号建物跡(63)	
第4節 土 坑	65
1号土坑(65)　　2号土坑(66)　　3号土坑(66)　　4号土坑(66)　　5号土坑(68)	
6号土坑(68)　　7号土坑(68)　　8号土坑(69)　　9号土坑(70)　　10号土坑(70)	
11号土坑(70)　　12号土坑(72)　　13号土坑(72)　　14号土坑(72)　　15号土坑(73)	
第5節 溝 跡	76
1号溝跡(76)　　2号溝跡(77)　　3号溝跡(77)	
第6節 その他の遺構と遺物	79
小 穴(79)　　1号特殊遺構(81)　　1号土器埋設遺構(82)　　遺構外出土遺物(83)	
第7節 遺物包含層	88
遺物包含層の概要(88)　　縄文土器(102)　　小型土器・土製品(131)　　石器・石製品(132)	

第2章 総 括

第1節 縄文時代	290
II群4類(290)　　III群1類(294)　　III群2類(298)　　遺物包含層の継続性と集落跡の可能性(300)	
第2節 平安時代	301
遺物について(301)　　遺構について(303)　　植松庵寺跡との関連(304)	

付 章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定	307
第2節 出土動物遺体の同定	313

挿図・表・写真目次

[挿図]

図 1 県道浪江鹿島線の位置	1
図 2 南相馬市域の地質図	3
図 3 周辺の遺跡位置図	6
図 4 遺跡・調査区位置図	10
図 5 造構配置図(1)	14
図 6 造構配置図(2)	15
図 7 基本土層図	16
図 8 1号住居跡(1)	18
図 9 1号住居跡(2)	19
図 10 1号住居跡出土遺物	21
図 11 2号住居跡(1)	23
図 12 2号住居跡(2)	24
図 13 2号住居跡出土遺物	25
図 14 3号住居跡(1)	27
図 15 3号住居跡(2)	28
図 16 3号住居跡出土遺物(1)	29
図 17 3号住居跡出土遺物(2)	30
図 18 3号住居跡出土遺物(3)	31
図 19 3号住居跡出土遺物(4)	32
図 20 3号住居跡出土遺物(5)	33
図 21 4号住居跡	35
図 22 4号住居跡出土遺物	36
図 23 5号住居跡	37
図 24 5号住居跡出土遺物	38
図 25 6号住居跡	40
図 26 6号住居跡出土遺物	41
図 27 7号住居跡(1)	42
図 28 7号住居跡(2)	43
図 29 7号住居跡出土遺物(1)	44
図 30 7号住居跡出土遺物(2)	45
図 31 7号住居跡出土遺物(3)	46
図 32 8号住居跡	48
図 33 9号住居跡	49
図 34 9号住居跡出土遺物	50
図 35 10号住居跡・出土遺物	52
図 36 11号住居跡・出土遺物	53
図 37 1号建物跡	55
図 38 2号建物跡(1)	57
図 39 2号建物跡(2)	58
図 40 3号建物跡	59
図 41 4号建物跡	61
図 42 5号建物跡	62
図 43 6号建物跡	64
図 44 挖立柱建物跡出土遺物	65
図 45 1~6号土坑	67
図 46 7~11号土坑	71
図 47 12~15号土坑	73
図 48 土坑出土遺物(1)	74
図 49 土坑出土遺物(2)	75
図 50 1~2号溝跡	76
図 51 3号溝跡	77
図 52 3号溝跡出土遺物	78
図 53 小穴	80
図 54 小穴出土遺物	81
図 55 1号特殊造構	82
図 56 1号土器埋設造構・出土遺物	83
図 57 造構外出土遺物(1)	84
図 58 造構外出土遺物(2)	85

■59 遺構外出土遺物(3).....	86
■60 遺構外出土遺物(4).....	87
■61 遺物包含層.....	91
■62 遺物包含層土層図(1).....	92
■63 遺物包含層土層図(2).....	93
■64 遺物包含層土層図(3).....	94
■65 遺物包含層土層図(4).....	95
■66 遺物包含層出土器分布図(1).....	96
■67 遺物包含層出土器分布図(2).....	97
■68 K・L21グリッドLⅢa 2 遺物出土状況.....	98
■69 K・L21・22グリッドLⅢa 3 遺物出土状況.....	99
■70 K・L22グリッドLⅢa 5・6 遺物出土状況.....	100
■71 遺物包含層出土繩文土器(1).....	135
■72 遺物包含層出土繩文土器(2).....	136
■73 遺物包含層出土繩文土器(3).....	137
■74 遺物包含層出土繩文土器(4).....	138
■75 遺物包含層出土繩文土器(5).....	139
■76 遺物包含層出土繩文土器(6).....	140
■77 遺物包含層出土繩文土器(7).....	141
■78 遺物包含層出土繩文土器(8).....	142
■79 遺物包含層出土繩文土器(9).....	143
■80 遺物包含層出土繩文土器(10).....	144
■81 遺物包含層出土繩文土器(11).....	145
■82 遺物包含層出土繩文土器(12).....	146
■83 遺物包含層出土繩文土器(13).....	147
■84 遺物包含層出土繩文土器(14).....	148
■85 遺物包含層出土繩文土器(15).....	149
■86 遺物包含層出土繩文土器(16).....	150
■87 遺物包含層出土繩文土器(17).....	151
■88 遺物包含層出土繩文土器(18).....	152
■89 遺物包含層出土繩文土器(19).....	153
■90 遺物包含層出土繩文土器(20).....	154
■91 遺物包含層出土繩文土器(21).....	155
■92 遺物包含層出土繩文土器(22).....	156
■93 遺物包含層出土繩文土器(23).....	157
■94 遺物包含層出土繩文土器(24).....	158
■95 遺物包含層出土繩文土器(25).....	159
■96 遺物包含層出土繩文土器(26).....	160
■97 遺物包含層出土繩文土器(27).....	161
■98 遺物包含層出土繩文土器(28).....	162
■99 遺物包含層出土繩文土器(29).....	163
■100 遺物包含層出土繩文土器(30).....	164
■101 遺物包含層出土繩文土器(31).....	165
■102 遺物包含層出土繩文土器(32).....	166
■103 遺物包含層出土繩文土器(33).....	167
■104 遺物包含層出土繩文土器(34).....	168
■105 遺物包含層出土繩文土器(35).....	169
■106 遺物包含層出土繩文土器(36).....	170
■107 遺物包含層出土繩文土器(37).....	171
■108 遺物包含層出土繩文土器(38).....	172
■109 遺物包含層出土繩文土器(39).....	173
■110 遺物包含層出土繩文土器(40).....	174
■111 遺物包含層出土繩文土器(41).....	175
■112 遺物包含層出土繩文土器(42).....	176
■113 遺物包含層出土繩文土器(43).....	177
■114 遺物包含層出土繩文土器(44).....	178
■115 遺物包含層出土繩文土器(45).....	179
■116 遺物包含層出土繩文土器(46).....	180
■117 遺物包含層出土繩文土器(47).....	181
■118 遺物包含層出土繩文土器(48).....	182
■119 遺物包含層出土繩文土器(49).....	183
■120 遺物包含層出土繩文土器(50).....	184
■121 遺物包含層出土繩文土器(51).....	185
■122 遺物包含層出土繩文土器(52).....	186
■123 遺物包含層出土繩文土器(53).....	187
■124 遺物包含層出土繩文土器(54).....	188
■125 遺物包含層出土繩文土器(55).....	189
■126 遺物包含層出土繩文土器(56).....	190
■127 遺物包含層出土繩文土器(57).....	191
■128 遺物包含層出土繩文土器(58).....	192
■129 遺物包含層出土繩文土器(59).....	193
■130 遺物包含層出土繩文土器(60).....	194
■131 遺物包含層出土繩文土器(61).....	195

■132	遗物包含层出土绳文土器(62)	196	■170	遗物包含层出土绳文土器(100)	234
■133	遗物包含层出土绳文土器(63)	197	■171	遗物包含层出土绳文土器(101)	235
■134	遗物包含层出土绳文土器(64)	198	■172	遗物包含层出土绳文土器(102)	236
■135	遗物包含层出土绳文土器(65)	199	■173	遗物包含层出土绳文土器(103)	237
■136	遗物包含层出土绳文土器(66)	200	■174	遗物包含层出土绳文土器(104)	238
■137	遗物包含层出土绳文土器(67)	201	■175	遗物包含层出土绳文土器(105)	239
■138	遗物包含层出土绳文土器(68)	202	■176	遗物包含层出土绳文土器(106)	240
■139	遗物包含层出土绳文土器(69)	203	■177	遗物包含层出土绳文土器(107)	241
■140	遗物包含层出土绳文土器(70)	204	■178	遗物包含层出土绳文土器(108)	242
■141	遗物包含层出土绳文土器(71)	205	■179	遗物包含层出土绳文土器(109)	243
■142	遗物包含层出土绳文土器(72)	206	■180	遗物包含层出土绳文土器(110)	244
■143	遗物包含层出土绳文土器(73)	207	■181	遗物包含层出土绳文土器(111)	245
■144	遗物包含层出土绳文土器(74)	208	■182	遗物包含层出土绳文土器(112)	246
■145	遗物包含层出土绳文土器(75)	209	■183	遗物包含层出土绳文土器(113)	247
■146	遗物包含层出土绳文土器(76)	210	■184	遗物包含层出土绳文土器(114)	248
■147	遗物包含层出土绳文土器(77)	211	■185	遗物包含层出土绳文土器(115)	249
■148	遗物包含层出土绳文土器(78)	212	■186	遗物包含层出土绳文土器(116)	250
■149	遗物包含层出土绳文土器(79)	213	■187	遗物包含层出土绳文土器(117)	251
■150	遗物包含层出土绳文土器(80)	214	■188	遗物包含层出土绳文土器(118)	252
■151	遗物包含层出土绳文土器(81)	215	■189	遗物包含层出土绳文土器(119)	253
■152	遗物包含层出土绳文土器(82)	216	■190	遗物包含层出土绳文土器(120)	254
■153	遗物包含层出土绳文土器(83)	217	■191	遗物包含层出土绳文土器(121)	255
■154	遗物包含层出土绳文土器(84)	218	■192	遗物包含层出土绳文土器(122)	256
■155	遗物包含层出土绳文土器(85)	219	■193	遗物包含层出土绳文土器(123)	257
■156	遗物包含层出土绳文土器(86)	220	■194	遗物包含层出土绳文土器(124)	258
■157	遗物包含层出土绳文土器(87)	221	■195	遗物包含层出土绳文土器(125)	259
■158	遗物包含层出土绳文土器(88)	222	■196	遗物包含层出土绳文土器(126)	260
■159	遗物包含层出土绳文土器(89)	223	■197	遗物包含层出土绳文土器(127)	261
■160	遗物包含层出土绳文土器(90)	224	■198	遗物包含层出土绳文土器(128)	262
■161	遗物包含层出土绳文土器(91)	225	■199	遗物包含层出土绳文土器(129)	263
■162	遗物包含层出土绳文土器(92)	226	■200	遗物包含层出土绳文土器(130)	264
■163	遗物包含层出土绳文土器(93)	227	■201	遗物包含层出土绳文土器(131)	265
■164	遗物包含层出土绳文土器(94)	228	■202	遗物包含层出土绳文土器(132)	266
■165	遗物包含层出土绳文土器(95)	229	■203	遗物包含层出土绳文土器(133)	267
■166	遗物包含层出土绳文土器(96)	230	■204	遗物包含层出土绳文土器(134)	268
■167	遗物包含层出土绳文土器(97)	231	■205	遗物包含层出土绳文土器(135)	269
■168	遗物包含层出土绳文土器(98)	232	■206	遗物包含层出土绳文土器(136)	270
■169	遗物包含层出土绳文土器(99)	233	■207	遗物包含层出土绳文土器(137)	271

図208	遺物包含層出土繩文土器(138)	272
図209	遺物包含層出土繩文土器(139)	273
図210	遺物包含層出土繩文土器(140)	274
図211	遺物包含層出土繩文土器(141)	275
図212	遺物包含層出土繩文土器(142)	276
図213	遺物包含層出土繩文土器(143)・ 土製品(1)	277
図214	遺物包含層出土土製品(2)	278
図215	遺物包含層出土土製品(3)	279
図216	遺物包含層出土土製品(4)	280
図217	遺物包含層出土石器(1)	281
図218	遺物包含層出土石器(2)	282
図219	遺物包含層出土石器(3)	283
図220	遺物包含層出土石器(4)	284
図221	遺物包含層出土石器(5)	285
図222	遺物包含層出土石器(6)	286
図223	遺物包含層出土石器(7)	287
図224	遺物包含層出土石器(8)	288
図225	遺物包含層出土石器(9)	289
図226	II群1～4類土器集成図(1)	292
図227	II群1～4類土器集成図(2)	293
図228	III群1類土器集成図	295
図229	III群1・2類土器集成図	296
図230	III群2類土器集成図	297
図231	曆年較正年代グラフ(1)	311
図232	曆年較正年代グラフ(2)	312
図233	マルチプロット図	312
図234	出土動物遺体	316

[表]

表1	周辺の遺跡一覧	7
表2	動物骨出土量一覧	95
表3	分類別・層位別繩文土器片出土点数	97
表4	放射性炭素年代測定結果	310

表5	放射性炭素年代測定結果	310
表6	出土動物一覧	314
表7	出土動物遺体同定結果	314

[写真]

1	遺跡遠景	319
2	調査区全景	319
3	遺跡遠景	320
4	E～G～9～11グリッド遺構全景	320
5	基本土層	321
6	1号住居跡	322
7	2号住居跡	323
8	3号住居跡	324
9	4号住居跡	325
10	5号住居跡	326
11	6号住居跡	327
12	7号住居跡	328
13	8号住居跡	329
14	9号住居跡	330
15	10号住居跡	331
16	11号住居跡	332
17	1号建物跡	333
18	2号建物跡	334
19	3号建物跡	335
20	4号建物跡	336
21	5・6号建物跡	337
22	5号建物跡	338
23	6号建物跡	338
24	1～4号土坑	339
25	5～9号土坑	340
26	10～12・15号土坑	341
27	1～3号溝跡、1号特殊遺構、 1号土器埋設遺構	342
28	遺物包含層(1)	343
29	遺物包含層(2)	344
30	遺物包含層(3)	345
31	遺物包含層(4)	346
32	遺物包含層(5)	347
33	遺物包含層(6)	348

34 L21グリッド LⅢ a 2 遺物出土状況	348	72 遺物包含層出土繩文土器(32)	376
35 遺物出土状況(1)	349	73 遺物包含層出土繩文土器(33)	376
36 遺物出土状況(2)	350	74 遺物包含層出土繩文土器(34)	377
37 1号住居跡出土土器	351	75 遺物包含層出土繩文土器(35)	377
38 住居跡出土器・瓦(1)	352	76 遺物包含層出土繩文土器(36)	378
39 住居跡出土器・瓦(2)	353	77 遺物包含層出土繩文土器(37)	378
40 土坑・溝跡出土器・遺構外出土瓦	354	78 遺物包含層出土繩文土器(38)	379
41 遺物包含層出土繩文土器(1)	355	79 遺物包含層出土繩文土器(39)	379
42 遺物包含層出土繩文土器(2)	356	80 遺物包含層出土繩文土器(40)	380
43 遺物包含層出土繩文土器(3)	356	81 遺物包含層出土繩文土器(41)	380
44 遺物包含層出土繩文土器(4)	357	82 遺物包含層出土繩文土器(42)	381
45 遺物包含層出土繩文土器(5)	357	83 遺物包含層出土繩文土器(43)	381
46 遺物包含層出土繩文土器(6)	358	84 遺物包含層出土繩文土器(44)	382
47 遺物包含層出土繩文土器(7)	359	85 遺物包含層出土繩文土器(45)	383
48 遺物包含層出土繩文土器(8)	360	86 遺物包含層出土繩文土器(46)	384
49 遺物包含層出土繩文土器(9)	361	87 遺物包含層出土繩文土器(47)	385
50 遺物包含層出土繩文土器(10)	362	88 遺物包含層出土繩文土器(48)	386
51 遺物包含層出土繩文土器(11)	362	89 遺物包含層出土繩文土器(49)	387
52 遺物包含層出土繩文土器(12)	363	90 遺物包含層出土繩文土器(50)	387
53 遺物包含層出土繩文土器(13)	363	91 遺物包含層出土繩文土器(51)	388
54 遺物包含層出土繩文土器(14)	364	92 遺物包含層出土繩文土器(52)	388
55 遺物包含層出土繩文土器(15)	364	93 遺物包含層出土繩文土器(53)	389
56 遺物包含層出土繩文土器(16)	365	94 遺物包含層出土繩文土器(54)	389
57 遺物包含層出土繩文土器(17)	365	95 遺物包含層出土繩文土器(55)	390
58 遺物包含層出土繩文土器(18)	366	96 遺物包含層出土繩文土器(56)	390
59 遺物包含層出土繩文土器(19)	366	97 遺物包含層出土繩文土器(57)	391
60 遺物包含層出土繩文土器(20)	367	98 遺物包含層出土繩文土器(58)	392
61 遺物包含層出土繩文土器(21)	367	99 遺物包含層出土繩文土器(59)	393
62 遺物包含層出土繩文土器(22)	368	100 遺物包含層出土土製品(1)	394
63 遺物包含層出土繩文土器(23)	369	101 遺物包含層出土土製品(2)	394
64 遺物包含層出土繩文土器(24)	370	102 遺物包含層出土土製品(3)	395
65 遺物包含層出土繩文土器(25)	371	103 遺物包含層出土土製品(4)	395
66 遺物包含層出土繩文土器(26)	372	104 遺物包含層出土石器(1)	396
67 遺物包含層出土繩文土器(27)	373	105 遺物包含層出土石器(2)	396
68 遺物包含層出土繩文土器(28)	374	106 遺物包含層出土石器(3)	397
69 遺物包含層出土繩文土器(29)	374	107 遺物包含層出土石器(4)	397
70 遺物包含層出土繩文土器(30)	375	108 遺物包含層出土石器(5)	398
71 遺物包含層出土繩文土器(31)	375	109 遺物包含層出土石製品	398

序 章

第1節 事業概要と調査に至る経緯

福島県道120号浪江鹿島線は、南端の双葉郡浪江町権現堂を起点とし、北は南相馬市鹿島区横手を終点とする長さ29kmの道路である(図1)。旧国道6号線の一部にあたり、陸前浜街道と称されている。途中経由する南相馬市原町区内においては市街地に通じ、幅員が狭小なため交通混雑の原因となっている。その解消を目的とし、福島県相双建設事務所(以下相双建設と略す)では、平成26年に原町区小川町から同上北高平字植松にかけた1.26kmについて、現道の拡幅工事を計画した。その工事が植松C遺跡の範囲内に掛かることから、確認調査の必要が生じた。

植松C遺跡の確認調査は工区内の4,200m²を対象とし、平成27年9月16日から25日にかけて福島県教育委員会(以下県教委と略す)が実施した。その結果、調査区の北半では古代の土坑や小穴が検出され、土師器・須恵器が多く出土した。調査区南側では、縄文時代の良好な遺物包含層が確認され、前・中期の土器片の他、玦状耳飾りが出土した。また、農道の法面などにおいて遺物包含層が認められた遺跡南方の隣接地1,650mについても、埋蔵文化財包蔵地の変更増補の手続きが取られ、新たに植松C遺跡に加えられた。この結果、工区内の保存面積は5,200m²となった。県教委では、ただちに相双建設と保存に関する協議を行い、平成28年度に本発掘調査を実施する方針が固められた。県教委では、本発掘調査を公益財團法人福島県文化振興財團(以下財團と略す)に委託することとした。これを受け、平成27年12月17日には相双建設・県教委・財團の三者による現地協議が持たれ、工区範囲や立木の状況、未撤去の建物等について確認した。平成28年3月17日にも三者による現地協議が行われ、立木の伐採状況や建物撤去の進捗状況等が確認された。(今野)

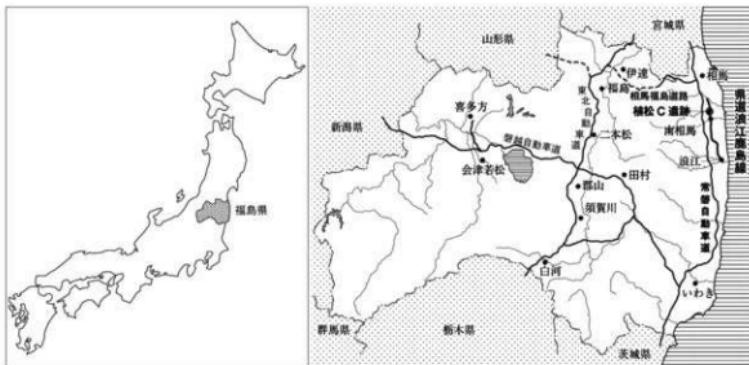


図1 県道浪江鹿島線の位置

第2節 地理的環境

福島県は、南北に縦断する奥羽山脈と阿武隈高地によって日本海側内陸部の会津地方、太平洋側内陸部の中通り、太平洋側沿岸の浜通りという気候・風土の異なる三地方に大きく分かれている。その中で南相馬市は、浜通り地方の北寄りに位置している。阿武隈高地から太平洋に向かって東流する真野川、新田川、太田川、小高川、宮田川などの河川によって開拓された低地を中心に市街地が形成されている。北は相馬市、南は浪江町、西は飯館村と接している。市内には、東日本の太平洋側を南北に結ぶJR常磐線や常磐自動車道、国道6号などが縦貫している。気候は、海洋性で年間の気温差が比較的小さく、会津地方、中通りに比べ夏季は涼しく、冬期の降雪量も少ない。

南相馬市が所在する浜通り地方の地形は、阿武隈高地、河岸段丘を含む丘陵地帯、海岸低地帯の大きく三つに区分される。阿武隈高地は東西50km、南北200kmの規模を有し、標高500~700mのなだらかな平坦面を残す隆起準平原である。阿武隈高地の東縁には双葉断層が南北に縦走し、これが東の丘陵地および低地との境をなしている。しかし、南相馬市域では双葉断層はあまり発達せず、断層より東側の相馬断層が、地形を分ける大きな境界となっている。これより東側では、阿武隈高地から派生した東西に細長い丘陵および段丘が樹枝状に伸び、海沿いでは海蝕崖となって太平洋へ落ちている。丘陵および段丘の間には、新田川等の河川に沿って沖積地が形成されている。

福島県の地質構造は、阿武隈高地のほぼ西縁を境に、東側の非グリーンタフ地域と西側のグリーンタフ地域に大別される。浜通り地方は前者に当たり、さらに双葉断層を境に二つの地域に分かれることになる。双葉断層より西側では花崗岩類が広く分布し、その東縁付近には古生層が認められる。断層東側の太平洋沿岸低地には中生代、古第三紀、新第三紀の地層が丘陵を形成している。

南相馬市域には、古生代から新生代にかけた幅広い時代の地層が分布している(図2)。最も古い地層とされる松ヶ平変成岩類は、新田川上流の高の倉地域および真野川中流域の上柄窪周辺に分布している。

松ヶ平変成岩類はおもに泥質～珪質片岩からなる。これらの変成岩は、縄文時代においては打製・磨製石斧などの石材として利用されている。続く古生代のデボン紀から二疊紀に形成された地層として相馬古生層があり、新田川の上・中流域に分布している。相馬古生層は海成層で、頁岩、粘板岩、砂岩、泥岩などの堆積岩からなる。このうち頁岩や粘板岩は、縄文時代においては石鎚や打製石斧、弥生時代においては石庖丁などの石器石材として利用されている。

中生代の地層としては、ジュラ紀後期から白亜紀前期に形成された相馬中村層群がある。相馬中村層群は相馬市初野付近を北限に、南相馬市原町区馬場付近を南限としている。おもに砂岩、頁岩からなり、一部に石灰岩や石炭薄層を含んでいる。続く新生代の地層は、新第三紀および第四紀に堆積したものである。新第三紀の最下部には、中新世前期に堆積した塩手層がある。塩手層は、河川堆積物、浅海成堆積物、湖成堆積物で構成され、おもに礫岩、砂岩、シルト岩などの堆積岩から

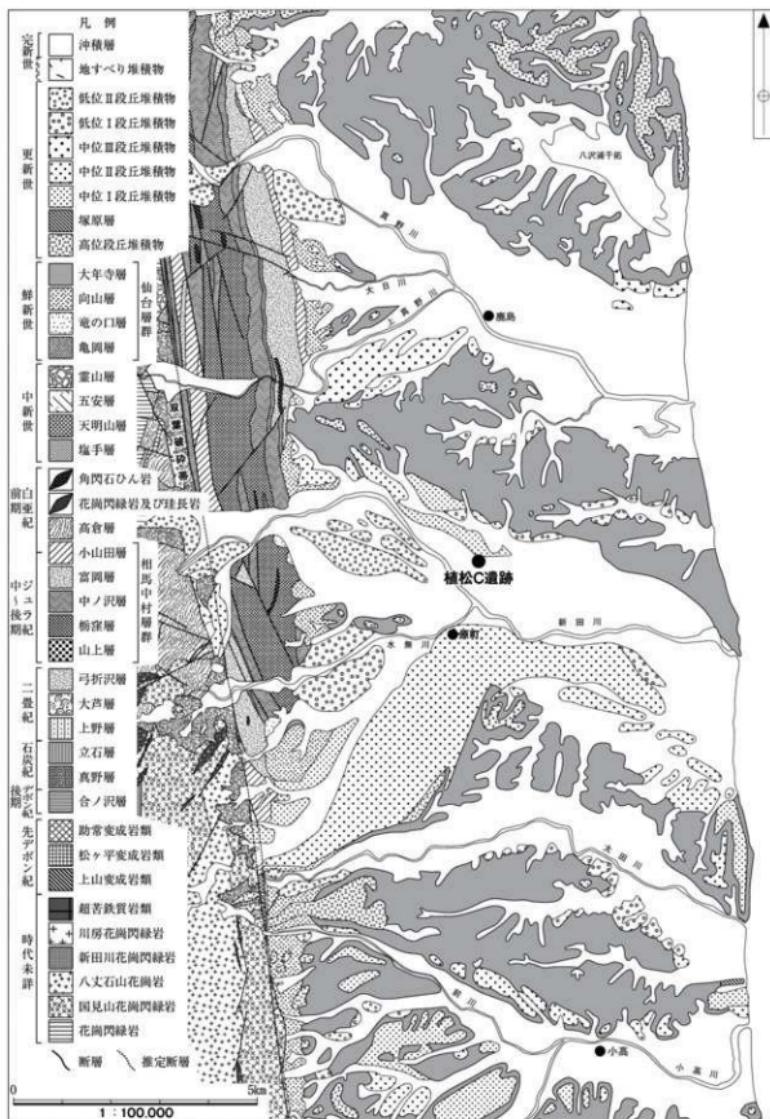


図2 南相馬市域の地質図 (柳沢ほか(1998)および久保ほか(1990)を基に加筆して作成)

なる。双葉断層西部では谷を埋めるように分布し、東部では新田川および水無川の中流域に堆積している。塩手層には、堆積物中に精緻な流紋岩質溶結凝灰岩を含み、縄文時代の石器石材として利用された可能性がある。この他、新第三紀中新世の地層としては、天明山層および鶯山層があり、双葉断層西側に分布する。両層とも玄武岩を主とするもので、輝石安山岩や流紋岩を含む。次の新第三紀鮮新世の地層には、仙台層群がある。仙台層群は、下位から亀岡層、竜の口層、向山層、大年寺層の4層に区分されている。竜の口層、大年寺層は海成堆積物、向山層は河川・ラグーン堆積物とされる。仙台層群の各層は、おもに半固結の泥岩や砂岩、凝灰岩からなり、層中に多くの火山灰層を介在する。本地域では大年寺が丘陵および段丘面の基盤層になっている場合が多い。

第四紀更新世の地層は、真野川、新田川などの河川に沿って分布する段丘堆積物および沖積層がある。南相馬市の段丘は、高位I・高位II・中位I・中位II・中位III・低位I・低位II段丘に区分される。高位段丘の堆積物は礫を主体とし、間にラミナのある砂層を挟んでいる。高位段丘の礫は風化が著しく、その上位に風化火山灰質土壌もしくはシルト・砂層がのる。中位段丘の堆積物は風化の進んでいない礫を主とし、上位に砂礫層と風化火山灰質土壌をのせる。図2に示したように、植松C遺跡は、中位I段丘堆積物からなる丘陵の縁辺に立地している。低位段丘の堆積物は、シルトが介在する淘汰の悪い砂礫層からなり、その上位に粘質土の砂層をのせている。沖積層はシルト層、砂礫層、泥炭層からなる。

(今野)

第3節 歴史的環境

南相馬市では、平成18年の合併以前の一市二町時代から各教育委員会による発掘調査が行われている。これに加え、平成年間に入ると原町火力発電所や常磐自動車道といった開発に伴う大規模な発掘調査が相次いだ。さらに平成23年の東日本大震災以降は、復興事業関連の発掘調査が増大している。本節では、おもに南相馬市域の代表的な遺跡と植松C遺跡周辺の遺跡を中心として、今回の調査成果に関わる縄文時代前・中期および奈良・平安時代における歴史的環境を概観する。なお、文中の遺跡名に付した()内の番号は、図3に示した遺跡の位置および表1と一致する。

縄文時代

南相馬市における縄文時代の代表的な遺跡には、小高区に所在する浦尻貝塚がある。浦尻貝塚は、前期から晩期にかけた集落跡と良好な貝層・遺物包含層が調査され、国史跡に指定されている。特に本報告書とも関連する大木6・7a式期の資料は、浜通り地方を代表する充実した内容である。浦尻貝塚が立地する宮田川流域周辺には、他にも宮田貝塚、角部内南台貝塚、北原貝塚遺跡群などが集中的に分布している。浜通り地方北半は貝塚が少ないことが指摘されおり、その中にあっては稀有な地域である。

植松C遺跡が立地する段丘上には、縄文時代の遺跡が少なからず存在する。植松C遺跡の東側に近接する植松A遺跡(4)では中期末葉の複式炉を伴う竪穴住居跡が調査され、中期中葉～末葉の

遺物が出土している。そのさらに東側に位置する堂坂遺跡(5)では、中期中葉の土偶や中期後葉の土器片が表面採取されている。植松C遺跡の1.7km西方に位置する高松B遺跡(10)では、平成4年の確認調査の際に、縄文時代の堅穴住居跡4軒、土坑3基などが検出され、中期末葉の遺物が多く出土している。これに隣接する高松遺跡(8)では、中期初頭～後期前葉の遺物が表面採取されている。その北側の小規模な沖積地を挟んだ向かい側の段丘上には、中期中葉の土器片が表面採取された入道迫遺跡(13)がある。新田川を挟んで、植松C遺跡から南方に1.6km離れた東町遺跡(56)では、中期後葉～末葉の貯蔵穴と堅穴住居跡が密集した集落跡が本発掘調査されている。

その他、原町区城では深野に所在する宮平遺跡および小池田遺跡において、前期後半～中期初頭に属する土器や玦状耳飾りが出土している。同区押釜に所在する前田遺跡では、前期後葉および中期前葉の土器および土偶、石器類、土製円盤などが表面採取されている。同区馬場の原B遺跡は、常磐自動車道の建設に伴い本発掘調査が行われた。その結果、中期前葉の堅穴住居跡7軒、土坑30基などが確認されている。大木7b式と阿玉台Ia式が主体的に出土し、東北地方と関東地方における土器の併行関係を知り得る資料とされている。原B遺跡の西側に隣接する原遺跡では、県道相馬浪江線の付け替え工事に伴う本発掘調査が実施されている。前期前葉を中心に早期末葉～中期末葉の土器が出土し、集落跡も確認されている。その西に隣接する石倉遺跡では、大木4・7a・7b式などの土器とともに、多くの石器類および玦状耳飾りや玉類などの装身具が表面採取されている。

奈良・平安時代

奈良・平安時代の当地域は、「和名類聚抄」に記されている陸奥国行方郡に属していたと考えられている。原町区泉に所在する国指定史跡の泉官衙遺跡(28)は、行方郡衙跡に比定されている。泉官衙遺跡は、植松C遺跡から東方に4.6km離れた位置にあり、同じ新田川沿いの丘陵裾部に立地している。7世紀後半～10世紀前半と考えられる多くの建物跡が重複して確認され、郡庁院・正倉院・館院・寺院などの遺構とされている。出土遺物には、土師器・須恵器の他に官衙関連遺跡に特徴的な瓦・木簡・円面鏡・炭化米などがある。

泉官衙遺跡と関連して、寺院跡推定地とされている遺跡には、植松C遺跡の東側に県道浪江鹿島線を挟んで隣接する植松廃寺跡(2)がある。植松廃寺跡は、礎石の存在や古瓦が採取されることが古くから知られていた。発掘調査が実施されたことはなく、過去の表面採取では、有蕊弁蓮華文軒丸瓦・軒平瓦、單弁四葉蓮華文軒丸瓦、唐草文が施された平瓦の他、獸脚などが得られている。有蕊弁蓮華文を統一意匠とする瓦は、植松C遺跡の北西2.6kmにある入道迫瓦窯跡(14)で焼成されたことが、調査から明らかになっている。入道迫瓦窯跡では須恵器も併せて焼成されており、その須恵器の年代は、8世紀末葉～9世紀中葉とみられている。また、植松廃寺跡の北に隣接する植松B遺跡(3)においては、確認調査が行われている。その結果、建て替えの痕跡が認められる掘立柱建物跡1棟、堅穴住居跡1軒、溝跡などが検出され、奈良・平安時代の土師器・須恵器、平瓦、羽口・鉄滓などが出土した。寺院関連遺跡では、他に鹿島区横手に所在する県指定史跡の横手廃寺

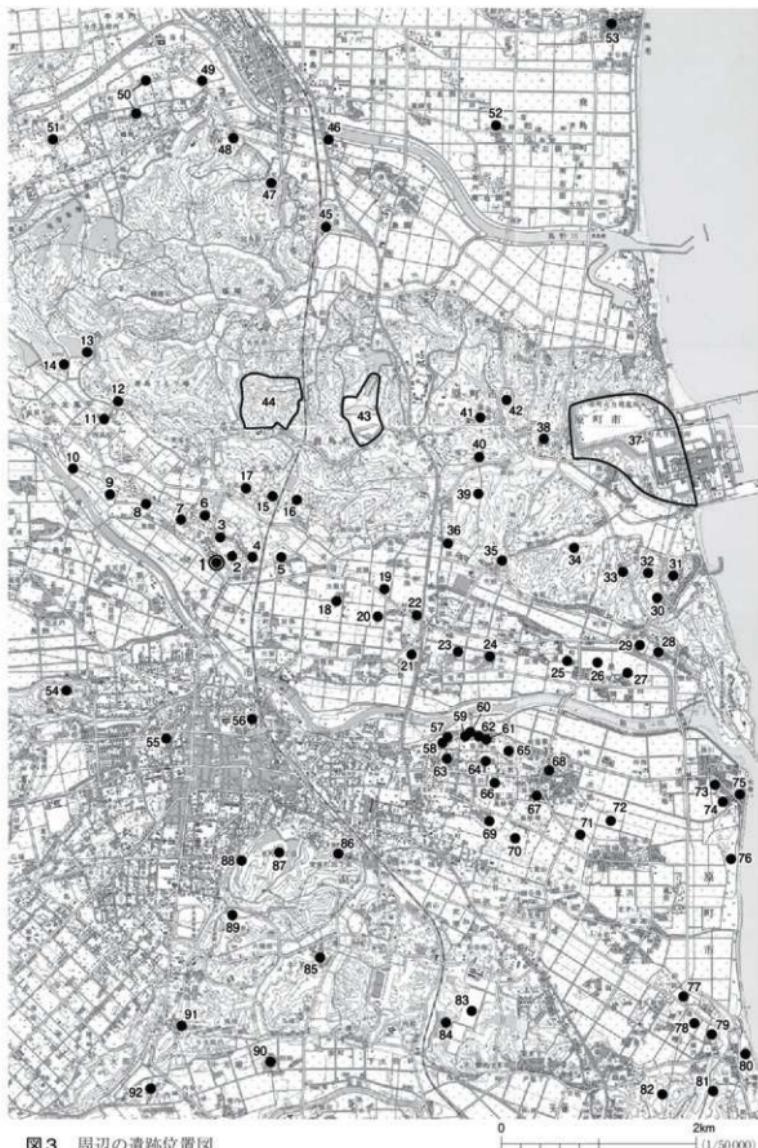


図3 周辺の遺跡位置図

表1 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	時代	種別	No	遺跡名	時代	種別
1	植松C遺跡	純文・平安	集落跡	47	天神沢遺跡	弥生	散布地
2	植松唯寺跡	奈良・平安・中世	寺社跡	48	六天石遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡・散布地
3	植松日遺跡	純文・奈良・平安	集落跡	49	中才遺跡	純文	集落跡
4	植松日遺跡	純文	集落跡	50	真野古墳群A	古墳	古墳
5	草坂遺跡	純文	散布地	51	真野古墳群B	古墳	古墳
6	山田遺跡	純文・弥生	散布地	52	桶原遺跡	古墳・奈良・平安・中世・近世	集落跡
7	高台遺跡	純文	散布地	53	大谷遺跡	純文・弥生	散布地
8	高松遺跡	旧石器・純文	散布地	54	牛越城跡	中世	城郭跡
9	高松C遺跡	純文・奈良・平安	散布地	55	三島町遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
10	高松B遺跡	純文・弥生・平安	集落跡	56	東町遺跡	純文	集落跡
11	人頭火葬墓	平安	火葬墓	57	星ヶ墳青瓦頭火葬墓	古墳	古墳
12	西高松遺跡	奈良・平安	製鉄跡	58	高見町A遺跡	純文・弥生・古墳・奈良・平安	古墳・集落跡
13	人道追跡	純文・弥生・奈良・平安	窓跡	59	桜井荒尾歌道跡	純文・弥生・奈良・平安	散布地
14	人道追瓦窯跡	奈良・平安	窯跡(須恵器・瓦)	60	桜井A墳	古墳	古墳
15	植松新田遺跡	純文・弥生	散布地	61	桜井古墳群上池在枝群	古墳	古墳
16	北沢遺跡	純文	散布地	62	桜井A遺跡	純文・弥生・古墳・平安・近世	散布地
17	北沢横穴墓群	古墳	横穴墓	63	高見町B遺跡	旧石器・純文・古墳・奈良・平安	散布地
18	太賀田遺跡	純文	散布地	64	桜井D遺跡	古墳・奈良・平安	集落跡
19	貝削遺跡	純文	散布地	65	桜井C遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地
20	天神宮池遺跡	純文・弥生	散布地	66	上佐佐原田遺跡	平安	集落跡
21	谷内遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地	67	原山遺跡	弥生	散布地
22	竹内遺跡	平安	散布地	68	上佐佐前原削裁遺跡	純文・弥生・古墳・奈良・平安	集落跡
23	荒井前遺跡	古墳・奈良・平安・近世	古墳・集落跡	69	梶掛塙遺跡	純文・弥生・平安	散布地
24	牛渡前遺跡	弥生・奈良・平安	散布地	70	梶掛塙B遺跡	純文	散布地
25	泉田船跡	古墳・奈良・平安・中世	城船跡	71	萱原田遺跡	弥生・古墳・奈良・平安	散布地
26	広瀬遺跡	奈良・平安	集落跡	72	赤道遺跡	純文	散布地
27	町塙跡	古墳・奈良・平安	集落跡	73	下沼佐赤沼遺跡	純文・古墳・平安	散布地
28	泉官衙遺跡	純文・弥生・古墳・奈良・平安・中世	官衙跡	74	凌道跡	純文・古墳	散布地
29	泉長者道跡	平安・中世	城船跡	75	大身遺跡	弥生	散布地
30	西走B遺跡	弥生・平安	製鉄跡・散布地	76	北沢浜遺跡	純文	散布地
31	鬼塚堂B遺跡	弥生・古墳・奈良・平安・近世	近世墓・散布地	77	五石田・犬道遺跡	純文・弥生・古墳・奈良・平安	集落跡
32	協道跡	純文・弥生・平安	散布地	78	大塙瓦窯跡	奈良・平安	窯跡(瓦)
33	浦頭遺跡	平安	散布地	79	五石田1号古墳	弥生	散布地
34	天化寺A道跡	弥生・奈良・平安	集落跡・製鉄跡	80	京原只跡跡	純文・弥生	散布地
35	青瀬古墳群	弥生・古墳	古墳	81	京原沢瓦窯跡A	平安	窯跡
36	北山古墳群	古墳	古墳	82	京原沢瓦窯跡B	奈良・平安	窯跡(瓦)・製鉄跡
37	金谷地区製鉄道跡群	純文・弥生・奈良・平安	製鉄跡・窓跡	83	経沢跡群	純文・弥生・奈良・平安	製鉄跡・散布地
38	谷堤中道跡	古墳・奈良・平安	集落跡・製鉄跡	84	川内船B道跡群	純文・弥生・奈良・平安	製鉄跡・散布地
39	広平道跡	弥生	散布地	85	石崎道跡	奈良・平安	窯跡(木炭)
40	追合B道跡	弥生	散布地	86	大塚道跡	平安	製鉄跡
41	追合B道跡	弥生・奈良・平安	製鉄跡・散布地	87	折り沢瓦窯跡	奈良・平安	窯跡(瓦)
42	追合C道跡	弥生・奈良・平安	製鉄跡・散布地	88	折ヶ沢道跡	純文・奈良・平安	製鉄跡・散布地
43	大船道跡群	奈良・平安	製鉄跡・窓跡	89	山口道跡	平安	製鉄跡
44	漸田地区製鉄道跡群	奈良・平安	製鉄跡	90	羽所跡跡	中世	城郭跡
45	大庭横穴墓群	古墳	横穴墓	91	羽山機穴墓群	古墳	横穴墓
46	袖原古墳群	古墳	古墳	92	太上田前吉古墳	古墳	古墳

跡がある。横手廐寺跡は、真野川北岸の河岸段丘上に立地する。遺跡内には礎石が残存し、単弁八葉蓮華文鏡瓦や丸瓦、平瓦などが過去に表面採取されている。この他、仏教関連では、植松Cから県道浪江鹿島線を約12km南下した小高区泉沢に所在する「大非山の大仏」がある。「大非山の大仏」は、観音堂、薬師堂、阿弥陀堂からなる磨崖仏で、平安時代のものと考えられ、国の史跡に指定されている。また入道迫瓦窯跡に隣接する入道迫火葬墓(11)では、畑造成時に4個体の須恵器と1個体の土師器が出土し、火葬骨を伴うものも確認されている。遺物の年代は、9世紀前半頃とされている。

南相馬市には、製鉄関連を中心とする生産遺跡が多数存在する。原町区の金沢地区製鉄遺跡群(37)では、原町火力発電所の建設に伴い100基を超える製鉄炉跡を始めとして、本炭窯跡、鍛冶炉跡、本炭焼成土坑、鋳造遺構などが多数調査されている。植松C遺跡の約2km北方にも割田地区製鉄遺跡群(44)、大迫遺跡群(43)があり、やはり製鉄関連遺構が調査されている。これらの製鉄遺跡群は、7世紀後半～9世紀後に機能していたことが明らかになっている。瓦窯跡には、入道迫瓦窯跡の他に、犬道瓦窯跡(78)、京塚沢瓦窯跡A・B(81・82)、折ヶ沢瓦窯跡(87)があり、須恵器窯跡には金沢地区的鳥打沢A遺跡、原町区馬場の滝ノ原窯跡、鹿島区の大迫遺跡群などがある。京塚沢・犬道瓦窯跡、鳥打沢A遺跡の製品は、泉官衙遺跡に供給されていたことが判明している。京塚沢瓦窯跡群と同じ相双丘陵上には、川内迫B遺跡群(84)と蛭沢遺跡群(83)がある。民間の工場用地造成に伴う調査が行われ、8世紀中葉～9世紀代の製鉄関連遺構が確認されている。遺物は、土師器、須恵器、羽口、鉄滓の他、獸脚や器物の鋳型などが出土している。小高地区においては、横大道遺跡において8世紀に遡る環状盛土を伴う製鉄炉跡が調査され、国の史跡に指定されている。これに隣接する館越遺跡では、大規模な木炭窯跡群が調査されている。

集落遺跡には、泉官衙遺跡の南西に位置する町遺跡(27)がある。古墳時代後期から奈良・平安時代の堅穴住居跡6軒と掘立柱建物跡5棟などが調査された。町遺跡の西側に隣接する広畠遺跡(26)では、4棟の掘立柱建物跡が整然と並んで確認されている。土師器、須恵器、灰釉陶器などの他、「厨」「寺」「南合」などと書かれた墨書き土器が多く出土している。町遺跡と広畠遺跡は、泉官衙遺跡に関連するものとみられている。新田川右岸の段丘上に立地する上渋佐原田遺跡(66)では、復興公営住宅の建設に伴った本発掘調査が実施され、9世紀後半を中心とした大規模な集落跡が確認された。太田川流域では、町川原遺跡が圃場整備に伴い調査され、奈良・平安時代の堅穴住居跡21軒が検出された。遺物は土師器、須恵器の他に鉄滓、羽口などが出土している。墨書き土器も多数出土し、太田川流域における中核的な集落跡と考えられている。植松C遺跡の近隣では、高松B遺跡(10)の確認調査において平安時代とみられる堅穴住居跡1軒が検出されている。その約300m東に位置する高松C遺跡(9)では、奈良時代の土師器、須恵器が表面採取されている。

(今 野)

第4節 遺跡の位置と地形

植松C遺跡は、福島県南相馬市原町区上北高平字植松に所在する(図4)。地理的位置は、北緯 $37^{\circ}39'27''$ 、東経 $140^{\circ}57'43''$ である。町区の中心街の北に位置し、JR原ノ町駅からは北西方向に約2.1kmの距離である。海岸線からは、5.0km離れている。平成14年に実施された分布調査において、土師器の散布が確認されたことから、埋蔵文化財包蔵地として登録された。過去に発掘調査は行われていない。

本遺跡は新田川の北岸沿いに延びる丘陵上に立地し、丘陵縁辺の平坦地から南東向きの緩斜面を含んでいる。遺跡の南西側は、新田川によって浸食された断崖となっている。崖線上からは新田川の氾濫原が見渡せ、東に太平洋が望める眺望の良い場所である。遺跡の標高は30~36m、新田川北岸の沖積地との比高差は17m前後である。県道浪江鹿島線を挟んで東側には、植松廃寺跡と植松B遺跡が隣接している。両遺跡と植松C遺跡は、県道を境に便宜上分けられているものの、連続する同じ平坦面上に立地していると言ってよい。今回の調査区は、植松C遺跡の東端を南北に継続した形である。調査前の現況は、宅地、畠地および林地であった。(今野)

第5節 調査経過

今回の調査は調査面積が5200m²で、平成28年4月25日から開始した。器材を搬入し、まず調査区最北端の1・2トレンチ(以下Tと略す)の掘削を行った。1・2T周辺は工区の幅が狭く、かつ街路樹を保全する必要があったため、前年度の確認調査においてトレンチが設定できなかつた箇所である。人力によるトレンチ調査の結果、盛土直下に風化岩盤が露出し、遺構・遺物は確認されなかつた。1・2Tは、県教委の確認後に埋め戻した。5月9日からは作業員8名を雇用し、仮設トイレの設置も行った。調査は北端から開始し、調査区が狭小かつ重機の進入路が確保できなかつたため、人力によって300m²の表土剥ぎを実施した。遺構検出作業により、調査区北端からは1号建物跡や1~4号土坑などが確認された。

6月29日からはバックホーとクローラーキャリアを導入し、表土剥ぎを行つた。排土置場が調査区外に確保できなかつたことから、排土は調査区内に収めた。借地により作業員駐車場が確保できたことから、7月6日からは作業員を17名増員して本格的に調査を進めた。9月1日にはラジコンヘリコプターによる1回目の空中写真撮影を実施した。9月27日までに800m²の記録作成を終了し、県教委の調査終了確認を得て1回目の引渡しを行つた。引渡し箇所は、引き続き排土置場として使用した。

8月後半から10月にかけては、調査区中央付近の平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡を中心調査を進めた。8月末から9月は台風が上陸、長雨が続き、調査の進捗に影響を來した。10月

序 章

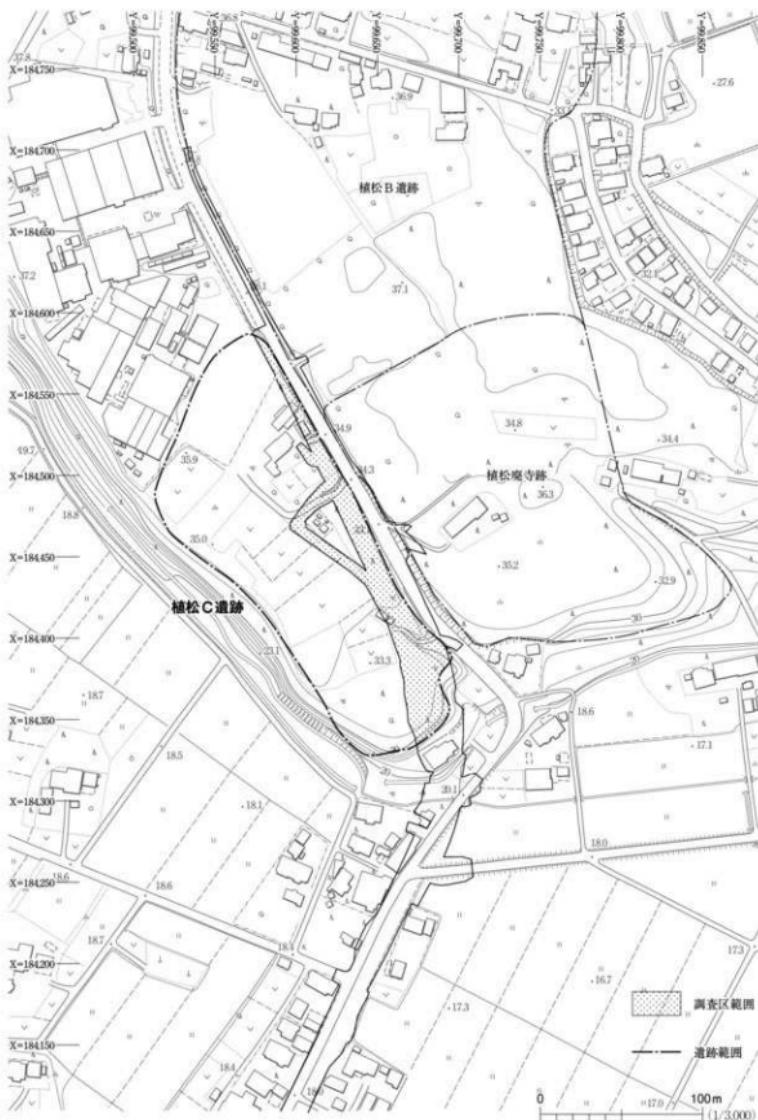


図4 遺跡・調査区位置図

12日からは調査区南端から表土剥ぎを開始し、翌日から人力による遺物包含層の掘り込みを行った。10月18日には、調査区中央付近を対象とした2回目の空中写真撮影を実施した。10月21日までに調査区中央付近2,400mの調査を終え、2回目の引渡しを行った。

以後は、遺物包含層中心に調査を進めた。遺物包含層からは連日、平箱にして2~5箱程度の遺物が出土した。また、調査区南端の急斜面および旧宅地部分におけるトレンチ調査を行い(3~6T)、遺構および遺物包含層が存在しないことを確認した。10月24日には埋戻しが終了した調査区内に、ユニットハウスを設置した。11月16日には、南相馬市立第二小学校の児童を対象に、体験発掘を実施している。12月7日には、遺物包含層を中心とした3回目の空中写真撮影を実施した。12月20日に調査区を養生し、年末年始のため一旦調査を休止した。

年明けの調査は1月10日から再開した。1月12日からは遺物包含層の土壤の水洗選別を開始した。1月17日には南相馬市労働福祉会館において、市民向けの調査成果報告会を行った。遺物包含層の掘り下げと遺構検出作業、遺物の出土状況の記録や全景写真撮影、地形測量などを各層ごとに行い、2月9日までに作業を終えた。2月10日には器材を搬出、貸借物件の返却を終え、全ての調査を終了した。2月28日、県教委、相双建設、財團三者により調査終了の確認を行い、最終的な引渡しを行った。

(今野)

第6節 調査方法

今回の調査にあたっては、調査区内の表土はおもにバックホーを用いて除去した。重機を使用できない幅狭な箇所については、一部人力に拠った。表土層より下層の堆積土については、原則人力で掘り下げている。掘削によって出た堆土は、クローラーキャリアに積み込み、工区内の堆土置場に集積した。

遺構番号は、検出した際に遺構種別ごとに通し番号を付けた。遺構の調査にあたっては、その性格と遺存状態に応じて土層観察用畦を設け、遺構の埋没過程や遺物の出土状況の把握に努めた。堆積土は、遺構外の基本土層についてはアルファベット大文字のLとローマ数字の組み合わせで表記し、遺構内堆積土については、小文字のlと算用数字の組み合わせで示している。堆積土の色調には、『新版標準土色帖』を用い、その表記方法に従った。

遺跡の測量記録においては、国土座標第IX系の座標値と近隣の三角点を基とする標高を有する基準点を調査区内に設置した。遺構・遺物の大まかな位置については、国土座標を用いた10m方眼のグリッドによって示した。グリッドは、調査区北西側のX=184,600・Y=99,560に原点を設定し、その名称は原点からY座標軸沿いに東へ向かってアルファベットの大文字、X座標軸沿いに南へ向かって算用数字を順に付け、その組み合わせで表記した。遺構平面図における詳細な位置表示については、国土座標の座標値をそのまま用いている。遺構の図化については、グリッドを1mメッシュに分割し、これをもとに計測する方法と、トータルステーションを用いて測点を紙上に落とし、手

序 章

書きで結線する方法を適宜使い分けた。作図の際の縮尺は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑などは1/20とした。また、竪穴住居跡のカマドや遺物出土状況などの詳細図は、1/10で記録している。調査区全体の地形図は、1/200で作成した。

遺物の取り上げは、遺構単位もしくはグリッドでを行い、土層観察用畦との対比によって出土層位を判断した。遺物包含層内の、特に遺物が集中して出土したJ～L・20～23グリッドについては、10m四方のグリッドを、さらに5m四方の小グリッドに4分割して遺物を取り上げた。小グリッドには、大グリッドの北西隅から時計回りにa・b・c・dと名称を付けた。動物遺存体については、手で拾い上げた比較的大きなものと、水洗選別によって得られたものがある。水洗選別は、土層観察用畦の4箇所を50cm四方で切り取り、各層を5cmの厚さに分割し、ブロックごとにザルと籠を用いて行った。

遺構の写真記録は、検出状況、土層断面、遺物出土状況、完掘状況など調査の過程に応じて撮影した。撮影には、35mm判モノクロ・カラーリバーサルフィルムを使用し、両者同一カットを3コマずつ撮影している。また、デジタルカメラによる撮影も行っている。遺跡全体と周辺の地形を記録するために、ラジコンヘリコプターを用いた空中写真撮影を業務委託により実施した。遺物写真については、デジタルカメラを用いた。

発掘調査で得られた記録や出土遺物は、(公財)福島県文化振興財团遺跡調査部において、整理作業を行った。報告書刊行後は、各種台帳類を作成し、閲覧可能な状態で福島県文化財センター白河館に収蔵・保管される。

(今 野)

参考文献

- | | |
|---------------|---|
| 小高町教育委員会 | 2005 「浦尻貝塚1」小高町文化財調査報告書第6集 |
| 久保和也ほか | 1990 「原町及び大堀地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)」地質調査所 |
| 西 徹雄ほか | 2000 「図説相馬・双葉の歴史」株式会社郷土出版社 |
| 原町市教育委員会 | 1997 「原町市内遺跡発掘調査報告書2」原町市埋蔵文化財調査報告書第15集 |
| 福島県教育委員会 | 1996 「福島県遺跡地図 浜通り地方」福島県文化財調査報告書321-3 |
| (財)福島県文化振興事業団 | 2007 「原町火力発電所関連遺跡調査報告X 割田A~H遺跡」福島県教育委員会 |
| (財)福島県文化振興事業団 | 2008 「常磐自動車道遺跡調査報告46 原B遺跡」福島県教育委員会 |
| (財)福島県文化振興事業団 | 2010 「常磐自動車道遺跡調査報告60 横大道遺跡」福島県教育委員会 |
| 南相馬市教育委員会 | 2008 「泉慶寺跡」南相馬市埋蔵文化財調査報告書第12集 |
| 南相馬市教育委員会 | 2011 「原町市史」第三巻 資料編「考古」 |
| 南相馬市教育委員会 | 2012 「泉官衙遺跡」南相馬市埋蔵文化財調査報告書第20集 |
| 南相馬市教育委員会 | 2013 「南相馬市内遺跡発掘調査報告書7」南相馬市埋蔵文化財調査報告書第21集 |
| 柳沢幸夫ほか | 1998 「地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 相馬中村地域の地質」地質調査所 |

第1章 調査成績

第1節 遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図5・6、写真4）

今回の調査で検出した遺構は、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡6棟、土坑15基、溝跡3条、小穴9基、特殊遺構1基、土器埋設遺構1基、遺物包含層1箇所である。今回の調査区は、県道の拡幅と共に伴う側道部分の工区に当たるため、南北に長い。南北の長さは約240m、東西方向の幅は3~22mである。調査区内の地形を見ると、調査区北半は平坦と言って良く、南へごく緩やかに下っている。調査区北端からJ 18グリッドまでの約160m間の比高差は、1.7mほどである。それより南では徐々に傾斜がきつくなり、J ~ L 19グリッドからK ~ M 23グリッド付近にかけて、北西から南東に下る谷に入る。谷の南方には、植松C遺跡が立地する丘陵の最末端の尾根があり、調査区の南側は崖となっている。

遺構の分布状況を見ると、2号住居跡が位置するK 19以北が平安時代の集落域、K 19グリッド以南の谷地が縄文時代の遺物包含層と二つに大別される。遺物包含層より南側の尾根周辺は、土坑が3基検出されたのみで遺構密度が非常に希薄である。平安時代の集落域における遺構の分布を細かく見ると、調査区北端では1号溝跡、1・3・4号土坑などが散在するのみで、遺構の密度は比較的希薄である。その南側のE ~ G - 8 ~ 11グリッドにかけては、柱穴が大型の1 ~ 4号建物跡がある。これらと重複するように、E ~ I - 9 ~ 16グリッドにかけて、1・3 ~ 11号住居跡がまとまって検出されている。2号住居跡がやや離れて、平坦地の南端に当たるK 19グリッドに位置している。本線西側の側道部分に当たるD ~ E 13・14グリッドでは、1 ~ 4号建物跡に比べ柱穴が小規模な5・6号建物跡が検出されている。掘立柱建物跡どうし、あるいは掘立柱建物跡と竪穴住居跡が重複しているものがあるのに対し、竪穴住居跡の重複関係は認められなかった。

基本土層（図7、写真5）

遺構外の堆積土層については、表土から丘陵の基盤層とみられる風化の進んだ岩盤層まで、5層に大別した。色調および土質から細分したものについては、番号の後にアルファベットの小文字を付けた。

L I : 現代の表土である畑地の耕作土および林地の腐植土を一括してL Iとした。畑地の耕作土はK ~ M 22グリッドより北側で認められ、それより南では腐植土が堆積している。ともに粘性・締まりがなく、炭化物粒と焼土粒を微量含んでいることが多い。厚さは20~80cmである。

L II : 粘性・締まりの弱い黒褐色土で、調査区南端の尾根周辺を除く調査区のほぼ全域に堆積して

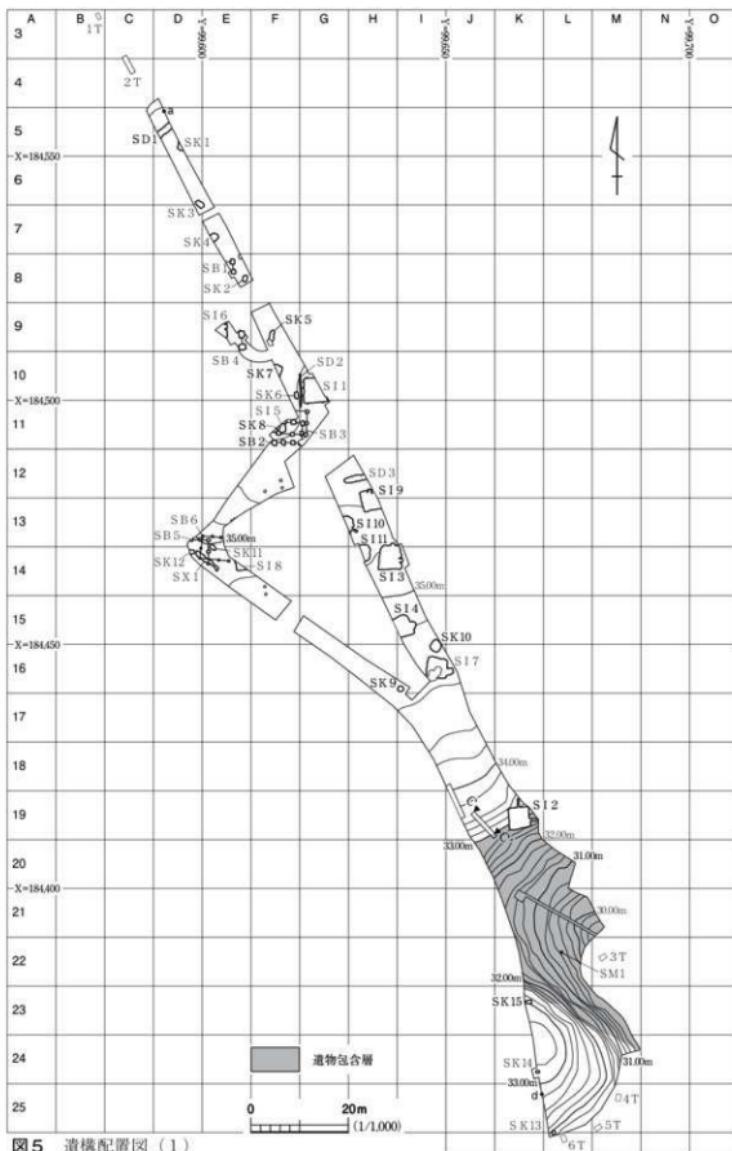


図5 遺構配置図(1)

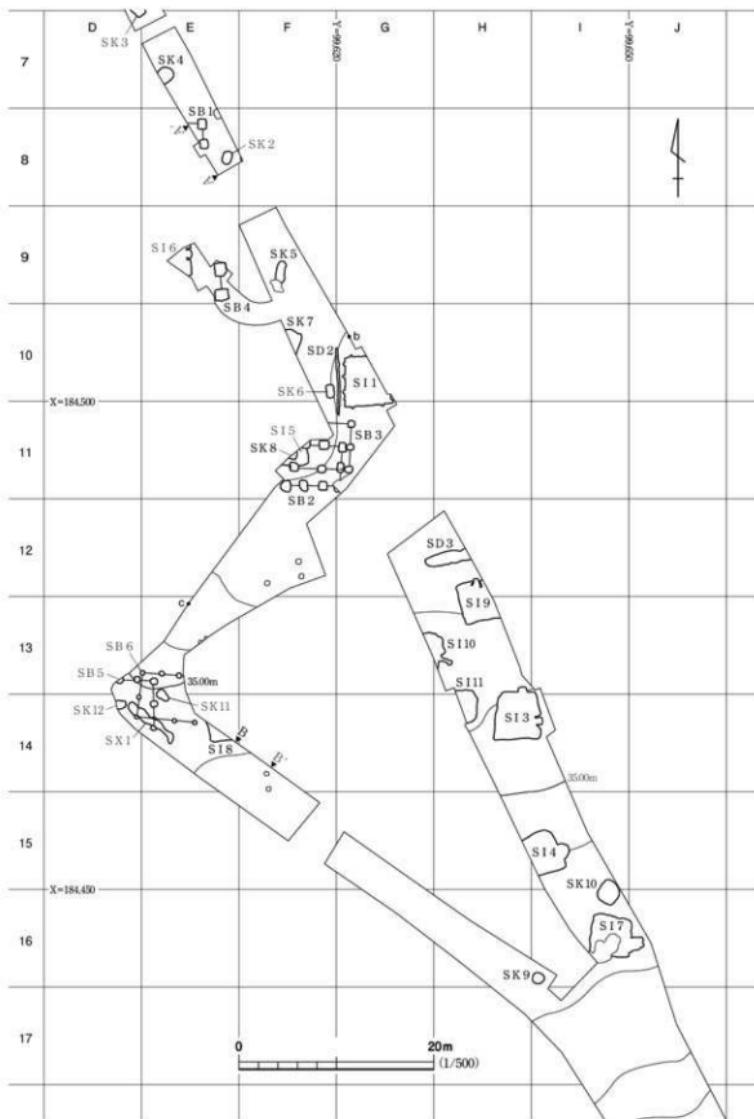


図6 遺構配置図(2)

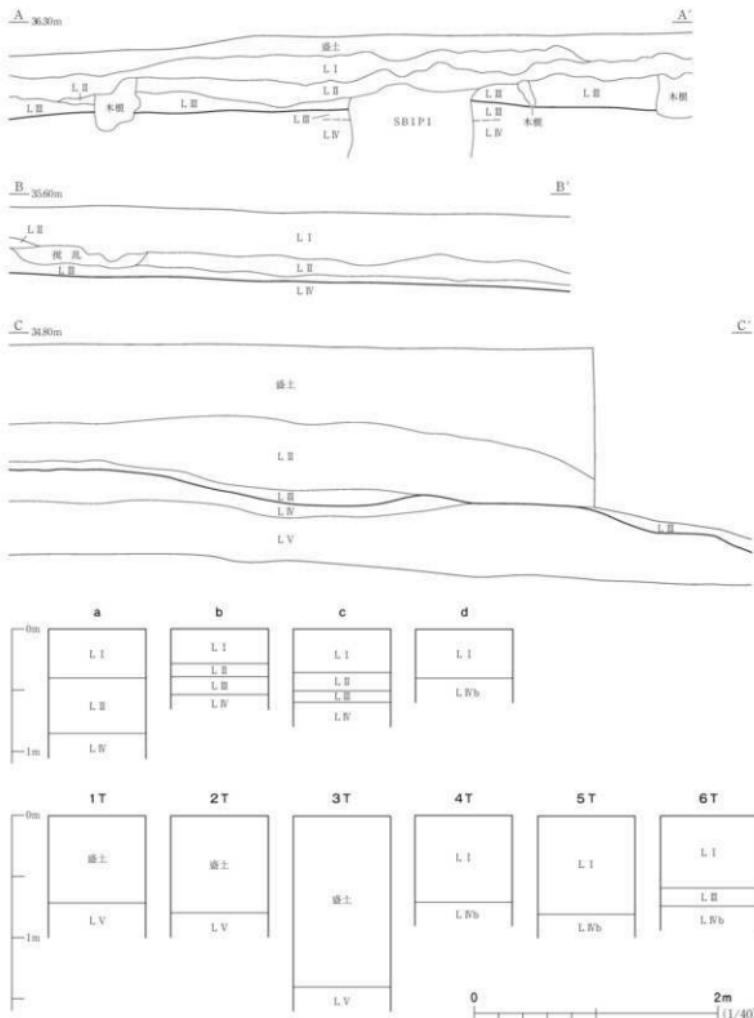


図7 基本土層図

いる。層厚は10~55cmで、調査区北半の平坦地では比較的薄く、南側の谷地では厚く堆積している。L IIからは、縄文土器、土師器、須恵器、瓦、鉄滓が出土している。

L III : L IIに比べ、粘性と締まりがある褐色土である。調査区北半の平坦地では、5~20cmの厚さで堆積している。畑の耕作が及んだとみられる調査区北端およびF 11グリッド周辺、調査区南端の尾根周わりでは欠層している。平安時代の遺構とみられる1・2・6~8・10号住居跡、1・5・6号建物跡は、本層上面から掘り込まれている。また調査区北半の平坦地においては、縄文土器が少量出土している。調査区南半の谷地においては本層が細分され、縄文時代の遺物包含層が形成されていた。その堆積土層については、第7節で別途詳述する。

L IV : 遺跡の基盤層であり、いわゆる地山と考えている。平安時代以降の遺構の大半は、本層上面で検出した。ローム質で粘性・締まりが強く、調査区北半の平坦地では、25~50cmほどの厚さで堆積している。谷地に下る斜面部付近では、5mm前後的小礫が混じる。これより南方の谷底付近から調査区南端にかけては、本層より赤味が弱く、10cmほどの角礫を多く含んでいるためL IV bとした層が堆積している。調査区南端の尾根周辺では、L I直下がL IV bとなり、現代の耕作痕が認められた。L IV以下からは、遺物は出土していない。

L V : 段丘の基盤となる泥岩層で、調査区全域で確認されている。非常に粘性と締まりがある。その上面は風化が進んでいるため、人力で掘削が可能な硬さであった。1~4号建物跡の大型の柱穴は、本層を若干掘り込んで底面としているものが多い。J・K 20グリッド付近より南側では、上位に砂礫が混入する。下位は硬い岩盤となり、近隣では崖の岩盤を掘り込んで、石室を築いていた。

第2節 堪穴住居跡

1号住居跡 S I 1

遺構(図8・9、写真6)

調査区北寄りのG 10・11グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。L IV上面において検出したが、L III上面から掘り込まれていることを調査区際の土層断面で確認した。重複する遺構はなく、西壁と平行するように2号溝跡がある。また南北方向には、5号住居跡、2・3号建物跡などが隣接している。北東隅側が未調査であるが、平面形は方形とみられ、規模は5.1m四方である。仮に西壁を主軸とすると、その方位はほぼ真北を示す。周壁は急角度で立ち上がり、その遺存高は17~38cmである。遺構内堆積土は5層に分けた。 ℓ 1・2は締まりがあり、特に ℓ 2にはL IV塊が多量に含まれているため、人為的埋土の可能性が高い。 ℓ 3は床面上にわずかに認められた炭化物や焼土、灰白色粘土塊を含む堆積土で、カマドからの崩落土とみられる。 ℓ 4は歛溝内の堆積土で締まりがない。 ℓ 5はL IV塊を主体とし、硬く締まっていたため貼床構築土と考えている。

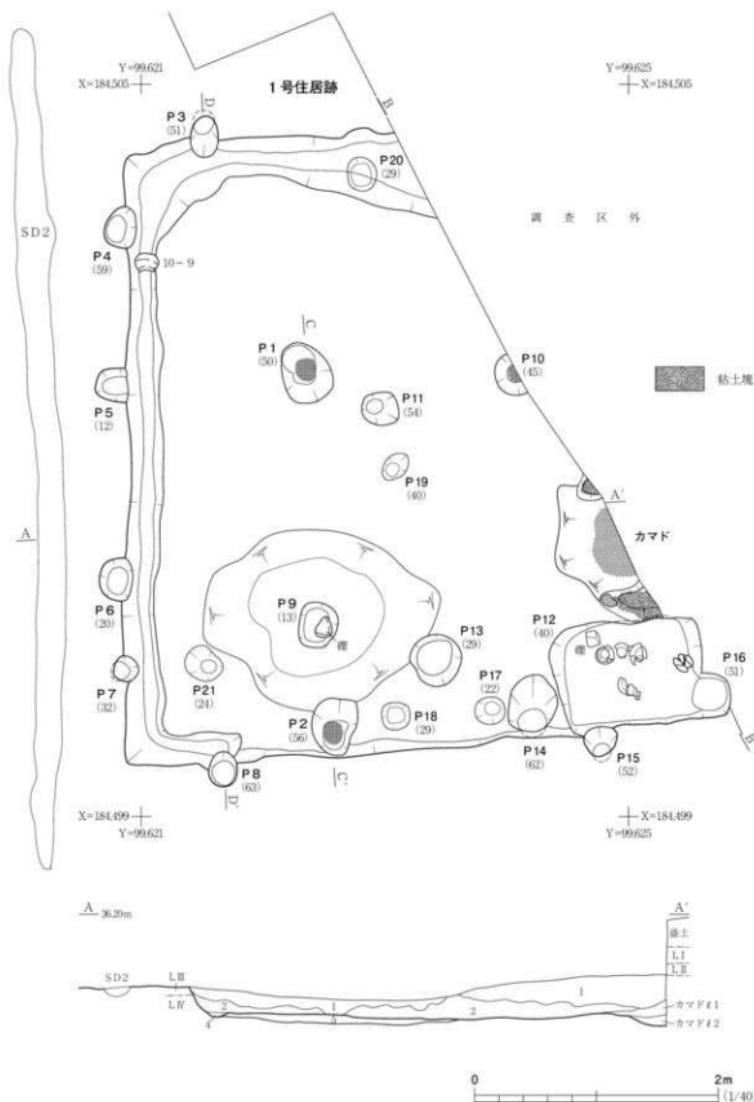


図8 1号住居跡（1）

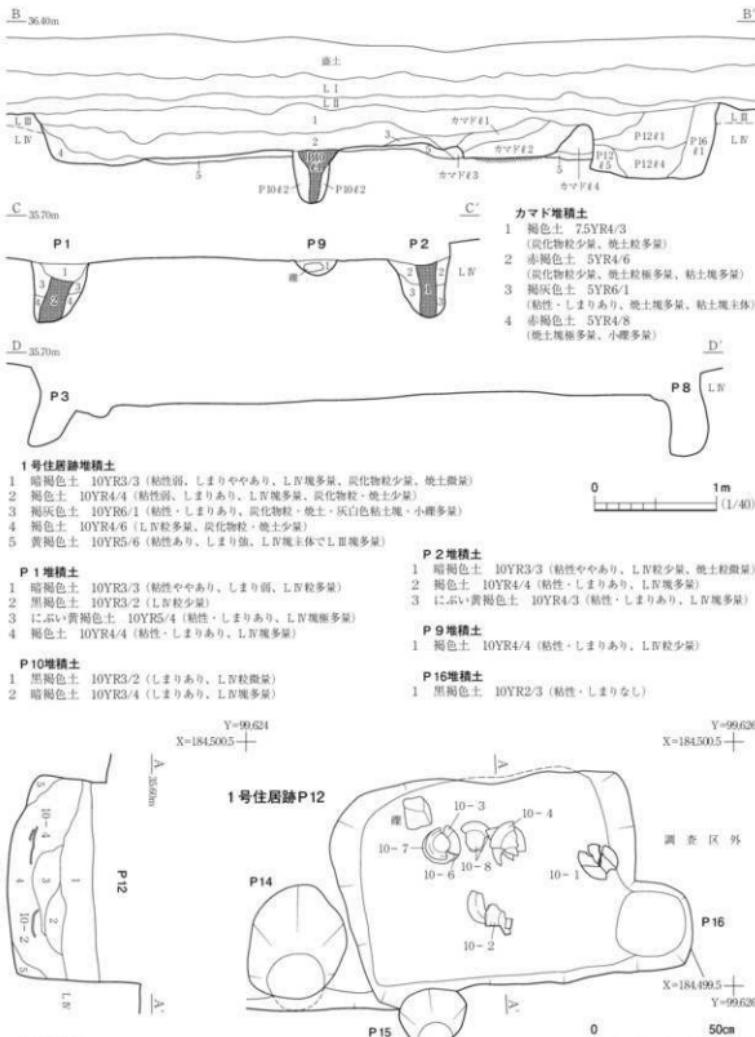


図9 1号住居跡 (2)

カマドは、東壁の南寄りに確認した。両袖の先端部分と焚口部分を調査したのみで、全容は明らかではない。カマドの袖部は、灰白色粘土と焼土塊によって構築されていた。カマド内には焼土や炭化物、粘土塊を多く含む土が堆積していた。焚口部分は浅く窪み、赤褐色に被熱していた。

南西隅から北壁にかけては、周溝が認められた。周溝の幅は西壁では20cm前後で、北西隅から北壁にかけては広くなる。深さは4～5cm程度とごく浅い。また周壁際で10基、床面で6基、貼床除去後の掘形上面で5基の小穴が検出された。このうち、比較的規模が大きく床面からの深さがあり、かつ長方形に配置されているP 1・2・10・14が主柱穴と考えている。P 1・2・10には、柱痕跡が確認された。P 1に関しては、柱痕跡である ℓ 2が床面に達せず、床面から15cmほど下がったところで途絶えている。周壁際の小規模なP 3～8・15・16は壁柱穴と考えられる。貼床除去後に検出した小穴は、図8に破線で示している。小穴とは別に、南西隅寄りには掘形が深い箇所も認められた。

住居跡の南東隅で検出された大型のP 12は、貯蔵穴と考えている。東西120cm、南北82cmの隅丸長方形で、床面からの深さは40cmである。 ℓ 1～4は、L IV塊やカマドの構築土とみられる粘土塊などを含み、人為的な埋土と判断した。周壁際にいわゆる三角堆積する ℓ 5は、壁の崩落土と考えている。図10に示した土師器杯は ℓ 4からまとめて出土した。特に図10-3・6・7は、重なった状態で出土している。これらの遺物は貯蔵穴を埋める際に、一括して廃棄された可能性が高い。

遺物(図10、写真37)

本遺構からは破片数にして土師器554点、須恵器61点、瓦1点、土製品2点、鉄滓504g、繩文土器3点、石器3点が出土している。図10-1～8はロクロ成形の土師器杯である。器形は、いずれも体部が内湾気味に立ち上がる。6は口唇部がわずかに外反する。3は他に比べ底径が大きく、器壁が厚い。内面には、いずれもヘラミガキと黒色処理が施されている。見込み部分のヘラミガキは、1・2・8が見込みの中心から放射状に施されているのに対し、その他は平行あるいは格子状に施されている。2～4は二次的に熱を受けたとみられ、黒色処理が不明瞭となっている。また6は、見込み部分の黒色処理が環状にかかれている。外面の調整を見ると、底面から体部下端にかけて1・2は回転ヘラケズリが、3～5・7は手持ちヘラケズリ施されている。6は底面の周縁にのみ手持ちヘラケズリが施され、底面中央に回転糸切り痕が残されている。8は体部下端にのみ手持ちヘラケズリが施されている。6～8の体部には墨書が認められる。6は「分」であろう。7は「南賀貳(奉)」、8は「又」と読める。

9は小型の須恵器甕である。口縁部が直線的に立ち上がり、口唇部が外側につまみ出されている。10は、土製の玉である。孔は穿たれていない。11は四基の石鏡である。長幅比が2.3と縦長で、左右の稜は直線的である。左右対称で均整がとれ、断面形も整った菱形である。12は板状の砥石で、両端を欠損している。両面および側面に線状痕が認められる。

まとめ

5.1m四方の方形を呈する竪穴住居跡である。東壁にカマドがあり、主柱穴と側柱穴、周溝を備

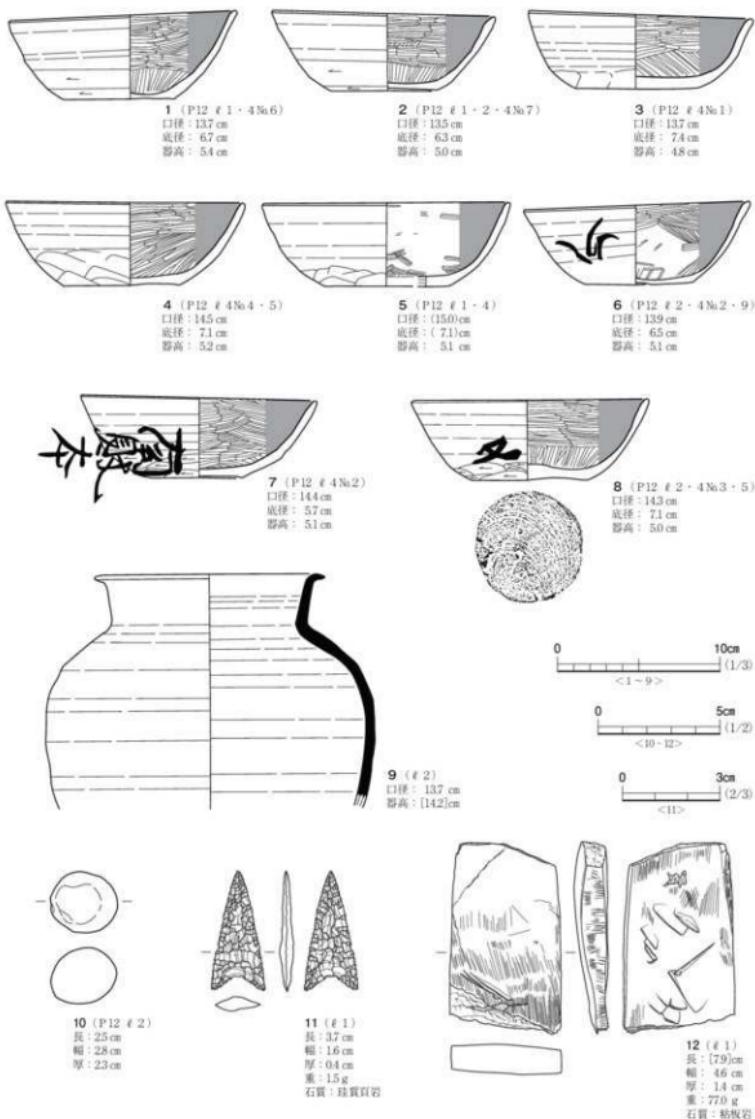


図10 1号住居跡出土遺物

えている。本遺構は堆積土の状況から埋められた可能性が高い。また貯蔵穴からは墨書き器を含む土師器杯がまとまって出土している。遺構の年代は、出土遺物の特徴から9世紀前半と考えられる。

(今野)

2号住居跡 S I 2

遺構 (図11・12、写真7)

調査区の南側K 19グリッドに位置し、標高33.5m付近の南向き斜面地に立地する。検出面はL III上面である。平面形は正方形で、その規模は一辺4.5mである。主軸方位はN 5°Wを示す。周壁はいずれも床面から急斜度で立ち上がり、その遺存高は床面から15~37cm、北壁の遺存状態が良い。床面は、住居北半部分ではLV上面をそのまま床として利用しており、地山に含まれる礫の影響で部分的に凹凸が見られた。一方、傾斜面に形成される住居南半部分では貼床が施されていた。

住居内の堆積土は5層に分層した。 ℓ 1~3は黒色土で、炭化物、焼土、小礫と多量の繩文土器片が含まれる。 ℓ 4・5は縦まりのある暗褐色土である。 ℓ 1~3はL IIに近似し、レンズ状堆積を示していることから、自然堆積土と判断した。 ℓ 4・5は貼床構築土である。

住居内の施設は、北壁中央と東壁南寄りに位置する2基のカマドを確認し、遺存状態から東壁のカマドから北壁のカマドへの造り替えが行われたことが想定される。北壁のカマドは、燃焼部と煙道を検出した。燃焼部の規模は奥行75cm、幅55cmである。袖部は浅く溝状にLVを掘り込んだ部分に粘土塊を詰め、その上に繩混じりのぶい黄褐色土を積んで構築している。左袖は長さ75cm、幅30cm、床面からの高さ10cmである。右袖は長さ65cm、幅15cm、床面からの高さ10cmである。燃焼部底面・両袖内側に焼土化した部分は認められなかった。煙道部の規模は最大幅35cm、深さは20cmあり、住居壁から180cm外側に延びている。先端の煙出し部分は煙道部より深く、ピット状になっている。煙出し手前ではトンネルが残存していた。カマド内堆積土は8層に分層した。 ℓ 3・4は天井崩落土、 ℓ 7・8は袖の構築土、他は自然堆積土と判断した。

東壁の旧カマドは煙道のみ検出した。最大幅50cm、深さ38cm、住居壁から160cm外側に伸びている。底面は住居の外側に向かって緩やかに下がり、先端部分で急激に立ち上がる。本来はトンネル状になっていたと想定され、先端部には煙出しを塞ぐように被熱した粘土塊が置かれていた。煙道内の堆積土は11層に分層した。いずれもL II・IIIに近似する色調と土質であり、自然堆積土および天井の崩落土と考えられる。

遺物 (図13、写真38)

土師器166点、須恵器8点、鉄製品2点、鉄滓45g、繩文土器475点、石器2点が出土している。図13-1は須恵器の杯である。体部がやや内湾気味に立ち上がる器形である。色調は焼成不良のため白色で、器面の風化が著しい。2は土師器杯の底部片である。一部判読不能だが底面に「□田合」と墨書きされている。3は土師器の長頸甕である。カマド堆積土およびカマド前面の床面から出土した。最大径は胴部中央に位置し、頸部はくの字状に屈曲する。口縁部は外反し、端部が上方につま

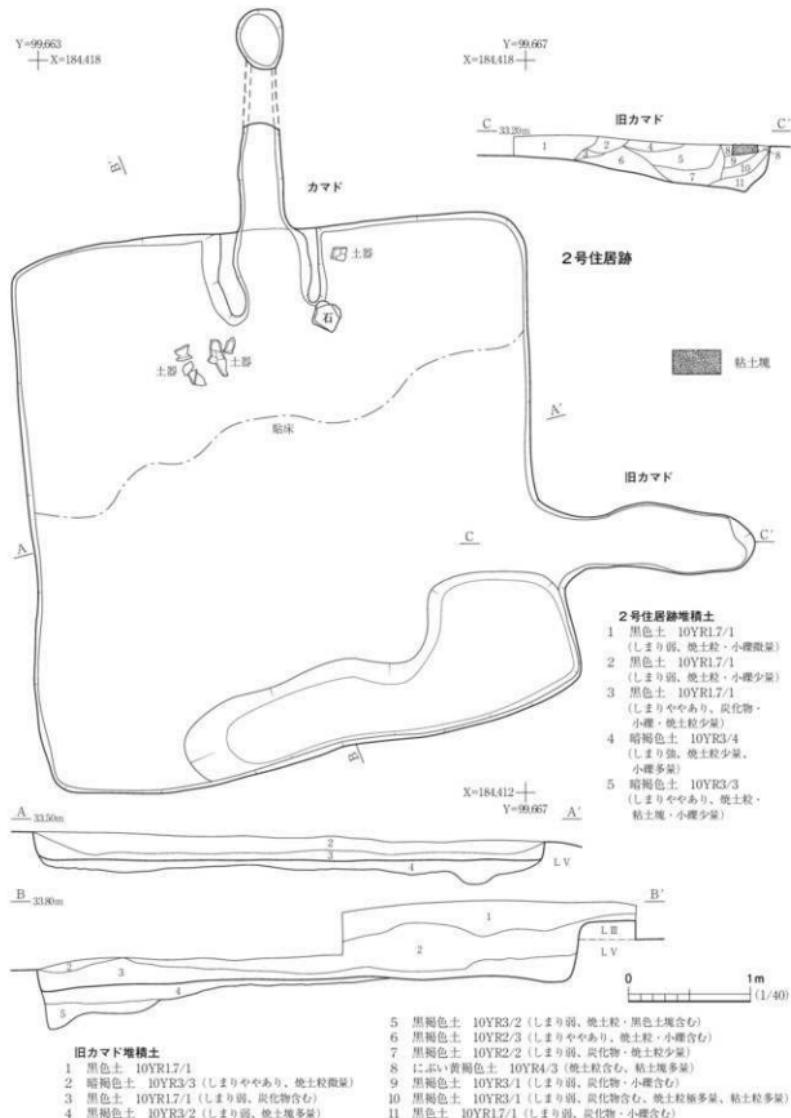


図11 2号住居跡（1）

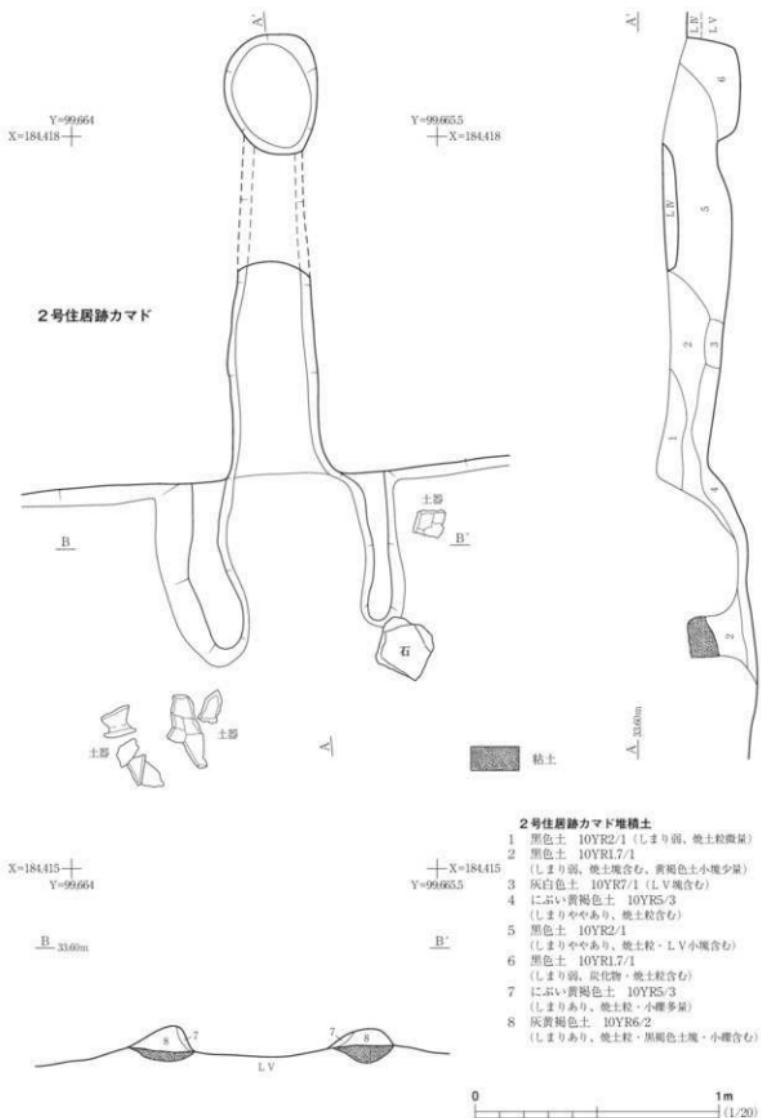


図12 2号住居跡（2）

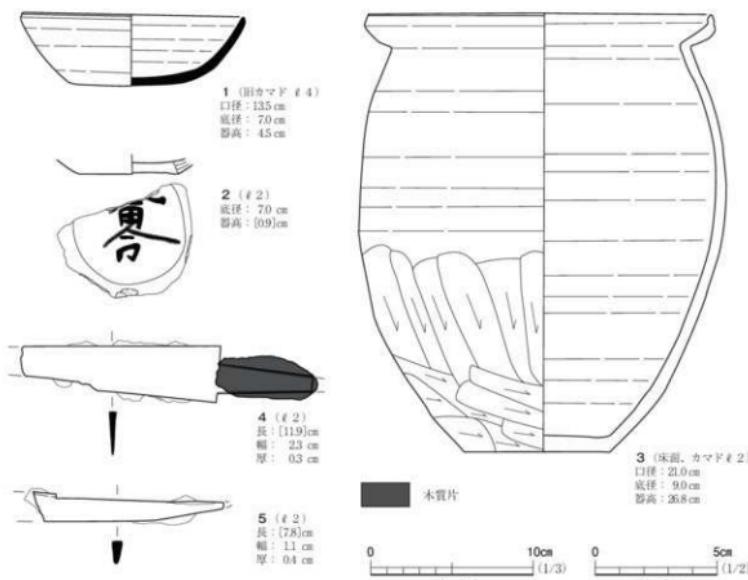


図13 2号住居跡出土遺物

み上げられている。内面および外面胴部上半部はロクロナデで調整される。外面胴部中央～下端にかけては縦方向のヘラケズリで調整され、下端～底部にかけて横方向のヘラケズリによって調整される。器面には、カマド設置時に付着したと思われる粘土が認められる。4・5はいずれも刀子と推定される鉄製品である。4は刃部先端と茎尻を欠損している。茎部には木質片が付着している。5は区から茎部にかけた資料で、茎がわずかに屈曲する。

まとめ

本遺構は、一辺4.5mの方形の堅穴住居跡である。住居内の中央から北側はLV上面を床面とし、傾斜面に入る南側では床面の高さを揃えるために貼床が施されていた。カマドは北壁と東壁に確認され、遺存状態から東壁から北壁への造り替えが想定された。遺構の年代は、出土した遺物の特徴から9世紀前半頃と考えられる。
(神林)

3号住居跡 S 1 3

遺構 (図14・15、写真8)

調査区の中央部、H・I-13・14グリッドに位置し、標高35.2mの平坦地に立地する。検出面はLV上面である。重複する遺構は認められず、北西約4mに11号住居跡が位置する。また住居跡中央やや西寄りに長方形の搅乱が認められる。

平面形は方形を基調とするが、南壁に比べ北壁が短く、やや台形状を呈している。規模は東壁で4.8m、西壁で4.9m、南壁で4.8m、北壁で3.3mである。仮に北壁と直交する線を主軸とすると、その方位はほぼ真北を示す。周壁は床面から60~80°の立ち上がりを示し、遺存高は床面から20cmほどである。床面は平坦であるが、カマド前面部分はやや盛り上がる。住居内の堆積土は6層に分層した。 ℓ 1・2は住居跡全体を覆う黒褐色土・暗褐色土である。 L IIに近似した土を基調とし、レンズ状に堆積しているため自然堆積土と判断した。 ℓ 3・4は壁際のみに認められ、壁面からの崩落土と考えられる。 ℓ 5は住居跡の南西寄りにのみ堆積し、縮まりがある。 ℓ 6は住居掘形を覆うように堆積し、 L IVに近似したにぶい黄褐色土塊が混じる黒色土である。上面が非常に硬く締まっており、貼床構築土と判断した。

住居内の施設として、カマド2基と焼土遺構1箇所、小穴5基を確認した。カマドは東壁中央から南に寄った位置と、北壁中央よりやや東寄りに位置している。カマドの遺存状態から判断して、北壁から東壁への造り替えが行われたと考えられる。東壁のカマドは燃焼部を検出し、煙道は遺存しない。燃焼部の奥行きは69cm、幅は67cmである。燃焼部の奥壁は平坦な底面から急激に立ち上がる。焚口付近からは一部焼土化した白色粘土塊が検出され、崩落した焚口天井部の構築材と判断した。カマドは両袖とともに遺存し、左袖は長さ70cm、幅25cm、床面からの高さ30cm、右袖は長さ50cm、幅45cm、床面からの高さ15cmである。

カマド内堆積土は8層に分層した。 ℓ 1は L IIに近似する黒褐色を基調とした土で、自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は焼土粒を非常に多く含むにぶい黄褐色土で、カマド天井からの崩落土と判断した。 ℓ 3・4も ℓ 1に近似した黒褐色を基調とした土で、天井が崩落する以前の自然堆積土とみられる。 ℓ 4は燃焼部を覆うように堆積している。 ℓ 5は燃焼部掘形の埋土である。その上面は赤褐色に焼け、硬化していた。焼土化した範囲は奥行き80cm、幅60cmである。 ℓ 6~8は袖部の構築土である。左袖は浅い掘り込みに粘質土の ℓ 8を詰め、その上に複数の粘土塊や礫を芯材として ℓ 6・7を積んで構築している。右袖は床面上に ℓ 7・8や粘土塊を積んで構築されている。

燃焼部の焚口付近からは、瓦片9点が上下2段に重なって出土した。ほとんどの個体が凸面を上にし、敷き並べたような状態で出土しており、燃焼部に意図的に置かれたものと判断した。また、燃焼部からは伏せた状態の土器杯が1点出土している。燃焼部から出土した遺物に二次的な被熱痕跡は認められないことから、これらの遺物はカマドの使用時ではなく、カマドの機能停止後に置かれたものと考えられる。そして、カマドの機能停止から天井崩落までにはある程度の時間があったと思われる。

北壁の旧カマドは、燃焼部の掘形と煙道を検出した。燃焼部掘形は最大幅100cm、深さ18cmである。煙道は平面形がU字状を呈し、最大幅100cm、深さ13cmで、住居壁から65cm外側に張り出す。カマド内の堆積土は5層に分層した。 ℓ 1・2は自然堆積土である。 ℓ 3~5はカマド構築土に由来すると思われる白色粘土塊が多く含まれており、カマド解体後の埋土と考えられる。特に ℓ 4からは、土器杯1点(図16-1)と鉄製鎌1点(図20-9)が出土した。

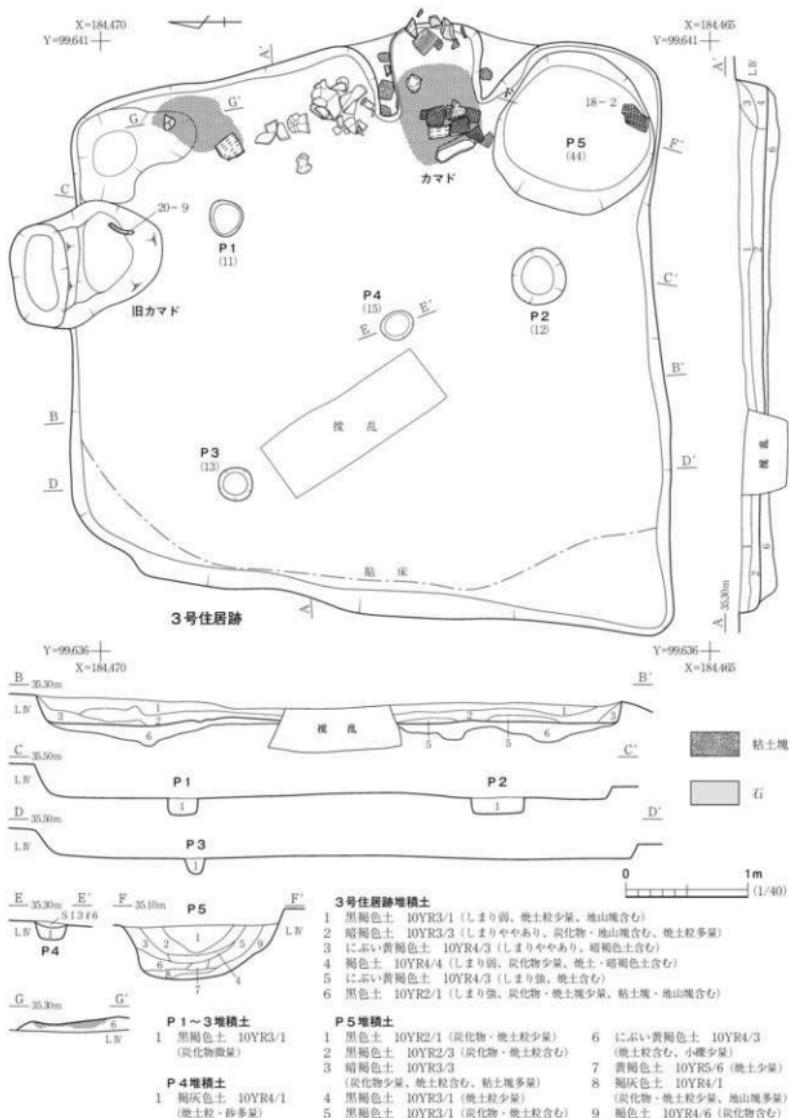


図14 3号住居跡 (1)

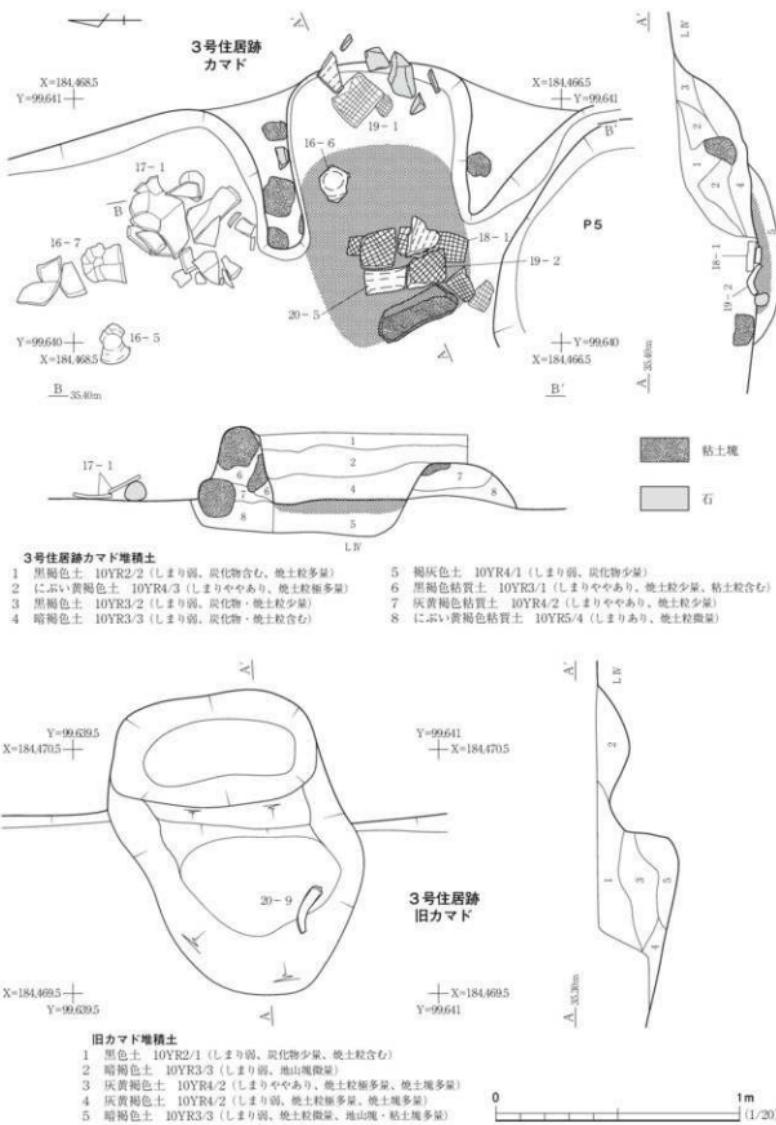


図15 3号住居跡（2）

焼土遺構は住居北東隅のやや南寄りに位置する。貼床上面が $70 \times 40\text{cm}$ の不整形の範囲で焼土化していた。壁面に焼けた痕跡はなく、焼土範囲から出土した碟・瓦片にも被熱の痕跡は認められなかったため詳細は不明である。

P 1・2・3は、住居の四隅を結ぶ対角線上に位置する。いずれも直径が $20\sim 40\text{cm}$ で、深さ 10cm ほどである。堆積土はいずれも1層で、L IV塊が混じる黒褐色土である。貼床と近似しているが、縮まりが非常に弱かったため、貼床との差は明確であった。位置関係から主柱穴の可能性も考えられたが、非常に浅く性格は不明である。P 4は住居中央に位置し、貼床を除去した段階で検出した。直径 30cm 、検出面からの深さ 15cm の小穴で、P 1～3と平面形や深さが近似している。堆積土は、上面が貼床で塞がれており、下には焼土粒を多量に含む土が堆積していたことから、人為的に埋め戻されたと判断した。

P 5は東壁カマドの南隣に位置する。長軸 130cm 、短軸 120cm 、深さ 44cm の楕円形であり、貯蔵穴と考えられる。堆積土は9層に分層した。いずれもカマドの構築材とみられる粘土塊や焼土粒、炭化物が含まれていることから、カマド廃絶後の人為的埋土である可能性が高い。

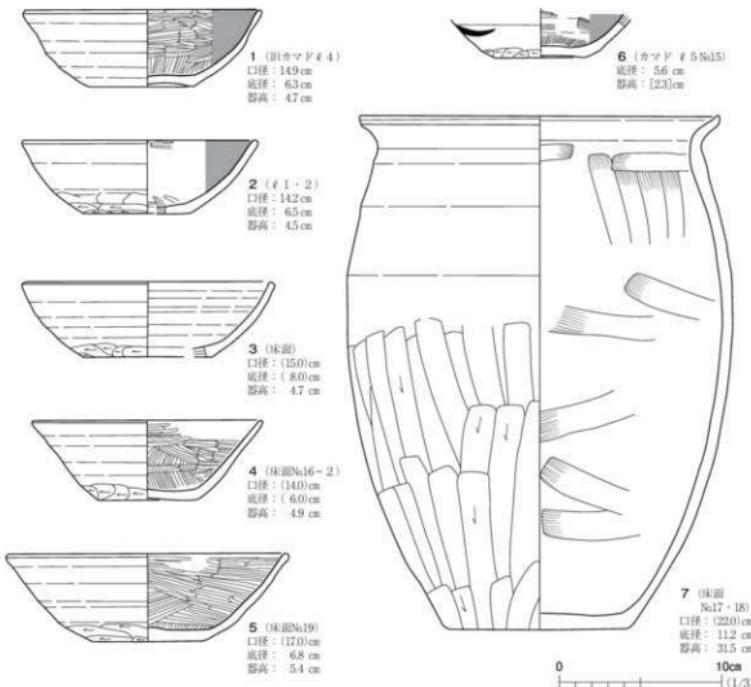


図16 3号住居跡出土遺物（1）

遺物(図16~20、写真38)

土師器614点、須恵器103点、瓦21点、鉄製品2点、鉄滓201g、縄文土器32点が出土した。図16-1~図17-1は土師器・須恵器で、このうち図16-3~5・7、図17-1は東壁のカマド脇床面からまとめて出土した。図16-1~6はロクロ成形の土師器杯である。1は旧カマドの埋土中から図20-9の鉄製鎌と共に出土した。体部はやや内湾気味に立ち上がる。外面に再調整は加えられず、底面には回転糸切り痕が認められる。内面にはヘラミガキ後に黒色処理が施される。しかし二次的な熱を受け黒色処理の大半が消失している。2はカマド脇の壁際堆積土からの出土である。体部下半から底面にかけて手持ちヘラケズリが施される。3は内面に黒色処理が施されない「赤焼土器」の破片で、外面の体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。4・5は床面に伏せた状態で出土した。ともに体部は直線的に外傾する。外面は体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施され、内面はヘラミガキが認められる。二次的な熱を受けており器面の劣化が著しく、内面の黒色処理は消失してしまっている。6は底部資料で、カマド燃焼部に伏せられた状態で出土した。体部には墨書が確認される。意図的に口縁部・体部を打ち欠いており、二次的な被熱の痕跡も認められないことから、カマドが機能停止した段階で意図的に置かれたと思われる。7はロクロ

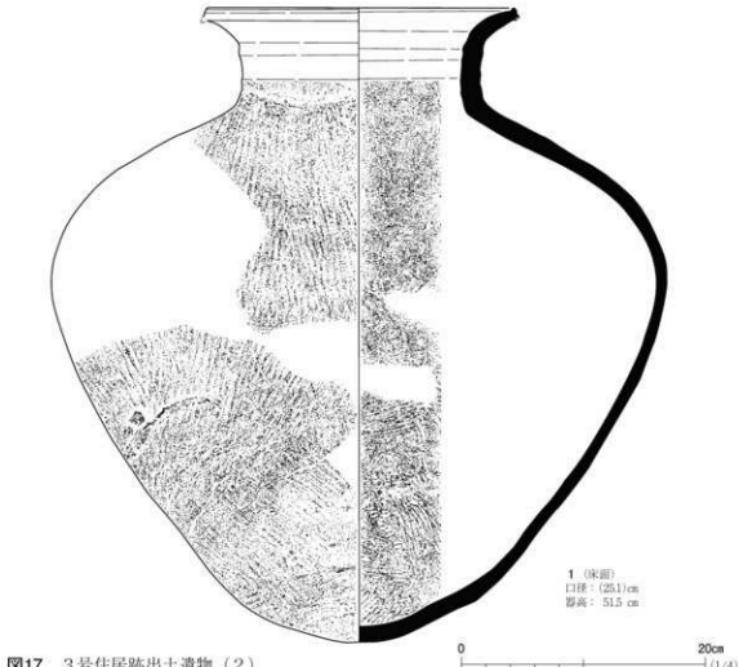


図17 3号住居跡出土遺物 (2)

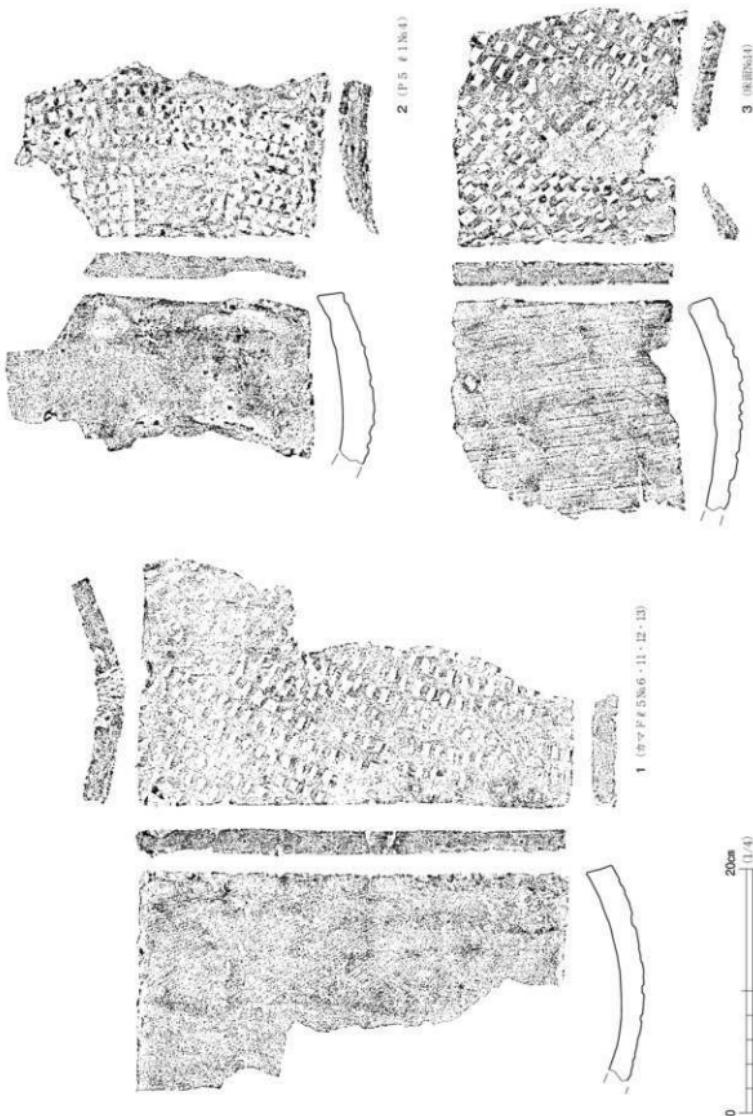
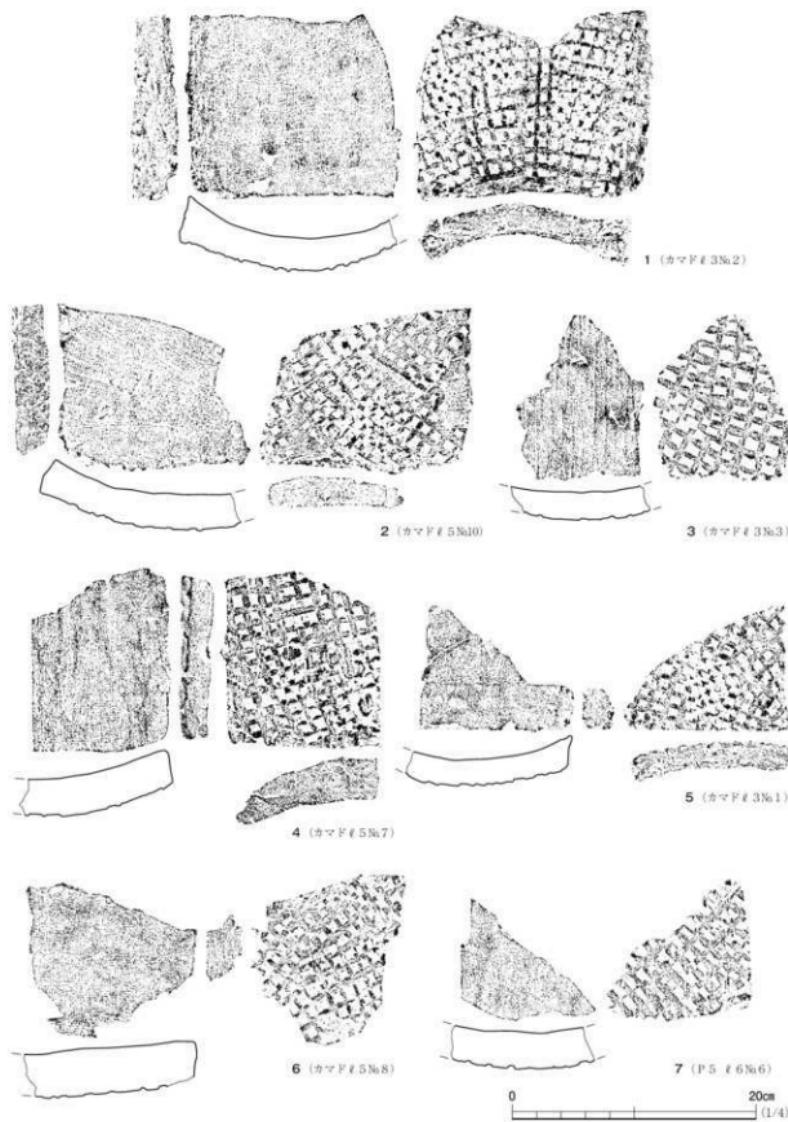


図18 3号住居跡出土遺物（3）



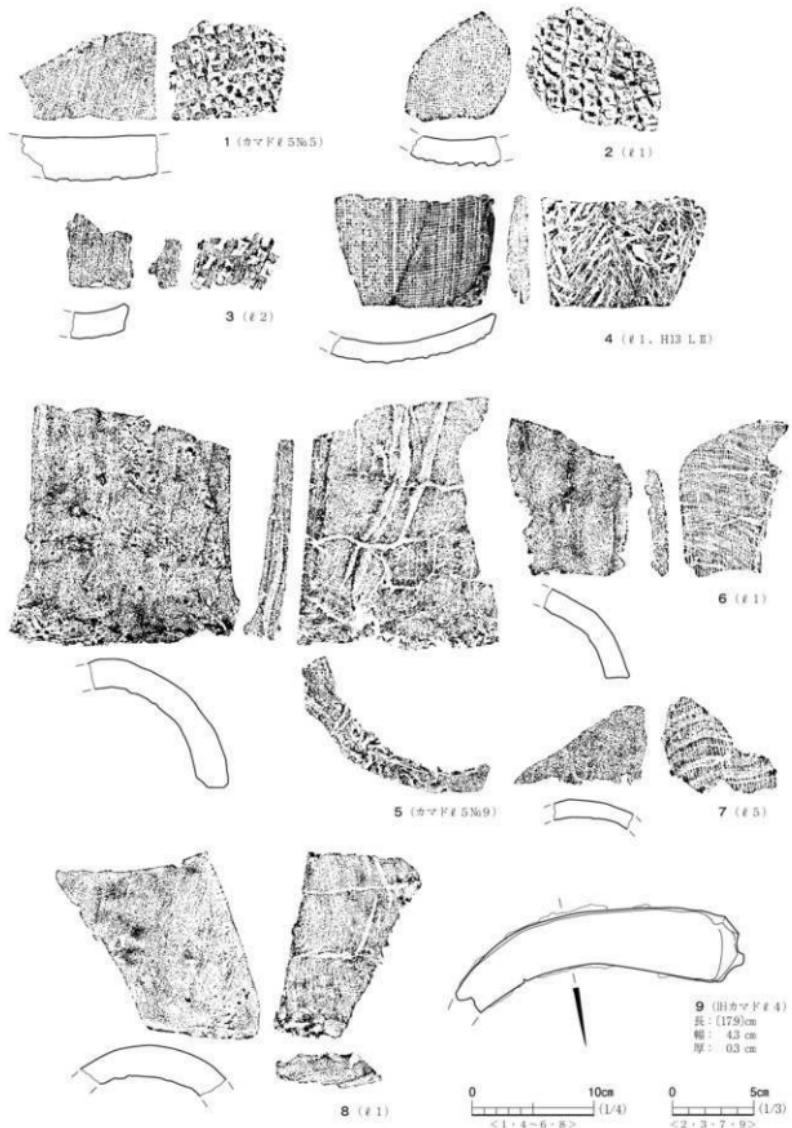


図20 3号住居跡出土遺物 (5)

成形による土師器の長胴甕である。最大径は胴部中位よりやや上に位置する。外面の胴部下半には縦方向のヘラケズリが施される。内面にも縦方向を基調としたヘラナデが施される。図17-1は須恵器の甕である。最大径は胴部上半に位置する。内外面ともに口縁部から頸部にかけてはロクロナデ、胴部から底部にかけては平行タタキ目が観察される。胴部下半に一部大きな焼き垂みが認められる。

図18-1～図20-8は瓦片である。図20-5～8が丸瓦で、それ以外は平瓦である。図18-1、図19-2・4・6、図20-1・5がカマド燃焼部の火床面、図19-1・3・5がカマドの堆積土、図18-3が焼土遺構脇の床面、図18-2、図19-7はP5の堆積土中から出土した。平瓦はいずれも一枚作りで成形され、凸面にタタキ目、凹面に布目が確認される。凸面のタタキ目は、図20-4を除いて格子状タタキ目である。胎土は暗灰色～灰色を呈し、焼成は良好である。側面は面取りが施されている。図18-2は割れ口に焼成時に付着したと思われる軸が認められ、いわゆる「ハネモノ」と推定される。図20-4は凸面に樹枝状のタタキ目が施される。胎土は乳白色を呈し、格子状タタキ目のものに比べ焼成が不良である。厚さも1cmほどで、格子状タタキ目の平瓦に比べてやや薄い。側面は斜めに面取りされている。

丸瓦の凸面は縦方向のナデおよびケズリによって調整されている。凹面には、4～5cm間隔で粘土紐を巻き上げた痕跡と布目が認められる。胎土は暗灰色～灰色を呈し、焼成はいずれも良好である。図20-9は鉄製の鎌の刃部である。北壁の旧カマド埋土中から出土した。刃部の中ほどから刃先に向かって湾曲し、先端は欠損している。

まとめ

本遺構は、平面形が方形の竪穴住居跡である。カマドが2基造られており、北壁から東壁へと造り替えられていた。北壁のカマドは人為的に壊され、燃焼部に土師器杯と鉄製鎌が埋められていた。東壁のカマドは燃焼部に瓦が敷かれたような状態で出土した。敷かれた瓦には二次的な被熱痕が確認されないことから、カマドの機能が停止した段階で敷かれたことが想定された。燃焼部の奥側には口縁部を打ち欠いた土師器杯が伏せた状態で出土しており、両カマドとともに廃絶時に何らかの祭祀行為があったものと推測される。出土遺物の大半は、カマドや住居の廃絶時に遺棄したものと思われる。出土遺物の特徴から9世紀中葉～後葉に機能した遺構と考えられる。

(神林)

4号住居跡 S I 4

遺構(図21、写真9)

調査区中央部のH・I 15グリッドに位置し、標高349mの平坦地に立地する。検出面はLIV上面である。重複する遺構はない。木の根等による擾乱によって遺存状況は極めて不良である。南東方向に10号土坑と7号住居跡が隣接する。

遺構の一部が調査区外に延びるが、住居跡の平面形は隅丸方形と推定され、南北の長さは4.5mである。南壁に直交する線を主軸とすると、その方位はN 15°Wを示す。周壁は緩やかに立ち上がり



図21 4号住居跡

り、遺存高は床面から10~18cmである。堆積土は2層に分層した。 ℓ 1は黒褐色土、 ℓ 2は暗褐色土で、焼土粒やLIVに近似する小塊を含んでいる。いずれも堆積状況から自然堆積と考えられる。貼床は確認されず、LIVを平坦に整えて床面としている。

住居内の施設はカマド1基と小穴1基を確認した。カマドは東壁の中央やや南寄りに位置する。遺存状態は極めて悪く、カマドの掘形と推定される張り出しが確認されたのみである。張り出し部分の平面形はU字状を呈し、奥行きは90cm、幅は160cmである。カマド内の堆積土は2層に分層された。 ℓ 1は焼土塊を主体とした明赤褐色土で、粘土塊と炭化物を含んでいる。 ℓ 1はカマドの天井部や袖の崩落土と考えられる。 ℓ 2はLIVに近似する塊を含む黒褐色土で、自然堆積土と考えられる。

小穴は、住居跡の南東隅からやや西に寄った壁際で検出された。南北90cm、東西60cm、深さ

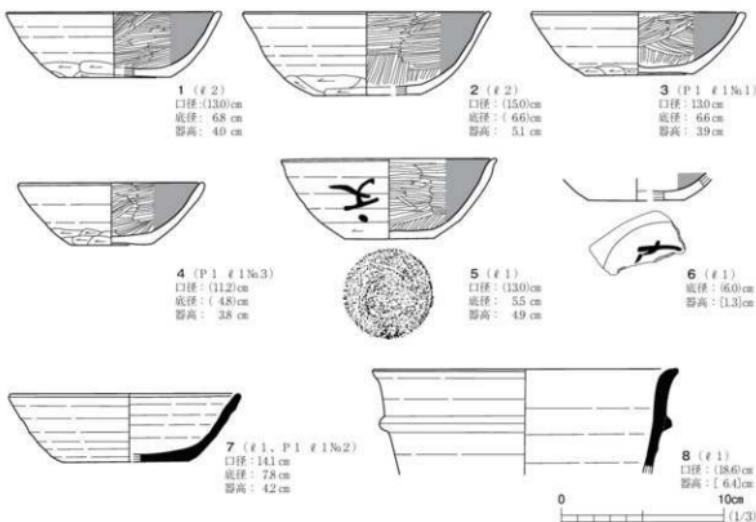


図22 4号住居跡出土遺物

16cmの楕円形である。堆積土は1層で、炭化物と焼土塊を含む黒色土が堆積していた。カマドとの位置関係から貯蔵穴の可能性も考えられる。

遺 物 (図22、写真39)

本遺構からは、土師器255点、須恵器8点、鉄滓13g、縄文土器9点が出土している。大半が住居内堆積土からの出土であり、P1の堆積土から出土したものと接合するものも認められた。よって出土遺物のほとんどが、遺構が埋没する過程で廃棄されたかまたは流れ込んだものと思われる。図22-1~6はロクロ成形の土師器である。内面はヘラミガキの後に黒色処理が施される。外面の体部下端から底面にかけての再調整は、1~4は手持ちヘラケズリ、5は回転ヘラケズリが施される。器形は1・3~5が内湾気味に立ち上がるのに対し、2は口縁部がわずかに外反する。5・6には墨書が認められる。5は体部に「文」が逆位で墨書きされている。6は大半が欠損しているが、「南」の文字の一部と推定される。7は須恵器の杯である。体部は直線的に外傾し、底部の切離しは回転ヘラ切りである。8は須恵器の口縁部片で鉢と想定した。内外面はロクロナデで調整され、外面には幅1cmほどの突帯が付く。

ま と め

南北の長さが4.5mの方形と推定される竪穴住居跡である。東壁にはカマドが存在したとみられ、南東隅付近には貯蔵穴と思われるP1が位置する。遺存状態が悪いにも関わらず、堆積土中から比較的多くの土器が出土している。遺物はいずれも住居廃絶後の窪地を利用して廃棄されたものか、あるいは流れ込んだものと思われる。出土遺物から9世紀前半頃の遺構と考えられる。(神林)

5号住居跡 S I 5

遺構 (図23、写真10)

F 11グリッドの調査区間に位置し、標高35.7m付近の平坦地に立地している。検出面は、L IV上面である。2号建物跡のP 8、3号建物跡のP 1、8号土坑と重複し、いずれよりも本遺構の方が新しい。北東方向に6m離れて、1号住居跡がある。調査区間にあるため全容は不明であるが、平面形は方形と推定され、東西3.0m以上、南北2.2m以上である。東壁を仮に主軸とすると、主軸方

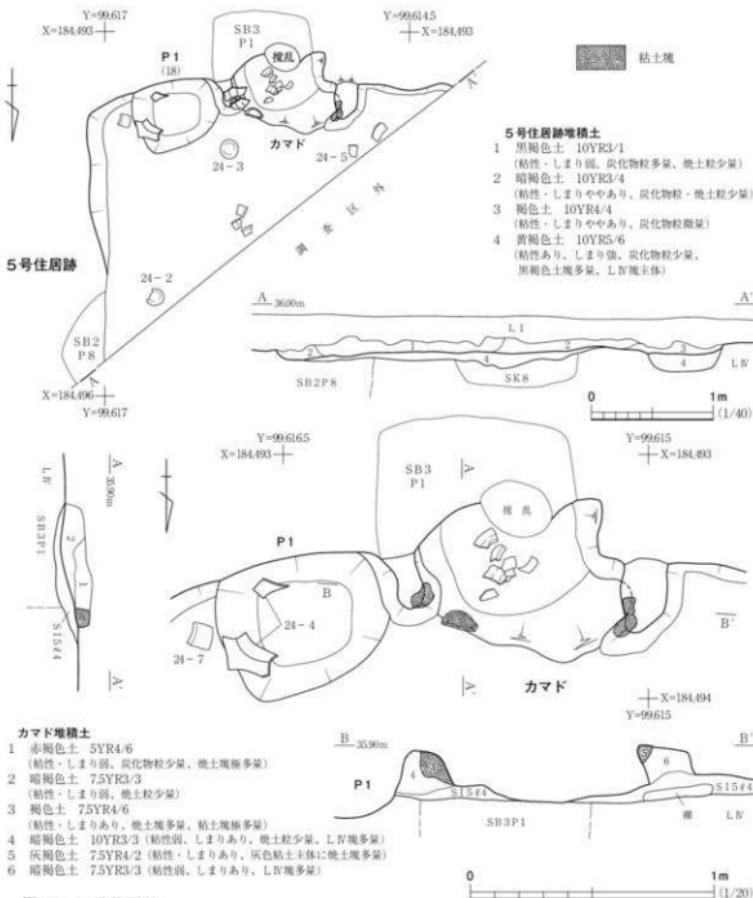


図23 5号住居跡

位はほぼ真北を示す。周壁の遺存状態は悪く、最も残りの良い南東隅付近においても、その遺存高は10cm前後である。堆積土は4層に分けた。 ℓ 1～3は、L II・IIIを基調とする自然堆積土とみられる。 ℓ 4はL IV塊を主体とし、硬く締まっていたため貼床構築土と考えている。

カマドは南壁に設けられている。煙道は遺存せず、カマドの全長は69cm、幅は125cm、燃焼部の幅は63cmである。燃焼部内に、目立った被熱硬化面は認められなかった。カマドの堆積土は、6層に分層した。 ℓ 1は焼土塊を多量に含むことから、天井部などからの崩落土とみられる。 ℓ 2は ℓ 1に比べ焼土が少なく、天井崩落前の自然堆積土と判断した。 ℓ 3～6は、袖部の構築土である。焼土塊や粘土塊、L IV塊を多く含み、硬く締まっている。カマドに向かって左側にはP 1がある。長径67cm、短径55cmの隅丸長方形で、床面からの深さは18cmと浅い。貯蔵穴または甕などを据えた穴と考えられる。なお、柱穴は認められなかった。

遺物 (図24、写真39)

土師器120点、須恵器30点、瓦1点、土製品1点、鉄滓578gが出土している。 ℓ 1やカマド周辺から出土したものが多い。図24-1～3はロクロ成形の土師器杯である。いずれも体部が内湾

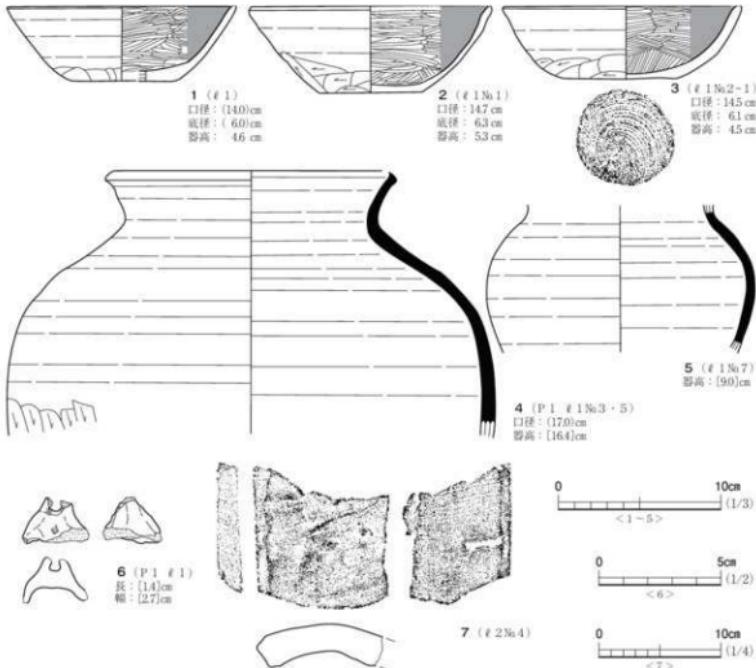


図24 5号住居跡出土遺物

気味に立ち上がる。3は、器壁が厚い点が特徴的である。内面には、いずれもヘラミガキと黒色処理が施されている。見込み部分のヘラミガキは、1・2は格子状に、3は放射状に施されている。2は二次的に熱を受けたとみられ、口縁部の黒色処理が不明瞭となっている。外面の調整を見ると、1・2は底面から体部下端にかけて、3は体部下端のみに手持ちヘラケズリが施されている。

図24-4・5は須恵器の壺片である。4の口縁部は直線的に外傾し、口唇部が三角形につまみ出されている。胴部下半に、ヘラケズリが認められる。5は小型で、球形の胴部になるものと推定される。同図6は土鉢である。手捏ねの痕跡が残り、外身中央の繋ぎ目部分から剥落している。7は丸瓦の破片とみられる。浅黄褐色を呈し、凸面にナデが、凹面には布目が認められる。

まとめ

方形で小型の壺穴住居跡と推定される。南壁にカマドとP1がある。今回調査した壺穴住居跡の中で、南壁にカマドが設けられているのは本遺構のみである。2・3号建物跡および8号土坑と重複し、いずれの遺構より新しい。出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃の遺構と考えられる。(今野)

6号住居跡 S I 6

遺構(図25、写真11)

調査区北寄りのE9グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。検出面は、LⅢ上面である。重複する遺構はなく、東に3m離れた位置に4号建物跡が隣接している。東壁から南東隅付近にかけた一部のみを調査したが、平面形は方形と推定される。東壁を仮に主軸とすると、主軸方位はN3°Wを示す。周壁の遺存状態は悪く、その遺存高は10cm程度である。堆積土は5層に分けた。ℓ1～4は、LⅡ・Ⅲを基調とする自然堆積土とみられる。ℓ5はLⅣ塊を主体とし、LⅡに似た黒褐色土塊を多く含んでいた。その上面は硬く締まっていたため、貼床構築土と考えている。

東壁ではカマドが確認された。煙道は遺存せず、カマドの全長は100cm、幅は136cm、燃焼部の幅は62cmである。燃焼部の底面は浅く窪み、その上面は赤褐色に焼けて硬化していた。カマドの堆積土は、5層に分層した。このうちℓ1～3は、燃焼部内の堆積土である。ℓ1は、ℓ2・3に比べ焼土が少なく色調が暗いことから、天井部崩落後の自然堆積土と考えられる。ℓ2・3は焼土塊を多量に含むことから、天井部の崩落土であろう。ℓ4・5は、袖部の構築土である。ℓ4は、焼土塊に黒褐色土塊を混ぜている。ℓ5は灰白色粘土を主体とし、焼土塊が混入していた。また、カマドに向かって右側の南東隅では、貯蔵穴とみられるP1が検出された。P1は長径130cm、短径94cm以上の隅丸長方形とみられ、床面からの深さは14cmである。なお、柱穴は検出されなかった。

遺物(図26)

本遺構からは土師器125点、鉄製品1点、鉄滓57gが出土している。図26-1～4はロクロ成形の土師器甕である。いずれも長胴形と推定され、頸部でくの字に外折し、口唇部が上につまみ出されている。外面の調整を見ると、1～3の胴部にはおもに縦方向のヘラケズリが施されている。

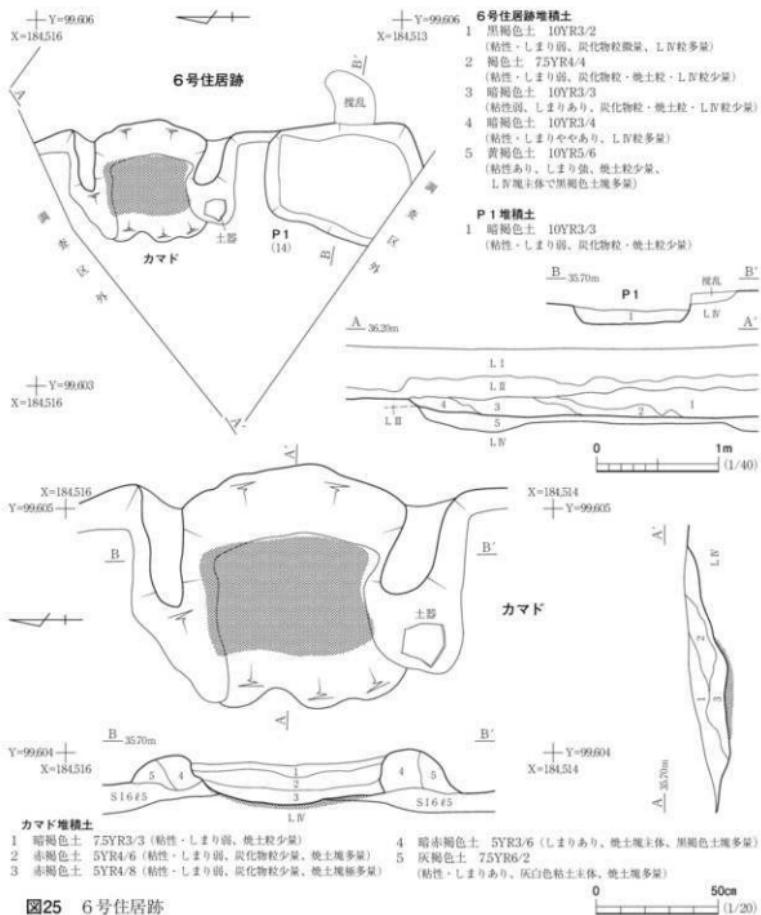


図25 6号住居跡

2は、内面にもヘラケズりが認められる。1の胸部に見られる孔は、人為的に穿たれた可能性がある。また4の胸部外面には、煤が付着している。同図5は、鉄製の釘とみられる。断面形は正方形で、先端が細く尖っている。

まとめ

方形と推定される堅穴住居跡である。部分的な調査に留まったため、全体の規模は不明である。東壁にカマドが備わり、南東隅には貯蔵穴とみられるP1が確認された。出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃を中心とした時期の遺構と考えられる。

(今野)

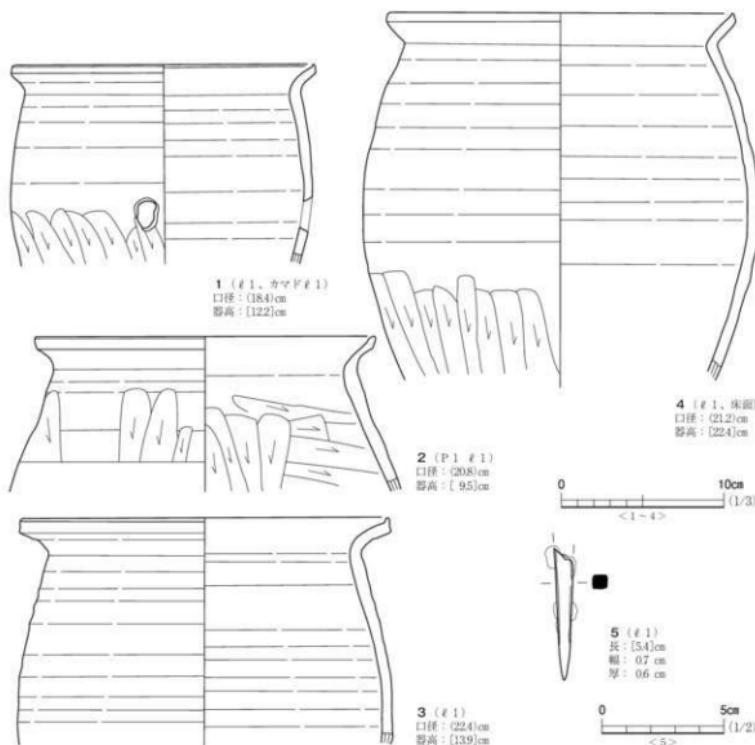


図26 6号住居跡出土遺物

7号住居跡 S I 7

遺構 (図27・28、写真12)

調査区中央付近のI・J 16グリッドに位置し、標高34.7m付近の平坦地に立地している。L III上面において検出した。重複する遺構ではなく、北側に10号土坑が隣接する。また北西方向には、約5m離れて4号住居跡がある。平面形は隅丸方形で、規模は東西4.2m、南北4.0mである。南西隅から床面中央付近にかけては擾乱されている。残りの良い西壁を主軸とすると、その方位はN 7°Eを示す。周壁は45~60°の角度で立ち上がる。その遺存高は15~26cmで、北壁の残りが比較的良好。堆積土は3層に分けた。ℓ 1・2はL IIに似た黒褐色土および黑色土で締まりが弱く、自然堆積土と判断した。ℓ 3はL IV塊を主体とし、硬く締まっていたため、貼床構築土と考えている。床面は平坦に整えられ、その上面には踏み締まりが認められた。

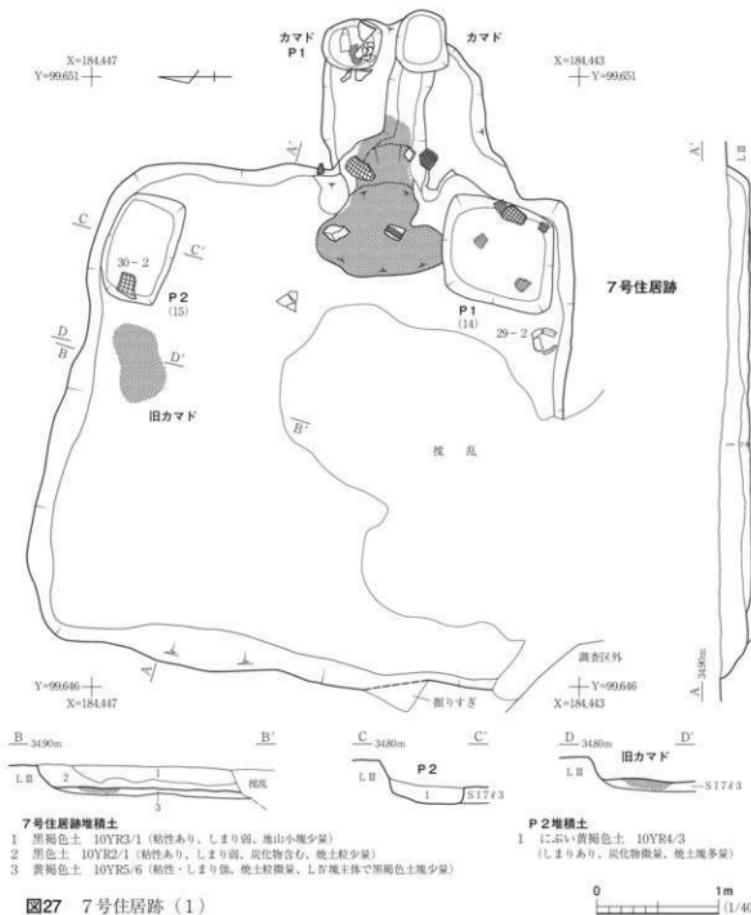


図27 7号住居跡（1）

東壁の中央からやや南寄りには、カマドが設けられている。袖部の先端から煙道を含めた全長は162cm、幅は115cmである。燃焼部の奥行きは52cm、幅は46cmである。燃焼部の底面は浅く窪み、焚口付近から煙道入口にかけては赤褐色に焼けて硬化していた。カマド両袖の構築土は遺存せず、掘り残されたL IVの高まりが残存するのみであった。煙道の長さは110cm、幅は35cm、深さは検出面から10cmほどである。煙道の先端には、煙道底面より20cm深い突出ピットがある。カマドの堆積土は、4層に分層した。 ℓ 1はL IIを主体とし、カマドの天井部が崩落した後の自然堆積土とみられる。 ℓ 2～4は焼土塊を多量に含むことから、おもに天井部および煙道の崩落土と考えられ

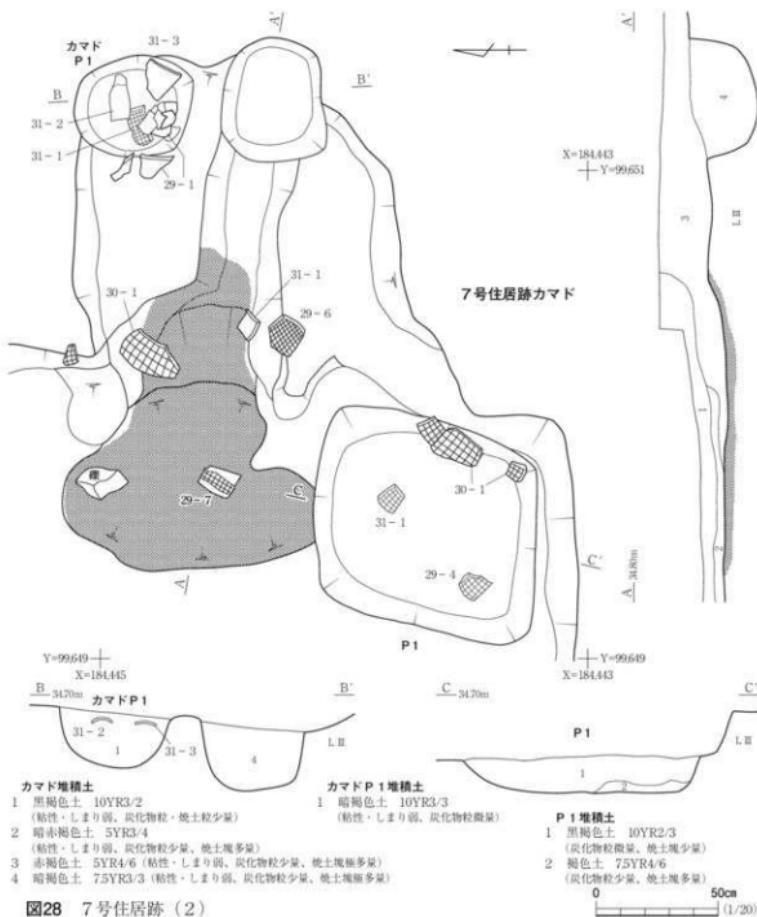


図28 7号住居跡（2）

る。また煙道の両脇には浅い掘り込みが認められ、煙出しピットの北側に隣接して、同規模のカマドP1が検出された。この状況から、煙道は付け替えられた可能性が高い。カマドP1からは図29-1の土師器甕や、図31-1～3の丸瓦など多くの遺物が出土しているため、人為的に埋められた可能性が高い。

カマドに向かって右側の住居跡の南東隅には、貯蔵穴とみられるP1がある。P1は長径92cm、短径84cmのやや歪んだ隅丸長方形で、床面からの深さは14cmである。P1のℓ1は、住居跡の堆積土と類似しているため、自然堆積土と判断した。ℓ2は大きな焼土塊を多量に含んでいることか

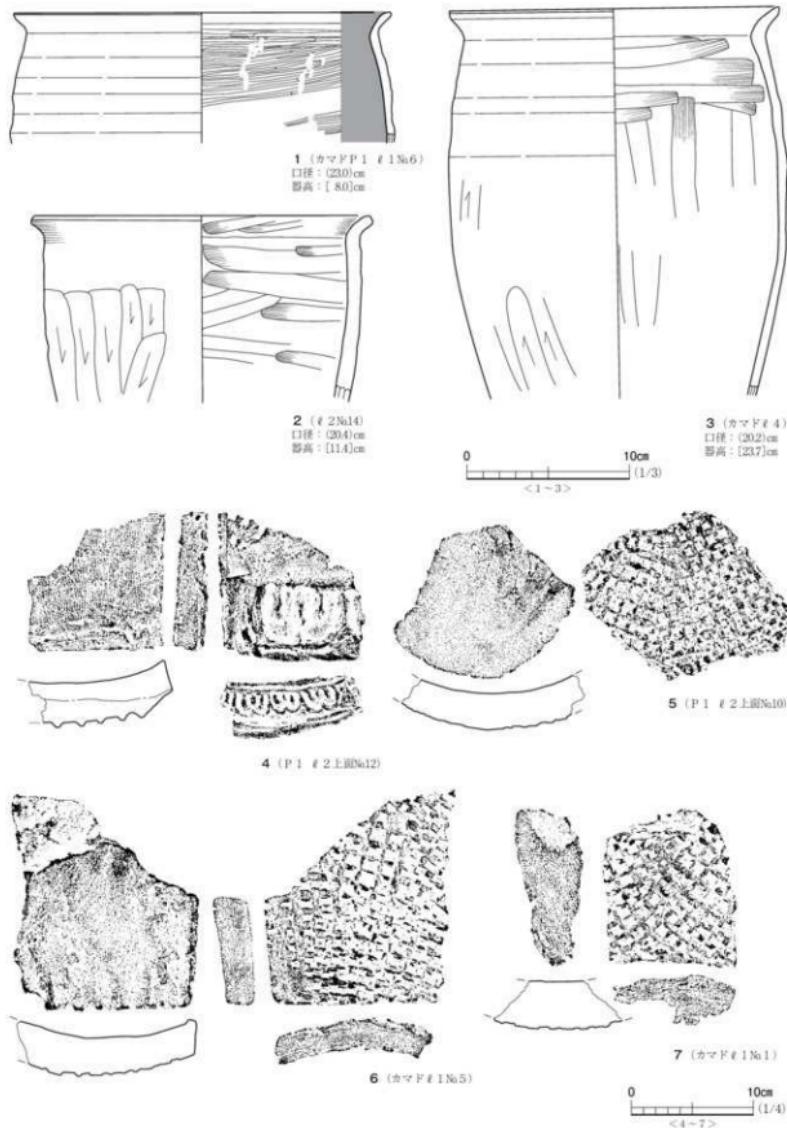


図29 7号住居跡出土遺物（1）



図30 7号住居跡出土遺物（2）

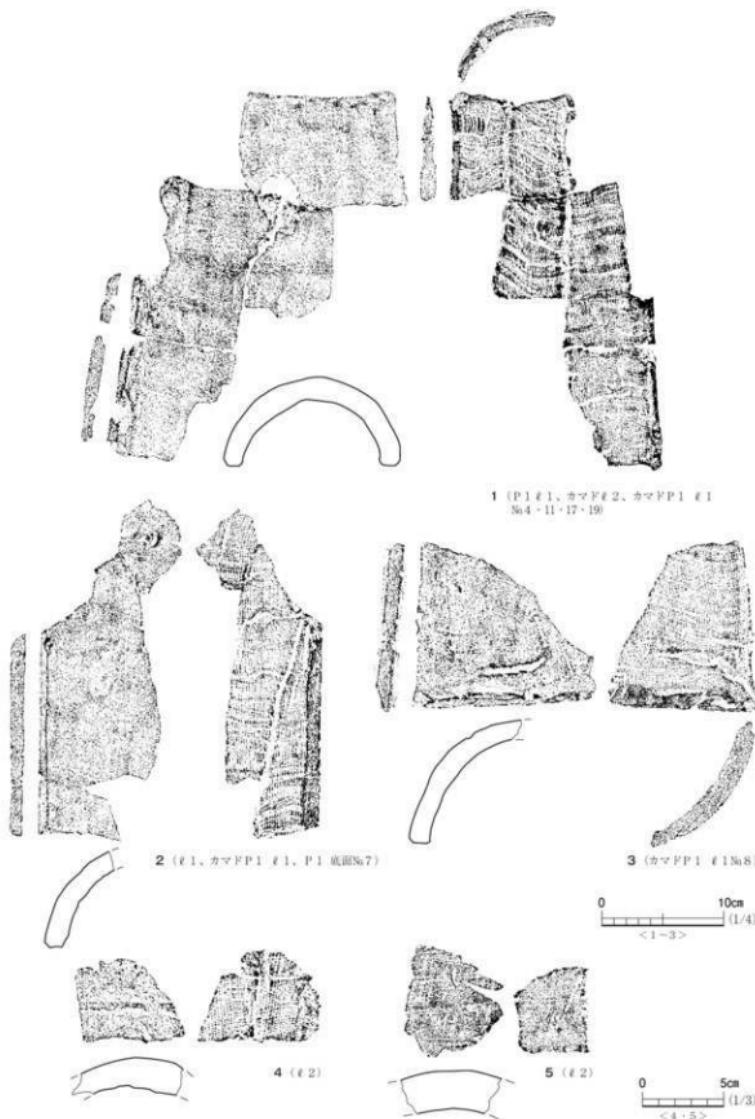


図31 7号住居跡出土遺物（3）

ら、カマドの構築土であったものがP 1内に入り込んだ可能性が高い。

また北壁中央からやや東寄りの床面では、赤褐色に被熱し、硬化した箇所が確認された。被熱した範囲は長径55cm、短径36cmの不整な楕円形で、北壁からは15cmほど離れている。これに隣接する北東隅にはP 2がある。P 2の平面形は隅丸方形で、長径90cm、短径56cm、床面からの深さは15cmである。P 2の堆積土は、焼土塊や炭化物粒を含んだにぶい黄褐色土で縮まりがあり、人為的埋土の可能性が高い。被熱範囲は旧カマドの火床面の痕跡、P 2は旧カマドに伴う貯蔵穴と考えている。なお、本遺構の内外から柱穴は確認されなかった。

遺 物 (図29~31、写真39)

本遺構からは土師器343点、須恵器28点、瓦24点、鉄滓34g、繩文土器28点が出土している。遺物は、カマドの燃焼部内やカマドP 1、貯蔵穴としたP 1の堆積土中から出土したものが多い。図29-1は、ロクロ成形の土師器鉢である。頸部の括れは緩く、口縁部が直線的に開く。外面にはロクロ目が明瞭に残り、内面には横方向のミガキを加えた後、黒色処理を施している。2は非ロクロの土師器甕で、口縁部に最大径がある。口縁部は短く外折し、口唇部には丸味がある。胴部外面には縱方向のヘラケズリが、内面には横方向のヘラナデが施されている。3はロクロ成形による長胴の土師器甕である。胴部上位に最大径があり、頸部でくの字に外折し、口唇部は立っている。外面の胴部下半に縱方向のヘラケズリが、内面の胴部上半にヘラナデが施されている。また3の外面には薄く粘土が付着し、二次的な被熱のため橙色に変色している。

図29-4は軒平瓦である。今回の調査では1点のみ出土した。瓦当面と頸部に、有茎弁蓮華文が型押しされている。凹面には布目が、凸面には格子状タタキ目が見られる。図29-5~図30-6は平瓦である。いずれも凹面に布目が、凸面には格子状タタキ目が認められる。図30-1は両側面が遺存し、その幅は27.2cmである。図30-1・2などの色調が灰色であるのに対し、図29-5~7・図30-5は黄褐色や赤橙色を呈している。図31-1~5は丸瓦である。いずれも凸面にナデが施され、凹面には布目が残されている。1・2の内面には輪積み痕が観察され、側面は面取りされている。1は両側面が部分的に遺存し、その幅は14.5cmである。

ま と め

東西4.2m、南北4.0mの隅丸方形を呈する壺穴住居跡である。東壁にカマドがあり、貯蔵穴を備えている。カマドと貯蔵穴は、北壁から東壁に造り替えられた可能性が高い。また、カマド周辺と貯蔵穴からは瓦が多数出土している。遺構の年代は、出土遺物の特徴から9世紀前半と考えられる。

(今野)

8号住居跡 S I 8

遺 構 (図32、写真13)

調査区中央から西に寄ったE 14グリッドに位置し、標高35.0m付近の平坦地に立地している。L IV上面で検出したが、調査区際における土層観察の結果、L III上面から掘り込まれていることを

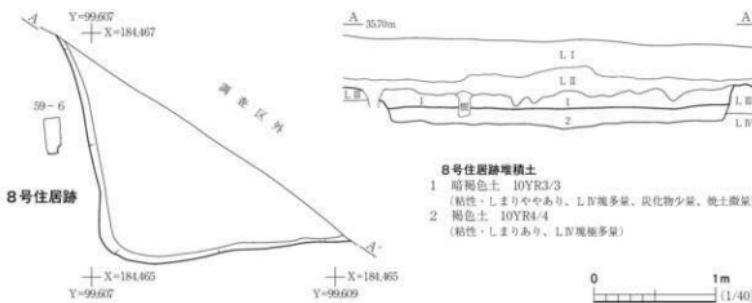


図32 8号住居跡

確認した。重複する遺構はなく、北西側に5・6号建物跡が隣接している。調査区外に延びるため一部の調査に留まつたが、平面形は方形と推定される。調査した範囲は東西2.0m、南北2.0mである。西壁を仮に主軸とすると、主軸方位はN 10°Wを示す。土層断面に見られる周壁の遺存高は25cm前後あり、床面から急角度で立ち上がっている。堆積土は2層に分けた。 ℓ 1はL.IV塊を多量に含み、やや縮まりがあるため人為的な埋土の可能性が高い。 ℓ 2は、L.IV塊を多量に含む貼床構築土である。その上面は平坦に整えられ、踏み縮まりが認められた。なお、調査範囲においては柱穴、カマドの痕跡などは確認できなかった。また、土師器と瓦の細片が1点ずつ出土しているが、細片のため図示しなかった。西壁の近くからは、図59-6の丸瓦が出土している。

まとめ

カマドや貯蔵穴、柱穴は確認されなかったが、貼床が認められるため堅穴住居跡として扱った。出土遺物が乏しいため時期は不明だが、周辺には平安時代の遺構が多く存在するため、本遺構も近い時期の遺構である可能性が高い。

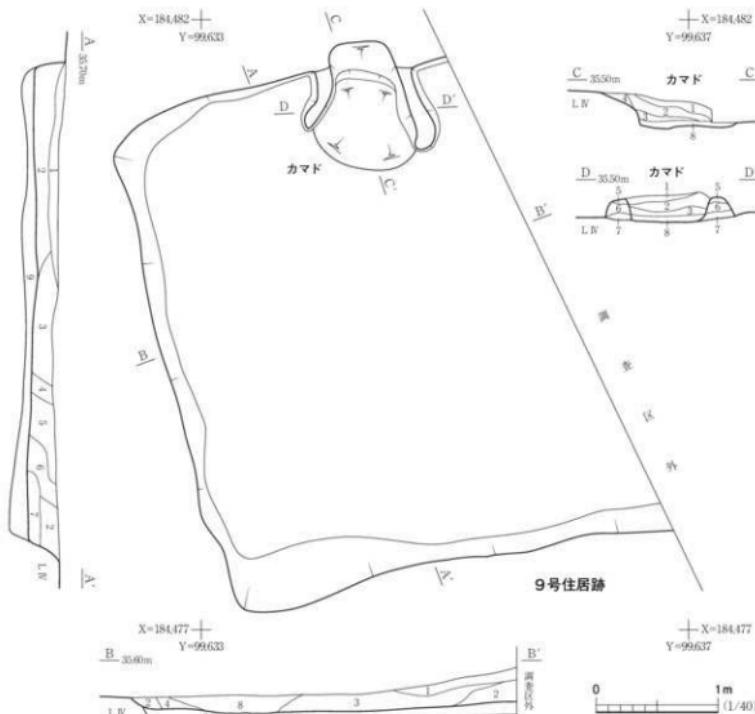
(今野)

9号住居跡 S 19

遺構 (図33、写真14)

調査区の中央部、H 12・13グリッドに位置し、標高35.4mの平坦地に立地する。検出面はL.IV上面である。重複する遺構はなく、北側に3号溝跡、南側には3・10・11号住居跡が位置する。遺構の東半分が調査区外のため詳細は不明であるが、全て検出された西壁が3.9mであることから、一辺4mほどの方形と推定される。西壁を主軸とすると、その方位はN 16°Wを示す。周壁の立ち上がりは、北壁がほぼ垂直であるのに対し、西壁と南壁は比較的緩やかである。周壁の遺存高は10~30cmである。堆積土は9層に分層した。このうち ℓ 1は、堆積状況から自然堆積土と考えられる。 ℓ 2~8はL.IV粒・塊が多く混入する、あるいは礫や細かい鉄滓が非常に多く認められたことから、人為的な埋土と思われる。 ℓ 9は貼床の構築土である。

住居内の施設として、北壁にカマド1基を確認した。燃焼部のみが検出され、煙道は遺存してい



9号住居跡堆積土

- | | |
|--------------------------------------|---|
| 1 黒色土 10YR2/1 (しまり弱、粘土粒・L.IV粒含む) | 1 揚灰色土 10YR4/1 (しまり弱、粘土粒含む) |
| 2 暗褐色土 10YR3/3 (しまり弱、粘土粒多量、L.IV粒含む) | 2 赤褐色土 25YR4/8 (しまりややあり、粘土粒含む、粘土塊多量) |
| 3 褐褐色土 10YR4/4 (しまり弱、褐褐色土塊含む) | 3 褐色土 10YR4/6 (しまり弱、粘土粒少量) |
| 4 にふい・黄褐色土 10YR5/4 (しまりややあり、L.IV塊含む) | 4 揚褐色土 10YR3/4 (しまり弱、L.IV塊少量) |
| 5 暗褐色土 10YR3/3 (しまりややあり、L.IV粒多量) | 5 揚褐色土粘質土 10YR3/4 (しまりややあり、白色粘土多量、小塊含む) |
| 6 黑褐色土 10YR2/3 (しまりややあり、L.IV粒多量) | 6 揚褐色土 10YR3/4 (しまりややあり、粘土粒少量、L.IV塊含む) |
| 7 黑褐色土 10YR3/2 (しまりややあり、白色粘土・小塊多量) | 7 揚灰色土 10YR4/1 (しまりややあり、炭化物少量、L.IV塊含む) |
| 8 暗褐色土 10YR3/4 (しまり弱、白色粘土・小塊多量) | 8 揚褐色土 10YR3/3 (しまり弱、粘土粒含む、L.IV塊少量) |
| 9 黑褐色土 10YR3/2 (しまりややあり、L.IV塊含む) | |

図33 9号住居跡

ない。燃焼部の規模は幅が85cm、奥行きは57cmあり、住居壁から30cmほど張り出す。袖部は、左袖が長さ45cm、幅20cm、高さ15cmで、右袖は長さ70cm、幅20cm、高さ20cmである。燃焼部底面および両袖の内側に、焼土面は認められなかった。カマド内堆積土は8層に分層した。このうち ℓ 1～7が袖部の構築土である。 ℓ 1～3は燃焼部に堆積し、袖の構築土と近い土質をしており、カマドの天井部からの崩落土と考えられる。 ℓ 4は燃焼部の奥壁際に堆積する暗褐色土である。 ℓ 8は燃焼部の床面上を覆っており、焼土粒が含まれるが、天井崩落以前の自然堆積土と考えられる。なお、調査範囲においては貯蔵穴や柱穴などは確認されなかった。

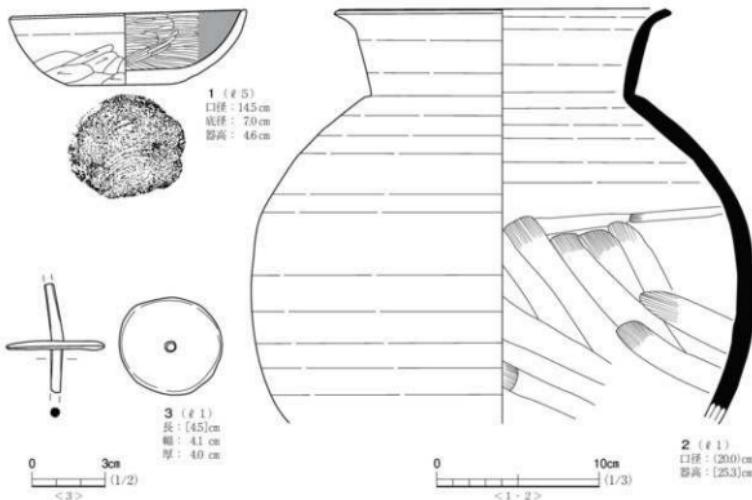


図34 9号住居跡出土遺物

遺 物 (図34、写真3)

本遺構からは土師器123点、須恵器104点、鉄製品1点、鐵滓956gが出土した。いずれも堆積土中からの出土であり、住居に伴う遺物は認められない。図34-1はロクロ成形の土師器杯である。器壁が厚く、底部の成形が不十分なためか一見すると丸底にも見える。体部は内清気味に立ち上がる。体部下半から底部にかけての手持ちヘラケズリによる再調整が施されるが、底面にはわずかに切り離しの糸切り痕が確認できる。内面はミガキ後に黒色処理が施されている。2は胴部下半から底部を欠損した須恵器の甕である。堆積土中に破片が散らばった状態で出土した。内外面ロクナデを基本とし、内面胴部下半は斜め方向のヘラナデが施される。3は鉄製紡錘車である。紡輪は薄い円盤状で、軸の断面形は円形となっている。両端を欠損するため、全体の長さは不明である。

ま と め

東側が未検出であるが、一辺4m前後の方形と推定される堅穴住居跡である。住居内堆積土の一部には礫や細かい鐵滓が非常に多く含まれており、人為的に埋められた可能性が考えられる。北壁にカマドが備わり、柱穴および貯蔵穴は検出されなかった。本遺構に伴う遺物は確認できなかったが、堆積土の出土遺物から、9世紀前半に機能した遺構と考えられる。

(神林)

10号住居跡 S I 10

遺 構 (図35、写真15)

調査区の中央部、G・H 13グリッドに位置し、標高35.3mの平坦地に位置する。L IV上面において検出したが、L III上面から掘り込まれていることを、調査区際の土層断面で確認した。重複す

る遺構は認められず、北東側に9号住居跡が、南東側に3・11号住居跡が位置している。

平面形は、大半が調査区外のため判然としないが、方形を基調とするものと考えられる。規模は検出された部分で東壁3.4m、北壁1.8mである。主軸方位はN 6° Eを示す。周壁は床面から30～40°の緩い立ち上がりで、部分的に崩落したのか、確認できた本遺構の上端は不規則である。周壁の遺存高は床面から30cmであるが、土層断面で確認したℓ 1上面から床面までの深さは、最も深いところで54cmある。

住居内堆積土は、6層に分層した。ℓ 1～3はL IIに近似する暗褐色土および黒褐色土である。堆積状況から自然堆積土と思われる。ℓ 4は焼土粒や炭化物粒を含む自然堆積土と判断される。ℓ 5・6は貼床構築土である。カマド前の床面には、踏み締まりによって形成されたと思われる硬化面が認められた。

住居内の施設はカマドの煙道と小穴2基を検出した。カマドの煙道は東壁の中央からやや南寄りに位置する。袖部や火床面の痕跡は一切確認されなかったことから、カマドの燃焼部は破壊されたものと考えられる。煙道の長さは130cm、幅は30cmである。本来はトンネル状に掘られていたと想定されるが、天井部は崩落している。煙道の底面は、燃焼部側から煙出しに向かって深くなっている。深さは煙出し部分で40cmを測る。カマド内堆積土は6層に分層した。このうちℓ 1・2は燃焼部が存在したと思われる部分に、ℓ 3～6は煙道部に堆積している。ℓ 1は白色粘土塊や焼土塊が含まれる。ℓ 2は黒褐色土でわずかに焼土粒が含まれる。ℓ 1・2に含まれる白色粘土塊や焼土粒は、周辺の住居跡においてカマド構築材として使用されている。このことから、ℓ 1・2はカマドを壊した後の埋土と判断した。ℓ 3・4は比較的の地山に近い土質をしており、煙道の天井部や煙面からの崩落土と考えられる。ℓ 5・6は煙道先端部に堆積する炭化物を含む黒色を基調とした土である。

P 1は北東隅に位置する。平面形は東西方向に長軸をもつ橢円形である。位置と形態から貯蔵穴と考えられる。規模は東西100cm、南北85cm、深さ25cmである。堆積土は2層である。ℓ 1は地山粒を多く含む黒褐色土である。壁面の崩落土と周辺からの流入土とみられる。ℓ 2は底面を覆うように堆積する褐色土である。カマドの構築土とみられる多量の粘土塊と、炭化物・焼土粒・黒色土塊が含まれ、人為的な埋土と考えられる。P 2はP 1の西側に接しており、柱痕跡が認められたことから柱穴と思われる。柱穴の掘形は直径50cm、深さ50cmの円形と推定され、中央の柱痕跡は直径20cmである。柱痕跡の底面には、地山がわずかに産み硬化したいわゆる「柱の当たり」が確認された。堆積土は3層に分層した。ℓ 1は柱痕跡であり、炭化物を多量に含む。ℓ 2・3は掘形埋土で、L IVに近似した塊が混ざりやや締まりがあった。

遺物(図35)

本住居跡からは、土師器42点、須恵器2点、カマドの支脚1点、鉄滓52gが出土しているが、ほとんどが細片であり、図示できたのは土製支脚のみである。図35-1の土製支脚は、カマドのℓ 1から出土した。ℓ 1はカマド解体後の埋土とみられ、カマドで使用された土製支脚が遺棄さ

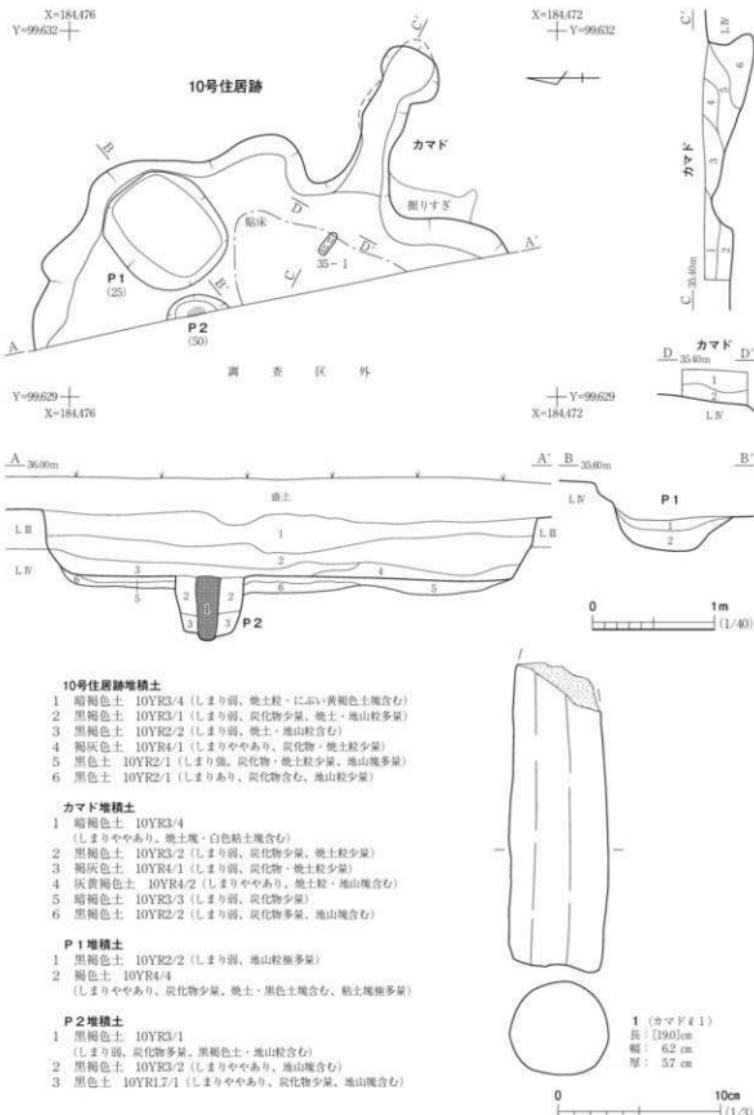


図35 10号住居跡・出土遺物

れたものと思われる。支脚は、粘土塊を伸ばして棒状に成形したものである。二次的な熱を受けたことによる劣化が著しく、上端部を欠損しており、調整等も不明である。

まとめ

本住居跡は、一部のみの検出であるが、方形の堅穴住居跡と推定される。東壁にカマドの煙道のみ遺存しており、燃焼部は人為的に破壊されていた。また、その際に出土した土は燃焼部や貯蔵穴の埋め戻しに使用されていた。カマドを埋めた土から土製支脚が出土しており、カマド解体時に使用していた支脚を遺棄したと考えられる。P2は主柱穴と思われ、柱痕跡も確認された。周辺に平安時代の遺構が多くあることから、本遺構も近い時期と考えている。
(神林)

11号住居跡 S I 11

遺構 (図36、写真16)

11号住居跡は、調査区中央部のH 13・14グリッドに位置する。標高35.3mの平坦地に立地する。

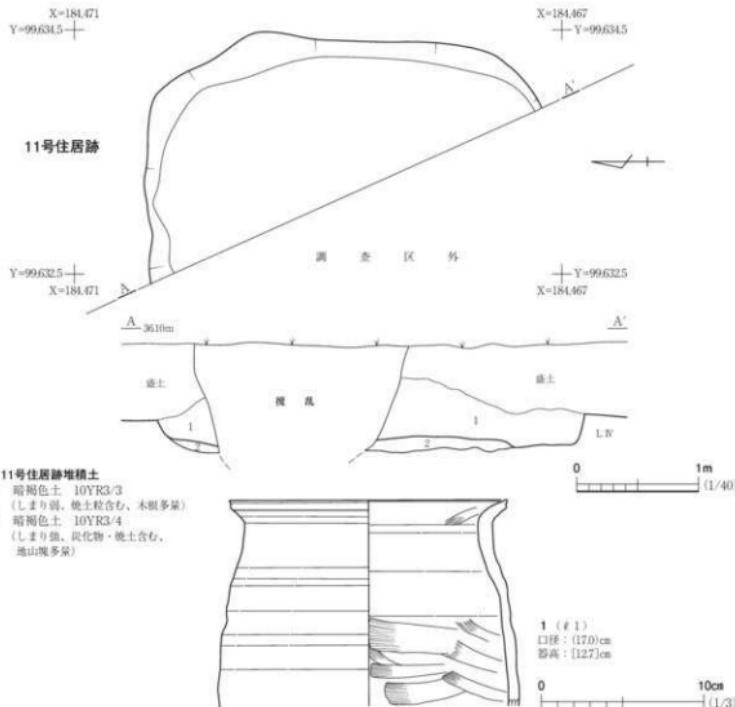


図36 11号住居跡・出土遺物

遺構検出面はLⅣ上面である。木の根等による搅乱が著しく、遺存状態は非常に悪い。重複する遺構はなく、東側に3号住居跡が、北西側に10号住居跡が位置する。大半が調査区外に延びているため判然としないが、平面形は隅丸方形もしくは楕円形と推定される。規模は検出された部分で南北3.2m、東西2.0mである。周壁は南側では垂直に近く、東・北壁は比較的緩い角度で立ち上っている。周壁の遺存高は床面より30cmである。

住居内堆積土は2層に分層した。 ℓ 1は焼土粒を含む暗褐色土で遺構全体を覆っている。 ℓ 2は掘形底面上で部分的に認められた土である。地山塊を多量に含んだ暗褐色土で、締まりが非常強いことから貼床構築土と判断した。床面は貼床の有無によって10cmほどの高低差が認められる。なお調査範囲においてカマドや小穴といった住居内の施設は確認されなかった。

遺 物 (図36)

本住居跡からは土師器35点、須恵器4点が出土している。図36-1はロクロ成形の土師器甕である。胴部の張りが弱く、頸部がくの字に屈折して口唇部が上につまみ出される器形である。外面はロクロ目が顕著に見られ、内面には横方向のヘラナデが施されている。

ま と め

本遺構は大半が調査区外に延び、搅乱の影響を強く受けているが、貼床を確認したことから堅穴住居跡と判断した。遺物が少なく詳細は不明であるが、周辺には平安時代の遺構が多くあることから、本遺構も近い時期であると考えている。

(神林)

第3節 掘立柱建物跡

1号建物跡 S B 1

遺 構 (図37、写真17)

調査区北寄りのE 8グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。検出面は、LⅢ上面である。調査区際にあることから、検出された柱穴はP 1・2の2基のみであった。P 3としたものは、P 2の柱材を抜き取る際に掘られた穴と考えられる。柱穴の平面形や規模、堆積土からみて掘立柱建物跡の可能性が高いため、本節で報告する。重複する遺構は確認されず、周囲には2・4号土坑がある。また南に12m離れて4号建物跡がある。P 1・2の平面形は隅丸長方形で、いずれも南北に長い。柱間は2.3mである。柱の当たりを結んだ線を主軸とすると、その方位はN 2°Wを示す。

P 1は、長径95cm、短径85cmである。底面はL Vの上面に達し、平坦である。壁は垂直に立ち上がり、検出面からの深さは90cmである。堆積土は11層に分けた。 ℓ 1・2はL IIに似た締まりと粘性が弱い堆積土で、柱材を抜き取った後の人為的な埋土である可能性が高い。特に ℓ 1からは、図44-4の瓦片や直径10~25cm大の自然礫が複数出土している。 ℓ 3~11はL III・IV塊を含むものが多く、締まりがあり、おおむね水平に堆積しているため掘形の埋土とみられる。このうち ℓ 9

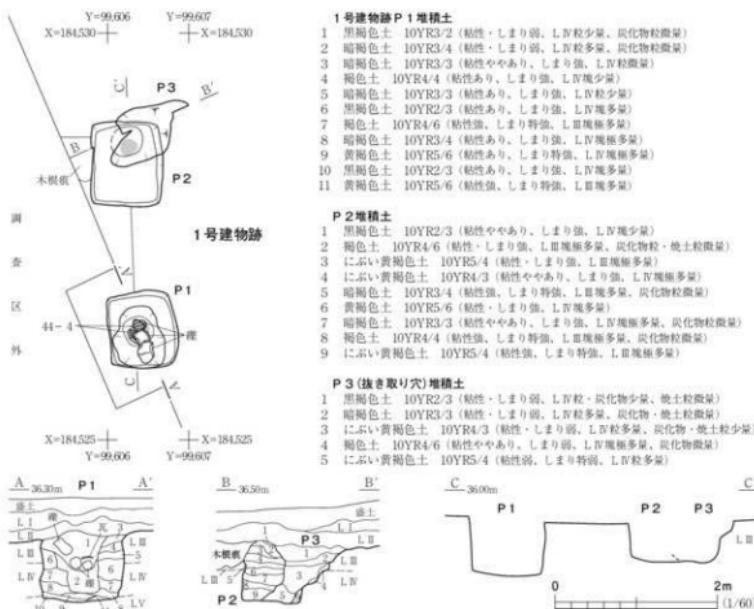


図37 1号建物跡

の上面では、円形に鉄分が沈着して赤くなり、周囲より硬く締まった柱の当たりが確認された。柱の当たりの直径は26cmである。

P 2は、長径104cm、短径87cmである。掘り込みはLVまでは達せず、底面はおおむね平坦である。壁は垂直に立ち上がり、検出面からの深さは77cmである。柱の当たりは底面の北寄りで認められた。その平面形は円形を呈し、直径は22cmである。堆積土はいずれもL III・IV塊を含み、締まりがあるため掘形の埋土とみられる。P 1とP 2の柱の当たりには7cmの標高差があり、P 2の方が高い。P 3とした柱材の抜き取り穴の平面形は不整形で、その規模は長径118cm、短径70cmである。P 2の北東隅の上端を壊し、柱の根元に向かって斜めに掘られている。抜き取り穴の堆積土は、いずれも締まりが弱くL IV粒を多く含み、人為的な埋土の可能性が高い。

遺物 (図44)

本遺構の柱穴からは、土師器71点、須恵器12点、瓦2点、鉄滓323gが出土している。口クロ成形の土師器杯が目立つが、細片のため図示できなかった。図44-4は平瓦である。側面にはヘラ切りの痕跡が認められ、凹面に布目が、凸面に格子状タタキ目が見られる。瓦の色は浅黄褐色である。

まとめ

掘立柱建物跡のものである可能性が高い大型の柱穴2基を調査した。柱材は、P 1・2とも抜き

取られた痕跡が見られた。柱の当たりが認められ、柱間は2.3mである。出土遺物の年代観から、本遺構は9世紀中葉頃のものと考えられる。

(今野)

2号建物跡 S B 2

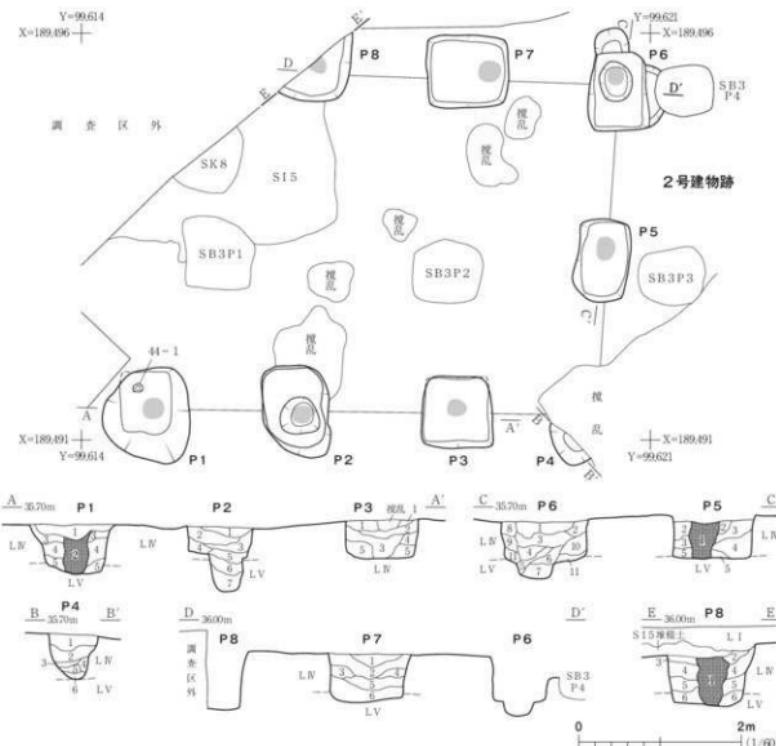
遺構(図38・39、写真18)

調査区北寄りのF・G 11グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。検出面は、L IV上面である。本遺構のP 6と3号建物跡のP 4が重複し、本遺構の方が古いことを検出時に確認した。また、本遺構のP 8と5号住居も重複し、本遺構の方が古いことを土層断面で確認している。調査区際にあることから全体を調査することはできなかったが、本遺構は東西3間以上、南北2間の掘立柱建物跡である。またP 4は搅乱され、掘形の一部のみが遺存していた。

本遺構の規模は、東西が5.6m以上と推定され、南北は4.2mである。東西の柱列に直交する線を主軸とすると、その方位はN 3° Eを示す。柱間はP 1-P 2、P 2-P 3間が1.9mである。P 3-P 4間は、P 4の遺存状態が悪いため不明だが、1.8m前後と推定される。P 4-P 5間は2.1m前後であろう。P 5-P 6間は2.1m、P 6-P 7は1.6m、P 7-P 8は2.1mである。

柱穴の平面形は、方形のものが多い。P 5のようにL Vの上面まで掘削するか、L Vを若干掘り込んで底面としている柱穴が目立ち、底面は平坦なものが多い。中にはP 2・6のように、柱を据える部分が一段下がるものがある。P 4を除く柱穴の底面では、円形に鉄分が沈着して赤くなり、周囲より硬く締まった柱の当たりが確認された。柱の当たりは円形を呈し、その直径は20~30cmである。柱穴の壁は、底面から垂直に立ち上がりっている。例外的に、P 1・2の上端の平面形は椭円形に近く、北側の壁の立ち上がりが緩くなっている。これは柱材を切り取る、あるいは抜き取る際に掘削されたためであろう。P 6には、長方形の掘形から張出すような2箇所の掘り込みが認められる。これも、柱材の抜き取り痕と考えている。柱穴の規模は長径が88~118cm、短径が60~107cmである。検出面からの深さは最も深いP 2で80cm、最も浅いP 3で47cmあり、底面の標高差は25cmである。

P 1の堆積土は5層に分けた。 ℓ 1は、 ℓ 3~5と異なりL IV塊を含まないため、柱材を切り取るために掘り窪めた穴に溜まった自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は柱痕跡とみられ、締まりが弱く、やはりL IV塊を含まない。 ℓ 3~5は掘形の埋土とみられ、L IV塊を多量に含み締まりがある。P 2には、柱痕跡は認められなかった。P 2の堆積土は、L IV・V塊を含むものの掘形埋土に比べると締まりが弱く、柱材を抜き取った後の人の為的埋土と考えている。P 3の堆積土は、 ℓ 1~3が柱材抜き取り後の人の為的埋土、硬く締まった ℓ 4・5が本来の掘形の埋土と判断した。P 4の堆積土はいずれも人の為的埋土で、P 4の位置からみて、柱の抜き取り穴を埋めた土である可能性が高い。P 5の ℓ 1は柱痕跡、 ℓ 2~5は掘形の埋土とみられる。P 5には、柱の抜き取り穴、切り取り穴とも確認されなかった。P 6の ℓ 1~7は柱抜き取り後の人の為的埋土、 ℓ 8~11が掘形の埋土とみられる。P 7にも柱痕跡は認められず、 ℓ 1はL IV塊が混入しないため、自然堆積土と考えられ

**2号建物跡 P1堆積土**

- 褐褐色土 10YR3/4
(粘性ややあり、L.IV粒多量、焼土粒微量)
- 褐色土 10YR4/4
(粘性ややあり、しまりやあり、L.IV粒多量)
- 褐色土 10YR4/6
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量、焼土粒微量)
- 褐褐色土 10YR3/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量)
- 褐色土 10YR4/6
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量、焼土粒微量)

P2堆積土

- 褐色土 10YR4/6
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量)
- にふい・黄褐色土 10YR5/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量、L.III粒多量)
- 褐色土 10YR4/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量)
- 褐褐色土 10YR3/3
(粘性ややあり、しまりあり、L.II・IV粒多量)
- 褐褐色土 10YR3/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒少量)
- 褐褐色土 10YR3/3
(粘性・しまりややあり、L.IV・L.V粒多量)
- にふい・黄褐色土 10YR5/3
(粘性・しまり弱、L.IV粒多量、L.V粒多量)

P3堆積土

- 褐褐色土 10YR3/3
(粘性・しまりややあり、L.IV粒少量、炭化物粒・焼土粒微量)
- 褐色土 10YR4/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量)
- 褐色土 10YR3/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量、炭化物粒・焼土粒微量)
- にふい・黄褐色土 10YR5/4
(粘性ややあり、しまりあり、L.IV粒多量、炭化物粒微量)

P4堆積土

- 褐褐色土 10YR3/3
(粘性・しまり弱、L.IV粒多量、炭化物粒・焼土粒微量)
- 褐褐色土 10YR3/4
(粘性・しまり弱、L.IV粒多量、炭化物粒・焼土粒微量)
- 褐褐色土 10YR3/3
(粘性・しまり弱、L.IV粒少量、炭化物粒・焼土粒微量)
- 灰褐色土 10YR4/2
(粘性・しまり弱、L.IV粒多量)
- 黄褐色土 10YR5/6
(粘性あり、しまりややあり、L.IV粒多量)
- 明黄褐色土 10YR6/8
(粘性・しまりあり、L.III粒少量)

P5堆積土

- 褐褐色土 10YR3/4
(L.IV粒少多量、炭化物粒微量)
- 褐褐色土 10YR3/3
(粘性ややあり、しまりあり、L.IV粒多量、焼土粒微量)
- 褐色土 10YR4/4
(粘性ややあり、しまりあり、しまりあり、L.IV粒多量)
- にふい・黄褐色土 10YR4/3
(粘性ややあり、しまりあり、L.IV粒多量、L.V粒・炭化物粒微量)
- にふい・黄褐色土 10YR5/4
(粘性・しまりややあり、L.IV粒多量、L.IV粒微量)

図38 2号建物跡（1）

P 6堆積土

- 1 にい・黄褐色土 10YR5/4
(粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量、炭化物・焼土粒微量)
2 黄褐色土 10YR4/6 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
3 にい・黄褐色土 10YR4/3 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
4 黄褐色土 10YR3/4 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
5 にい・黄褐色土 10YR4/4
(粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量、炭化物粒微量)
- 6 黄褐色土 10YR4/4 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
7 黄褐色土 10YR4/6 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
8 黄褐色土 10YR5/6 (粘性あり。しまり特強。L III塊多量)
9 黄褐色土 10YR4/6 (粘性あり。しまり特強。L IV塊多量)
10 暗褐色土 10YR3/4 (粘性あり。しまり特強。L IV塊多量)
11 黄褐色土 10YR5/6 (粘性あり。しまり特強。L III塊少量)

P 7堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/2
(粘性・しまりややあり。L IV粒・炭化物粒多量、焼土粒少量)
2 黄褐色土 10YR3/3 (粘性ややあり。しまりあり。L IV塊多量)
3 にい・黄褐色土 10YR4/3
(粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量、焼土粒少量)
4 黑褐色土 10YR3/4 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
5 にい・黄褐色土 10YR5/4 (粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量)
6 黄褐色土 10YR3/4
(粘性ややあり。しまり弱。L IV塊多量、焼土粒少量)
- 1 黒褐色土 10YR2/3 (粘性・しまり弱。L IV粒多量)
2 黄褐色土 10YR5/8 (粘性・しまり強。黒褐色土塊多量)
3 にい・黄褐色土 10YR5/4 (粘性やや強。しまり強。L IV塊多量)
4 黄褐色土 10YR3/3
(粘性やや強。しまり強。L IV塊多量、炭化物・焼土粒少量)
5 黄褐色土 10YR4/6 (粘性やや強。しまり強。L IV塊多量)
6 暗褐色土 10YR3/4 (粘性やや強。しまり強。L IV・V塊多量)

図39 2号建物跡（2）

る。 ℓ 2～6は柱抜き取り後の人為埋土と判断した。P 8には柱痕跡が認められ、 ℓ 2～6は掘形の埋土とみられる。以上のように堆積土から判断して、柱材が切り取られたとみられるもの(P 1)、抜き取られたもの(P 2～4・6・7)、いずれの痕跡も確認できなかったもの(P 5・8)がある。

遺物(図44)

本遺構からは、土師器42点、須恵器10点、鉄滓423gが出土している。図44-1は、土師器杯である。P 1の底面から伏せられた状態で出土した。平底の底部からやや内湾しながら開く器形である。底面には回転糸切痕が残り、体部下端に手持ちヘラケズりが見られる。内面にはヘラミガキ後、黒色処理が施されている。また、口縁から垂れたような黒い煤状の付着物が観察されることから、1は燈明皿として使用された可能性がある。同図3は、大型の須恵器甕の口縁部片である。P 5の ℓ 1から出土した。口唇部直下には稜が付き、その下位には櫛描きによる波状文が三段描かれている。

まとめ

東西3間(5.6m)以上、南北2間(4.2m)の掘立柱建物跡である。3号建物跡および5号住居跡と重複し、最も古い。柱穴は大型で、平面形は方形を基調としている。柱材が、切り取りまたは抜き取られた痕跡がある柱穴が多く見られた。P 1の底面から出土した図44-1の年代観から、9世紀前半に建てられた可能性が高い。

(今野)

3号建物跡 S B 3

遺構(図40、写真19)

調査区北寄りのF・G 11グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。検出面は、L IV上面である。本遺構のP 4と2号建物跡のP 6が重複し、本遺構の方が新しいことを検出時に確認した。また、本遺構のP 1と5号住居跡が重複し、本遺構の方が古い。調査区際にあることから全体を調査することはできなかったが、東西2間以上、南北2間の掘立柱建物跡である。本遺構の規模は、東西が5.7m以上と推定され、南北は4.8mである。南北の柱列を主軸とすると、その方

位はN 3° Eを示す。柱間はP 1-P 2間が3.0m、P 2-P 3間が2.7m、P 3-P 4とP 4-P 5間は2.4mである。南北に比べ、東西方向の柱間が広い。

柱穴の平面形は、隅丸方形である。P 4の掘り込みはL Vの上面に達しているが、その他の柱穴の掘り込みはL IV中で止まっている。各柱穴の底面はおおむね平坦だが、P 5の底面は柱を据える部分が一段深んでいた。またP 1・4の底面では、柱の当たりが確認された。柱の当たりは円形を呈し、その直径はP 1が21cm、P 4が25cmである。柱穴の壁は、底面から垂直に近い角度で立ち上がりっている。例外的に、P 1の北側とP 3の東側の壁は立ち上がりが緩やかになっている。こ

3号建物跡 P 1堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/3 (粘性・しまり弱、L IV粒多量)
- 2 黄褐色土 10YR4/6 (粘性・しまりあり、L IV塊多量)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR5/6 (粘性・しまりあり、L IV塊多量)

P 2堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/3 (粘性・しまり弱、L IV塊・粒多量、炭化物粒・焼土粒微量)
- 2 にぶい黄褐色土 10YR5/3 (粘性・しまりややあり、L IV塊・粒多量)
- 3 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (粘性・しまりややあり、L IV塊・粒多量)
- 4 黄褐色土 10YR4/6 (粘性・じりややあり、L IV塊・粒多量)
- 5 黄褐色土 10YR5/6 (粘性ややあり、しまりあり、L IV塊・粒多量)

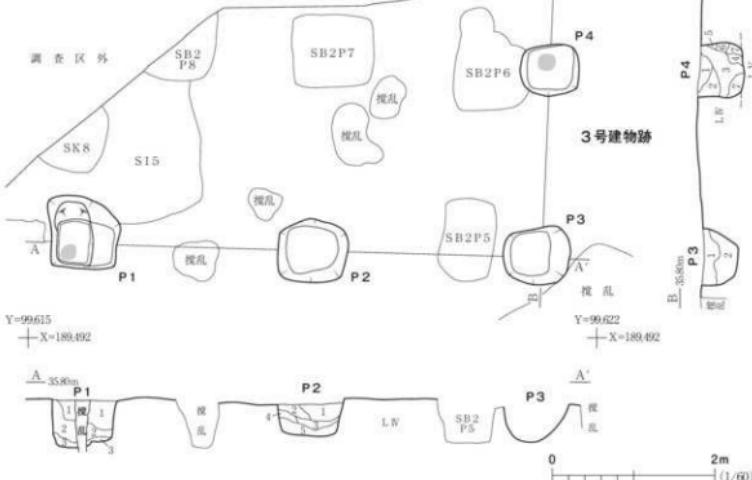


図40 3号建物跡

れは柱材を抜き取る際に掘削された痕跡であろう。柱穴の規模は、長径が69～90cm、短径が64～85cmである。検出面からの深さは最も深いP 4で62cm、最も浅いP 3で46cmあり、底面の標高差は15cmである。

柱穴の土層断面において、柱痕跡が確認できたものはなかった。P 1のℓ 1は、柱材を抜き取った後の人為的な埋土と考えている。縮まり・粘性ともに弱く、L IV粒を含んでいる。ℓ 2・3は縮まりがあり、L IV塊を多く含むため掘形の埋土と判断した。P 2もP 1同様に、ℓ 1が柱材の抜き取り穴、ℓ 2～5が本来の掘形内埋土とみられる。P 3の堆積土は、ℓ 1・2とも柱材抜き取り後の人為的な埋土と考えられる。P 4の堆積土は、ℓ 1～4が柱材の抜き取り後の人の為的な埋土、壁際にみられた硬く縮まったℓ 5～7が掘形内の埋土と判断した。P 5の堆積土は、いずれも柱抜き取り後の人為的な埋土とみられる。なお、本遺構からは土師器42点、須恵器4点、粘土塊1点、鉄滓198gが出土している。細片のため、図示できるものはなかった。土師器には、ロクロ成形の杯片が多く含まれる。

まとめ

東西2間(5.7m)以上、南北2間(4.8m)の掘立柱建物跡である。重複する2号建物跡より新しく、5号住居跡より古い。柱穴の平面形は隅丸方形で、その規模は2号建物跡より一回り小さい。柱痕跡が確認できた柱穴ではなく、柱材は抜き取られたものとみられる。重複関係から、9世紀前半の遺構と考えられる。

(今野)

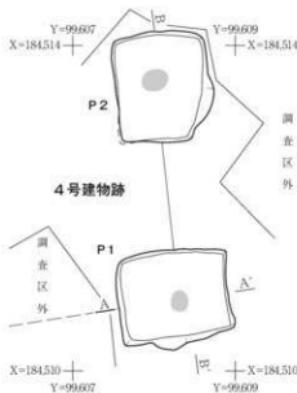
4号建物跡 S B 4

遺構(図41、写真20)

調査区北寄りのE 9グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。検出面は、L IV上面である。調査区際にあることから検出された柱穴は2基のみであったが、柱穴の平面形や規模、堆積土からみて掘立柱建物跡の可能性が高いため、本節で報告した。柱穴と直接は重複していないが、西側に隣接する6号住居跡は、本遺構と重複する位置関係にある可能性がある。また北に12m離れて1号建物跡がある。柱間は2.8mあり、柱の当たりを結んだ線を主軸とすると、その方位はN 5°Wを示す。

P 1・2とも、平面形は隅丸長方形である。P 1は東西方向に長く、P 2は南北に長い。このため、P 1が本遺構の南東隅の柱穴となる可能性がある。掘り込みはL Vに達し、底面はおおむね平坦である。また底面には、周囲より硬く縮まった柱の当たりが確認された。柱の当たりの平面形は梢円形で、その範囲はP 1が27×23cm、P 2が35×30cmである。P 1とP 2の柱の当たりには8cmの標高差があり、P 2の方が高い。壁はいずれも垂直に立ち上っている。

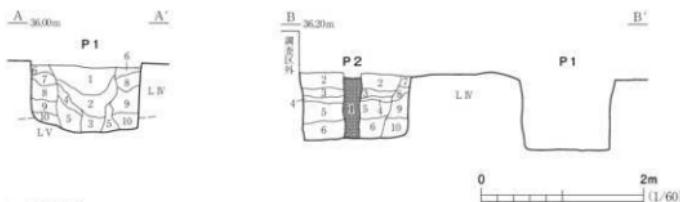
P 1は、長径136cm、短径115cm、検出面からの深さは85cmである。P 1の堆積土は10層に分けた。ℓ 1～3は縮まりが弱く、L IV塊を含まない。このため、柱材の抜き取り穴に自然堆積した土と考えている。ℓ 4・5はL IV塊を多量に含むものの縮まりが弱い。柱材を抜き取った際に、掘形

**4号建物跡 P 1 堆積土**

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (粘性ややあり。しまり弱、炭化物粒・焼土粒少量)
- 2 黒褐色土 10YR3/2 (粘性ややあり。しまり弱、炭化物粒微量)
- 3 暗褐色土 10YR3/3 (粘性なし。しまり弱)
- 4 暗褐色土 7.5YR3/3 (粘性ややあり。しまり弱、LIV塊多量)
- 5 褐色土 10YR4/4 (粘性なし。しまり弱、LIV塊多量)
- 6 にい黄褐色土 10YR5/4 (粘性・しまりあり。LIV塊微量)
- 7 褐色土 10YR4/6 (粘性・しまりあり。LIV塊微量)
- 8 暗褐色土 10YR3/3 (粘性・しまりあり。LIV塊微量)
- 9 黄褐色土 10YR5/6 (粘性・しまりあり。LIV塊微量)
- 10 褐色土 10YR4/6 (粘性・しまりあり。LIV塊微量)

P 2 堆積土

- 1 黒褐色土 10YR2/3 (LIV・V粒・炭化物粒微量、焼土粒少量)
- 2 暗褐色土 10YR3/4 (粘性弱、しまりやや強、LIV・V塊多量)
- 3 褐色土 10YR4/4 (粘性弱、しまりやや強、LIV・V塊少量)
- 4 黑褐色土 10YR3/2 (粘性やや弱、しまりやや強、LIV・V塊少量)
- 5 褐色土 10YR4/6 (粘性・しまり強、LIV・V塊微量)
- 6 暗褐色土 10YR3/3 (粘性強、しまりやや強、LIV・V塊少量)
- 7 にい黄褐色土 10YR5/4 (粘性・しまり強、LIV・V塊微量)
- 8 明黃褐色土 10YR6/6 (粘性・しまり強、LIV・V塊微量)
- 9 褐色土 10YR4/4 (粘性・しまり強、LIV・V塊微量)
- 10 暗褐色土 10YR3/4 (粘性・しまり強、LIV・V塊微量)

**図41 4号建物跡**

の埋土が崩落したものであろう。 ℓ 6～10はLIV塊を多量に含み、締まりがあり、おおむね水平に堆積していることから掘形の埋土とみられる。P 2は長径137cm、短径115cm、検出面からの深さは80cmである。堆積土は10層に分けた。 ℓ 1は柱痕跡とみられる。 ℓ 2～6はいずれもLIV・V塊を含み、締まりがあるため掘形の埋土と考えられる。また、 ℓ 7～10は、 ℓ 2～6よりさらに多量のLIV・V塊を含み、硬く締まっていた。このため、本遺構は建て替えが行われた可能性があり、 ℓ 7～10は古い段階の掘形埋土と判断した。

遺 物 (図44)

本遺構からは土師器7点、須恵器4点、鉄滓26gが出土している。図44-2は須恵器の鉢とみられる。頭部でくの字に外折し、口唇部が上につまみ出されている。

ま と め

掘立柱建物跡のものである可能性が高い大型の柱穴2基を4号建物跡とした。P 1・2とも、底面に柱の当たりが認められ、柱間は2.8mである。P 1には柱材を抜き取った痕跡が見られ、P 2には柱痕跡が遺存していた。またP 2の掘形埋土には新旧があり、本遺構は建て替えられた可能性がある。出土遺物に乏しく遺構の詳細な年代は不明だが、9世紀代のものと考えている。(今野)

5号建物跡 S B 5

遺構 (図42、写真21・22)

調査区の中央付近から西に寄ったD・E-13・14グリッドに位置し、標高35.0m前後の平坦地に立地している。L III上面において5基の柱穴を検出した。本遺構のP 5と1号特殊遺構が重複し、本遺構の方が古いことを検出時に確認している。また、6号建物跡が重複する位置関係にある。調査区際にあることから全体を調査することはできなかったが、東西2間以上、南北2間以上の掘立柱建物跡と推定される。本遺構の規模は、東西が3.4m以上、南北が4.8m以上と推定される。南北の柱列を主軸とすると、その方位はN 2°Wを示す。柱間はP 1-P 2間が1.8m、P 2-P 3間が1.6m、P 3-P 4間とP 4-P 5間はともに2.4mである。東西に比べ、南北方向の柱間が広い。

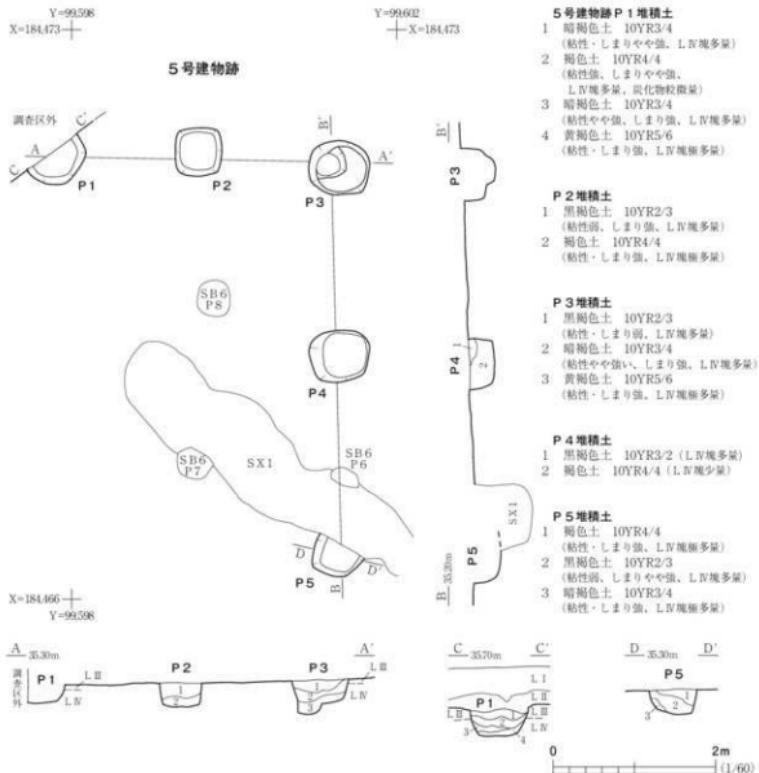


図42 5号建物跡

柱穴の平面形は、隅丸方形または楕円形である。各柱穴の底面は、皿状に浅く窪んでいる。例外的にP 3の底面は、柱を据えたとみられる部分が一段窪んでいた。柱の当たりは、いずれの柱穴からも確認されなかった。柱穴の壁は、底面から垂直に近い急角度で立ち上がっている。柱穴の規模は、長径が60～76cm、短径が57～63cmである。検出面からの深さは、最も深いP 3で37cm、最も浅いP 5で21cmあり、底面の標高差は18cmである。

柱穴の堆積土は、いずれもL IV塊を多く含み、縮まりがあるものが多いため人為的な埋土とみられる。柱穴の土層断面において、柱痕跡が確認されたものはなかった。このことから、本遺構の柱材は抜き取られた可能性がある。なお、本遺構からは土師器3点、須恵器1点、縄文土器1点が出土しているが、細片のため図示できるものはなかった。

まとめ

東西2間(3.4m)以上、南北2間(4.8m)以上の掘立柱建物跡である。重複する1号特殊遺構より古く、6号建物跡とも重複する位置関係にある。柱穴の平面形は隅丸方形または楕円形で、その規模は1～4号建物跡に比べ小さい。出土遺物に乏しく詳細な年代は不明だが、9世紀の遺構と考えられる。

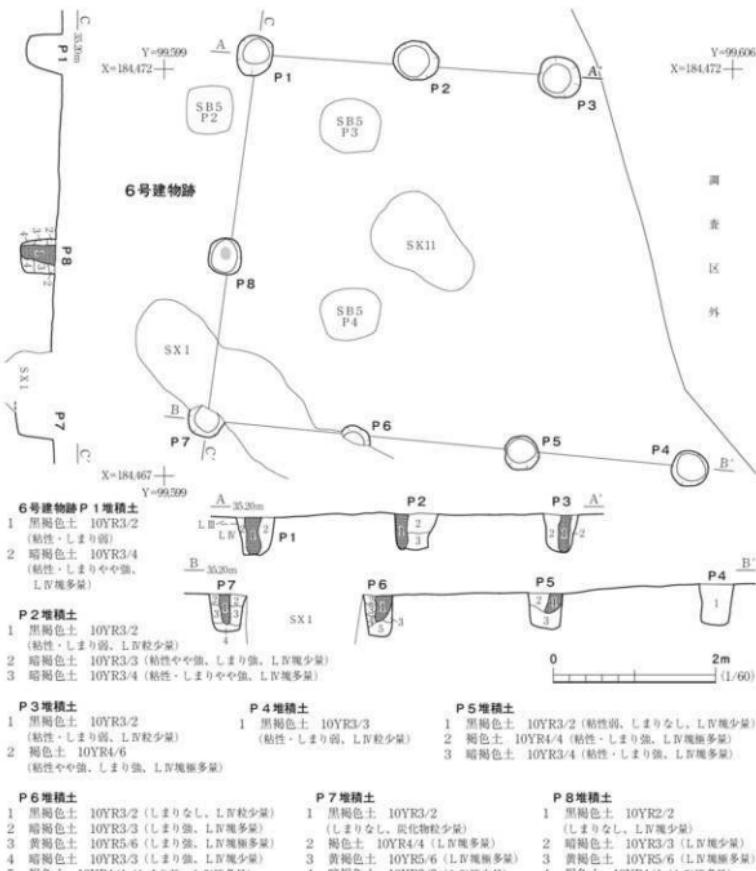
(今野)

6号建物跡 S B 6

遺構(図43、写真21・23)

調査区の中央付近から西に寄ったD・E-13・14グリッドに位置し、標高35.0m前後の平坦地に立地している。L III上面において8基の柱穴を検出した。本遺構のP 6・7が1号特殊遺構と重複し、本遺構の方が古いことを遺構検出時に確認した。また、5号建物跡と重複する位置関係にある。調査区際にあることから全体を調査することはできなかつたが、東西3間以上、南北2間の掘立柱建物跡である。本遺構の規模は東西が6.0m以上、南北が4.6mである。南北の柱列を主軸とすると、その方位はN 8° Eを示す。柱間にはばらつきがあり、P 1-P 2間が2.0m、P 2-P 3が1.8m、P 4-P 5およびP 5-P 6が2.1m、P 6-P 7が1.8m、P 7-P 8が2.1m、P 1-P 8が2.5mである。

柱穴の平面形は、楕円形である。各柱穴の底面は、平坦か皿状に浅く窪んでいる。柱の当たりは、P 8の底面のみで確認された。柱穴の壁は、垂直に近い急角度で立ち上がっている。柱穴の規模は、1号特殊遺構に墳されているP 6・7を除外し、長径が42～57cm、短径が40～50cmである。検出面からの深さは最も深いP 3で49cm、最も浅いP 5が42cmである。底面の標高差は、北側の柱列ではわずか3cmと揃っている。これに対し南側の柱列ではばらつきがあり、かつ北側の柱列より15cm前後下がっている。P 1-3・5-8の列1は、黒褐色土で縮まりがなく、柱痕跡と考えられる。その他の堆積土は縮まりがあり、いずれもL IV塊を多量に含むものが多いため、掘形の埋土と考えている。なお、本遺構からは遺物は出土していない。

**図43 6号建物跡****まとめ**

東西3間(6.0m)以上、南北2間(4.6m)の掘立柱建物跡である。重複する1号特殊遺構より古く、5号建物跡とも重複する位置関係にある。5号建物跡の柱穴に柱痕跡が遺存しないのに対し、本遺構の柱穴には遺存していることから、5号建物跡より本遺構の方が新しい可能性がある。柱穴の平面形は楕円形で、その規模は5号建物跡より一回り小さい。出土遺物がなく詳細な年代は不明だが、9世紀の遺構と考えられる。

(今野)

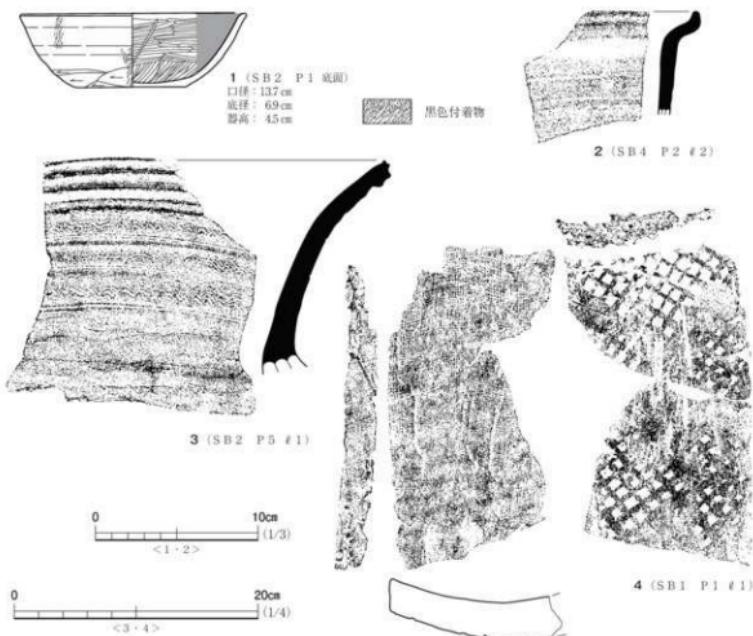


図44 掘立柱建物跡出土遺物

第4節 土坑

1号土坑 SK1 (図45、写真24)

本遺構は調査区北部のD5グリッドに位置し、標高35.6mの平坦地に立地する。検出面はLIV上面である。重複する遺構はなく、北側に1号溝跡が隣接する。遺構の平面形は、一部のみの検出であるが、南北を軸とする不整長方形と推定される。規模は検出された部分で、南北130cm、東西100cm、深さ40cmである。底面は平坦で、周壁は底面から70~80°の急斜度で立ち上がる。

堆積土は4層に分層した。 ℓ 1~3はLIIに近似した暗褐色および黒褐色の土である。堆積状況から自然堆積土と判断した。 ℓ 4はLIVに近似した黄褐色土塊が堆積した層で、比較的水平に堆積し、縮まりが強いことから人為的な埋土と判断した。遺物は須恵器4点と鉄滓23gが出土している。時期は平安時代以降と考えられるが、性格についての詳細は不明である。 (神林)

2号土坑 SK 2 (図45・48、写真24)

本遺構は調査区北寄りのE 8 グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。重複する遺構はなく、北西側に1号建物跡が隣接する。検出面は、L III上面である。平面形は楕円形で、その規模は長径136cm、短径95cm、深さは64cmである。掘り込みはL V上面に達し、底面は中央に向かって緩く窪んでいる。周壁は長軸方向では垂直に近い急角度で立ち上がり、短軸方向では若干オーバーハングしている。堆積土はいずれもL IIやL IIIに似た黒褐色土や褐色土を基調とし、L IV粒や焼土粒、炭化物粒などが混入している。L III・IVなどの塊が目立って混入する、あるいは際立って縮まりがあるなどの特徴をもった土層ではなく、レンズ状に堆積していることから、ℓ 1～6とも自然堆積土と考えられる。

遺物は土師器40点、須恵器6点、鉄滓126gが出土している。図48-1・2はロクロ成形の土師器杯である。1は3割程度が、2は5割程度が遺存している。器形を見ると、いずれもわずかに上げ底気味の底部から、体部が内湾気味に立ち上がっている。外面の調整を見ると、1は体部下端に手持ちヘラケズリ施されている。2の体部には調整が認められない。底面には、いずれも回転糸切り痕が残されている。内面には、1・2ともヘラミガキと黒色処理が施されている。見込み部分のヘラミガキは中心から放射状に、体部から口縁にかけては横方向に施されている。

本遺構は周壁が一部オーバーハングした形状とその規模から、屋外に設けられた貯蔵穴の可能性がある。出土遺物の特徴から、9世紀中葉頃の遺構と考えられる。
(今野)

3号土坑 SK 3 (図45・48・49、写真24・40)

本遺構は調査区北部のD・E-6・7グリッドに位置し、標高は35.6mの平坦地に立地する。検出面はL IV上面である。重複する遺構はなく、南東側に4号土坑が位置する。遺構の平面形は隅丸の不整長方形である。規模は上端で長径185cm、短径100cm、深さ25cmである。底面は平坦かつ水平で、周壁は底面から急斜度で立ち上がる。堆積土は2層に分層した。ℓ 1はL IIに近似する暗褐色土で、自然堆積土と思われる。ℓ 2は木炭とみられる非常に細かい炭化物の層であり、底面を覆っている。なお、底面や壁面に焼けた痕跡は認められなかった。

遺物は、土師器13点、須恵器1点、砥石1点、鉄滓31gが出土しており、そのうち図示できたのは2点である。図48-3は須恵器の杯である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。底面には切り離しの回転糸切り痕が認められ、外縁はヘラケズリで再調整が施される。図49-6は砥石で、表面と側面に線条痕が認められる。石材は砂岩とみられる。遺構の年代は9世紀の遺構と考えられるが、その性格については不明である。
(神林)

4号土坑 SK 4 (図45、写真24)

本遺構は調査区北部のE 7 グリッドに位置する。標高は35.6mの平坦地に立地する。検出面はL



図45 1~6号土坑

IV上面である。重複する遺構はない。北西側に3号土坑、南東側に1号建物跡が位置する。一部が調査区外に延びるが、平面形は楕円形と推定される。規模は南北150cm、東西140cm、深さ16cmである。底面は中央に向かってわずかに畠み、周壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分層した。 ℓ 1はLIVに近似する塊が混ざる暗褐色土で、自然堆積土と考えられる。 ℓ 2は周壁の崩落土と考えられる。遺物は出土しなかったため、時期や性格については不明である。

(神林)

5号土坑 SK 5 (図45・49、写真25)

本遺構は調査区北寄りのF9グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。重複する遺構はなく、西側に5m離れて4号建物跡が、南側には7号土坑がある。土坑の南端は、木の根により搅乱されている。検出面はLIV上面である。平面形は不整な長楕円形で、南北方向の遺存長は220cm、最大幅は96cm、深さは25cmである。底面は凹凸が著しく、壁は急斜度で立ち上がっていいる。堆積土は3層に分かれた。 ℓ 1は径が1~10cm大の焼土塊を含み、縮まりがない。 ℓ 2は細かい焼土粒を少量含み、レンズ状に堆積している。 ℓ 3は壁際のみに堆積し、壁から崩落したとみられるLIV塊を含んでいる。焼土塊を含む ℓ 1は人為的な埋土、 ℓ 2・3は自然堆積土と判断した。

遺物は土師器72点、須恵器2点、羽口1点、鉄滓244gが出土している。図49-7は、羽口である。溶着滓は付着せず、使用した痕跡はない。縱方向にヘラケズリが施され、先端部を薄くしている。外径は5.5cm、先端部の内径は2.8cmである。本遺構はある程度まで自然に埋まつた後、人為的に埋められたものとみられる。出土遺物の特徴から、9世紀の遺構と考えられる。その性格については明らかにできなかった。

(今野)

6号土坑 SK 6 (図45、写真25)

本遺構は調査区北寄りのF10グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。重複する遺構はなく、東側に1号住居跡と2号溝跡が隣接する。検出面は、LIV上面である。平面形は整った隅丸長方形で、南北に長い。その規模は長径135cm、短径80cm、深さは30cmである。底面はおおむね平坦で、壁は70~80°の急斜度で立ち上がっている。堆積土は3層に分けたが、いずれもLIIIに似た褐色土および暗褐色土であり、自然堆積土と判断した。 ℓ 3には壁からの崩落土とみられるLIV塊が少量含まれていた。遺物は土師器の細片1点と鉄滓22gが出土しているのみで、図示しなかった。出土遺物が少なく、その年代および性格は不明であるが、隣接する1号住居跡に付属する施設の可能性がある。

(今野)

7号土坑 SK 7 (図46・48、写真25・40)

本遺構は、県教委が実施した確認調査において2Tで検出された土坑である。調査区北寄りのF10グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。重複する遺構はなく、北側に4号建物跡と5号土坑が、南東側に1号住居跡、2号溝跡、6号土坑などが隣接している。LIV上面で

検出したが、L III上面から掘り込まれていることを調査区際の土層断面で確認した。調査区際にあるため全容は不明だが、平面形は方形と推定される。北壁の長さは192cm、東壁の長さは168cm、深さは68cmである。底面は、中央付近が皿状に浅く窪み、細かい凹凸は見られず整っている。壁は急斜度で立ち上がっている。堆積土は6層に分けたが、3層に大別される。 ℓ 1 a・bはL IIに似た黒褐色土および暗褐色土である。L IV塊、焼土、炭化物を少し含んでいる。 ℓ 2は、 ℓ 1に比べL IV塊を多く含んでいる。 ℓ 1・2からは、大型の土器片がまとまって出土している。 ℓ 3 a～cは、L IV塊を非常に多く含んだ堆積土である。 ℓ 1・2に比べ、遺物の出土量は少ない。 ℓ 1・2は他の土坑に比べ遺物が際立って多く出土すること、 ℓ 3はL IV塊を多量に含むことから、いずれも人為的な埋土と判断した。

遺物は土師器231点、須恵器17点、鉄滓247gが出土している。 ℓ 1・2から出土したものが多くを占める。図48-4～9は、体部がやや内湾しながら開く器形の土師器杯である。このうち5～9は口縁部がわずかに外反している。外面の調整を見ると、4・5の底面と体部下端には回転ヘラケズリが、6～9には手持ちヘラケズリが施され、7の底面中央には回転糸切り痕が残されている。内面には、いずれもヘラミガキの後、黒色処理が施されている。7の内面調整は磨滅のためか、やや不明瞭となっている。10は4～9に比べ、小ぶりな土師器杯である。見込み部分にのみヘラミガキが施され、黒色処理は認められない。10の器面は一部が橙色に変色しているため、二次的な熱を受けた可能性がある。11は、丸底扁平底の杯である。他の土師器杯に比べ、器壁がやや厚い。内外面とも入念なヘラミガキが施され、黒色処理されている。12～14は、底面に墨書が認められる土師器杯である。14は「南合」と読める。12も14と同字である可能性が高い。13は「南」であろう。底面の調整は、12・13が回転ヘラケズリ、14が手持ちヘラケズリである。15は須恵器壺の胴部片である。肩に2条の凸帯が巡っている。

本遺構は、方形と推定される大型の土坑である。出土遺物が多いこと、人為的に埋め戻された可能性が高いことから、不要になった土器などを廃棄した土坑と考えられる。出土遺物の年代から、9世紀中葉を中心とした時期の遺構と考えられる。

(今野)

8号土坑 SK 8 (図46、写真25)

調査区北寄りのF 11グリッドに位置し、標高35.7m付近の平坦地に立地している。5号住居跡の貼床を剥がした際に、L IV上面において検出した。調査区際にあるため全容は不明だが、平面形は梢円形になるものと推定される。調査区際ににおける長さは100cm、幅は54cm以上、深さは27cmである。底面は皿状に浅く窪み、壁は急角度で立ち上がっている。堆積土はL IV塊を主体とし、暗褐色土塊を多量に含んでいたため人為的な埋土と判断した。なお、遺物は出土していない。本遺構は5号住居跡より古いことから、9世紀中葉以前の遺構と考えられる。その性格については明らかにできなかった。

(今野)

9号土坑 SK 9 (図46、写真25)

本遺構は調査区中央部のI 16グリッドに位置し、標高34.5mの平坦地に立地する。検出面はL IV上面である。重複する遺構はなく、北東側に7号住居跡が位置する。遺構の平面形は楕円形である。規模は長径120cm、短径110cm、深さ25cmである。底面は平坦で、周壁は底面から緩やかに立ち上がり。堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1はL IIに近似する暗褐色土の混じる灰黄褐色土、 ℓ 2・3はL IVに近似する黄褐色土塊が含まれる。いずれも自然堆積土と考えられる。遺物は土師器壺の細片が出土している。時期は平安時代以降と考えられるが、性格は不明である。 (神林)

10号土坑 SK 10 (図46・48・49、写真26・40)

本遺構は調査区中央部のI 15・16グリッドに位置し、標高34.8mの平坦地に立地する。検出面はL IV上面である。重複する遺構はなく、南側に7号住居跡が隣接する。遺構の平面形は楕円形で、規模は長径230cm、短径210cm、深さ50cmである。周壁は南西側でほぼ垂直に立ち上がり、その他は60°程度の立ち上がり角度となっている。底面は中央に向かってわずかに窪む。堆積土は8層に分層した。 ℓ 1～7はL IVに近似した土塊が混じる、黒色を基調とした土である。各層に焼土や炭化物が混じり、遺物も比較的多く含まれていることから、人為的に埋めた土と推定される。 ℓ 8のみL IVに近いにぶい黄褐色土で黒褐色土を含んでおり、壁からの崩落土と流入土の混土と考えられる。

遺物は土師器181点、須恵器10点、瓦5点、鉄滓13gが出土し、そのうち7点を図示した。図48・16～20はロクロ成形の土師器杯で、このうち16～18は、外面底部下端から底面にかけて回転ヘラケズリが施され、内面はヘラミガキと黒色処理が施されている。器形は、16が底部から外傾しながら立ち上がり、17・18は内湾気味に立ち上がる。なお、16は外面口縁部および内面に、黒色の付着物が確認された。19・20は底部の細片で、いずれも底面に墨書きが認められる。19は「南」、20は「南合」とみられる字が墨書きされている。図49-3・4は瓦片である。いずれも一枚作りの平瓦で、凸面に格子状タキ目、凹面に布目が確認され、側面は面取りされている。出土遺物が比較的多く、人為的に埋められた可能性が高いことから、不要になった土器や瓦などを廃棄した土坑と考えられる。時期は出土遺物から9世紀中葉頃と考えられる。 (神林)

11号土坑 SK 11 (図46、写真26)

本遺構は調査区中央付近から西に寄ったE 13・14グリッドに位置し、標高35.0m付近の平坦地に立地している。6号建物跡と重複する位置関係にあるが、柱穴と直接は重複しないため、新旧関係は不明である。検出面はL III上面である。平面形は不整な楕円形で、その規模は長径136cm、短径95cm、深さは77cmである。底面は丸底状で、北西側の壁は70°前後で立ち上がっている。これに対し、南東側の壁は段を有している。

堆積土は3層に分けた。 ℓ 1はL IIに似た黒褐色土で粘性・締まりとも弱く、自然堆積土とみら

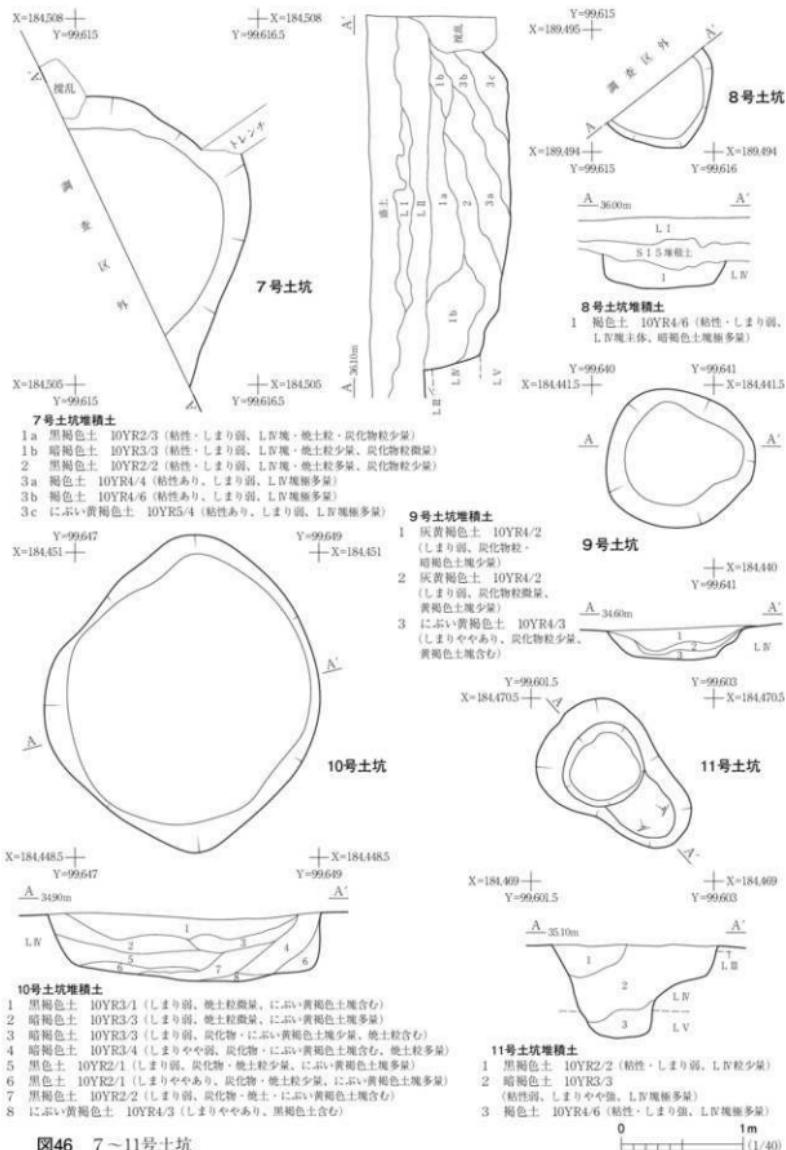


図46 7~11号土坑

れる。 ℓ 2・3はL IV塊を非常に多く含み、縮まりがあるため人為的な埋土と判断した。遺物は土師器の細片8点が出土しているのみで、図示しなかった。本遺構は出土遺物に乏しくその年代、性格については明らかにできなかった。

(今野)

12号土坑 SK 12 (図47・49、写真26)

本遺構は、調査区中央付近から西に寄ったD 14グリッドの調査区際に位置し、標高34.9m付近の平坦地に立地している。5号建物跡と重複する位置関係にあるが、柱穴と直接は重複しないため新旧関係は不明である。検出面はL III上面である。平面形は隅丸方形になるものと推察され、その規模は長径が103cm以上、短径が65cm、深さは65cmである。底面は丸底状で、壁は急角度で立ち上がっている。堆積土はいずれも人為的な埋土とみられる。 ℓ 1はL IV塊を主体とし、黒褐色土塊が混入している。 ℓ 2・3にはL IV塊とともに、拳大から30cm大までの円碟・角碟が多量に含まれていた。

遺物は土師器8点、須恵器8点、陶器2点、瓦1点が碟とともに出土している。図49-1は陶器の高台付碗とみられる。高台から体部下端には施釉されず、回転ヘラケズリの痕跡が見られる。内面には灰白色の釉薬がかけられている。丸く線で囲って図示した箇所は、釉薬が剥がれた部分である。これは、焼成の際に窯道具が付着したいわゆる「目跡」とみられる。またアミ点を付した箇所は、釉薬が厚くなり変色した部分を表している。2は陶器の壺片である。肩が張り、口縁部が大きく外反する。外面にはロクロ目が、内面には横ナデが観察される。5は、瓦当が剥離した軒丸瓦とみられる。凸面にはナデが施され、凹面は布目と帶状の剝離痕が残る。両端面にはヘラケズリの痕跡が見られる。本遺構は多量の碟が出土したことから、碟や遺物を廃棄した土坑ではないかと推察される。出土遺物の特徴から、近世以降の土坑と考えられる

(今野)

13号土坑 SK 13 (図47)

本遺構は調査区南端部、L 25・26グリッドに位置する。南に向かって緩やかに傾斜する斜面地に立地し、標高は32.3mである。重複する遺構はなく、北側に14号土坑が位置する。検出面はL IV b上面である。遺構の平面形は楕円形で、規模は長径90cm、短径80cm、深さ20cmである。底面は北東側に向かってわずかに窪み、周壁は底面より緩く立ち上がる。堆積土は2層に分層した。 ℓ 1は木炭とみられる極めて細かい炭化物の堆積層で、一部は底面上に堆積していた。 ℓ 2は砂礫層で、部分的に黒色土が混じることから、壁面の崩落土と自然堆積土の混土と考えられる。なお、底面や壁面に焼けた痕跡は一切確認できなかった。遺物はロクロ土師器の細片がわずかに出土したのみである。時期は平安時代以降と考えられるが、性格は不明である。

(神林)

14号土坑 SK 14 (図47)

本遺構は調査区南端部のK 24グリッドに位置し、標高が33.1mの南に下る緩斜面に立地する。検出面はL IV b上面で、遺存状態は極めて悪い。重複する遺構はなく、南側に13号土坑が、北側

に15号土坑が位置する。平面形は、東西方向に長軸を持つ楕円形である。規模は長径76cm、短径57cm、深さ約10cmである。底面は中央部が窪み、周壁は非常に緩く立ち上がる。堆積土は1層で、炭化物を多く含む黒色土が堆積している。底面や周壁に焼けた痕跡は認められない。なお、本遺構から遺物は出土していない。時期は平安時代以降と考えられるが、詳細は不明である。（神林）

15号土坑 SK15(図47・49、写真26)

調査区南部のK 23グリッドに位置する。北東に向かって緩く傾斜する斜面地に立地し、標高は32.8mである。検出面はL IV b上面である。重複する遺構はなく、北東側の谷地は繩文時代の遺物包含層となっている。遺構の平面形は東西方向に長軸を持つ不整長方形である。規模は長径130cm、短径80cm、深さ20cmである。底面は東側に向かって傾斜している。堆積土は1層で、炭化物、焼土粒、地山粒を含む縛まりのない黒褐色土が堆積している。遺物は、堆積土中より繩文土器片38点が出土している。しかし風化や磨滅が著しく、図示できたのは図49-8のみである。8には渦巻状の隆帯が付いた橋状把手と有節沈線を伴う横長の楕円文が見られ、大木8a式に比定される。よって繩文時代以降に掘られた土坑と考えられるが、性格については不明である。（神林）

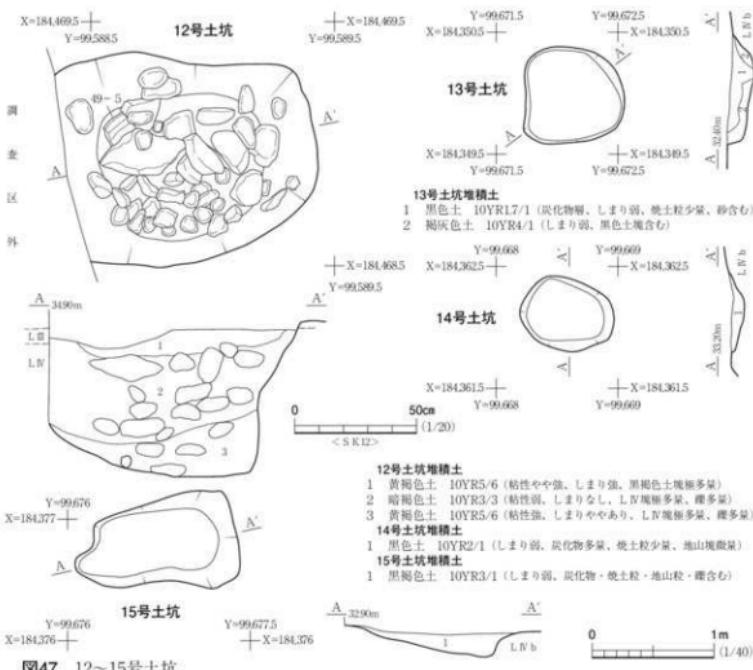


図47 12~15号土坑

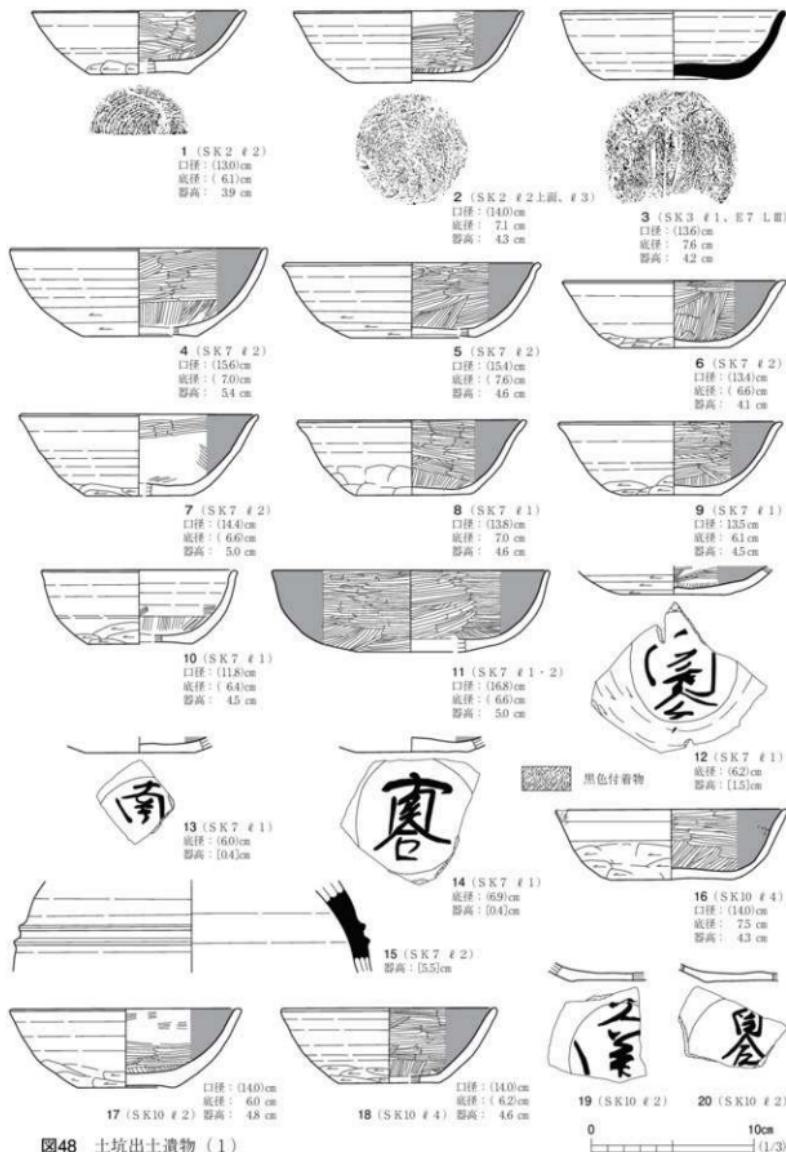


図48 土坑出土遺物（1）

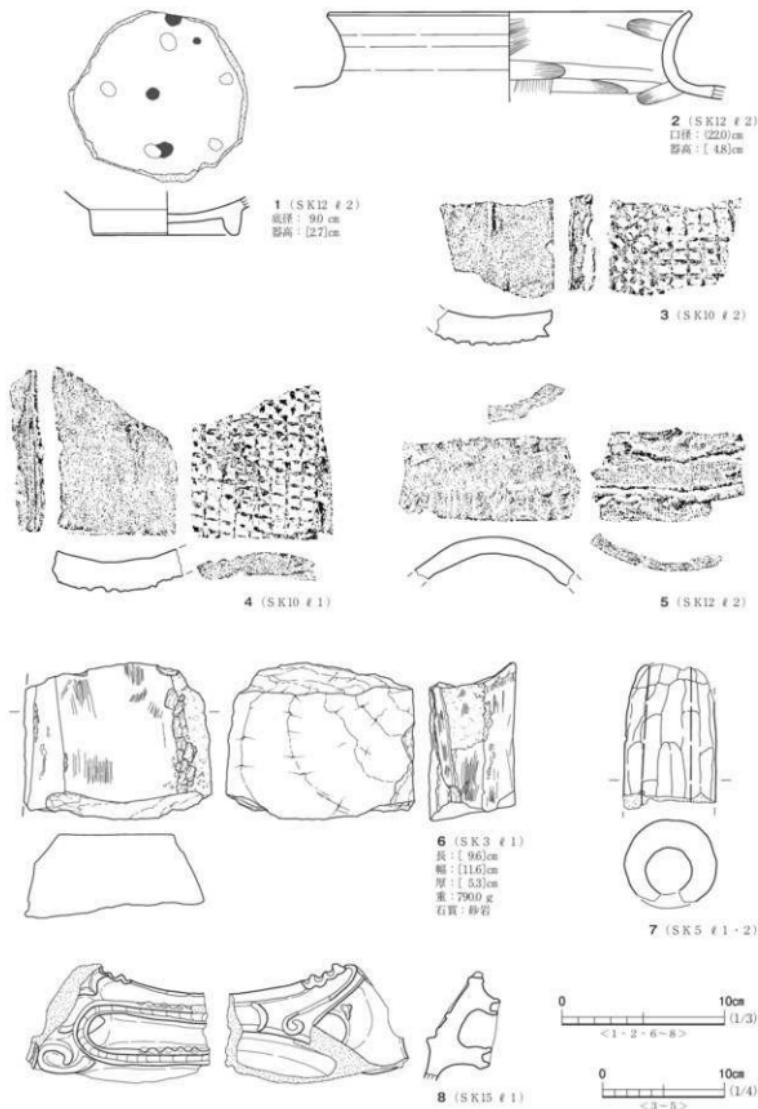


図49 土坑出土遺物（2）

第5節 溝 跡

1号溝跡 S D 1 (図50、写真27)

本遺構は、調査区北端に近いD 5 グリッドに位置し、標高35.7m付近の平坦地に立地している。検出面は、L IV上面である。重複する遺構はなく、南側に4mほど離れて1号土坑が隣接するのみで、遺構密度の希薄な場所である。溝跡は、調査区を横切るように東西に延びていた。北側と南側の上端はおおむね平行し、上端の幅は123~135cmである。仮に北側の上端を主軸とすると、その方位はN 53° Eを示す。掘り込みはL V上面から20cmほど下位まで達し、底面は幅が22~33cmと

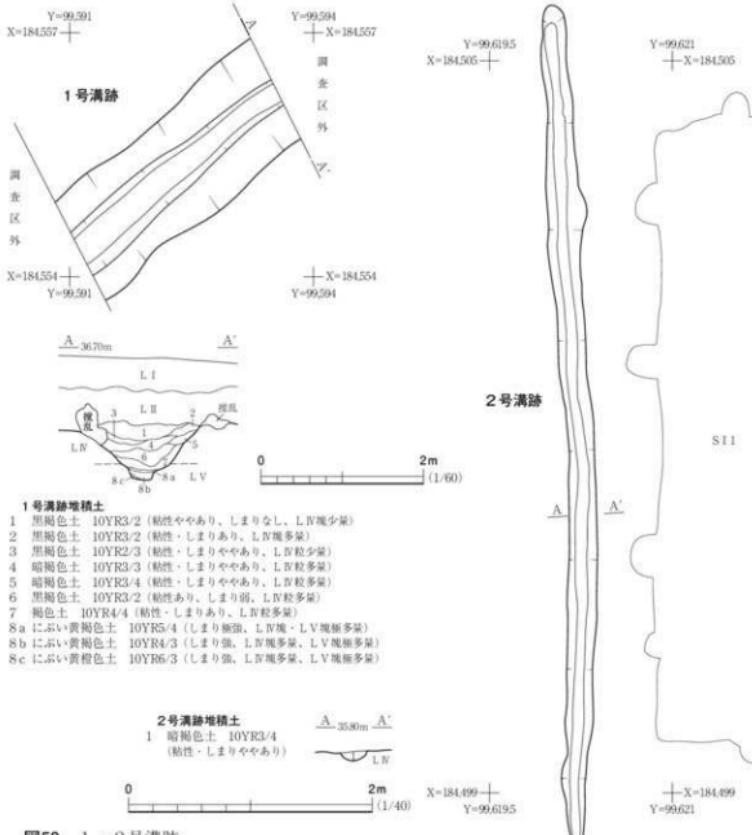


図50 1・2号溝跡

上端に比べ狭い。底面に傾斜や目立った凹凸は認められなかった。壁は底面から垂直に近い角度で10cmほど立ち上がった後に、40~45°の角度で開く。検出面からの深さは65cmであった。

堆積土は10層に分けた。 ℓ 1~7は、L II・IIIに似た色調でレンズ状に堆積していることから、自然堆積土と判断した。底面近くに見られた ℓ 8 a~cは、L IV・V塊が多量に含まれ、硬く締まっていたため、人為的な埋土とみられる。特に ℓ 8 a上面は非常に硬く締まり、踏み締まりの可能性がある。遺物は土器器の細片4点と鉄滓30gが出土しているが、図示しなかった。本遺構は底面に踏み締まったような堆積土が見られたことから、道路か土地の区画溝の可能性がある。出土遺物が少なく、その年代は不明であるが、平安時代の掘立柱建物跡や堅穴住居跡の主軸が真北に近いのに対し、本遺構は現在の地割に平行しているように見える。このことから、平安時代より新しい時期の遺構と考えられる。

(今野)

2号溝跡 S D 2 (図50、写真6・27)

本遺構は、調査区北寄りのG 10・11グリッドに位置し、標高35.6m付近の平坦地に立地している。検出面はL IV上面である。1号住居跡の西壁とはほぼ並行し、55~65cmの距離を置いて南北に延びている。

本遺構の長さは6.9m、幅は25cm前後で両端では細くなっている。検出面からの深さは4~12cmと非常に浅い。底面に目立った凹凸は認められず、南から北へ10cmほど下っている。堆積土は、L IIIに似た暗褐色土で自然堆積土とみられる。本遺構から遺物は出土していない。1号住居跡の西壁に平行することから、本遺構は1号住居跡に伴う施設である可能性が高い。屋根や周囲からの雨水を受ける排水溝ではないかと考えている。

(今野)

3号溝跡 S D 3 (図51・52、写真27・40)

調査区中央部のG・H 12グリッドにかけて位置し、標高35.4mの平坦地に立地する。検出面は

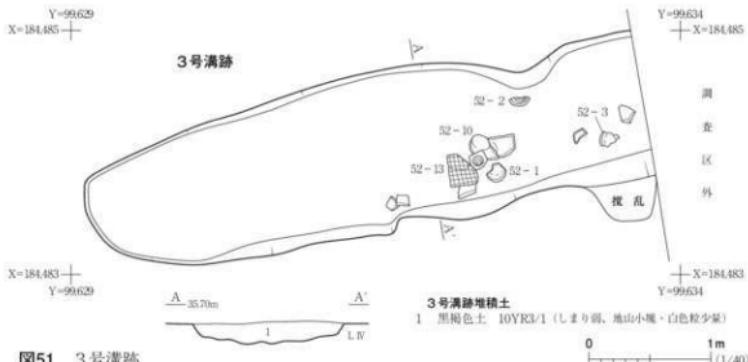


図51 3号溝跡

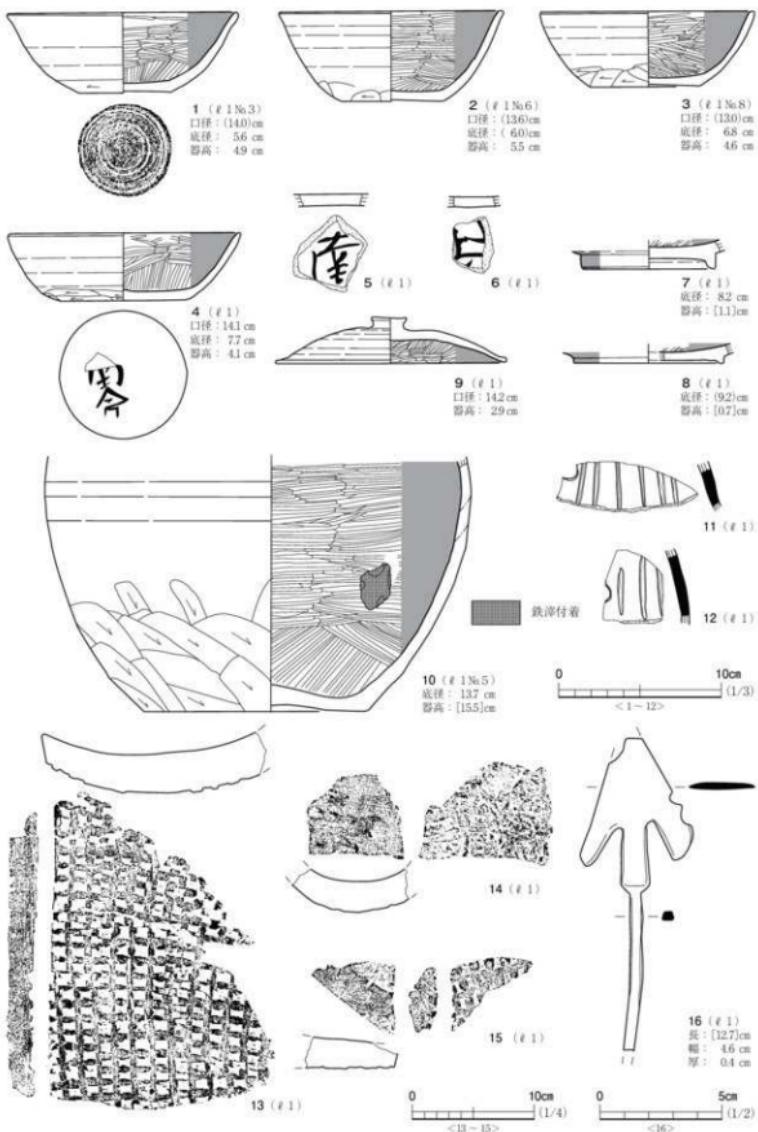


図52 3号溝跡出土遺物

L IV上面である。重複する遺構はなく、南側に9号住居跡が隣接する。調査区東壁より、西に向かって4.8m延びる。幅は最大1.3mである。底面は丸底状を基調とし、一部は凹凸が激しい。周壁は4~10cmと低く、緩やかに立ち上がる。堆積土はL IIに近似する黒褐色土であり、自然堆積土とみられる。

遺物は土師器276点、須恵器46点、瓦6点、鉄製品1点、羽口1点、鉄滓1,258g、石器1点が出土した。特に東寄りの堆積土中からまとめて出土した。図52-1~8はロクロ成形の土師器杯である。1~4は、内面はヘラミガキ後に黒色処理が施される。1は口縁部がわずかに外反する器形である。体部下端から底面にかけて回転ヘラケズリが施されている。2~4は体部下端から底面にかけて、手持ちヘラケズリが施される。このうち4は底面に「南合」という墨書が確認される。

5~6は墨書が確認される底部の小片である。5は「南」、6は「南合」という墨書の一部であろう。7~8は高台が付いた底部片で、内外面に黒色処理が施されている。9は土師器の杯蓋である。扁平なリング状の摘みが付き、外面はロクロナデ、内面は丁寧なヘラミガキと黒色処理が施される。10はロクロ成形による土師器甕の胴部下半~底部資料である。外面はロクロナデおよびヘラケズリが施される。内面はヘラミガキ後に黒色処理が施されている。また、内面には鉄滓が付着している。11~12は円面覗の脚部とみられる細片である。13~15は1枚作りの平瓦片である。13~15の凸面には格子状の、14には回字状のタタキ目が見られる。凹面にはいずれも布目が認められ、側面は面取りされている。13は焼成が著しく悪く、水洗いしたところ1/3ほどが粉々に崩壊してしまった。16は鐵とみられる鐵製品である。鐵身部の形状は綫長の三角形を呈し、逆刺部が長い。頭部と茎部の間には斜めに段が付く。

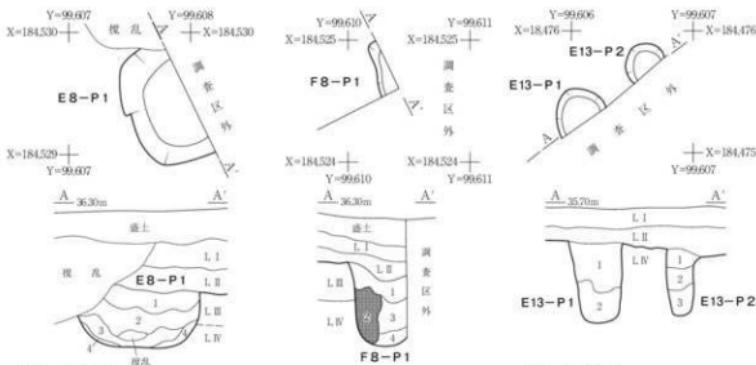
本遺構は一部のみの検出であるが、非常に浅く立ち上がりも緩やかであることから、区画溝といった性格のものではではないと思われる。出土した遺物は比較的多く、不要な土器や瓦などを廃棄したと思われる。出土遺物の年代から、9世紀前半を中心とした時期に機能した遺構と考えられる。

(神林)

第6節 その他の遺構と遺物

小穴 GP (図53・54)

今回の調査では、9基の小穴が検出された。その分布をみると、調査区北寄りのE・F 8グリッドから各1基、調査区中央から西に寄ったE 13グリッドおよびF 12・14グリッドから7基検出されている。E 8-P 1およびF 8-P 1はL III上面で検出した。重複する遺構はなく、1号建物跡が隣接している。2基とも調査区際にあるため、全体を調査することはできなかった。E 8-P 1の深さは45cmあり、丸底で壁は急斜度で立ち上がっている。堆積土はL IIに類似し、自然堆積土と判断した。F 8-P 1の深さは65cmあり、壁の立ち上がりはほぼ垂直である。ℓ 1は自然堆積土とみられる。ℓ 2は縛まりがなく、柱痕跡の可能性がある。L IV塊が混入したℓ 3・4は、人為的な埋土と判断した。堆積土からみて、F 8-P 1は掘立柱建物跡などの柱穴の可能性がある。

**E8-P1 堆積土**

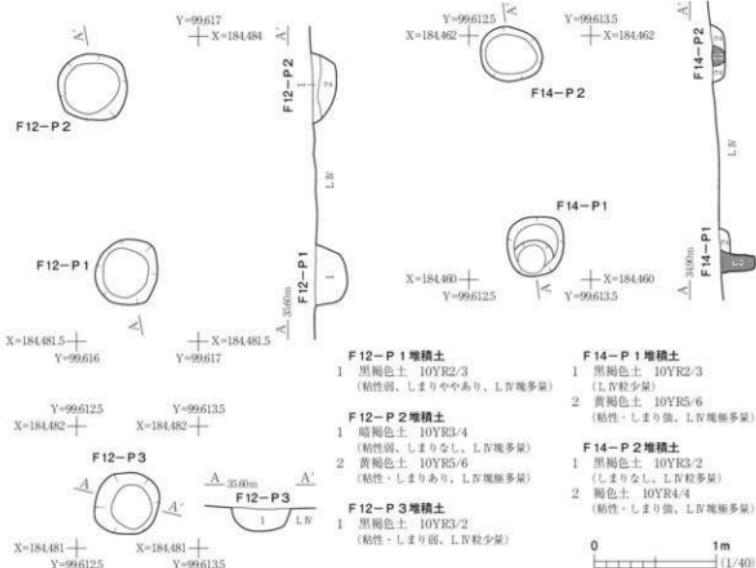
- 1 在いぶ黄褐色土 10YR4/3 (粘性・しまり弱、L.IV粒・炭化物粒少量)
- 2 暗褐色土 10YR3/3 (粘性・しまり弱、L.IV粒・炭化物粒少量、鐵土粒微量)
- 3 暗褐色土 10YR3/4 (粘性・しまり弱、L.IV粒少量、炭化物粒微量)
- 4 黄褐色土 10YR4/4 (粘性・しまりやや強、L.IV堆多量)

F8-P1 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3-3 (L.IV粒少量)
- 2 黑褐色土 10YR2-2 (しまりなし、L.IV粒微量)
- 3 黄褐色土 10YR4/6 (L.IV堆多量)
- 4 暗褐色土 10YR3-3 (L.IV堆少量)

E13-P1 堆積土
1 黒褐色土 10YR2/3
(粘性ややあり、しまりややあり、L.IV堆多量)
2 黑褐色土 10YR2/2
(粘性なし、しまりややあり、L.IV堆多量)

E13-P2 堆積土
1 暗褐色土 10YR3-3 (粘性弱、しまりややあり、L.IV堆少量)
2 黄褐色土 10YR4/4 (粘性弱、しまりややあり、L.IV堆多量)
3 黄褐色土 10YR5/6 (粘性あり、しまりややあり、L.IV堆多量)

**F12-P1 堆積土**

- 1 黑褐色土 10YR2/3
(粘性弱、しまりややあり、L.IV堆多量)

F12-P2 堆積土

- 1 暗褐色土 10YR3/4
(粘性弱、しまりなし、L.IV堆多量)
- 2 黄褐色土 10YR5/6
(粘性・しまりあり、L.IV堆多量)

F12-P3 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/2
(粘性・しまり弱、L.IV粒少量)

F14-P1 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/3
(L.IV粒少量)

F14-P2 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/2
(しまりなし、L.IV粒多量)
- 2 黄褐色土 10YR4/4
(粘性・しまり強、L.IV堆多量)

F14-P3 堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/2
(しまりなし、L.IV粒多量)
- 2 黄褐色土 10YR4/4
(粘性・しまり強、L.IV堆多量)

0 1m (1/40)

図53 小穴

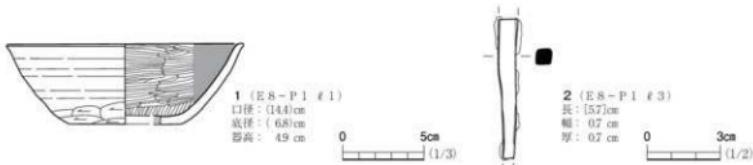


図54 小穴出土遺物

E 13-P 1・2、F 12-P 1～3、F 14-P 1・2は、L IV上面で検出した。近くには、5・6号建物跡が所在している。E 13-P 1・2は、調査区間にあるため全体を調査できなかったが、平面形は楕円形と推定される。P 1の径は45cm、深さは65cmである。堆積土は、縮まりのある黒褐色土でL IV塊を多量に含んでいる。P 2の径は35cm、深さは55cmである。堆積土はやや縮まりがあり、L IV塊を含んでいる。P 1・2の堆積土は、いずれも人為的な埋土の可能性が高い。

F 12-P 1～3は平面形が楕円形を呈し、その規模はP 1が長径55cm、短径50cm、深さが26cm、P 2は長径57cm、短径55cm、深さが20cm、P 3が長径57cm、短径55cm、深さが18cmである。いずれも丸底状の底面から壁は急角度で立ち上がっており、P 1・2の堆積土はL IV塊を多く含み、人為的な埋土の可能性が高い。P 3の堆積土は粘性・縮まりとも弱く、自然堆積土とみられる。

F 14-P 1・2の平面形は楕円形である。P 1の規模は長径53cm、短径48cm、深さ28cmである。P 1のℓ 1は縮まりのない黒褐色土で、柱痕跡の可能性が高い。ℓ 2はL IV塊を非常に多く含み、硬く縮まっているため掘形の埋土と考えられる。ℓ 1が堆積していた柱が据えられたとみられる部分は、掘形より20cm深くなっている。P 2の規模は長径51cm、短径44cm、深さ11cmと浅い。ℓ 1は縮まりがない黒褐色土で、柱痕跡の可能性がある。ℓ 2はL IV塊を非常に多く含み、硬く縮まっているため掘形の埋土と判断した。遺存状態は悪いが、F 14-P 1・2は小規模な柱穴の可能性が高い。P 1-P 2間の距離は1.7mである。周間にこれと組む柱穴ではなく、掘立柱建物跡とは考えにくい。

図54には、E 8-P 1から出土した土師器と鉄製品を図示した。1はロクロ成形による杯である。体部は緩く内湾し、口縁部は直線的に開く。器面はやや荒れている。外面には底面から体部下端にかけて手持ちヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキの後、黒色処理されている。2は、鉄釘の胴部とみられる。頭部は欠損し、先端に向かって細くなり、断面形は方形である。（今野）

1号特殊遺構 S X 1（図55、写真27）

調査区中央部から西に寄ったD・E 14グリッドに位置する。検出面は、L III上面である。5・6号建物跡の柱穴と重複し、いずれよりも新しいことを遺構検出時に確認している。平面形は、不整な溝状を呈している。南東から北西方向に延び、その長さは5.9mである。幅と深さは一定せず、大まかには北西側で幅広く深くなり、南東側では狭く浅くなる。幅は38～95cm、深さは24～151cmである。底面は南東隅から北西隅に向かって階段状に下がり、最深部ではL Vを70cm程度掘り込んでいる。壁の立ち上がり角度も一定せず、深い南北側では緩やかなのにに対し、北西側では垂



図55 1号特殊遺構

直に近く、オーバーハンギングしている箇所も見られる。

堆積土は6層に分層した。いずれもL IV塊が多量に含まれ、人為的な埋土である可能性が高い。遺物は土師器2点が出土しているが、細片のため図示しなかった。本遺構は不整形な溝状をなし、L Vを大きく掘り込んでいることから粘土探掘坑の可能性がある。5・6号建物跡より新しいことから、その年代は9世紀以降と考えられる。
(今野)

1号土器埋設遺構 SM 1 (図56、写真27)

本遺構は調査区南寄りのL 22グリッドに位置し、遺物包含層が形成された谷部に立地する。重複する遺構はない。土層観察用畦のL III a 2上面において検出した。掘形の平面形は不整な楕円形になるものと推察され、その規模は土層畦際で長さ57cm、幅が30cm以上である。検出面からの深さは29cmあり、底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がっている。堆積土はL III a 1・2に比べやや色調が暗く、L III a 1・2と同様に多量の炭化物と、少量の焼土粒および動物骨とみられる骨片を含んでいた。また、径が5~20cm大の自然礫も複数含まれていた。

図56-1に示した縄文土器は、倒立状態で出土した。口縁部と底部の大部分を欠き、胴部の半分程度が遺存している。胴部が直線的に開く粗製土器で、無筋しが縦位に施されている。また土器の中の堆積土を水洗選別したところ、2の石錐と動物骨15点、魚類の歯1点が出土した。2の石錐は流紋岩製で、非常に小さい。先端を欠損し、表裏に素材の剥離面を残している。本遺構の年代

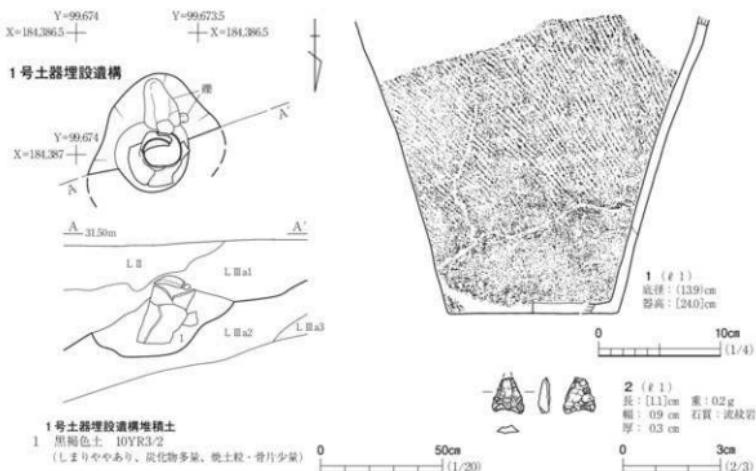


図56 1号土器埋設遺構・出土遺物

は、図56-1の特徴とL III a 2上面から掘り込まれていることから、縄文時代中期前葉と考えられる。
(今野)

遺構外出土遺物(図57~60、写真40)

縄文時代の遺物を除き、表土や搅乱から出土したものも含めて遺構外から出土した遺物をまとめた。遺構外出土遺物は、土師器938点、須恵器215点、陶器2点、瓦20点、土製品2点、鉄製品2点、鉄滓4,579gである。おもにL IIから出土している。図57-1は内外面とも入念なヘラミガキと黒色処理された高台付の土師器杯か椀である。高台は接合面から剥離している。2~4は、ロクロ成形の土師器杯に墨書が見られるものである。2の墨書は判読できず、人面のように見える。3の墨書は、7・10号土坑および3号溝跡出土の墨書き土器と照らし合わせると「南合」である可能性が高い。4の墨書きも「南」の一部とみられる。

図57-5~13は須恵器である。5・6は須恵器壺の口縁部片とみられる。ともに外反し、5は口唇部が上側に、6は下側につまみ出されている。内面には自然釉が認められる。7は鉢の口縁部から体部にかけての破片とみられる。口縁部が直立する器形で、体部に突帯が付く。8は長頸瓶の体部下端の破片である。外面にヘラケズリが、内面にはナデが施されている。9は鉢の口縁部から体部にかけての破片とみられる。口縁部が緩やかに外反し、口唇部が立つ器形である。10・11は大型の須恵器壺の口縁部片である。10は口唇部直下には2条の稜が付き、その下位には櫛掻きによる波状文が描かれている。類似した壺片が、2号建物跡のP 5から出土している。11は稜を持たず、波状文の下に多条の平行沈線が巡る。外面には自然釉が見られる。12・13は壺の胴部片で

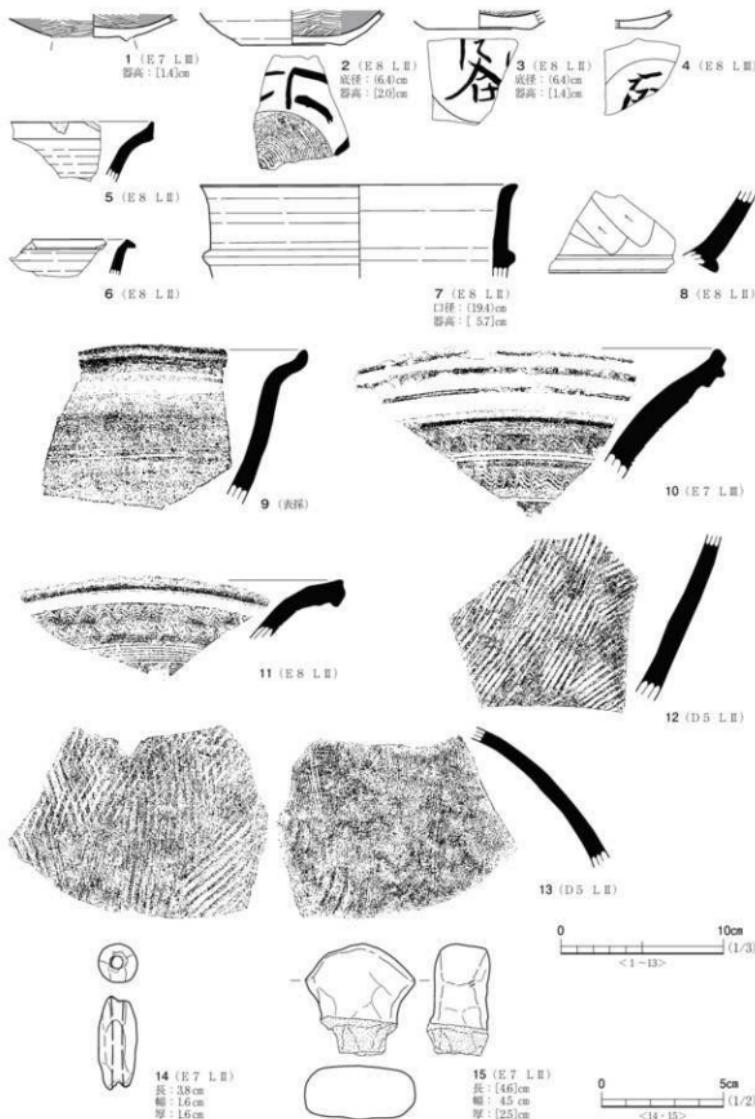


図57 遺構外出土遺物（1）

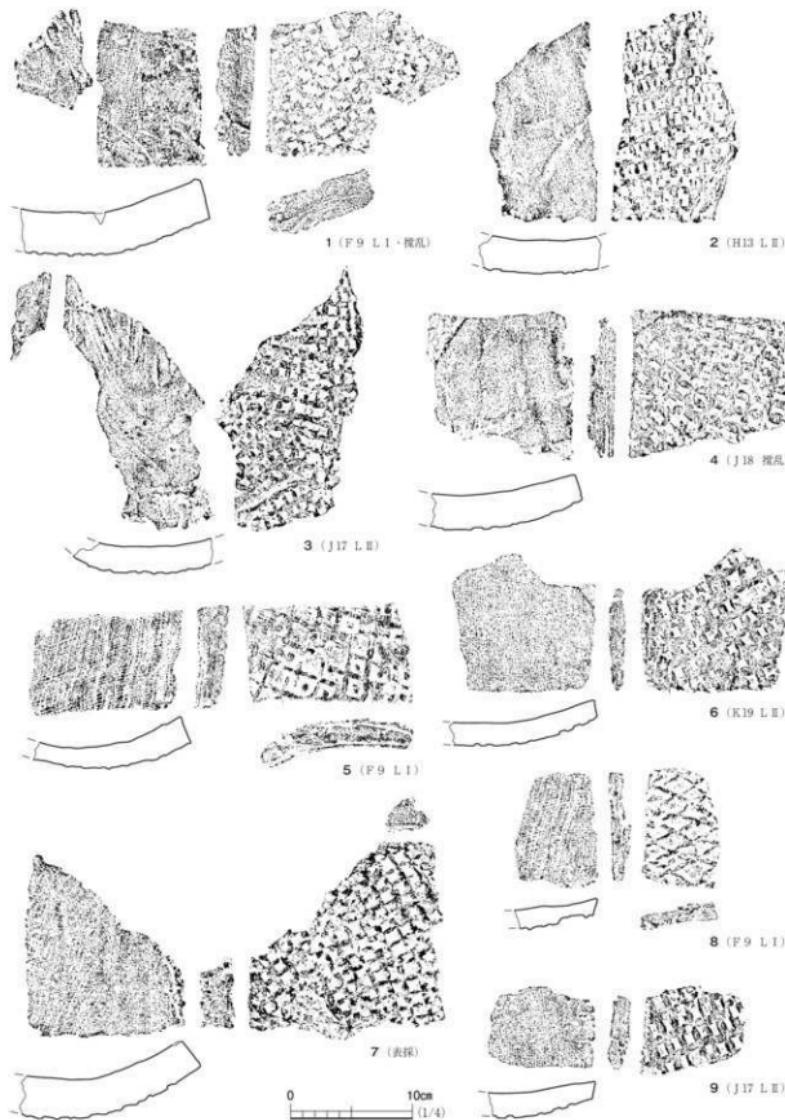


図58 遺構外出土遺物（2）

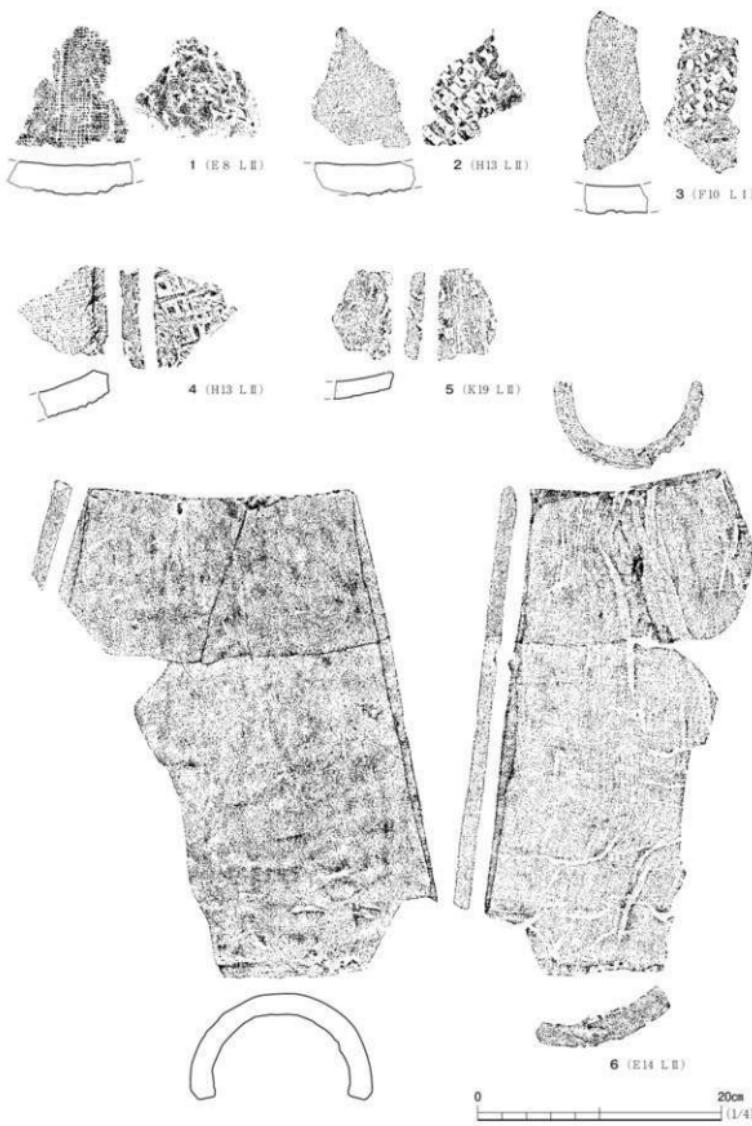


図59 遺構外出土遺物（3）

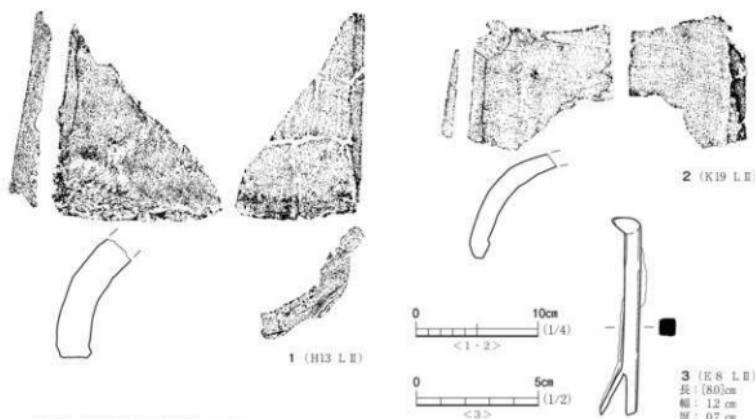


図60 遺構外出土遺物(4)

ある。外面には平行タタキ目が、内面にはナデが施されている。14は土錘である。丸い棒状を呈し、両端が細くなっている。表面には指オサエの痕跡が見られる。貫通孔が穿たれ、孔の径は4mmである。15は把手状の土製品である。図中下端のアミ点を付して細くなった部分が接合部とみられ、接合面から剥離している。15の胎土と焼成の特徴は、土師器に近似している。

図58-1～図59-5は平瓦である。厚さとタタキ目には、いくつかの違いが認められる。厚さを見ると、図58-1・2・4・7は3.0cm前後と厚手である。図58-8と図59-5は1.3cmと薄い。その他の平瓦は中間的な厚さで、2.0～2.4cmである。図58-1・3・4・7の割れ口には粘土の繋ぎ目が観察され、少なくとも2枚の粘土板を重ねてから成形したものとみられる。また3の胎土には、最も大きいもので2cmほどの小石が含まれている。凸面に施されたタタキ目は、格子状のものが大半を占める。格子状タタキ目の凸部分の断面形はテーブル状になっているが、図58-7の断面形のみ山形状である。図58-5と図59-4には回字状のタタキ目が見られる。図58-8のタタキ目は、菱形の斜格子状となっている。凹面に残る布目には、目の細かい整ったものと、図59-1のように目の粗いものとがある。

図59-6～図60-2は丸瓦である。図59-6は8号住居跡の西壁近くから出土している。両端部と両側面が、一部ではあるが遺存している。長さは40.0cm、狭端部の幅は12.2cmである。厚さは広端部で2.2cm、狭端部で1.6cmを測る。凸面には縱方向のナデが、内面には布目と輪積み痕が見られる。側面は面取りされている。表面の色は凸面が橙色、凹面が灰色である。図60-1・2も図59-6と同様に、凸面にナデ、凹面に布目、側面に面取りが見られる。ただし2のナデは、横方向に施されている。平瓦、丸瓦ともにその色調は青灰色や灰色のものが少なく、浅黄橙色や褐灰色のものが多い。また焼きムラも目立つ。図60-3は鉄製の釘とみられる。頭部がくの字に屈曲し、胴部の断面形は正方形で、先端は欠損している。

(今野)

第7節 遺物包含層

遺物包含層の概要（図61～70、写真28～36）

調査区南寄りの谷地において、縄文時代の遺物包含層が確認された。その範囲は、図61に灰色で示した。遺物包含層はK19グリッドの標高33.0m付近を北端とし、K23グリッドからM24グリッドにかけた標高32.0m付近を南端とする。調査区内における南北の長さは約50m、東西方向の幅は12～18m、その面積は620m²である。谷線は北西から南東に下り、調査区内における谷底の標高は29.5mである。遺物包含層の厚さは、最も厚い箇所で95cmである。出土した遺物の点数は、縄文土器54,442点、土製品71点、石器・石製品1,242点などである。その他に、付章第2節で同定結果を示した動物骨が1,077g出土している。なお、遺物包含層の範囲内とその周辺のLⅠ・Ⅱから出土した縄文時代の遺物についても、本節で扱った。出土した縄文土器は、以下のように分類した。

I群：早期から前期前葉のもの。

II群：前期中葉から末葉に位置づけられるもの。

1類 大木4式に比定されるもの。

2類 大木5a式に比定されるもの。

3類 大木5b式に比定されるもの。

4類 大木6式に比定されるもの。

5類 1～4の各類に並行する諸甕式、興津式など他地域に分布の中心があるもの。

6類 前期に属する粗文・地文のみの土器や胴部・底部片など。

III群：中期初頭から中葉に位置づけられるもの。

1類 大木7a式に比定されるものとこれに並行するもの。

2類 大木7b式、阿玉台式に比定されるもの。

3類 大木8a式に比定されるもの。

4類 中期に属する粗文・無文・地文のみの土器や胴部・底部片など。

遺物包含層の堆積土は、図62～65に示した。調査区の東西壁（土層A・E）および4本の土層観察用畦（土層B・C・D・F）において、堆積土の確認を行っている。遺物包含層の堆積土が厚い谷地の深部においては、基本土層のLⅢがLⅢa・LⅢb・LⅢcの3層に分かれた。LⅢaは、さらにLⅢa1～LⅢa6の6層に細分された。なお土層C・Fにおいては、動物骨を採取するため、貝層の調査と同じようなコラムサンプル（カットサンプル）を設定した。本章第1節の「基本土層」において記述した土層の説明は割愛し、以下に各層の特徴を記す。

LⅢa：炭化物粒と焼土粒を微量含む暗褐色土である。層厚は20～50cmを測る。谷地の上位にある遺物包含層の北端と南端付近では、LⅢa1～6が収斂されてLⅢaとなっている。

土層A・Dの観察においては、動物骨の混入は確認できなかった。

- L III a 1 : やや粘性があり、締まった暗褐色土である。粒径が5mm以下の炭化物を15%、同じ径の焼土粒を5%、骨片を2%、粒径1~2mmのL IVとみられる黄褐色土粒を7%含んでいる。その厚さは25cm前後である。土層Cのみで確認し、その範囲は把握していない。
- L III a 2 : 褐色土を基調とする堆積土である。土層Cにおける観察では、粒径が10mm以下の炭化物を20%、5mm以下の焼土粒を7%、骨片を3%、粒径2~3mmのL IV粒を10%含んでいる。層厚は10~40cmを測り、土層Cにおいては斜面の下位より上位の方が厚く堆積している。
- L III a 3 : 遺物包含層の中位では、混入しているL IV粒の多寡により、比較的暗い色調の堆積土と、黄褐色土などの明るい色調の堆積土が、薄く互層を成すように堆積していた。これらを一括してL III a 3とした。L III a 3には終じてL IV粒が多量に含まれることから、遺構検出時には黄褐色土の広がりとして捉えられた。堆積土中のL IV粒の割合は、3~15%程度のものから50%を超えて堆積土の主体となるものまである。土層Cでは5層に、土層Fでは7層に細分している。L IV粒以外にも、粒径10mm以下の炭化物が5~15%、焼土粒が5%以下、骨片が3%以下で混入している。層厚は、最も厚く堆積している土層B周辺で45cmを測る。土層Cでは15~20cm、土層E・F周辺では30~40cmの厚さで堆積している。
- L III a 4 : やや粘性と締まりがある褐色土である。粒径が4~5mmほどの炭化物を5%、5mm以下の焼土粒を3%、骨片を2%、3mm以下のL IV粒を3%含んでいる。その厚さは最大57cmである。土層CではL III a 2同様、斜面上位の方がより厚く堆積していた。
- L III a 5 : やや粘性と締まりがあるに弱い黄褐色土である。粒径が5mm以下の炭化物を5%、5mm以下の焼土粒を3%、骨片を2%、5mm以下のL IV粒を10%含んでいる。その厚さは最大58cmである。土層Cにおいては、斜面上位の方がより厚く堆積していた。
- L III a 6 : やや粘性と締まりがある暗褐色土である。粒径が5mm以下の炭化物を10%、3mm以下の焼土粒を3%、骨片を2%、5mm以下のL IV粒を5%、白色砂を2%含んでいる。また最大20cmほどの礫も少量含んでいた。土層Eの観察では谷地中心付近で厚く堆積し、その厚さは最大32cmである。また、土層Cと接するK 22 c グリッド付近から北方へ離れるに従い、層中に含まれる炭化物とL IV粒が徐々に減少し、粒径も小さくなっていく状況が観察された。L III a 6②は、土層Eでのみ確認した堆積土である。L IV塊を40%含むことから、L III a 6と分けた。
- L III b : 粘性・締まりともに弱い黒褐色土である。粒径が3mm以下の炭化物を2%、1mm以下の焼土粒を1%、同じく1mm以下のL IV粒を2%、小礫を3%含んでいる。土層断面の観察では骨片が確認できなかったが、水洗選別の結果では得られている。L III a 1~6に比べ、炭化物などの混入物が少なく、粒径が小さい点が特徴的である。その層厚は、10~60cmである。L III b②は土層Eのみで確認した。L III bに比べ若干明るい色調で、L IV粒を2%

含んでいる。遺物包含層南西端の斜面にのみ堆積していた。

L III c : 磺を50%含む黒褐色土である。磺は最も大きいもので30cmほどである。遺物包含層が形成された谷地の深い部分に広く堆積している。土層Cにおいては15~34cmの厚さで堆積し、その下位はL IV bとなっている。L III cから遺物は出土していない。

L III a 2~6・III b の堆積範囲と、縄文土器のグリッドごとの出土点数を図66・67に示した。薄い灰色で示した部分が遺物包含層の範囲、濃い灰色で示した部分が該当する各層の範囲である。遺物包含層の調査を開始した当初は、L III a を細分せずに遺物を取り上げた。特に土層Cより南側では、L III a を細分する以前に堆積土の大部分を掘削している。L III a を細分する以前に取り上げた土器片のグリッドごとの出土点数については、図66の左上に示した。また、特に遺物が集中して出土したグリッドにおいては、序章第6節「調査方法」で先述したように5m四方の小グリッドで取り上げた遺物がある。図66・67では、大グリッドで取り上げた土器片数はゴシック体の大きな文字で、小グリッドで取り上げた土器片数は明朝体の小さな文字で示している。例えば、L III a のL 21 グリッドにおける大グリッドで取り上げた土器片の点数は987点、小グリッドのL 21 a グリッドで取り上げた土器片の点数は147点である。

各層の堆積範囲と遺物の出土分布を見ると、L III a 2は谷地の深い部分に堆積している。遺物は、谷線より北に寄ったK・L 21 グリッドおよびL 22 a・b グリッドからまとまって出土している。特にL III a 2上面では完形品に近い土器や器形が復元可能な大型の破片が多く、土器片は斜面に沿って幾重にも重なるように出土している。その状況を図68、写真34・35に示した。図68に示した土器の分類と遺物番号は以下の通りである。

III群1類：図129~3、図133~1、図136~1・2

III群2類：図163~1~3、図164~1、図165~1~2、図167~1、図168~1、図169~1、図170~1~2、図171~1、図173~2~4、図174~3~4、図176~2~3、図177~1~3、図178~1、図179~1~9、図180~4、図184~3、図185~2

III群4類：図195~2、図196~2~4、図197~1~2、図198~5、図199~4~6、図200~1~4~6~8~10、図201~1~3、図202~1~10

出土した完形品に近い土器や大型片はIII群2・4類が大多数を占めている。この中で、図171~1は、L 21 d グリッドから横位に潰れた状態で出土している。また図200~9~10は、9が10の内側に重なった入れ子の状態で伏せられたように出土した。

L III a 3も、L III a 2と同様に谷地の深い部分に堆積していた。遺物が多く出土する範囲はL III a 2と異なり、谷地の深部から南側の斜面にかけてである。特にK・L 22 グリッドからは、比較的大きな破片がまとまって出土した。その出土状況を図69、写真36 a・cに示した。図69に示した土器の分類と遺物番号は以下の通りである。

III群1類：図126~1、図130~2、図131~1~3、図132~1、図151~8、図152~2、図155~5、図156~22、図157~1

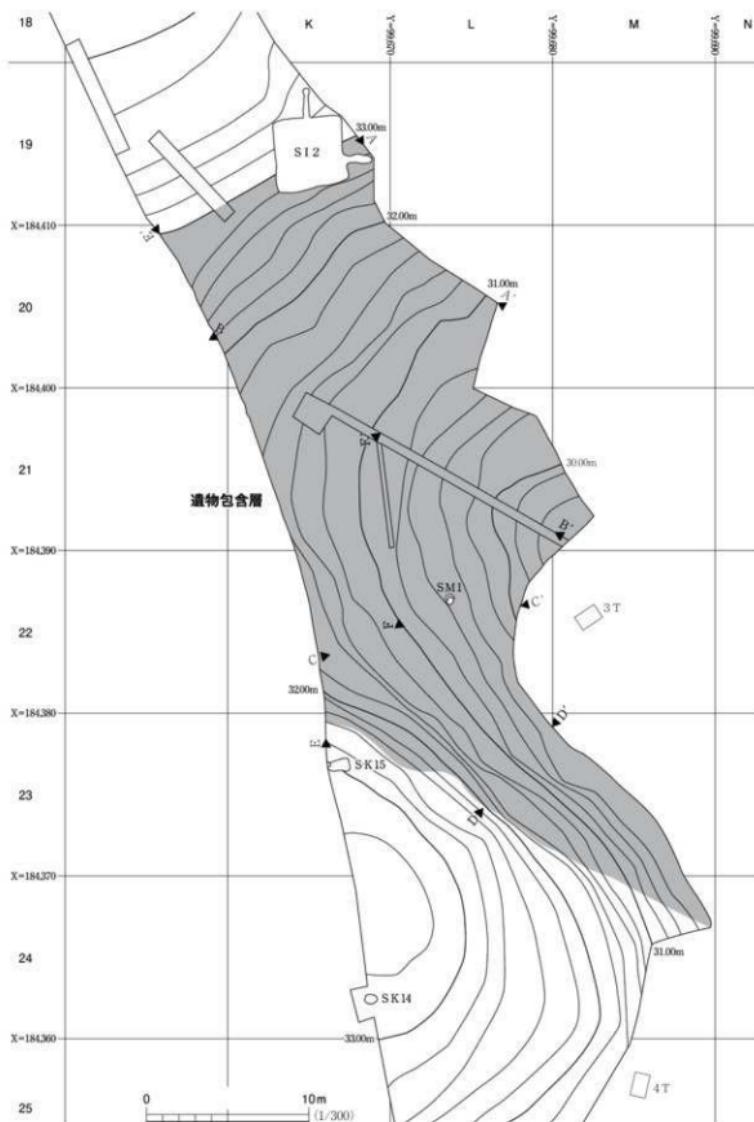


図61 遺物包含層

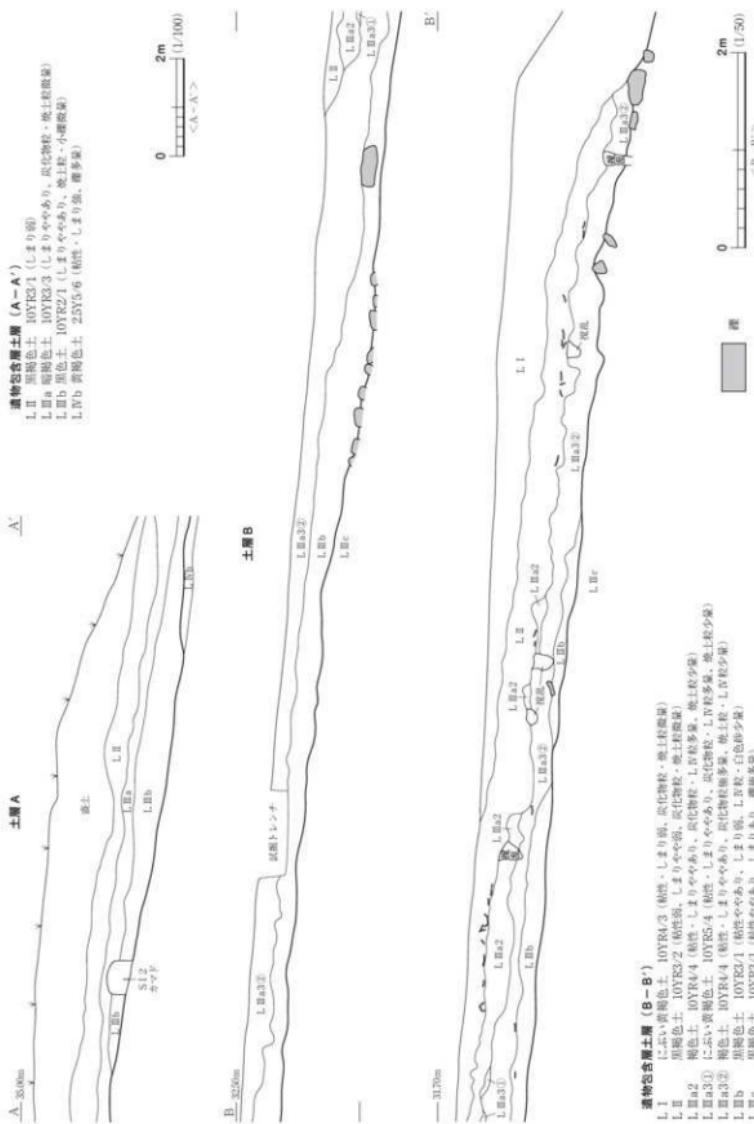


図62 遺物包含層土層図（1）

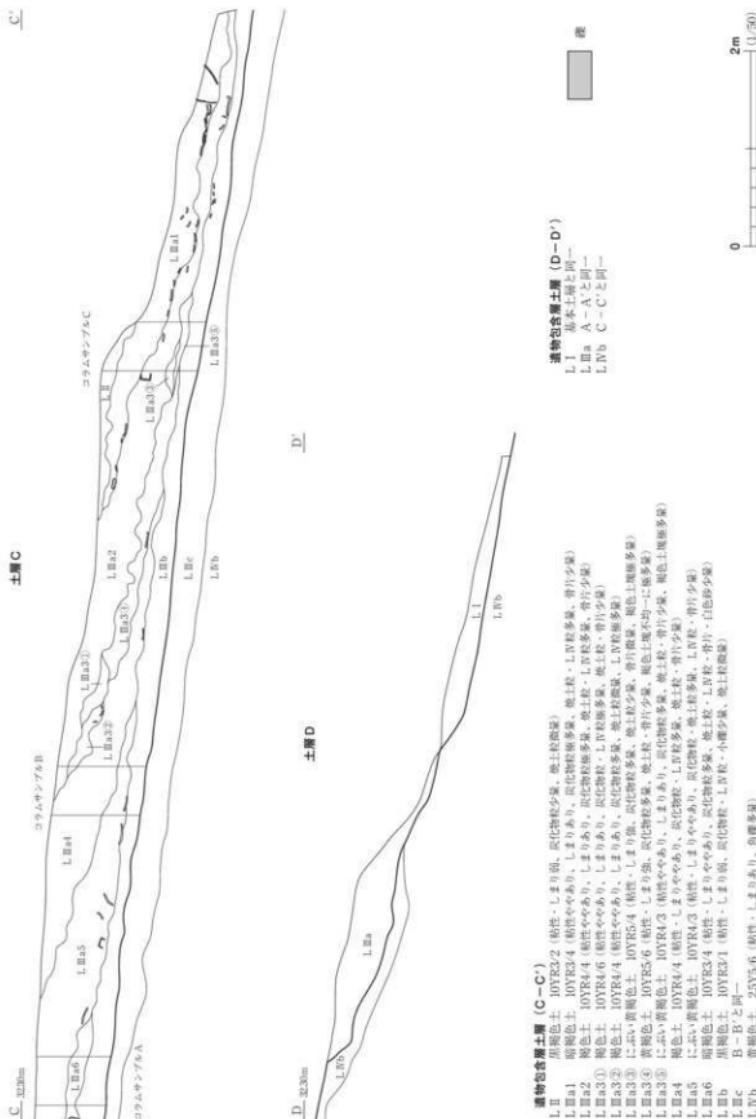


図63 遺物包含層図 (2)

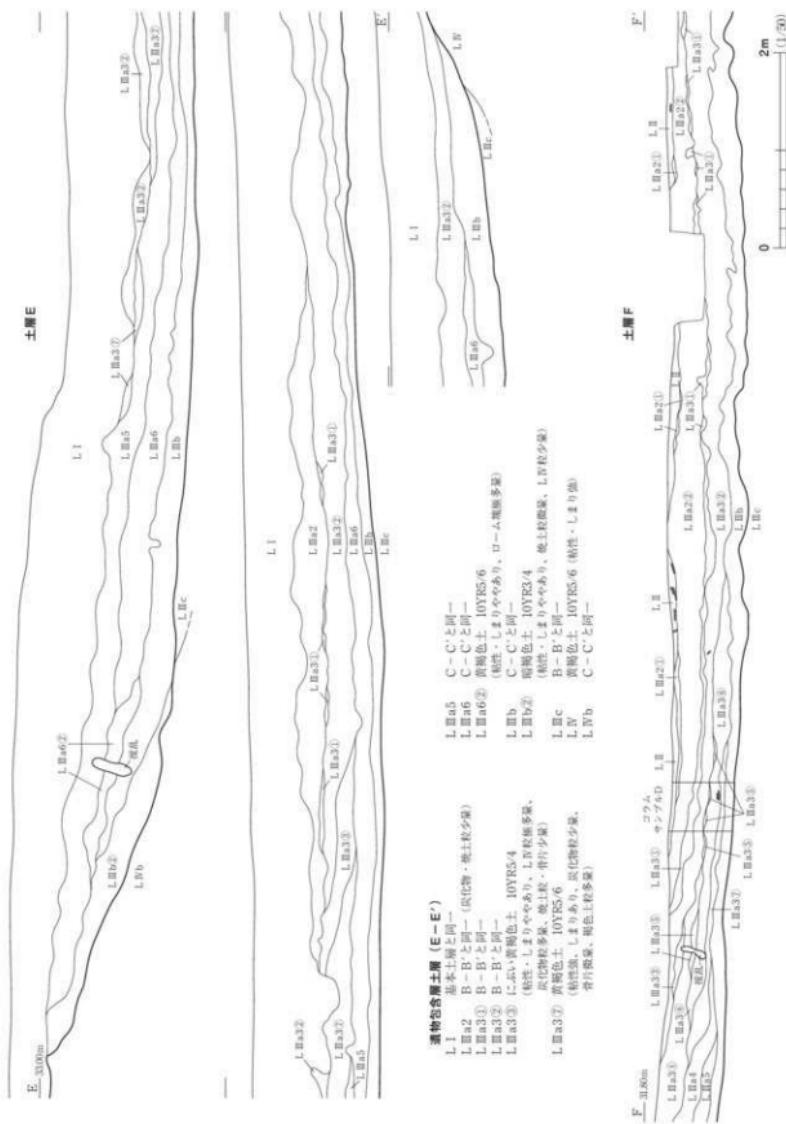


図64 遺物包含層土層図（3）

遺物包含層土層 (F-F')

L II	C - C'	同一
L III a2①	褐色土 10YR4/6 (粘性強・しまりあり、炭化物粒・L IV 粒多量、燒土粒・骨片少量)	L III a4 C - C' と同一
L III a2②	暗褐色土 10YR3/4 (粘性・しまりややあり、炭化物粒・L IV 粒多量、燒土粒・骨片少量)	L III a5 C - C' と同一
L III a3①	B - B'	L III b B - B' と同一
L III a3②	B - B' と同一	L III c B - B' と同一
L III a3③	にぶい黃褐色土 10YR5/4 (粘性強・しまりあり、炭化物粒少量・燒土粒多量、骨片微量)	
L III a3④	暗褐色土 10YR3/4 (粘性・しまりややあり、炭化物粒・L IV 粒多量、燒土粒・骨片少量)	
L III a3⑤	黃褐色土 10YR5/6 (粘性強・しまりあり、炭化物粒・骨片少量、燒土粒微量、褐色土粒多量)	
L III a3⑥	褐色土 10YR4/4 (粘性・しまりややあり、炭化物粒・L IV 粒多量、燒土粒・骨片少量)	
L III a3⑦	E - E' と同一	

図65 遺物包含層土層図 (4)

表2 動物骨出土量一覧

コラムサンプルA		コラムサンプルC		層位	骨(g)	%
No	層位	骨(g)	No			
A 1	L III a5	3.5	C 1	L II	12	29.4
A 2		2.2	C 2		-	1.2
A 3		1.8	C 3		0.4	0.1
A 4		4.7	C 4		1.4	4.4
A 5		6.7	C 5		2.7	5.8
A 6		8.4	C 6		2.2	8.5
A 7		15.8	C 7		1.8	40.2
A 8		8.6	C 8		14.8	10.6
A 9		5.3	C 9		12.4	13.5
A 10		6.9	C 10		11.6	10.3
合計		57.9	C 11		11.5	41.9
			C 12		2.28	39
			C 13		13.7	合計 1077.2 100.0
コラムサンプルB		コラムサンプルD		※サンプルの寸法は、長50cm×幅50cm×厚5cmを基本としている。		
No	層位	骨(g)	No	層位	骨(g)	%
B 1	L III a4	5.6	D 1	L III a2②	1.8	
B 2		1.9	D 2		24.7	
B 3		7.8	D 3		24.1	
B 4		9.7	D 4		30.2	
B 5		27.1	D 5		9.4	
B 6		13.8	合計		90.2	
B 7		16.8				
B 8		11.6				
B 9		6.3				
B 10		10.7				
B 11		5.2				
B 12		4.4				
合計		120.9				

III群4類：図190-4、図191-2・5、図192-2・3・4・6、図193-1・4・5、図194-2・

図199-1、図201-4、図206-19、図211-11

小型土器：図212-7・12・13

L III a 4は、谷線より南側の斜面地であるK・L 22グリッドで確認した範囲が限定的な土層である。L III a 5も、谷線より南側の斜面上位にあたるK 22グリッド付近に堆積している。K 22 bグリッドにおけるL III a 5の遺物出土状況を図70上段と写真36 dに示した。その分類と遺物番号は以下の通りである。

II群4類：図84-6

II群6類：図115-2、図116-4

III群1類：図125-1

III群4類：図190-6

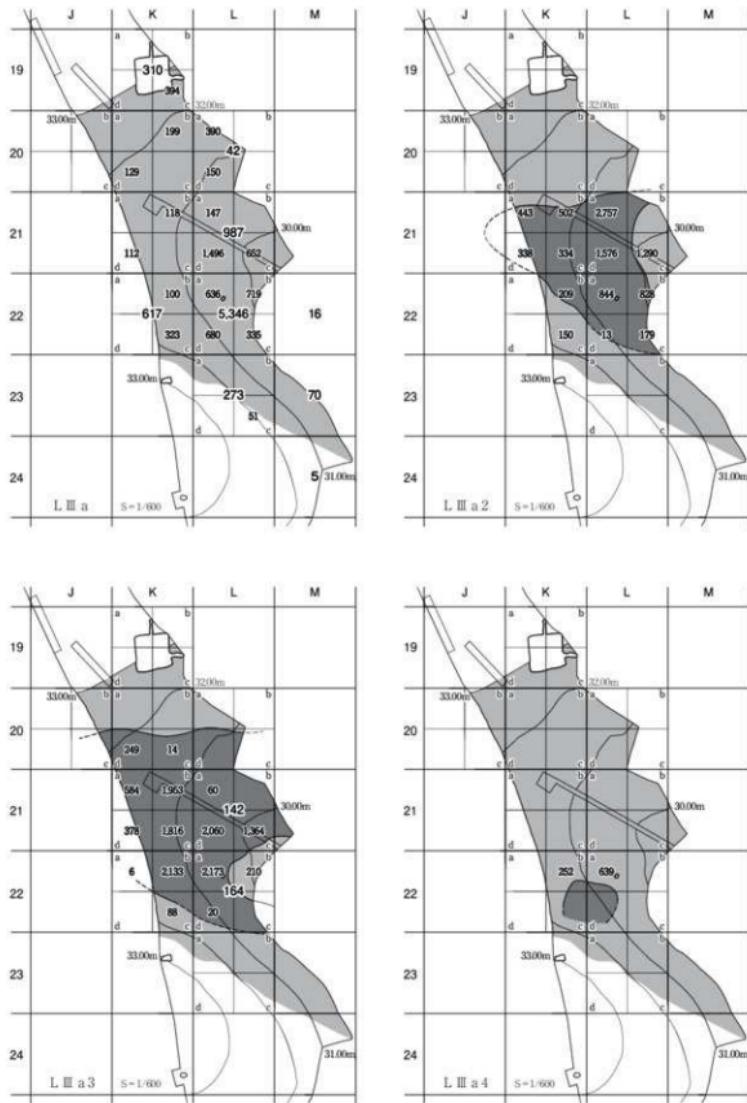


図66 遺物包含層出土土器分布図（1）

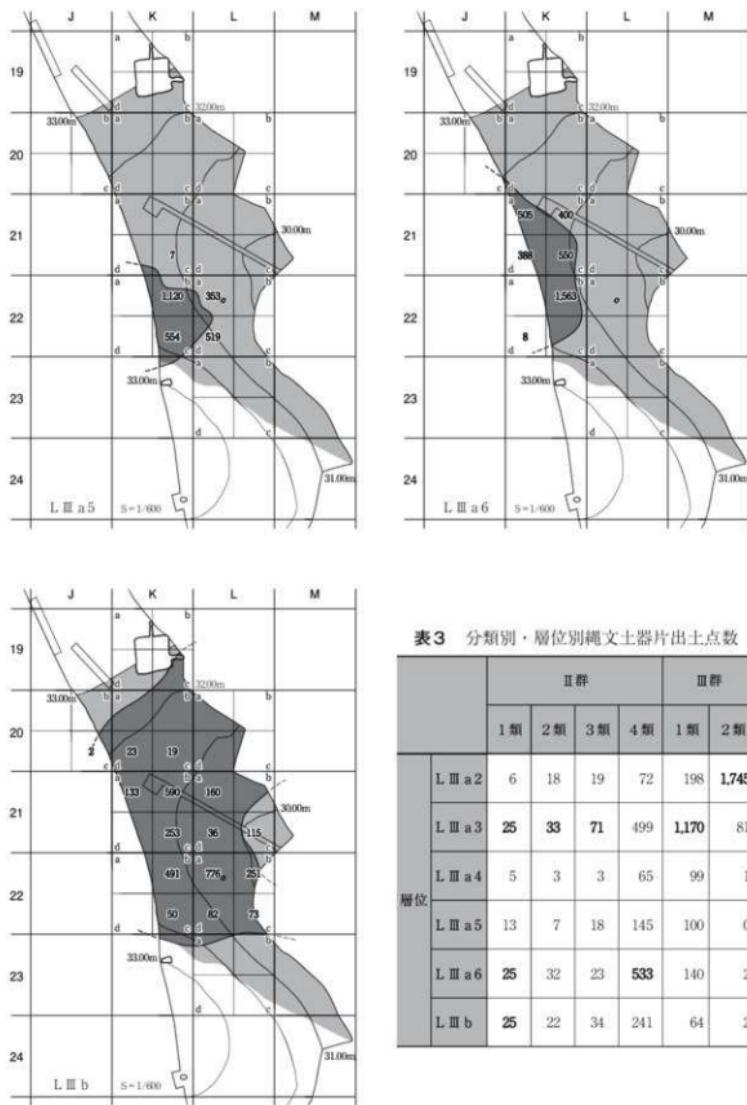


図67 遺物包含層出土土器分布図（2）

表3 分類別・層位別縄文土器片出土点数

		II群		III群			
		1類	2類	3類	4類	1類	2類
L III a2		6	18	19	72	198	1,745
L III a3		25	33	71	499	1,170	81
L III a4		5	3	3	65	99	1
L III a5		13	7	18	145	100	0
L III a6		25	32	23	533	140	2
L III b		25	22	34	241	64	2



図68 K・L21グリッドL III a 2遺物出土状況

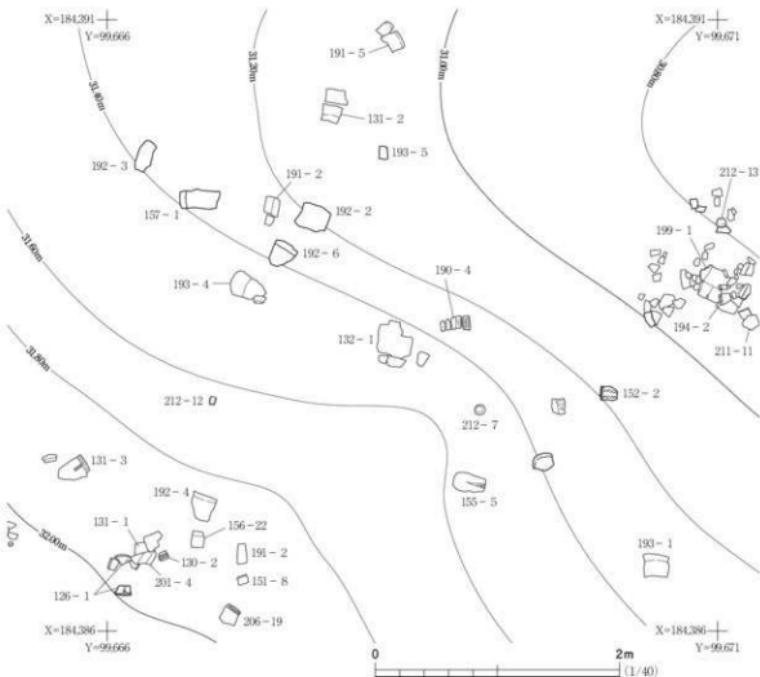


図69 K・L 21・22グリッドL III a 3遺物出土状況

また、図70中段および写真36 f・gには、K 22 c・L 22 d グリッドの遺物出土状況を示した。その分類と遺物番号は以下の通りである。

II群1類：図71-1

II群4類：図83-3・4

II群6類：図112-2、図119-8、図122-3、図123-3

小型土器：図213-1

L III a 6は、斜面上位にあたる調査区西際のK 21・22グリッド付近に堆積していた。図70の下段と写真36 eには、比較的大きな破片がまとまっていたK 22 bにおける出土状況を図示した。その分類と遺物番号は以下の通りである。

II群4類：図82-1、図83-2、図89-7、図91-8、図93-19、図97-1

II群6類：図111-5、図121-2

L III bは、遺物包含層の南北端を除くほぼ全域に堆積していた。遺物は、調査区内における斜面中位のK 21 b・c グリッドや、谷線より南側のK 22 b・L 22 a グリッドから比較的多く出土している。

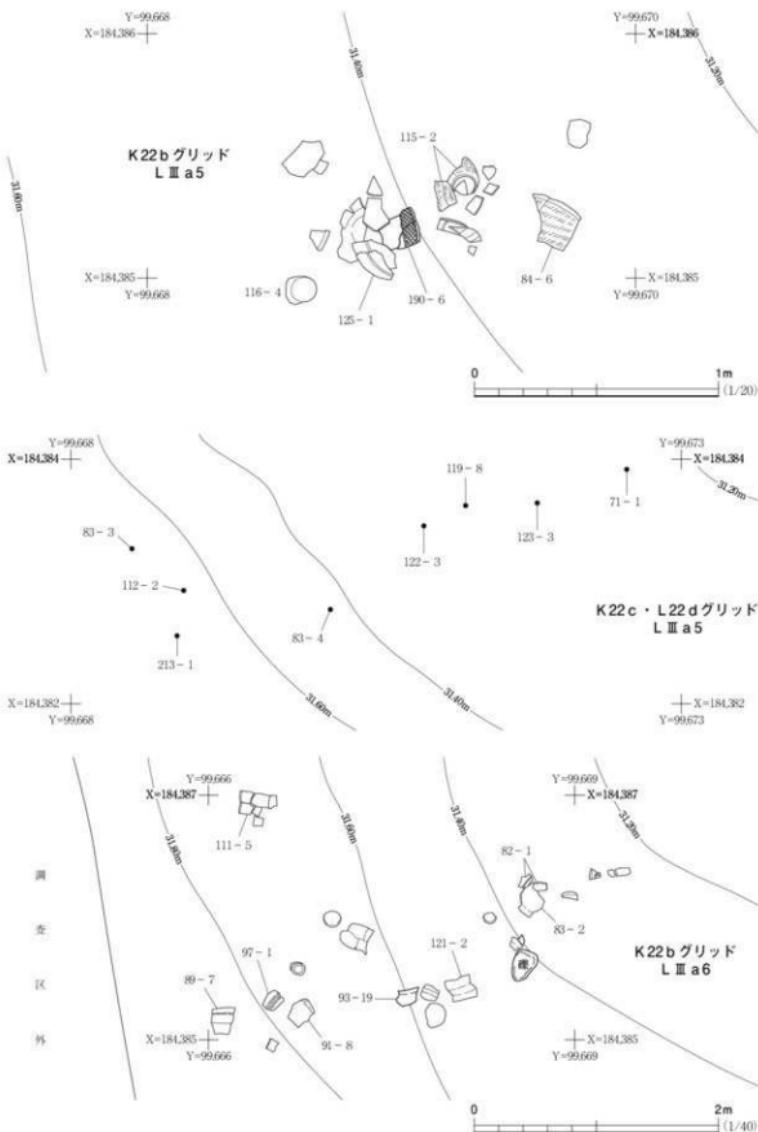


図70 K・L22グリッドLⅢ a5・6遺物出土状況

表3には、各層から出土した群類ごとの点数を示した。有文の土器片のみを数え、細別が難しい胴部片や粗文・無文のもの、底部片は含めていない。また、出土数が少ないI群・II群5類・III群3類の破片数は割愛した。表3に示した点数は、遺物包含層から出土した土器片数の約1割である。これを見ると、L III a 2からの出土土器片数はIII群2類が大多数を占め、III群1類がこれに次ぐ出土数である。この状況は、図68に示した大型片の出土状況と一致している。L III a 3ではIII群1類が大多数を占め、これに次ぐのはII群4類である。L III a 4においてもIII群1類が最も多く、II群4類がこれに次ぐが、L III a 3に比べるとその差は僅差と言える。また、L III a 4以下からのIII群2類の出土数は皆無に近い。L III a 5からL III bにおいては、II群4類が最も多く出土し、III群1類がこれに次いで多い。また層位間における遺物の接合関係を見ると、II群5類の図109-4は、L III a 3～5・III bから出土した破片が接合している。他にもIII群1類の図128-1はL III a 2・3・5、同図3はL III a 3・6、同図4はL III a 3・5から出土した破片が接合している。

L III a 1～6は、丘陵上の平坦地におけるL IIIと異なり総じてL IV粒が多く、多量の炭化物や焼土粒が含まれている層が大半を占める。多くの遺物や食物残滓とみられる骨片が出土することから、L III a 1～6は人為的な堆積土である可能性が高い。土層Cにおいては、L III a 2・4・5が斜面下位より上位の方が厚く堆積している不自然な堆積状況にあることも、人為的な堆積土であることに起因すると考えられる。L III bについては、L IV粒などの混入物は比較的少ない。ただし遺物と骨片が少なからず出土していることから、やはり人為的な堆積土と考えられる。

以上のことから遺物包含層の形成過程をまとめると、土層観察の結果と遺物の出土状況から見て、L III b～L III a 4は前期後葉から中期初頭にかけての堆積土と推察される。ただし、いわゆるプライマリーな状態とは言い難い。遺物を包含する最も下層のL III bやL III a 6からはII群4類が多く出土することから、遺物包含層の形成は前期末葉に本格化したものと推察される。III群1類が多く出土するL III a 3は、中期初頭の堆積土と考えられる。L IV粒を多く含むことから、この時期に最も盛んに丘陵上の土が谷地へ廃棄され、遺物包含層の形成が進んだものとみられる。また、L III b～L III a 4からはIII群1類が相当数出土し、かつL III a 3からII群1～4類が少量ながら出土している。このことから、中期初頭に一旦谷地に堆積した土が再度動かされるような何らかの行為が行われたものと考えられる。

L III a 2は、表3に示した分類別出土数と大型片が密に出土している状況から、中期初頭から中期前葉にかけての堆積土と考えられる。III群2類はL III a 4以下からほとんど出土せず、また図163～188に示したL III a 2出土のIII群2類が他層から出土した破片と接合した例はない。このことから、L III a 2の堆積後は比較的プライマリーな状態が保たれたものと考えられる。中期中葉以降は、遺物包含層の形成は止まったかに見える。J 18やK 19グリッドのL IIからIII群3類が比較的まとまって出土する程度で、これ以降の縄文時代の遺物は認められない。

動物骨（表2・7）

遺物包含層からは動物骨が1,077g出土している。表2にコラムサンプルから得られた動物骨と、

手で拾い上げたものも含めた各層ごとの動物骨の出土量を示した。序章第6節「調査方法」でも述べたように、コラムサンプルを土層Cに3箇所(A～C)、土層Fに1箇所(D)設定した。コラムの寸法は50cm角とし、コラムサンプルA～Cに関しては厚さ5cmで機械的に輪切りにした。輪切りにした堆積土を1単位とし、上位からA 1～10というように番号を付けた。コラムサンプルDに関しては、層位を意識してD 1～5に分割した。サンプルは、10mmメッシュの籠を用いて乾ぶるいした後、ザルと1mmメッシュの籠で水洗選別を行い、動物骨を採取した。

動物骨の同定結果は、付章第2節の表7に示した。同定した資料数が少なかったこともあり、出土層位ごとの同定結果の偏りといった有機的な関係は見出せなかつた。表2に示したコラムサンプルA～Dの集計結果を見ると、L III a 2より上位やL III bに比べ、L III a 3～6からの出土量が多い傾向が窺える。この傾向は、手で拾い上げた動物骨も含めた層位ごとの出土量ではより顕著である。各層の土量が異なることから単純な比較はできないが、L III a 3からの出土量が全体の約4割を占め、他層に比べ著しく多い。L III a 4～6からの出土量も、堆積範囲が狭いにも関わらず各々全体の1割を超えている。下層から順を追えば、L III bでは少なかつた出土量がL III a 6以降増加し、L III a 3でピークを向かえ、L III a 2以降減少するといった推移を辿るように見える。

このような動物骨の出土量の推移は、表3に示したIII群1類土器の各層からの出土数の推移とよく似ている。このことから、表2の結果は中期初頭に動物骨の廃棄が盛んに行われた可能性を示す傍証と考えている。また、中期初頭に遺物包含層の形成が最も進んだとみられる土層観察の結果とも一致している。

縄文土器

I 群土器 (図73)

図73-1～7が該当する。1には、半裁竹管状工具の凹面(以下、半裁竹管と記す)を用いた横位の平行沈線と角張った棒状工具の先端による連続刺突が施されている。2は、細隆起線によって区画された無文帯と、充填的に用いられた条線文が特徴的である。3・4・6には、横位の羽状繩文が施されている。内面には横ナデによる線状痕が見られる。5は外面に0段多条繩文、内面に条痕文が認められる土器である。7は半裁竹管を用いた連弧文と、同じ工具の先端による刺突列が特徴的である。なお、2～7の胎土には纖維混和痕が確認でき、特に7では顕著に認められる。各土器片の特徴から、1は田戸下層式、2は鞠ヶ島台式とみられる。3～6は早期末葉から前期前葉の土器とみられる。7は大畠G式かこれに並行する時期の土器であろう。

II 群土器

1 類 (図71・73・74、写真41・42)

図71-1～4と図73-8～図74-20が該当する。1類は、粘土紐の貼付けや小波状の口縁が特徴的である。図71-1は頸部がなく、球形状の胴部がそのまま内湾して口縁に至る器形である。小波状の粘土紐と、これに沿わせた2本一組の粘土紐が口縁を巡る。粘土紐は胴部上半にも、間隔

を空けて縦方向に貼り付けられ、波状文や渦巻文が表されている。内面には丁寧な横ナデが施され、ハケメ状の条線が顕著に残る。

同図2は、口縁部が緩やかに外反して開く。口縁に逆V字状の突起が4単位で貼り付くものとみられる。3は胴部が外傾して開き、口縁部は立ち上がる。口縁部は指先で押さえられ、通常の波状口縁のような縦方向ではなく、横方向に小さく波打っている。内面には横ナデが施され、光沢はない。4は、直線的に開くバケツのような器形と推定される。口縁部直下に、太く短い2本一組の粘土紐が等間隔で貼り付けられている。

図73-8~24は、図71-1に近似した細い粘土紐を貼り付け、波状文などが表されたものである。同図25~29は、口唇部と加飾された粘土紐との隙間が撫でつけられている。II群2類に多用される鋸歯状装飾体に近い装飾だが、粘土紐が2類に比べ細く波状を成すため1類とした。同図30~図74-2は、図71-3のように口縁部が横方向の小波状を成すものである。このような小波状の口縁部は、波状の粘土紐の貼付文を簡易に表現したものと推察される。このうち図73-31は、頭部に平行沈線と半截竹管による刺突列が施されている。図74-4・5は、口唇部に指先を用いたとみられる楕円状の压痕が連続的に加えられている。

図74-6~16には、細い粘土紐により幾何学的な文様や梯子状の文様が描かれたものを示した。13の粘土紐には円形の刺突が、15・16には刺みが加えられている。17は、口縁部に円形刺突が施されたものである。18・19には沈線文が見られる。特に18は非常に細い沈線により、同図7に類似した幾何学的な文様が描かれている。20は口唇部に短い貼付文が施されている。

2 類 (図71・74~78、写真43)

図71-5、図74-21~図78-4を本類とした。本類は、鋸歯状を成す粘土紐の貼付けや沈線文が特徴的である。本類の器形には、図71-5のように胴部が膨らみ、頭部が緩く括れて口縁部が外反するものと、頭部がなく胴部から口縁部まで直線的に開くか緩く外反して開くものがあると推察される。また本類の地文は横位の縄文が大半を占め、図75-5・7・21のような撫糸文も見られる。器面の色は暗褐色や褐色のものが目立ち、稀に赤褐色や黄橙色のものも見られる。文様や器形の特徴からa~c種に細分した。

【a種】ドーナツ形の突起や鋸歯状装飾体が付くものと、粘土紐による鋸歯状の貼付文が認められる土器である。図74-21~図75-27が該当する。図74-21~24はドーナツ形の突起が付くものである。22の突起には刺突が加飾され、22~24の口縁部には粘土紐の貼付文が見られる。図74-25~図75-9は、太い粘土紐による鋸歯状の装飾が付くものである。このうち5は粘土紐上にも地文が、9には刺突文が施されている。本類の鋸歯状装飾体は、1類の波状の粘土紐が口唇部に乗るように貼り付いているのに対し、口縁部に貼り付くように立ち気味に付く傾向がある。図75-10~27には、粘土紐による鋸歯状の貼付文が見られる。粘土紐は、細かく切って貼り付けられている。鋸歯文は横位に1~3条施されるものが目立ち、19・20のように上下を直線的な貼付文で区画するものや、25のように縦方向にも鋸歯文を施したものがある。10は台形状の突起で、口唇

部に楕円形の刺突が施されている。

【b種】沈文線が描かれた土器で、図76-1～図77-15が該当する。地文上に横位の鋸歯文が重層的に描かれたものが多い。図76-13は、無文地の口縁部に粗雑な鋸歯文が描かれている。同図23の鋸歯文が集まる交点には、円形の貼付文がある。図77-3は上下の鋸歯文を弧線で繋いでいる。それ以外の文様には、図76-12の連弧文や、同図26の山形突起に描かれた斜格子文、図77-4に見られる綫長の楕円文、同図5の重菱形文がある。同図6-8は頭部に数条の平行沈線が巡る。11-15は綫長の貼付文が見られる土器である。これらには山形突起の頂点に付く12-14と、一对の貼付文が胴部に付く11・15がある。

【c種】刺突により文様が描かれた土器である。図71-5、図77-16～図78-4が該当する。図71-5は、頭部がわずかに括れて口縁部が緩やかに外反する器形の深鉢である。口唇部直下に、角張った棒状工具の先端で施した刺突列が巡っている。頭部には、半裁竹管による刺突列が平行する。地文は横位のR Lである。口縁部の内面には、指で押された痕跡が残されている。胴部には、横ナデが加えられた際の砂粒による線状痕が見られる。

図77-16は、口縁部に角棒状工具の先端で3条の刺突列を巡らせており、同図17-19は同一個体とみられ、頭部に押引文に近い2条の連続刺突を加えている。同図20・22・23・25は無文地の口縁部に、半裁竹管による刺突列を描いている。このうち25は内外面に入念なミガキが加えられている。図77-21・24の刺突には、円形の工具が用いられている。図78-1・2はC字形の刺突列が描かれ、このうち1の口唇部直下には短沈線が並ぶ。図78-3は山形の、同図4は円形の突起部で円形の刺突により加飾されている。

3 類 (図71・72・78-81、写真41・44・45)

図71-6～図72-4、図78-5～図81-23が該当する。文様の特徴からa～d種に分けた。

【a種】口縁に鋸歯状の装飾体や連続する刻みがなく、細い粘土紐の貼付けにより鋸歯文が描かれた土器である。図78-7～13が該当する。2類と同様に、粘土紐を短く切って貼付け、鋸歯文を表している。2類より鋸歯の間隔が詰まったものを本類とした。図78-7は、大きな半円形の突起とみられ、突起には貫通孔がある。8はやや肥厚した口縁部片である。口唇部直下に2本の平行する粘土紐を巡らし、粘土紐には細かい間隔で爪形文を加えている。9～11は同一個体である。波状口縁の深鉢片とみられ、口縁部に鋸歯文が貼付けられている。11には垂下する粘土紐と円形の貼付文が見られる。12・13は円形の刺突が加えられた隆帯が特徴的である。12は鋸歯文の下端を、刻みを加えた粘土紐で区画している。

【b種】口縁に鋸歯状の貼付文や刻みがなく、頭部・胴部に沈線文が描かれた土器である。図71-7、図72-1、図78-14～17、図81-18～23が該当する。図71-7は胴部がやや膨らみ、頭部が緩く括れて口縁部がわずかに開く器形である。口縁部は若干肥厚し、低い山形突起が4単位で付く。頭部と胴部上半を沈線で区画し、その中に斜格子文を描いている。胴部下半には、楕円文と斜線が描かれている。図72-1は、直立気味の胴部下半から胴部上半が大きく膨らみ、口縁部が外折する器形

である。図71-7と同様、頸部から胴部上半を沈線で区画し、その区画線に沿って相対するように弧文と三角文が交互に描かれている。無文の口縁部と内面には入念なミガキが施されている。

図78-14・15は、複合口縁状にやや肥厚した口縁の下に平行沈線で波状文が描かれている。同図16は押引沈線文で上下が区画された中に、波状文が見られる。17は口縁部がやや肥厚し、対弧文が描かれている。図81-18～23の胴部片は、図71-7や図72-1、図78-17に近似し、平行沈線で対弧文や波状文が描かれている。

【c種】口縁に鋸歯状の装飾体を有する土器である。図78-18～図79-7が該当する。2類より鋸歯の間隔が密なものを本類とした。本類の鋸歯状装飾体は、2類よりさらに口縁部に貼り付くよう立つ傾向が窺える。図79-3は鋸歯文の谷部分が細長い刻みに変化し、d種に近い。同図5・7は口唇部に刻みを加え、口縁部下端は三角形に切り欠いて鋸歯状に表している。胴部文様を見ると、図78-21にはa種の粘土紐の貼付による波状文がある。同図22には連続刺突文が描かれている。同図23～図79-5には沈線による鋸歯文が、図79-6には対弧文が見られる。

【d種】口唇部や口縁部下端に、刻みや刺突列が施された土器である。図71-6、図72-2～4、図78-5・6、図79-8～図81-17が該当する。本種を特徴づける刻みや刺突列は、鋸歯状の装飾体から退化したものと推察される。立体的な装飾体から、平板な刻みの入った口縁部への変化は漸移的である。

図71-6は、胴部から口縁部にかけて緩やかに外反して開く器形である。口唇部の上下端がやや肥厚し、そこに連続的な刻みが加えられている。口縁部の直下には横位区画の文様帶があり、細い粘土紐により鋸歯文や弧文が描かれている。内面には丁寧なミガキが施され、胎土中には白色の砂粒が目立つ。図72-2は、胴部がやや膨らみ、頭部が緩く括れて口縁部が開く器形である。口縁は小波状に成形され、口縁部下端には円形竹管状工具によって楔形の刺突を加えている。頭部の狭い文様帶には、半截竹管によって鋸歯文を食い違うように描き、連続する菱形文を表している。同図3は頭部がわずかに括れる器形の、大型の深鉢片である。口縁に双頭の山形突起が付く。口縁部は若干肥厚し、その下端の頭部との段差部分に、粗く縱方向の刻みが施されている。胴部には補修孔が穿たれている。胎土中には小石が目立つ。同図4は、直線的に開くバケツ形である。3同様、やや肥厚した口縁部の下端にのみ、刻みが加えられている。胴部には、横回転の結節回転文が認められる。口縁部と内面には、入念なミガキが施されている。

図78-5・6、図79-8～図80-2は、口唇部と口縁部下端のいずれにも刻みまたは刺突が加えられたものである。図78-5・6は同一個体とみられる。ごく小さな台形状突起が付き、口縁部には間隔を空けて孔がある。孔は小さく、貫通孔と盲孔とがある。口縁部直下には、2本の粘土紐で区画された中に細かい鋸歯文が表されている。図79-13は、刺突を加えた縱長の貼付文が特徴的である。同図14・16は山形突起である。21は口唇部を横方向の波状に細かく折り曲げ、口縁部下端には円形の刺突を加えている。図80-1は頭部に、斜めに刻みを入れた低い隆帯が付く。

図80-3～5は、口唇部のみに刻みが加えられている。3の無文地の口縁部には、細い沈線で

粗雑な鋸歯文が描かれている。図80-6～図81-17は、口縁部下端にのみ刻みや刺突が加えられた土器である。図80-27には、同図1のような刻みが施された低い隆帯が見られる。図81-2の刻みには、L Rの縄文原体が用いられている。同図3・4は口縁部の上寄りが厚くなり、4類の可能性がある。8・9は口縁部下端の刺突列が口縁から独立し、半ば頭部の隆帯と化している。14～17の刺突には半裁竹管の先端が用いられ、C字状や矢羽状をなしている。d種の胴部文様にはa～c種と同じく、沈線による波状文や鋸歯文、弧線文、平行沈線文がある。粘土紐の貼付文が見られるのは、図78-5・6のみである。図79-15は、押引文に近い刺突列で文様が描かれている。胴部が地文のみの粗製的な土器も目立つ。

4 類 (図82～108、写真46～61)

図82-1～図107-1～6・8～図108-20を本類とした。口径を復元した土器から本類の器形を見ると、胴部が膨らみ口縁部が外反して開くものを基調とする。3類に比べ頭部の括れが強く、口縁部が大きく開く傾向がある。図82-2のように胴部が丸く膨らみ底部に向かって窄まる球胴形と、図88-2・3のような長胴形がある。胴部の地文は横回転が大多数で、結節回転文が散見される。器形の特徴や文様からa～k種に分けた。

【a種】口縁部が肥厚し、頭部に斜めの刻みを加えた椎の籠を思わせる隆帯(以下、籠状隆帯と記す)が巡る土器である。図82-1～3、図85-3～5、図89-1～図90-13を本種とした。図82-1は胴部の膨らみが弱い。口縁には高さのない山形突起が5単位で付く。同図2は球形の胴部を有し、籠状隆帯には縄文原体により刻みが施されている。同図3は口唇部が大きく外反し、扇形になる突起が特徴的である。1～3とも胴部は地文のみである。

図85-3は4単位の波状口縁とみられ、波頂部からは短い突起が垂下する。波頂部間の口縁にも、小さな一対の貼付文が付く。複合口縁状に肥厚した口縁部の上下端には、3類d種に見られた縱長の刻みが施されている。胴部上半には、籠状隆帯と沈線で区画された幅の狭い文様帯がある。文様帯は、円形の貼付文を伴う2本の粘土紐によって縱方向にも4分割され、区内には沈線による鋸歯文が描かれている。口縁部の刻みや粘土紐の貼付けは3類と共通する文様要素である。しかし、胴部が球形なこと、口縁部が大きく外反すること、口縁部が顯著に肥厚するといった器形の特徴から本類に含めた。同図4・5は、平口縁の球胴形の深鉢である。4の胴部には上下幅の狭い文様帯内に鋸歯文が描かれている。5の胴部には菱形文が描かれ、それを平行沈線で繋いでいる。5は他の土器に比べ、胎土中に小石が目立つ。

図89-1～図90-5は、図82-1・2のように地文のみの破片である。口縁部の形態には平縁と、図89-1・2のような山形突起や同図8のような台形状突起が付くものがある。8は隆帯が低く、2条の爪形文が並ぶ。14・15には、縄文原体で刻んだ隆帯が2条付く。図90-6～13は有文の破片である。6は山形突起の直下に円形の突起が付く。7・8は口縁部に、9・10は胴部に爪形文が見られる。11は口縁部に粘土紐で弧線を描き、円形の貼付文を施している。12は山形の波状口縁で、籠状隆帯と沈線で区画された幅の狭い文様帯に波状文が描かれている。13も波状文

が重層的に描かれ、その下位にさらに鋸歯文や円形の貼付文、短い凹線文が見られる。

【b種】肥厚した口縁部の下端に、三角形の切り欠きや楕円形の押捺文が施されたものである。図82-4～図83-1、図91-1～11が該当する。器形はa種同様、胴部が膨らみ口縁部が開くものが多い。図82-5と図83-1は頭部の括れが比較的弱く、長胴形になるものと推測される。図91-6は内湾した胴部が開くことなく口縁に至る器形である。同図8は直線的に開くバケツ形になるものとみられる。

図82-4・5の口縁部下端には、指先で押し窪めたとみられる円形の押捺文が並ぶ。その他の土器には、切り欠きによる三角形文が並んでいる。図83-1には、大きな切り欠きが間隔を空けて施されている。胴部文様は地文のみのものが多い。図91-9・10は同一個体とみられ、連続爪形文を頭部に描き、楕円形の貼付文が見られる。11は浮線文に連続爪形文を沿わせている。

【c種】肥厚した幅の狭い口縁部もしくは複合状の口縁部に、刻みや隆帯、特徴的な突起が付くものを本種とした。図83-2～図84-1～3・6、図85-2、図87-2、図88-1・4・6、図91-12～図94-24が該当する。図83-2は長胴形になるものとみられ、口縁に円形の突起が付く。同図3は波状口縁の球胴形で、波頂部に丸い瘤状の貼付文が、その下には円形の貼り瘤がある。4はほぼ完形の土器である。胴部中位がわずかに括れて口縁に向かって直線的に開く、本類では他に見られない器形である。口縁部の形態はごく緩やかな4単位の波状口縁である。波頂部を隆帯で開いた横長の楕円形突起が特徴的である。5は胴部上半が張り出すように膨らみ、口縁部が強く外折する器形である。口縁には馬蹄形の突起が付き、突起脇の口縁には刻みが入る。

図84-1は胴部の膨らみと頭部の括れが弱い器形で、口縁から太く短い一对の隆帯が垂下する。同図2は胴部上半が膨らみ、幅の狭い口縁部が外折する器形である。口縁部には緩い隆帯が間隔を空けて全周する。同図3は口縁に図83-4に似た横長の低い突起が付き、その両脇に短い粘土紐の貼付文が並んでいる。6は図83-5と同様の器形で、口縁部には短い一对の隆帯が付く。胴部上半には半裁竹管により、弧文と鋸歯文を組み合わせた文様が描かれている。図85-2は、球胴形で緩やかな波状口縁を呈し、隆帯で開いた横長の突起が付く。胴部上半には、図84-6に似た鋸歯文を組み合わせたような文様が描かれている。

図87-2は胴部の中位が大きく膨らみ、口縁部の外折が弱い器形である。口縁部より厚みを増した高さの低い突起に、縦方向の短沈線が加えられている。また頭部には爪形文が回る。図88-1の波頂部は刻みが入れられ、多頭状を成している。同図4は胴部が直線的に開き、口縁部が若干外反する器形である。口縁部には一对の短く太い隆帯が垂下する。同図6は、太い粘土紐による複雑化した隆帯が口縁部を巡る土器である。隆帯には繩圧痕が施されている。胴部には鋸歯文と丸い貼り瘤が見られる。

図91-12～図94-24は破片資料である。図91-12～17は、平口縁に刻みや短沈線が加えられている。同図18～図92-19は山形突起もしくは山形の波状口縁を有する土器である。突起部が肥厚し、突起の頂部に刻みが加えられるものが多い。図92-10～13・16には円形または楕円形の貼

り瘤が見られる。同様の貼り瘤は、図93-12・13にも認められる。図93-1~7には、図83-2に見られたような円形の突起や盲孔が付く。図93-8は、小波状口縁の波頂部を窓ませている。9~11は口縁部に盲孔を並べている。

図93-14~図94-1の口縁部には、図84-1と同様の短い縦の隆帯が付く。図93-19の頸部には縦状隆帯が付き、20の口縁部下端には連続的な刻みが入る。図94-2~24は、図83-5に見られた馬蹄形の突起や図83-4に似た隆帯で囲った波頂部、図88-6のような複雑化した太い隆帯などが見られる土器である。このうち、図94-12・14・16の波頂部を囲う隆帯には刻みが入る。18・19・23は、隆帶に連続爪形文が施されている。21は突起部を繩圧痕で加飾している。24には結節浮線文が見られる。

【d種】 口縁部が肥厚し、比較的簡素な文様が横位に展開する土器である。図84-4・5、図85-1、図86-1・2、図87-1・5、図88-5、図95-1~図98-4を本種とした。図84-4は胴部が緩く内湾して口縁に至る器形である。複合口縁を成し、口縁部の地文上に鋸歯文が描かれている。同図5は口唇部が連続的に押し窓められて小波状を呈し、頸部に波状文が巡る。図85-1は頸部の括れが弱い器形である。頸部直下の上下幅の狭い文様帶に、1本描きの沈線で斜格子文が描かれている。図86-1は内湾する器形で小波状口縁の小型土器である。波頂部で連結する連弧状の隆帯が巡り、隆帶と口唇部には刻みが入る。胴部には3条の連続爪形文が巡っている。同図2の胴部片には、連続爪形文により大きな鋸歯文が描かれている。図87-1は、ほぼ直線的に聞く胴部から口縁部が弱く外反する。同図5は丸く膨らむ胴部片である。1・5とも器形は異なるものの、頸部に連続爪形文が巡る。5には斜め方向の結節回転文が見られる。図88-5は波頂部が山形になる小波状口縁で、頸部直下に繩圧痕により鋸歯文が描かれている。

破片資料の図95-1~図98-4には、施文方法として連続爪形文が用いられたものが多い。図95-1~5・15~24は、図87-1と同様に頸部に連続刺突や爪形文が施されている。図95-7~10・12~14は、口縁部に横位の連続爪形文が見られる。図95-11、図96-1~図98-4は、鋸歯文や波状文、菱形文、連弧文を基調とする文様が描かれたものである。施文方法には連続爪形文の他に、図97-1~12のような沈線文、同図13~16の粘土紐の貼付文、同図17の繩圧痕文、図98-1~4のような太めの結節浮線文があり、複数の施文方法を組み合わせる場合もある。

【e種】 幅の狭い口縁部に、隆帯によって開われた横長の楕円区画を有する土器である。図86-3~5、図98-5~図99-1を本種とした。図86-3は胴部が内湾しながら開き、口縁部が直立する器形とみられる。楕円区画の仕切り部分には、一対の太く短い隆帯が垂下する。同図4は縦に垂下する隆帯部分が失われているが、口縁部の上下端が厚みを増しているため本種に含めた。5は、楕円区画の縁にC字状の刺突が加えられている。

破片資料の図98-5~図99-1では、楕円区画の仕切りとして1~3条の短い隆帯が垂下する。楕円区画に加えた装飾には、C字状の刺突の他にヘラ状工具や繩文原体で刻んだものがある。図98-18は、長胴形の深鉢片とみられる。頸部には多条の平行沈線文が、胴部には鋸歯文が描かれて

いる。図99-1の頸部には連続する三角刻文が、胴部文様帶には粘土紐による鋸歯文が見られる。【f種】縦位の短い隆帯を數本挟んだ双頭波状口縁を有する土器と、これに類するものを本種とした。図86-6・7、図88-2・3、図99-2~8、図100-15~図101-2が該当する。f種の典型と考えているのは図88-2である。長胴形になるものと推察され、3本の短い隆帯を挟むように一对の波頂部がある。頸部にはa種にみられる籠状隆帯が巡り、口縁部下端と隆帯には繩文原体による刻みが施されている。同図3も長胴形とみられ、波頂部の円文と胴部のボタン状貼付文が特徴的である。頸部にはやはり籠状隆帯が巡り、胴部に鋸歯文が多段に描かれている。図86-6・7は、二つの波頂部に挟まれた部分が、隆帯ではなく刻みである。7の口縁部下端にはb種に見られる三角形の切り欠きがある。図86-6・7の波頂部の形態は、双頭波状口縁の前段階的なものと考えている。

図99-2~8、図100-15~図101-2は破片資料である。図99-2には補修孔が認められる。同図4~6の頸部には籠状隆帯が付く。7は隆帯上と隆帯の区画内に繩圧痕を施している。繩圧痕と胴部の地文には、ともにL Rが用いられている。8は、長胴形の大型の深鉢片と推察される。口縁部には盲孔や太い凹線で文様が描かれている。頸部と胴部の文様は、図88-3と近似している。8の器面の色調は、本類の他の土器に比べ灰色味が強い。

図100-15~図101-2は、図88-3や図99-8のような長胴形深鉢の胴部片とみられることから本種に含めた。図100-15・18には頸部に付くとみられる横長の貼付文がある。縦位、横位、斜位の多条沈線を組み合わせたものが多く、沈線の交点に円文やボタン状の貼付文が施されている。図100-19には連弧文が、同図20・22には鋸歯文が見られる。図101-1・2には縦位の波状文が描かれている。

【g種】幅の狭い複合状の口縁部に繩圧痕文を施す土器とこれに類するものである。図99-9~図100-14が該当する。口縁部は無文地で、丁寧なミガキが入るものが多い。文様モチーフには鋸歯文や弧線文が目立つ。図99-11は長胴形の破片とみられ、口縁部に垂下する隆帯に繩圧痕が施されている。繩圧痕の原体はR、胴部の地文の用いられた原体はL Rとみられる。口縁部には沈線文や爪形文も併用されている。胴部には沈線文が描かれ、沈線の集約する箇所に丸い小さな貼付文が見られる。その他の土器の繩圧痕には、L Rか左撲りの多条の原体が用いられている。各土器の繩圧痕と胴部地文に使用された原体は一致している。図99-17・18は同一個体とみられ、口縁部下端に三角形の切り欠きが施されている。図100-1~4・13・14の口縁部には、円形または半円形の盲孔やドーナツ形の貼付文が見られる。同図10~12は口縁部まで地文を施した後、繩圧痕で文様を描いている。このうち10は、繩圧痕に爪形文を沿わせている。

【h種】複合口縁や板状に肥厚する口縁部に、おもに太い沈線で文様を描くものである。図87-3・4、図101-3~図102-26が該当する。図87-3・4は球胴形の深鉢である。3は口縁部に縦の短沈線が描かれている。頸部には連続爪形文が横走する。4の口縁部には、梢円形の盲孔と縦の短沈線が交互に配されている。胴部上半には結節浮線文によって菱形と鋸歯文を組み合わせた文様が

描かれている。

図101-3～16にも、図87-3・4のような短沈線や盲孔、円形の突起が口縁部に見られる。本種の口縁部は地文がないものが大多数だが、12には地文が施されている。同図17～図102-7には、渦巻文や円文、半円文が描かれている。このうち図102-4には綫の隆帯が付く。この隆帯にはc種やf種の隆帯とは異なり、鋭角な稜がある。同図5は口縁部がわずかながら内湾して聞く器形である。これはa～g種には認められなかった器形である。図102-8～21には斜線や綫位沈線、鋸歯文、弧線文が太い沈線で描かれている。23～26には貼り瘤が付く。

【i種】口縁部の幅が広いものや、a～h種に比べ口縁部の肥厚具合が弱いものを本種とした。また、これに伴うとみられる胴部片も含めた。図88-7、図103-1～図105-29が該当する。図88-7は内湾気味に聞く幅の広い口縁部に、連続爪形文が横走する。胴部文様帶の幅が広く、胴部の最大径に区画線が引かれている。区画内には連続山形文とこれに組み合う綫、弧線文が描かれている。

図103-2～23、図104-2～10も、図88-7と同様におもに連続爪形文で文様が描かれたものである。図103-2には半円状の突起があり、突起には盲孔が付く。頸部には籠状隆帯が巡る。同図3～5にも一对の突起がある。4の口縁部下端と5の口縁部上下端には、細長い刺突が加えられている。9には円文と鋸歯文が描かれ、口唇部に斜めの沈線に入る。11には刻みの入った綫の隆帯と渦巻文が見られる。14の口唇部には瘤状の小さな突起があり、その左右に図84-3に似た粘土紐の貼付文が等間隔に並ぶ。18には、沈線の交点に付けられたボタン状の貼付文が見られる。図104-3～10は胴部片で、円文や渦巻文、弧線文が見られる。

図103-1、図104-11～17は沈線で文様が描かれた土器である。図103-1は、幅の広い口縁部に多条の沈線で文様が描かれている。図104-11には円文が、同図12には渦巻文が描かれている。13には粗雑な連弧文が見られる。14・15には、綫長の半円文に短沈線を加えた文様が付く。同図16・17には、刻みが施された2本の太い隆帯が垂下する。

図104-1・18～図105-16・22・28は沈線の側縁に爪形文や刺突文を施したものである。沈線に付加されるのは細い爪形文が大多数であるが、図104-26、図105-1・9の場合は円形または半円形の刺突文である。爪形文が細かく施されたものは沈線の側縁が若干盛り上がり、結節浮線文に近い見え方をしている。文様モチーフには連弧文、鋸歯文、平行沈線や渦巻文がある。図105-7～9には、図104-14・15に似た綫長の半円文が付く。同図11・12は渦巻状隆帯の側縁に爪形文が加えられ、11の胴部文様は浮線文で描かれている。図105-17～21・23～27・29は、j種に比べ太めの浮線文で文様が描かれた土器である。文様モチーフには、17・20・29のような弧線文や鋸歯文、23・27の菱形文がある。

【j種】いわゆるソーメン状の細い浮線文で文様が描かれた土器である。図106-1～図107-6を本種とした。浮線文には、細かな爪形文を加えた結節浮線文と爪形文がないものがある。図106-6～9のように両者が併存した資料もある。文様には円文や渦巻文、弧線文、鋸歯文などがある。

図106-1・8は、口縁部に縦位の浮線文を並べている。同図2~4は、三角形や長方形の文様を重ねている。6は、非常に細い浮線文による円文を口唇部にも貼り付けている。本種の胴部文様には渦巻文が目立つ。

図106-20~22は同一個体の可能性が高い波状口縁の土器である。口唇部には縦位の短い浮線文が並んでいる。口縁部には円形の隆帯が付く。また、平行する2本の浮線文を短い浮線文で細かく区切る梯子状の文様や、菱形文が描かれている。胴部には縦方向の結節回転文が、間隔を空けて施されている。本種の器形には、この資料のように頸部がくの字に屈曲し口縁部が内湾して開くものがある。これは続くⅢ群1類に多用される器形である。図106-8の口縁部内面に見られる段や、同図20の口唇部直下に貼り付けられた隆線も、Ⅲ群1類に多く見られる特徴である。

【k種】肥厚しない板状の口縁部に、2~4条程度の鋸歯状沈線文や縦位沈線などが描かれた土器である。図107-8~図108-20が該当する。本種の器形には、j種にも見られたような頸部がくの字に外折して口縁部が内湾気味に開くものが目立つ。図107-8~17は、口縁部に半円文、円文、弧線文と、斜線文や波状文の組み合わせで文様が描かれている。8の下端には三角形の切り欠きが見られる。

図107-18は低い山形突起が付き、縦の区画線と横長の梢円文が描かれている。頸部には斜め上から施された楔形の刺突が並ぶ。図107-19~図108-18の口縁部には、鋸歯文や斜線、菱形文が描かれている。このうち図107-19は波頂部が厚くなり、波頂部の下に渦巻状の隆帯が付く。同図23は恐らく一对の小突起が付くものとみられ、縦に垂下した隆帯が剥落している。図108-6には斜線が加えられた縦位の隆帯が見られる。図107-25の頸部には刺突列が巡り、胴部には横方向の結節回転文が見られる。図108-4の頸部にも刺突列が見られる。同図12の頸部には刺突を加えた隆帯が付く。19の口縁部には逆U字形か梢円形の沈線文と、縦に並ぶ沈線が描かれている。20にも縦位沈線が描かれている。

5 類 (図107・109・110・124、写真62)

図107-7、図109-1~図110-26、図124-1が該当する。図109-1は、直線的に外傾する胴部から口縁部が大きく開く器形である。口縁には山形突起がある。文様帶の上下を連続爪形文で区画し、その中に半截竹管により粗雑な菱形文様が描かれている。同図2は胴部が緩く括れる器形である。連続爪形文により、横位に対向する渦巻文が描かれている。渦巻文の間には菱形文が縦に並ぶ。地文は1・2とも横回転のLRである。同図3は直線的に開く器形の土器で、口縁に山形突起が付く。口縁部には横位の短沈線と連弧文が描かれている。図109-1~3は、諸種b式の影響を受けた土器と考えられる。

図109-4は、直線的に外傾する胴部から口縁部がやや内湾する器形である。口縁には横長の環状突起が付き、口縁部には粘土縫の貼り付けによって鋸歯文が描かれている。胴部には連続的に押し窪めた鎖状の隆帯が多段に巡る。地文は横位のRLである。4は十三菩提式とみられる。同図5は緩やかな波状口縁になるものとみられ、波底部に台形状突起と盲孔が付く。口縁部には爪形文と

平行沈線、三角刻文が描かれている。胴部には、縦位の波状文と平行沈線文が交互に描かれている。5は、新保式の影響を受けた土器とみられる。

図110-1・2は、口縁部が極端に内折する特異な器形である。1には浮線文が密に、2には沈線文が描かれている。同図3は連続爪形文で上下を区画された中に鋸歯文が描かれている。4はR Lの地文上に、角棒状工具による刺突で2条の連弧文が描かれている。5には円形の貼付文があり、細い半裁竹管を用いて集合沈線が施文されている。6は胴部下端の破片で、刺突を加えた低い隆線に沈線を沿わせている。7・8は同一個体とみられ、5と同様の細い沈線で渦巻文とみられる文様が描かれている。9は図109-3に近似し、口縁部に連弧文が見られる。10~12には円形の貼り瘤がある。13~15は有孔土器で、いずれも口縁部が内径する器形とみられる。13の口縁部には輪積み痕が、14には低い棱線が認められる。図110-1~15は諸磯式とその影響を受けた土器と考えられる。

図110-16・17・19・21~26には、櫛歯状工具や角棒状工具を用いた連続刺突が施文されている。18は大波状口縁になるものとみられ、スリット状の短沈線が並ぶ。20は半円形の突起が付き、沈線による区画内に斜線が描かれている。図110-16~26は、興津式とその影響を受けた土器とみられる。

図107-7と図124-1は浮彫状の文様が描かれた土器である。図124-1は口縁部の約4分の3が遺存している。直線的に外傾し、口唇部直下でくの字に内折する器形である。口縁には蛇の頭を思わせる突起が付く。突起には細かい爪形文が加えられている。口縁部の上下端には、スリット状の短沈線が並ぶ。口縁部には器面の要所を削ぎ落とし、浮彫状に残した部分によって雲形文のような区画文様が描かれている。区画文様内には、半裁竹管を用いて浮線文状の密な斜線が加えられている。これにさらに一本描きの細い斜線を加え、斜格子文が描かれている。図107-7は、図124-1と同一個体の可能性がある。渦巻状の突起が口縁に付き、内面にも三角形の彫り込みが見られる。この2点は胎土にあまり小石を含まず、雲母を多量に含んでいる。図107-7と図124-1はいわゆる松原式とみられる。

6 類 (図111~123)

図111-1~図123-17を本類とした。器形を見ると、胴部が膨らみ口縁部が外折するものが多い。これはII群4類に特徴的な器形である。その他に、図111-1・2のようにわずかに内湾しながら開くもの、同図3・4のように胴部から口縁まで直線的に開くもの、同図5・6のように頭部がわずかに括れるものがある。図111-1、図118-5~11、図119-1の口唇部に加えられた刻みや刺突は、II群2・3類に多用されたものである。また、図112-1~図113-7のように複合口縁か口縁部が顯著に厚くなる特徴は、II群4類a~g種と類似する。

図114-4~図117-9は、胴部下半から底部にかけての資料である。底部から垂直に近い角度で胴部が立ち上がる土器が多く、図114-5はいわゆる金魚鉢形になるものと推定される。図115-3は胴部下端が下彫れ状となっている。同図9は胴部下端がせり出している。図116-5~図117-3は、下端から胴部が外反気味に開くものである。図117-7・8は高台が付く底部片で、

地文は施されていない。土器の底面には、編み物の圧痕が付くものがある。図115-1・5、図116-2・5、図117-5は網代編みの痕跡である。図115-2・7、図116-3・6、図117-1～3・4はござ編み、図116-4はもじり編みと見られる。

本種に施される地文は横回転の斜縄文が大勢を占め、図113-4のような結節回転文が多用される。図111-1の地文は直前段反撲、図113-5の地文は直前段・前々段合撲、図118-12は直前段合撲とみられる。図114-5には、R Lの方向を変えて縦方向の羽状縄文を施しているが、整ってはいない。図120-9には、結束羽状縄文が施文されている。同図12は口縁部内面にも斜縄文が施されている。図111-3・4は撚糸文(単軸糸条体第1類)である。図118-15～18には、非常に細い原体で撚糸文が施されている。図119-1の地文は網目状撚糸文(短軸糸条体第5類)である。図123-5に見られる条線は、乾燥が進まない段階でヘラ状工具によるミガキを施したことによるものである。図117-9、図123-6～17には、半裁竹管や櫛歯状の工具で沈線が描かれている。

III群土器

1 類 (図124～162、写真62～84)

図124-2～図162-22までを本類とした。器種には深鉢の他、鉢・浅鉢になるとみられるものが少数ある。深鉢、鉢の器形を大別し、以下のように分類した。本類において器形を説明する際には、この記号を用いる。また各器形の典型的な例となる土器の図番号を()内に示した。

A 0形：垂直に立つ胴部下半から胴部上半が球形に膨らみ、口縁部が開く金魚鉢形(図125-1)。

A 1形：胴部が膨らみ、口縁部が直線的に外傾するもの(図128-1・2)。

A 2形：胴部が膨らみ、口縁部が内湾して開くもの(図127-3)。

A 3形：胴部が膨らみ、内湾して口縁に至るか口縁部が短く外折するもの(図132-3)。

A 4形：胴部がくの字に内折し、口縁部が外折して開くもの(図134-2)。

B 1形：胴部が直線的に開き、口縁部が外折して直線的に開くもの(図135-1)。

B 2形：胴部が直線的に開き、口縁部が内湾して開くもの(図126-2)。

C 形：胴部から口縁まで直線的に開くバケツ形のもの(図133-5)。

文様や器形の特徴からa～f種に細分した。

【a種】2本の沈線間に短沈線を加えたいわゆる梯子状沈線で文様が描かれた土器である。図125-1～図127-3、図137-1～図143-33、図149-5～18が該当する。図125-1は、A 0形の典型例としたものである。胴部下端から底部を欠損している。口縁には高さのないU字形の突起が4単位で付く。突起の下には短沈線を加えた渦巻き状の隆帯が配されている。隆帯の左右には横長の三角文、あるいは鋸歯文が描かれている。その横には斜線や弧線で区画した中に、器面を三角形に切り欠いた三角刻文と菱形文を連ねている。頸部には縦に刻みを加えた隆帯が巡る。地文には、結節のある縄文原体を縦方向に施文している。地文は間隔を空けて帶状に施文されている。この間隔を空けて施文された結節のある帶縄文は、a～d種に多く見られる。内面には横ナデが加えられている。胴部上端では砂粒が動いた様子が観察され、ケズリに近い状態である。これは、頸部

内面の棱線を際立たせるために入念な調整を施した痕跡であろう。

図126-1の器形はA2形と推測され、口縁部に渦巻状の突起と隆帯が4単位で付く。その左右に渦巻文と弧線を組み合わせた文様が描かれている。沈線間に加えられる短沈線は楔形の刺突に近い。口縁部上端には縱位の刻みが2段施され、頭部にも刻みが入った隆帯が2条付く。同図2は小型の深鉢で、その器形はB2形である。口縁には双頭の低い突起が付き、口縁部文様帶は4分割されているものと推察される。区画内には、菱形文を連ねた部分と渦巻文・円文・斜線文の組み合わせで文様を描いた部分とが交互に配置されている。

図127-1の器形はA1形とみられ、椀状を呈する楕円形の突起と橋状把手が特徴的である。太い沈線で弧線や斜線を描いた後に、細い沈線を充填するように加えている。口縁部の上下端には、三角刻文が間隔を空けて配されている。頭部には隆帯が巡り、刻みは施されていない。同図2の器形はA1形と推測される。口縁部上端の斜格子文と円形の貼付文が特徴的である。通常、隆帯が付くことの多い頭部は幅広くわずかに盛り上がり、口縁部同様斜格子文と三角刻文が描かれている。胴部にも弧線文や三角文を描いた後、縱位の刺突列を加えている。同図3の器形はA2形である。胴部の膨らみと口縁部の内湾する度合いは低い。山形突起が4単位で付き、突起からは刻み目が入った隆帯が垂下する。口縁部の文様は弧線と山形の沈線区画に楔形の刺突を沿わせている。図125-1に見られる菱形文やd種とした刺突で充填された箇所もあり、a種とd種の文様要素が同居した土器である。口縁部上端には小さな三角刻文が巡り、縱位の短沈線は一部にのみ施されている。頭部には短沈線が加えられた稜がある隆帯が巡っている。胴部には縦に並ぶ菱形文が描かれているが、4単位ではない。

図137-1～図143-33には破片資料を示した。図137-1にはドーナツ形の隆帯が付く。同図2～11には円文や楕円文が描かれている。円文の中心には刻文が入ることが多い。2・7には椀状の突起が付き、突起には小さな三角刻文や短沈線が加えられている。8は連続刺突によって円文が描かれている。本群土器の器面の色は暗褐色や褐色のものが多いが、8は浅黄橙色である。9は図125-1のような器形の胴部とみられる。帶状の切り欠きの下に、三角文や円文が描かれている。同図12～図138-12は、渦巻状や弧状の隆帯が付くものである。図137-14は、隆帯を斜めに刻んでいる点が特徴的である。図138-2・5は隆帯の大部分が剥落している。

図138-13～21、図141-1～図143-15には、図126-1のように渦巻文、弧線文、山形文などの組み合わせで文様が描かれている。図138-15は口縁に渦巻状の突起が、頭部には橋状把手が付く。頭部に隆帯はなく、縱位の短沈線と小さな三角刻文が並んでいる。胴部にはY字状の懸垂文が描かれている。図141-19～図142-4は、図127-3のように口縁から垂下する隆帯が見られるものである。図141-19～25、図142-3・4には、1条または2条の隆帯が付く。図142-1にはY字状の、同図2には三角形状の隆帯が垂下する。同図5には円形の貼り瘤が縦位に並んでいる。

図139・140には、立体的な突起や把手を図示した。これらは渦巻状の隆帯や椀形または筒形の突起を基調とし、短沈線で加飾されている。図139-1は中空の突起である。頭部には長方形の切

り欠きが入り、その左右に貫通孔が設けられている。貫通孔を中心に梯子状沈線による円文が描かれ、内面には椀状の張出しが付く。同図2は半球状を呈し、接合部分から剥落した突起の一部とみられる。一对の孔を中心に円文が描かれている。図140-1は短沈線とともに、斜縦文が施されている。同図8は内外面に人面が表現された把手である。外面には渦巻状の隆帯、内面には円形の隆帯で口が表現され、粘土紐で目と眉が表されている。外面は吊り目に、内面は垂れ目に表現されている。外面には大きな橋状把手が付き、口縁部には短沈線を加えた鋸歯状の装飾と横位の沈線文が施されている。

図143-16~25は短沈線が列点化したものである。文様图形は短沈線で描かれたものと変わらず、山形文や渦巻文、菱形文が見られる。図143-26~33は、単純化した图形や粗い短沈線が描かれたものである。26には鋸歯状の梯子状沈線が描かれ、余白が残されている。27~31は、短沈線の間隔が比較的粗い。32・33には平行する多条の斜線文が描かれ、隙間を短沈線で埋めている。図149-5~18は小さな三角刻文が特徴的である。同図6はA0形となる可能性が高く、梯子状の文様に充填されるべき短沈線が三角刻文に置換されたような文様である。同図16~18の胴部片には、図138-15と同様にY字状の懸垂文が描かれている。

【b種】 口縁部に縦位沈線や比較的単純な文様が描かれたものである。図124-2~4、図144-1~23が該当する。図124-2の器形はA1形、同図3・4はA2形に分類される。2は低い台形状の突起に小さな瘤が左右非対称に付く。口縁部の上下端を沈線で区画した中に、縦の沈線が描かれている。頭部にはⅡ群4類に見られた瘤状隆帯が巡る。隆帯にはL Rの縄文原体による斜めの刻みが施されている。3は4単位の山形波状口縁と推定される。口縁部には弧線と鋸歯文を組み合わせた文様が描かれている。頭部には横長の貼付文がある。4は山形の波状口縁で、波頂部とその右側に小さな瘤状の突起が付く。同様の突起は波頂部下の頭部にも付けられている。頭部に隆帯ではなく、頭部と口縁部上端に平行沈線が引かれている。口縁部には、太い縦の沈線が間隔を空けて描かれている。胴部には菱形文が見られ、結節回転文が間隔を空けて施文されている。

図144-1は図124-3のような太い横線で文様が描かれている。山形の波状口縁で、頭部には刻みを施した横長の突起が付く。同図2~23は口縁部に縦位沈線が描かれたものである。3には刻み目の入った縦位の隆帯が付く。5は口縁部上端には円形の刺突が、下端には縦の短沈線が並ぶ。頭部には梢円形の刺突を加えた隆帯が付く。頭部には5・10・18・20のように隆帯が巡るものと、2・4のように沈線で区画されたものがある。15は平行沈線で口縁部文様帶を上下に区画した後、縦位の沈線を描いている。16・17は、縦位沈線を描いた後、波状文・鋸歯文を描いている。18~23には、比較的細い沈線が描かれている。中でも18には細い沈線が密に描かれ、文様帶の上下に小さな三角文が交互に配置されている。21~23には刻みを加えた突起が付く。

【c種】 ハの字の短沈線や鋸歯文、斜格子や横位沈線などが描かれたものを本種とした。図128-3、図129-2、図145-1~図149-4・19~図150-28が該当する。図128-3の器形はA3形に該当し、口唇部が短く外折する。複合口縁となり、口縁に低い突起が付く。口縁部文様帶の下端に

は隆帯が巡り、口縁部上端と隆帯には継位の短沈線が加えられている。さらに隆帯の下端には小さな三角刻文が並び、鋸歯状を成している。幅の狭い文様帶内には、楔形の刺突によりハの字の文様が重層的に描かれている。図129-2の器形はA1形と推測される。口縁部文様帶の上下を沈線で区画し、鋸歯文を半截竹管により途切れがちに描いている。

図145-1～図149-4・19～図150-28に破片資料を示した。口縁の外面に粘土紐を加え、帶状に肥厚した複合口縁と頸部の隆帯に継位の短沈線を加えているものが多い。図145-1～7には、a種にも見られたドーナツ形や満巻状の隆帯がある。同図8には対向する弧状の隆帯が剥落した痕跡が見られる。同図9～16、図146-2～5には、1条または2条の継位隆帯が付く。そのうち図146-3は、逆U字状を呈している。本種の特徴であるハの字の短沈線文には、図145-1のように横方向の沈線の繋がりが意識された鋸歯文に近いものと、同図8・9・11・12のように短沈線を継ぎの列ごとに描き、沈線の横の繋がりが意識されていない施文方法がある。

本種の器形には、A2形と図128-3のA3形、図129-2のA1形の他に、図147-3～13のようにC形とみられるものがある。3～13は口縁部文様帶の幅が狭い点が特徴的である。11は円形刺突が加えられた口縁の直下に、13は複合口縁部に鋸歯文が描かれている。図147-14～図148-15は、本種を特徴付ける短沈線を加えた複合口縁と隆帯が見られない資料である。図147-15・21・28は、口縁部の上下を平行沈線で区画している。同図27の頸部には刺突列が見られる。口縁部文様には鋸歯文が目立つ。図148-12は、口縁部文様帶を沈線で縦に区画している。同図13は文様帶が横に分割され、鋸歯文が2段描かれている。15は、結節回転文の上にハの字の短沈線が描かれている。これらは、Ⅱ群4類からⅢ群1類に至る段階における過渡的なものと半粗製的な土器と考えている。図148-16～図149-4には、図128-3に見られた小さな三角刻文が口縁部上端や隆帯に施されている。26は三角刻文の下に、さらに鋸歯状の沈線文が描かれている。図149-1～4では、三角刻文と継位沈線の組み合わせが口縁部の主文様となっている。

図149-19～図150-28は、口縁部に斜格子や横位沈線などの単純な沈線文が描かれた土器である。図149-19は、口縁に椀状をなす突起が付き、その下にはドーナツ形の隆帯が剥落した痕跡がある。同図20は口縁部文様帶の上端を弧線で区画した中に、斜格子文を描いている。21は縦に垂下する隆帯ではなく、2条の沈線間に短沈線を加えたことで口縁部文様帶を区画している。図149-26～図150-9などは、複合口縁状の肥厚帯や頸部の隆帯がない半粗製的な土器である。図149-30は地面上に斜格子文が描かれている。図150-7は斜格子文と帶縄文が縦に並列している。同図12は格子文が描かれ、口縁部上端には図148-16～図149-4と同様の小さな三角刻文と継位短沈線が並んでいる。図150-14は縦長の隆帯が付き、隆帯の上下端は瘤状に突出している。同図23～28には、細い横方向の沈線と三角刻文または山形文が見られる。

【d種】口縁部文様帶に短沈線や刺突文が描かれたものである。図128-2・4、図129-1、図151-1～図153-26が該当する。図128-2の器形はA1形である。4単位の波状口縁とみられ、波頂部からは2本の刻み目のある隆帯が頸部まで垂下する。口縁部文様帶は横位沈線で多段に区画

された後、楔形の刺突が加えられている。刺突は列ごとに下方向や斜め上方、斜め下方からと方向を変えて加えられている。同図4には、口縁から真っ直ぐ垂下する2本の隆帯と斜めに垂下して末端が渦巻状になる隆帯が見られる。隆帯には、指先によるとみられる円形の刺突が加えられている。口縁部文様帶の横位沈線間には、楔形と円形の刺突が施されている。ただし、図128-2と異なり全ての沈線間を刺突で埋めてはいない。

図129-1は鉤状に端部が曲がった縦位の隆帯が特徴的である。隆帯には刻み目ではなく半裁竹管による平行沈線を加えている。口縁部文様帶にも同じ工具による横線や波状文が描かれている。口縁部上～中位の沈線間には爪形の刺突文が、下位には楔形の刺突が並ぶ。頭部には段が付き、爪形文が巡っている。

図151-1～16には、a～c種にも見られた刻み目のある縦位の隆帯が付く。1・12は逆U字状の隆帯である。10には弧状の隆帯が見られる。15は山形突起から短い隆帯が垂下する。同図17～図152-4は、円錐形の貼付文が見られるものや、橋状把手が付く土器である。貼付文には、楔形の刺突が加えられたものが多い。図151-25の貼付文は、頂部に小さな孔が開けられている。図151-18～21、図152-4の橋状把手はごく小さい。図152-5～図153-4は図128-2のように、多段に描かれた横位の沈線間に刺突列を加えたものである。図152-16は口唇部に刻みが施されている。図153-1～4は胴部が無文地な点が特徴的である。1には横位区画に加え、斜めの区画線が見られる。同図2・3は、頭部に刺突を加えた横長の貼付文がある。4は楔形の短沈線を矢羽状に配し、胴部にも刺形の沈線文を描いている。図153-5～17は横位の区画線がなく、口縁部に刺突を充填的に施したものである。同図18～26は口縁部文様帶の幅が狭い。24の口縁部上端には小さな三角刻文が並び、口唇部にも口縁部と同じ工具による刺突が加えられている。

本種の短沈線や刺突文は、楔形の刺突と呼んでいるものが大半であるが、他にもいくつかの工具と施文方法が認められる。図151-1、図152-26、図153-24には、棒状の短沈線が見られる。図151-5には、3本歯の工具で押引文のように施文されている。同図9・14と図153-13・26には、角棒状工具の先端が用いられている。図152-30、図153-22・25には、円形の刺突が見られる。

【e種】交互刺突文、沈線文、列点文で文様が描かれた土器である。図128-1、図129-3～図132-6、図154-1～図159-19が該当する。図128-1はA1形である。口縁には二山に分かれた山形突起が4単位で付くものと推定される。突起と突起の間の口唇部には、刻みが施されている。複合口縁上にはa・c～d種にも多用される縦位の短沈線が施され、その下端には指先を用いたとみられる梢円形の刺突が加えられている。突起の下からは、口縁部上端と同様の刺突を加えた鎖状の隆帯が垂下する。隆帯は図128の展開図に示したように頭部と向かって右側の突起の下でクラシック状に折れ、胴部中位に至る。隆帯の下端には、円形の貼付文と逆V字形の隆帯が付く箇所と、貼付文がなく隆帯がさらにL字に折れる箇所とがある。地文として、縦回転のLRが間隔を空けず施されている。

図129-3の器形はB2形である。口縁に小さな波状の突起が付き、その下から多条沈線が垂下

し、隆帯を挟んで胴部にも描かれている。頸部には刻みを加えた隆帯が巡り、隆帯に沿ってその上下にも横向方向の多条沈線が描かれている。横位の多条沈線の下端には刺突列が付く。口縁部・胴部とも地文は施されていない。縞文の施文が低调となる点は、本種の特徴の一つと言える。

図129-4の器形はC形とみられる。口縁の断面形は内削ぎ状を呈し、口唇部に刻みが施されている。口縁部には、横に細長い貼付文が4単位で付くものと推察される。口縁部には横向の平行沈線が描かれ、沈線は貼付文の下で直角に曲がって短く垂下する。横位沈線文の下には、半裁竹管の先端を引き摺りながら交互に動かした小波状文が描かれている。

図130-1～4は、図129-4に見られたような小波状文が描かれた土器である。図130-1はA1形で、山形突起から刻みを加えた逆U字形の隆帯が垂下する。隆帯の長さは一様ではなく、一部は胴部に至る。口縁部上端と頸部および隆帯に沿って、不整な小波状文が描かれている。同図2は山形突起が4単位で付き、突起部分に継の波状文を描いた後、口縁部に弧状の、頸部に横位の波状文を施している。口縁部上位に補修孔が穿れ、その部分の割れ口付近には黒色の付着物が認められる。同図3には、口縁部に継位の波状文が間隔を空けて施文されている。頸部から胴部上位には、横位の波状文が描かれている。同図4は、口縁に丸い粘土塊を複数貼り合わせた瘤状の突起が付く。貼り瘤は頸部にも見られる。波状文は突起の下から垂下するとともに、口縁部上端を巡っている。

図130-5は頸部から胴部にかけた破片である。頸部に沈線が巡り、その下に横向方向から加えた刺突列を沿わせている。胴部にも3条の沈線が継に引かれている。図131-1の器形はA1形の範疇に入るが、胴部の膨らみと口縁部の外傾具合はわずかである。口縁の断面形が丸味を帯びたものが多い中で、角張っている点が特徴的である。口縁部には半裁竹管により継位沈線を施した後、口縁部上端を残して横位沈線を施文している。また継の隆帯がわずかに遺存している。頸部には爪形の刻みを施した隆帯が巡る。胴部中位には楕円形の貼付文が4単位で付き、これを中心としてユニオンジャックのような継・横・斜めの沈線文が描かれている。沈線の端部が歓手状になる部分も見られる。また貼付文から垂下する沈線のうち一箇所は、コンバス文のような描かれ方をしている。なお、口縁部が剥落した頸部の輪積み部分には、網代編みの圧痕が残されている。

図131-2の器形はA2形だが、胴部の膨らみは弱く口縁部はわずかに内湾する。この土器は本種を特徴づける交互刺突文と列点文、波状文の3要素が全て用いられた土器である。口縁部には継の波状文が見られる。頸部には沈線が巡り、沈線間に列点文と交互刺突文が描かれている。胴部を継に区画する文様には、角棒状の工具による刺突列が見られる箇所と、波状文が描かれた箇所がある。同図3の器形はA2形の範疇で捉えられるが、2よりさらに頸部の括れが弱い。口唇部をごく浅く刻み、口縁部に継位沈線を描いている。胴部に横長の貼付文があり、沈線と刺突列が巡る。貼付文の下には継に長いU字形の沈線と刺突列が施されている。

図132-1は球胴形を呈している。頸部には貼付文の剥落した痕跡があり、横長の楕円形区画文が2段描かれている。胴部には継長のU字形沈線が描かれ、沈線間に半裁竹管による刺突列が見られる。同図2はA2形で、高さのある山形突起が付き、突起と口唇部には刻みが加えられている。

突起からは斜めに刻んだ隆帯が垂下する。口縁部には、半裁竹管により細い縦位の沈線が密に描かれている。頭部には沈線と刺突列が巡る。同図3はA3形で、幅の狭い口縁部が内折する。口縁部にはメガネ状の突起が付く。口縁部には未発達な橋状把手が付き、沈線と刺突列が2段巡る。把手の下にはV字形の沈線が描かれている。同図4はA1形で口縁部上端に結節沈線に近い横位の刺突列が付く。頭部には爪先で刺突を加えた隆帯が巡る。胴部にも爪形を加えた隆帯が垂下し、その下端は貼り瘤状に膨らむ。隆帯には沈線を沿わせている。同図5はA2形で、頭部に平行沈線と刺突列を描いている。同図6もA2形で、頭部に波状文と平行沈線文、交互刺突文を描いている。交互刺突は間隔が乱れて、列点文に近い見え方をしている。

図154-1~23には、連続したクランク状の比較的整った交互刺突文が施文されたものをまとめた。刺突を加える方向は上下からのもの、斜め上と斜め下からのもの、いずれも下からのものなど、規則性は感じられない。1にはS字状に粘土紐を貼り付けた突起が付く。また、1~5は口縁部上端に縦位の短沈線が見られる。7・12・13・19・23には地文が施されている。14・16は同一個体とみられ、繩圧痕が施されている。21は球胴形の小型土器とみられ、胴部下半にも横位の区画線が施文されている。図154-24~図155-8は、図132-6に見られたような列点文に近い交互刺突文である。刺突を加える方向は、整った交互刺突が施文されたものと同様、様々である。24~27の突起の下位や頭部には、小さな貼付文が見られる。29・30には、三角刺文に似た刺突が施されている。図155-5は、口縁部に交互刺突文と列点文が巡る。胴部にはU字状の沈線と交互刺突が、その下にはY字状の沈線が施文されている。

図155-9~24は、図130-1~4に見られたような小波状文やコンパス文が描かれたものである。11・14・16には、明確なコンパス文が施されている。その他の資料にも、コンパス文のような工具の動かし方で描かれた小波状文が見られるものが多い。24は、沈線間に渦巻文が加えられている点が特徴的である。図156-1~13は、沈線文が描かれたものである。口縁部には、a種に多用された図形的な文様は見られず、1・2のように縦位沈線が粗く施されるものや無文のものがある。7は、頭部の横に長い楕円形区画文に平行沈線を加えている。同図14に施文されているのは縦位の繩圧痕である。同図15~17は、図128-1に見られたような胴部や頭部に付く貼付文である。17には刺突が加えられている。

図156-18~図158-27、図159-19は、刺突列を伴う沈線や隆帯が施文されたものである。図156-21は口縁部を縦に区画する沈線と頭部を巡る沈線が描かれ、さらに口縁から胴部上半まで刺突を施した隆帯が付く。図156-22・23は、頭部から胴部を区画する沈線や隆帯が垂下するものである。このような胴部を縦に区画する沈線および隆帯は、図157-8・23、図158-6~8・17・20~27にも見られる。図158-18・19は、胴部に弧線文が描かれている。図157-1のように頭部にのみ沈線が巡るもの、同図11・12のように口縁部上端と頭部に沈線が描かれるといった簡素なものも多く見受けられる。

図158-28~図159-18は、刺突列に沈線が伴わないものである。図158-29は口縁部上端に刺

突が加えられ、渦巻状の貼付文が付く。同図34は半円形の突起が付き、口縁部と頸部に刺突列が巡る。図159-1～3・11は口縁部上端に、同図6は口縁部上端と頸部に刺突列が巡らされている。4・7・8のように口縁部から縦の刺突列が付くものや、17のように頸部から胴部を分割するように縦位の刺突列が配置されたものもある。18には、刺突を施した弧状の貼付文がある。

a～d種と異なる本種の特徴をまとめると、a種とした図125-1のA0形や図126-1のように口縁部が強く外折する器形は見られなくなる。胴部の膨らみは弱く、口縁部の開きも小さいものが目立ち、A1形とA2形の区別が難しい。また、口縁部上端の内面が肥厚して段が付くものや、内面の口唇部直下に隆帯が付くものが見られるようになる。口縁部外面の複合口縁上に施文される縦位の短沈線は減少し、代わって口唇部に刻みが入るものや無文のものが増加する。口縁部の単位文様は見られなくなり、胴部を縦に区画する文様が描かれたものが目立つようになる。また、無文地の土器が大半を占める。

【f種】渦巻文や同心円文、対弧文、上下幅の狭い楕円形区画文、大波状口縁などが特徴的な土器とこれに近似するものである。また、新崎式の影響を受けたと見られる土器も含めた。図133-1～図136-2、図160-1～図162-22が該当する。

図133-1はA2形で大波状口縁の深鉢である。波頂部は全て欠損している。口縁部には沈線と刺突列、交互刺突文によって対弧文が描かれている。頸部には、口縁部の対弧文から繋がるY字状の沈線と列点文が胴部下端近くまで垂下する。地文としてLRが胴部では縦方向に、口縁部では方向を変えて施文されている。同図2は4単位の山形波状口縁で、B2形の範疇に入る。波頂部には刻みが入った貼り瘤が付く。口縁に沿って、交互刺突と沈線文が描かれている。刺突は上の列が右下から、下の列が右上から施されている。地文は縦回転のLRで、波底部の下にのみ結節回転文が見られる。内面には丹念なミガキが施されている。

同図3はA3形の鉢とみられる。横位に展開する隆線による楕円区画の中に沈線文が描かれ、刺突が充填されている。4も口縁が内溝する器形である。口縁の内面が複合口縁状に肥厚して段が付く。口縁部に2条の鎖状隆帯が巡り、胴部には縦位のLRが間隔を空けて施文されている。5はC形で、口縁部に隆帯による横長の楕円区画が付く。胴部には結節のあるLRが、縦方向に間隔を空けず施文されている。

同図6はB1形で、口縁部上半が立ち気味となる器形である。口縁には、左右非対称の鈎形突起が付く。鈎形の突起には、一部に結節回転文が施されている。口唇部直下にはコンバス文に似た波状文と、繩文原体Lを用いた押圧痕が施文されている。口縁部は隆帯で4分割され、区画内には波状文と渦巻文が描かれている。胴部には縦位のLが施文され、頸部と縦位隆帯の下にのみ、結節回転文が施されている。口縁部には補修孔が穿たれている。

図134-1はA1形で口縁部の幅が狭い。突起が1箇所のみ付くものとみられるが、大部分が欠損している。頸部に隆沈線による楕円形横帯区画文が4単位で付く。同図2はA4形の典型例としたもので、胴部の上位に屈折点がある。口縁には高さのない山形突起が1箇所のみ付く。頸部には

平行沈線が巡り、胴部の屈折部には5単位と推定される楕円形区画文が描かれ、胴部文様帶の上下を区画している。さらに沈線間に刺突を加えた文様で縦方向にも5分割されている。区画内には横長の楕円文や弧線と逆T字形の短沈線を組み合わせた文様が見られる。頭部の下に鎖状の貼付文が3箇所付くが、縦位の区画文とは関連付けられていない。器面の色は他の多くの土器が褐色、暗褐色であるのに対し、灰白色に近く胎土の砂粒が目立たない。

図135-1はB1形で口縁部が狭い。口縁に低い突起が付くものとみられるが、大部分が欠損している。頭部には平行沈線が、胴部上位には大きな波状文が巡る。胴部には、S字状や波状の沈線を組み合わせた絵画的な沈線文が横位に展開する。図134-2に似て、器面の色が灰白色に近い。同図2はA4形の大波状口縁の深鉢である。胴部と頭部の屈折が強く、口縁部は内湾汽味に開く。平らな波頂部には刻みが施され、両端が左右に突出する。波頂部から胴部上端にはX字状の隆帯による縦長の楕円区画がある。頭部からは波底部に向かって弧状の隆帯が付き、口唇部に付く隆帯と相まって対弧文状を呈している。隆帯で区画された中には、細い沈線によって空白を埋めるように楕円文や渦巻文、重層的な三角文が描かれている。文様帶の下端は刺突を加えた隆帯で区画され、胴部下半には継回転のL Rが施されている。同図3はA4形の一種と捉えられ、口縁部中段がくの字に内折し、口唇部が外折する器形である。口縁部の屈折部に隆帯が巡り、文様帶を上下に分割している。横長の楕円文が口縁部上半には7単位で、下半には4単位で描かれている。

図136-1はA3形で、非常に幅の狭い口縁部が外折して開く。口縁にはU字形の粘土紐を貼り付けた低い突起が1箇所のみ付く。口唇部には刻みが加えられている。胴部には地文を施した後、縦位の沈線で区画し、弧線・直線・円文を組み合わせた単位文様や波状文が描かれている。文様は半裁竹管を強く押し当たし、断面がカマボコ状の沈線で描かれている。器面は全体に荒れていて、色は浅黄橙色である。同図2の胴部には、1と同様の沈線によりクランク状に曲がり、端部が蘇手状となる文様や逆U字形の文様が描かれている。1・2は新崎式の影響を受けた土器と考えている。

図160-1～図162-22は破片資料である。図160には渦巻文、同心円が描かれたものを示した。図160-1は地文上に渦巻文が描かれている。頭部には隆帯と交互刺突文、沈線文が巡り、横位沈線と渦巻文との接点にも交互刺突文が施されている。同図2～13・20は口縁部に渦巻文が描かれている。このうち2は波状口縁で、口縁に隆沈線が沿う。波頂部の下に渦巻文が描かれている。3も波頂部下に渦巻文が描かれ、その左右に三叉状の刻文が見られる。平口縁の6・9は、山形文の下に渦巻文が描かれている。10と図161-2は同一個体とみられる。波状口縁の可能性高く、隆線と有節沈線で文様が描かれている。隆線で表現された渦巻文の左右に3と同様の三叉状刻文が配置され、頭部には未発達の橋状把手が付く。

図160-14～19・21～27は胴部である。15は胴部を縦に区画する有節沈線の左右に、沈線と有節沈線で渦巻文が描かれている。16は頭部の隆帯直下に渦巻文が見られる。渦巻文からは小波状文が垂下する。また、菱形を縦に連ねた胴部文様が特徴的である。沈線は4本歯の幅広い工具で描かれている。21～23も、頭部直下に渦巻文が付くものと推察される。26の同心円文には、小さな

三角形の刺突が付く。

図161－1は、A2形と推測される口縁部から頸部にかけての破片である。口縁部上端には斜位に施された短沈線が並ぶ。口縁には地文上に弧線文が描かれ、口縁を巡る沈線との接点にのみ交互刺突文が描かれている。頸部には橋状把手が付く。同図3は貼付文を起点に三角形の隆帯が文様帶を区画し、区画内に有節沈線により三角文を描いている。同図4～7は、これに近似した三角形の区画文が見られる破片である。7は口縁部の短沈線や弧文と頸部の接点にのみ施される交互刺突文、橋状把手などの特徴が1と共に、Y字状の隆沈線が胴部に見られる。弧線文と区画線の接点に施文された交互刺突文は、図162－11にも見られる。

図161－8～12は波状口縁の波頂部や突起部である。8は主頭形を呈し、口縁に短沈線が描かれている。11は二山の波頂部に粘土紐を貼り付け、表裏にハート形の文様を表している。図161－13～図162－10・22は区画文や波状文、連弧文が特徴的なものである。図161－13は縦位の区画線内に、結節回転文を施している。同図15は図134－2に似た白っぽい色調である。口縁部に沈線による楕円形区画文が見られる。図162－1～6は、内湾または内折する器形に波状文・連弧文が描かれている。同図22は浅鉢の破片とみられ、口縁部に沈線による楕円区画文が描かれている。図162－12～15は、Y字状の沈線文が横並びに描かれたものである。地文として、縦位の結節回転文が施されている。同図16～21は、口縁部に有節沈線によって文様が描かれたもので、新崎式の影響を受けた土器と考えている。16は山形突起の下に同心円文が付く。17は隙間なく多条の有節沈線を施している。

2 類 (図163～188、写真84～95)

図163－1～図188－11が該当する。本類には器形を復元し得た土器が多数ある。深鉢の器形を大別し、以下のように分類した。また、各器形の典型的な例となる土器の図番号を()内に示した。本類において深鉢の器形を説明する際は、この記号を用いる。

A 1形：胴部が膨らみ、口縁部が直線的に外傾するもの(図163－1、図165－1)。

A 2形：胴部が膨らみ、口縁部が内湾して開くもの(図164－1、図165－2)。

A 3形：胴部が楕状を成し、内湾して口縁に至るか外折して口縁部が立つもの(図163－4)。

B 1形：胴部が直線的に開き、口縁部が外折して直線的に開くもの(図172－4)。

B 2形：胴部が直線的に開き、口縁部が内湾して開くもの(図176－1・2)。

C 形：胴部から口縁まで直線的に開くバケツ形のもの(図174－4)。

本類の地文には縦回転の斜繩文が多用され、羽状繩文、結節回転文も見られる。地文は間隔を空けて施文されることが多い。ただし施文された間隔は整わず、Ⅲ群1類のように整った帶繩文は見られなくなる。結節回転文は1類に比べ少なく、図164－1のように地文の一部にのみ施文される例がある。文様や器形の特徴からa～f種に細分した。

【a種】隆線でおもな文様が描かれた土器である。図163－2・4～図165－2、図167－1～図168－1、図176－3、図179－1～図182－16が該当する。図163－2の器形はB2形である。□

縁には波状の貼付文が見られる。口縁部文様帶は隆線によって2段に分かれ、いずれもX字状の隆線によって縦方向に区画されている。胴部にはY字状の隆線が並んでいる。地文は口縁部文様帶の上段を除き、隆線上にも施されている。同図4の器形はA3形である。口縁部直下に、小波状の突起が全周するものとみられる。胴部には大きな渦巻文と連弧状の隆線文が描かれている。図164-1の器形はA2形である。口縁部には連弧状の大きな貼付文が4単位で付く。貼付文にはLRの繩圧痕が施されている。頭部には橋状突起が付き、隆線による楕円形区画文が巡る。橋状突起からも縦長の楕円形区画文が垂下する。胴部には縦の楕円形区画文を結ぶようにV字形の隆線が巡る。隆線上には繩文原体による刻みが加えられているが、縦の隆線には施されていない。地文はLRで、隆線上にも施文されている。また、図示した部分にのみ結節回転文が見られる。

図164-2と図165-2はよく似た文様構成である。図164-2は口縁部を、図165-2は頭部を橋状把手で区画し、胴部に連続した山形文が巡る。山形文の谷部には、J字や逆U字形のアクセント文が付く。図165-2の胴部下半から底面にかけた内面には、焼成時に付着したとみられる黒斑が認められる。図165-1は、図164-2の橋状把手を隆線に置換したような文様構成である。図167-1の器形はA1形で、口縁に横長の貼付文が付く。口縁部には縦位の繩圧痕が間隔を空けて施文されている。頭部には楕円形区画文が巡り、胴部にはY字状の隆線が垂下する。同図2の器形はA1形と推定され、崩れた楕円形区画文や口縁から直線的に施文された隆線が見られる。図168-1は、口縁の形状が楕円形となる特異な器形である。胴部は口縁部よりさらに長楕円形となり、バスケットのような器形になるものと推定される。口縁には渦巻や波状の突起が4単位で付く。口縁部下端には鎖状隆帶が巡る。胴部には突起の下の位置を起点として、弧状文とY字状または直線的な隆線が描かれている。図176-3の器形はA3形である。山形波状の突起が口縁部から横に張り出す点が特徴的である。口縁から突起までは無文帯となり、X字状の隆線で区画されている。

図179-1～図182-16は破片資料である。図179-1～7のように、波状口縁の波頂部に渦巻や連弧状の隆線文が付くものが特徴的である。9には円形の貼付文が、10には三日月形の突起が付く。図180-1～4には橋状把手が見られる。橋状把手はⅢ群1類に比べ大型化し、4のように2本の粘土紐で作られたものもある。図180-8のY字状隆線に代表される垂下する文様や、図180-7、図181-12のような横長の楕円形区画文が多く見られる。図182-1～10は、口縁の内外に付く渦巻状や環状、S字状などの貼付文が特徴的である。同図12・14～16は同一個体の可能性が高く、無文地の波状口縁に左右非対称の隆線文が見られる。

【b種】隆沈線でおもな文様を描くものである。図163-1・3、図166-1、図169-1～図170-3、図176-1・2・4、図183-1～図185-2が該当する。図163-1の器形はA1形である。小波状の口縁には一部刻みが施されている。頭部には、横長の楕円形区画文と刺突列が見られる。胴部には蕨手状の文様と連弧文が描かれている。図163-3の器形はA1形に分類される。ただし胴部の張り出しが大きく、口縁部はわずかに外傾する。口縁には波状の低い突起が1箇所のみ付く。口縁部から胴部にかけては、縦方向の隆沈線によって4分割されている。胴部の隆沈線はトの字に

分岐する箇所とクランク状に屈曲する箇所がある。胴部の区画内には、藤手状の文様が描かれている。

図166-1は、楕円形となる可能性が高い土器である。器形はA1形に分類される。口縁に図164-1によく似た形状の貼付文がある。頭部には橋状把手が付き、頭部の無文帯はX字状の隆線で区画されている。胴部は連続する山形状の隆沈線と縦方向の隆沈線によって区画されている。斜めの区画の一部には、頭部に付くべき楕円形区画文が用いられている。山形文の頂部には、渦巻文が付く部分やクランク状の沈線が垂下する部分がある。また十字状のアクセント文も見られる。

図169-1の器形はA1形である。口縁にはメガネ状の突起が4単位で付くものと推定される。頭部と胴部上位に隆沈線が巡り、文様帯を上下に区画している。文様帯の上段には波状文が描かれている。下段はY字状の隆線で縦に区画され、区画内に一对の鉤状の文様が描かれている。隆線に沿う沈線には、串状の工具が用いられ、他の土器に比べ細い点が特徴的である。器壁は13mm前後と厚い。胴部下半の外面には、焼成時に付着したとみられる黒斑が認められる。また、胴部下半には高さ約40cm、幅20~30cmの方形の欠損部分があり、人為的に開けられた可能性がある。

図170-1の器形はA1形で、口縁部の幅は狭くほぼ直立している。口縁部には、原体LRによる繩圧痕が施されている。頭部には間隔が不均一な楕円形の区画文が巡る。胴部には、図169-1と同様に大ぶりな波状文が隆沈線によって描かれている。波状文の所々には、Y字やコの字の沈線文が附加されている。図170-2は大波状口縁で、器形はB2形である。波頂部には一对の渦巻状貼付文が付き、鉤状の隆線が垂下する。口縁部には口縁に沿って弧線文が重層的に描かれている。波底部から下がった位置にはY字状の隆沈線が4単位で付くものと推察される。同図3は、大波状口縁になるとみられるB2形である。口縁部には隆沈線によって対弧状の文様が描かれている。胴部にはY字状の隆線が垂下する。地文は縦回転のLRで、一部に結節回転文が見られる。

図176-1・2の器形はB2形である。図176-1は平口縁で、突起が1箇所付く。口縁部にはコの字状の沈線文が間隔を空けて描かれている。頭部からはノの字状の隆沈線が短く垂下し、胴部を6分割している。ノの字状隆沈線の間には、波状の沈線文が縦方向に描かれている。同図2は大波状口縁と推定される。波頂部から連弧状の隆沈線が垂下し、弧文の連結部には円文が添えられている。胴部はY字状の隆沈線で区画され、細い原体による精緻な地文が間隔を空げずに施されている。地文は隆線の上にも見られる。同図4はA3形に近い器形で、口縁部が短く外折する。口縁部には渦巻状の粘土紐を貼り付けた突起と橋状把手が付き、短い縦の有筋沈線が並べられている。胴部には、縦位の隆沈線と連弧文が見られる。

図183-1~11は、波状の口縁部片や突起部である。波頂部には1・2・10のように圭頭形のものと、3のように椀状になるもの、4・9・11のように粘土紐や一对の突起が付くものがある。7の突起には小さな貫通孔が見られる。同図12~図184-2は、口縁部や頭部の楕円形区画が特徴的である。図183-12は、貼付文の下に有筋沈線により小波状文を描いている。同図18の楕円形区画文の間には、円形の貼付文がある。図184-3・5~7には、交互刺突文が施されている。同図

4・8～12・14には、Y字状や鉤状の沈線文、弧線文が描かれている。13の渦巻状隆線には、有節沈線が沿う。15は図183～18の円文が、盲孔に置換したような土器である。図185～1は隆線に、列点文に近い有節沈線を沿わせている。同図2は図166～1とよく似た文様である。胴部は連続する山形状の隆沈線と、縦方向の隆沈線によって区画されるものとみられる。区画内には弧状や鉤状の沈線文が加えられ、図166～1に見られた十字状のアクセント文が隆沈線で表現されている。

【c種】 隆線と隆線に沿わせた繩圧痕によりおもな文様を描くものである。図171～1～図172～4、図173～1、図185～3～11が該当する。図171～1の器形はA2形である。4単位の波状口縁で、波頂部の右側にのみ小波状を呈する粘土紐が付く。波頂部の下には繩圧痕により同心円文が描かれ、その周りを連弧状の粘土紐と繩圧痕で加飾している。口縁部には繩文原体の結節部分のみを、間隔を空けて回転施文している。胴部はY字状の隆線によって4分割され、区画線の間には頸部から鉤状の隆線が短く垂下する。その隆線の先端に1箇所のみ、菱形の繩圧痕が付く。胴部には継回転のLRがまばらに施文されている。胴部下半の内面には、焼成時に付着したとみられる黒斑が認められる。図172～1の器形はA2形である。口縁部が内湾する度合いは弱い。4単位の波状口縁とみられ、波頂部は左右に張り出す形である。波頂部の下には隆線により縦と横の波状文が描かれている。口縁部には山形の隆線と繩圧痕が巡り、波底部で口縁と接している。胴部にも、口縁部と同様に山形の隆線が巡っている。同図2の器形はA3形である。口縁部の幅は狭く、外折して立つ。口縁部に山形波状の突起が巡るものと推察される。胴部には連続する山形文が巡り、その下に横長の楕円形区画文が付くものとみられる。

同図3もA3形で、口唇部が短く外につまみ出される。口縁部には楕円形区画文が巡り、頸部からはY字状隆線が垂下する。隆線には楕円形の刺突が加えられている。繩圧痕と胴部の地文には、ともに右撲りの直前段多条の原体が使用されたものとみられ、胴部には横回転で施文されている。同図4の器形はB1形である。口縁に小さな山形突起が付き、その右側の口縁にのみ一部刻みが入る。頸部には橋状把手と楕円形区画文が4単位で付くものとみられる。図173～1は半粗製的な土器である。器形はA1形に該当し、胴部の膨らみは弱く、口縁部は大きく開く。4単位の波状口縁とみられ、波頂部から短い隆線と繩圧痕が垂下する。地文は横回転で施文されている。繩圧痕、地文とともに、右撲りの直前段多条の原体が使用されている。

図185～3は突起部の破片である。内面に隆線と短沈線で人面が表現されている。同図4は大波状口縁の破片である。波頂部は小波状を成し、左右に張り出す。波頂部の下には渦巻状の隆線と繩圧痕が付くものとみられ、隆線は剥落している。波底部にも短い鉤状の隆線文があり、ここを起点に弧状の繩圧痕が描かれている。同図5～11には橋状把手や楕円形の区画文、胴部を区画する隆線などが見られる。

【d種】 繩圧痕が施文された土器である。図172～5、図173～2～図175～5、図186～1～図187～18が該当する。図172～5の器形はA1形とみられる。口縁部をY字状や2本一組の隆線で縦に区画し、区画内に弧状の繩圧痕文などを重層的に描いている。図173～2の器形もA1形に該当する。

口縁には一对の山形突起が付く。突起の下と口縁部の上下端には、繩圧痕が施されている。胴部中位には輪積みの段を残し、その段に沿って繩圧痕が施文している。胴部には地文として、繩文原体 L が方向を変えて粗雑に施文されている。同図 3 の器形も A 1 形の範疇に入り、口縁部は外反気味である。高さのない山形の波状口縁で、波頂部から胴部にかけてと頸部に隆線が付く。口縁部には 2 ~ 4 条の繩圧痕が施文され、胴部には附加条繩文が横位に施文されている。胎土には砂粒が多く含まれ、器面は荒れている。同図 4 の器形も A 1 形で、胴部は大きく膨らみ球形である。口縁は小波状を成し、環状の突起が 1 節所のみ付く。口縁部には、原体 L の繩圧痕が横位に施文されている。頸部には鎖状の隆帯が巡る。胴部地文も L とみられ、無作為に方向を変えて隙間なく施文されている。

図 174 - 1 の器形は A 2 形である。口縁に粘土紐を貼り付けた小突起が付く。口縁には小波状を成す部分と刻みが加えられた部分、平らな部分がある。口縁部には 2 条の繩圧痕が施文され、頸部には半裁竹管による刺突列が巡る。胴部には R L の施文方向を変えて表した羽状繩文が見られる。同図 2 の器形は A 1 形に該当する。頸部の括れは弱く、口縁部は外反気味である。4 単位の波状口縁で、波頂部から繩圧痕が胴部まで垂下する。口縁部上端と頸部にも繩圧痕が横走する。地文として横回転の R L が施文されている。同図 3 の器形も A 1 形である。口唇部には一对の刻みが 4 単位で入るものと推定される。無文地の口縁部と頸部に繩圧痕が施され、胴部には横回転の L R が施文されている。同図 4 の器形は C 形である。口縁部に L R の繩圧痕が巡り、胴部にも同じ原体による繩圧痕が縱位に間隔を空けて施文されている。胴部には、部分的に横回転の L R が施文されている。口縁部には補修孔が見られる。

図 175 - 1・2 の器形は A 1 の範疇に入り、ともに口縁部が若干外反している。1 の口縁部には繩圧痕が縱に 4 条ずつ、間隔を空けて施文されている。頸部にも繩圧痕が巡り、その下に繩文原体で刺突を加えた横長の貼付文がある。胴部には連弧状に繩圧痕が施文されている。原体は繩圧痕、地文とも左撫りの直前段多条とみられる。2 は口縁部から頸部に繩圧痕が横走する。頸部には刺突を加えた貼付文が付く。同図 3 の器形も A 1 形に属し、頸部の括れはごく弱い。口縁には連続的に押圧が加えられ、小波状を成す。胴部には 2 本一組の弧状の繩圧痕が 4 単位で巡り、弧状文の末端近くには菱形文が描かれている。同図 4 の器形は B 1 である。4 単位の波状口縁になるものとみられ、口唇部に繩圧痕が施されている。地文には L R が横回転で施文されている。同図 5 の器形は A 2 形で、4 単位の波状口縁と推定される。口縁部には波頂部で折り返すように多条の繩圧痕が施文されている。胴部には、波頂部の下の位置から 2 条の繩圧痕が縱に施文された箇所も見られる。地文には L R が方向を変えながら施文されている。

図 186 - 1 ~ 9 は波状口縁の破片である。1 は c 種にも見られた主頭形の波頂部である。2 は波頂部に繩圧痕による渦巻文が描かれ、結節回転文が施されている。同図 10・11 は頸部に鎖状の隆帯が付き、胴部に弧状の繩圧痕文が見られる。同図 12 と図 187 - 12 は同一個体の可能性が高く、山形突起の下と胴部に M 字状の繩圧痕文が付く。図 186 - 13 ~ 図 187 - 7 は、口縁部や頸部に波状文や弧状文、渦巻文などが描かれている。図 187 - 8・9 には円形の貼付文が付く。同図 10 は口縁

部に縫の結節回転を施した後、地文Rを横位に施し、最後に口縁部上端に繩圧痕文を施している。11・13～16・18は、口縁に沿って2～3条の繩圧痕文を施している。17は沈線で文様が描かれ、繩圧痕が加えられている。

【e種】a～d種に伴う浅鉢である。図177-1～3が該当する。図177-1は体部から口縁まで直線的に開く器形である。二山に分かれた突起が4単位で付くものとみられる。口縁部には沈線による横長の楕円形区画が描かれ、その中にハの字状の短沈線が並ぶ。口縁部の上下端には刺突列が見られる。体部は無文で内外面にナデとミガキが加えられている。図示しなかった口縁部片には補修孔が穿たれている。同図2は直線的に開く体部が中位で内折し、口縁部が短く立つ器形である。体部上半に隆線による対弧文が描かれている。器面が荒れ、隆線も磨滅している箇所がある。同図3は体部が直線的に開き、口縁部がくの字に内折する器形である。口縁には粘土紐を加えた山形突起が付く。口縁部には繩圧痕が横走し、体部は無文である。

【f種】阿玉台式直前段階から阿玉台I-a式に比定されるものである。図178-1～7、図188-1～11が該当する。本種の特徴として有節沈線が多用され、地文がなく、胎土に金雲母が含まれる点が挙げられる。ただし、図178-4、図188-6・7を除き、胎土中に見られる金雲母の量は少量または微量である。また器面の色は例外的なものを除き、暗褐色が褐色である。図178-1・2は同一個体の可能性が高く、器形はB2形とみられる。1・2とも指頭圧痕を加えた輪積み痕が残されている。1の波頂部には、隆線により連弧文と左右非対称な曲線文が描かれている。また、頸部にはY字状の隆線が見られる。2の胴部には、2本一組の隆線が4単位で垂下している。器面の色はにぶい黄橙色である。同図3と図188-5も同一個体とみられ、器形はB1形である。口縁部と頸部にX字状の隆線が付き、有節沈線が横走する。頸部のX字状隆線に挟まれるように、円形の貼付文が認められる。その下からはY字状の隆線が垂下する。口縁部の内面にはU字状の文様が描かれ、その左右に切り欠きが入れられている。4の器形はB2形である。ハート形の突起が付き、突起の内面には粘土紐の貼り付けによって人面の表現にも見える一对の楕円文が表されている。口縁部には突起の下に伸びる隆線を区画として、横長の楕円文が有節沈線によって描かれている。胴部には縦位の隆沈線や波状文が見られる。また、胴部外面には輪積み痕が残されている。胎土中には多量の金雲母が観察される。5の器形はA1形に分類され、頸部の括れはわずかである。口縁部には隆線による楕円形区画文が、胴部にはY字状の隆線が付き、これに有節沈線が沿う。6・7の器形はB2形になるものと推定される。6の口縁部には小さな突起が付き、口縁部上端の一部に有節沈線が施文されている。7は口縁部に楕円形区画文が描かれている。区画の境目には、X字状の隆線が施された箇所と縫の沈線が引かれた箇所がある。

図188-1は山形波状口縁の破片である。口縁に有節沈線を沿わせ、波頂部から弧状の隆沈線が垂下する。同図2はY字状の隆線が胴部で曲線化している。6・7は胎土中に多量の金雲母と砂が含まれ、同一個体の可能性が高い。6の内面には、図178-4の突起とよく似た一对の貼付文が見られる。9は波頂部の口唇部に繩文を施した後、刻みを加えている。口縁部にはY字状の隆沈線が描

かれている。10の口縁部にもY字状の貼付文があり、波頂部内面には三叉状の切り欠きが見られる。

3 類 (図188・189、写真96)

図188-12～図189-17が該当する。図188-12～図189-6は、S字状や渦巻状の粘土紐を組み合わせた突起および橋状把手である。図188-12には繩圧痕が、同図14には有節沈線が見られる。15の口唇部には爪形文が加えられている。図189-1は環状突起で、平坦な頂部に刻みと渦巻文が施されている。同図2は浅鉢の可能性があり、口縁に渦巻状や波状の粘土紐が貼り付く。6にはS字状の貼付文が見られる。7～11は、口縁部に縦位の短沈線や繩圧痕、刺突列が施されている。12は円形の突起が付き、胴部は地文上に隆沈線が描かれている。13には鶴頭状の突起が付き、口縁部に繩圧痕が見られる。14～17は胴部である。14の地文には撫糸文が、その他には縦回転のL Rが用いられている。14は隆線、15は有節沈線、16は隆沈線、17は沈線で渦巻文や弧状文が描かれている。

4 類 (図190～211、写真97～99)

図190-1～図211-12を本類とした。深鉢については器形を以下のように分類した。また各器形の典型例となる土器の図番号を()内に示した。本類において深鉢の器形を説明する際は、この記号を用いる。

A 1形：胴部が膨らみ、口縁部が直線的に外傾するもの(図190-1)。

A 2形：胴部が膨らみ、口縁部が内湾して開くもの(図199-1)。

A 3形：胴部が樽状を成し、内湾して口縁に至るか外折して口縁部が立つもの(図199-5)。

B 1形：胴部が直線的に開き、口縁部が外折して直線的に開くもの(図199-7)。

B 2形：胴部が直線的に開き、口縁部が内湾して開くもの(図196-4)。

C 形：胴部から口縁まで直線的に開くバケツ形のもの(図194-2)。

D 形：胴部がわずかに膨らみ口縁部に至るもの(図190-3)。

E 形：胴部から口縁まで外反して開くもの(図194-4)。

器形や文様の特徴から、a～d種に分けた。

【a種】Ⅲ群1類と共に通する特徴が見られる粗製の深鉢である。図190-1～図194-1、図203-1～図209-1～7・9が該当する。図190-1の器形はA 1形である。口縁には山形突起が4単位で付く。突起の下には未発達の橋状把手が付き、口縁部と頂部に三角刻文が並ぶ。胴部には縦方向の結節回転文が見られる。同図2の器形もA 1形の範疇に入るが、胴部は下膨れになるものと見られる。地文はなく、口縁部に縦位の隆帯が付く。同図3の器形はD形である。口縁部に4単位の山形突起が付くものとみられ、その下位の隆帯は剥がれている。胴部には櫛歯状工具を用いて格子文が描かれている。4も一本描きの沈線で、胴部に格子文が描かれている。5は半裁竹管で縦の沈線を描いた後に、口縁部と頂部に太い沈線が描かれている。6の器形はA 2形である。口縁部はごく緩やかに内湾する。上下が平行沈線で区画された口縁部文様帶に斜格子文が描かれ、胴部には横回転の結節回転文が見られる。

図191-1・3には縦方向の結節回転文が施されている。1の口縁部には刻み目を入れた隆帯が垂下し、3の口縁には刻みの入った低い突起が付く。同図2の器形はC形である。口唇部に刻みが、口縁部にはスリット状の縦位短沈線が加えられている。同図4の器形もC形である。地文としてR Lしが、口縁部には横回転で、胴部には縦回転で施文されている。図194-1の器形はA2形である。4単位の波状口縁とみられ、波頂部には指頭圧痕と縄文原体による刻みが加えられている。縦方向の結節回転文が地文として施されている。未発達な橋状把手や口縁部に付く刻みの入った縦の隆帯、口縁部に施文される縦位の短沈線、斜格子文や格子文、縦の結節回転文などは、Ⅲ群1類のa～d種に見られた特徴である。図194-1のような大波状口縁は、同じくf種に認められる。

図191-5～図193-5は無文地の深鉢である。図191-5、図192-3～5、図193-1・3は口唇部に刻みが施されている。図192-1は複合口縁で、器壁が底部から口縁部まで9mm前後と厚い。図192-6は頭部に刻みが入る。地文が施されない点と口唇部の刻みは、Ⅲ群1類e種に見られた特徴である。

図203-1～図209-7・9は破片資料である。図203-1～3には、無文地の口縁部に刻みを施した縦の隆帯が付く。図203-4・6・7、図206-6～9には、格子文や斜格子文が描かれている。図203-5の口縁部には、ハの字の短沈線が並んでいる。同図8～図206-1は、口縁部や頭部に縦位の短沈線が並ぶものや、間隔を空けて施された縦方向の結節回転文が見られるものである。このうち、図203-13の口縁部には、粗雑な沈線文が描かれている。同図24と図204-7の口縁部には、三角刻文が並ぶ。図204-3には地文上に沈線による渦巻文が描かれている。8の口縁部には刺突が加えられている。10・12・16の口縁部には、縦の隆帯や貼り瘤が付く。図205-15の胴部片は、結節回転文の上に貝殻腹縁文が施されている。

図206-2～4の口縁部片には、結節回転文や縄文が横位に施文されている。同図5は口縁部に網代痕があり、その上に半裁竹管による沈線が横走する。Ⅲ群1類とした図131-1の輪積み部分に網代痕が認められることから、本種に含めた。11は口縁部に横位の短沈線が見られる。12～18は、胴部に波状の沈線が描かれている。このうち13～16の多条沈線は、Ⅲ群1類e種に見られた交互刺突文や沈線に伴う列点文を簡略化したものと考えられる。縄文地に描かれた12・17・18は、結節回転文を沈線に置き換えたと見ることができる。

図206-19～図209-7・9は無文地の口縁部片である。このうち図206-19～21には、口縁に沿って平行沈線や小波状文が描かれている。図207-1・2の頭部には刻みが入った隆帯が付く。同図3・4は、口縁部の上下端に刺突列が見られる。波状口縁の5・7は、波頂部に刻みが施されている。口縁に突起が付くものは、10のような二山に分かれた山形突起となるものが目立つ。口唇部に刻みが施されたものや、複合口縁となるものも多い。

【b種】Ⅲ群2類と共通する特徴が見られる粗製の深鉢とこれに近似したものである。図194-2～図200-5、図209-8・10～図211-1～7・12を本種とした。図194-2の器形はC形である。口縁部に原体Lの縦圧痕が3条施文された後、同じ原体による縦方向の圧痕が間隔を空けて加えら

れている。胴部には綱回転のLが施文された後、部分的に原体の結節部のみが回転施文されている。同図3の器形もC形である。口縁部の輪積み痕が残され、そこに指頭圧痕が装飾的に加えられている。胴部には多截竹管状工具による綱方向のナデが、器面の乾燥が進まない段階で施されている。同図4の器形はE形である。口唇部には刺突が加えられ、小波状を成す。胴部下端を除く器面全体に指頭圧痕が、特に輪積みが意識されることなく施文されている。内外面には入念なミガキが施されている。

図195-1～図198-4は地文として繩文が施されている。Ⅲ群2類は繩文が綱回転で施文されるものが大多数であるが、図195-1・4、図196-1・2は横回転である。図195-4の口縁には波状の貼付文が見られる。図196-1は緩い波状口縁で、波頂部に繩圧痕が施文されている。同図2の突起の下と3の頸部には刺突を加えた横長の貼付文がある。4の器形は本種において稀有なB2形である。口縁にはY字状の隆線が付く。図197-1・2、図198-1にも、胴部を区画する隆線が見られる。図197-3は繩文原体で口縁部に刺突を加えている。図198-3の胴部には綱位の繩圧痕が施文されている。

図198-5～図200-5は無文地の深鉢である。図198-5・6、図200-5の口縁には波状の貼付文が見られる。図198-7、図199-7は阿玉台式系の粗製土器とみられ、胴部に輪積み痕を残し口縁部には突起または隆帯が付く。図199-6～図200-2にも、輪積み痕が残されている。図199-1はA2形の大波状口縁となる深鉢である。口縁と頸部には隆線が巡っている。同図2も波状口縁となり、A2形に含まれる。胴部が内折する器形が図175-5に近似している。同図3は口縁に指頭圧痕が加えられ、部分的に小波状を成す。4・5の器形はA3形に該当し、幅の狭い口縁部が外折する。

図209-8・10～図211-1～7・12は破片資料である。図211-12を除く全てに地文が施され、図210-1のように横回転で施文されたものも少なくない。図209-14・15、図210-10は頸部の隆帯上にも繩文が施文されている。図210-12と図211-7の胴部には、結束羽状繩文が施文されている。図210-2・5は、口縁に波状の粘土紐が付く。同図3・4・6の山形突起には刻み目に入る。8・9は、鎖状の隆帯が特徴的である。13～15の頸部には横長の貼付文がある。このうち15の貼付文には、有節沈線による刻みが加えられている。16の口縁部には装飾的に指ナデが残されている。図211-12は無文地で、波状口縁になるものとみられる。大きな把手が付くとみられるが、欠損している。内面に段が付く口縁部の形態から本類に含めた。

【c種】粗製の鉢、浅鉢である。図200-6～図202-1・3、図211-8～11が該当する。図200-6は体部がわずかに開いて直線的に立ち上がる鉢である。口縁直下にY字状の貼付文が4単位で付く。同図7は体部が外反気味に開く鉢である。口唇部に指頭圧痕が加えられ、小波状口縁となっている。8は内湾気味に開く浅鉢である。口縁に波状の粘土紐が貼り付く。9・10は入れ子状態で出土した浅鉢である。10は体部が直線的に開き、口縁部がくの字に内折する。9も同様の器形とみられるが、口縁部を欠損している。9には貼付文がわずかに残る。いずれの内外面にもミ

ガキが施され、特に9の外面には光沢がある。

図201-1・7は図200-10と同様の器形である。1の口縁には波状の粘土紐が貼り付く。同図2は体部が内湾しながら開き、口縁部が外反する。胎土中の砂が少なく、浅黄橙色をしている。3・4は体部が内湾気味に開く器形である。5は楕円形になる可能性が高く、体部から口縁まで直線的に開く。6も直線的に開く器形で、複合口縁となる。図202-1・3は、体部が大きく開くことから浅鉢の底部片とみられる。図211-8は鉢とみられ、直線的に開く器形である。原体Lが縱方向に施文され、口縁部内面にも同じ原体の繩圧痕が施されている。同図9~11も鉢とみられ、無文地である。9・11の口唇部には刻みが入る。10は口縁部が内折し、口縁は小波状をなす。

【d種】底部片である。図202-2・4~10が該当する。2・5の胴部には結節回転文が施されている。4・10は無文である。6・7は縄文地で、6には縦位の隆帯が4単位で付く。8には刺突列と沈線文が描かれている。9は指頭圧痕が装飾的に加えられている。また5・6・10の底面には網代痕が見られる。

小型土器・土製品（図212~216、写真100~103）

小型土器 図212-1~13は小型の土器である。図212-1は底部から胴部が内倒して立ち上がり、胴部上半が内湾気味に開く器形である。全面に原体Lが方向を変えて施文されている。同図2は胴部が筒状に立ち上がり、横回転のR Lが施文されている。3は無文地で口縁部が肥厚している。4は胴部が直線的に開く器形で、横ナデが内外面に施されている。5・6は胴部下半が直立し、途中から開く器形とみられ、ともに横回転のR Lが施文されている。7は半裁竹管により隙間なく沈線が描かれ、部分的に器面を削ぎ落としている。8~13はいずれも無文で9には高台が付く。10には輪積み痕が残されている。

図213-1~15は、いわゆるミニチュア土器である。1には高台が付き、胴部が内湾する器形である。L Rが横位に施文されている。また、底部内面には黒褐色の付着物が見られる。2~11はいずれも無文で、2~4・10には高台が付く。2は壺形、3は高杯のような器形をしている。5は体部が外反する盃のような器形である。6の器形は1に似ている。7・11は胴部が直立する器形で、11の内外面には入念なミガキが施されている。8は内湾する胴部片である。9は丸底状で胴部が開く。12~15は極小の手捏ね土器である。指オサエの痕跡が内外面に残されている。

土製耳飾り 図213-16~19は土製の耳飾りである。16・17は耳栓形で16は上面を窪ませている。17には焼成前に開けられた貫通孔がある。18・19は玦状耳飾りとみられる。18の平面形は円形になるものと推察され、断面形は三角形に近い。19の平面形は円形で、断面形は周縁が最も厚くつまみ出されてT字形に近い。切れ目の長さより孔径の方が小さい。また、割れ口の傍に補修孔が穿たれている。18・19には赤彩が施されている。

土偶 図214-1~図215-6に土偶を示した。図214-1は頭部とみられる。頂部は皿状に窪み、貫通孔が2箇所に設けられている。貫通孔の脇には刻みが1箇所認められる。同図2も1に

よく似た形態のため、土偶の頭部と考えられる。3～7は板状土偶である。3は顔の表現がなく、欠損したものも含め6箇所の突出部が手足や頭部を表現しているものと考えている。表面には指オサエの痕跡が残る。4はいわゆる単脚板状土偶である。顔は表現されず、無文で表裏が明確でない。腕部が水平に張り出し、腰部が括れている。5は頭部と下半身が欠損している。腕部が短く水平に張り出し、腰部が括れている。表面には、乳房の表現とみられる一対の丸い小突起が付く。裏面には、両側縁に沿って細い爪形文が施されている。6は表面に正中線が引かれ、左右対称に鋸歯文と横位の沈線が描かれている。裏面の下端には多条の横位沈線が見られる。沈線は際だって細い。7は頭部と下半身が欠損している。肩部は4・5に比べて半分である。鎖骨のような隆帯と乳房状の突起が付く。突起の間にはY字状の沈線が描かれている。裏面は縦方向にナデが加えられ、砂粒が動いたことによる線状痕が著しい。

図215-1は上半身と脚部を欠損し、腹部が二山に分かれて膨らんでいる。正中線は4条の沈線で表現され、腹部の二つの膨らみを開むように釣り針状に曲がる。その先端には逆T字形のアクセント文が入る。下腹部には沈線間に渦巻文や刺突列が描かれている。側面にも平行沈線が描かれ、腰部に短沈線が入る。裏面の中央にはわずかに窪んだ四線が引かれている。同図2も胴部下半の資料である。腹部が膨らみ、その真中に正中線が引かれている。腹部の膨らみを開むように2条の弧線が引かれ、その上下端に刺突が施されている。側面には3条の沈線が引かれている。裏面の中央は微妙に窪んでいる。2は1の文様を簡略化したような文様構成である。

図215-3は板状土偶の腕部とみられ、腕の付け根付近に貫通孔が穿たれている。同図4・6は図214-4のような単脚形土偶の下半身部分と考えている。図215-4の表面には太い沈線が描かれている。同図6は無文で裏面はほぼ全面が剥落している。同図5は胴部片と考えている。表面に弧線が描かれ、両側面には刻みが加えられている。

土製円盤 図216-4～12は、土器片の周縁を打ち欠いて作られた土製円盤である。全てに縄文が施されている。5・10には横位の結束羽状縄文、6には横位のR L Sが施文されている。12は表面が磨滅し不鮮明だが、縦回転のLとみられる。その他は横回転のL Rである。4～11は前期後葉、12は中期のものである可能性が高い。

その他の土製品 図213-20～22は棒状の土製品である。用途は不明でいずれも縦方向にナデが加えられている。図215-7は動物形土製品の可能性がある。表面全体に指オサエの痕跡がある。上側はつまみ出されて稜が付き、先端は二股に割れている。図216-1は焼成された粘土塊である。右手で握られたと推定される指や掌の痕跡があり、指紋も残されている。同図2・3は用途不明の土製品である。2の平面形は楕円形で薄い。指オサエの痕跡が残り、裏面の周縁には剥離痕が認められる。3は扁平な棒状を呈している。土偶や三脚形土製品など一部の可能性がある。

石器・石製品 (図217～225、写真104～109)

石 鐵 図217-1～図219-3が該当する。長幅比の最小値は図217-1の0.92、最大値は図

219-1 の 2.33 である。おおむね長幅比 1.2 ~ 1.7 の範囲に大多数の石鎚が納まる。基部の形態は、未成品とみられるものを除き全て凹基である。図 217-3 ~ 5 は特に基部の抉りが深い。側縁は図 218-18、図 219-1 のように直線的なものと図 217-5・17 のように内湾するものが大多数を占める。図 217-10・16 の側縁は外反気味である。図 218-13 の側縁は下端が角張っている。

図 217-12 ~ 15、図 218-8 ~ 10 は未成品とみられる。図 217-12 は表裏に素材の大きな剥離面が残されている。13 ~ 15 は厚みを除去しきれず、基部や側縁の形状も整っていない。図 218-8 ~ 10 は薄い素材が用いられている。表面は調整が中心部まで行われているのに対し、裏面は周縁のみに止まっている。同図 9 には自然面が残されている。

図 217-18 は先端部を欠損し、先端方向から加圧した剥離が見られる。図 218-20 は被熱したものとみられ、表面が爆ぜている。図 219-3 は厚みがあり、下端に折れた面が見られる。この面を打面として、表面のみ再調整が加えられている。折れた尖頭器を石鎚に再利用しようとした可能性がある。石鎚の石材には流紋岩と珪質頁岩が多用され、少数ながら珪化木や黒曜石も用いられている。

石錐 図 219-4 ~ 17 を石錐とした。4 ~ 7・9 ~ 12 は摘み部が比較的明瞭なものである。4 は被熱し、爆ぜた箇所が見られる。5・6 は錐部が長く、6 の摘み部には自然面が残されている。7・9 の錐部は扁平で薄く、素材の剥離面が残されているため、未成品の可能性が高い。10 は摘み部が大きく、錐部が短い。摘み部には大きく自然面が残されている。11 の摘み部には節理面が残され、錐部には入念な調整が施されている。8・13 ~ 17 は、摘み部が小さいものや不明瞭なものである。8・14・17 は折れた剥片を素材とし、先端に両面加工を施している。13・15・16 は側縁全体に両面から調整が施され、特に 15 は左右対称に成形されている。

尖頭器 図 220-1 ~ 7 の 7 点である。1・2・4・5 はいわゆる押出型ポイントとみられる。両面加工の尖頭器で、基部に両側縁から抉りが入れられている。1 は基部寄りに、2 は刃部の中央付近に最大幅がくる。3 は先端部分とみられ、両面加工によって薄く成形されている。6 は 3 に比べ厚みがあり、基部側とみられる。7 は柳葉形の尖頭器である。先端付近は薄い菱形に、基部は幅狭く厚めに加工されている。

石匙 図 220-8 ~ 12 が該当する。8 ~ 11 は長軸側に摘みが付く綫長の石匙である。8 は押出型ポイントの可能性もあるが、裏面に素材の剥離面が大きく残るため石匙に含めた。9 は素材の剥離面を大きく残しながらも両面の側縁が加工され、表面の左側縁には銳角の、右側縁は左側に比べ鈍い角度の刃部が作り出されている。また先端には急角度の調整が加えられ、尖っている。10 は摘みの抉りが浅く、小さい。裏面の右側縁には調整が加えられず、鈍い角度の刃部となっている。11 は摘み部と刃部が折れている。摘み部の幅が広く、刃部の幅と大差ない。刃部の折れた面には微細剥離が認められる。12 は横長の石匙である。極小で摘み部の先端は折れている。両面加工が施され、一方の端は尖っている。

その他の剥片石器 図 221-1 ~ 3、図 222-1 ~ 6 が該当する。図 221-1 は円形の搔器である。表面には自然面が、裏面には主要剥離面が残されている。表裏の周縁のほぼ全周に調整が加えられ

ている。同図2は削器、3は鋸歯状石器とした。ともに自然面が残された剥片の一側縁に調整が施されている。3の表面左側縁には微細剝離も認められる。図222-5も削器とみられる。やはり表面に自然面が大きく残され、表側から見て右側縁の両面と左側縁の先端に調整が施されている。

図222-1～4・6は、二次加工や微細剝離が認められる剥片である。1は黒曜石製の縦長剥片で、裏面の右側縁に微細剝離が観察される。2は両面に加工が施され、鋭角な刃部が作り出されている。3は不純物の多い黒曜石を素材とし、両面に加工が施されている。4は小さな円礫を素材とし、両極打撃による剝離面が見られる。側縁には部分的調整剝離が認められる。6は縦長剥片の側縁に、微細剝離が認められる。

礫石器・石核 図221-4はチョッパーか石核とみられる。亜円礫に大きな剝離痕が入り、おもに右側縁に細かい剝離が認められる。図222-7～9は石核である。7・8は打面を転移させながら剥片が取られている。9は亜円礫の一側縁に打撃を加えて作り出した稜を打面としている。

打製・磨製石斧 図223-1～5が該当する。図223-1は粘板岩製の打製石斧である。おもに両側縁から加工され、表面には自然面が大きく残されている。2は縦長の礫を素材とした磨製石斧の可能性がある。下端の折れた面に調整が加えられている。3～5は磨製石斧である。3は刃部を欠損し、折れ面に調整剝離と敲打痕が認められる。4は片刃で研磨による線状痕が顕著に残る。刃部には微細剝離も認められ、その稜は不明瞭になっている。また刃部は赤く変色している。5は基部と刃部を欠損している。断面形が隅丸長方形のいわゆる定角式磨製石斧である。また側面には擦切り技法の痕跡とみられる溝状の窪みが残されている。

磨石・凹石・石皿 図224-1～図225-2が該当する。1は軽石を素材とした凹石である。表面のはば中央に回転運動により開けられた穴がある。2は扁平な楕円形の礫を用いた磨石で、側縁全周に使用痕が認められる。3～5は細長い礫が用いられ、短軸方向の両側面に磨り痕が、長軸方向の端部に敲打痕が顕著に認められる。図225-1・2は石皿である。平板な礫が使用され、裏面に目立った加工痕は認められない。表面は使用により窪んで表面が平滑になっている。滑らかな範囲を図中では灰色で示し、中でも特に平滑な部分については濃い灰色で示した。

石製装身具 図225-3～11が該当する。3は縦長の垂飾具である。側面には擦切りの痕跡が残されている。貫通孔は両面から穿たれている。また、貫通させずに止めた穴も見られる。4は玉類の破片である。表面には研磨痕が認められ、裏面には孔であったとみられる溝が残されている。5～11は玦状耳飾りである。全てはば中央で折れている。5は周縁に角が残され、研磨も粗い。6・9～11は長方形に近い平面形で切れ目の長さより孔径が小さい。7は楕円形で切れ目部分を欠損している。孔が全体のはば中央に位置する。8も楕円形で孔が上寄りに位置する。切れ目の長さより孔径がやや小さい。成形と表面の研磨は丁寧に施されている。折れ面の傍には二次的に穿たれたとみられる孔が認められる。

(今野)

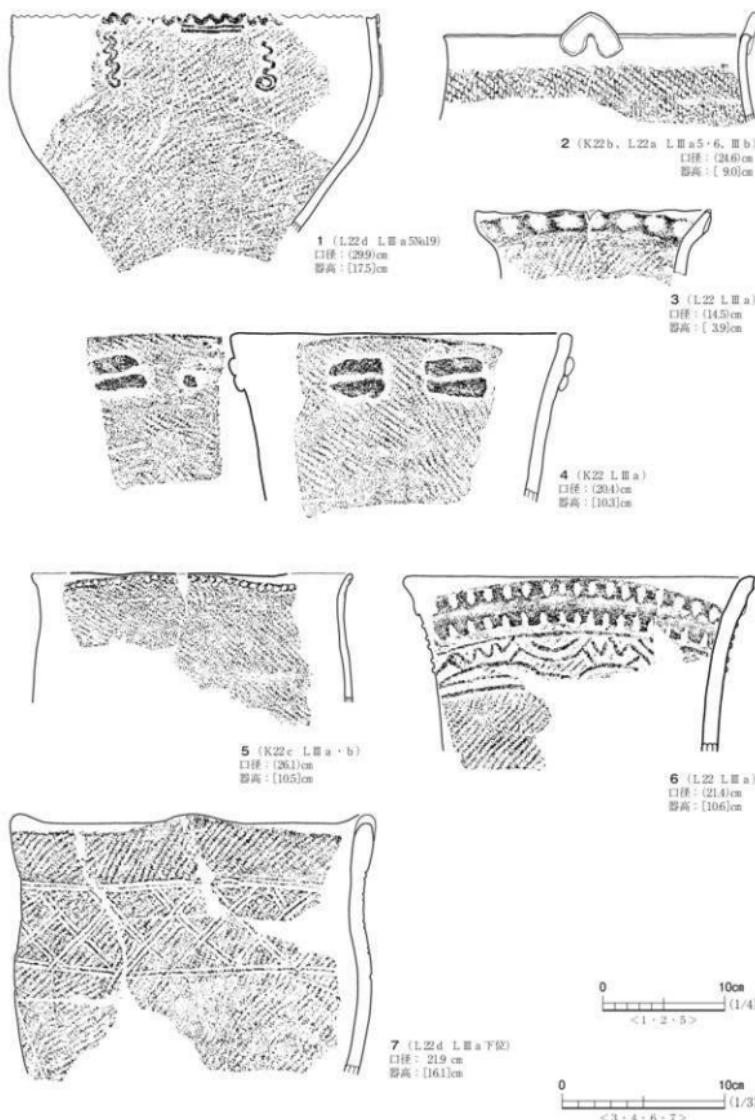


図71 遺物包含層出土縄文土器（1）

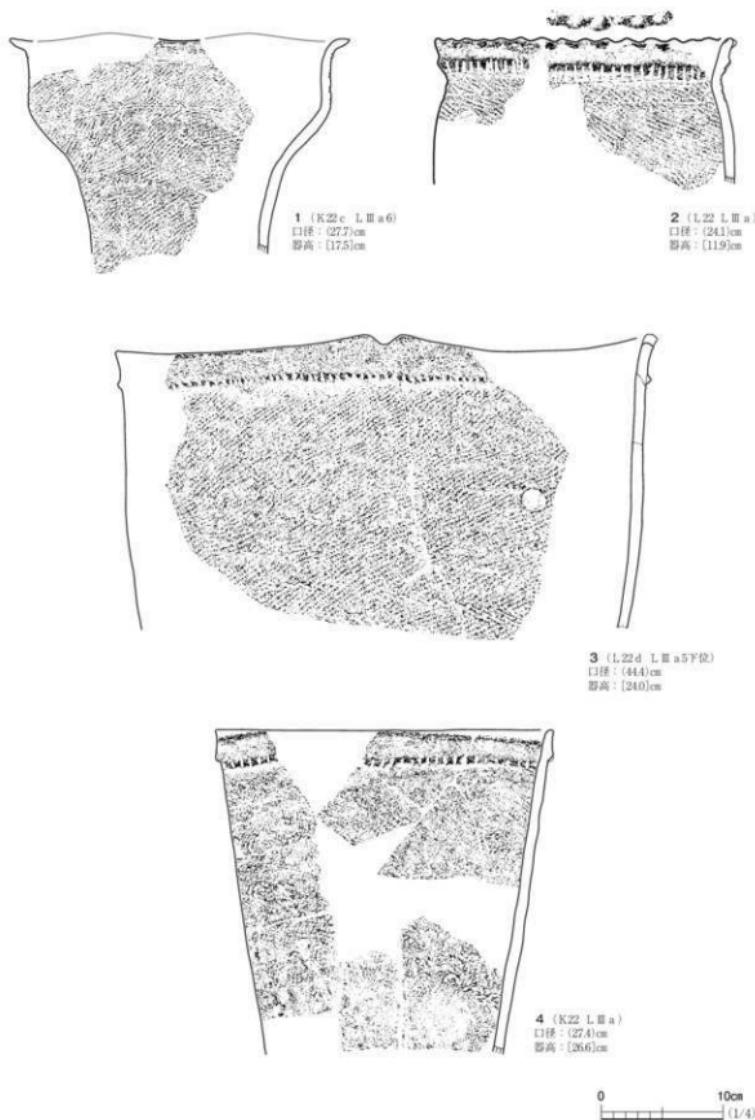


図72 遺物包含層出土縄文土器（2）

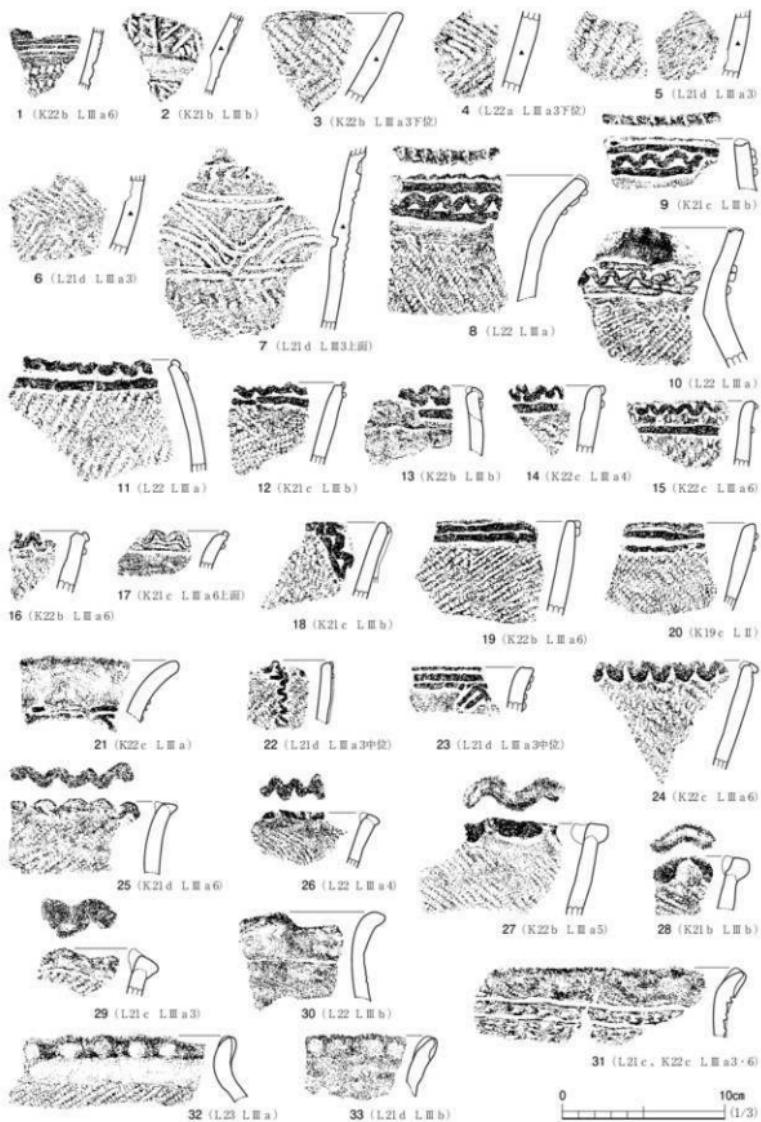


図73 遺物包含層出土繩文土器（3）

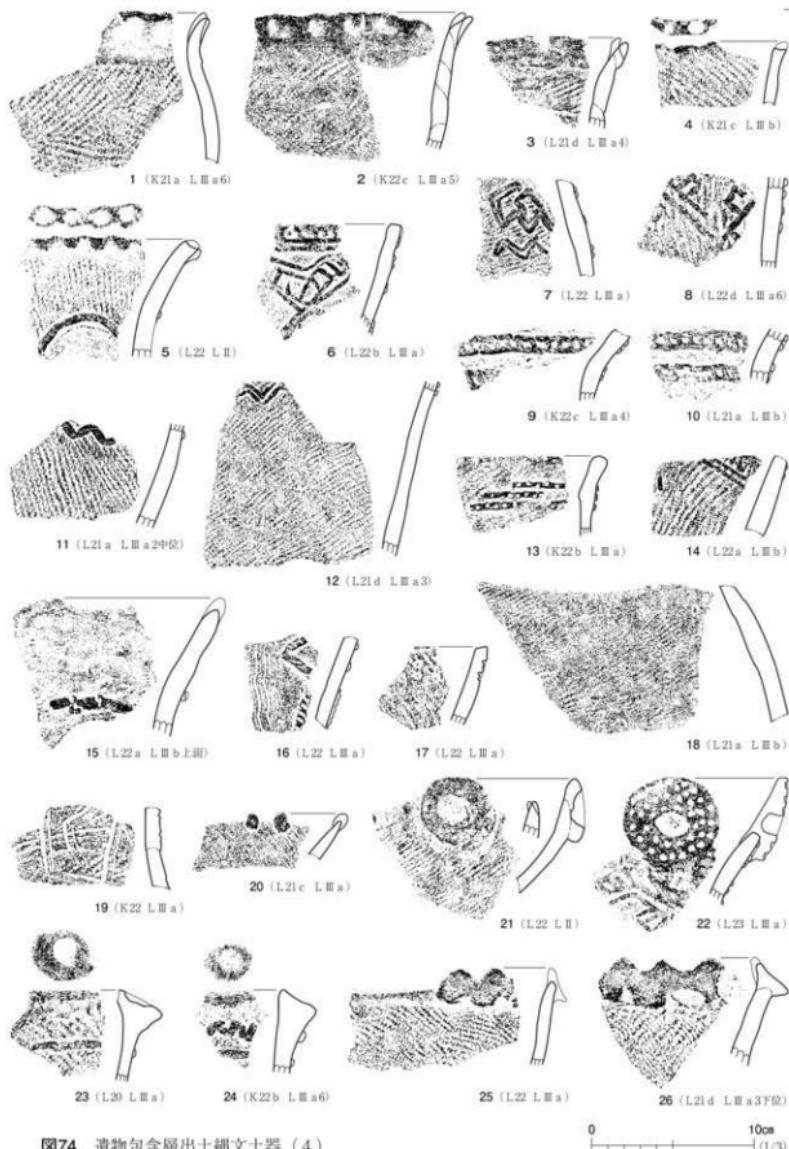


図74 遺物包含層出土縄文土器（4）

0 10cm
(1/3)



図75 遺物包含層出土縄文土器（5）

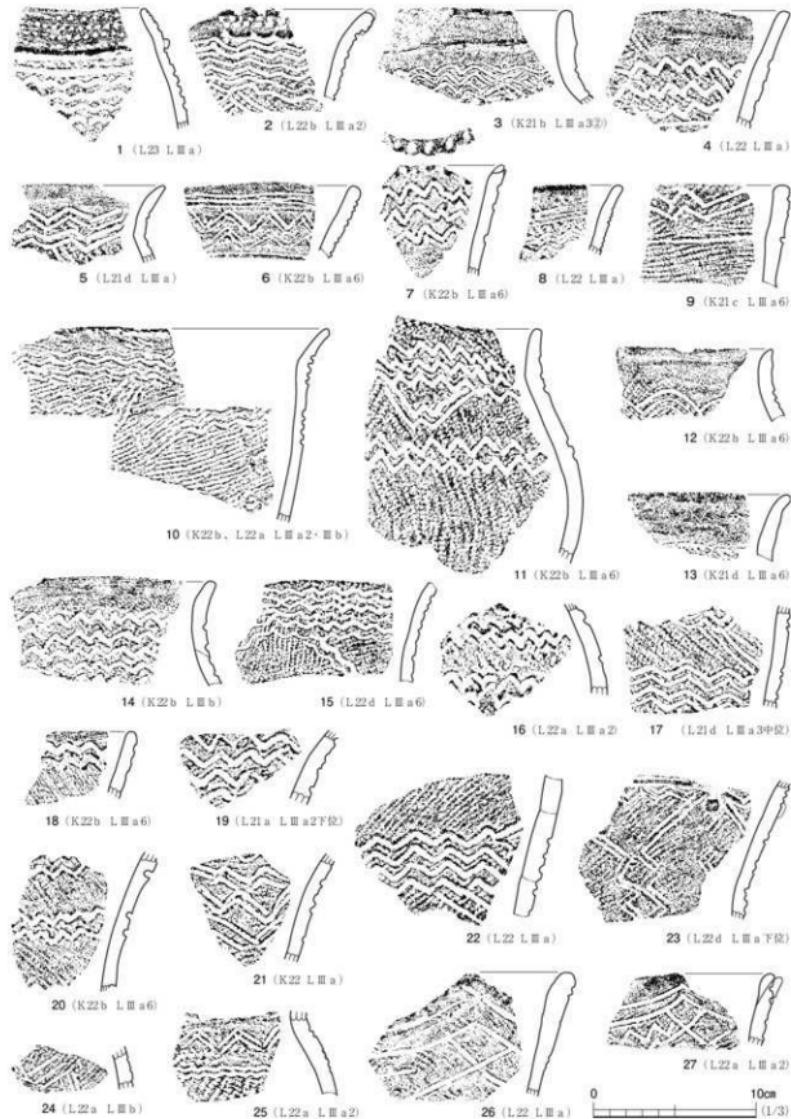


図76 遺物包含層出土縄文土器（6）

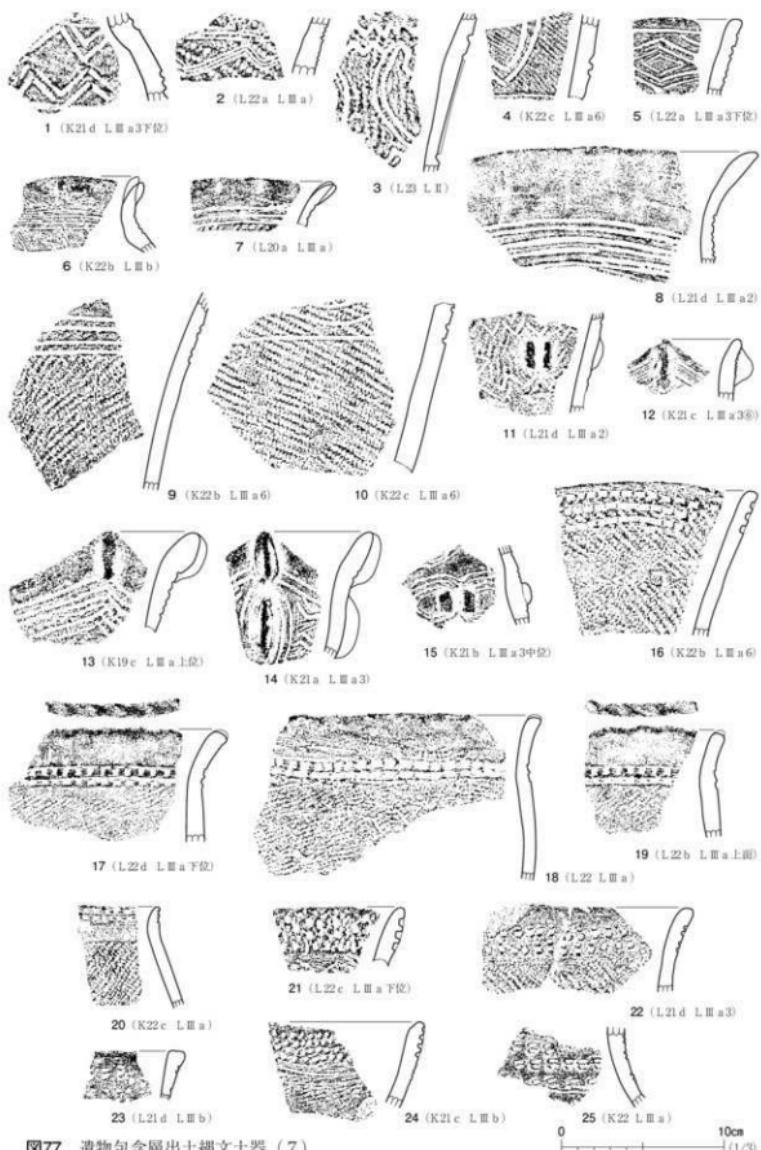


図77 遺物包含層出土繩文土器（7）

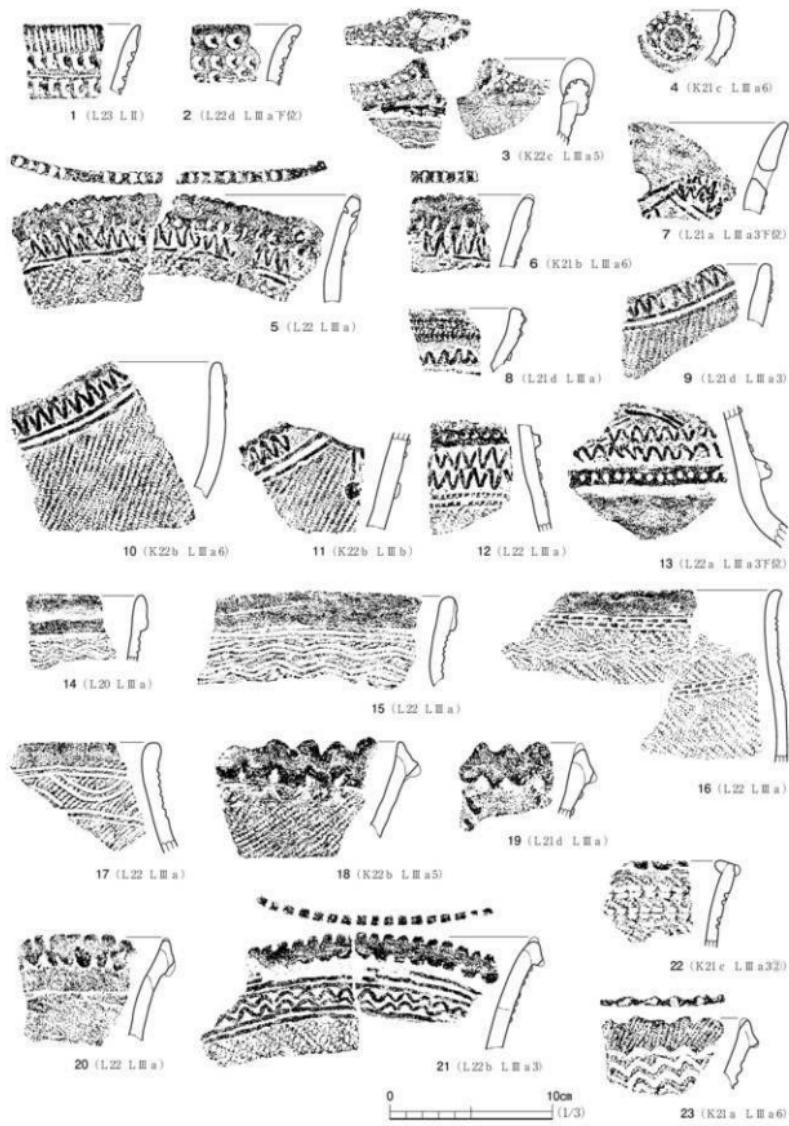


图78 遗物包含层出土绳文土器（8）



図79 遺物包含層出土縦文土器（9）

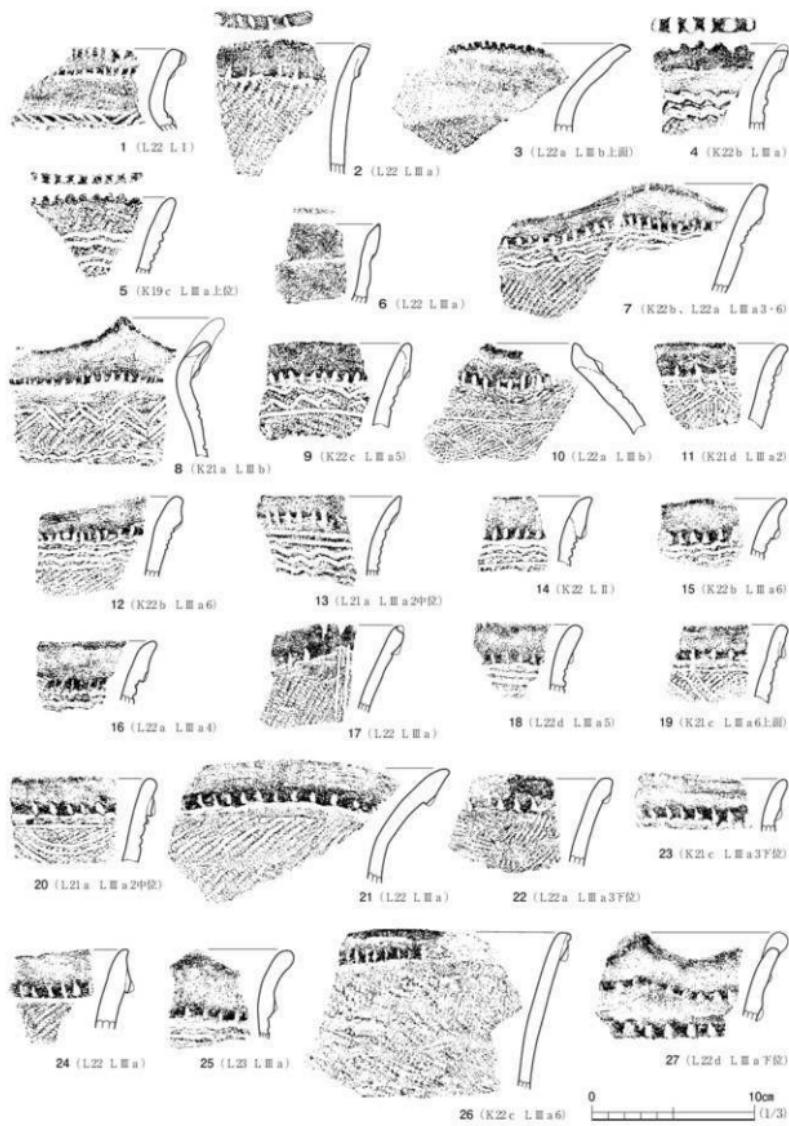


図80 遺物包含層出土縄文土器（10）

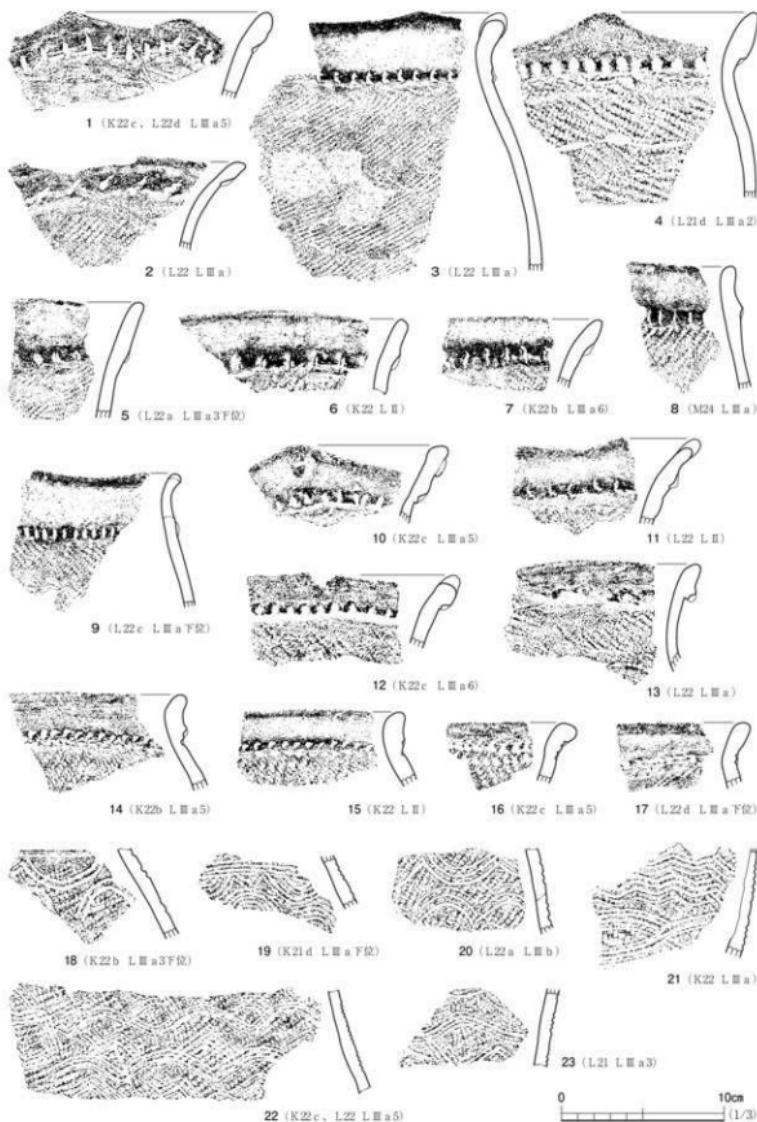


図81 遺物包含層出土縄文土器 (11)

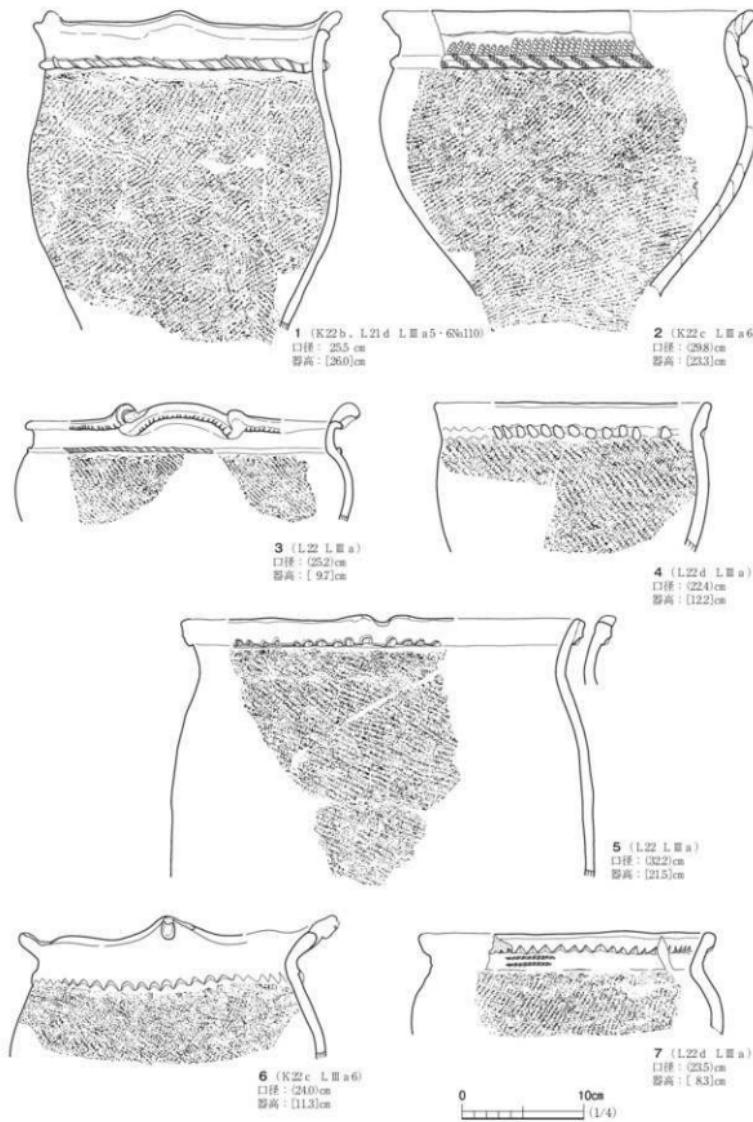


図82 遺物包含層出土縄文土器 (12)

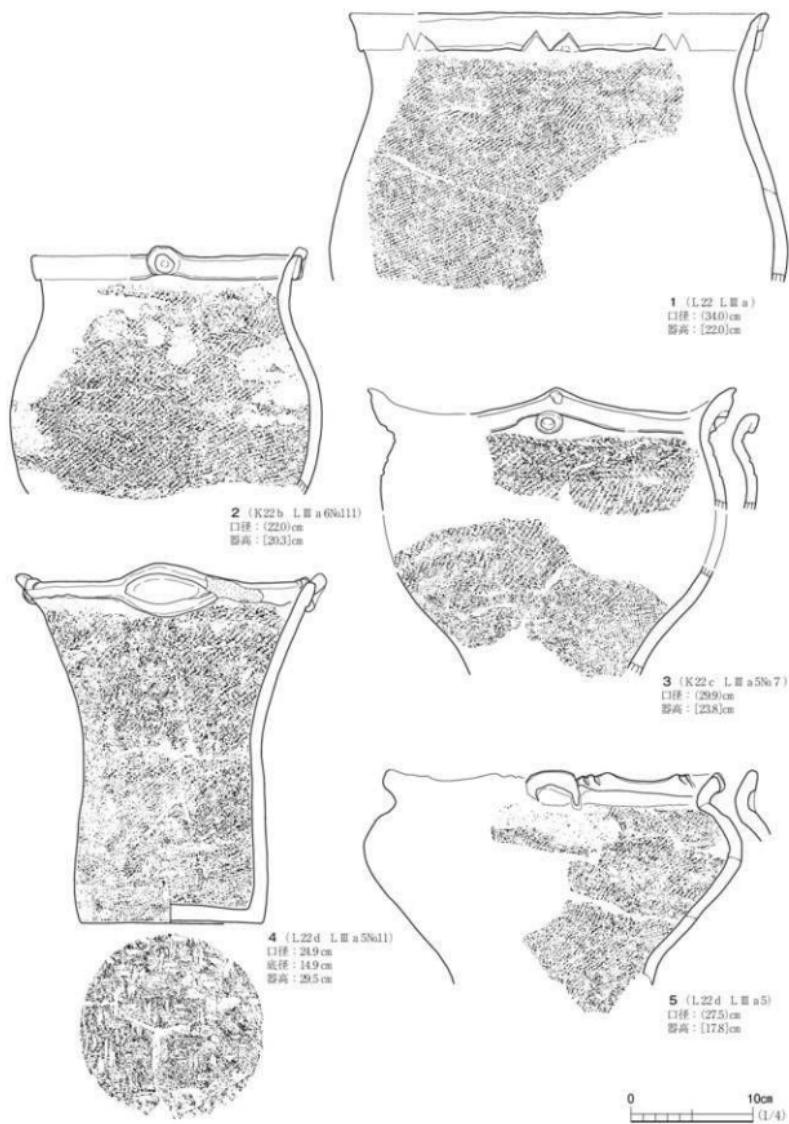


図83 遺物包含層出土縄文土器 (13)

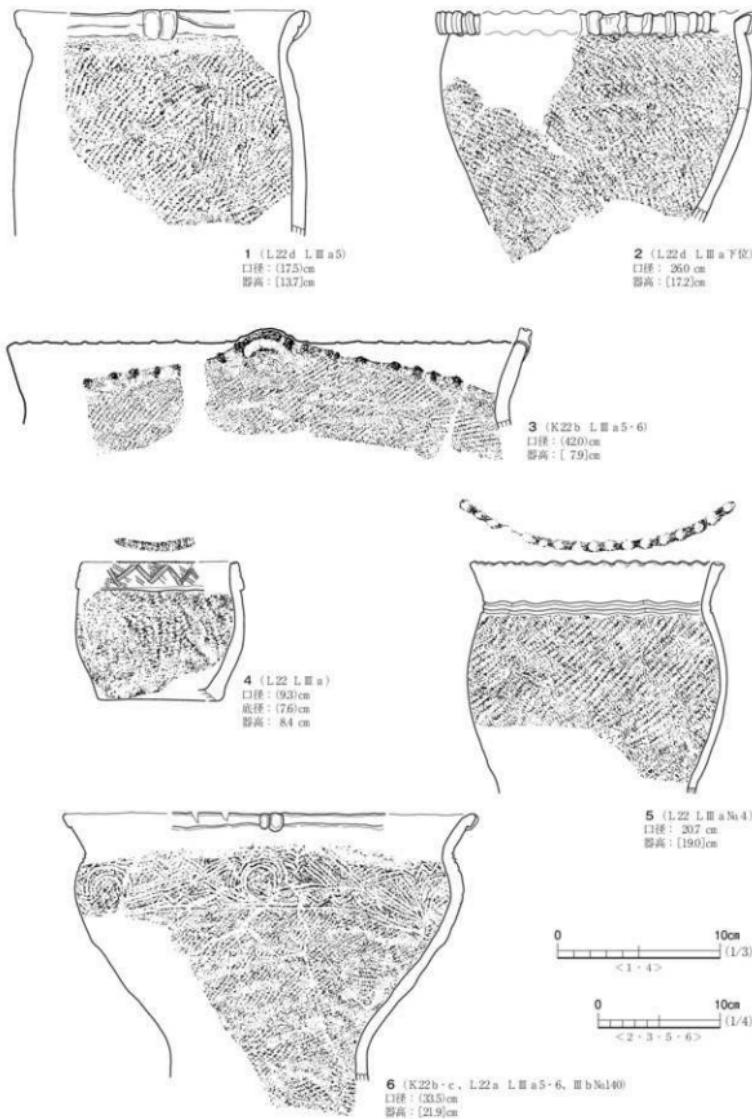


図84 遺物包含層出土縄文土器 (14)

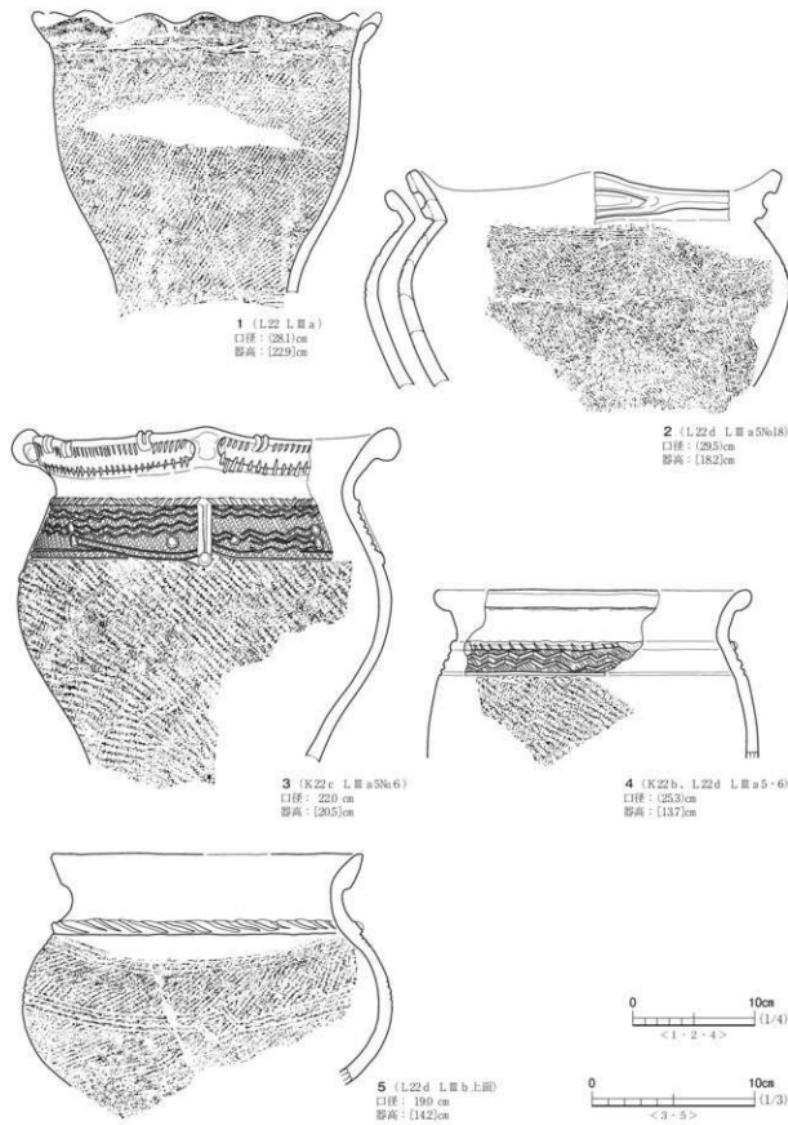


圖85 遺物包含層出土繩文土器 (15)

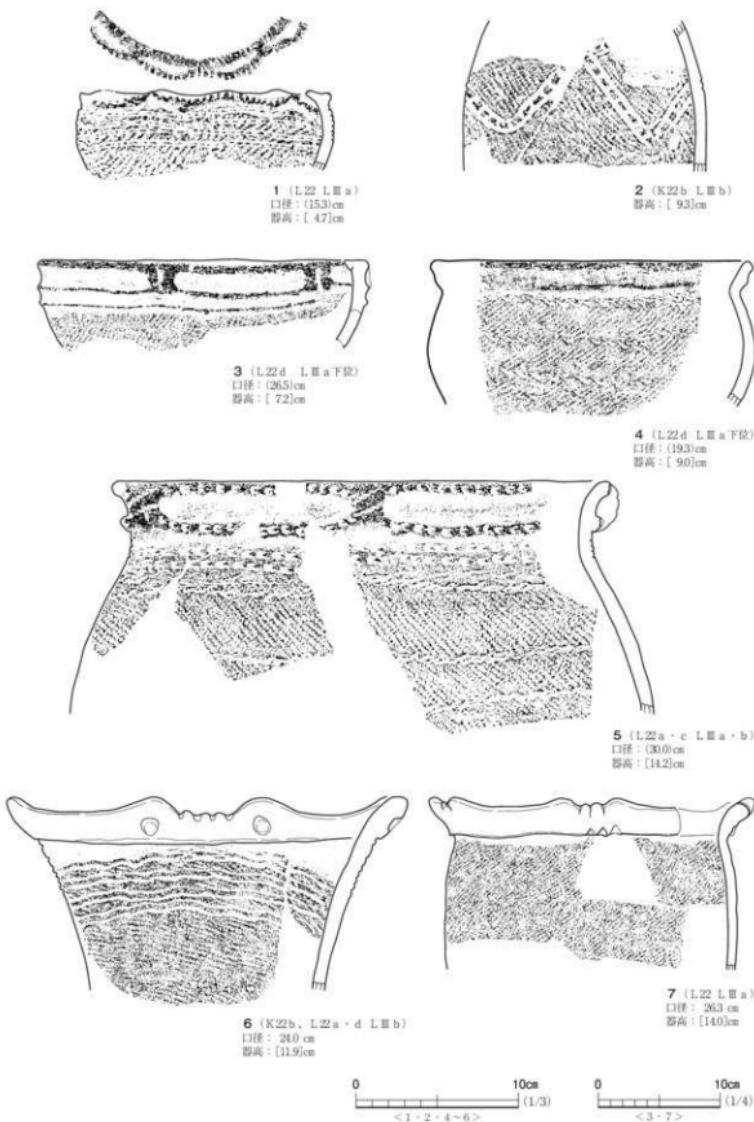


図86 遺物包含層出土縄文土器 (16)

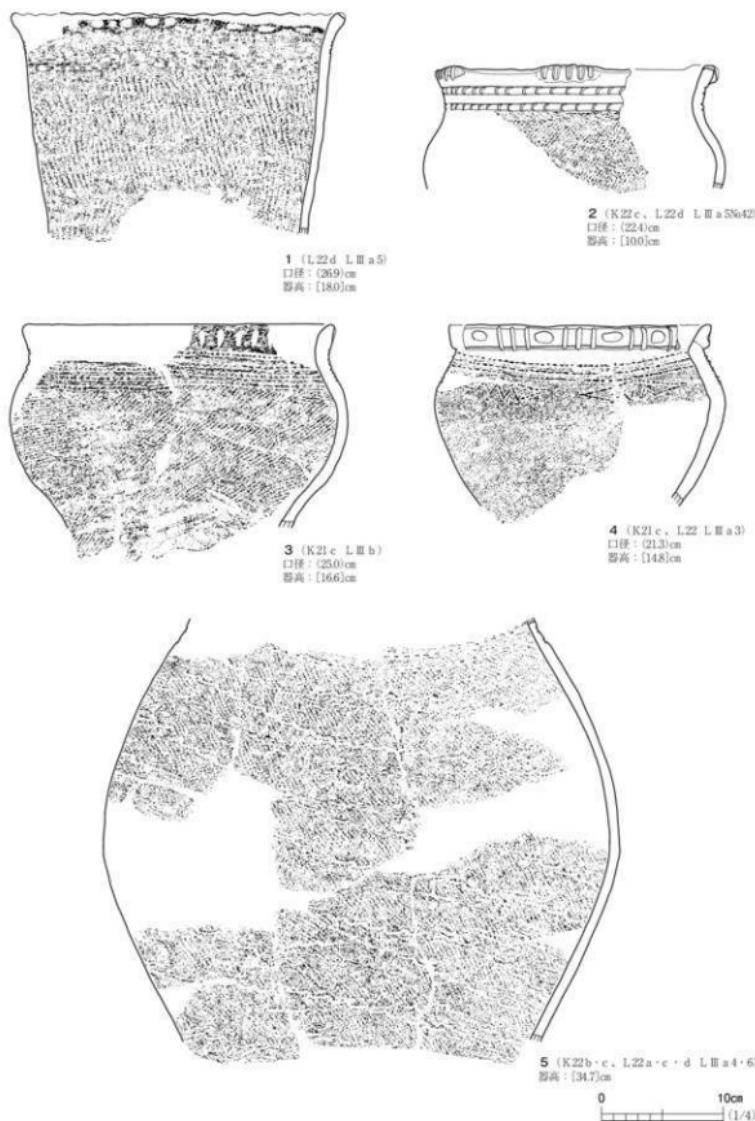


図87 遺物包含層出土縄文土器 (17)

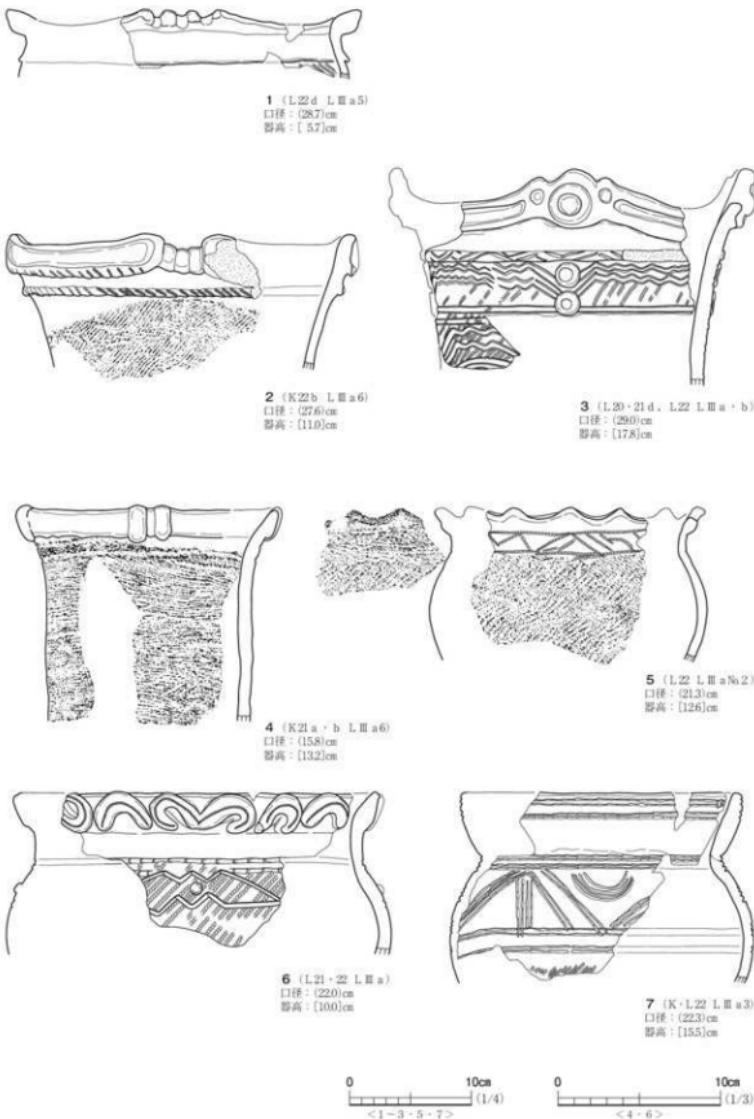


図88 遺物包含層出土縄文土器 (18)

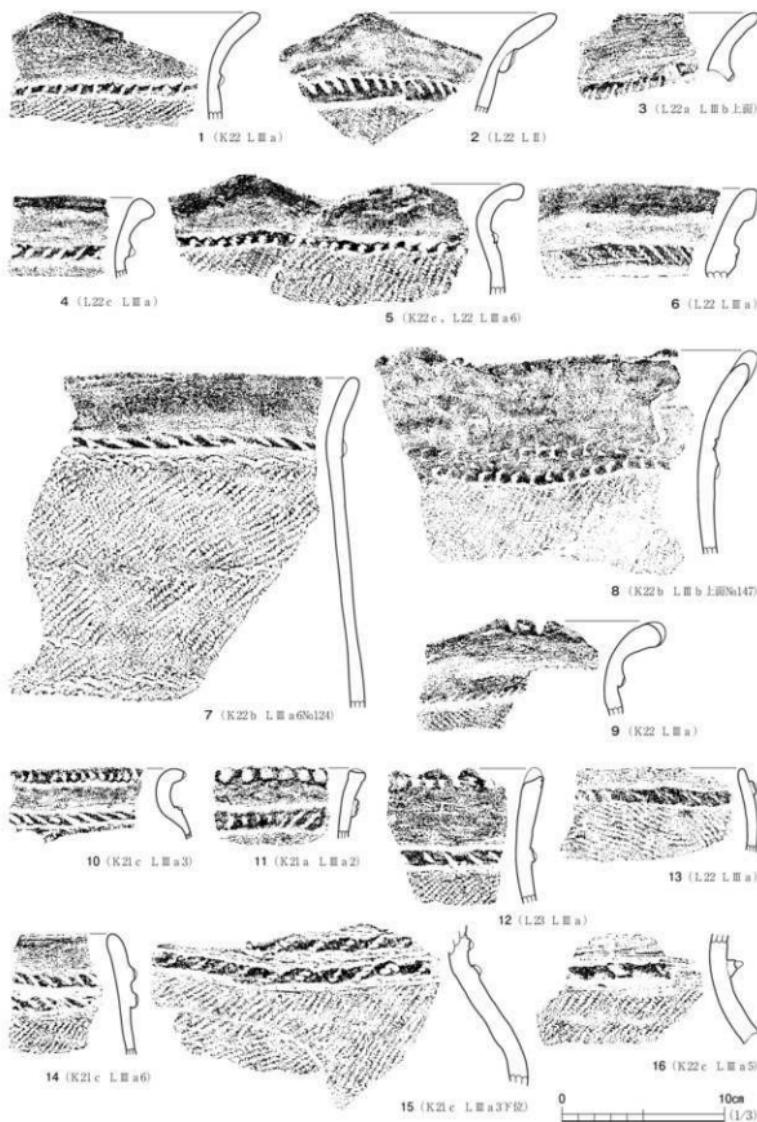


図89 遺物包含層出土縄文土器 (19)

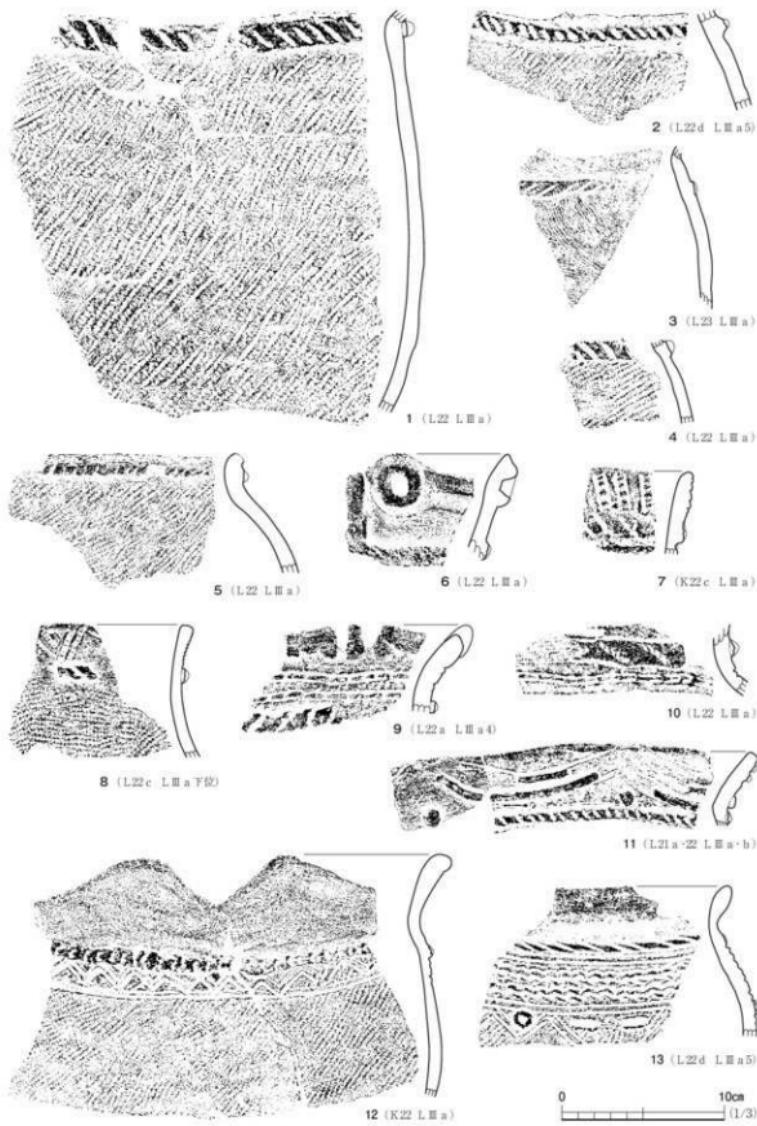


図90 遺物包含層出土縄文土器 (20)

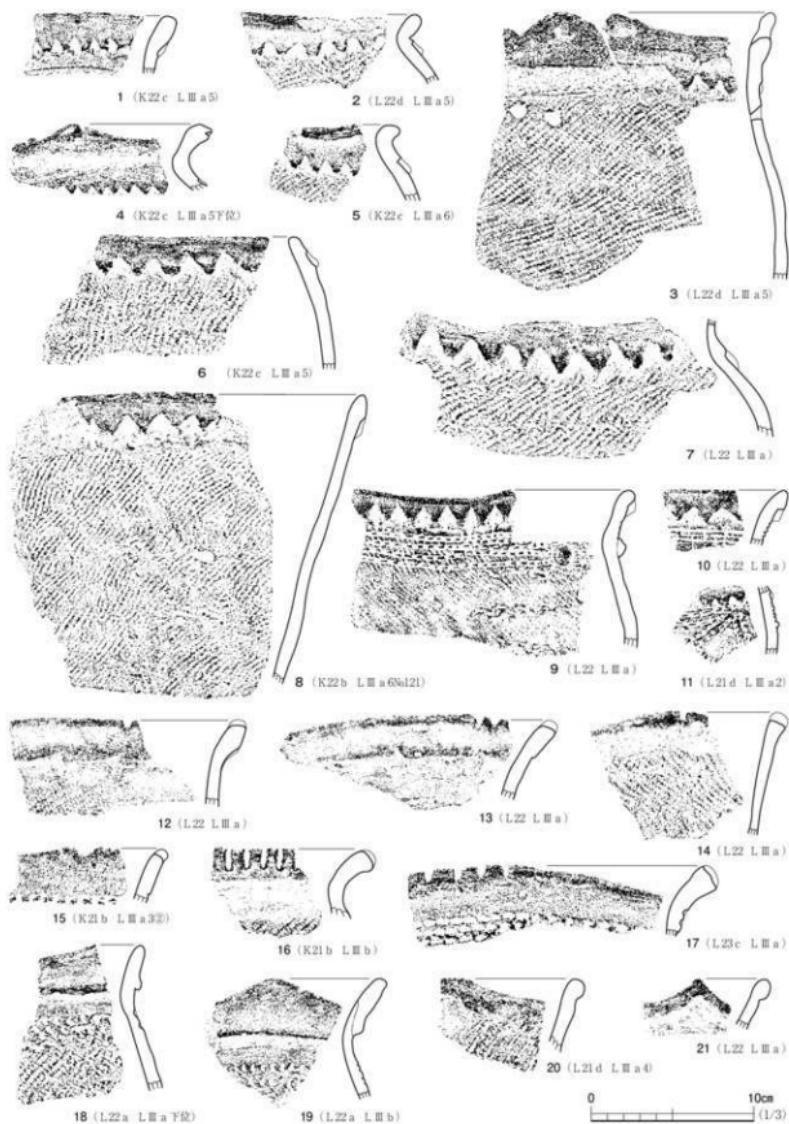


図91 遺物包含層出土縄文土器 (21)

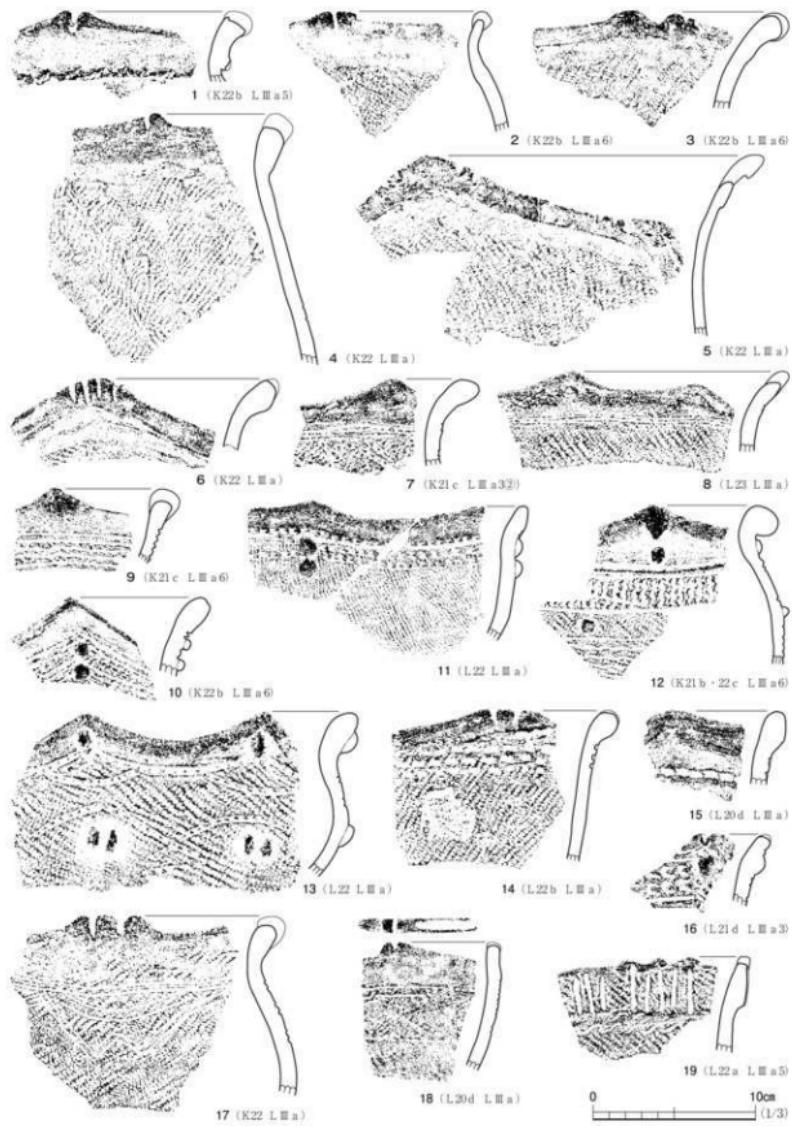


図92 遺物包含層出土縄文土器 (22)

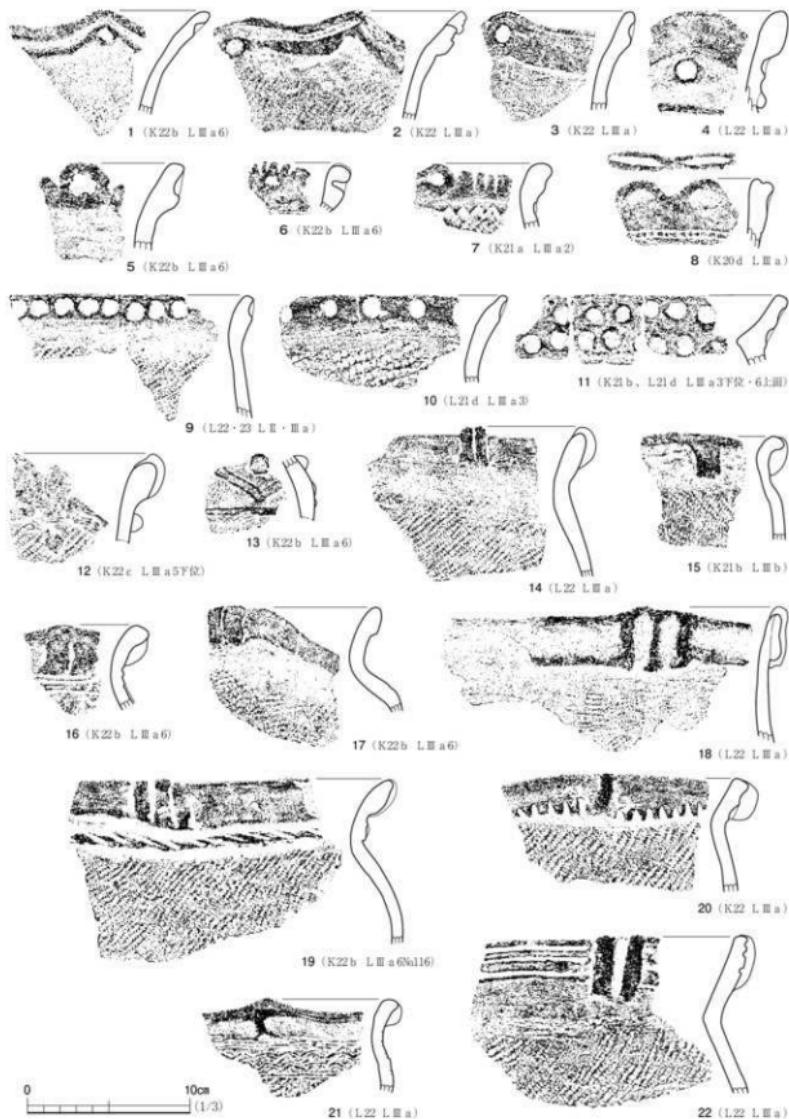


図93 遺物包含層出土縄文土器 (23)

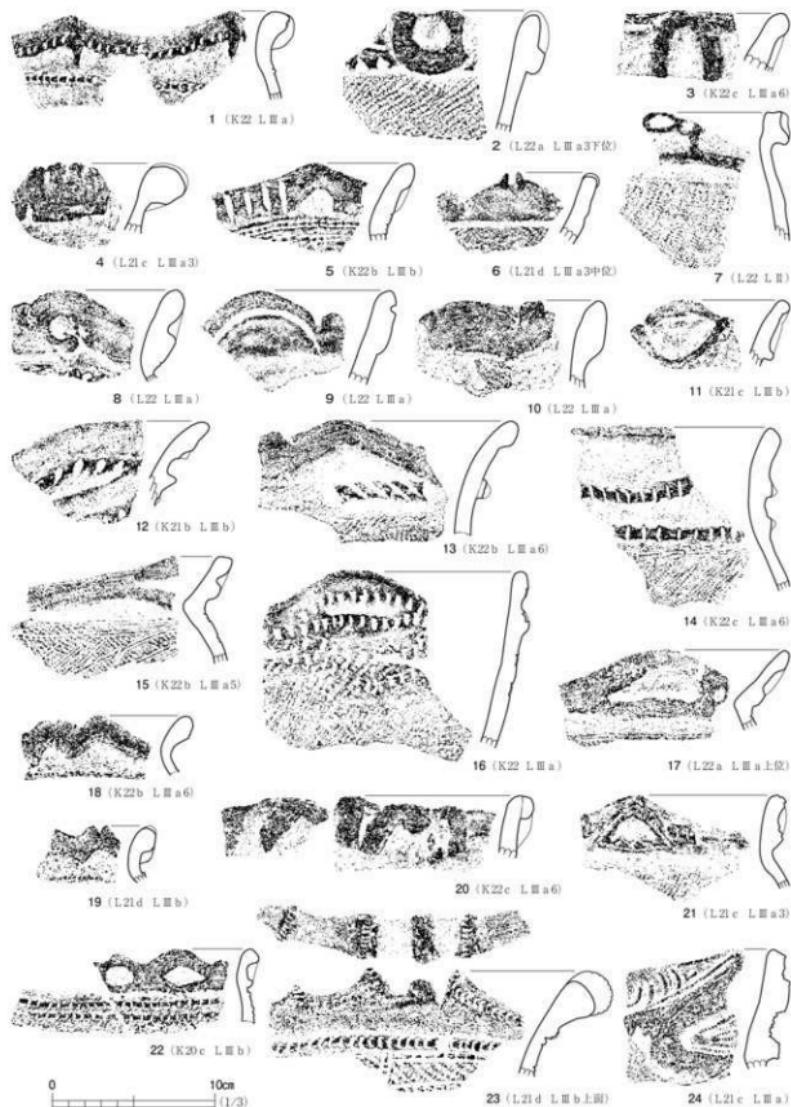


図94 遺物包含層出土縄文土器 (24)

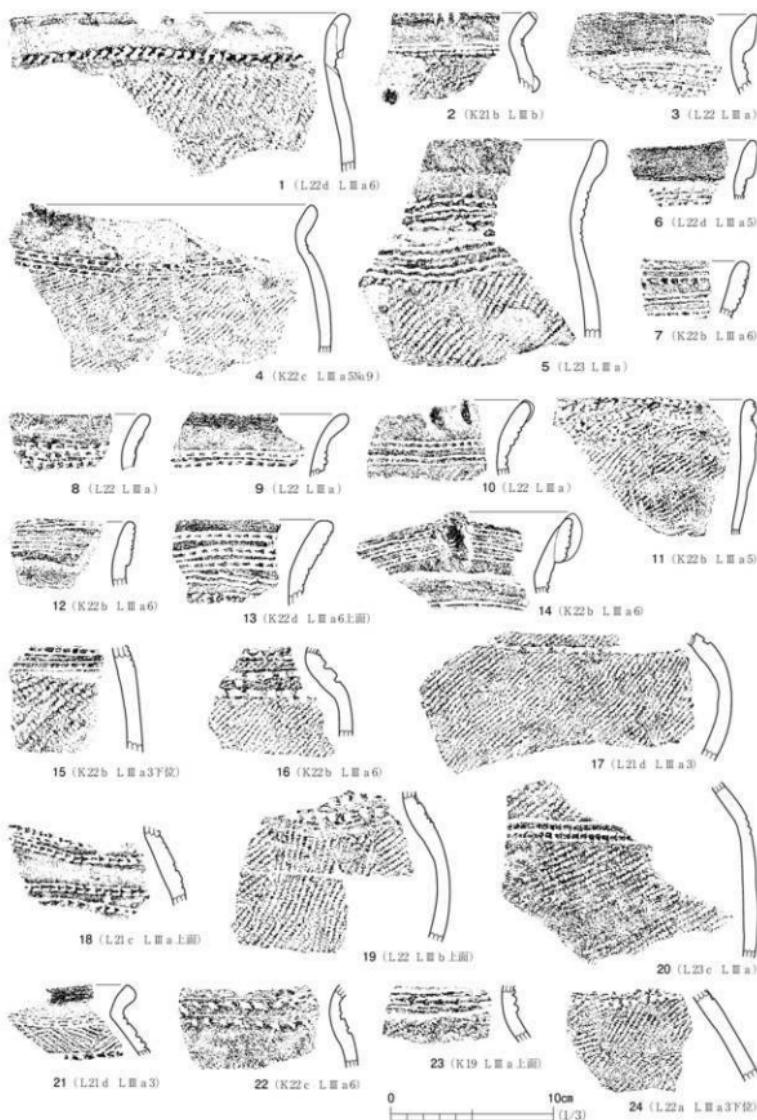


圖95 遺物包含層出土繩文土器 (25)

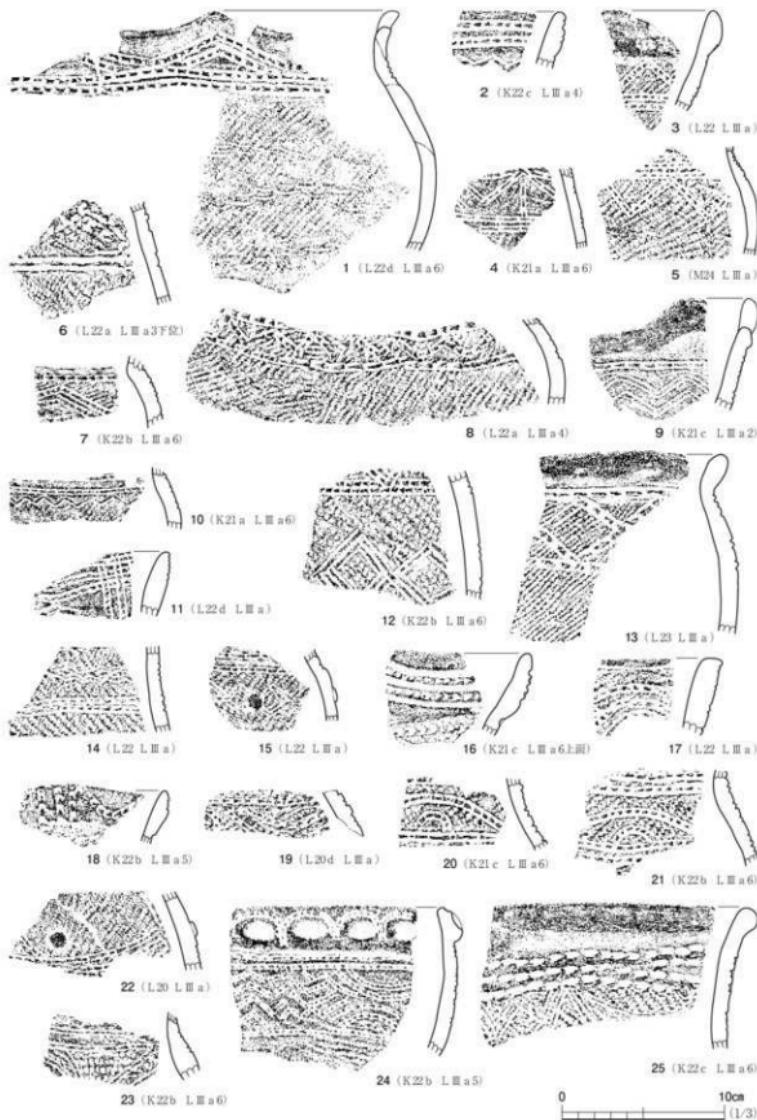


図96 遺物包含層出土縄文土器 (26)

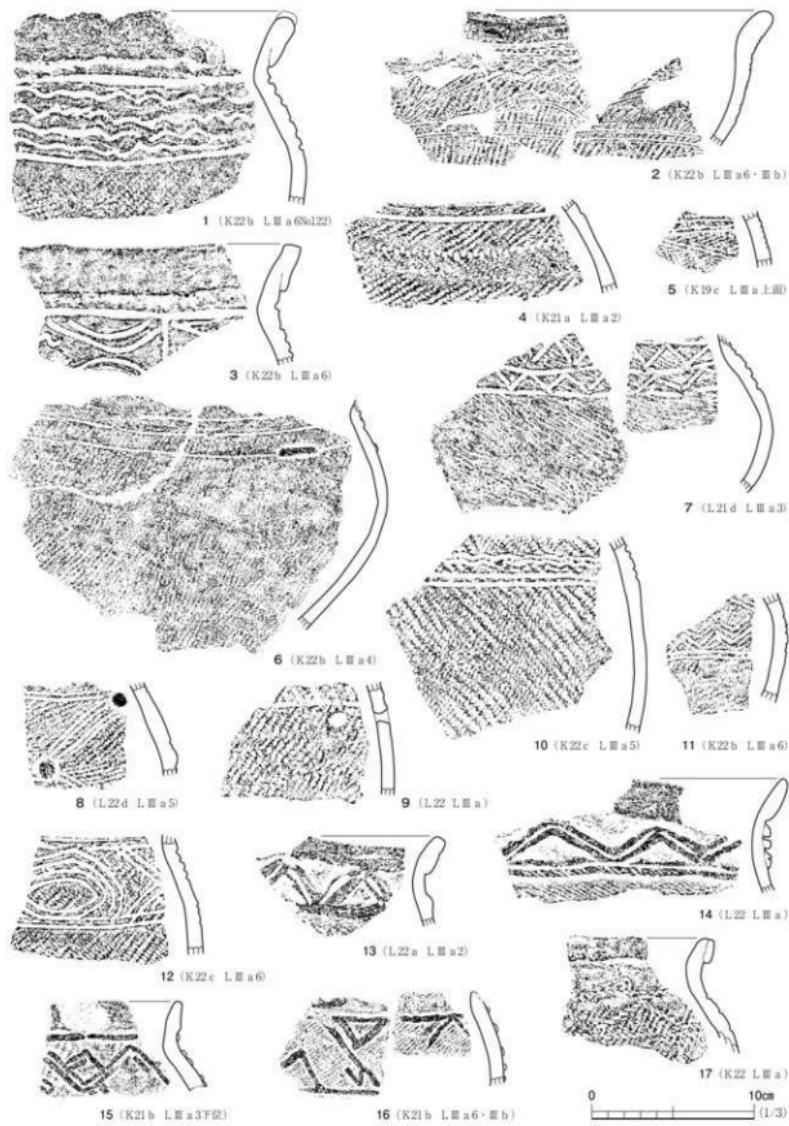


図97 遺物包含層出土繩文土器 (27)

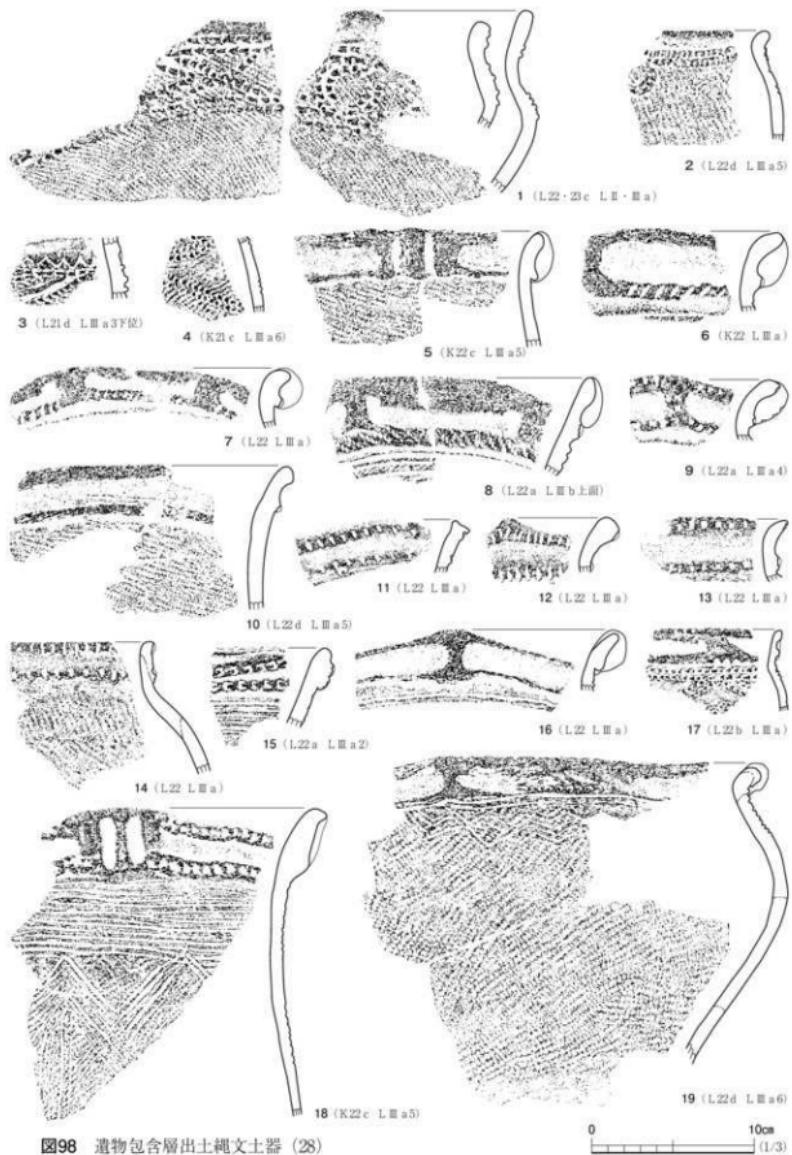


図98 遺物包含層出土縄文土器 (28)

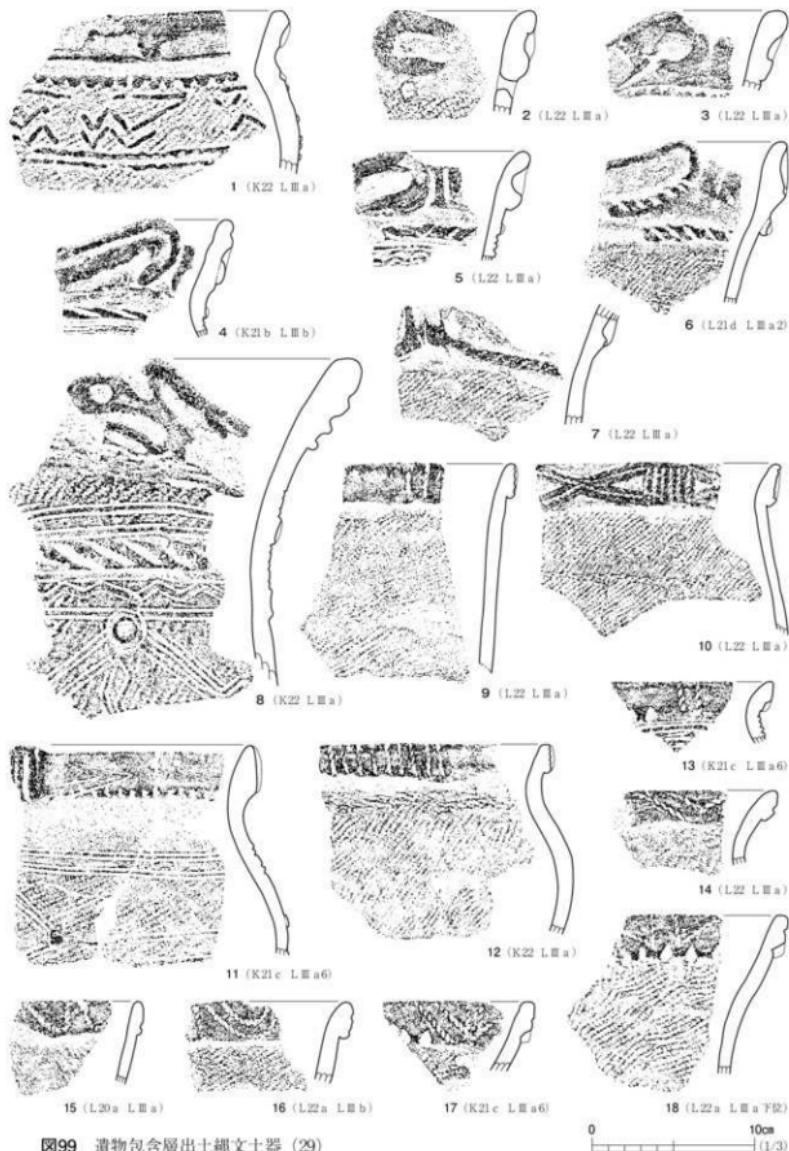


図99 遺物包含層出土縄文土器 (29)

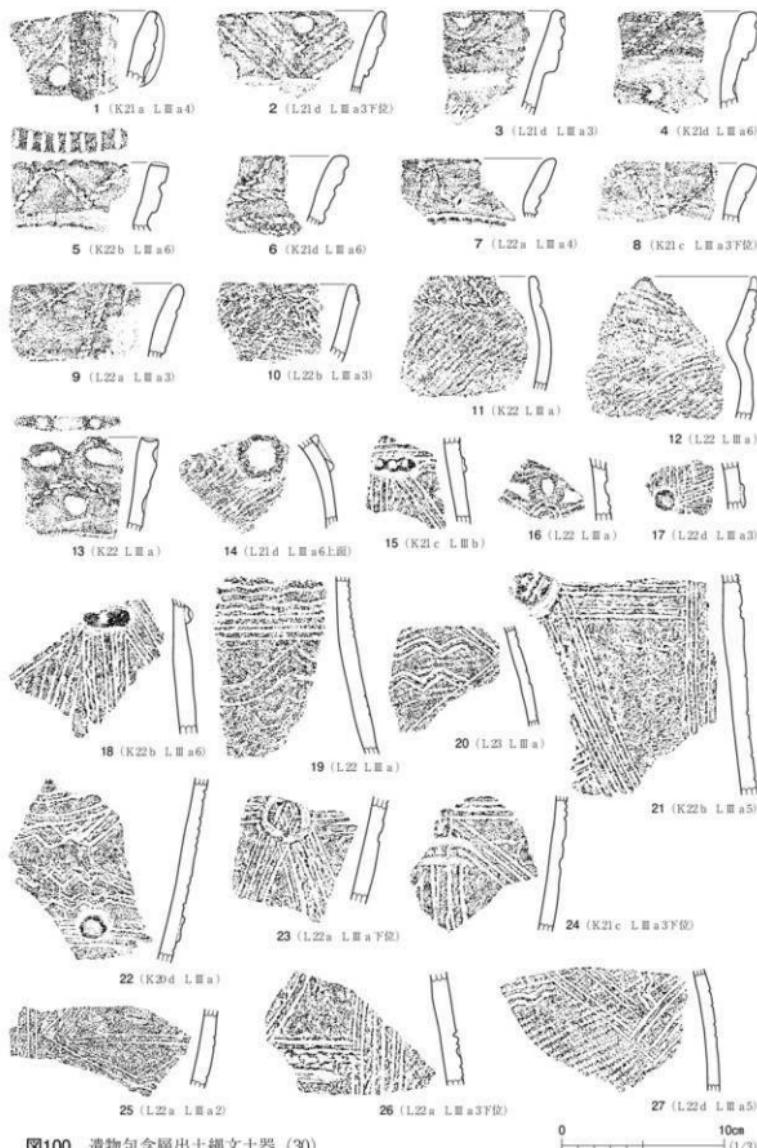


图100 遗物包含層出土縄文土器 (30)

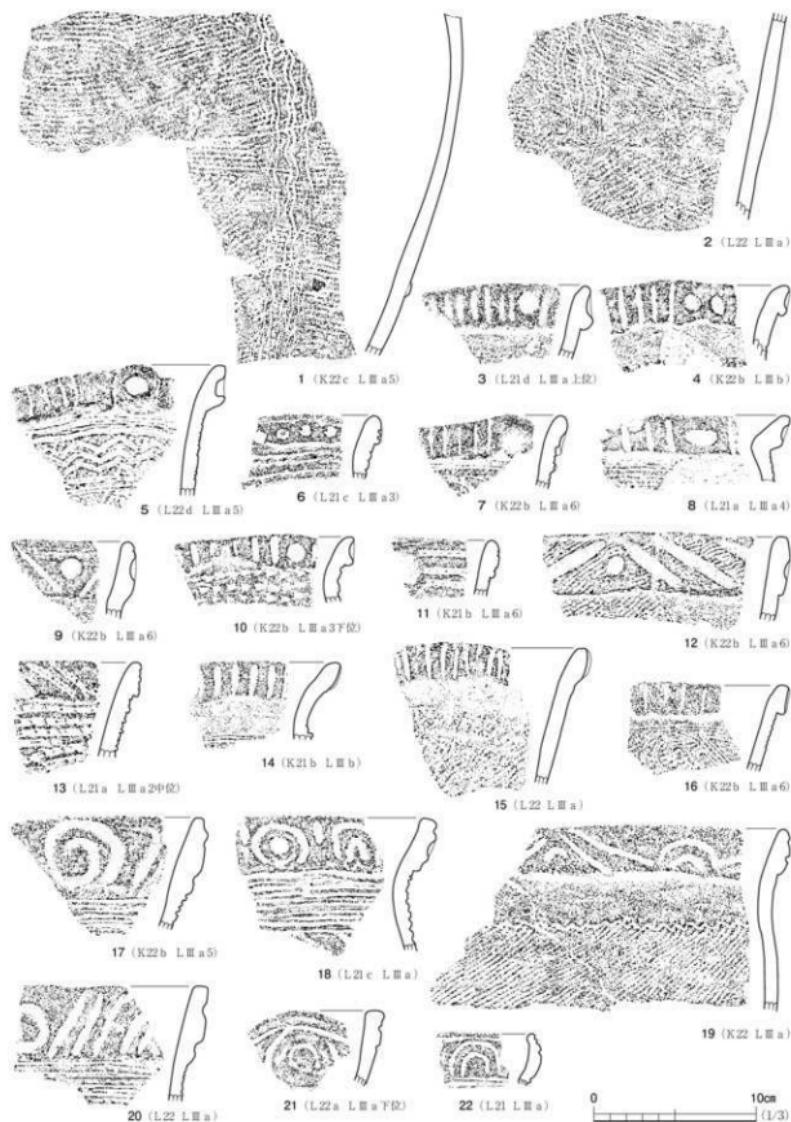


図101 遺物包含層出土土器 (31)

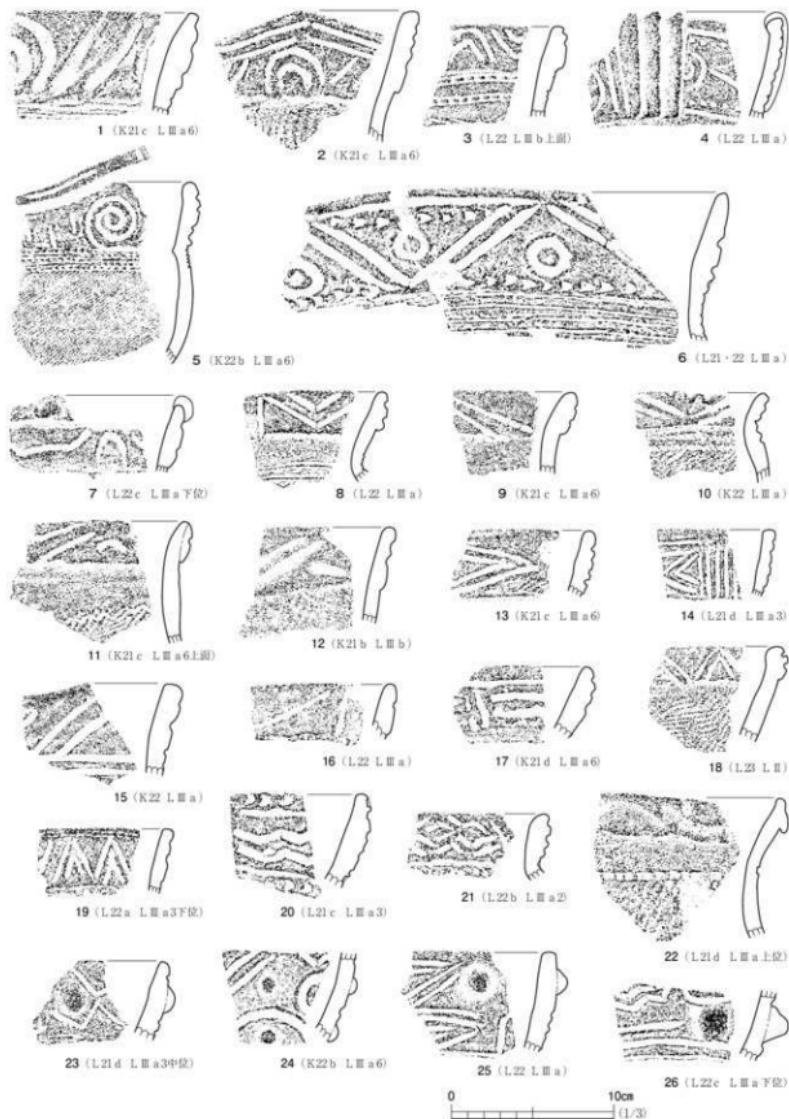


図102 遺物包含層出土繩文土器 (32)

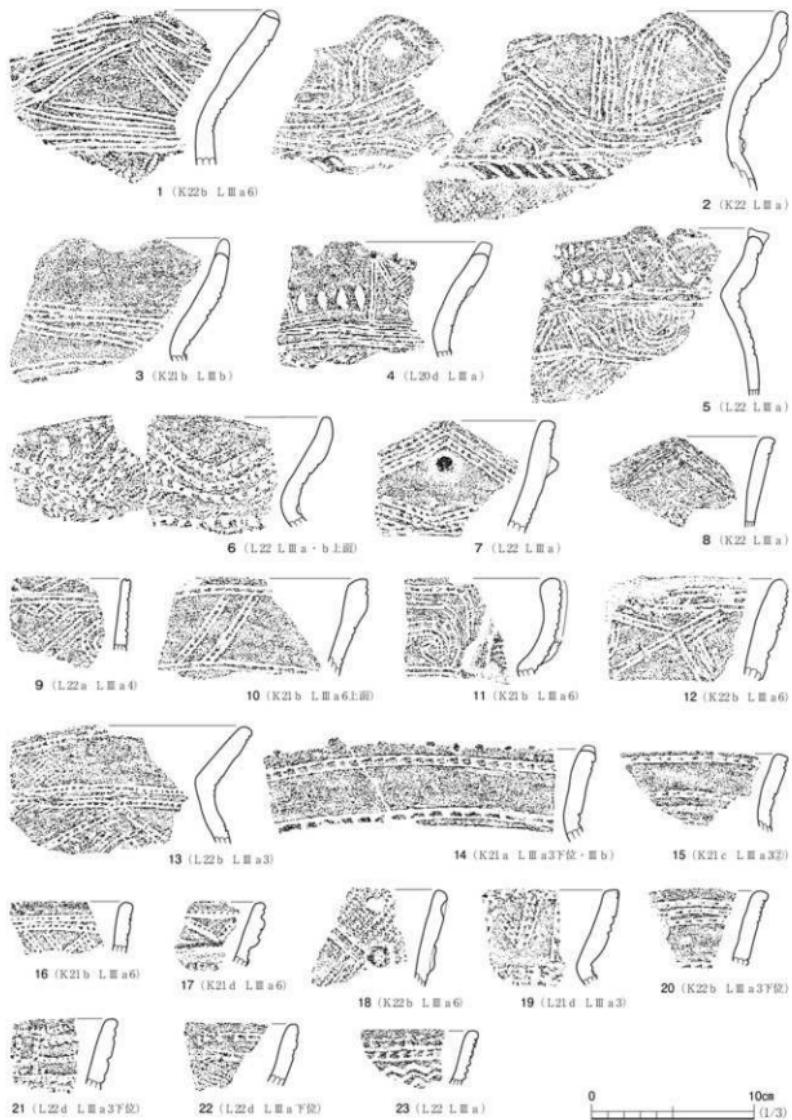


図103 遺物包含層出土縄文土器 (33)

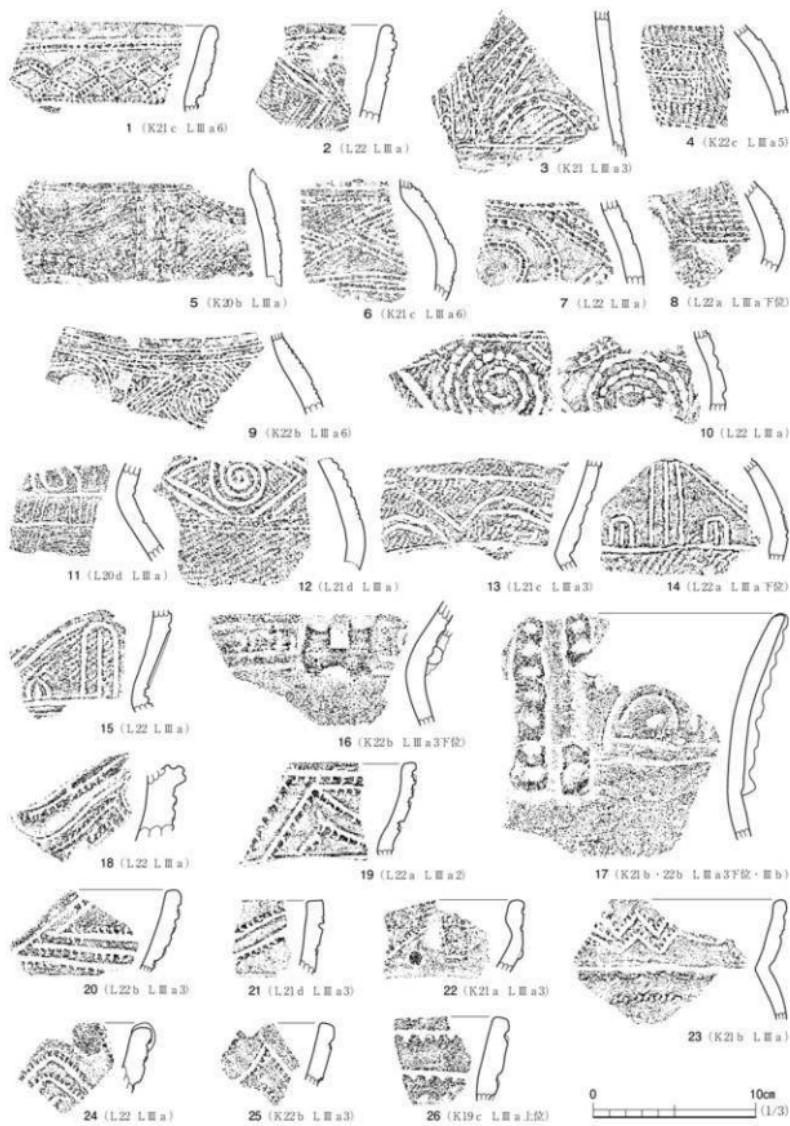


図104 遺物包含層出土縄文土器 (34)

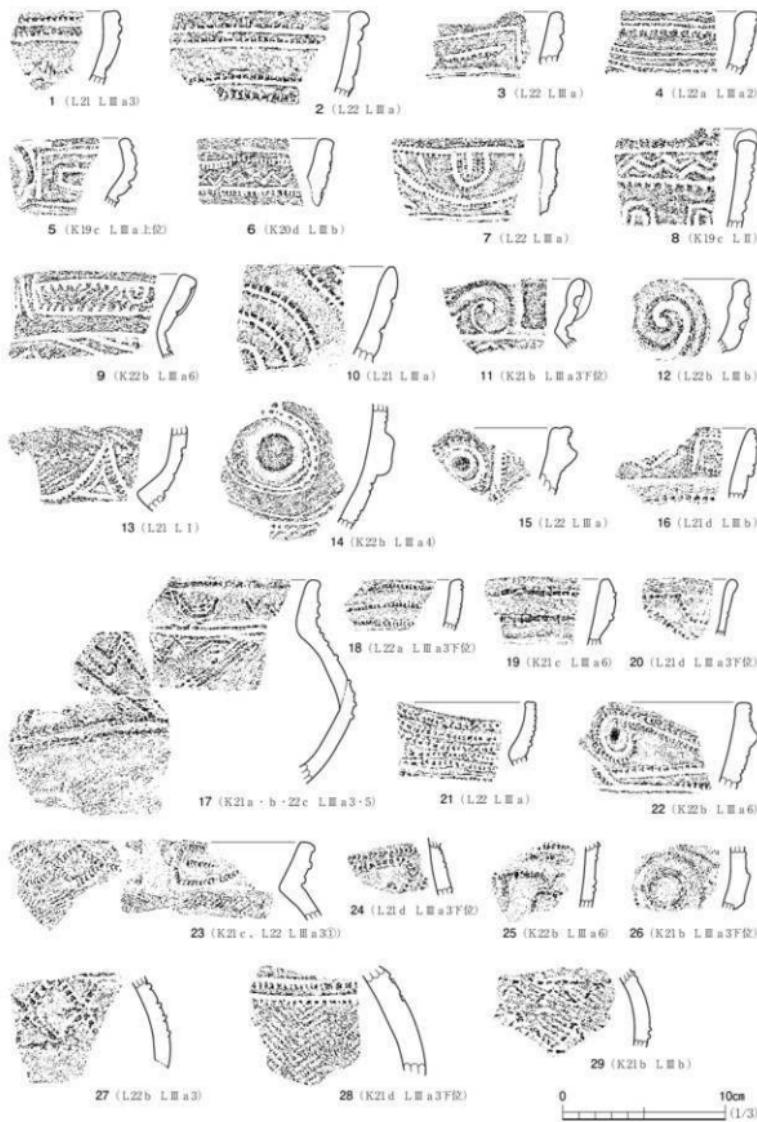


図105 遺物包含層出土繩文土器 (35)

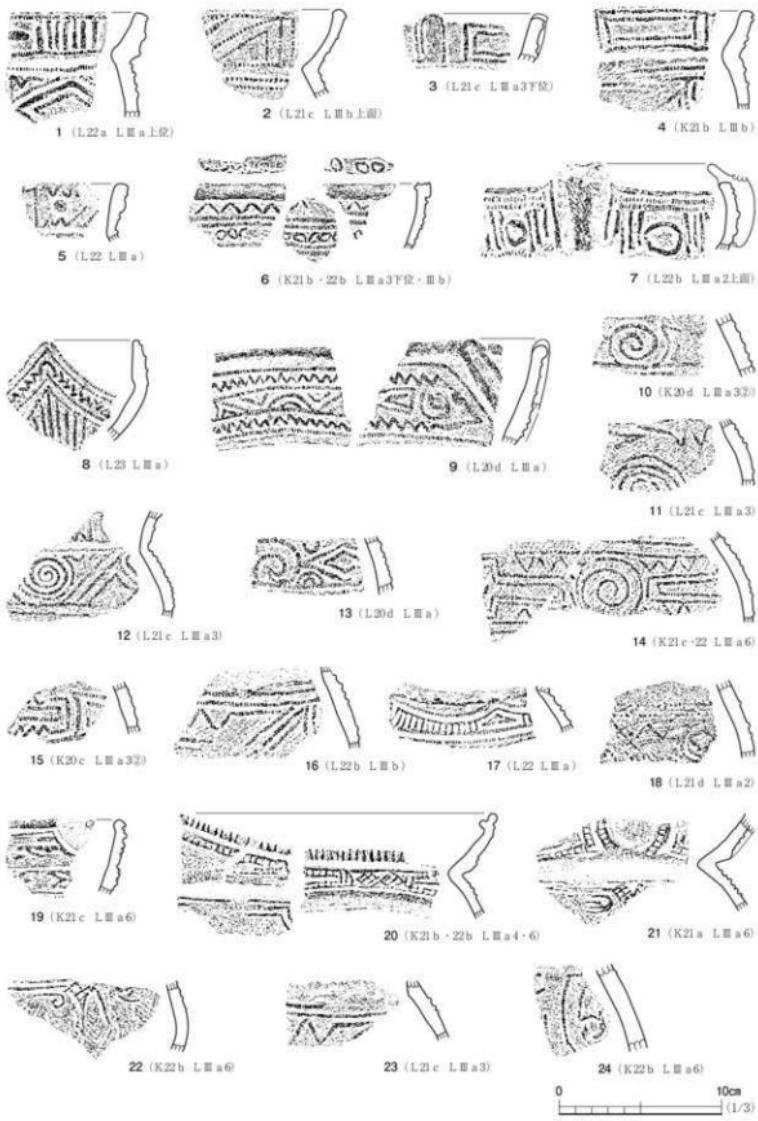


図106 遺物包含層出土繩文土器 (36)

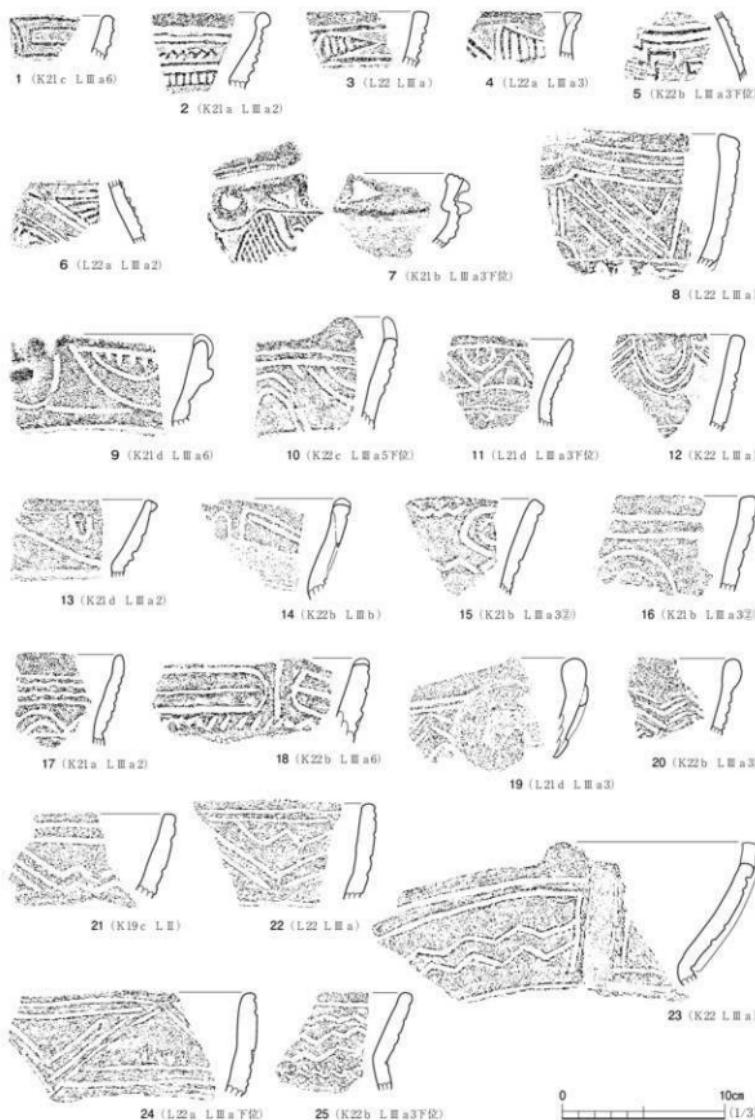


図107 遺物包含層出土繩文土器 (37)

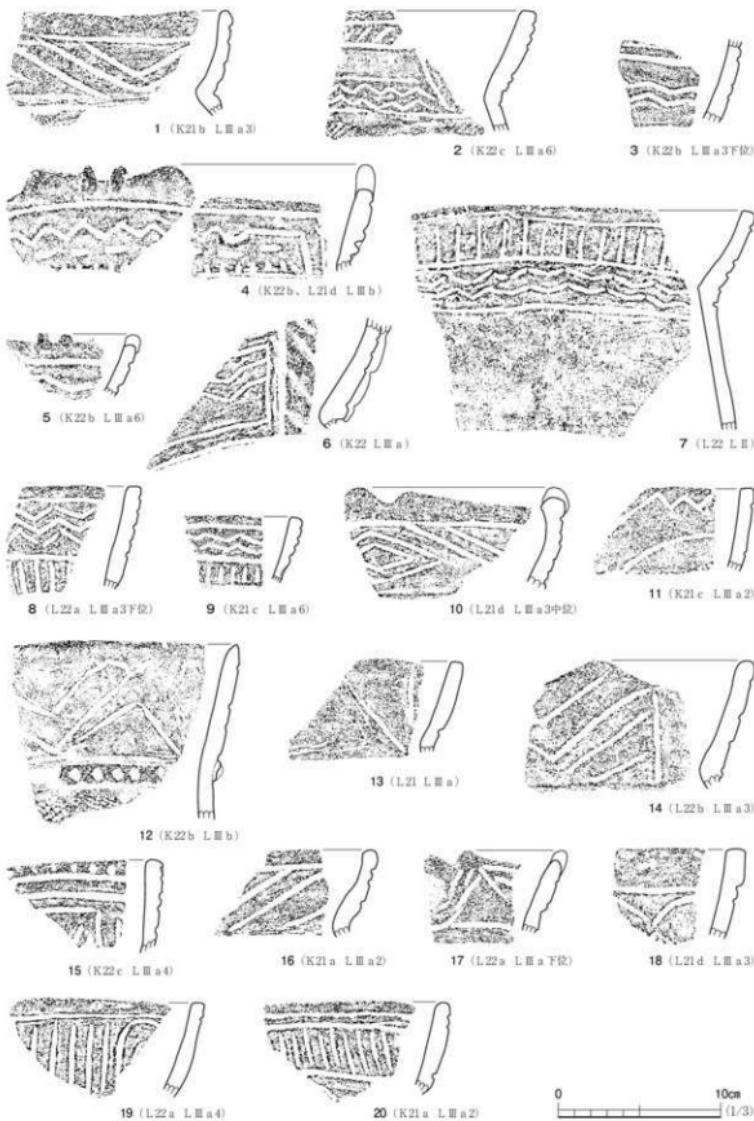


图108 遗物包含层出土绳文土器 (38)

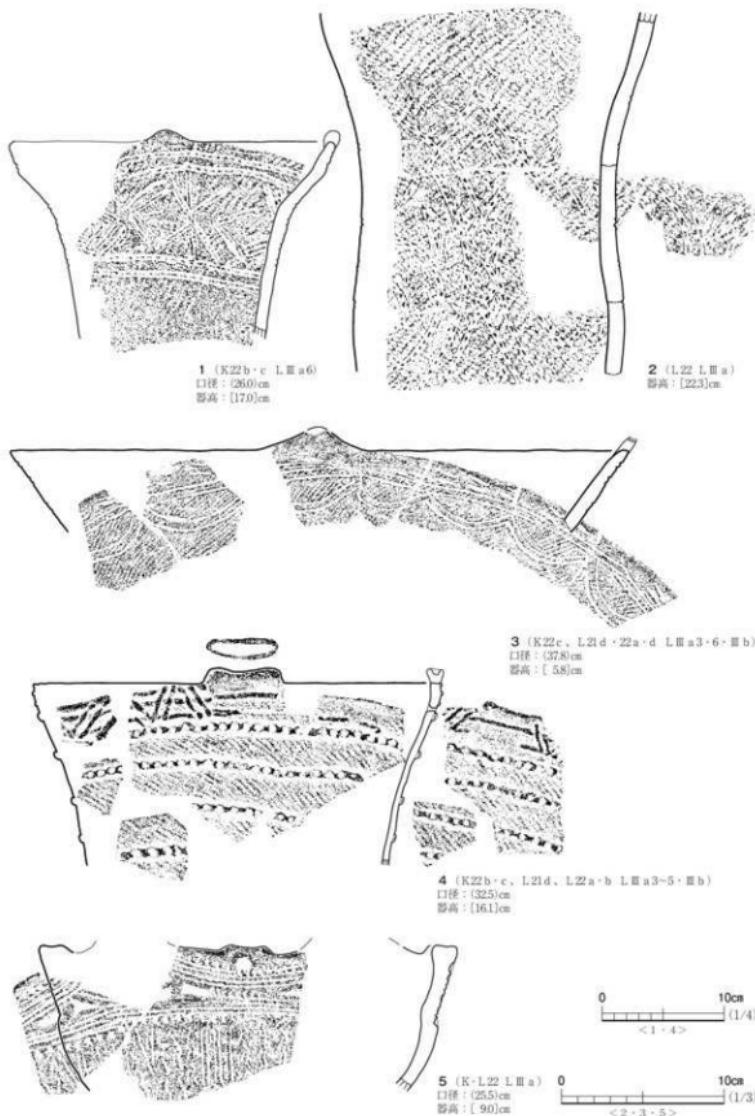


図109 遺物包含層出土繩文土器 (39)

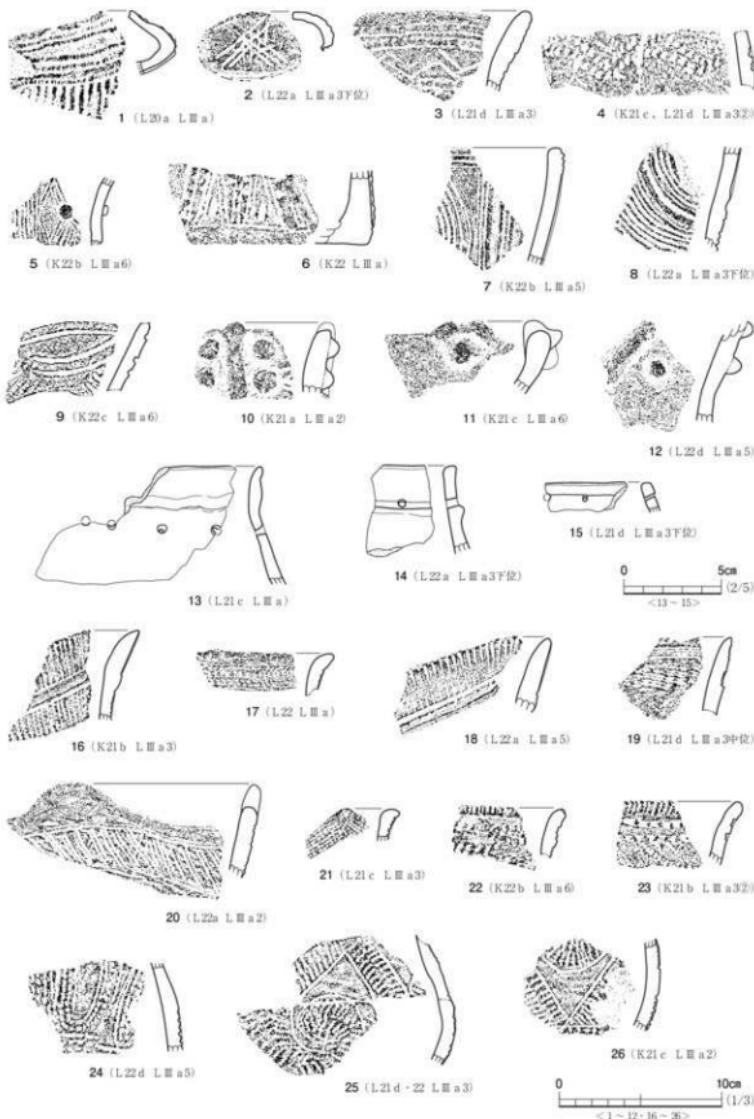


図110 遺物包含層出土縄文土器 (40)

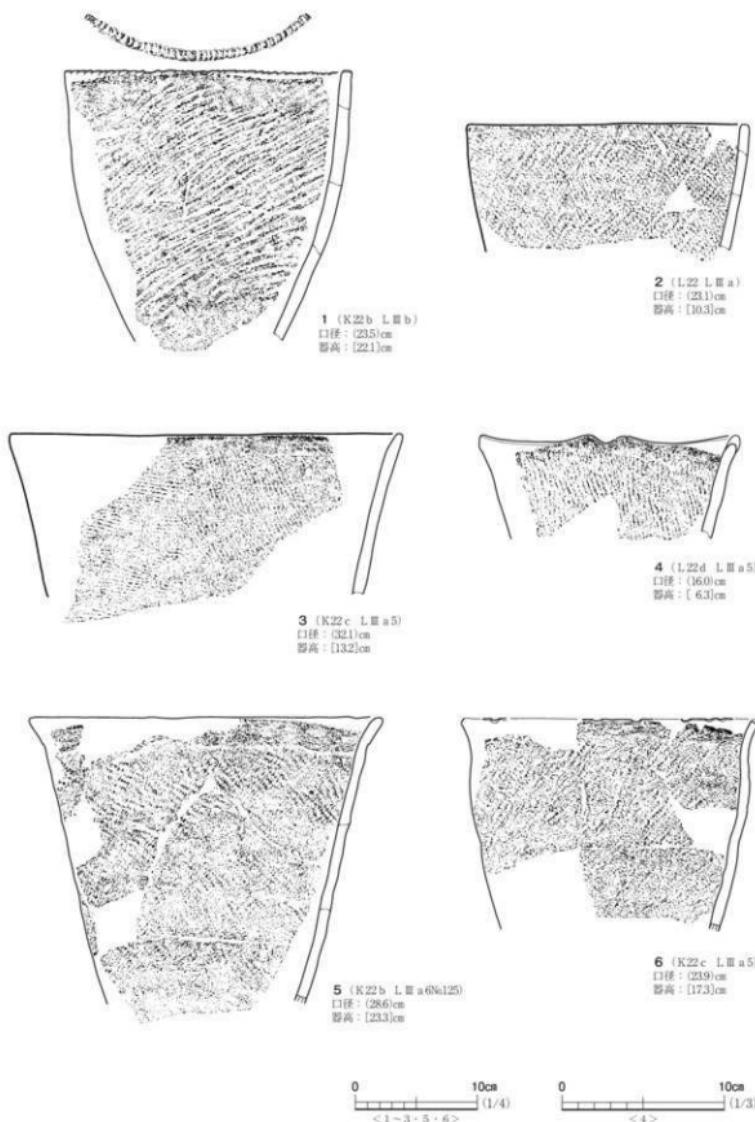


図111 遺物包含層出土繩文土器 (41)

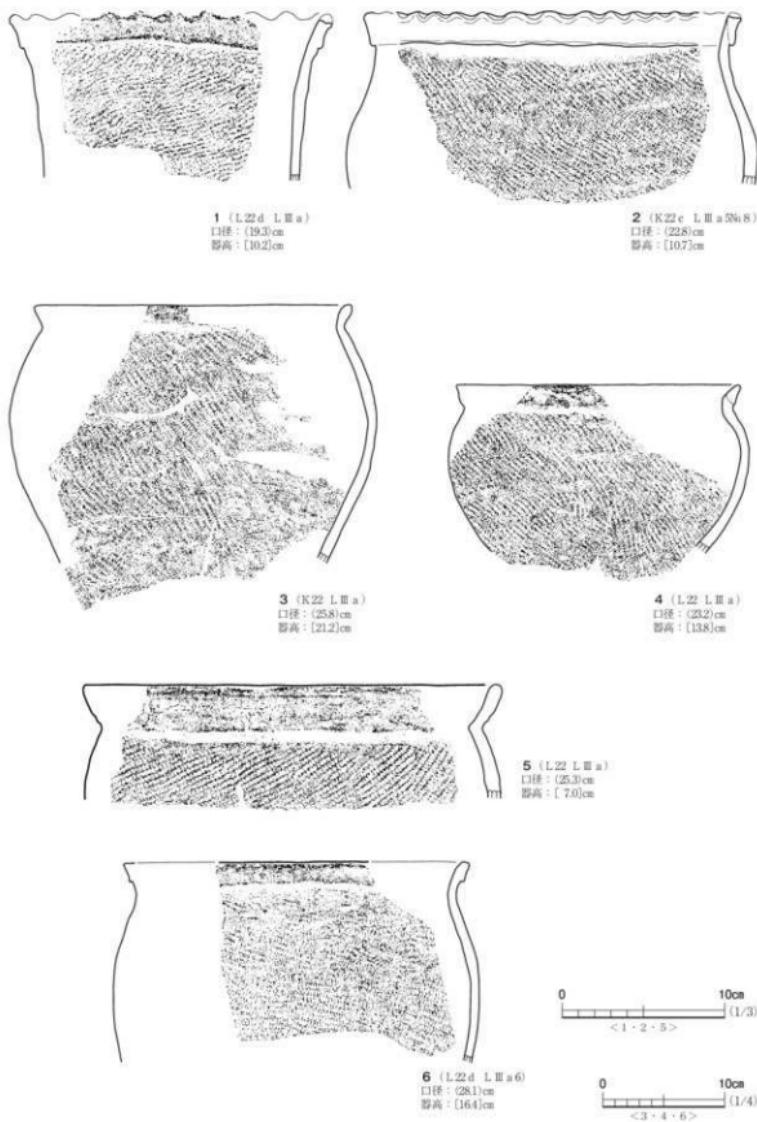


図112 遺物包含層出土繩文土器 (42)

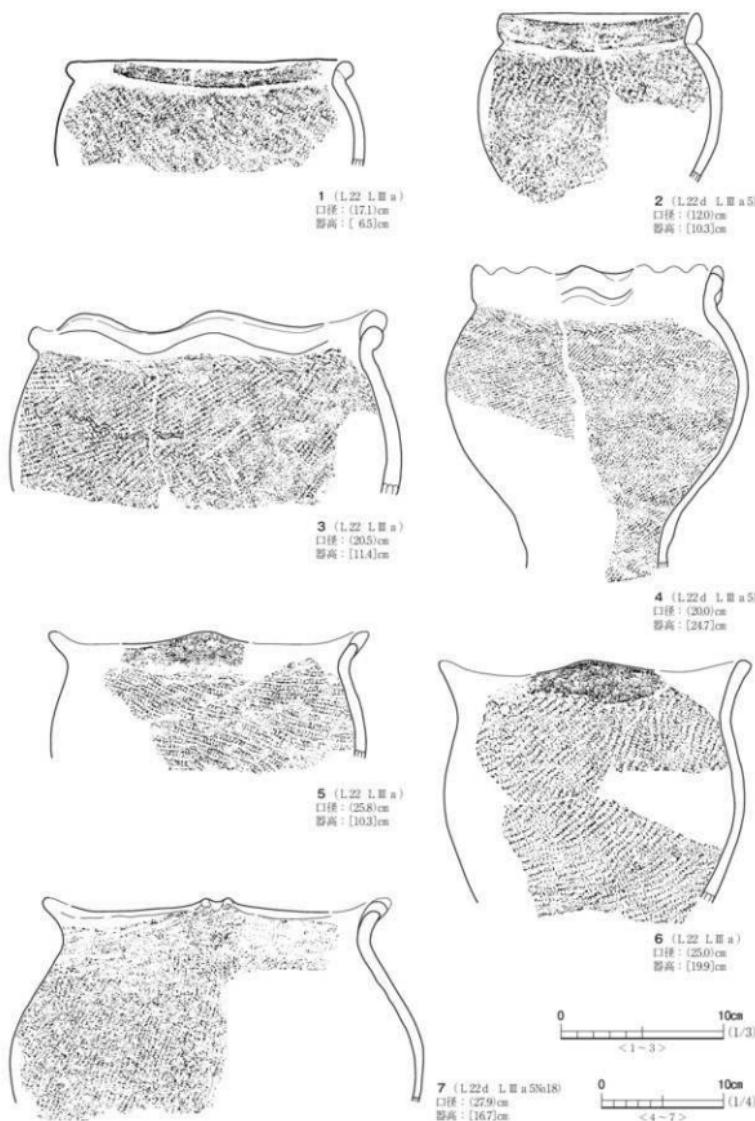


図113 遺物包含層出土繩文土器 (43)

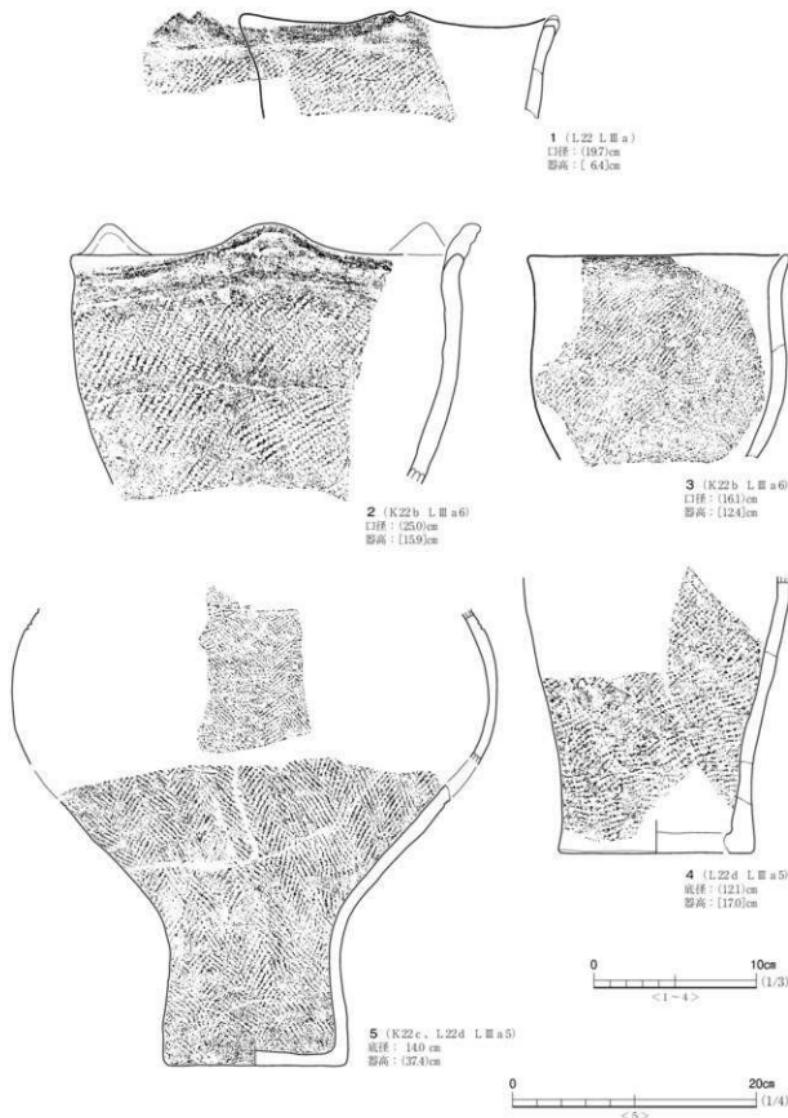


図114 遺物包含層出土繩文土器 (44)

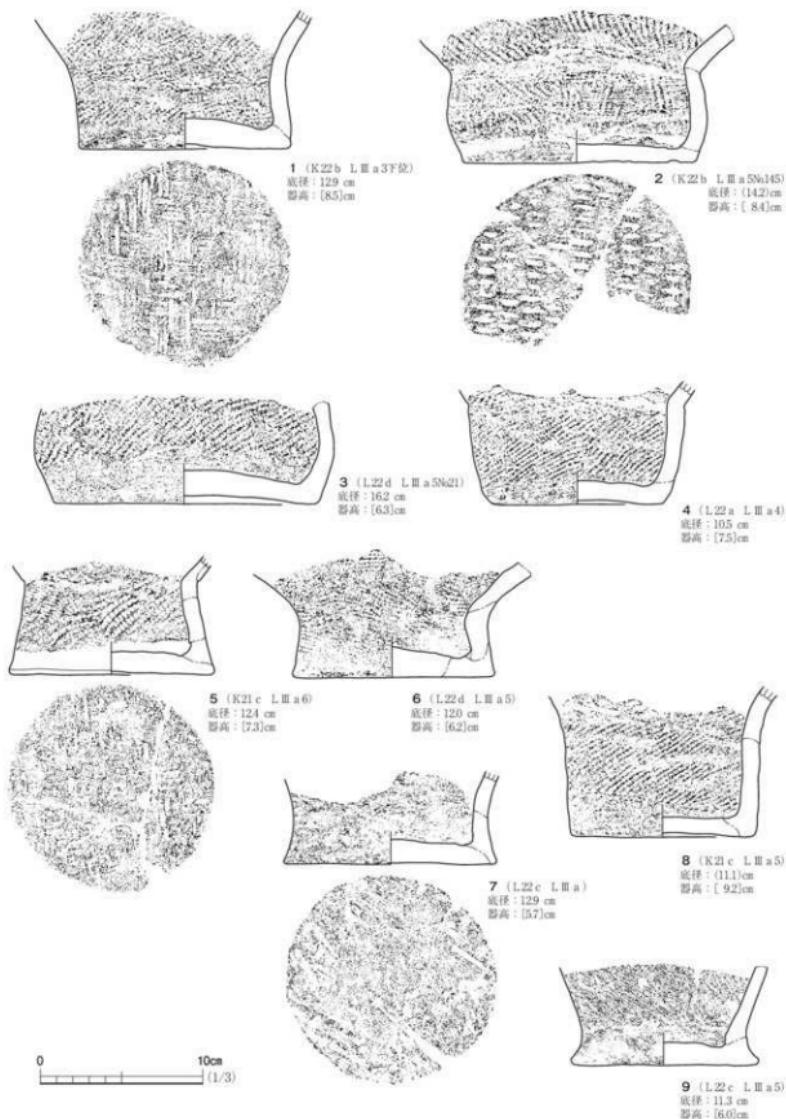


図115 遺物包含層出土繩文土器 (45)

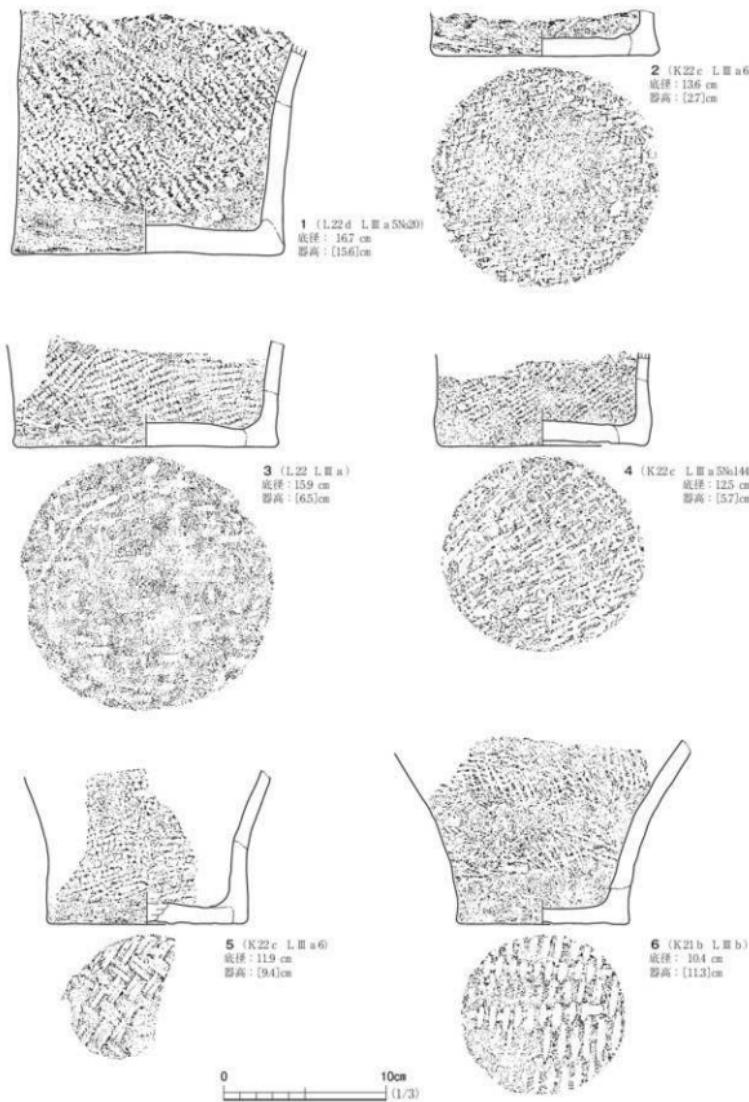


図116 遺物包含層出土繩文土器 (46)

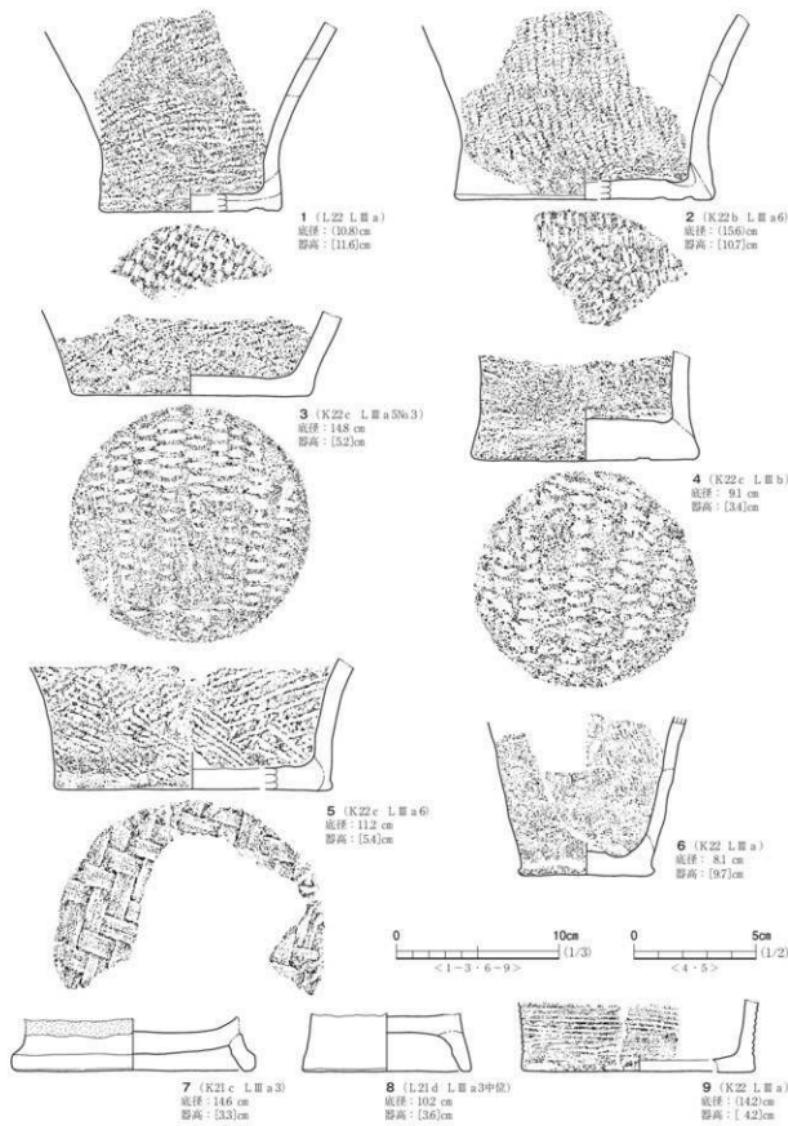


図117 遺物包含層出土繩文土器 (47)

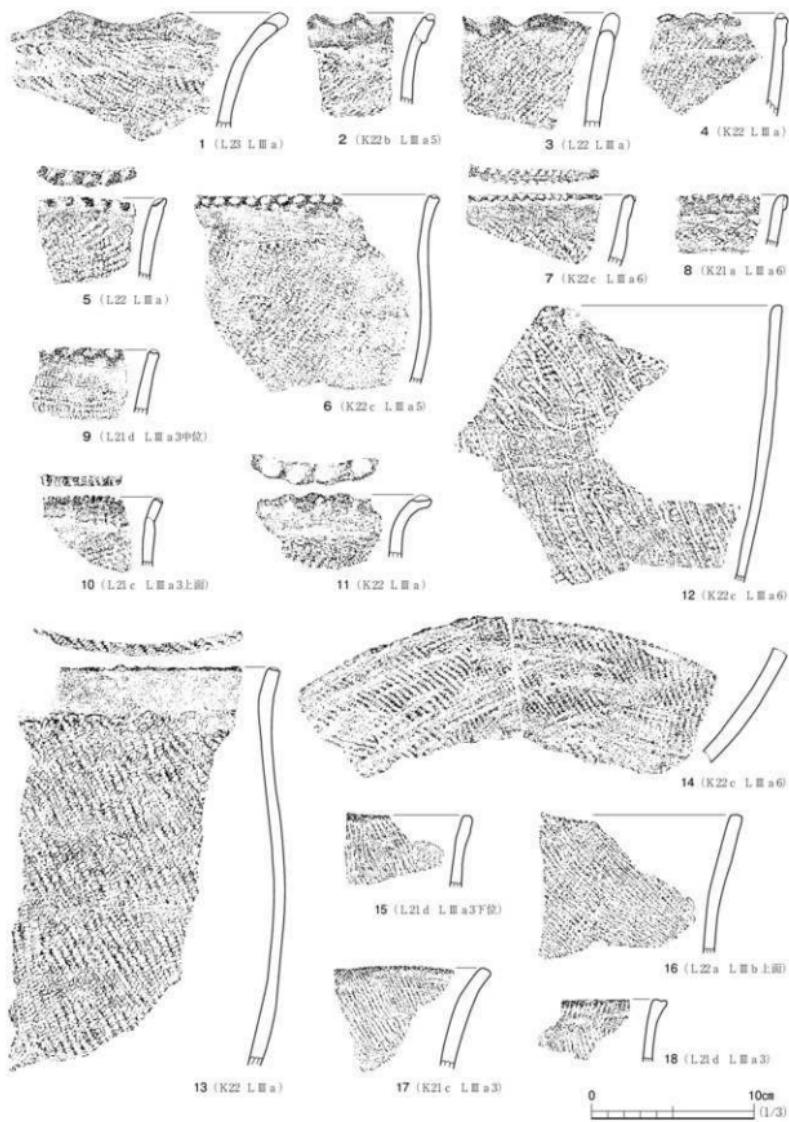


図118 遺物包含層出土繩文土器 (48)

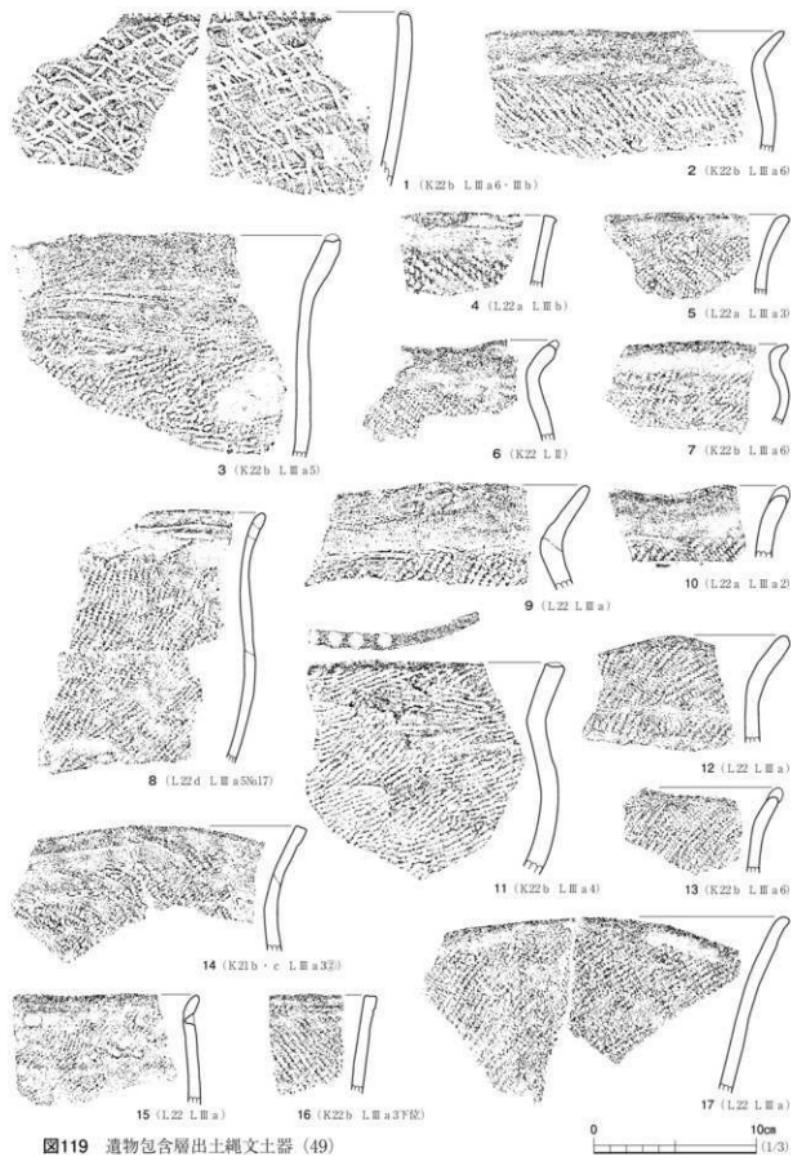


図119 遺物包含層出土繩文土器 (49)

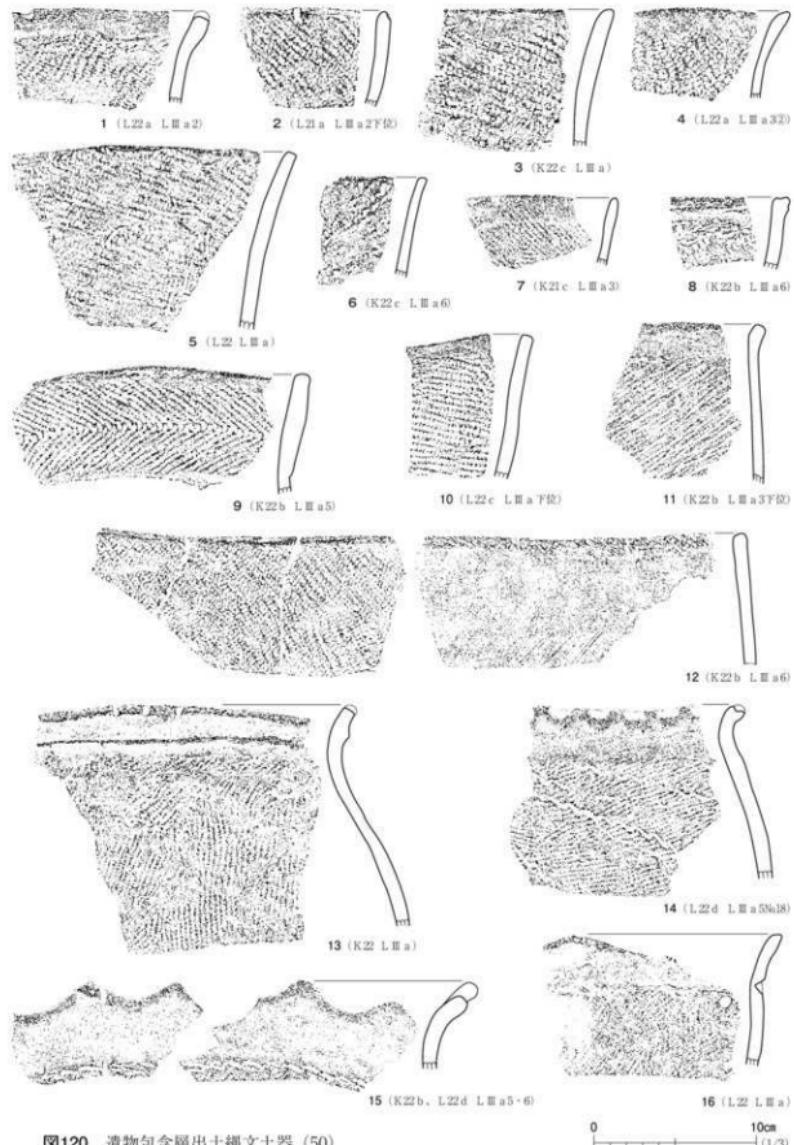


図120 遺物包含層出土繩文土器 (50)

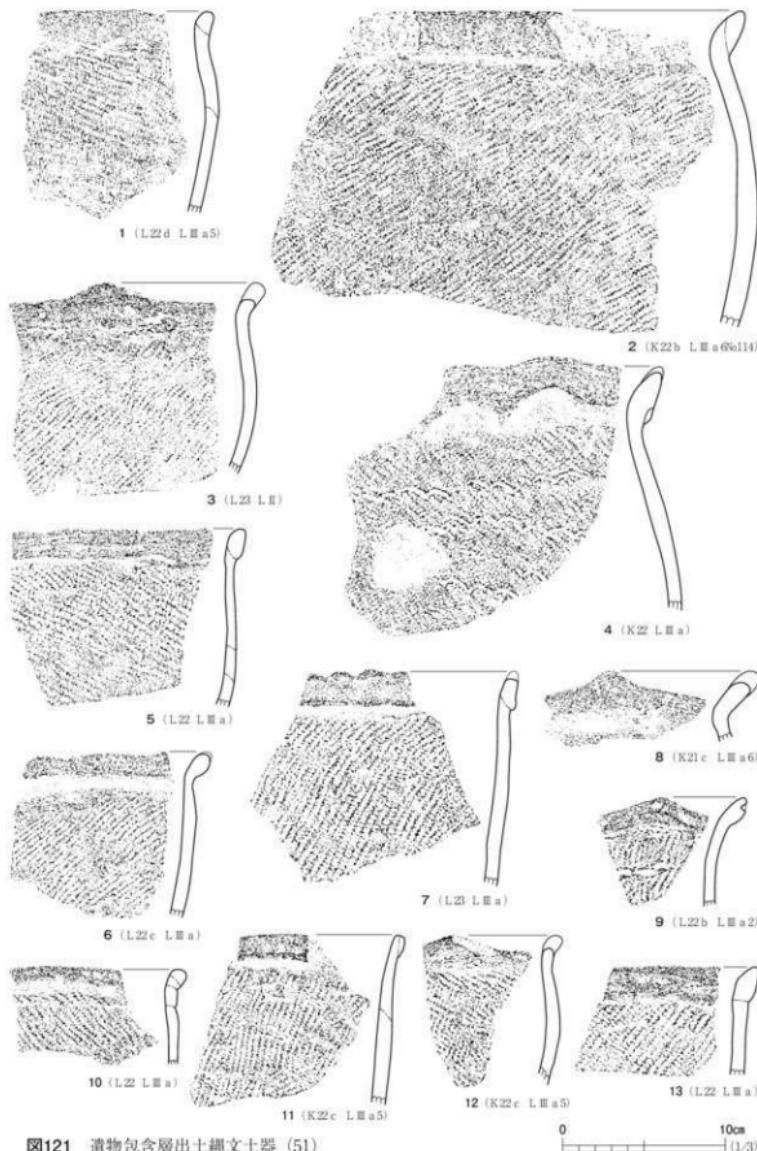


図121 遺物包含層出土繩文土器 (51)

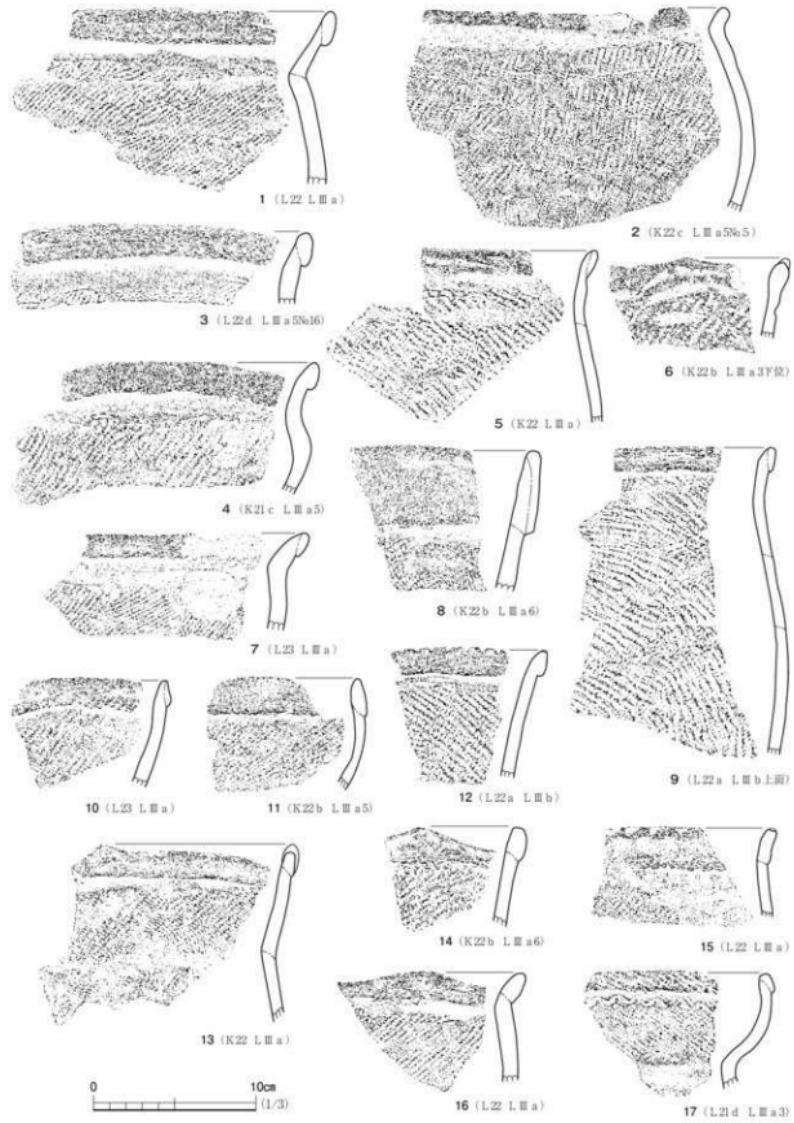


図122 遺物包含層出土縄文土器 (52)

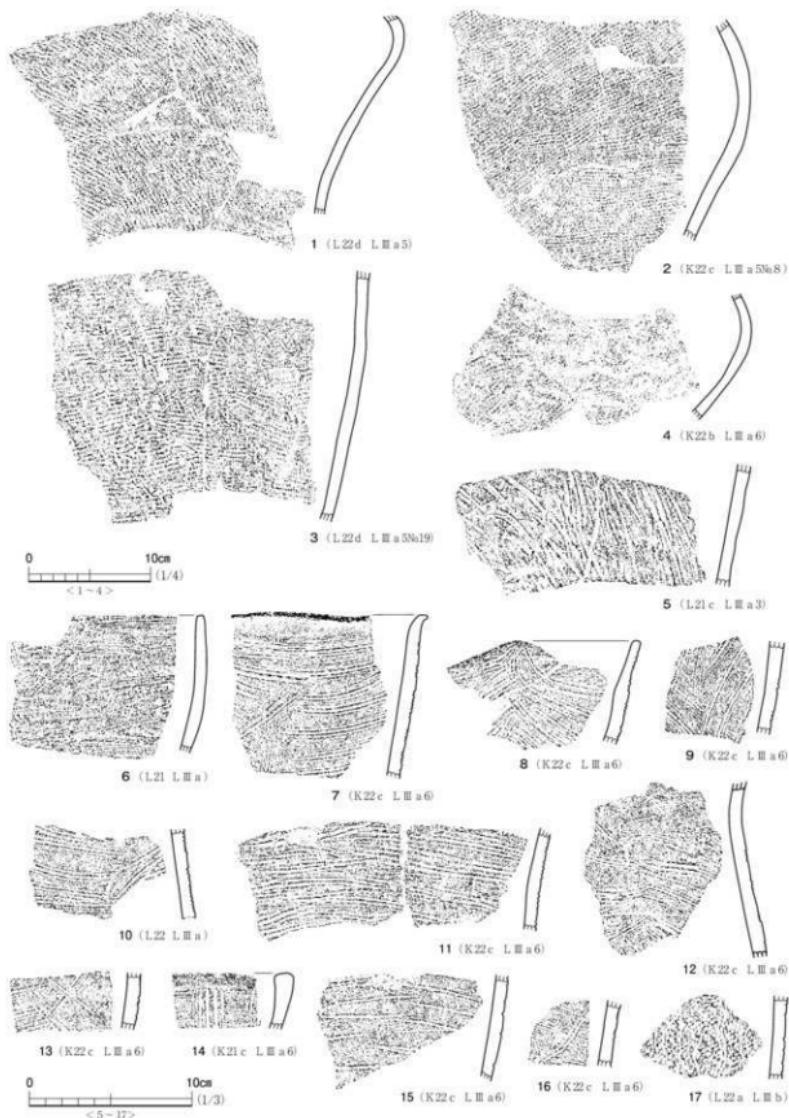


図123 遺物包含層出土繩文土器 (53)

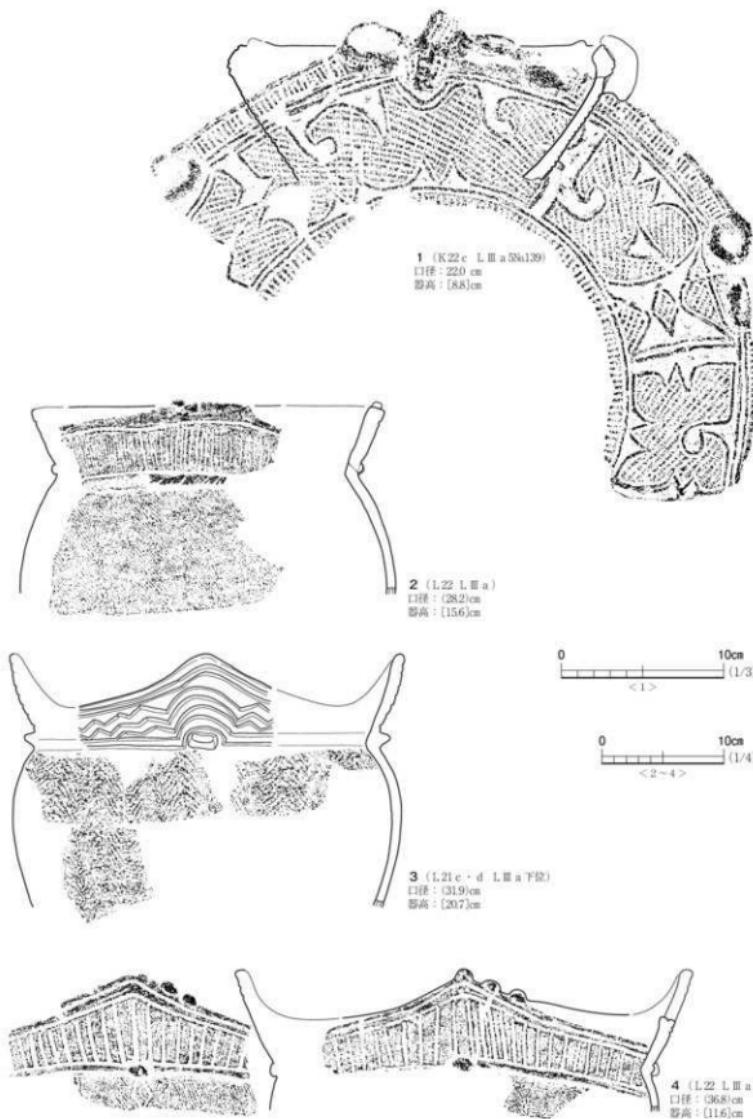


図124 遺物包含層出土縄文土器 (54)

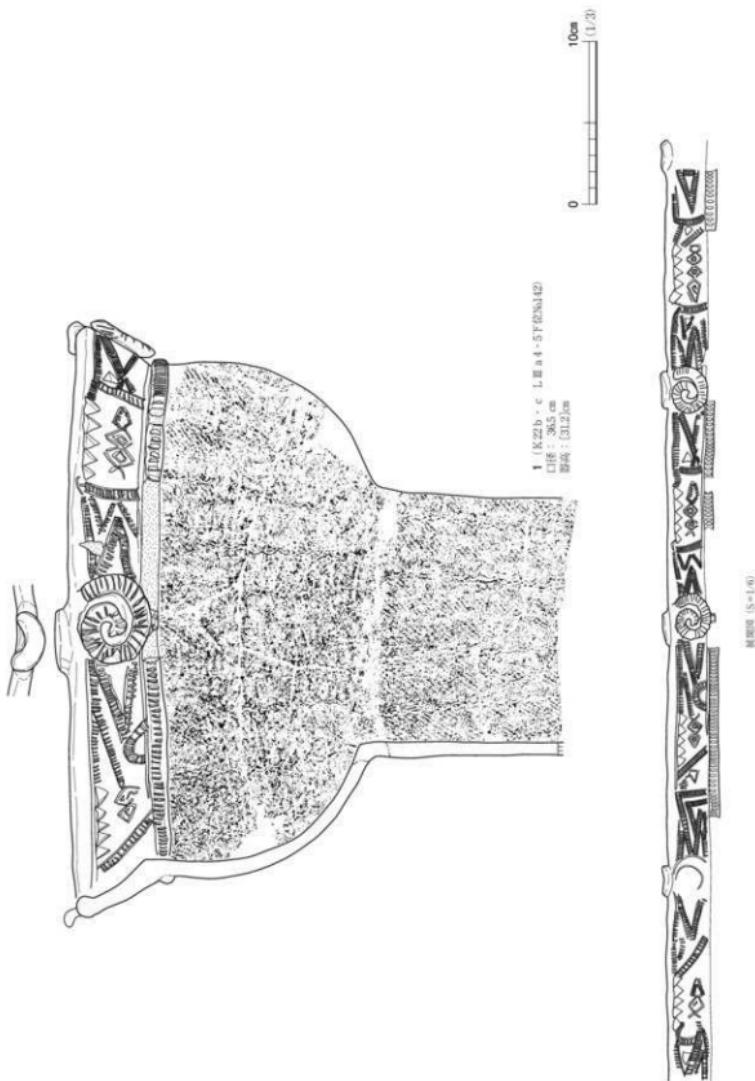


圖125 遺物包含層出土繩文土器 (55)

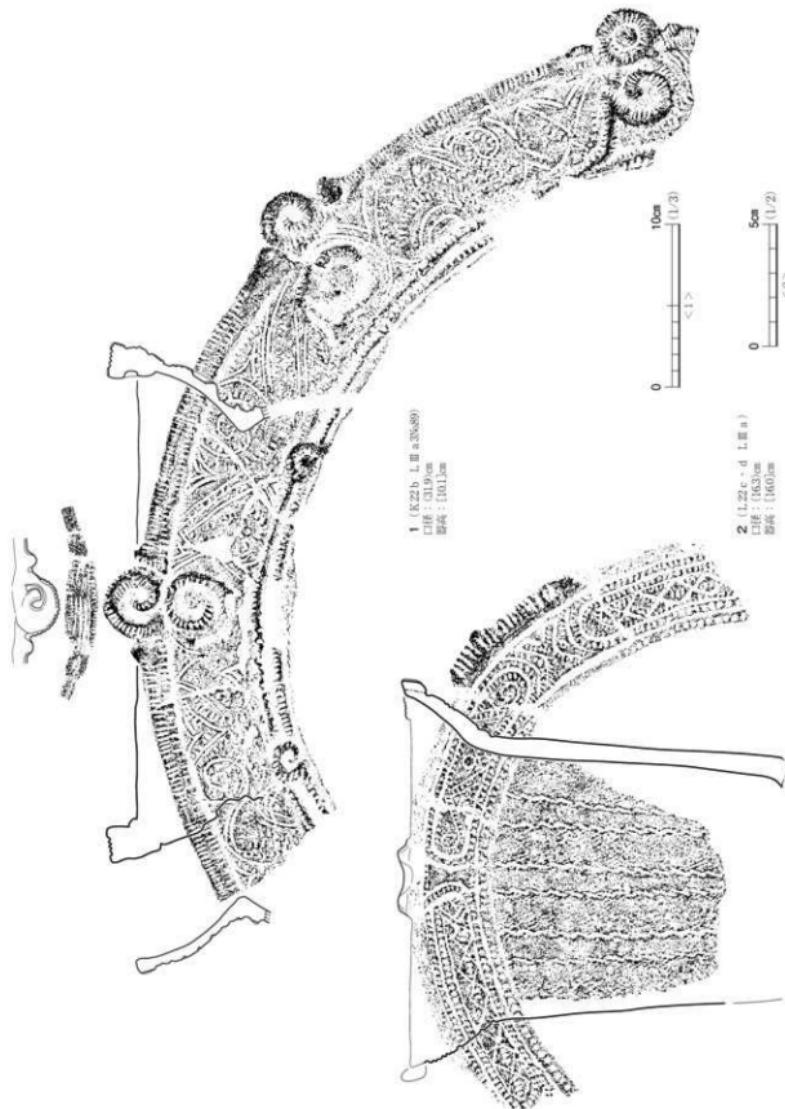


図126 遺物包含層出土縄文土器 (56)

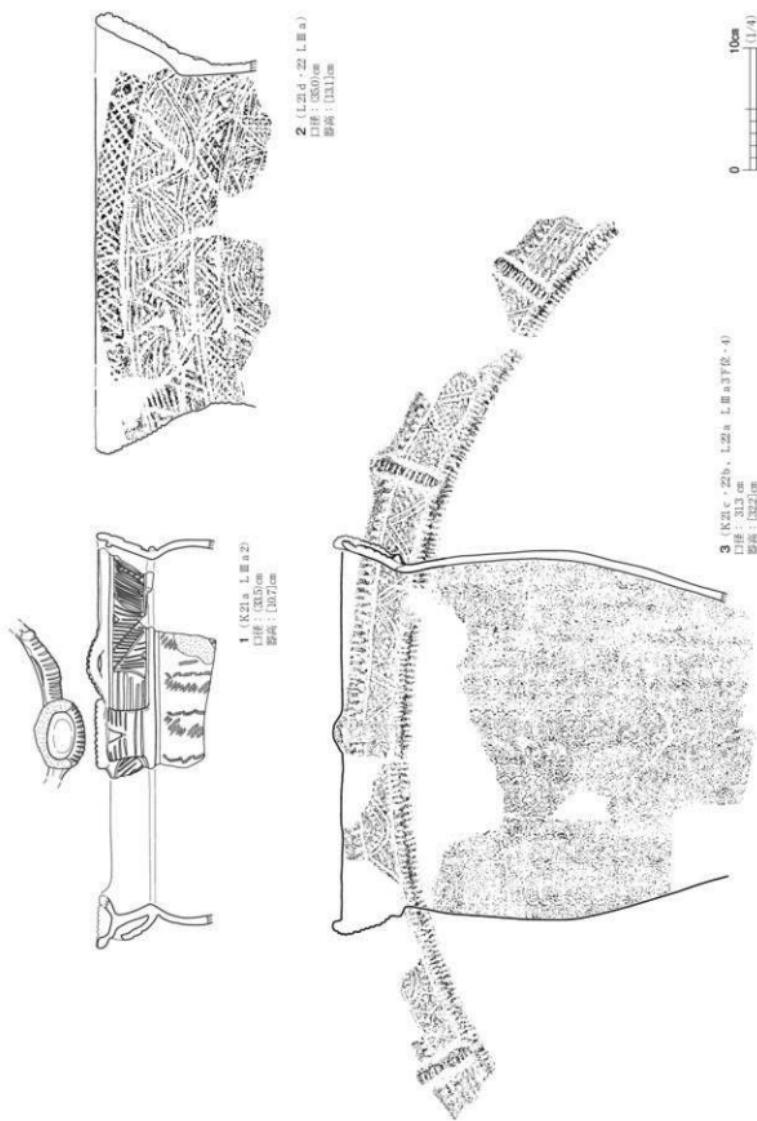


図127 遺物包含層出土繩文土器 (57)

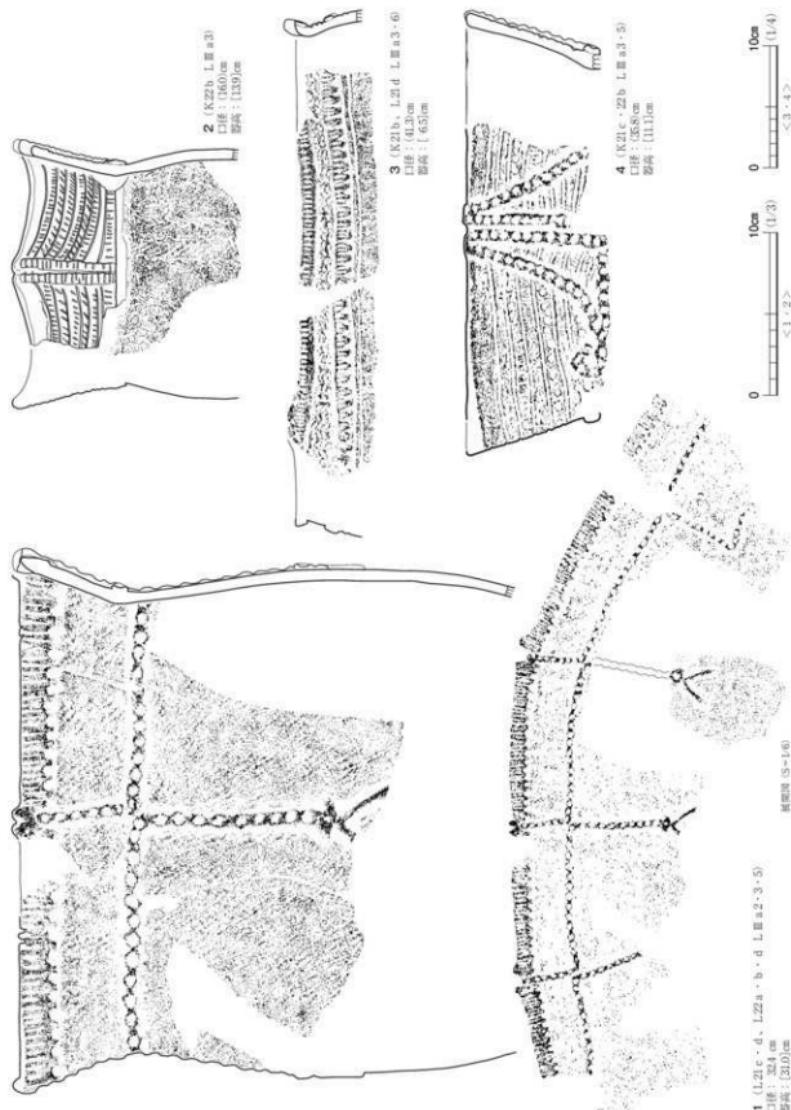


图128 遗物包含层出土绳文土器 (58)

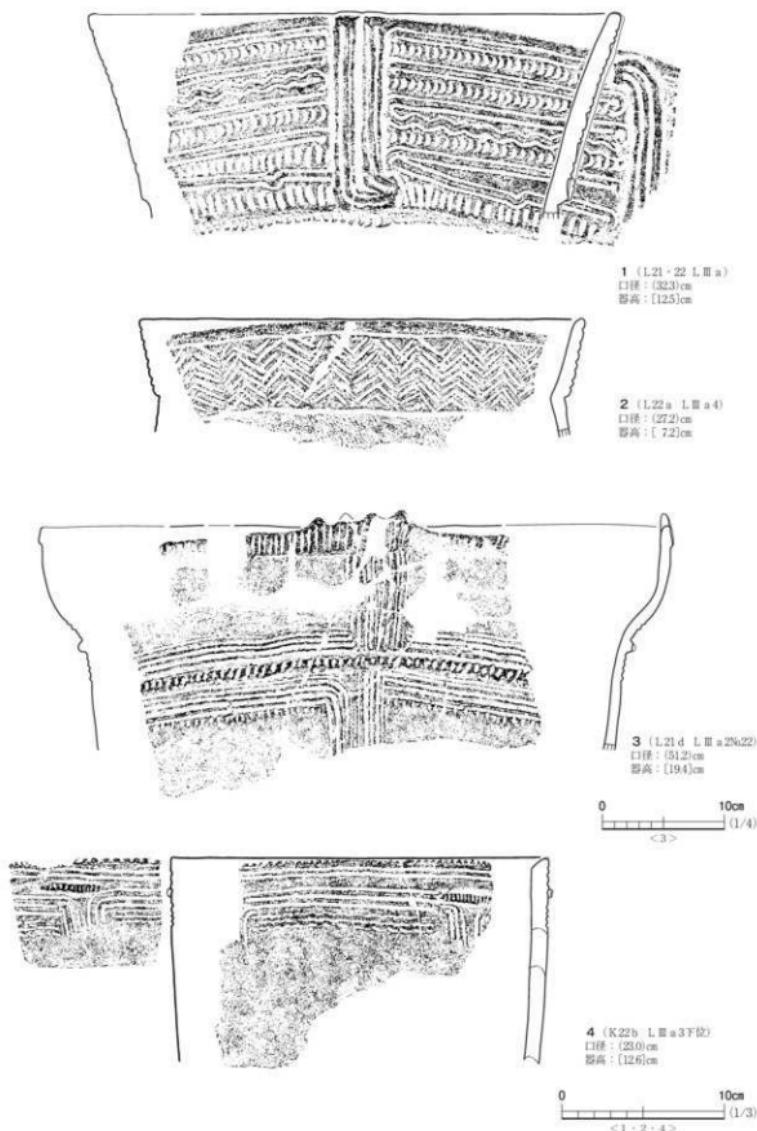


図129 遺物包含層出土繩文土器 (59)

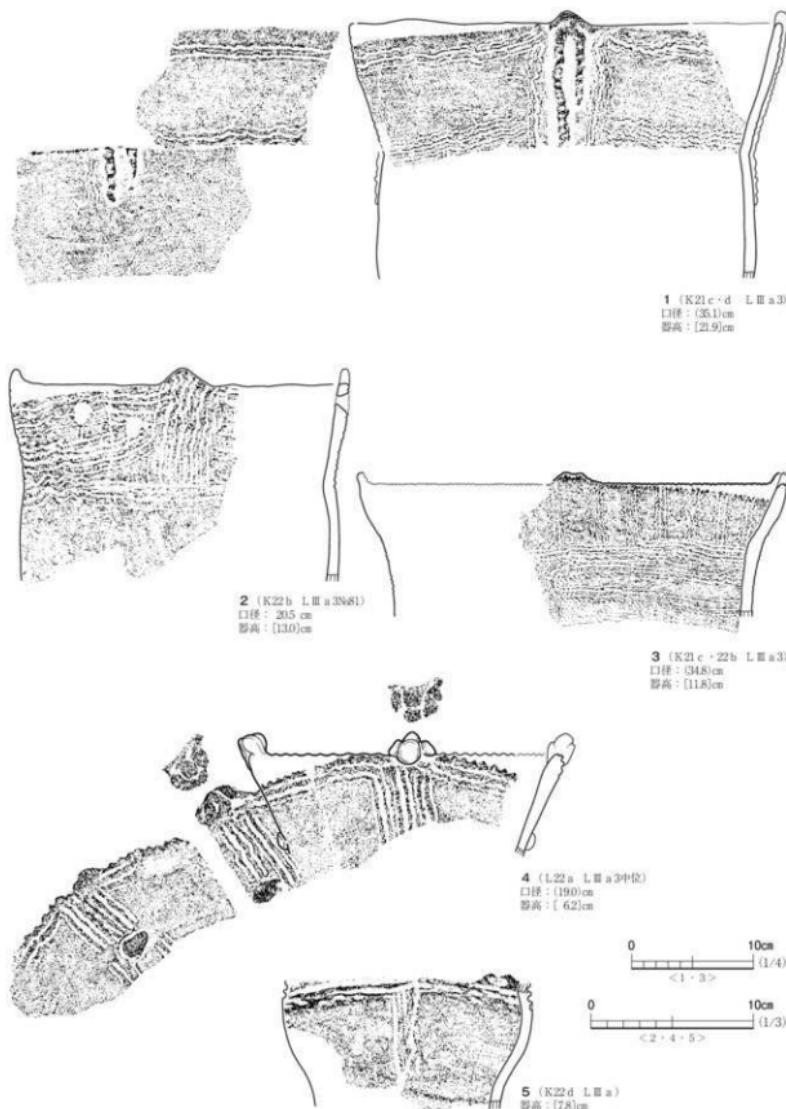


図130 遺物包含層出土繩文土器 (60)



圖131 遺物包含層出土繩文土器 (61)

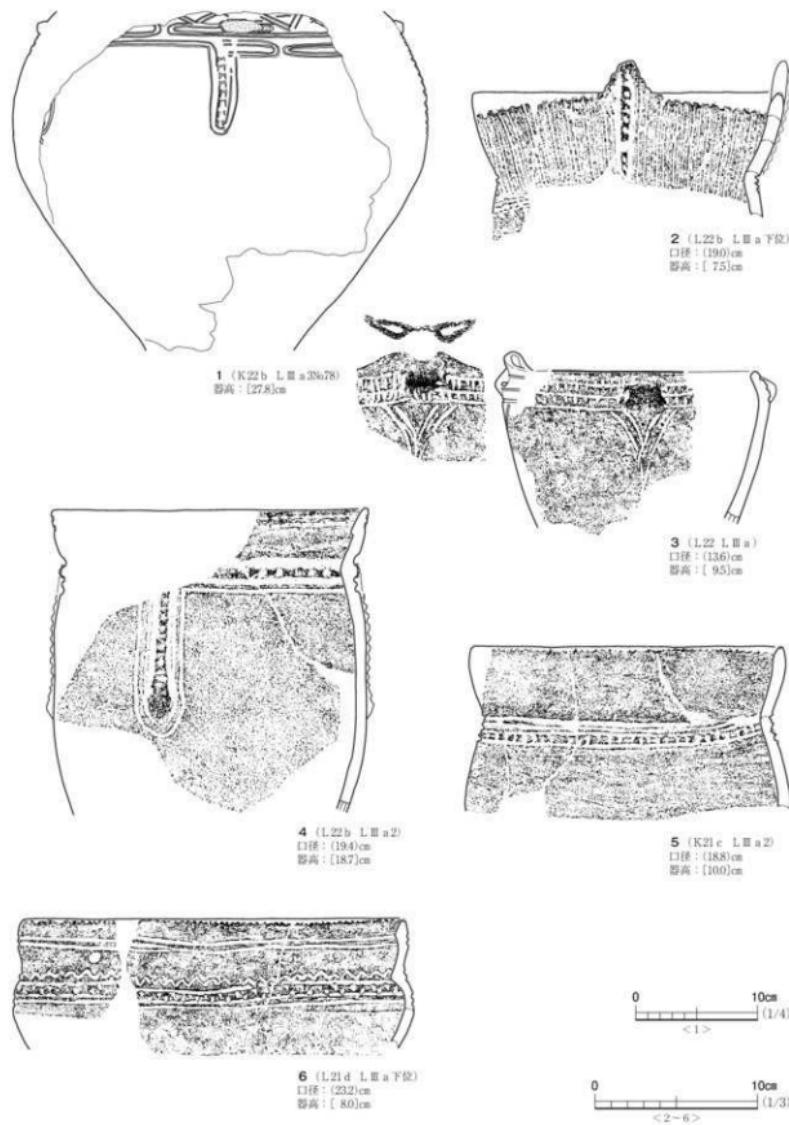


図132 遺物包含層出土繩文土器 (62)

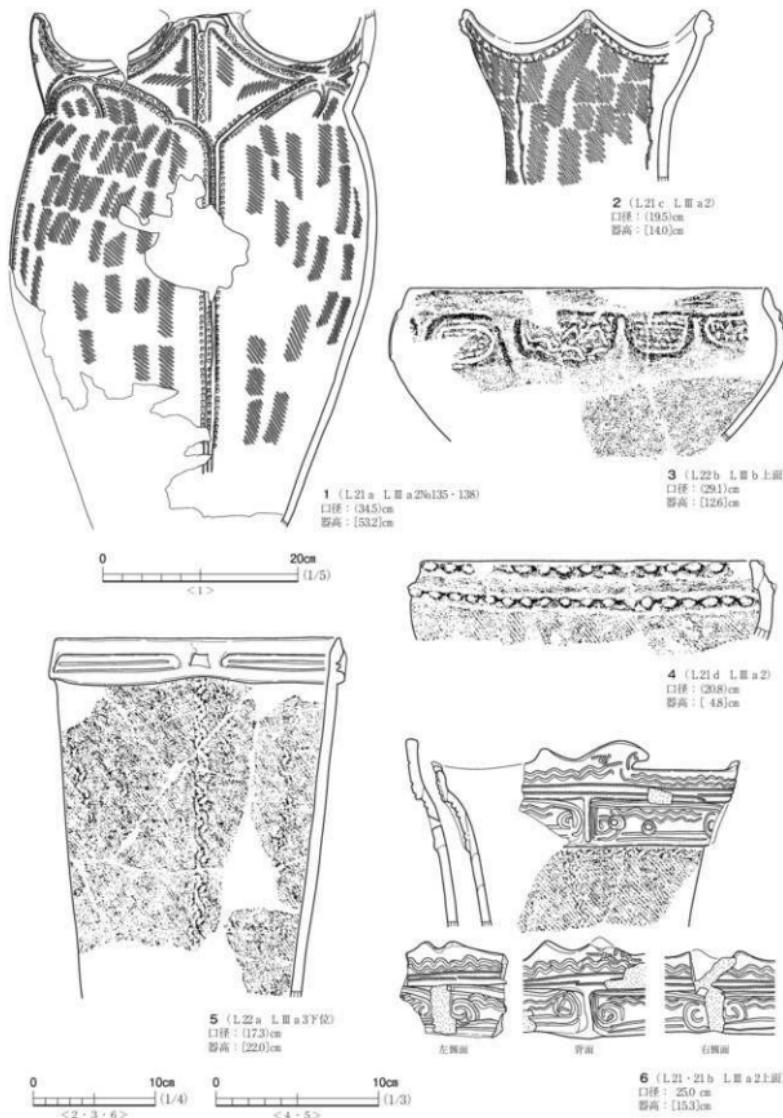


圖133 遺物包含層出土繩文土器 (63)

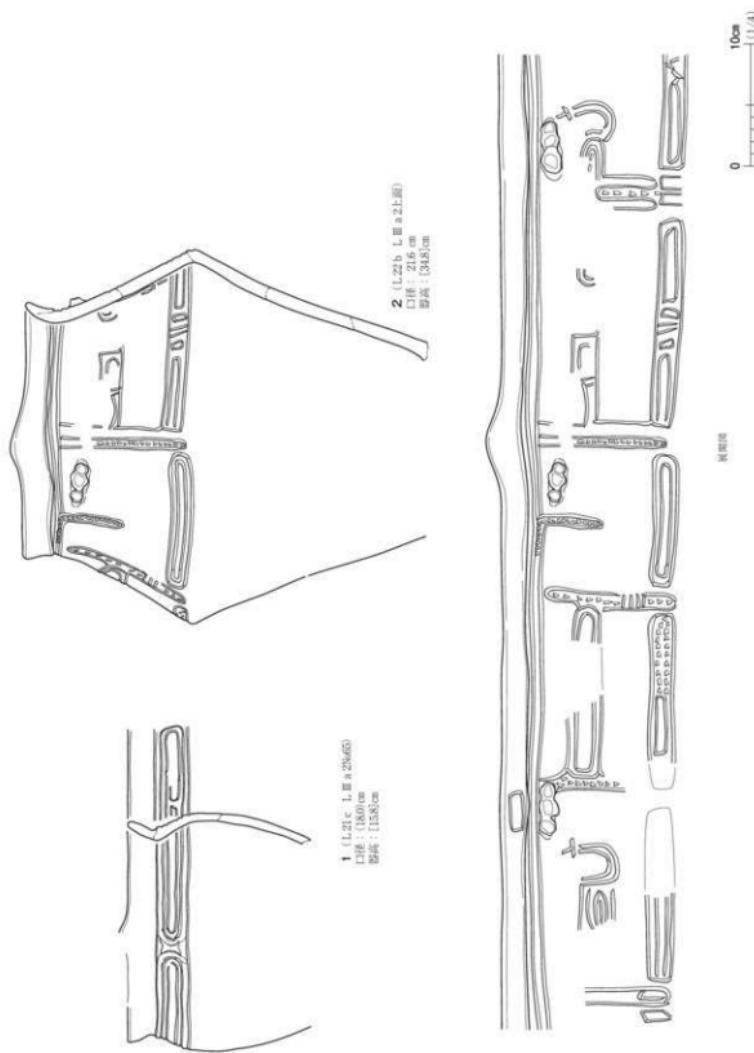


図134 遺物包含層出土縄文土器 (64)

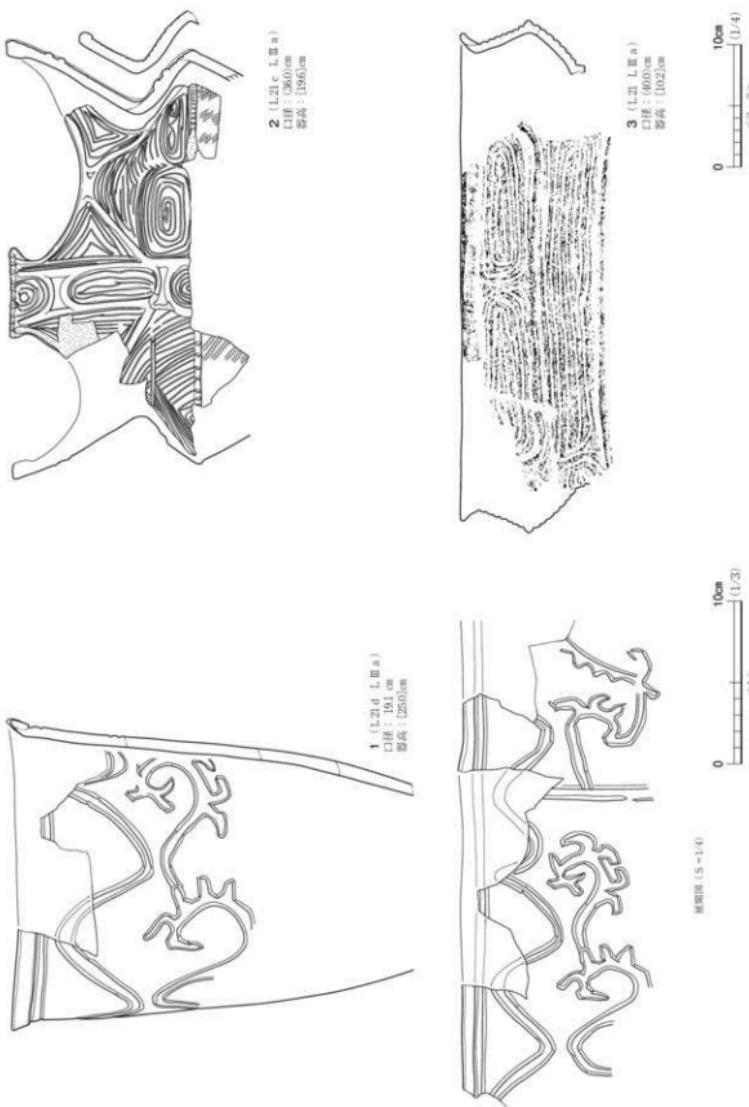


圖135 遺物包含層出土繩文土器 (65)

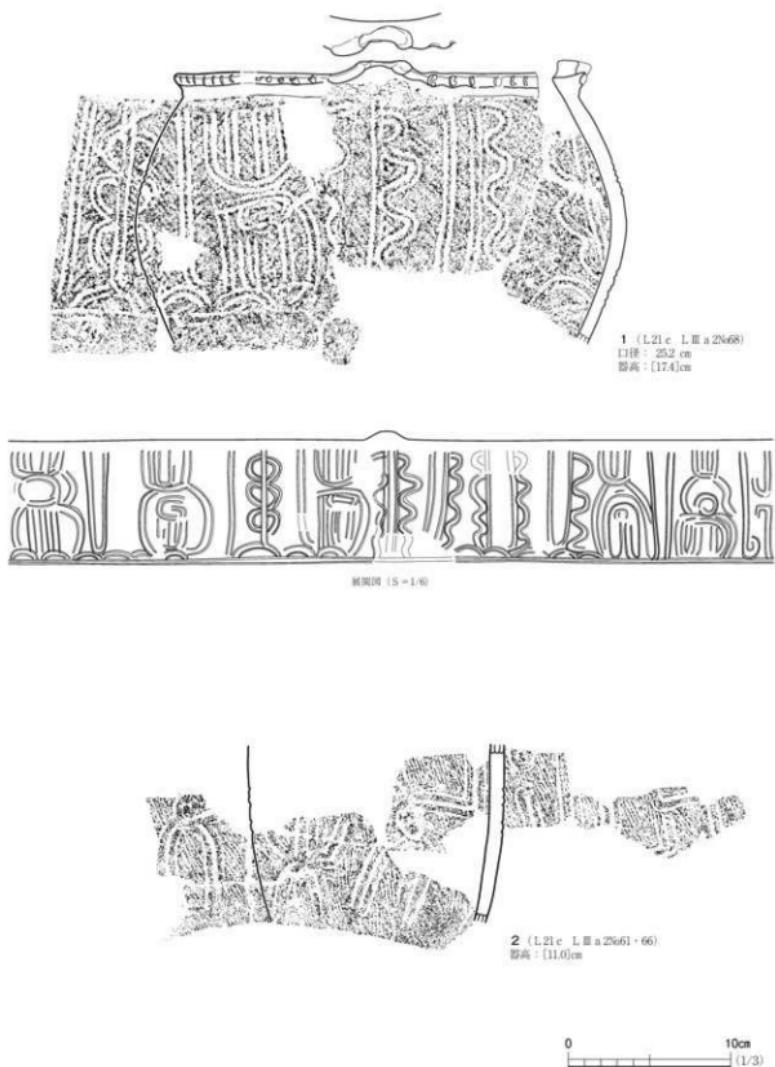


図136 遺物包含層出土繩文土器 (66)

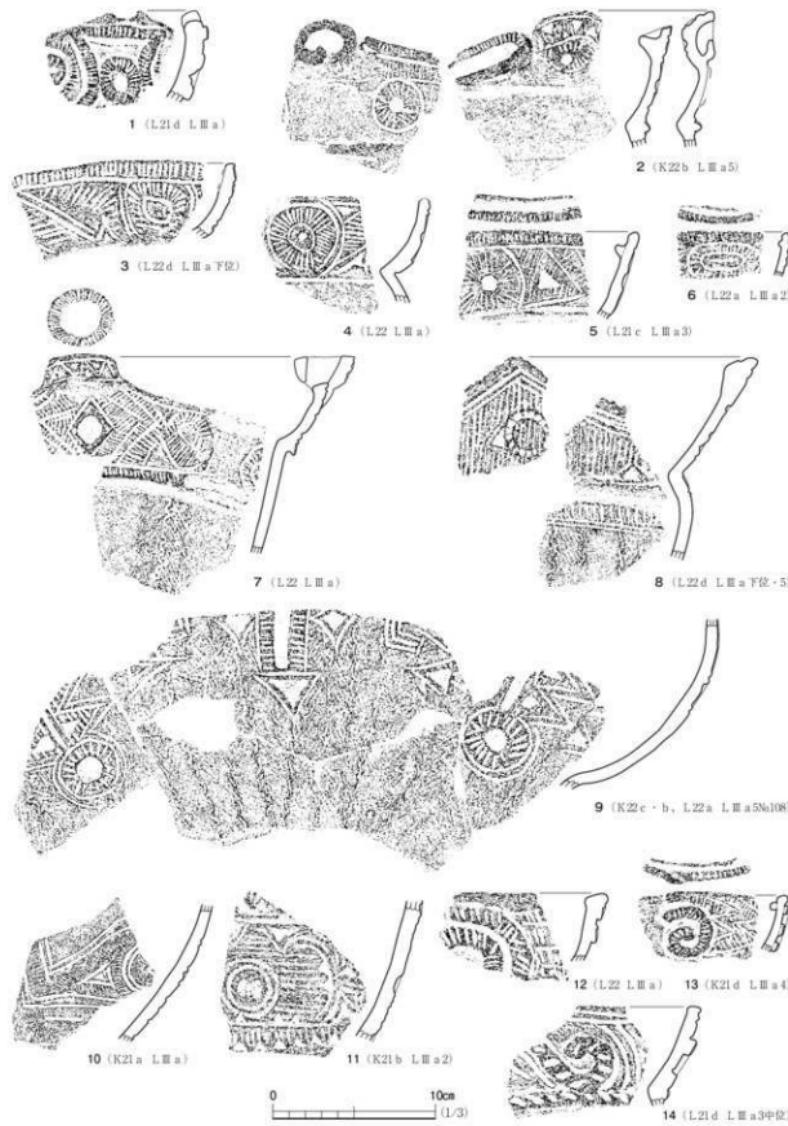


図137 遺物包含層出土縄文土器 (67)

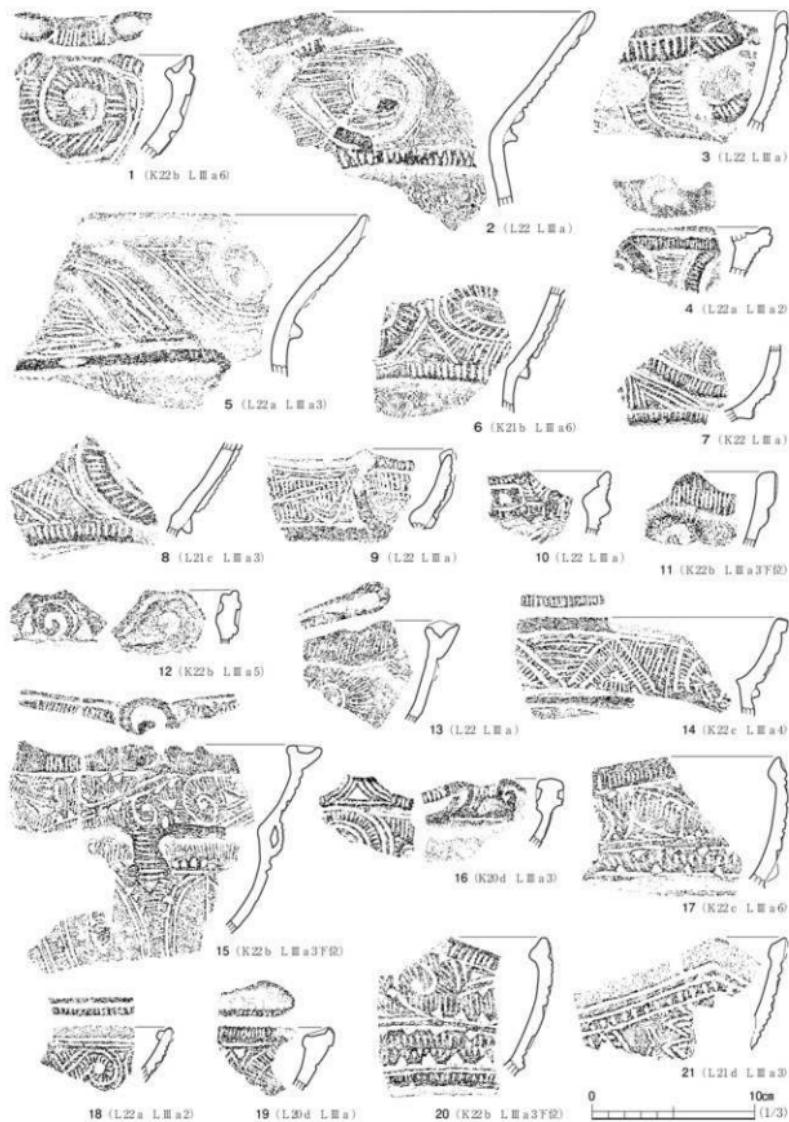


図138 遺物包含層出土縄文土器 (68)

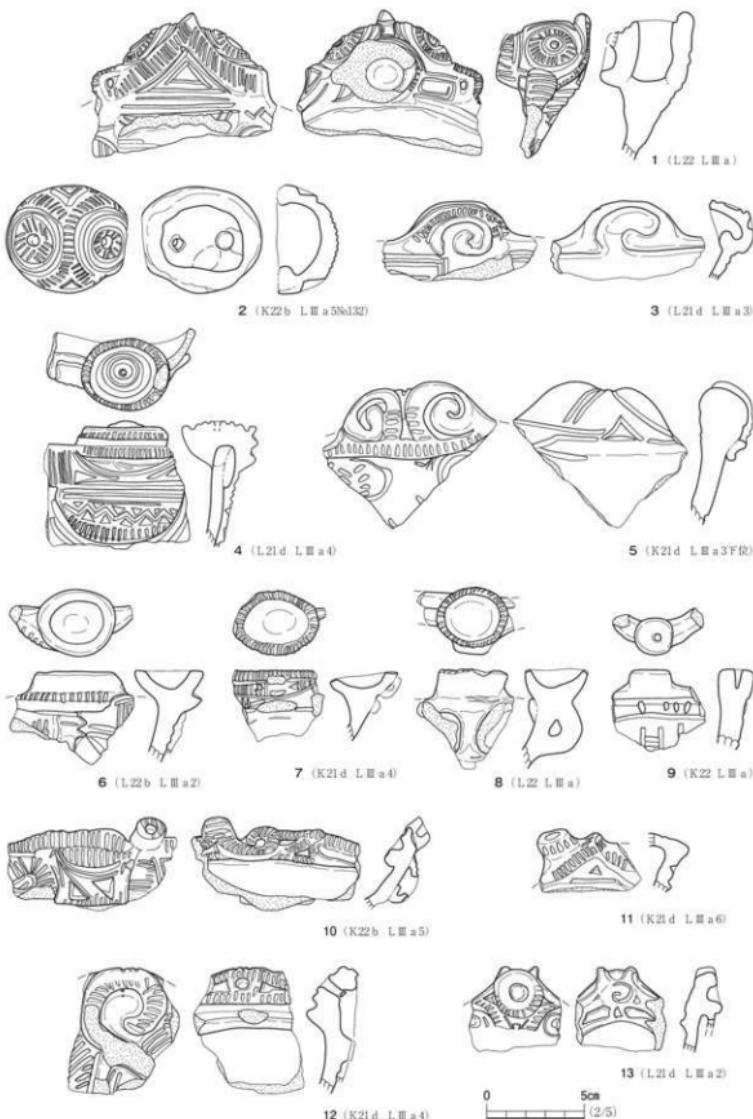


図139 遺物包含層出土繩文土器 (69)

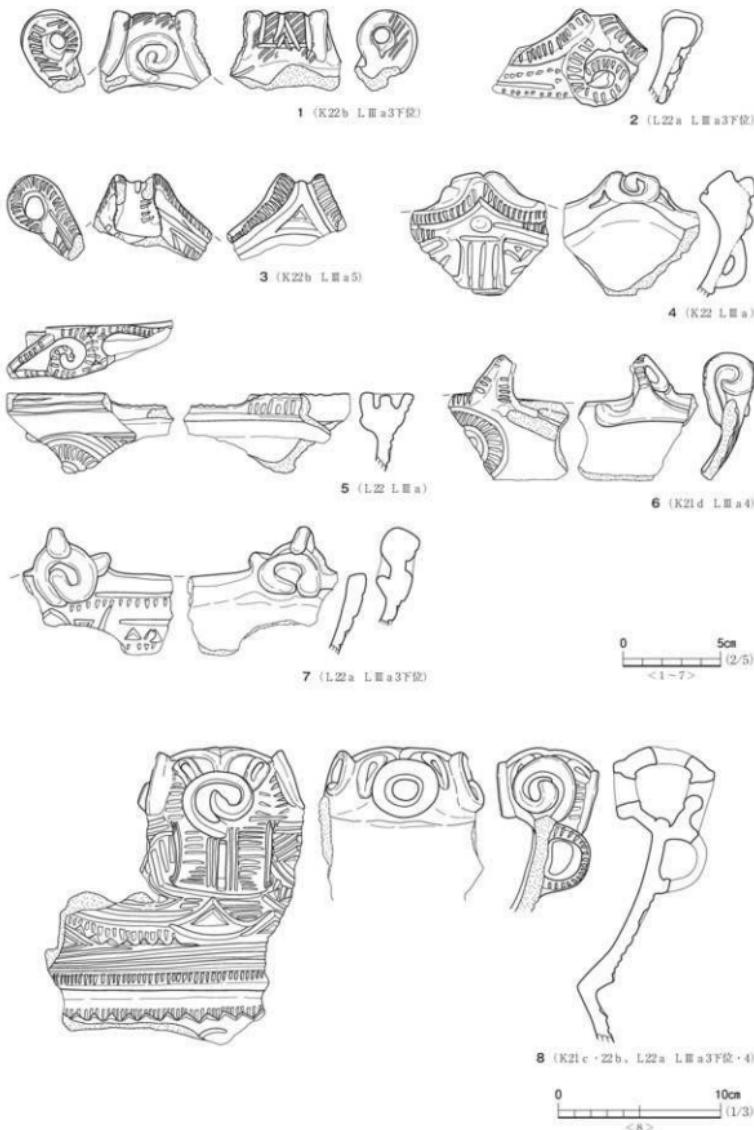


図140 遺物包含層出土繩文土器 (70)

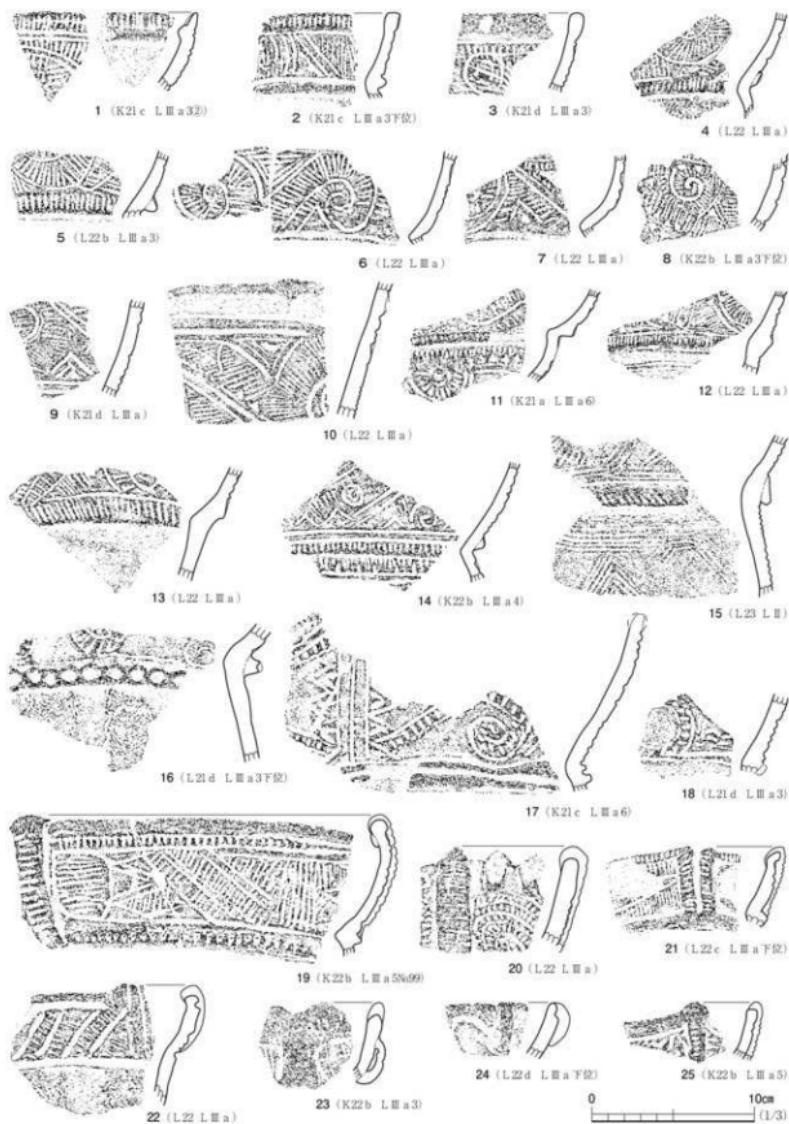


圖141 遺物包含層出土繩文土器 (71)

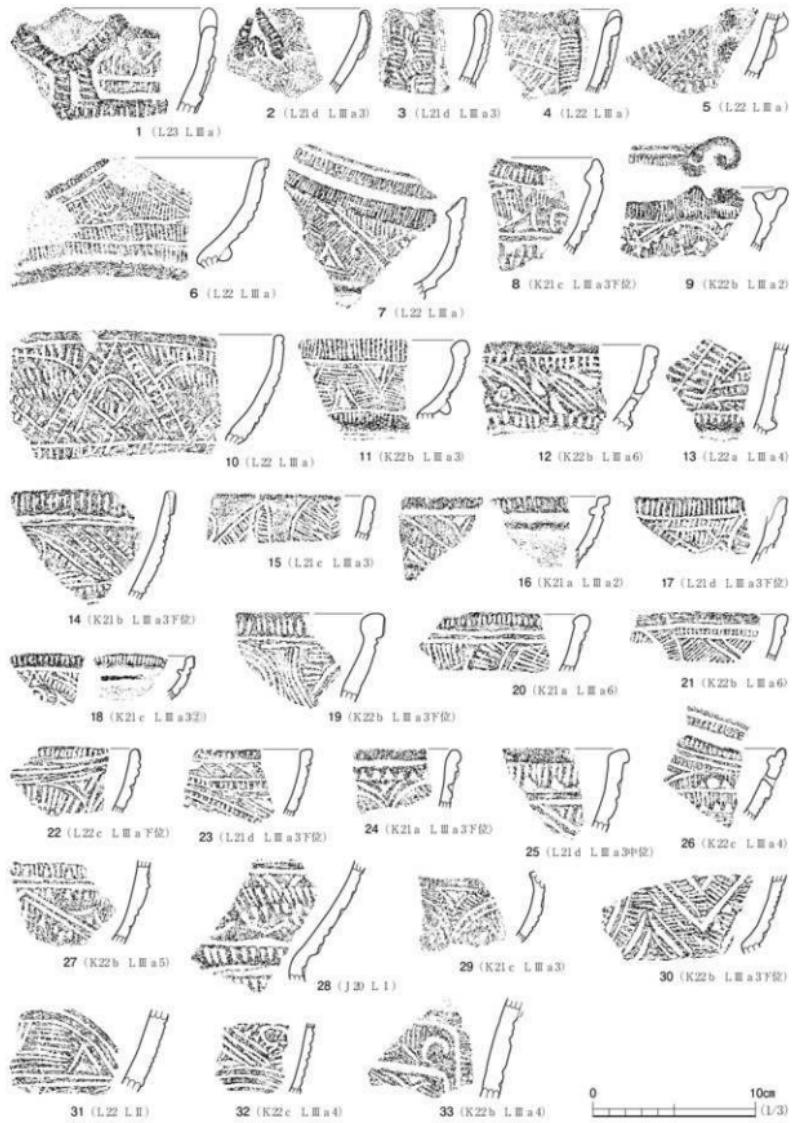


図142 遺物包含層出土縄文土器 (72)

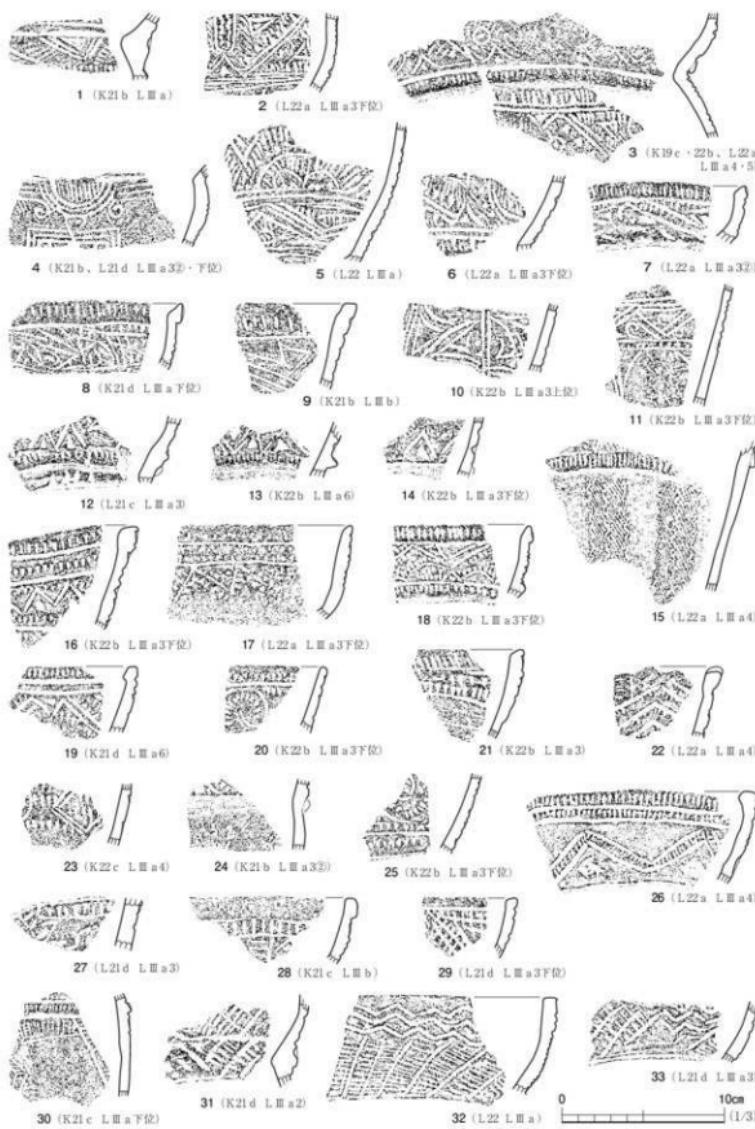


図143 遺物包含層出土繩文土器 (73)

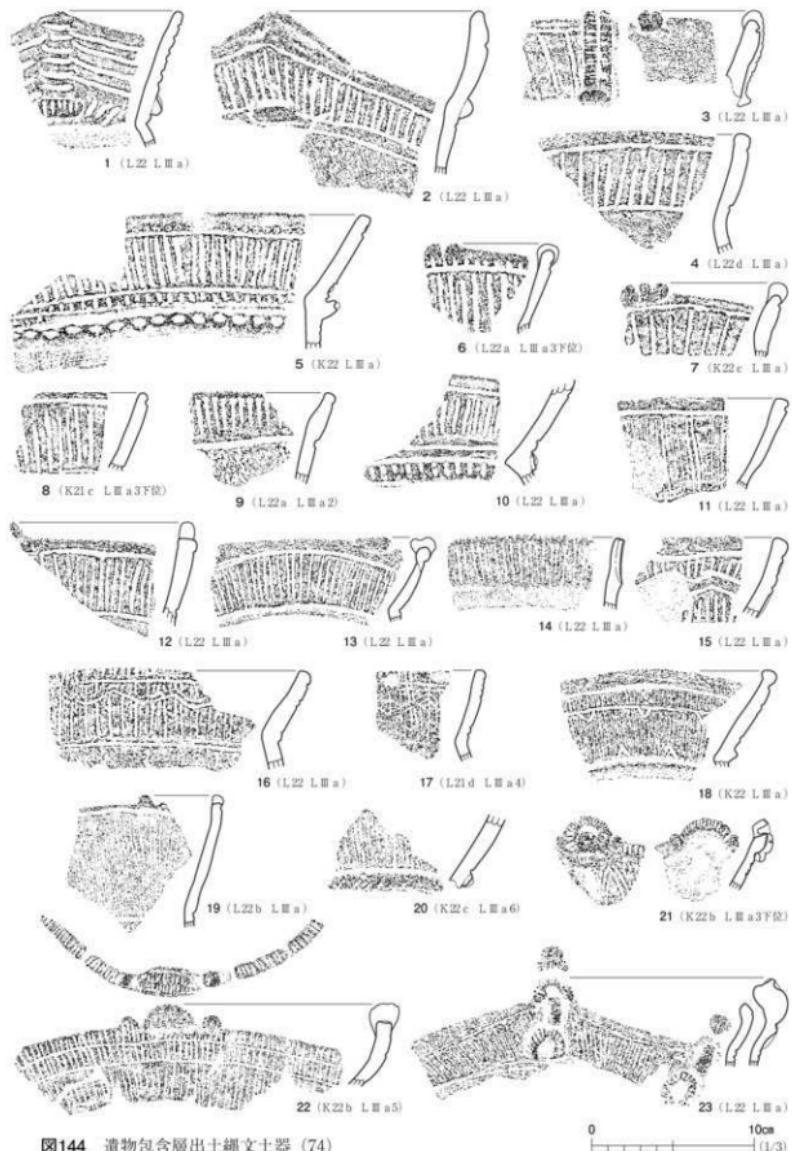


図144 遺物包含層出土繩文土器 (74)

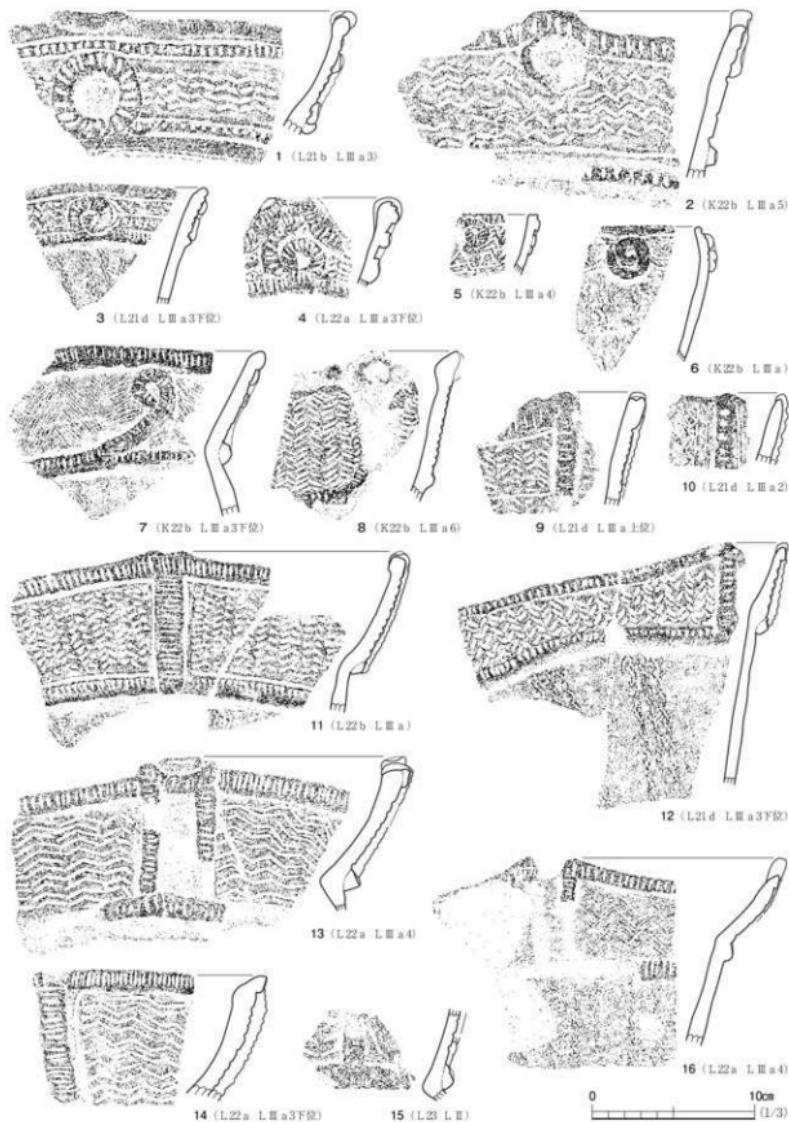


図145 遺物包含層出土繩文土器 (75)



图146 遗物包含层出土绳文土器 (76)

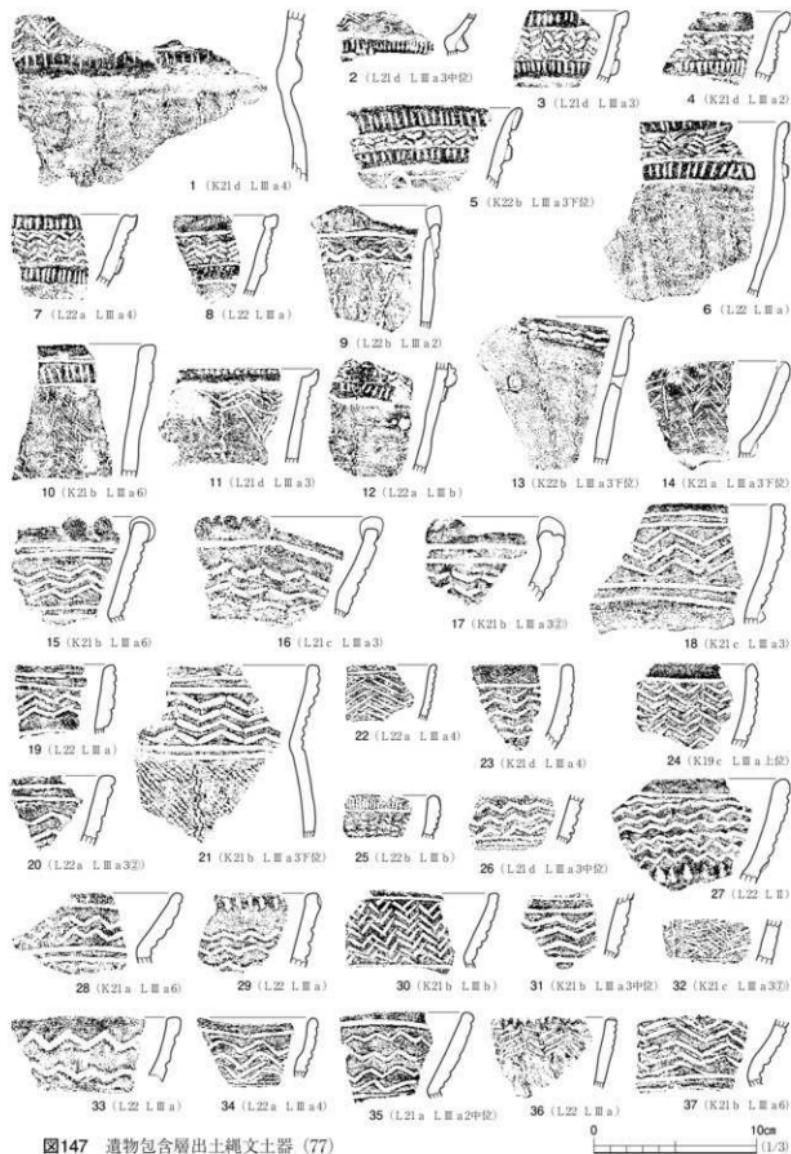


図147 遺物包含層出土繩文土器 (77)

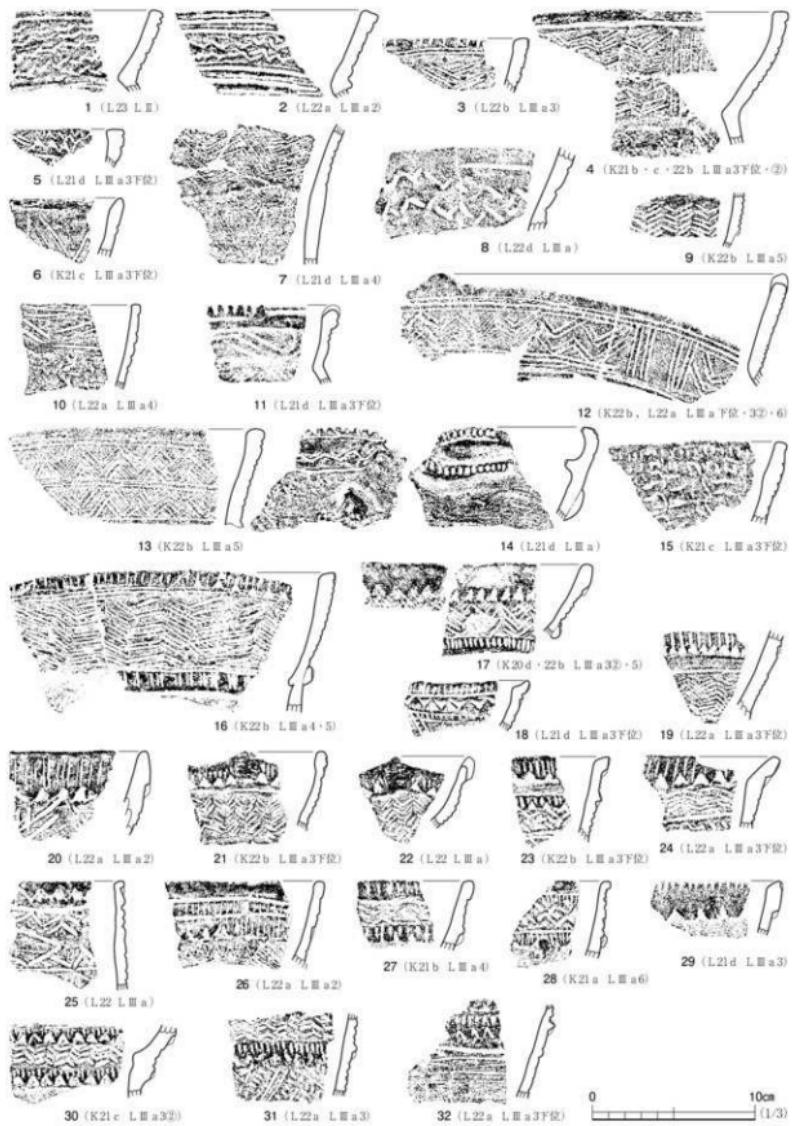


図148 遺物包含層出土縄文土器 (78)

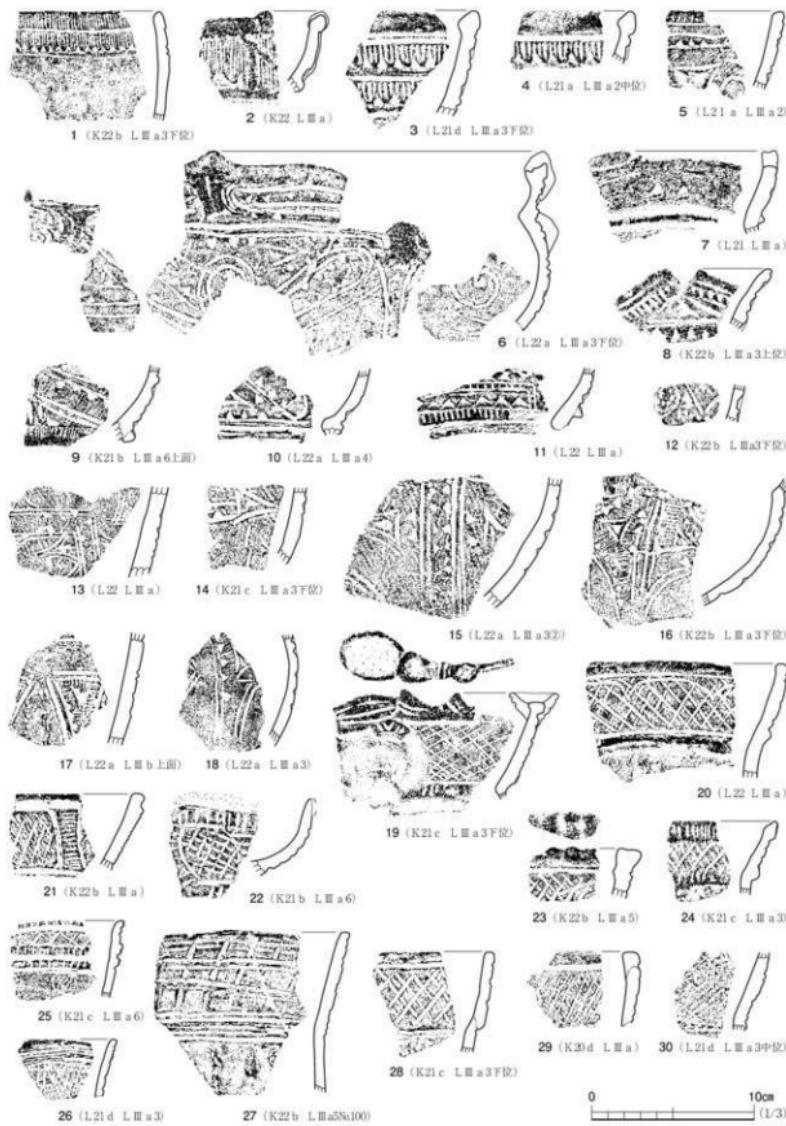


図149 遺物包含層出土縄文土器 (79)

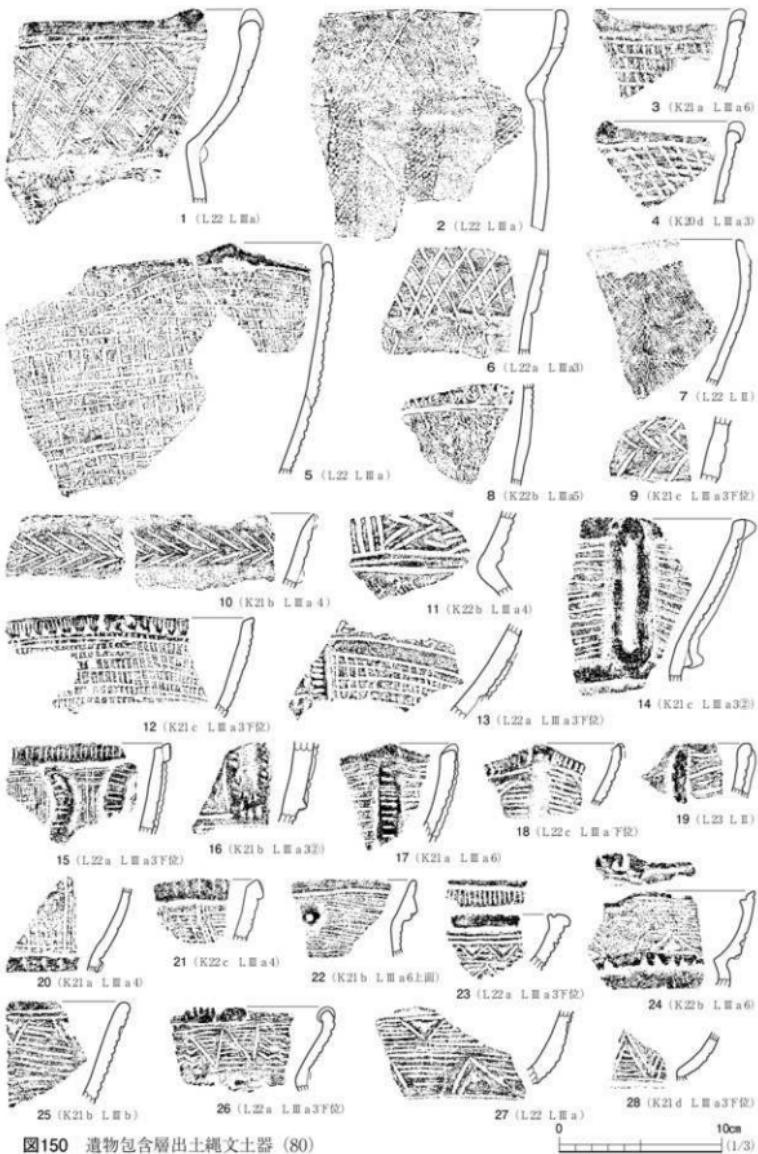


図150 遺物包含層出土縄文土器 (80)



圖151 遺物包含層出土繩文土器 (81)



图152 遗物包含层出土绳文土器 (82)



図153 遺物包含層出土繩文土器 (83)



图154 遗物包含層出土繩文土器 (84)

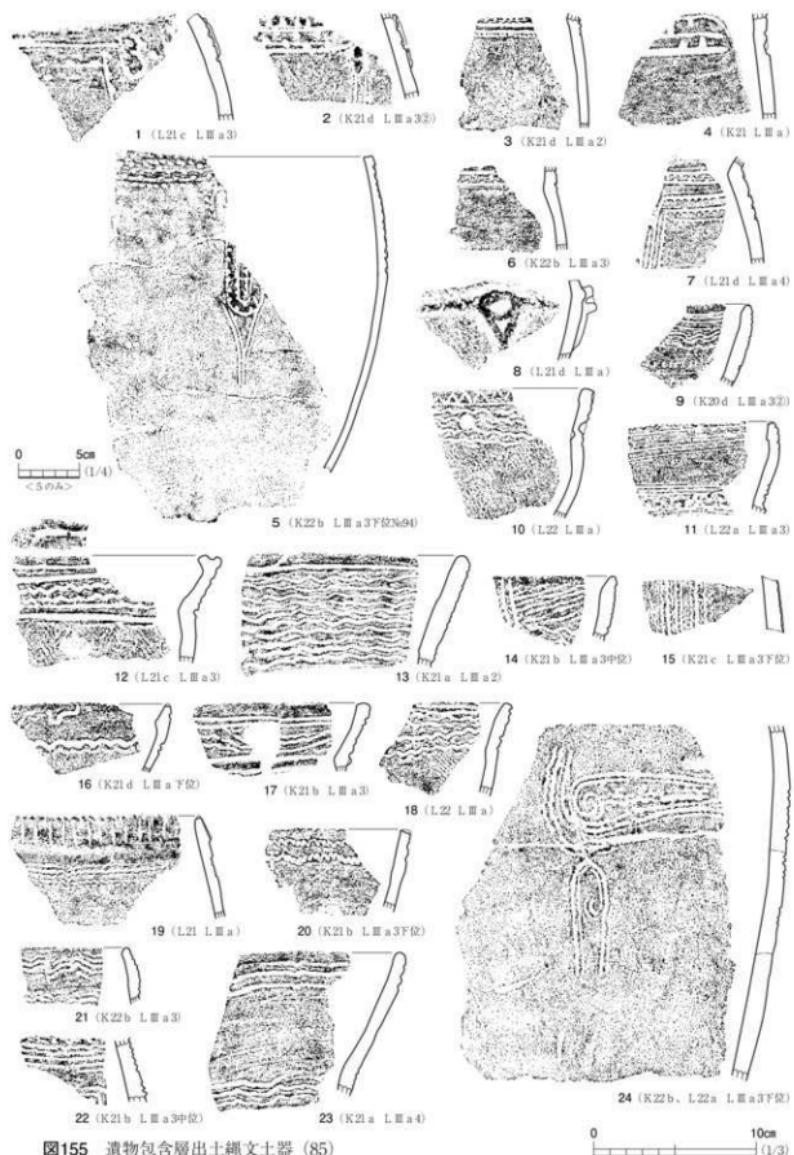


図155 遺物包含層出土縄文土器 (85)

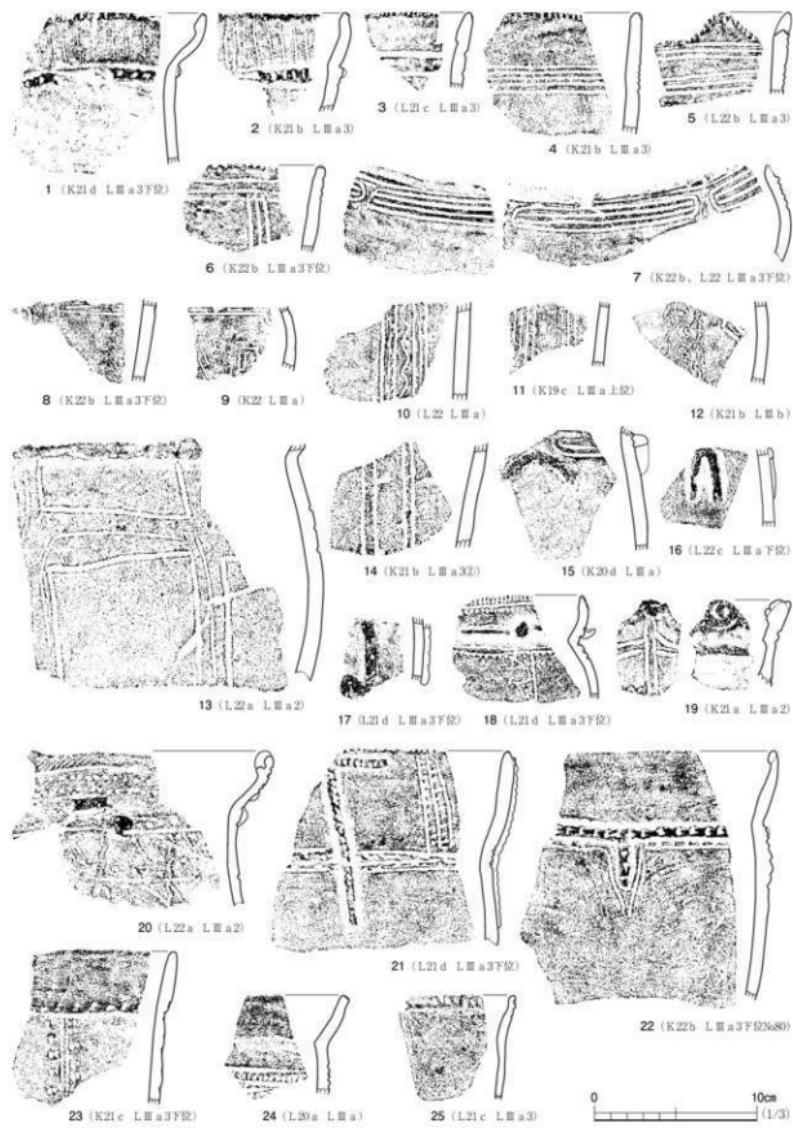


图156 遗物包含层出土绳文土器 (86)



图157 遗物包含层出土绳文土器 (87)

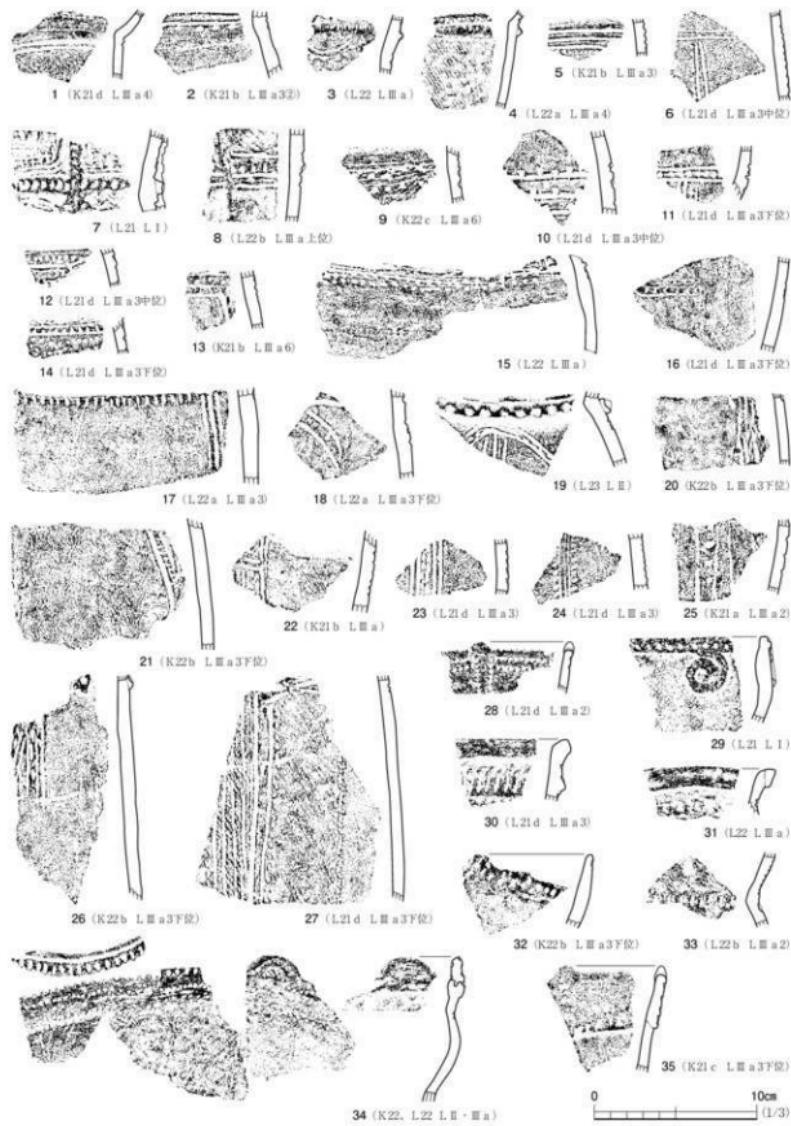


图158 遗物包含层出土绳文土器 (88)

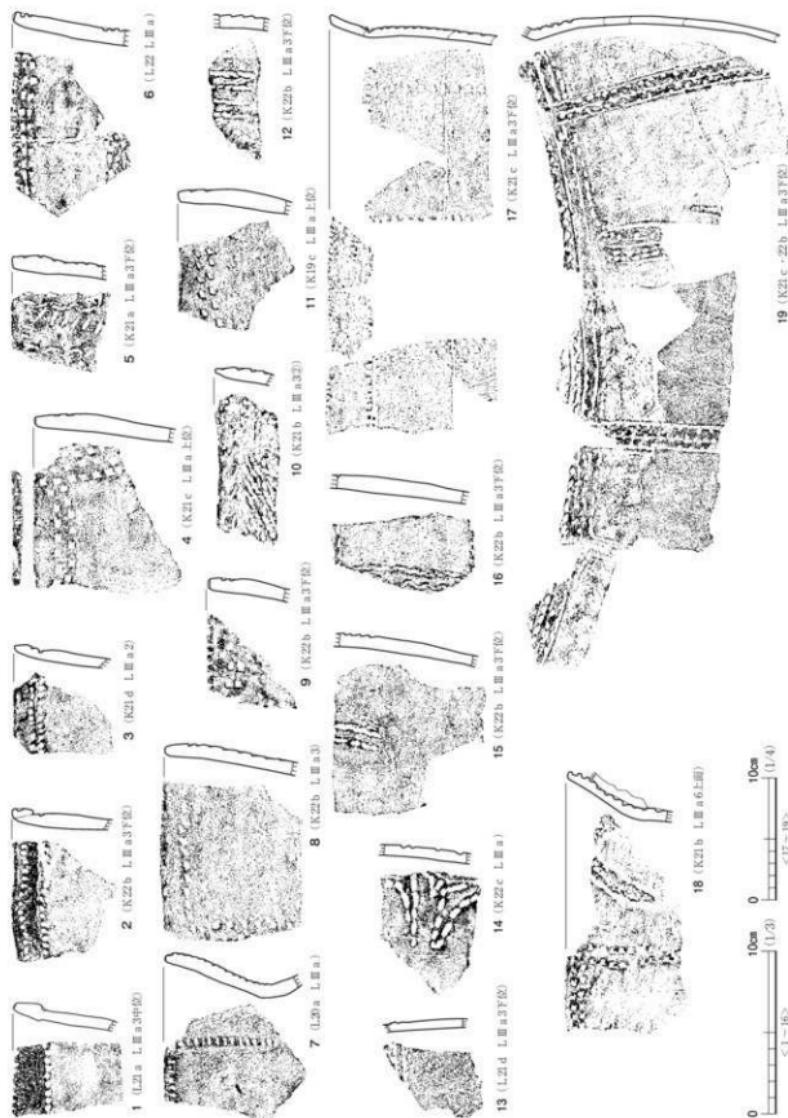


圖159 遺物包含層出土繩文土器 (89)



图160 遗物包含层出土绳文土器 (90)

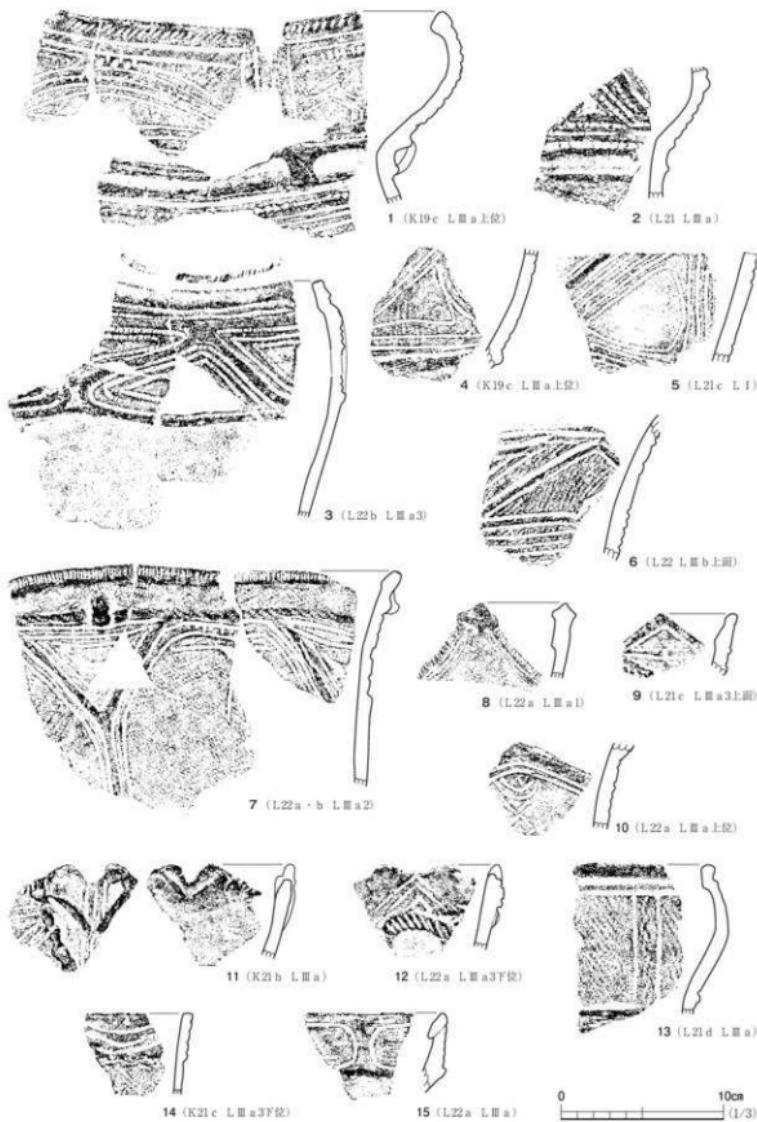


図161 遺物包含層出土繩文土器 (91)

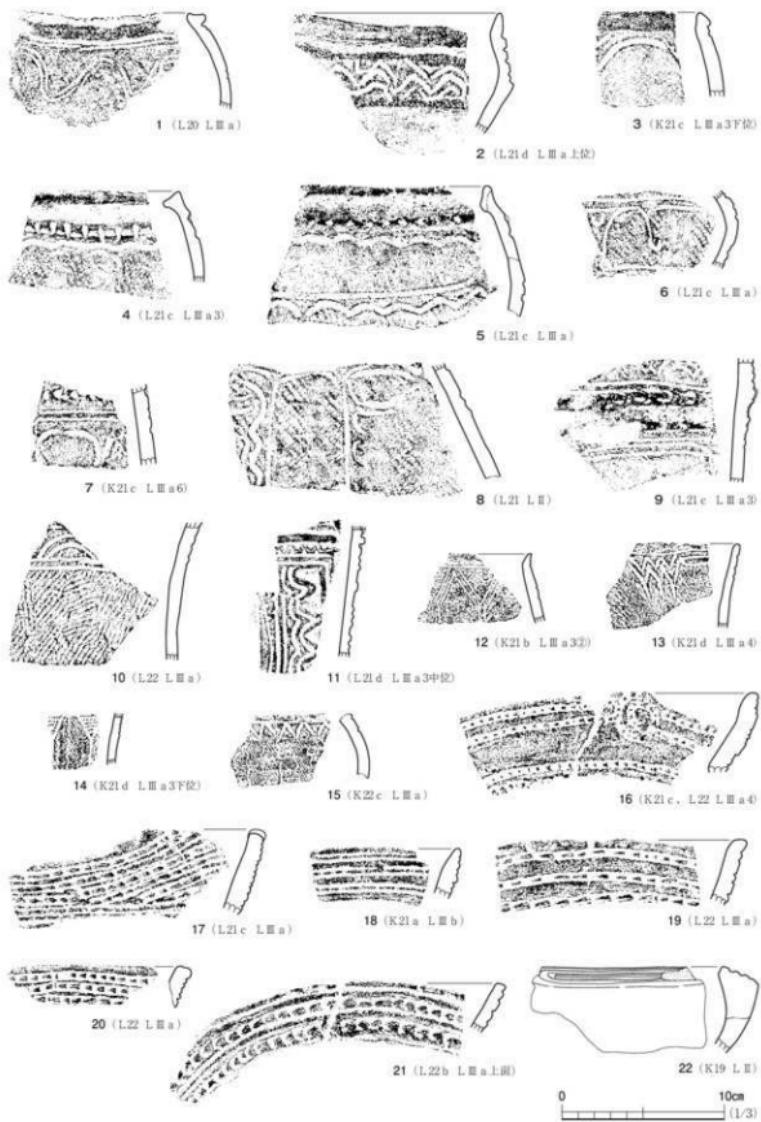


図162 遺物包含層出土繩文土器 (92)

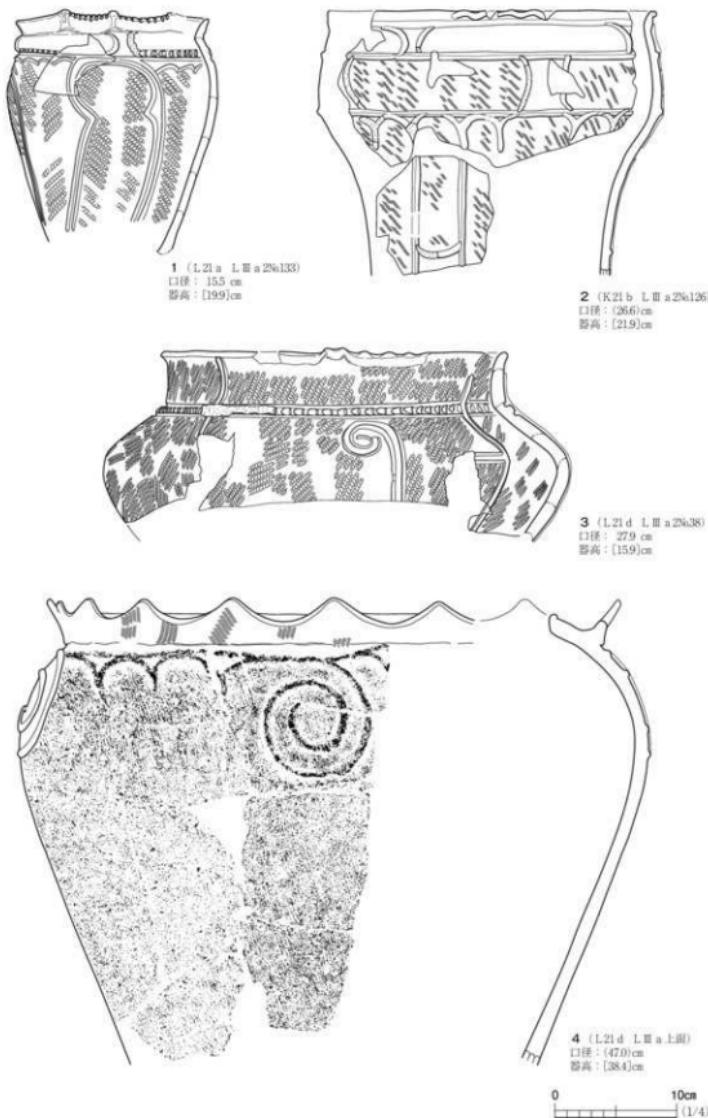
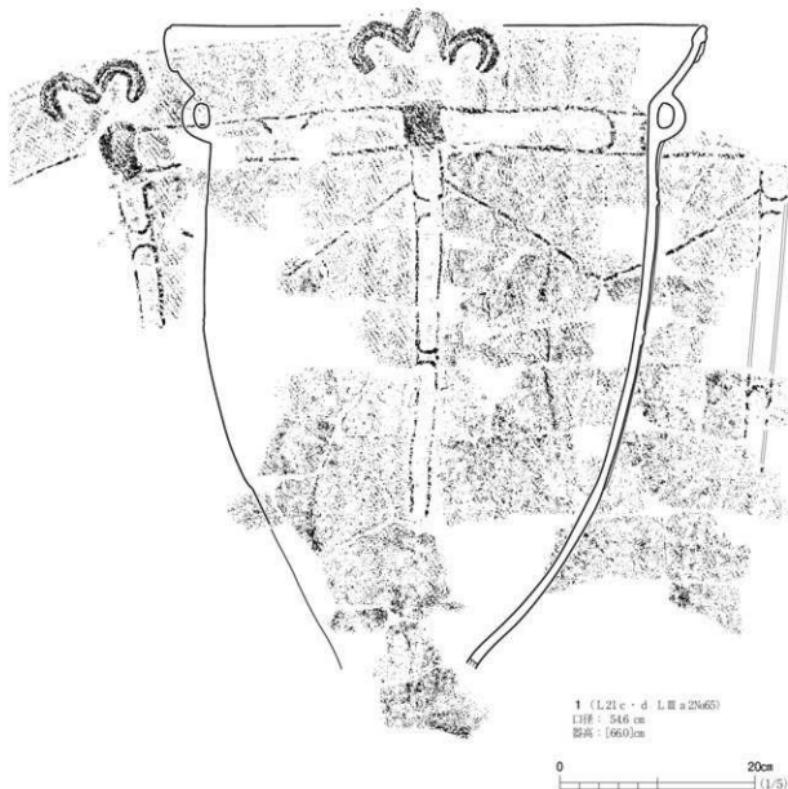


圖163 遺物包含層出土繩文土器 (93)



2 (L21c LIII a 3)
口径: (26.4) cm
器高: [9.4] cm

0 10cm (1/4)

図164 遺物包含層出土繩文土器 (94)

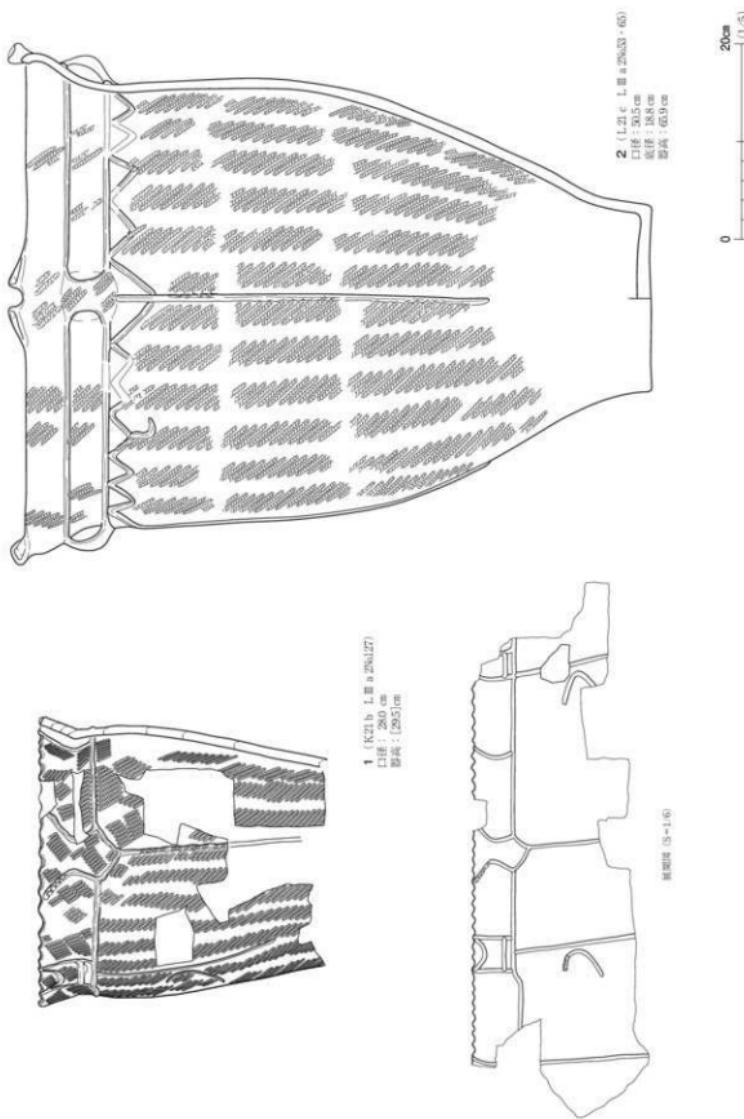
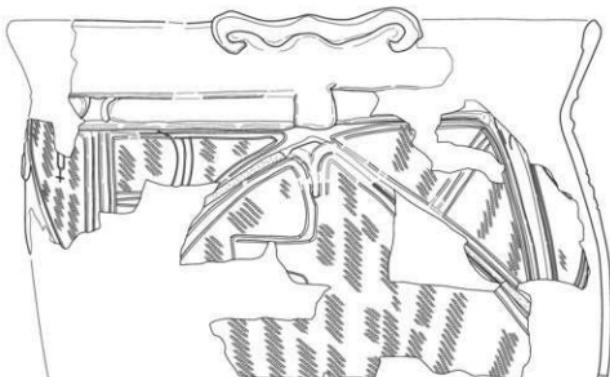
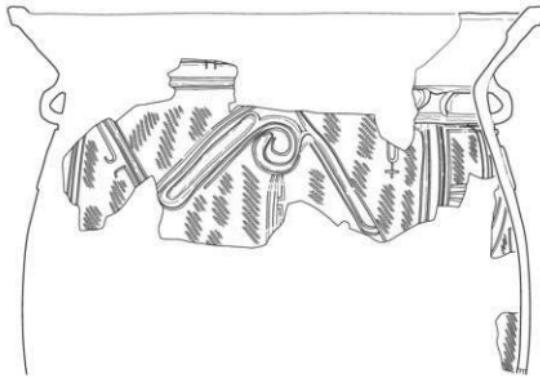


図165 遺物包含層出土縄文土器 (95)



正面



左侧面

1 (L22c LIII a2)
口径: (47.7)cm
器高: (30.6)cm



図166 遺物包含層出土繩文土器 (96)



図167 遺物包含層出土繩文土器 (97)

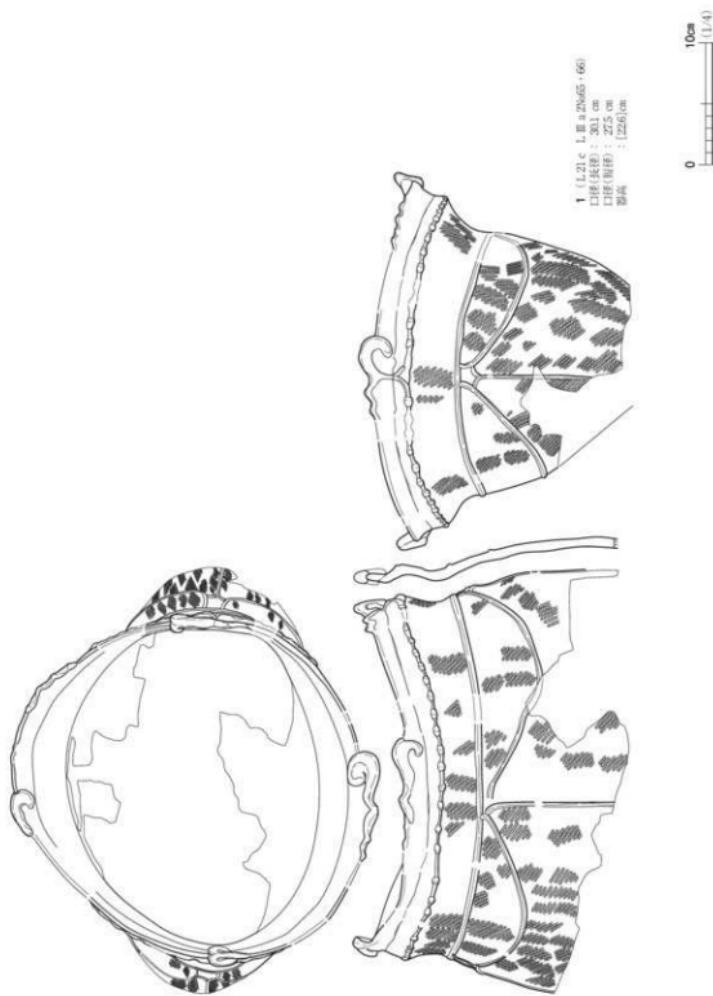


図168 遺物包含層出土縄文土器 (98)

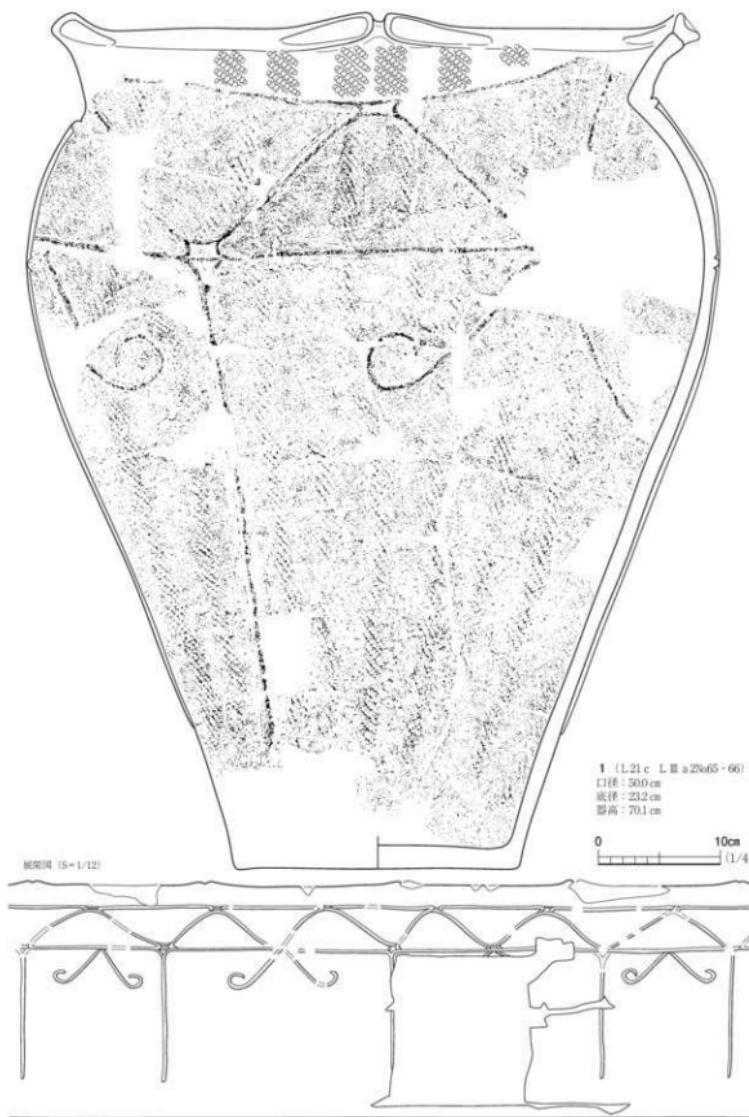


圖169 遺物包含層出土繩文土器 (99)

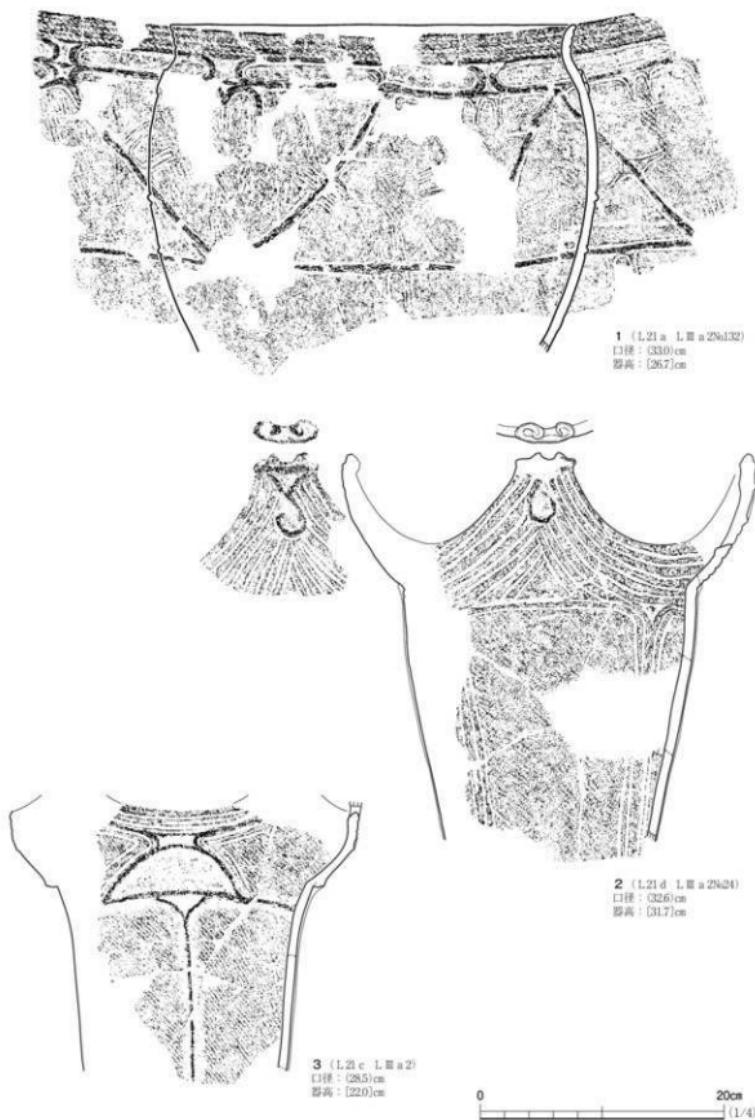


図170 遺物包含層出土繩文土器 (100)

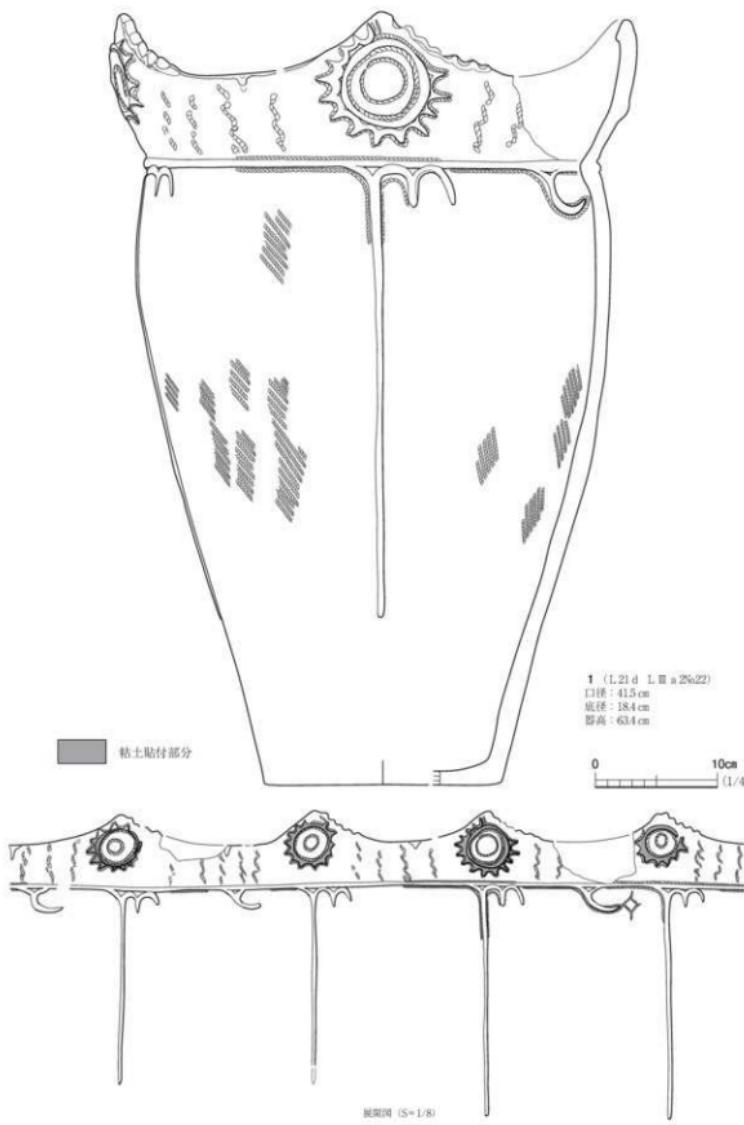


図171 遺物包含層出土縄文土器 (101)

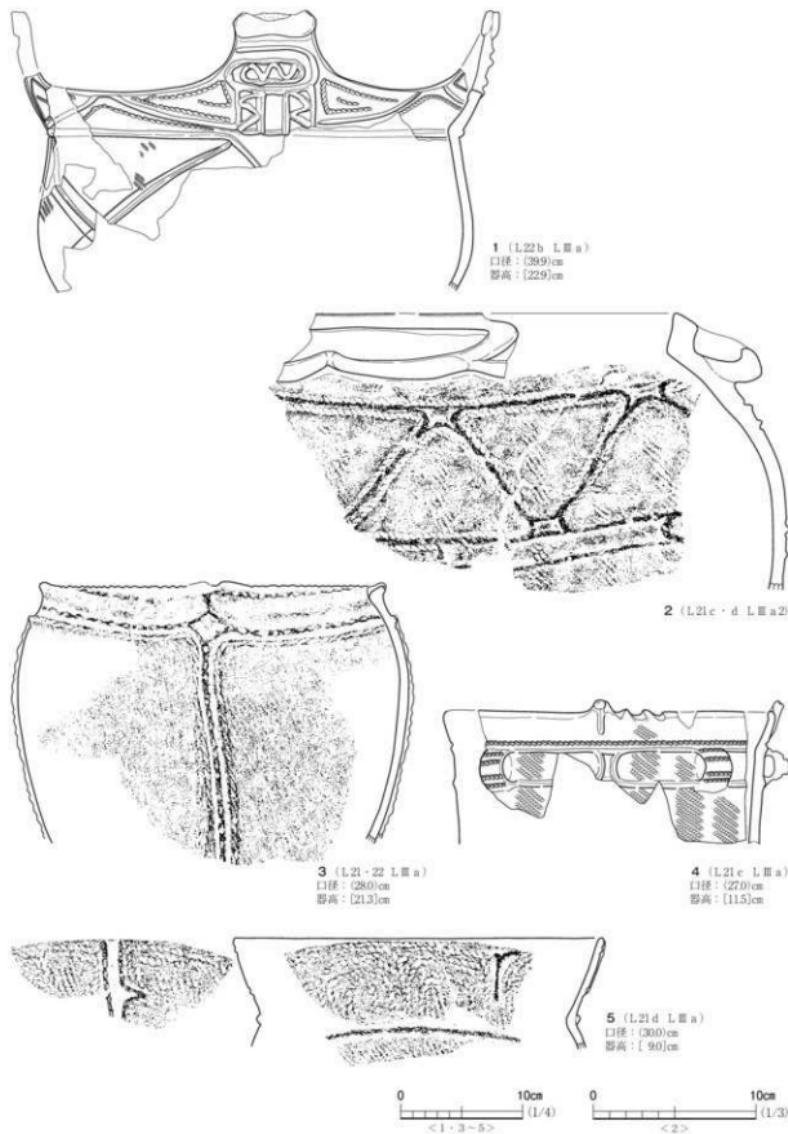


図172 遺物包含層出土繩文土器 (102)

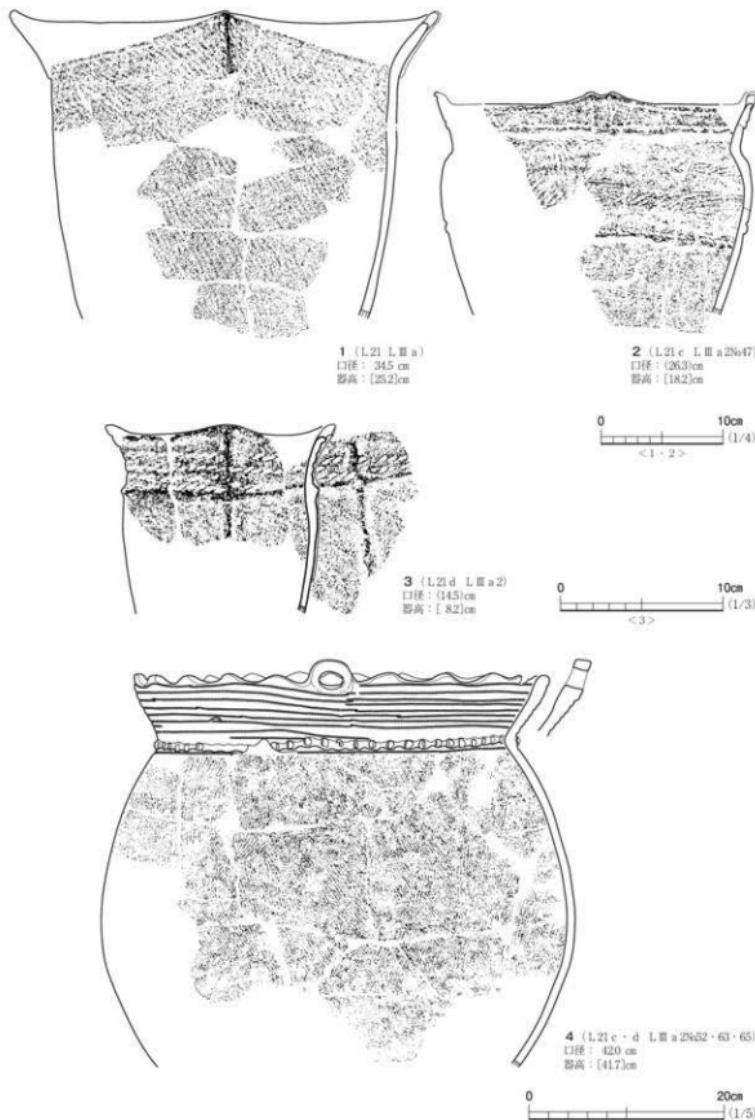


図173 遺物包含層出土繩文土器 (103)

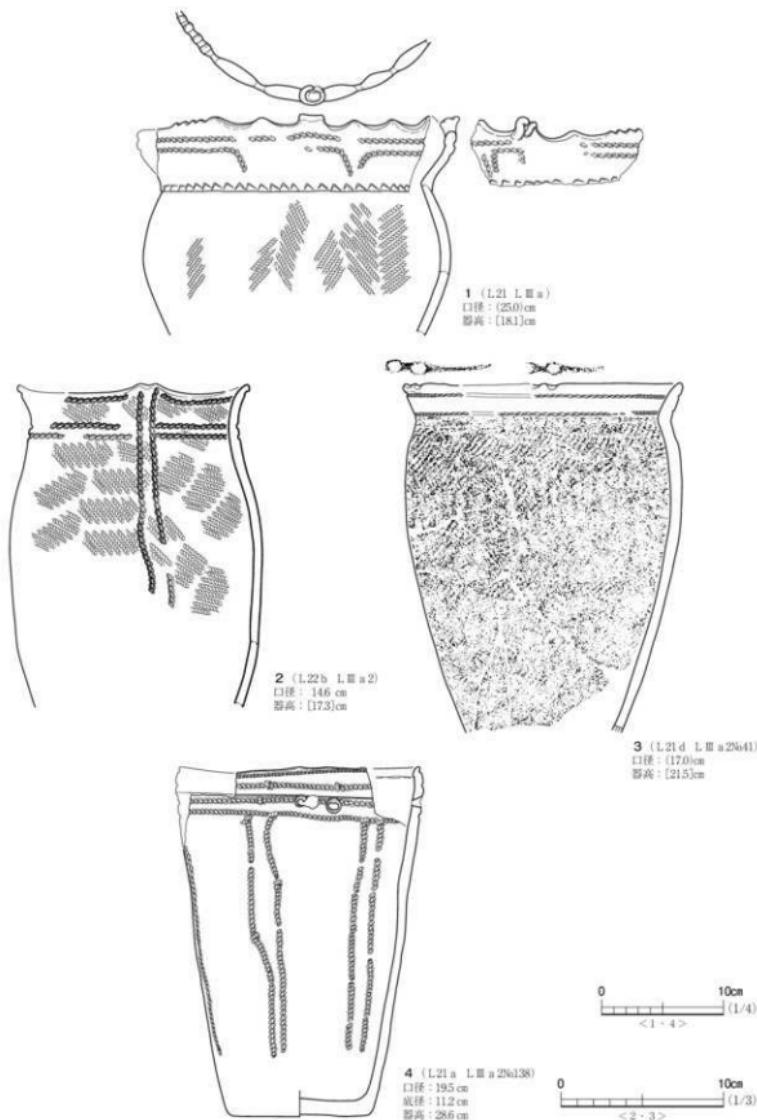


図174 遺物包含層出土繩文土器 (104)

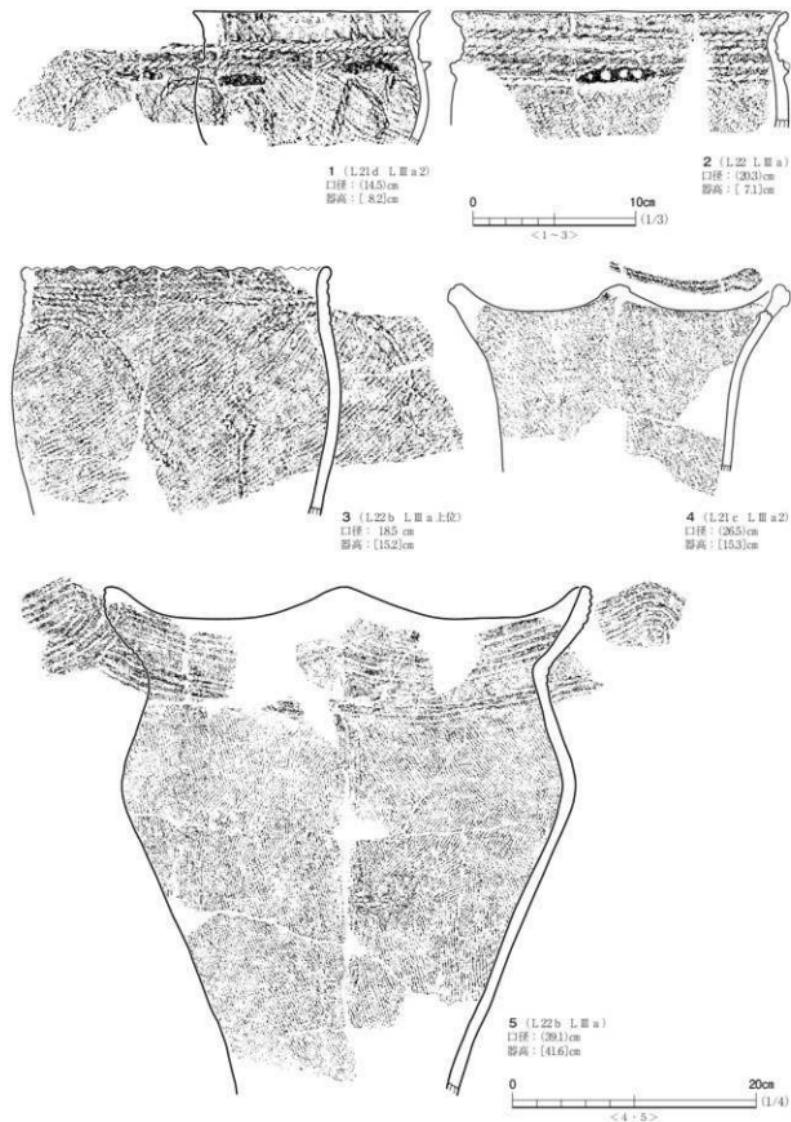


図175 遺物包含層出土繩文土器 (105)

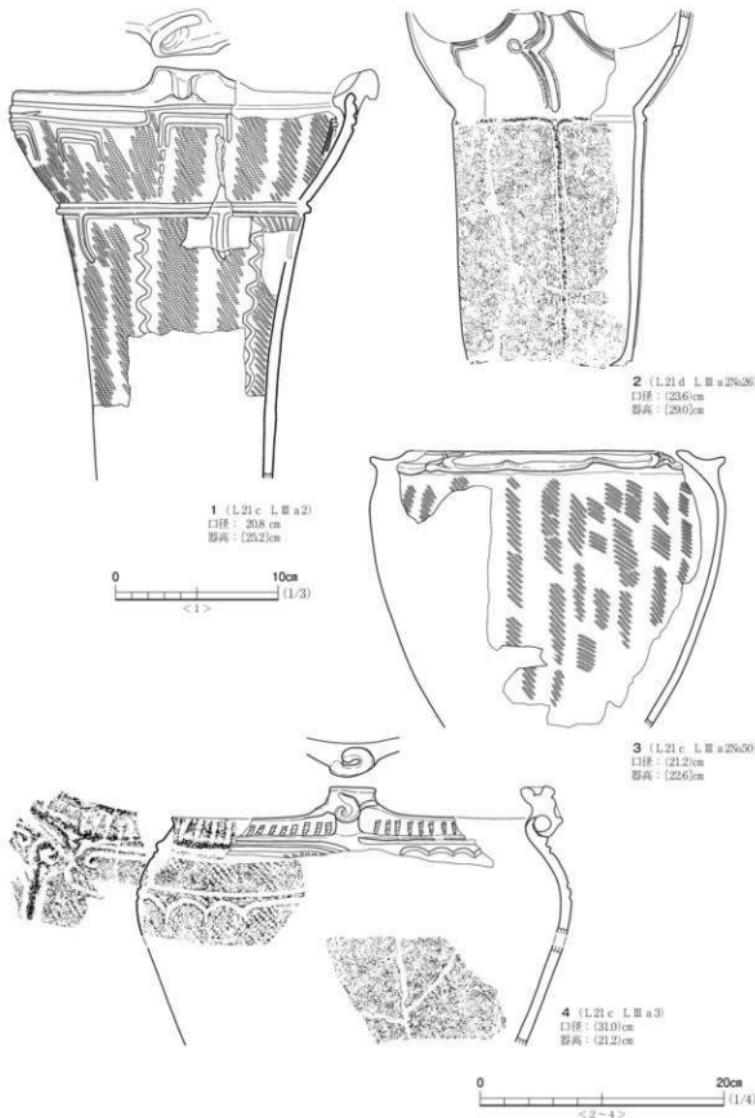


図176 遺物包含層出土繩文土器 (106)

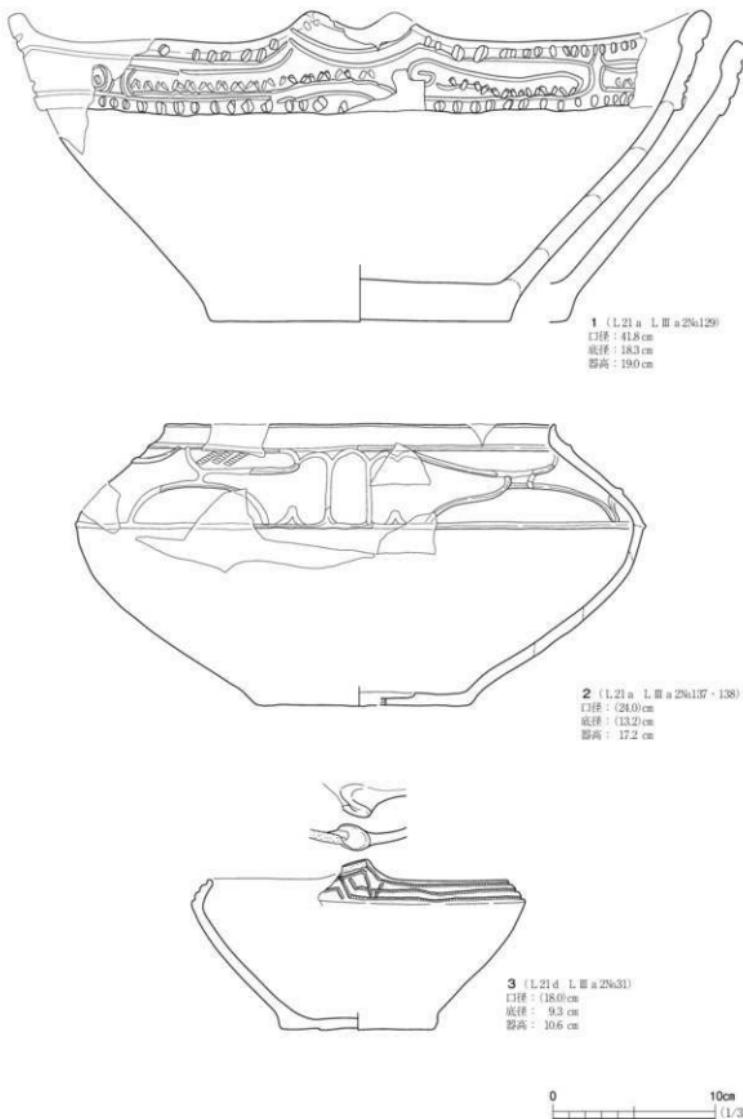


圖177 遺物包含層出土繩文土器 (107)

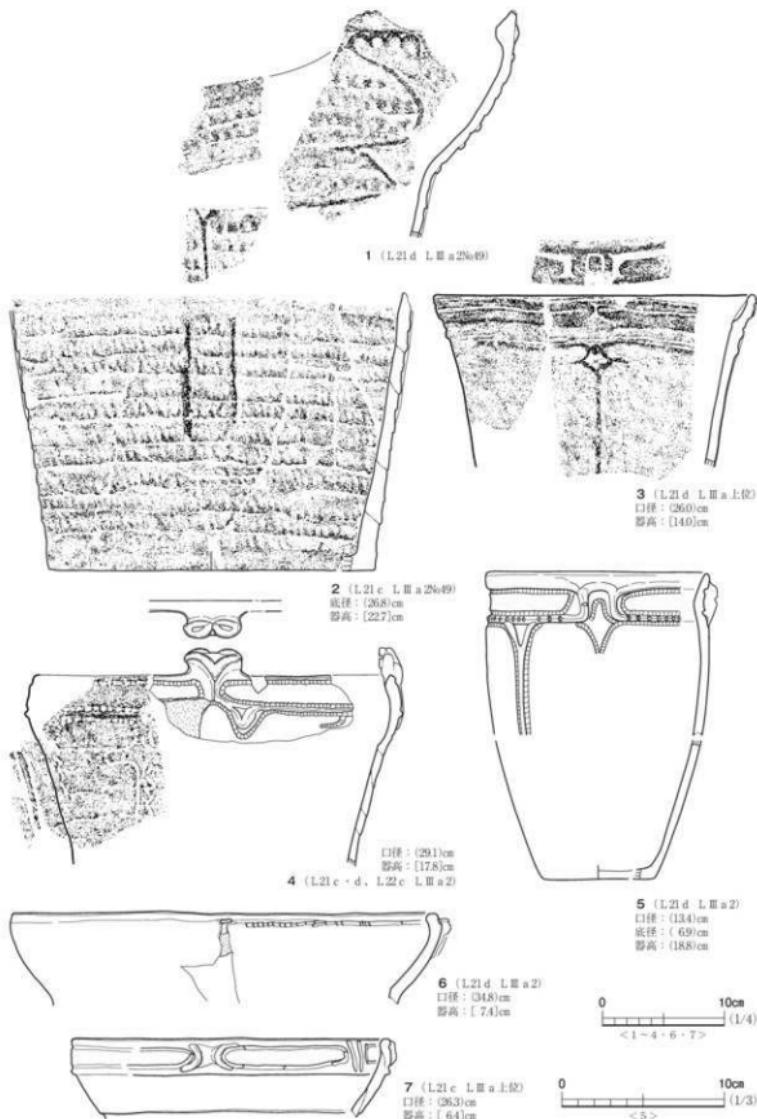


図178 遺物包含層出土縄文土器 (108)

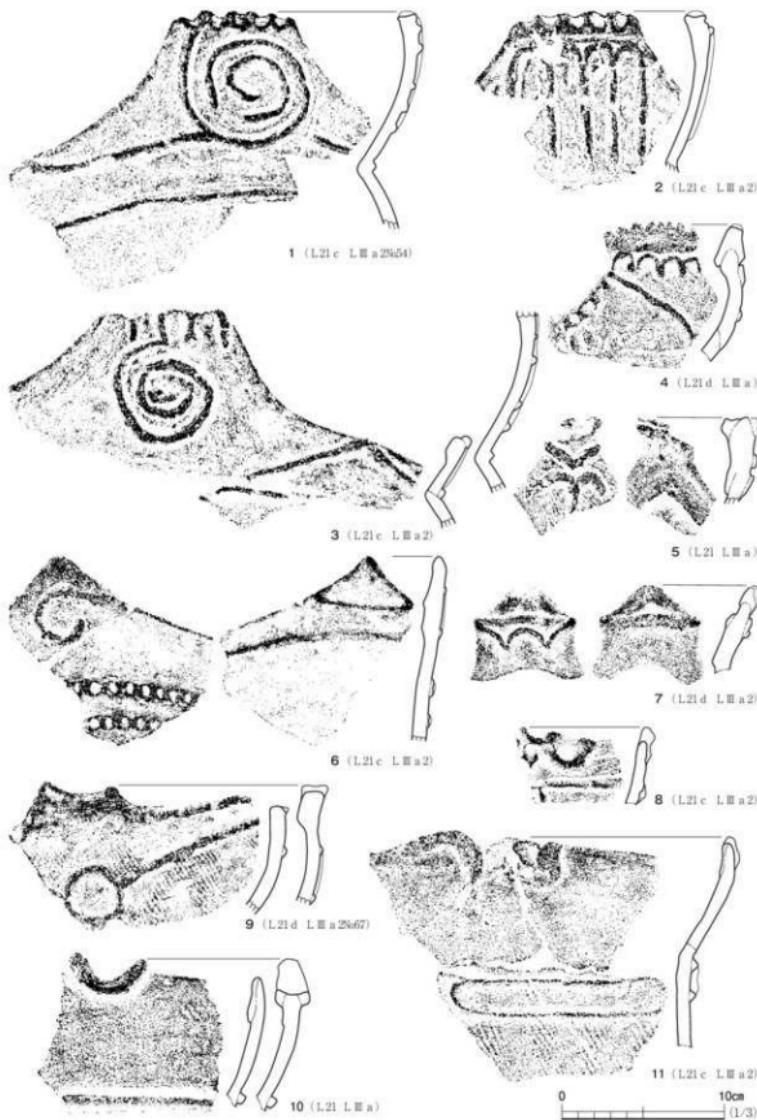


圖179 遺物包含層出土繩文土器 (109)

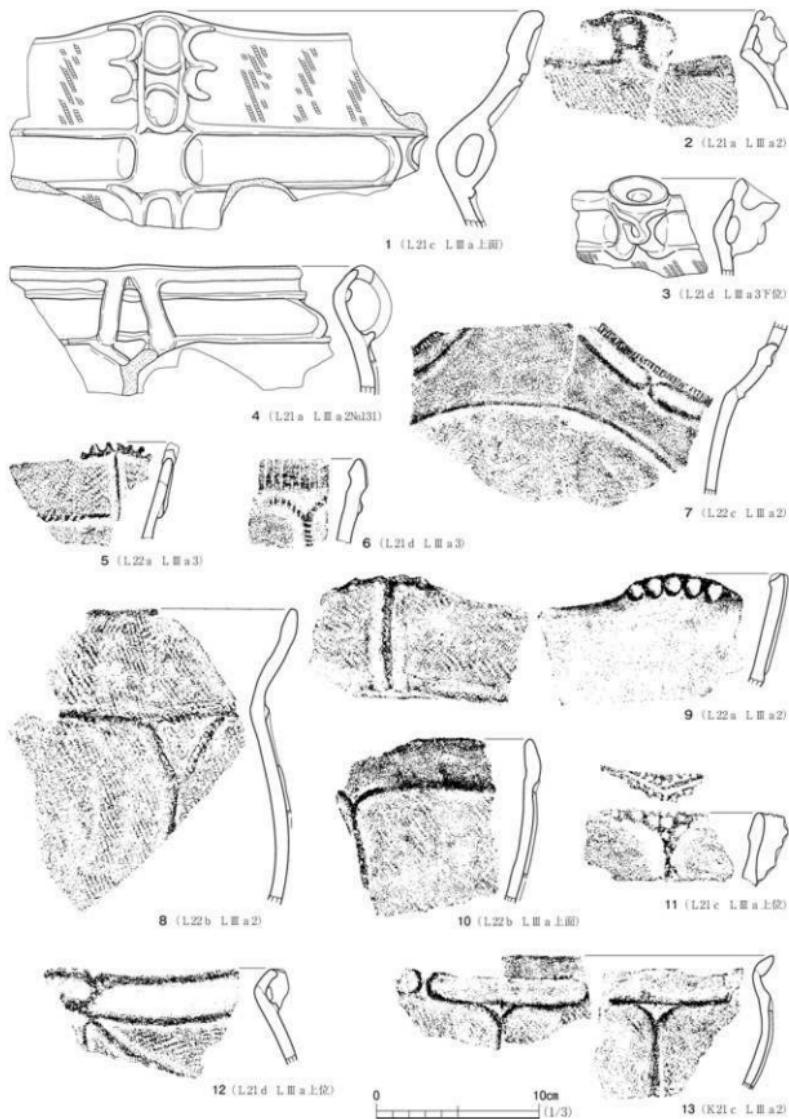


図180 遺物包含層出土繩文土器 (110)

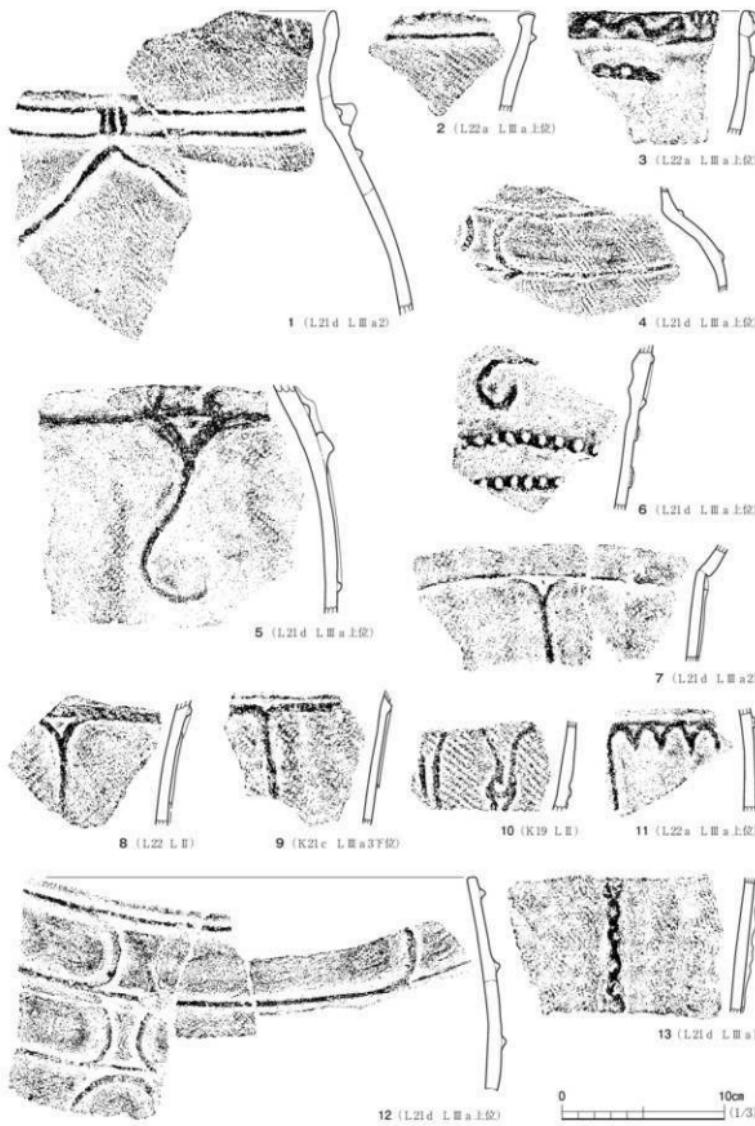


図181 遺物包含層出土繩文土器 (111)

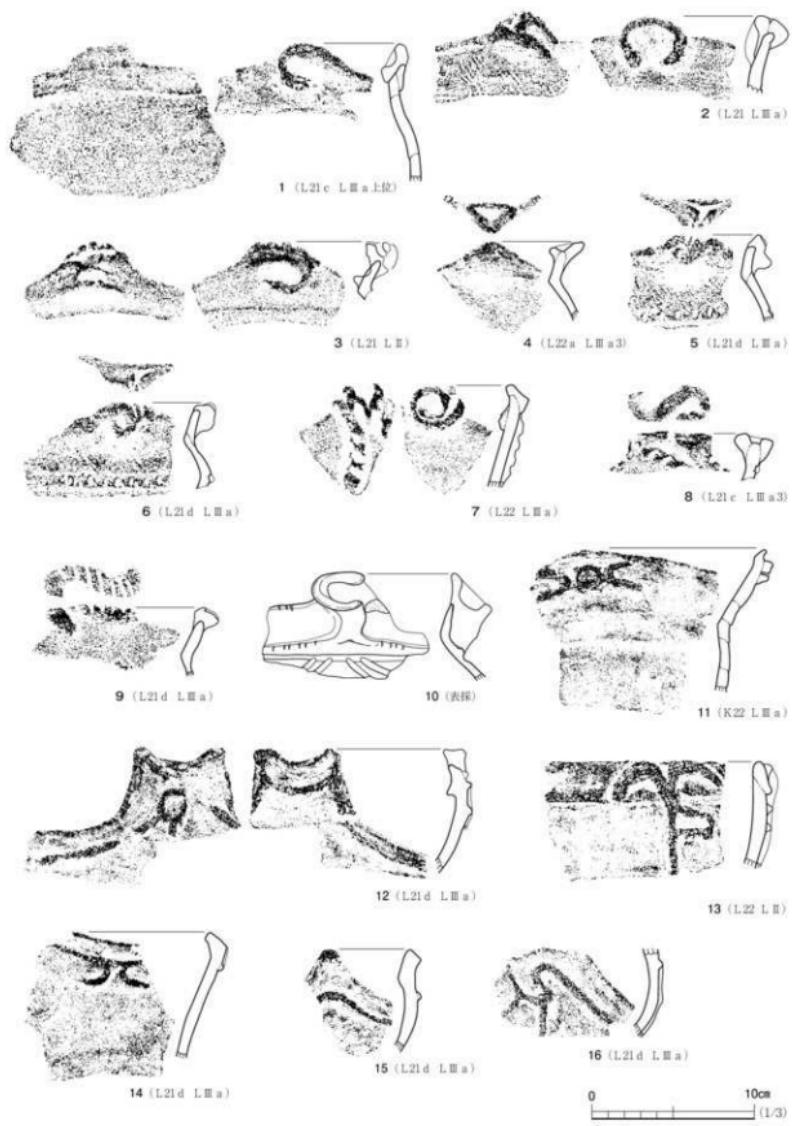


図182 遺物包含層出土繩文土器 (L112)



圖183 遺物包含層出土繩文土器 (L113)

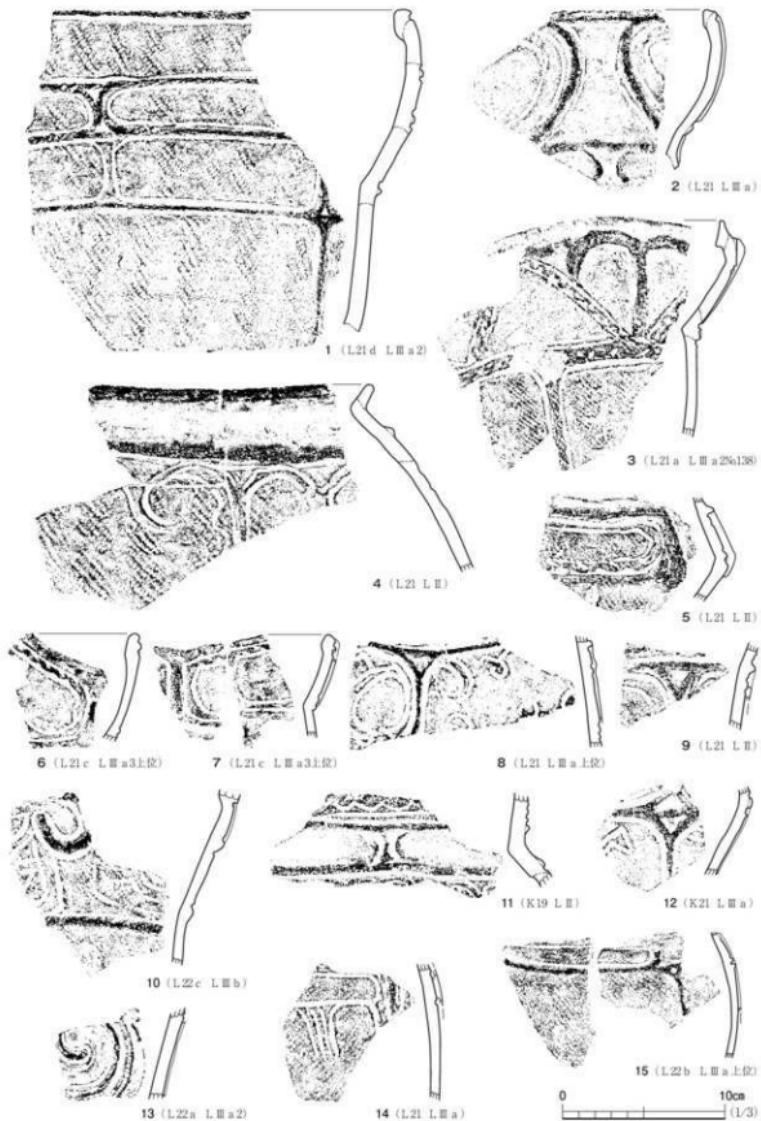


図184 遺物包含層出土繩文土器 (114)

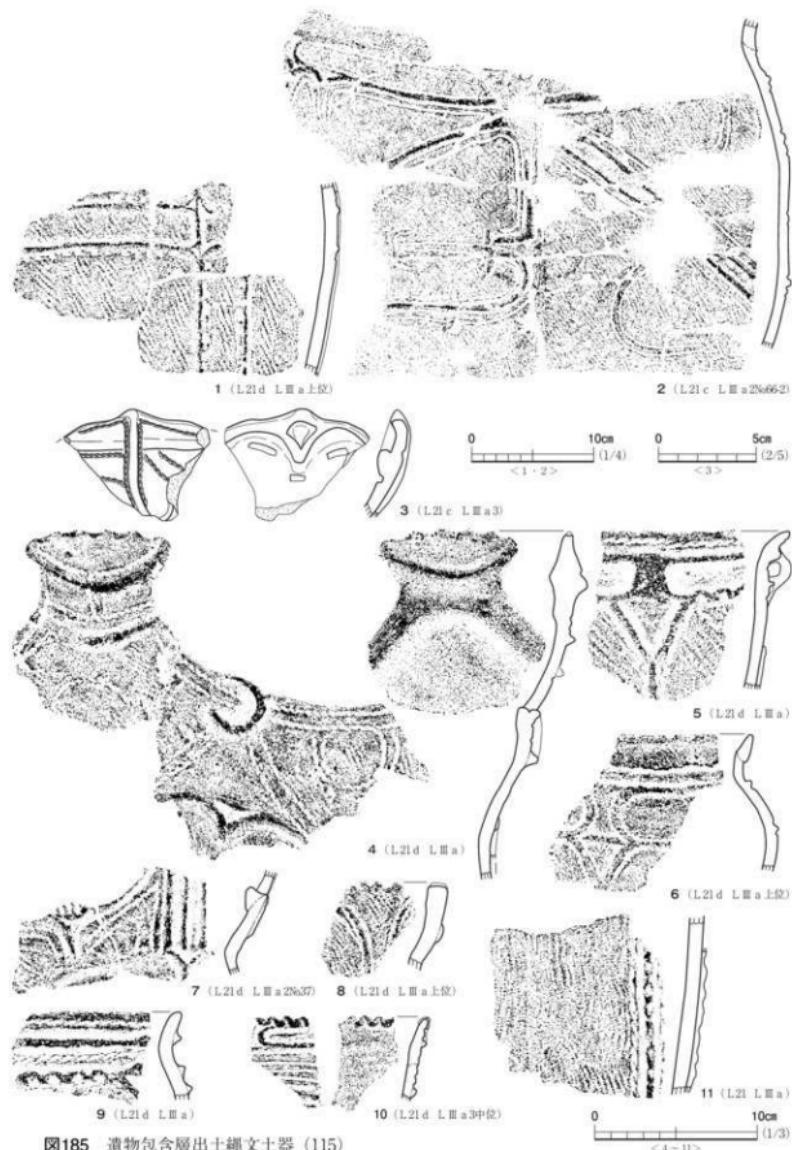


図185 遺物包含層出土土器 (115)

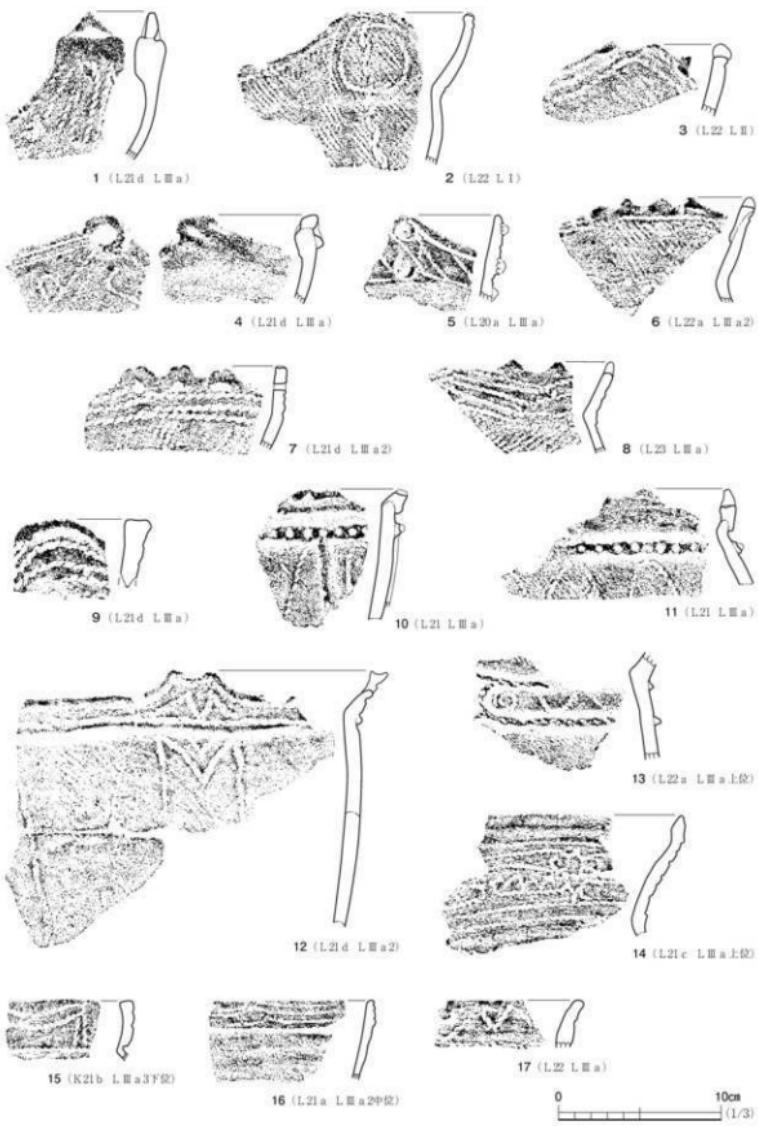


図186 遺物包含層出土繩文土器 (L116)

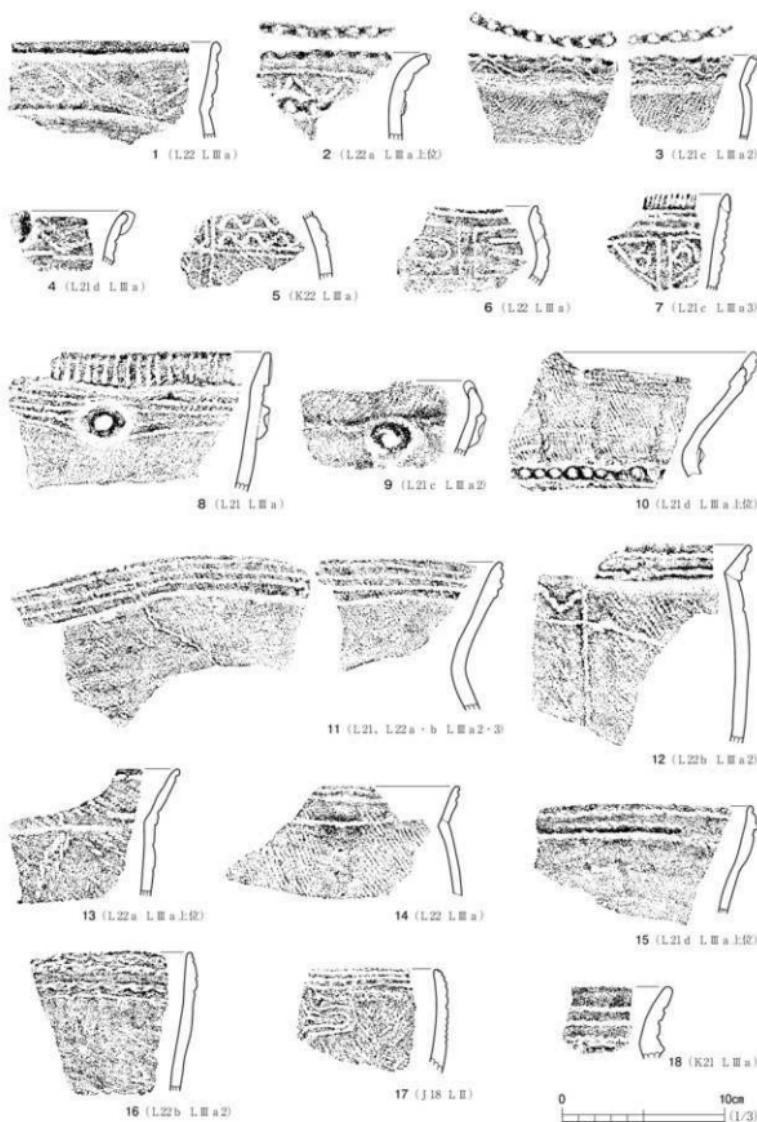


図187 遺物包含層出土縄文土器 (L117)

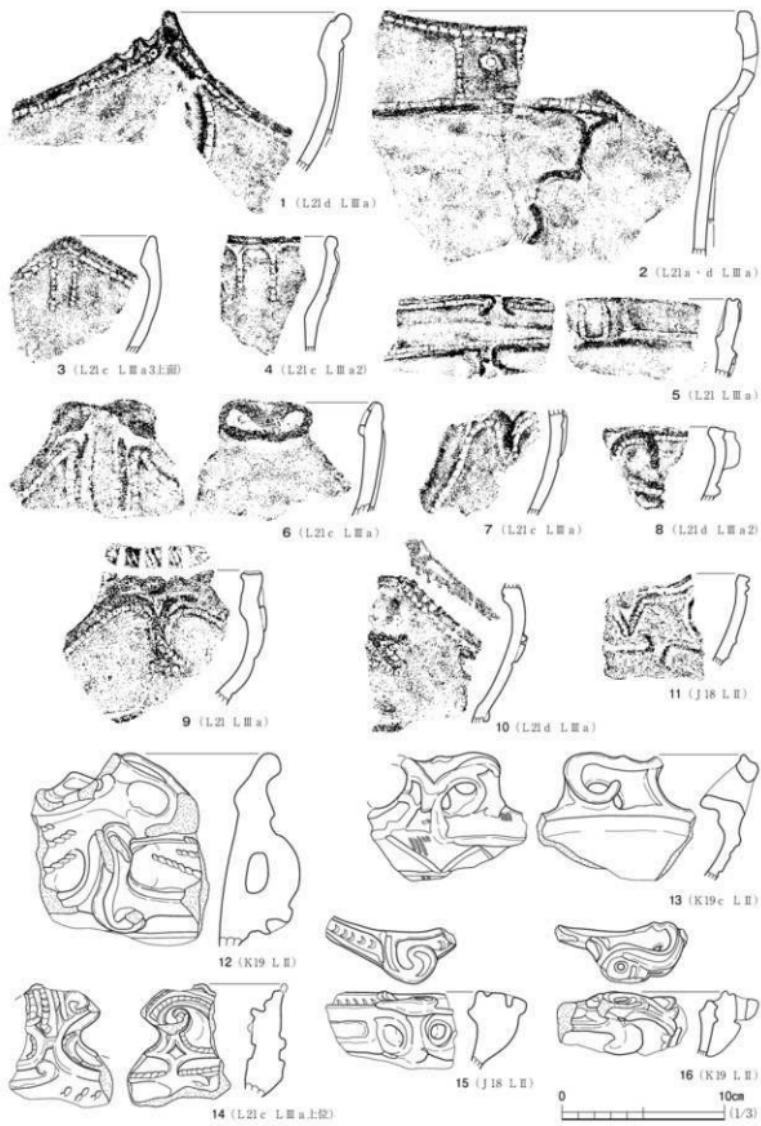
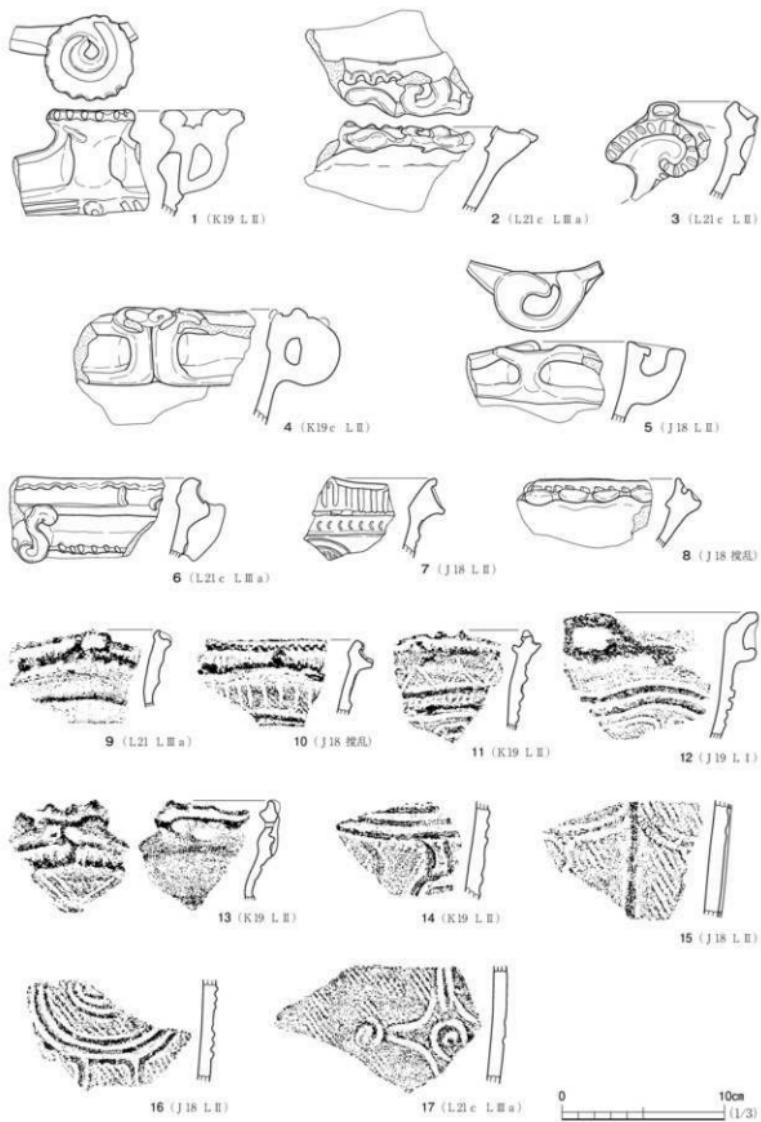


図188 遺物包含層出土繩文土器 (118)



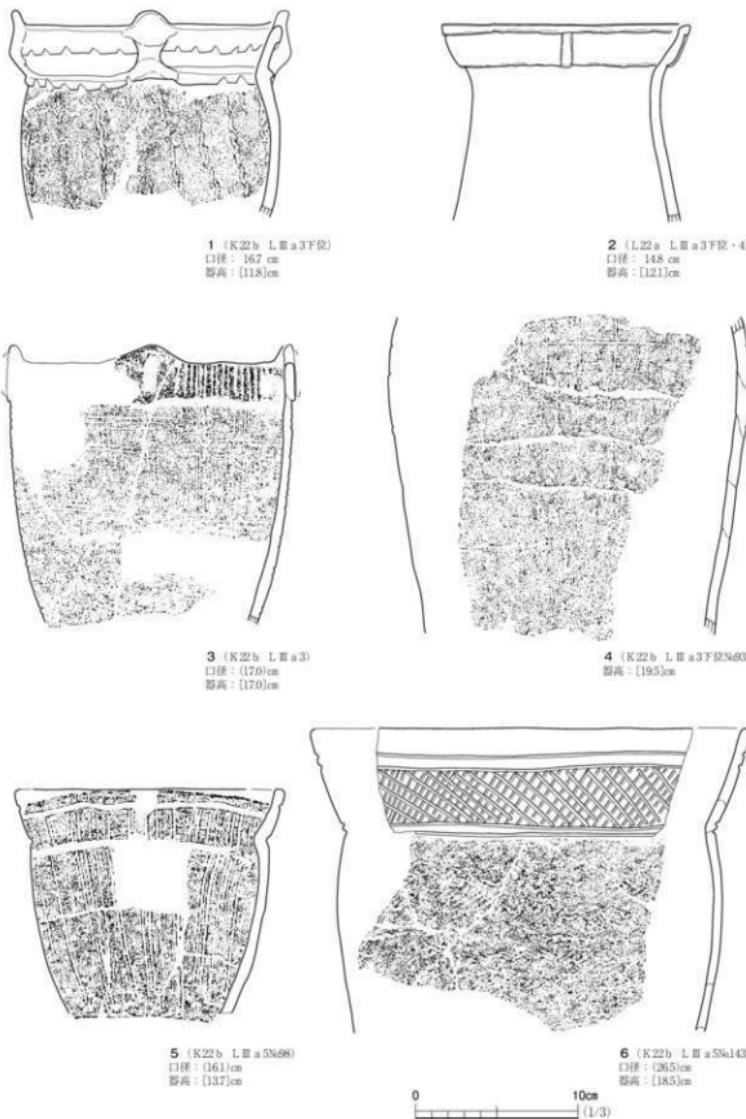


図190 遺物包含層出土繩文土器 (120)

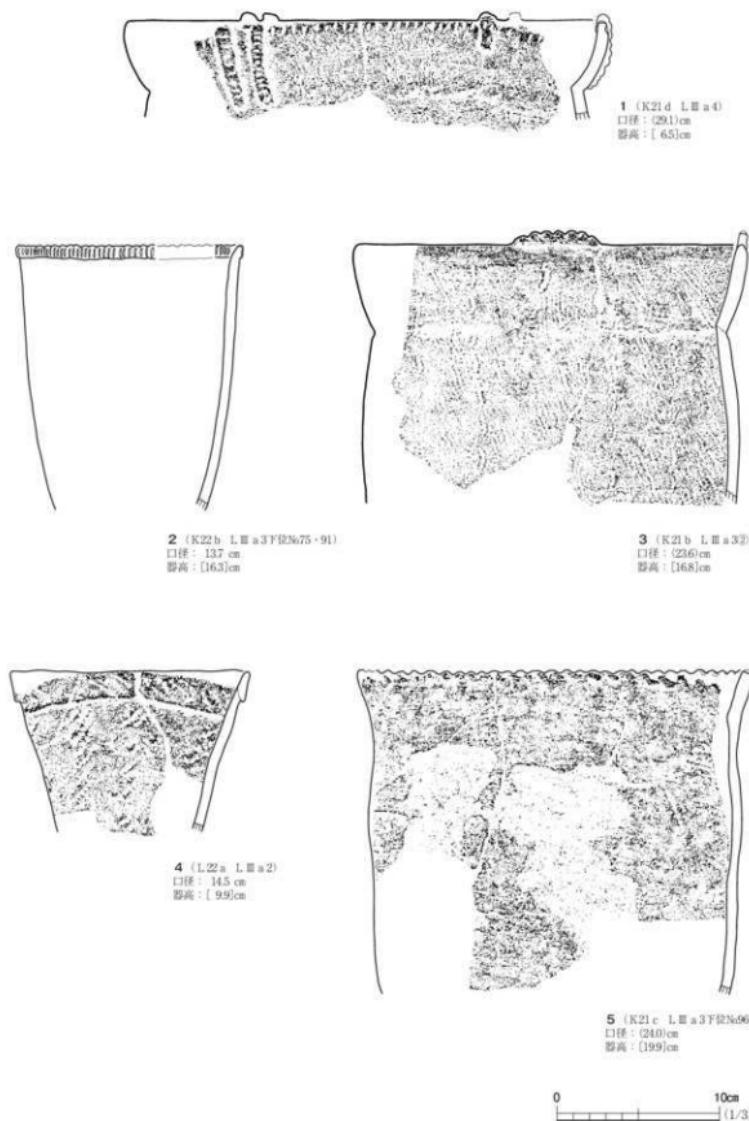


図191 遺物包含層出土縄文土器 (121)

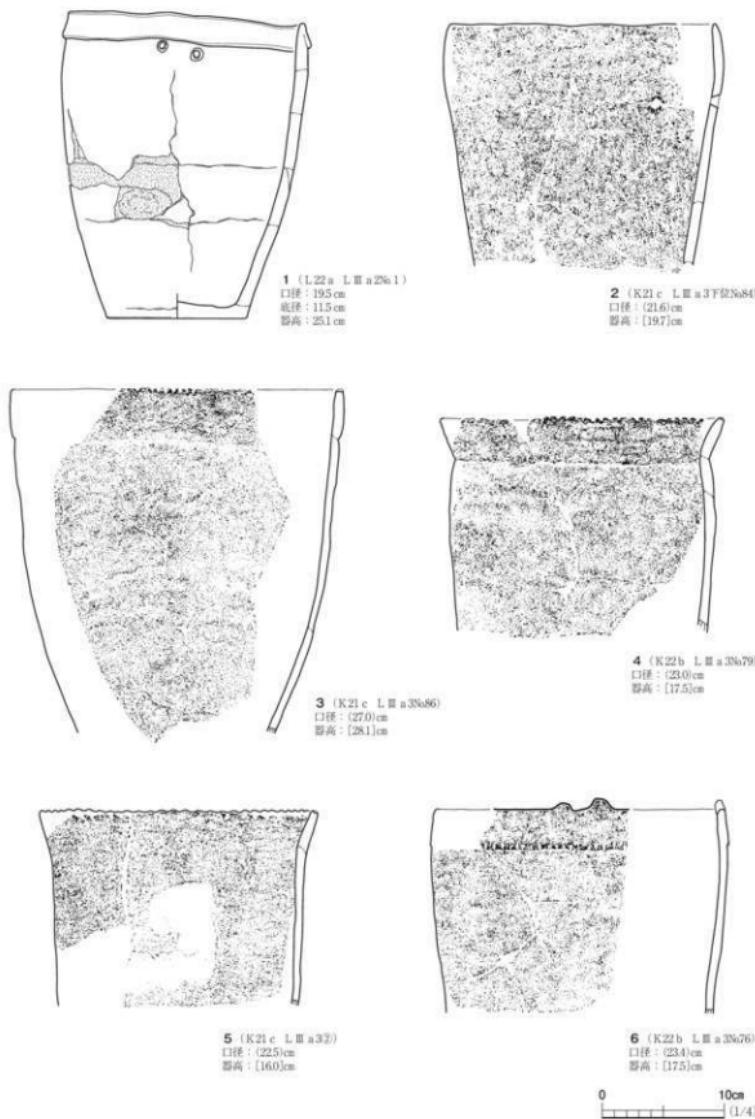


図192 遺物包含層出土繩文土器 (122)

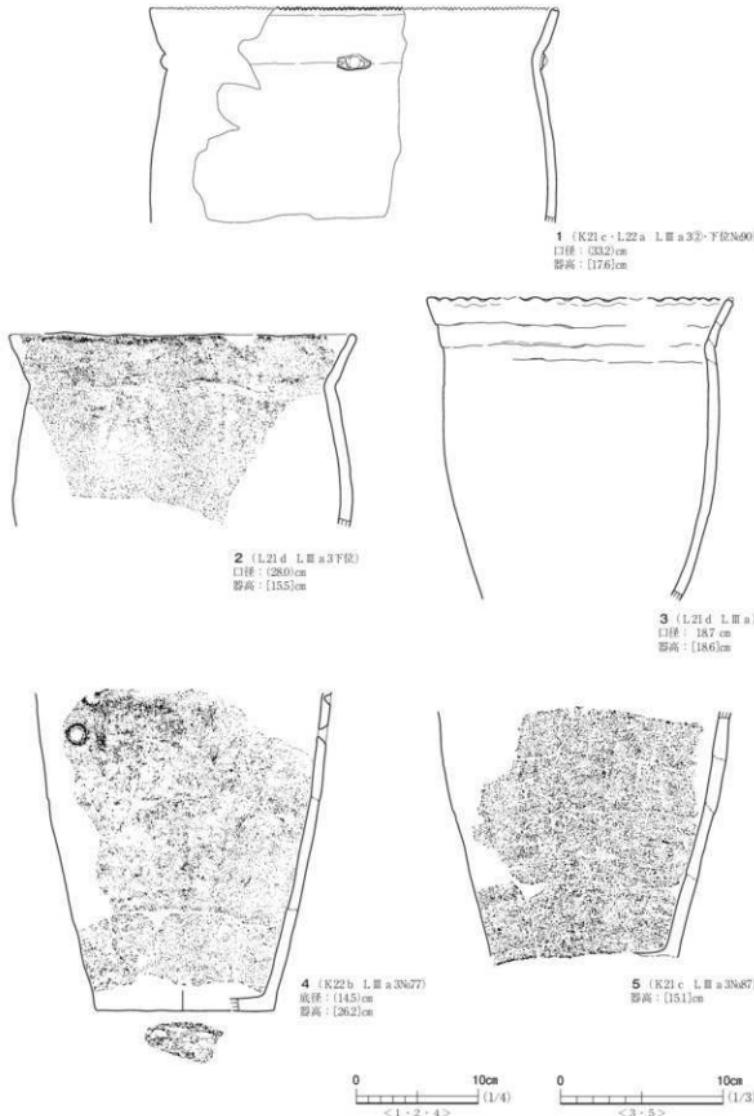


図193 遺物包含層出土繩文土器 (123)

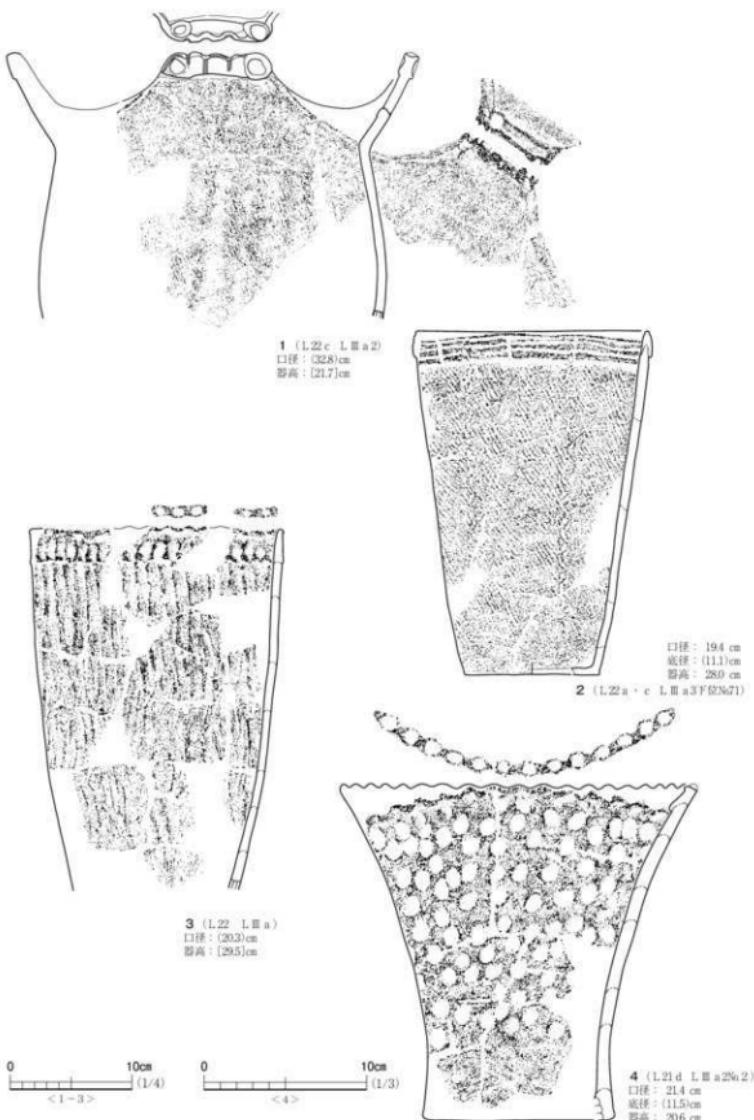


図194 遺物包含層出土繩文土器 (124)

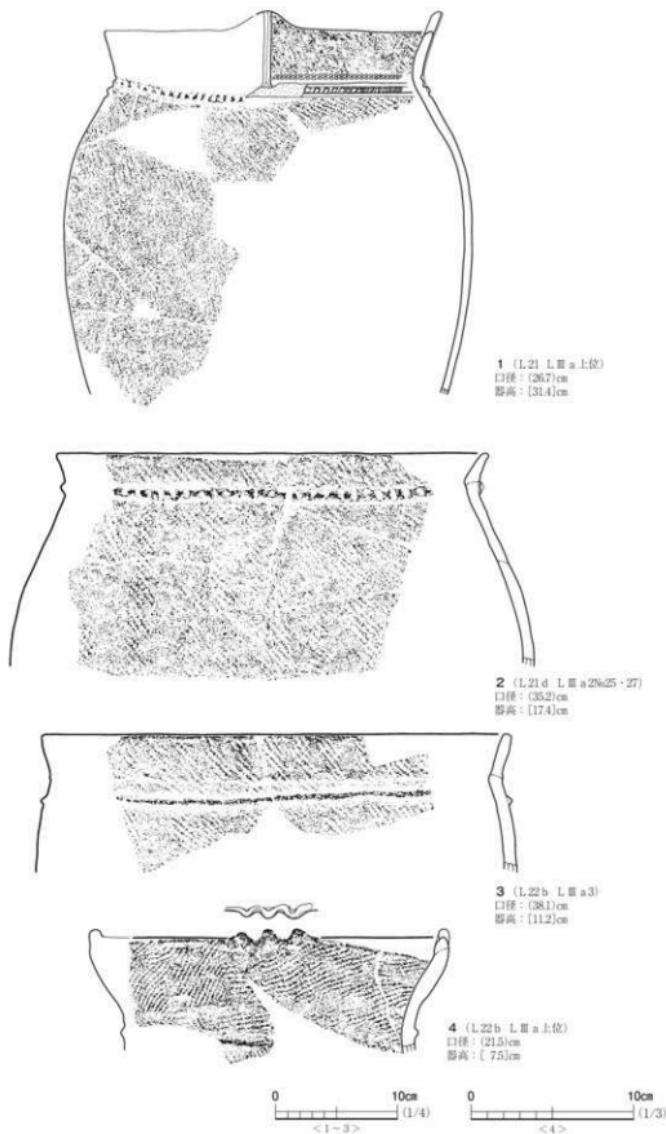


図195 遺物包含層出土繩文土器 (125)

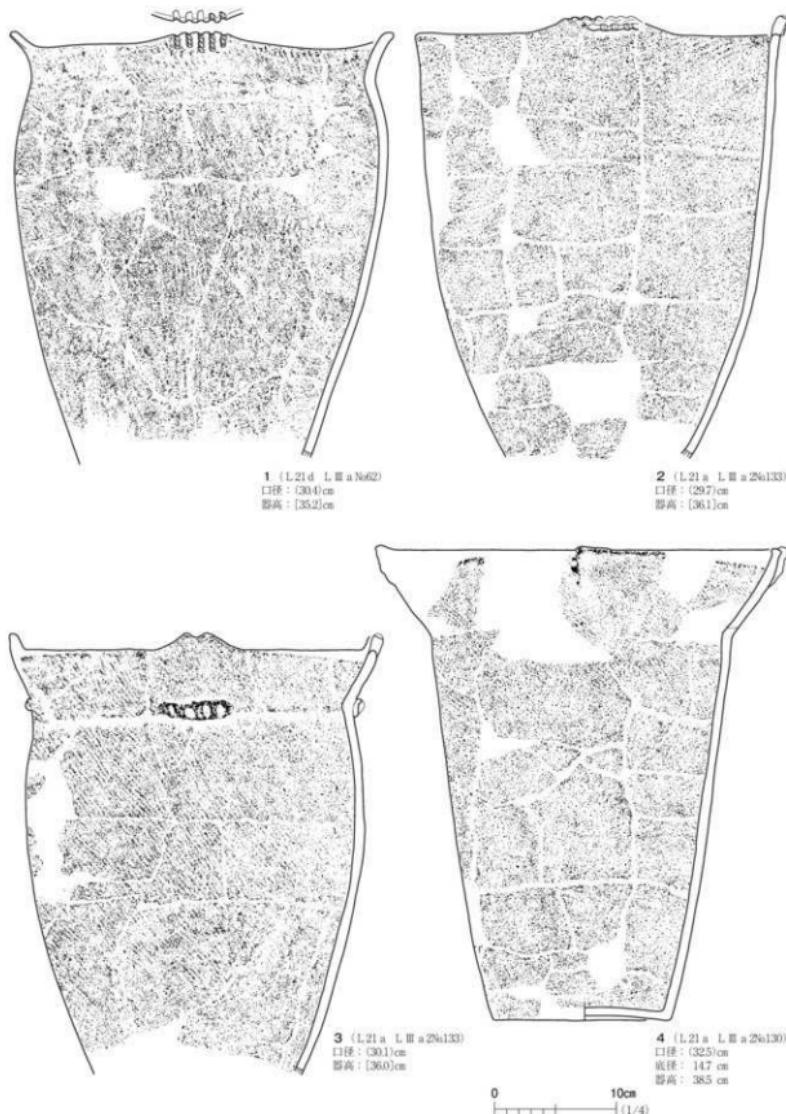


図196 遺物包含層出土繩文土器 (126)

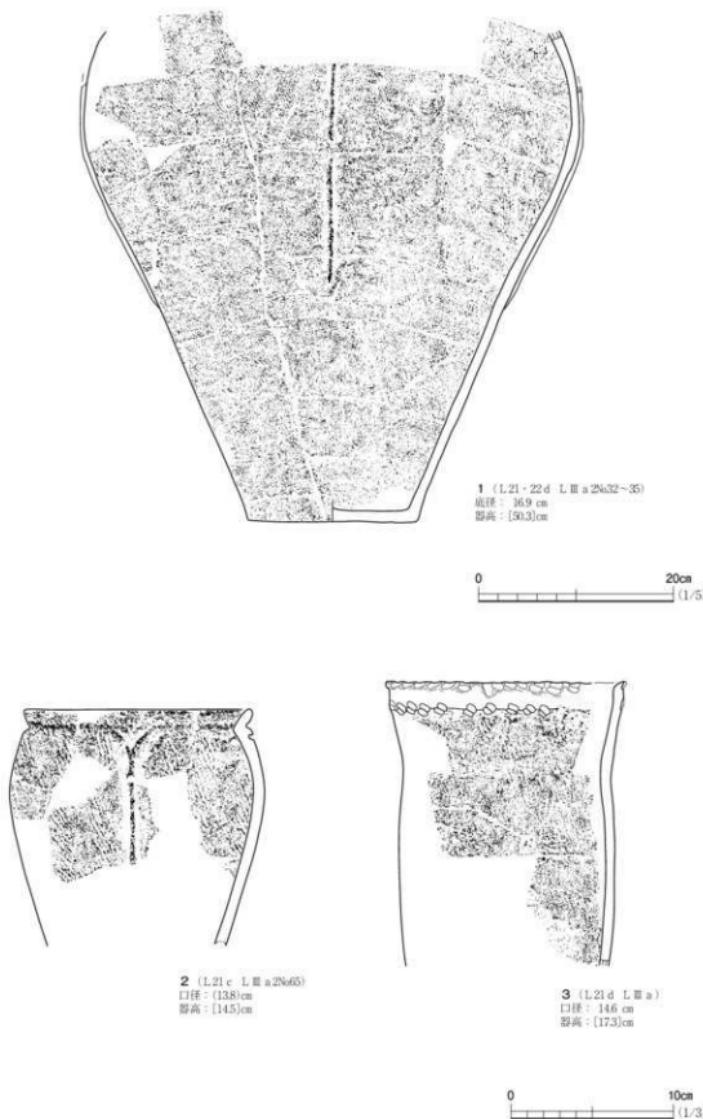


圖197 遺物包含層出土繩文土器 (127)



図198 遺物包含層出土繩文土器 (128)

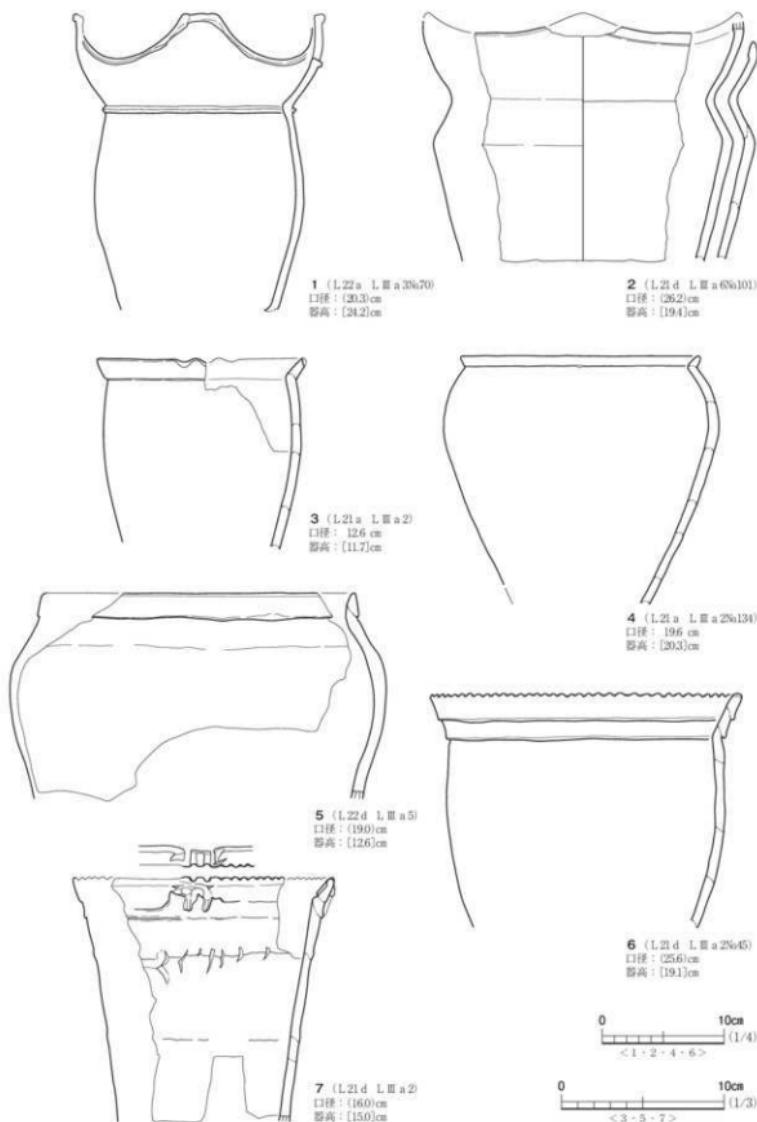


図199 遺物包含層出土繩文土器 (129)

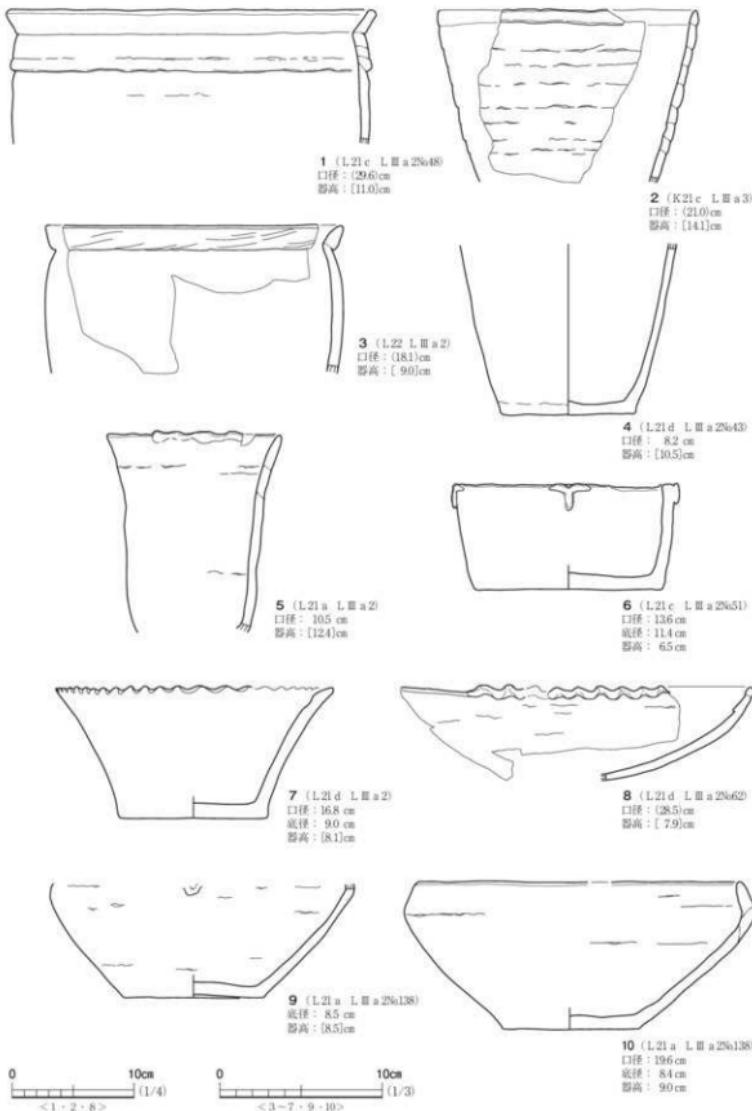


図200 遺物包含層出土繩文土器 (130)

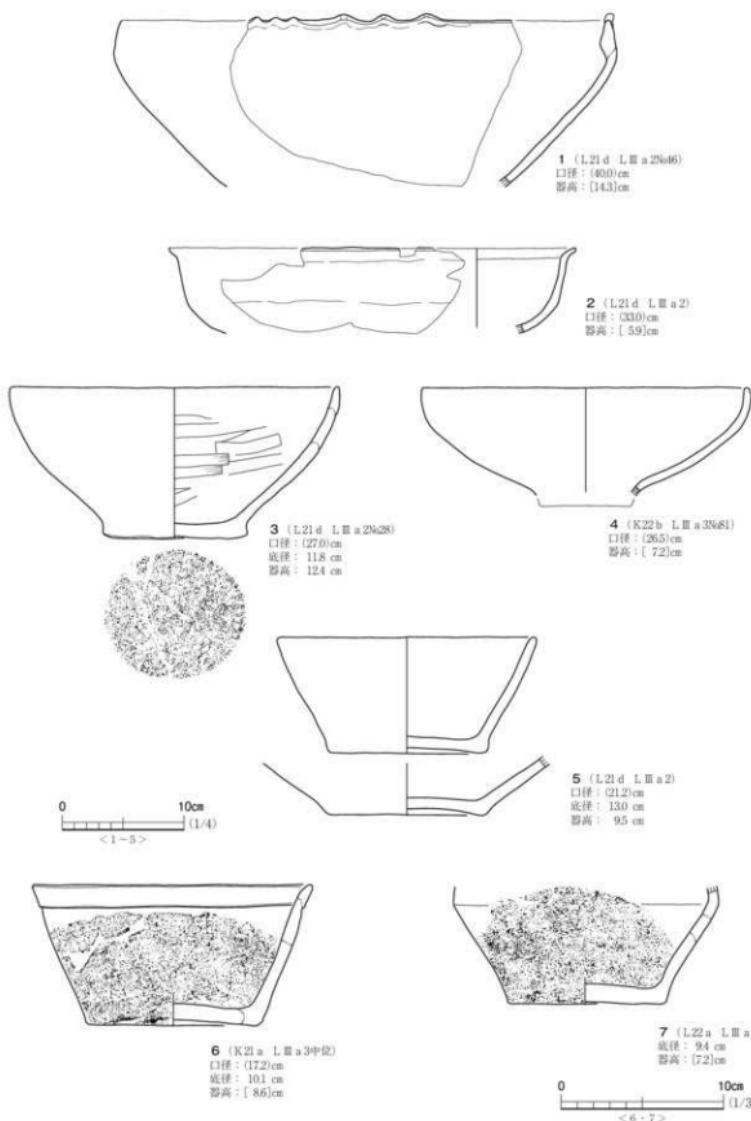


図201 遺物包含層出土繩文土器 (131)

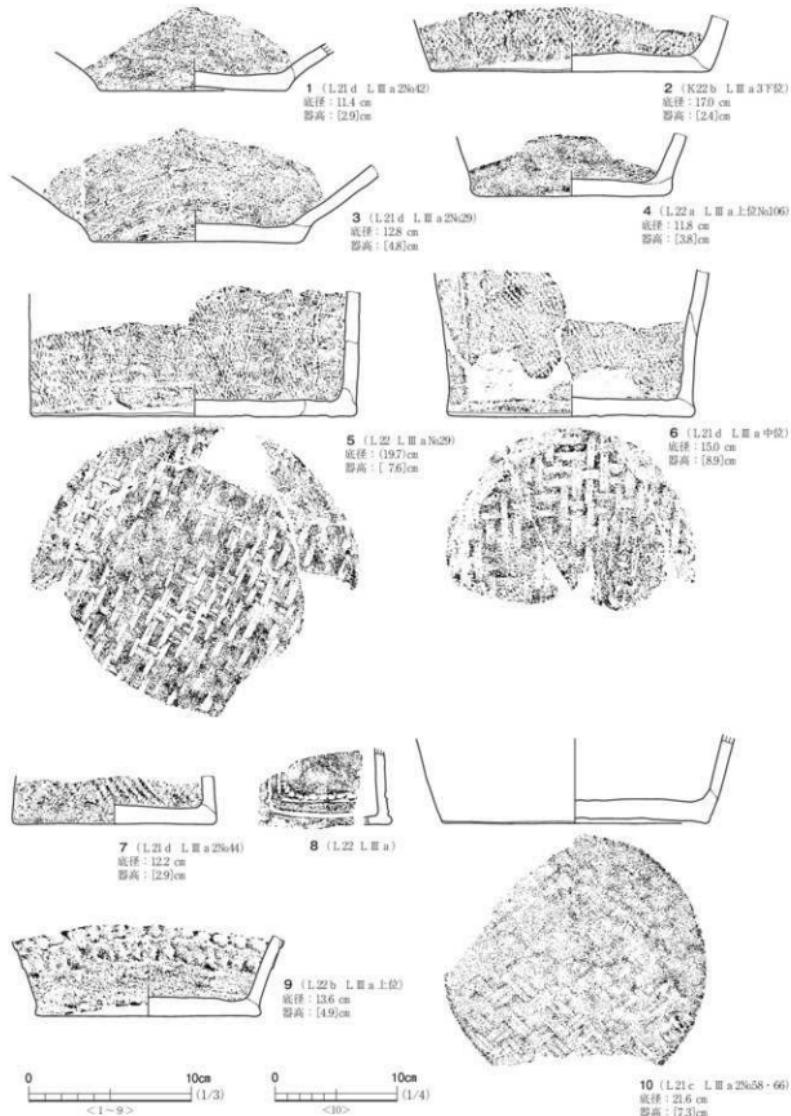


図202 遺物包含層出土繩文土器 (132)

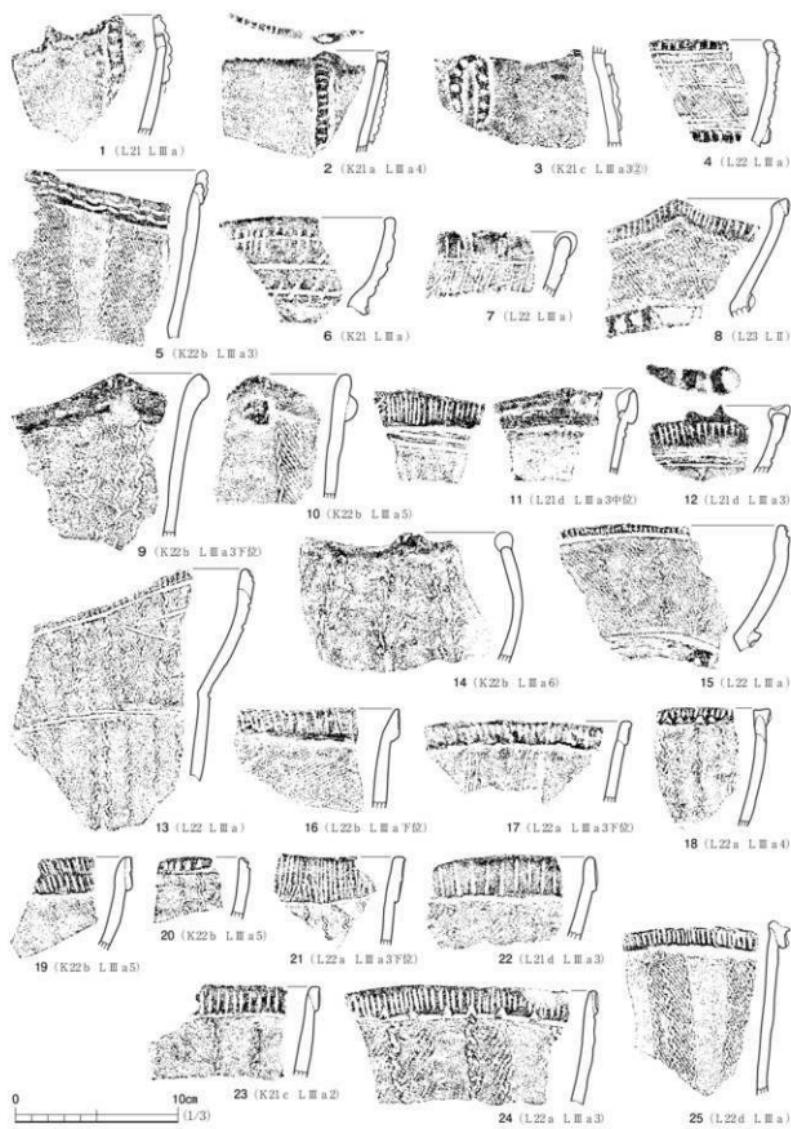


図203 遺物包含層出土土器 (133)



図204 遺物包含層出土縄文土器 (134)

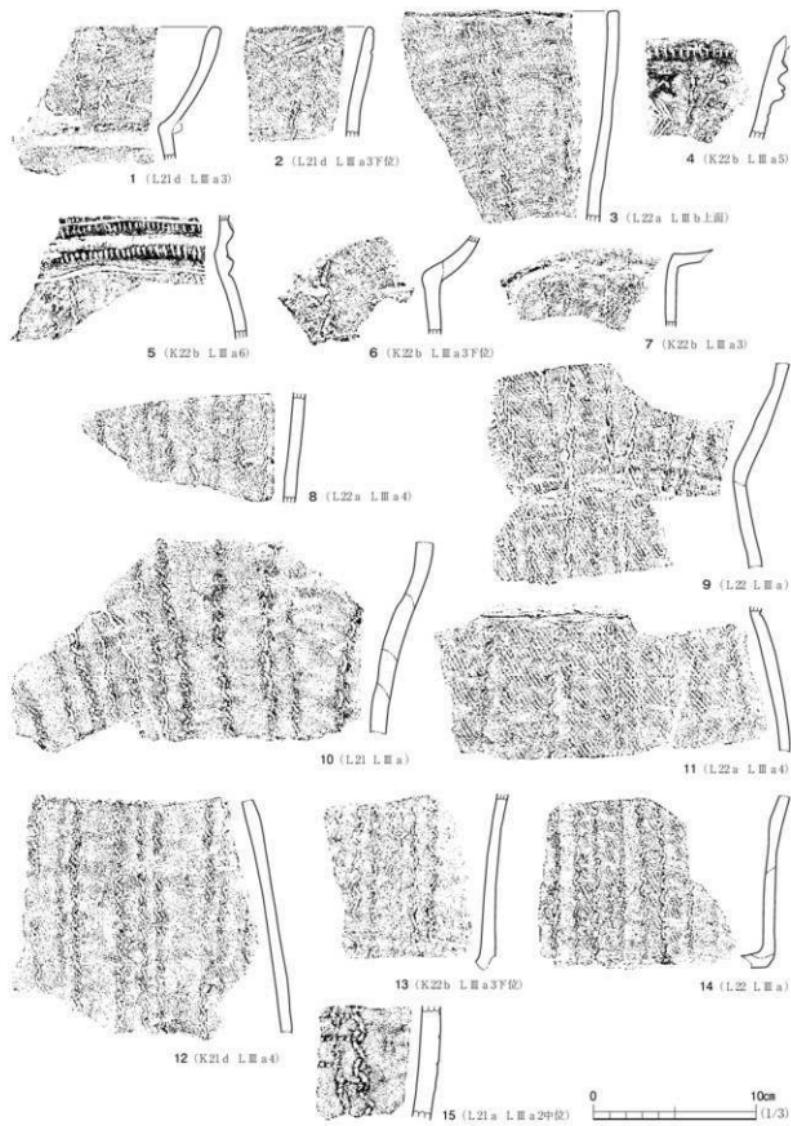


図205 遺物包含層出土繩文土器 (135)

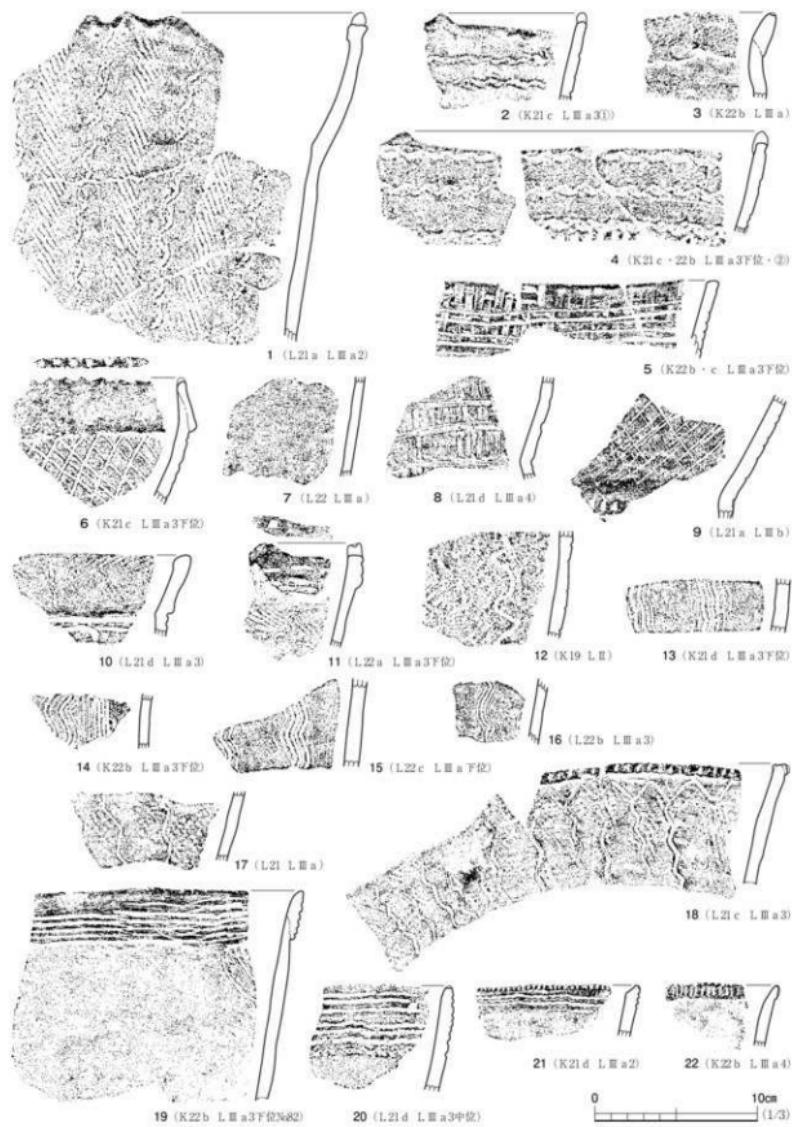


图206 遗物包含層出土繩文土器 (136)

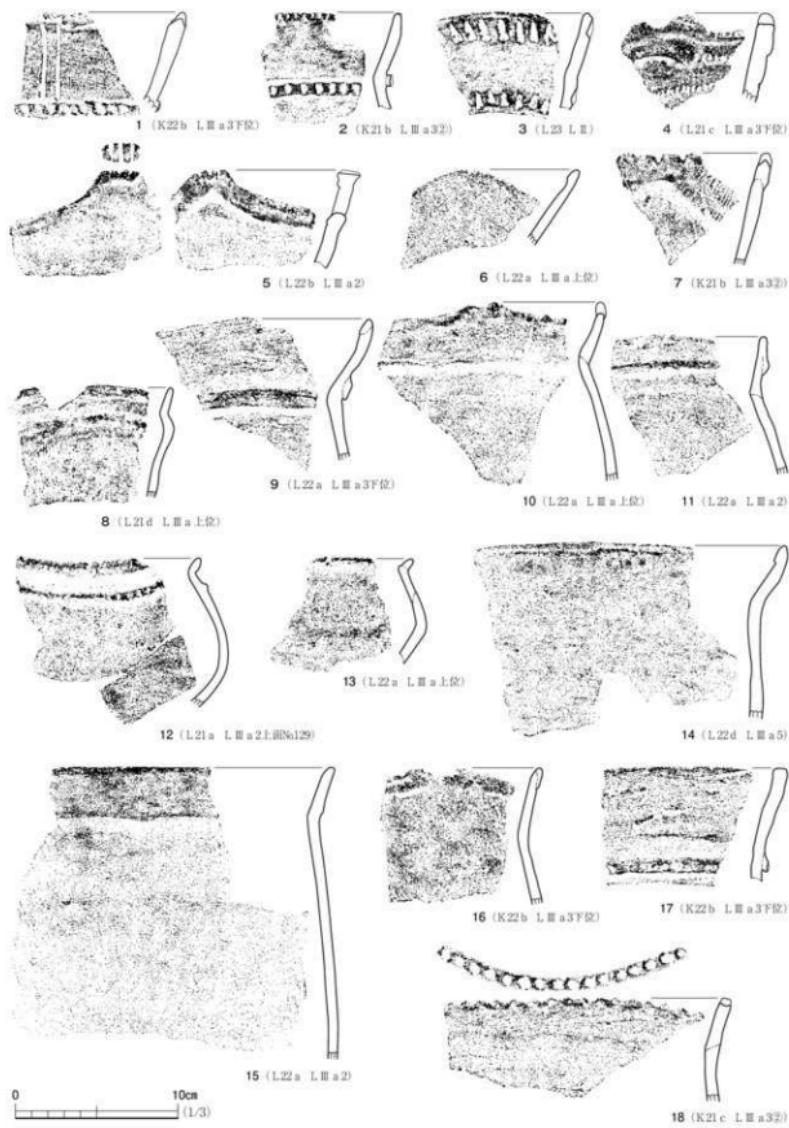


図207 遺物包含層出土繩文土器 (137)

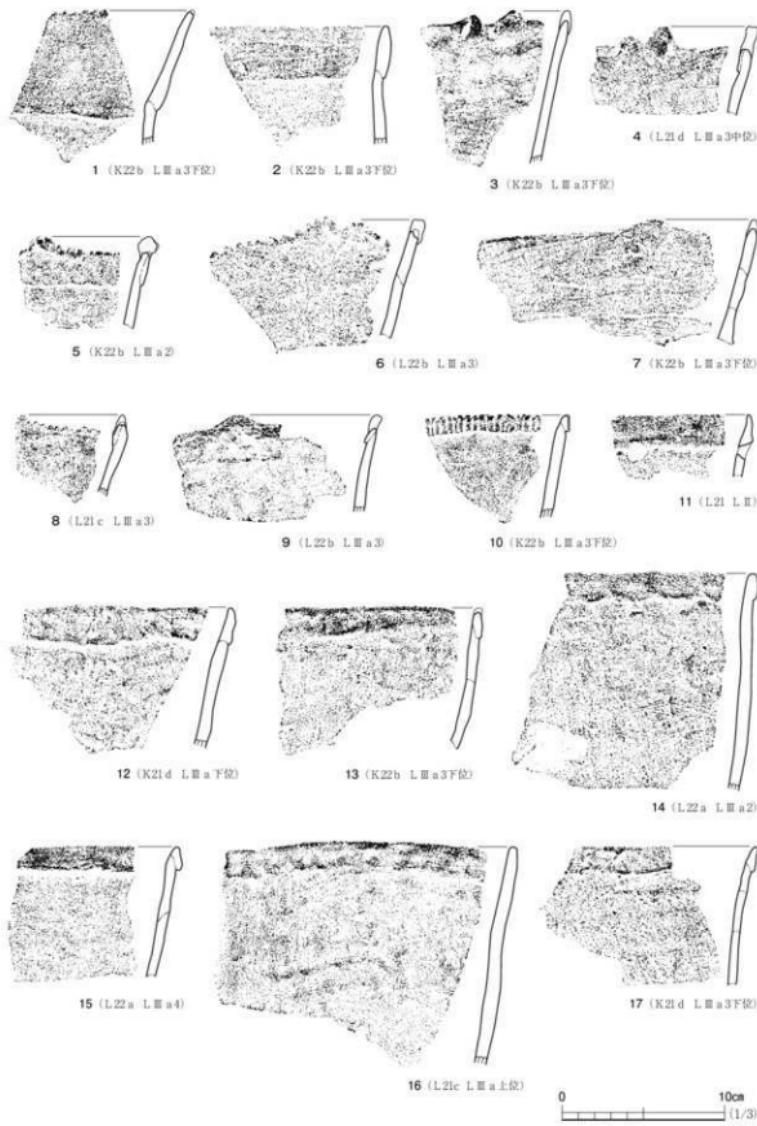


図208 遺物包含層出土繩文土器 (138)

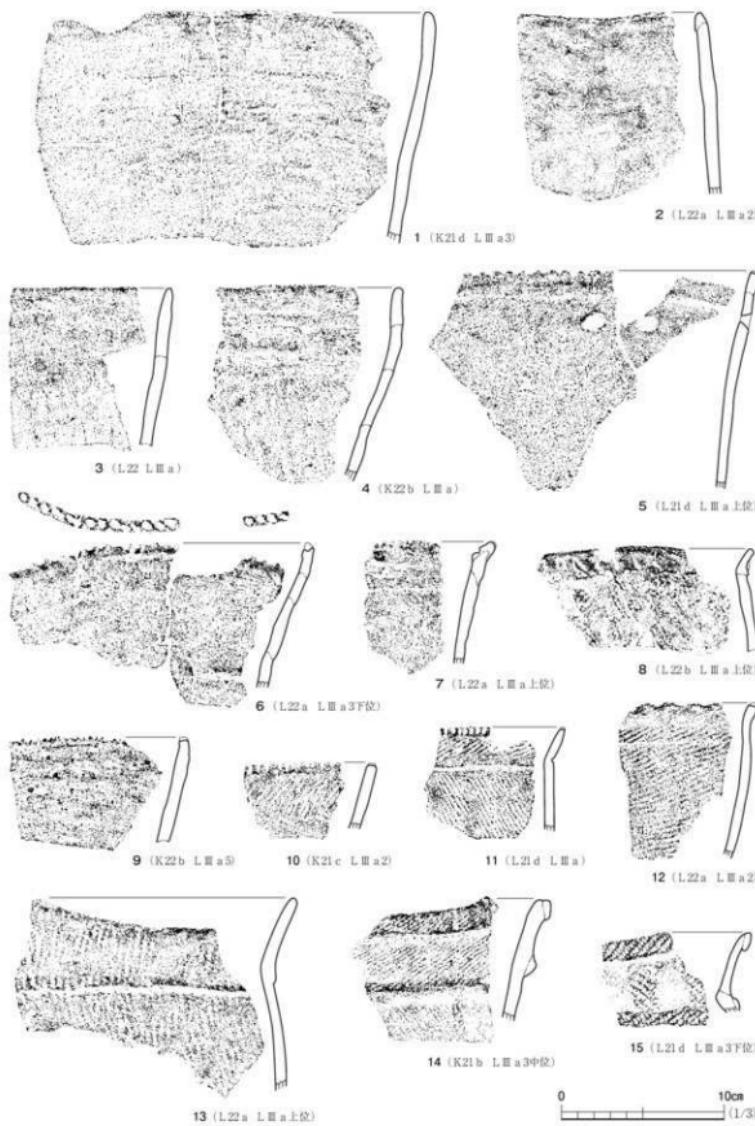


図209 遺物包含層出土縄文土器 (139)

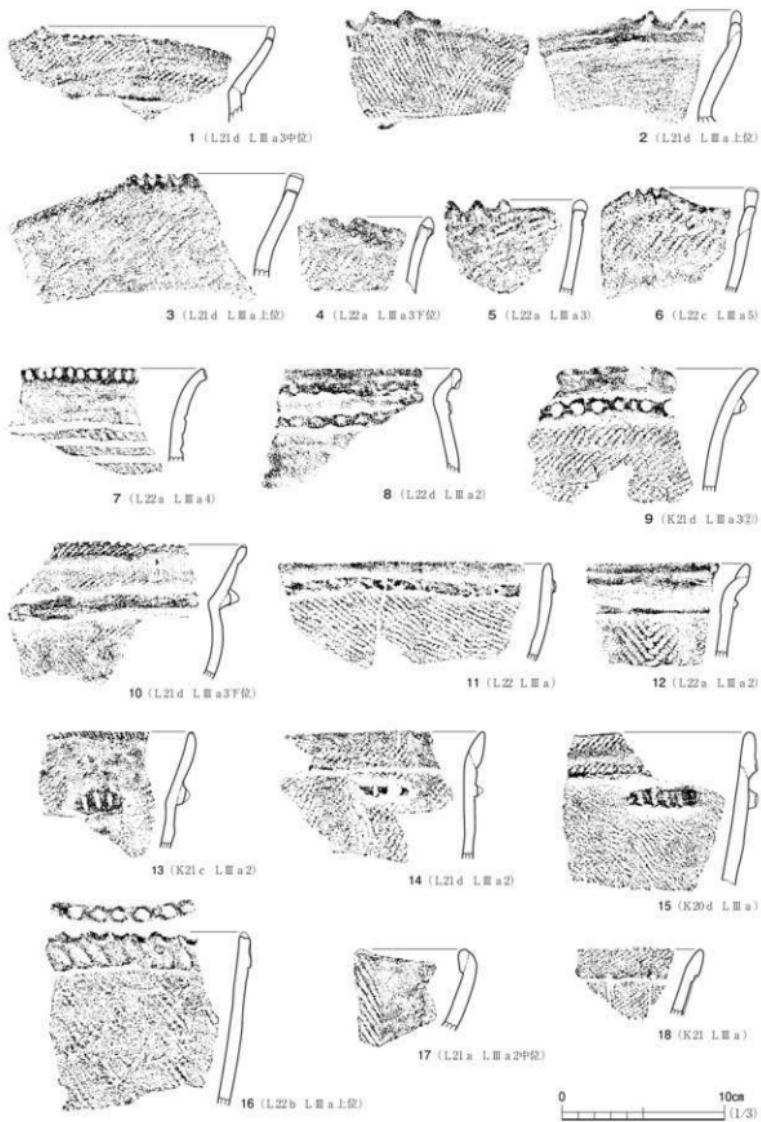


図210 遺物包含層出土繩文土器 (140)

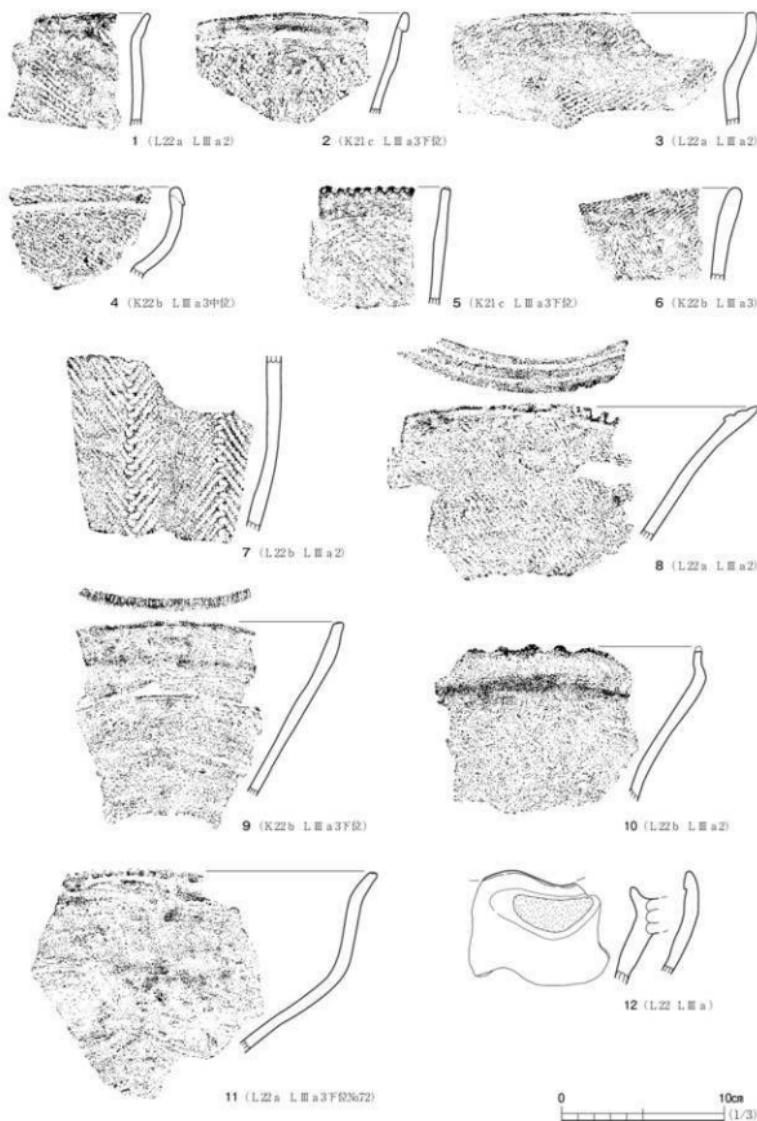


図211 遺物包含層出土繩文土器 (141)

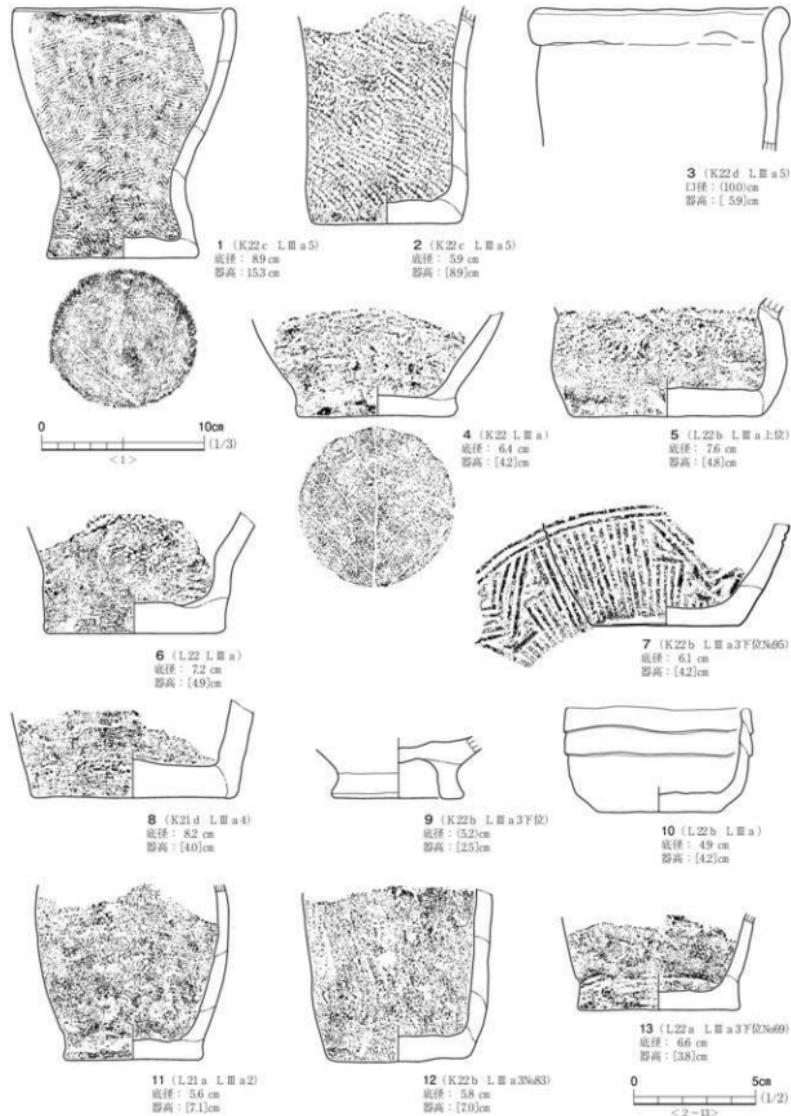


図212 遺物包含層出土繩文土器 (142)



図213 遺物包含層出土縄文土器 (143)・土製品 (1)

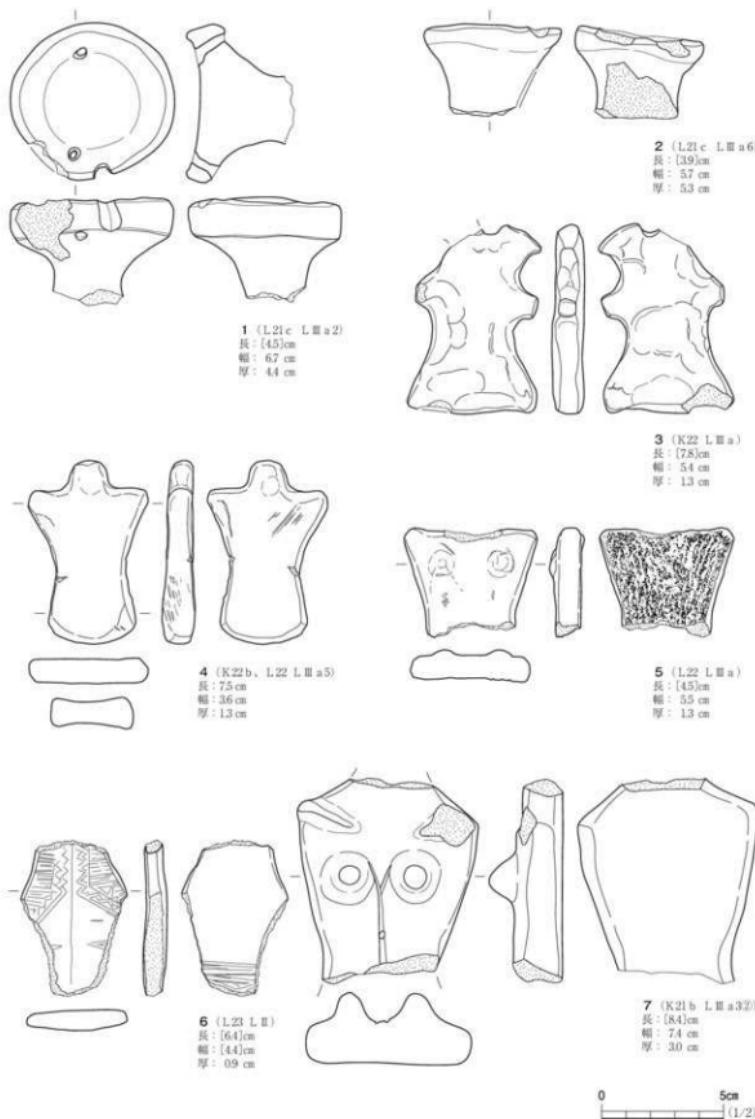


図214 遺物包含層出土土製品（2）

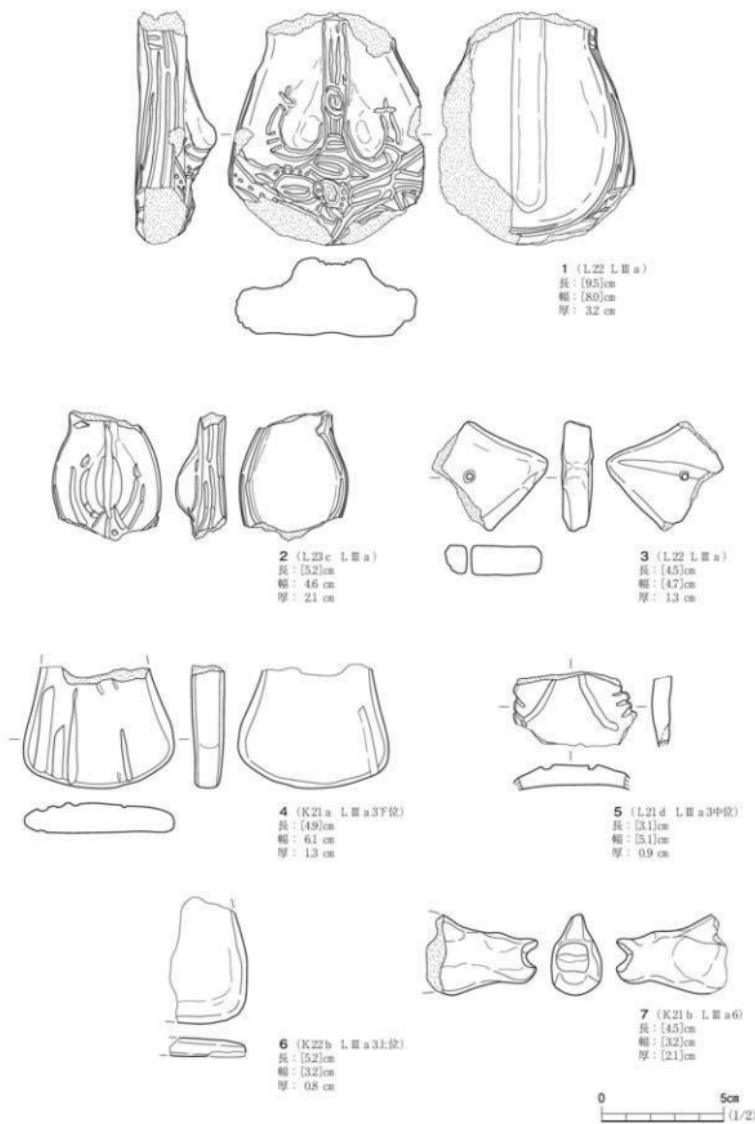


図215 遺物包含層出土土製品（3）

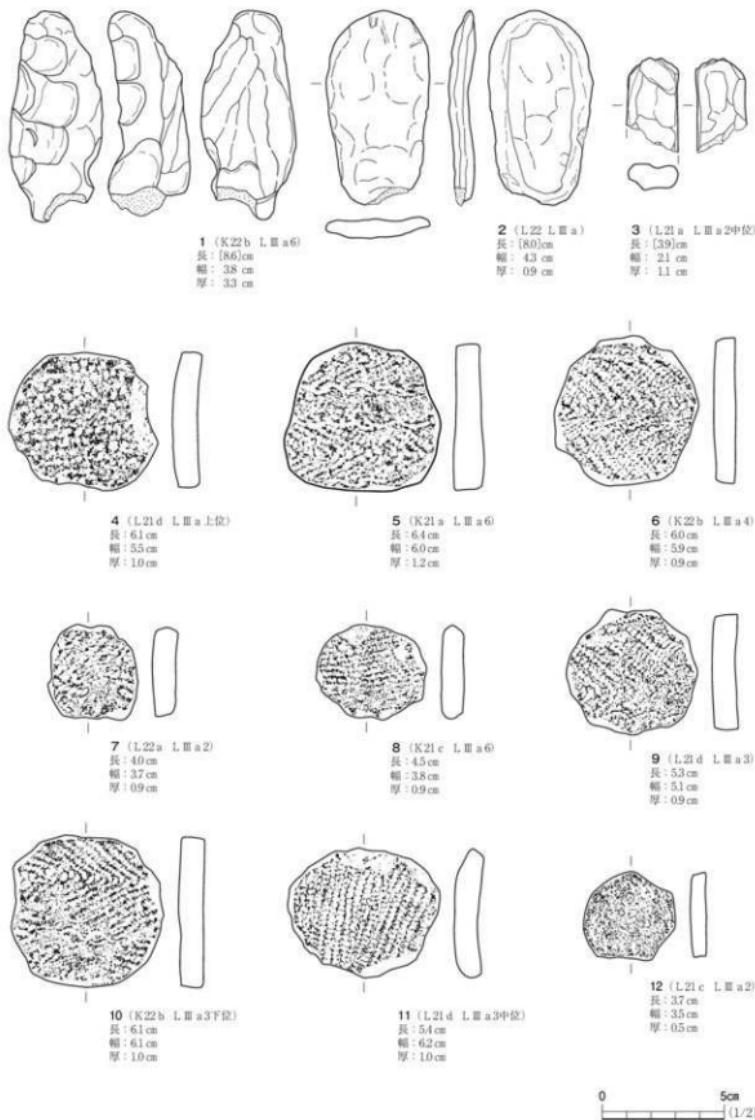


図216 遺物包含層出土土製品（4）

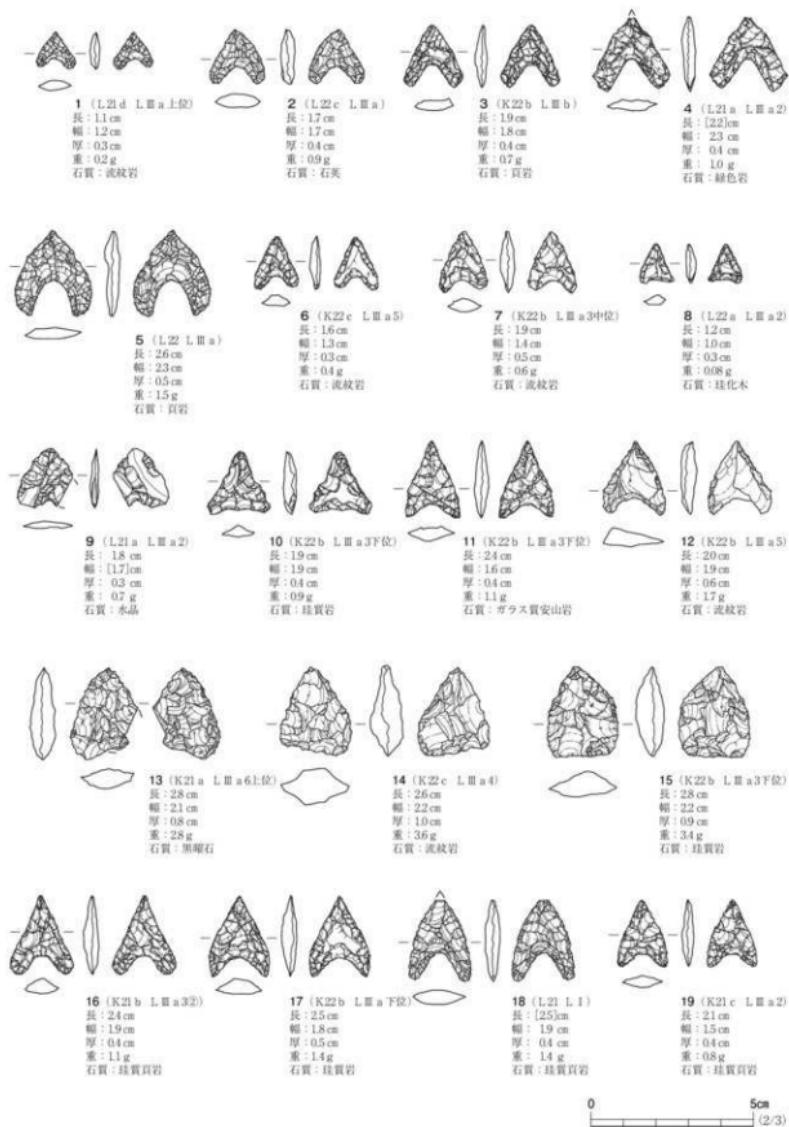


圖217 遺物包含層出土石器（1）

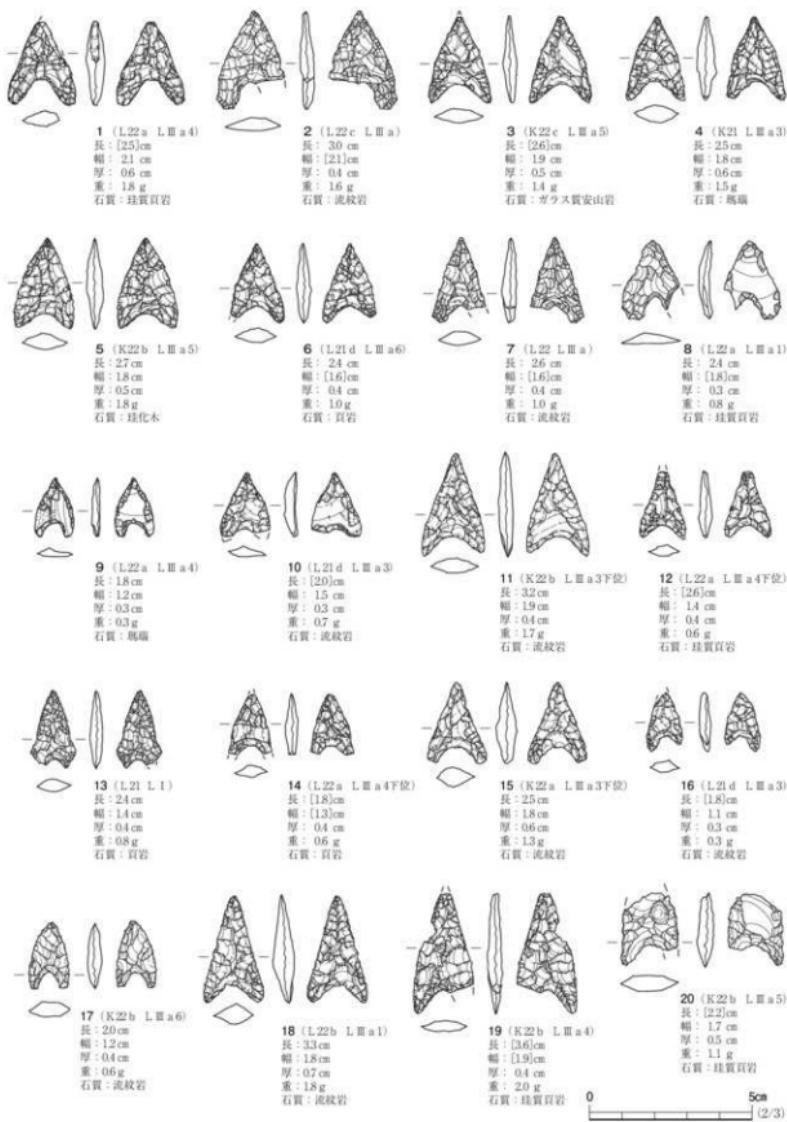


図218 遺物包含層出土石器（2）



圖219 遺物包含層出土石器（3）

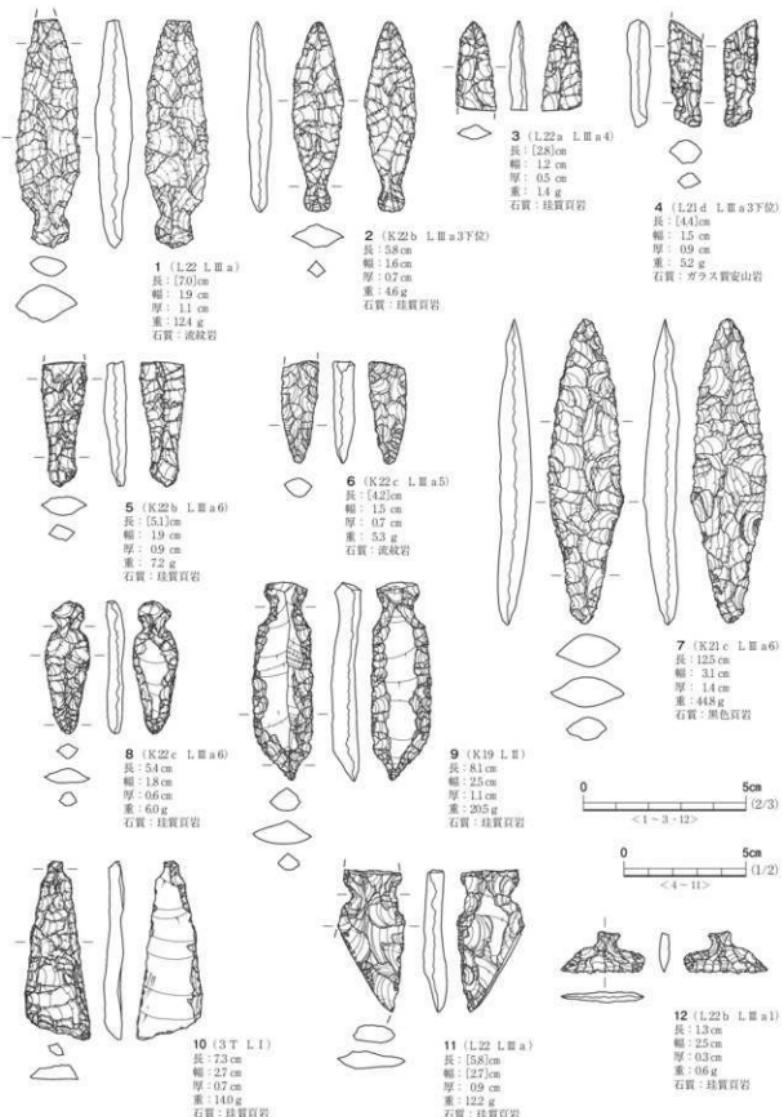


図220 遺物包含層出土石器（4）

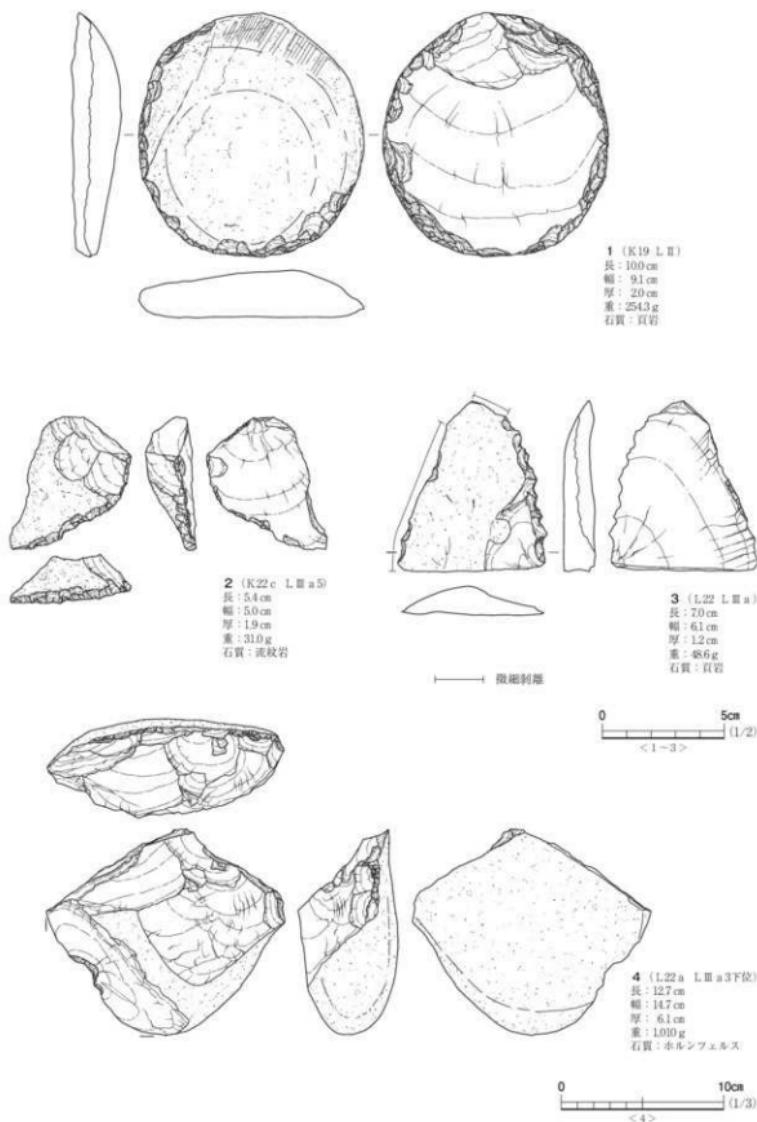


図221 遺物包含層出土石器（5）

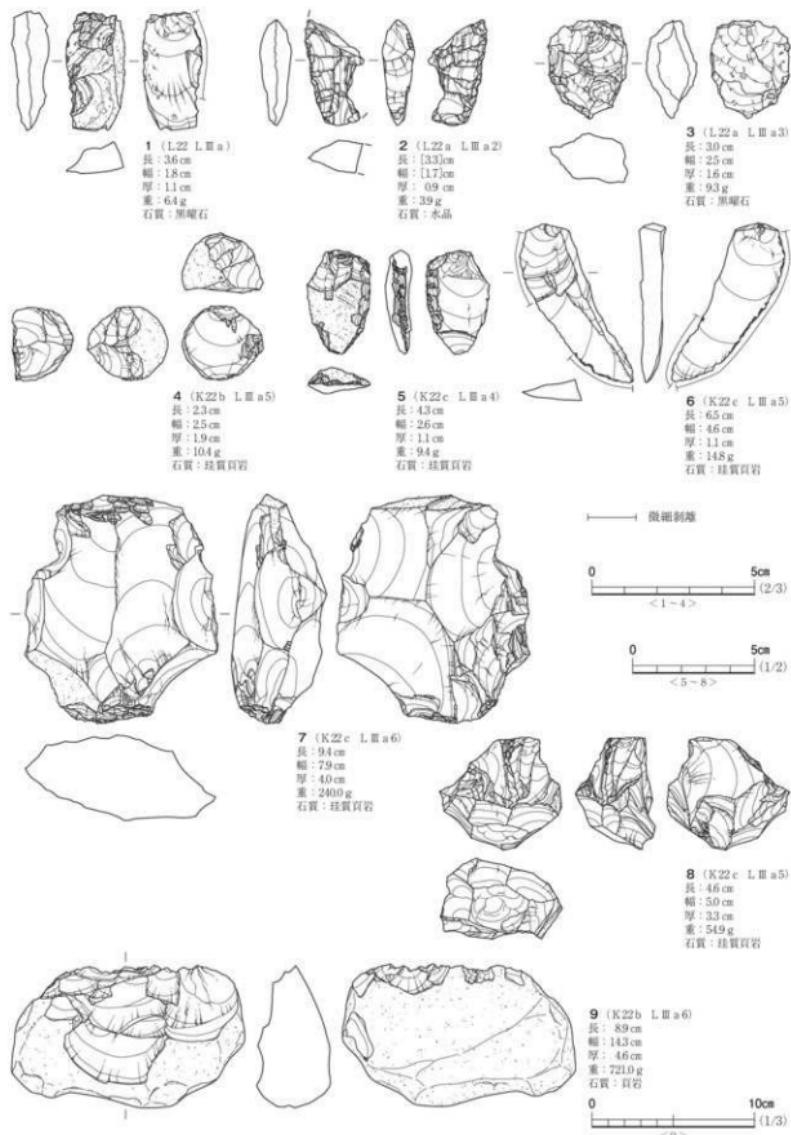


図222 遺物包含層出土石器（6）

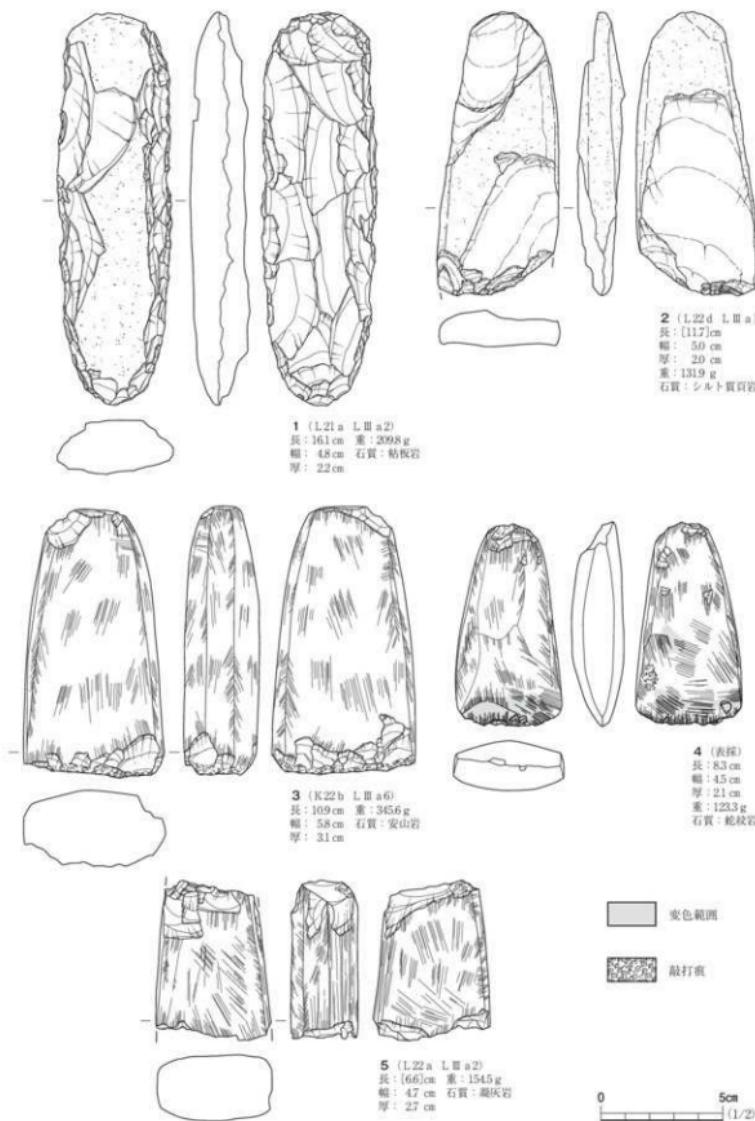


圖223 遺物包含層出土石器 (7)

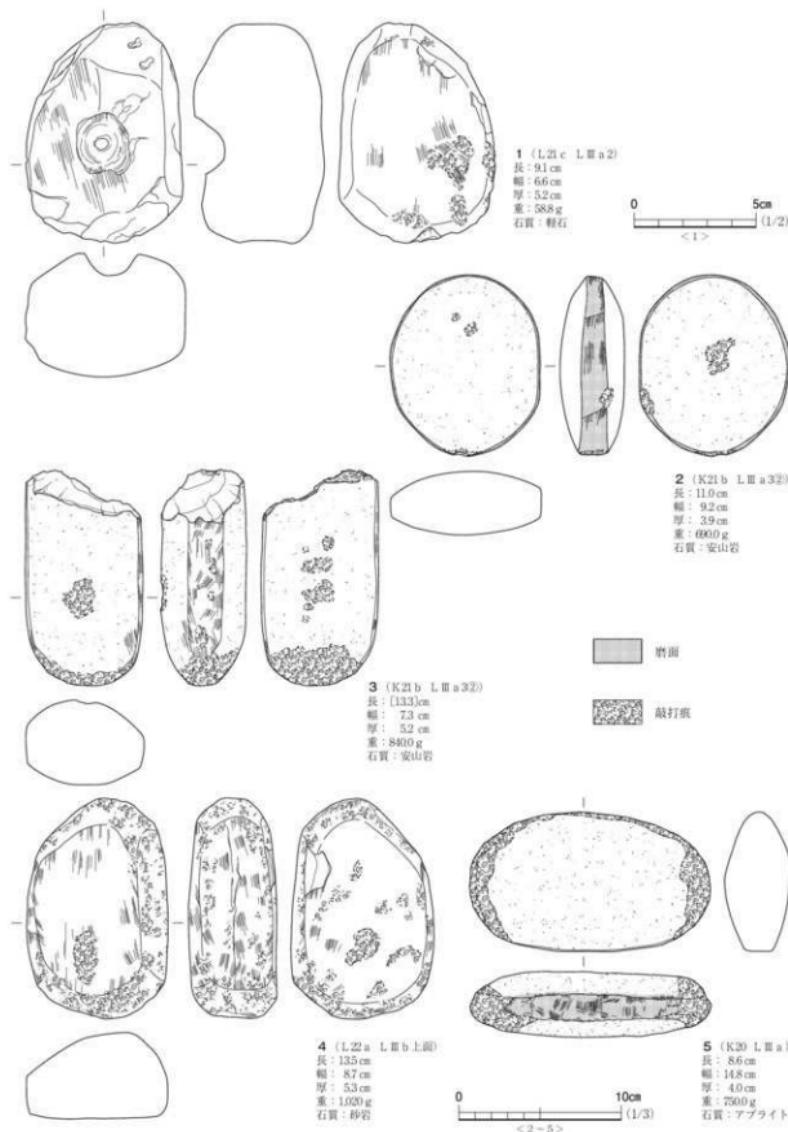


図224 遺物包含層出土石器 (8)

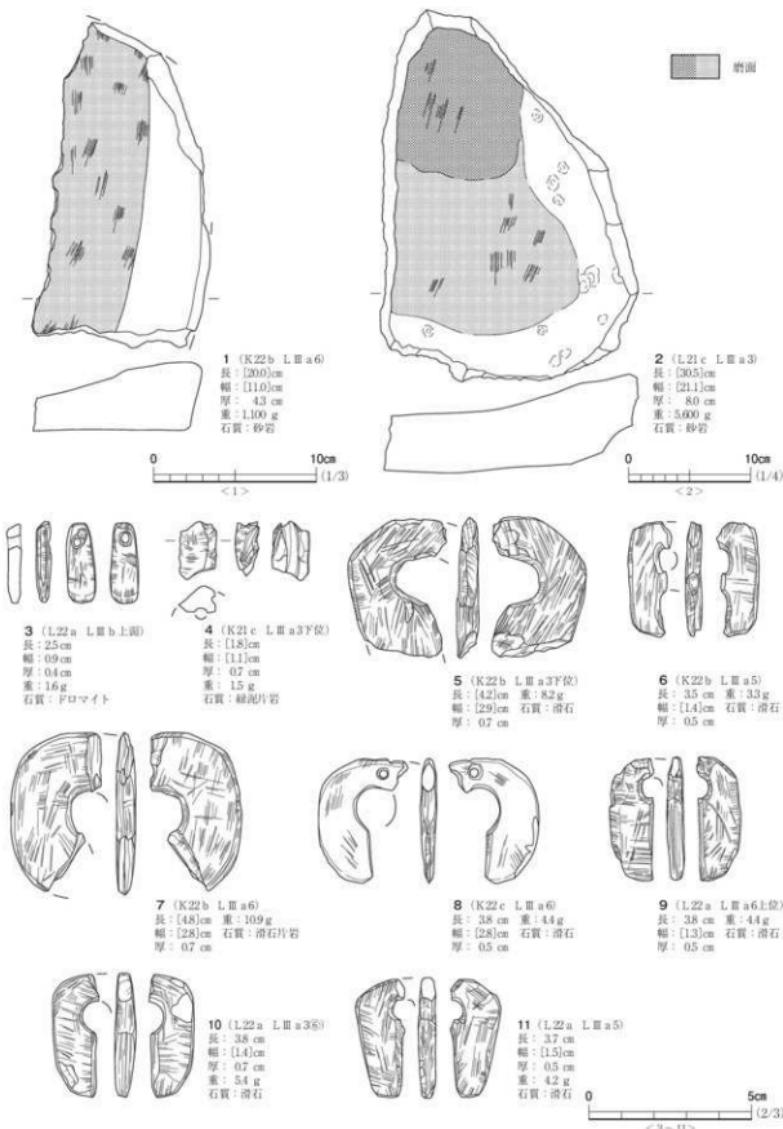


図225 遺物包含層出土石器 (9)

第2章 総括

今回調査した遺構は、堅穴住居跡11軒、掘立柱建物跡6棟、土坑15基、溝跡3条、小穴9基、土器埋設遺構1基、特殊遺構1基、遺物包含層1箇所である。遺物は、土師器4,643点、須恵器702点、瓦86点、陶器3点、羽口18点、鉄製品8点、縄文土器56,429点、石器・石製品1,250点、土製品74点、鉄滓9,989g、動物骨片1,097gが出土している。おもな遺構、遺物の年代は縄文時代および平安時代であり、本章ではこの二つの時代に分けて調査成果を総括する。

第1節 縄文時代

第1章第7節で報告した遺物包含層出土土器の大部分は、縄文時代前期後葉～中期前葉に属する。本節では特に出土数の多い大木6式としたII群4類と、大木7a・7b式としたIII群1・2類を中心に出土層位や出土位置関係を再確認し、その上で先学の研究や類例を参考に編年上の位置づけと遺物包含層の連続性について検討する。

II群4類（図226・227）

出土状況 図70に示したII群4類の出土状況を確認すると、L III a 6から本類のa～d種に属する6点と、これに並行する粗製土器が南北2m×東西4mほどの狭い範囲から出土している。一方、L III a 5では大木4式や大木7a式の古段階の土器と近接して出土している。この状況は、表3に示した層位ごとの出土数の傾向と矛盾しない。表3を見ると、本類はL III a 2からL III bまでのいずれの土層からも出土し、その中ではL III a 6から最も多く出土している。遺物包含層の下層に古い段階の大型片がまとまる傾向はあるものの、層位から本類を細分することは難しい出土状況である。

編年上の位置づけ 編年上の位置づけを検討するにあたっては、今村啓爾氏（今村 2010a）の編年をもとに会津地方の大木6式について考察した小林圭一氏の論考（小林 2016a）と比較し、本類を1～5期に細分した。a種は簾状隆帯を指標とし、図82-1・2のような粗文のものを抽出した。簾状隆帯は、II群3類d種とした口縁部下端の刻みからの変化が連れ、a種の大部分が1期に該当する。破片資料のうち、口縁部文様がある図90-7・8・11と、胴部文様が発達した図90-13については2期と考えている。

b種の指標とした口縁部下端の三角形の切り欠きも、II群3類d種から変化したとみられるため、b種はおもに1期と考えられる。c種の大多数も1期に位置づけられる。胴部文様のある図84-6、図85-2や口縁部の隆帯が複雑な図88-6、貼り瘤が付く図92-10～13は2期の可能性が高い。

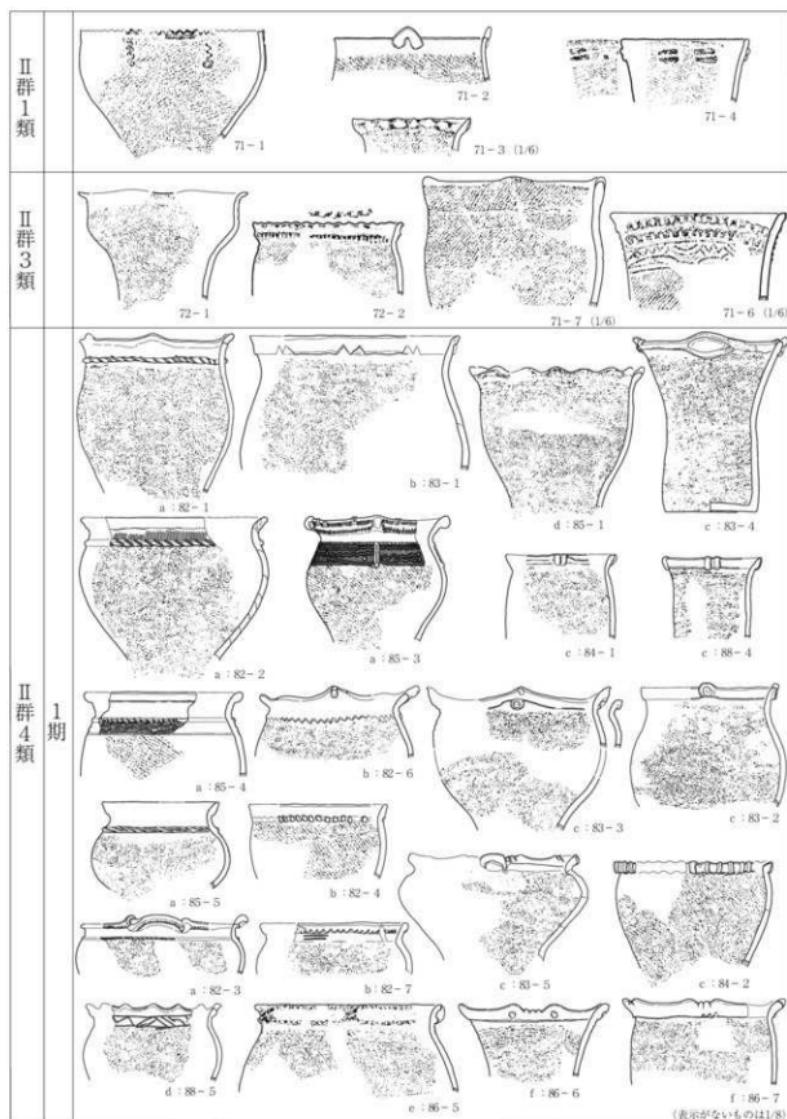
d種も1期を主体とする。連弧状の隆帯が口縁を巡る図86-1は、2期と考えている。口縁部文様がある図96-1・16~18・24や結節浮線文が見られる図98-1~4も2期であろう。e種は、口径を復元し得た図86-3~5と破片資料の大多数が1期とみられる。胴部文様がある図98-17・18、図99-1は2期と考えている。

f種については、その典型例に挙げた図88-2は2期に属する。図86-6・7のように図88-2の口縁部形態の前段階とみられるものは1期であろう。波頂部に円文が描かれた図88-3は、3期に多くの類例が見られる。破片資料では図99-2~7が2期、同図8が3期と考えている。図100-15~図101-2の胴部群も2・3期に含まれる。g種は破片資料のみで、幅の狭い複合状の口縁部であることから2・3期と考えている。h種は複合口縁や板状に肥厚する口縁部に、おもに太い沈線で文様を描くものである。口縁部の幅が狭い図87-3・4と、これに類する破片資料の図101-3~16は2期と考えている。同図17~図102-26は2期としたものに比べ口縁部の幅が広く、円文や半円文が特徴的で3期とみられる。

i種の図88-7は3期とみられる。図103-2~23、図104-2~10のように連続爪形文で文様が描かれたものも、おもに3期に属する。図103-1、図104-11~17のように沈線で文様が描かれた土器は、3・4期とみられる。図104-1・18~図105-16・22・28に見られる沈線の側縁に施された爪形文や刺突文は、4期の特徴とされる(小林 2016 a)。図105-17のようにj種に比べ太めの浮線文で文様が描かれた土器も、3・4期に属する。j種とした結節浮線文あるいはソーメン状浮線文は十三菩提式との共通性が指摘され、本種はおもに4期に該当する。図106-20~22は、浮線文を沈線文に置換すればⅢ群1類に近似する土器であり、5期に位置付けられる。k種は4期を中心とし、Ⅲ群1類b~d種に繋がる過渡的な段階の土器を含んでいる。以上のようにⅡ群4類は1~5期にわたる全ての資料が含まれ、Ⅲ群1類への連続性が辿れる内容と言える。このことは、当該期において遺物包含層の形成が連続と続いたことを示唆している。また、完形品や大型片には1・2期に属するものが多く、特に1期の資料が充実している。

次に地域性について見れば、1・2期においては肥厚した口縁部が外折して開く器形や壺状隆帯、横方向の結節回転文に会津地方と共に特徴が窺える。一方、3期に至っても図88-3のような長胴形深鉢が出土し、宮城県以北からの影響も受けたとみられる。4・5期の口縁部に見られる沈線文にも、宮城県以北の影響が窺える。それに加え、浮線文を用いた十三菩提式の影響を強く受けた土器が出土し、多地域との影響関係が確認される。

前期後半における他の地域との交流関係は、Ⅱ群5類により端的に認められる。中でも図109-4は、十三菩提式(小林 2016 b)と指摘される宮城県小梁川遺跡出土土器(宮城県 1987 a: 図351-3)や、「鍋屋町系」(今村 2010 b)とされる静岡県池田B遺跡出土例(静岡県 2000: 図78-368・369)と、器形や多段に鎖状隆帯が横走する点がよく類似し、Ⅱ群4類の3期に並行するとみられる。浮彫状の文様が特徴的な図124-1は、松原式と指摘されている群馬県中尾遺跡出土例(今村 2010 b)に類似し、4期または5期に並行する可能が高い。



(表示がないものは1/8)

図226 II群1～4類土器集成図（1）



図227 II群1～4類土器集成図（2）

III群1類（図228・229）

出土状況 表3に示した各層から出土した破片数の割合は、L III a 3からが66%と大半を占めるのに対し、L III a 2が11%、L III a 4～6・III bでは4～8%程度と少ない。また図69に示したL III a 3出土土器の分類を見ると、本類e種が8点が多く、他にa種1点、d種2点、III群4類が15点ある。このIII群4類の15点には、e種並行とみられるものが10点ある。本類はL III a 3から大半が出土し、中でもe種とこれに並行する粗製土器が、L III a 3からある程度まとめて出土していると言える。ただし f種に関しては、図133～136に示した大型片を見ると、13点中8点がL III a 2から出土している。

編年上の位置づけ 福島県における中期初頭の土器は、五領ヶ台式の編年をもとに松本茂氏によつて3細分された（松本 2006）。その内容は、五領ヶ台I a・b式期が古段階、五領ヶ台II a・b式期が中段階、五領ヶ台II c～阿玉台I a式直前が新段階である。近年では、大木7a～8b式土器の編年を細別する包括的な研究がなされ、その中で大木7a式は新古2段階に区分されている（中野ほか 2008）。a～f種を設定するにあたっては、上記の研究成果を参考としている。以下では、古・中・新段階に分けて本類の編年上の位置づけを検討する。

a種は梯子状沈線を指標とし、古段階に属する。図125-1は、当該期の特徴である口縁部上端の縦位短沈線が見られず、口縁部文様の特徴からa種の中でも古い様相を示している。図126-2は、玉川村関林A遺跡出土例（福島県 1999：図8-1）の浮線文を沈線文に置換したような文様で、器形と大きさもよく類似している。図127-2の口縁部上端に描かれた斜格子文は、中部高地・北陸地方の影響とみられる。図127-3の口縁部文様の一部には、d種に見られる充填的な横位の短沈線も描かれ、a種とd種の年代幅に重複があることを示している。これに加え、図127-3には菱形文も描かれている。菱形の単位文様は、II群4類の4・5期やa種でも古相とした図125-1に描かれ、中段階以降では見られなくなる。

b種は、口縁部に縦位沈線や比較的単純な沈線文が描かれたものとした。b種に類似した土器は南相馬市浦尻貝塚出土の古段階にある（南相馬市 2008）。またII群4類のh・k種からの変遷が辿れそうで、大木6式との過渡的な段階のものが含まれている。c種としたハの字の短沈線や鋸歯文も、II群4類k種からの変化が窺え、古段階に相当する。図145-1には刻みの入ったドーナツ形の隆帯が付き、a種の図137-1と共に共通する特徴を有している。また、図149-19～図150-15に見られる斜格子文や格子文は、ハの字の短沈線やd種の文様を簡略的に表現したものと推察される。福島県内では浦尻貝塚の古段階や新地町山中B遺跡（福島県 2007）、福島市の愛宕原遺跡（福島市 1989）に出土例がある。d種は先述した図127-3のように、d種とa種の文様が共に描かれた土器があり、古段階に属すると考えている。重層する横位沈線の間に縦位の短沈線を描いた土器は、「糠塚式」あるいは「糠塚系」と称されるように宮城県以北に多くの類例があり、五領ヶ台I式並行に位置づけられている。

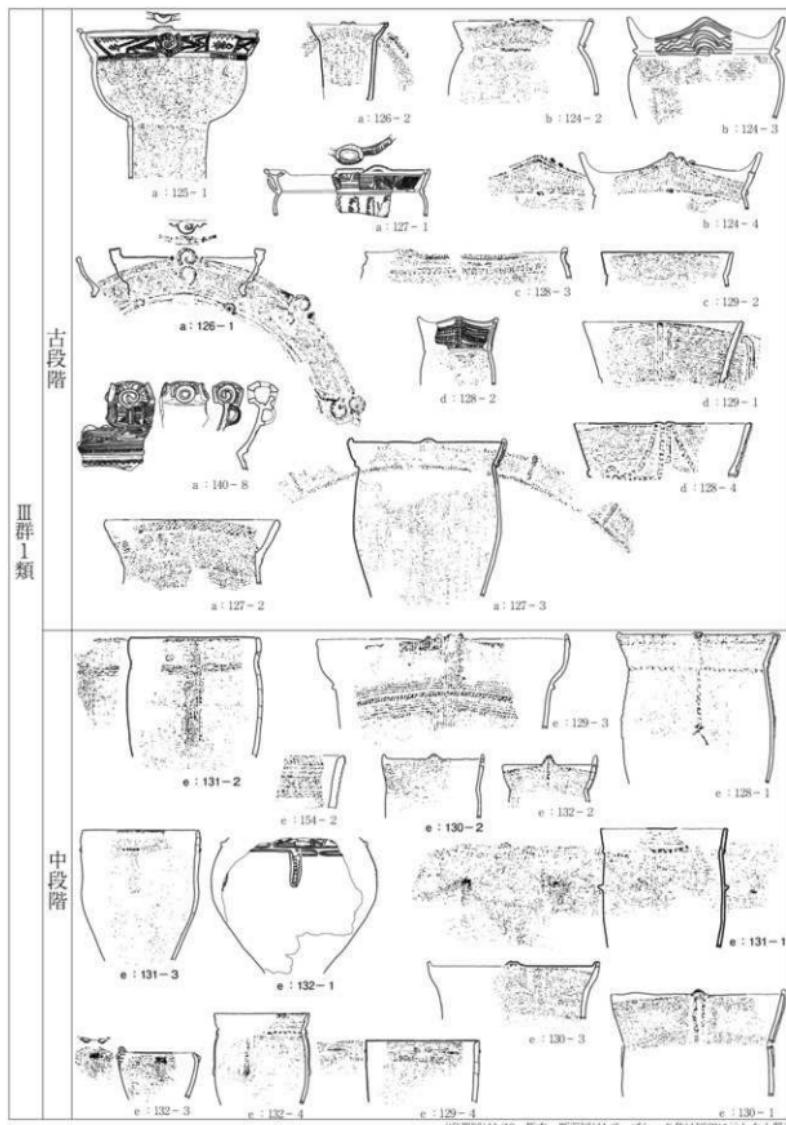


図228 III群1類土器集成図

(実測図421/10、拓本・断面図421/6、ゴシク体は1669に示した土部)

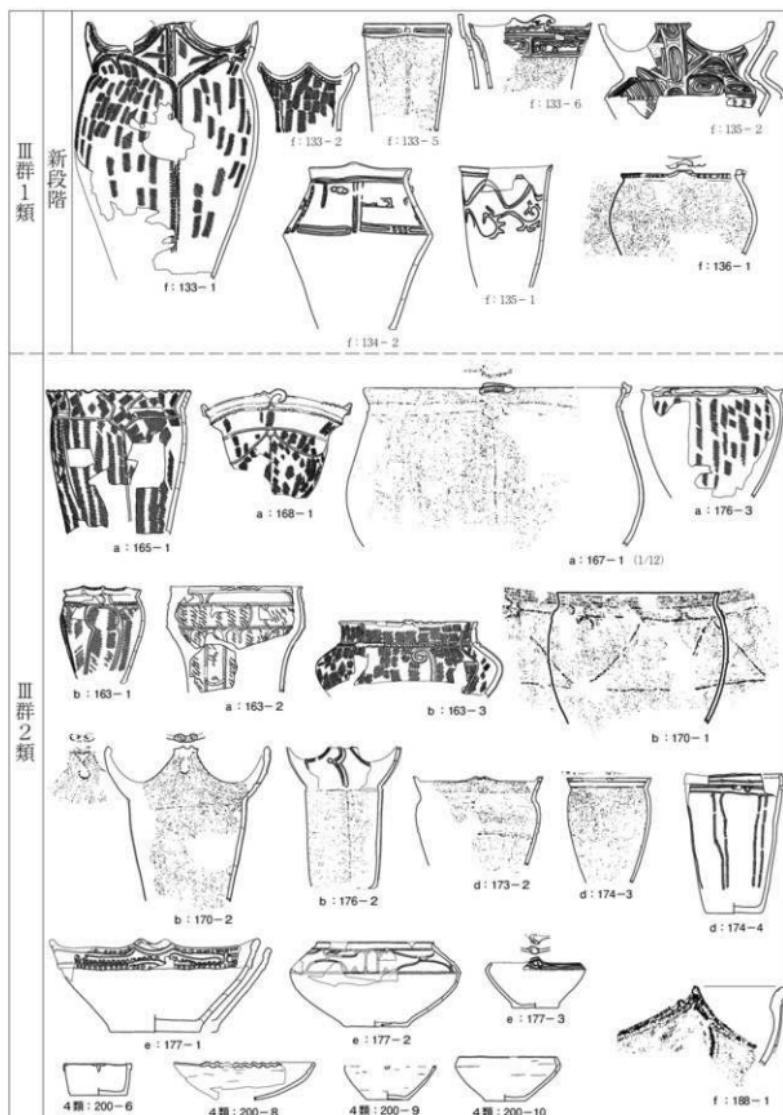


図229 III群1・2類土器集成図

(実測図は1/10、拓本・断面図は1/6、ゴシック体は1998年示した土器)

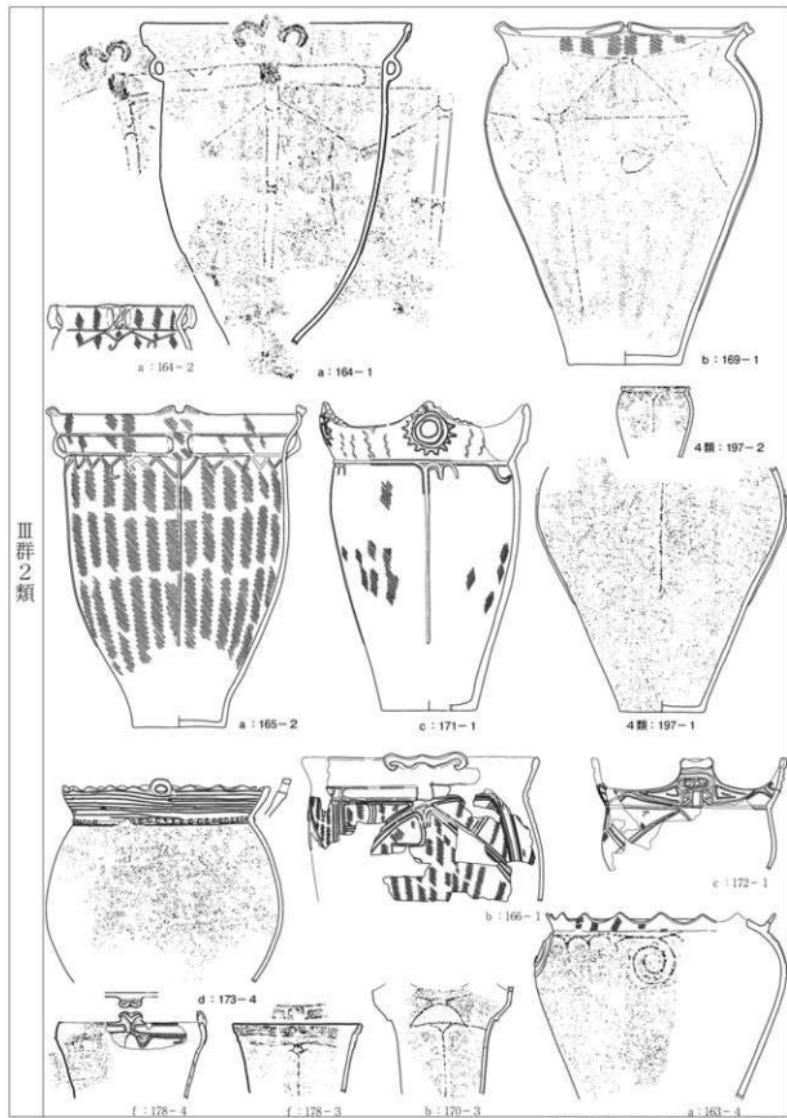


図230 III群2類土器集成図

(実測図11/10, ゴシク体44B668に示した土器)

e種は交互刺突文、列点文が特徴的で中段階に相当する。図131-2には交互刺突文、列点文、小波状文が同居し、三つの文様要素の同時代性を裏付けている。単位文様や空間を充填的に埋める施設方法は目立たなくなり、a～d種と比較すると区画文様だけが残ったような印象を受ける。メリハリのない器形のものが多く、無文地のものが大多数を占める点も、a～d種とは一線を画している。e種に類似した土器は、新地町師山遺跡(福島県 1990c)と山中B遺跡では中期初頭の土器の中で主体的に出土している。また、八辺式(小林 1989)に代表される東関東地方の五領ヶ台式との高い類似性が窺える。

f種は、新段階を中心とした時期と考えている。ただしLⅢa2出土のものに関しては、LⅢa2が比較的擾乱されない状態に保たれた可能性が高いため、Ⅲ群2類と廃棄された年代が近いと考えられる。特に図133-1、図136-1・2は、図68に出土状況を示したⅢ群2類の大型片と近接して出土している。

本種の中で特徴的な土器を取り上げると、図133-6の口縁部に付く鉤状突起の類例は、小梁川遺跡のⅢ群土器にある(宮城県 1986:図120-8)。図134-2は、福島市大平・後閑遺跡に比較的近い器形がある(福島市 1995:図66-1、図98-2)。沈線間に刺突を加えた区画文様はe種と類似し、逆T字状のアクセント文はⅢ群2類の図166-1に近いものが認められる。また図215-1の土偶の文様とも楕円区画や刺突、アクセント文のあり方が似ているため、両者は近い時期の遺物と考えられる。図135-1は、胴部に絵画的な沈線文が横位展開する。本群では他に例がなく、他地域の影響を受けた土器と推察される。同図2は、波頂部の両端が左右に突出する波頂部と、隆線による区画内に描かれた重層的な沈線文が特徴的である。波頂部の形状は、この段階から阿玉台Ia式並行期の土器によく見られる。多条沈線は、五領ヶ台IIc式の影響と考えられる。破片資料の中では、図160-3・10に見られる玉抱き状の渦巻文や、図161-1・7に見られる弧線文と口縁を巡る沈線との接点にのみ施された交互刺突文は、新段階の特徴とされる。

Ⅲ群2類(図229・230)

出土状況 図示したⅢ群2類は、LⅢa2から出土したものが大半を占める。土層を細分する前に取り上げたLⅢa出土のものを除けば、口径を復元し得た大型片は2点のみがLⅢa3から出土し、その他はLⅢa2出土である。その多くが図68に示したように、斜面に沿って破片が幾重にも重なるように出土している。表3に示した有文土器の破片数では、LⅢa2出土が95%を占め、LⅢa3出土が4%、LⅢa4以下では皆無に近い。図68に示したLⅢa2における遺物出土状況は、下層に比べあまり擾乱されない状態に保たれたと考えている。

編年上の位置づけ Ⅲ群2類の特徴として、器高が65cmを超える大型の深鉢が複数出土している点が挙げられる。また6種類に大別した器形の中で、A形とした胴部が膨らむものが多数を占める。中には図166-1や図168-1のように、口縁が楕円形を呈する特殊な器形のものがある。当該期における楕円形の深鉢は、宮城県川崎町の中ノ内A遺跡に類例がある(宮城県 1987b:図84-1)。

口縁部の形態には平縁と小波状口縁、大波状口縁がある。平縁の土器には、図164-1に見られる大きな貼付文や、図165-2、図169-1のようなメガネ状の突起、図166-1や図168-1のような波状・満巻状の貼付文により加飾されることが多い。小波状口縁は山形を成し、図173-4では環状の突起が1箇所のみ付く。大波状口縁の波頂部には、刻みが加えられたものや圭頭状を成すもの、粘土紐で加飾されたものなどがあり、左右非対称な文様が描かれたものが目に付く。

a～c種の文様構成には、図164-1～図170-1を典型例とする次の①～④のような特徴がある。①頸部に上下幅の狭い隆線による楕円形区画文があり、橋状把手かX字状隆線で区切られている。②胴部は、楕円形区画文かY字状隆線で縱方向に区画される。③胴部上半には、縱位区画を起点に連続山形文か波状文、弧状文が巡る。④胴部文様には、副文様が附加されるものがある。b種では副文様がより顯著で、沈線によりY字やコの字の文様、十字状のアクセント文などが加えられている。また、小さなY字状や連弧状の文様は、a～c種に多用される。図165-1、図167-1、図168-1などは頸部の楕円形区画文と胴部のY字状隆線が簡略化され、組み合わされた文様が描かれている。

d種については半粗製的な粗文の土器が多く、上記の文様構成を成す土器はないが、図172-5、図175-1・3に見られる弧状文や菱形のアクセント文にa～c種との共通点が見られる。f種は、無文地に隆線と單列の有節沈線で文様が描かれたものや、指頭圧痕を装飾的に加えた輪積み痕が特徴的な土器で、阿玉台式直前段階から阿玉台I-a式に比定される。図188-1の波頂部に見られる口唇部片側のみの抉りは、阿玉台I-a式に顯著な特徴とされる。

a～e種の類例は、浜通り地方では南相馬市原B遺跡(福島県 2008 a)や、飯館村上ノ台A遺跡(福島県 1984、1990 a)、上ノ台B遺跡(福島県 1990 b)に見られ、大木7b式古段階に置かれている(松本 1996)(中野ほか 2008)。原B遺跡13号住居跡では、大木7b式と阿玉台I-a式が共伴して出土し、本遺跡と近い出土状況を示している。また、頸部の楕円形区画文は福島県内の大木7b式に特徴的とされ、胴部の弧状文は仙台湾岸地域の影響を受けたものとされている。本類にはいずれの特徴も併せ持つ土器が多く見られる。上ノ台A・B遺跡出土例とは、楕円形区画文とY字状の垂下文を組み合わせたような隆線文や、連弧状の隆線、アクセント文に本類との類似性が認められる。

中通り地方では、福島市月崎A遺跡(福島市 1994)から当該期の土器が出土している。このうちa種と類似する隆線のみで文様が描かれた土器は「月崎系」と称され、隆線上にも繩文が施文される特徴と、法正尻遺跡や中ノ内A遺跡には見られない「きわめて地域が限定される土器らしい」ことが指摘されている(今村 2010 d)。本類における隆線上への繩文施文は、図164-1・2など、おもにa種に確認できる。会津地方では法正尻遺跡に良好な資料があり、大木7b式土器は3細分されている(福島県 1991)。その古段階と比較すると、法正尻遺跡には胴部が直線的なB2形が主体的と見えるのに対し、本類ではA1～3形が目立つ。また文様施文では、法正尻遺跡に比べ有節沈線が低調とみられる。この傾向は、法正尻遺跡に比べ植松C遺跡の方が、阿玉台式の影響が弱

かったためと考えられる。

当該期の代表的な遺跡である中ノ内A遺跡のII群土器と比較すると、器形におけるA形の優位性は不明だが、本類のはほぼ全ての器形が中ノ内A遺跡では網羅されている。文様を見ると、本類の図173-4、図175-5を典型例とする口縁部に多条の縄圧痕が横走し、胴部が地文のみの土器が、中ノ内A遺跡には多数見られる。ただし、中ノ内A遺跡では主たる文様とされる対弧文は、本類ではあまり目立たず、連続山形文または波状文を基調としたものが多い。中ノ内A遺跡では対弧文と組み合わさる渦巻文は、本類では図166-1に見られる以外は、図163-4のように単独か、図169-1のようにアクセント的に使用されている。また、隆線に沿った縄圧痕が多用される中ノ内A遺跡に比べ、a・b種が多数を占める本類は粗文的印象が強い。

以上をまとめると、本類のa~e種は大木7b式の古段階を中心とした時に、f種は阿玉台式直前段階から阿玉台I-a式に位置づけられる。大木7b式は頸部に楕円形区画文を有する土器が多く、当該期における福島県内出土土器と共通する特徴を示す。さらには大型で粗文のものが目立つなど、月崎A遺跡例に類似したより強い地域性が認められる。他地域との比較においては、東関東地方および仙台湾岸地域の影響を受けたものが見られる。

遺物包含層の継続性と集落跡の可能性

II群4類およびIII群1・2類の編年上の位置を見てきたように、遺物包含層からは大木4式からまとまった量の土器が出土するようになり、大木5a・b式を経て、大木6式においては1~5期の存在を確認した。大木7a式についても、古・中・新段階の土器が出土し、大木7b式古段階までは連続すると言える。今後、土器型式の細分や出土土器の再検討がなされれば断絶期が見出される可能性があるが、現時点では大木4式から大木7b式古段階まで、遺物の廃棄が継続的に行われたと考えられる。

出土土器から植松C遺跡における縄文時代の消長を推察すると、大木6式の古段階、大木7a式古~中段階、大木7b式の資料が充実し、盛期であった可能性が高い。逆に大木6式の中・新段階と五領ヶ台IIc式並行期は、比較的低調な感がある。同じ浜通り北部の師山遺跡および山中B遺跡では、前期後半では大木6式の古段階、中期では大木7a式中段階が主体となって出土し、植松C遺跡と盛期が一致している。一方、これまで当該期の主要な遺跡として比較対象としてきた法正尻遺跡では、五領ヶ台IIa・b式並行期の土器が少ない。小梁川遺跡でも五領ヶ台IIa~c式、竹ノ下式並行期が前後の段階に比べると極端に少ないとされている。月崎A遺跡、中ノ内A遺跡でも五領ヶ台II式期がほとんどなく、竹ノ下式並行期から始まることが指摘されている(今村 2010d)。植松C遺跡では五領ヶ台II式並行の土器が充実していることから、主要な遺跡とは異なる消長を辿った可能性がある。ただし、主要な遺跡の低迷期とされる五領ヶ台II式並行期に、東関東地方の影響を強く受けていることは見て取れる。

今回の調査では、集落の存在を裏付ける堅穴住居跡は確認できなかった。しかし、多量の遺物が

各層から出土していることから、前期後葉から中期前葉にかけての集落跡が、調査区周辺に存在する可能性は高い。調査区周辺の立地から見て集落跡は、遺物包含層の北西から西方に広がる丘陵上の平坦面に存在すると推察される。

集落跡の存在を示唆する遺物として、各層から出土した食物残滓とみられる焼骨がある。本遺跡の周辺において狩猟、漁労が行われ、集落において消費された可能性が高い。同定した資料はごく一部に過ぎないが、獸骨ではシカ、イノシシが、魚類ではタイ科が多く、海洋性の魚類も捕獲している。また、貝類が1点も確認できなかった点が注視される。この点は、山中B遺跡の2号遺物包含層における動物骨の出土状況と近似している。山中B遺跡においては515点の同定資料中、貝殻は1点であった。この結果から、貝層を形成するに至らない捕獲量であったため、埋没過程で貝殻が溶解消失した可能性が高く、貝類への依存度が相対的に低かったと分析されている（福島県、2007）。植松C遺跡においてもこれに近い状況があったと推察され、当該期における食物利用の一つのあり方を示している可能性がある。

貝層は確認されなかつたものの、貝塚の分布が希薄な浜通り地方北半にあって、これに準じた食物残滓を含む遺物包含層が確認されたことは意義深い。新田川流域では初見とみられ、貝塚が集中的に分布している宮田川流域周辺とは対照的である。また植松C遺跡の近隣には中期中・後葉の遺物が採取されている堂坂遺跡や、中期末葉の集落跡が調査されている植松A遺跡がある（南相馬市、2011）。植松C遺跡においても大木8a式が少量出土しているため、中期中葉以降も同一丘陵上において集落が営まれた可能性が高い。

(今野)

第2節 平 安 時 代

平安時代の遺構には、1～11号住居跡、1～6号建物跡、1～3・5～10・13・14号土坑、2・3号溝跡がある。遺構内外からは、土師器、須恵器、瓦、羽口、鉄製品、鉄滓が出土した。ここでは主要な遺構や遺物に焦点をあてながら総括する。

遺物について

土 師 器 土師器の器種は、杯・壺・鉢・蓋・高台付杯が確認される。図示した杯はロクロ成形で、内面をヘラミガキ後に黒色処理するものが主体を占める。底部の切削し技法には、回転糸切りが多い認められた。体部下端から底面にかけての再調整は手持ちヘラケズリが主体で、回転ヘラケズリを施すものもわずかに含まれる。この他に、3号住居跡では、内面にヘラミガキと黒色処理を施さない「赤焼土器」の破片（図16-3）が床面から出土している。また7号土坑からは、内外面ともにヘラミガキと黒色処理が施される図48-11が出土している。

図示した壺は、7号住居跡から出土した図29-2を除いてロクロ成形の長胴壺である。外面は胴部より上半はロクロナデ、下半は縦方向のヘラケズリが施される。内面にはロクロナデやヘラナ

デが認められる。その他に、7号住居跡出土の図29-1と3号溝跡出土の図52-10は鉢とみられ、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。蓋および高台付杯は、いずれも3号溝跡から出土している。図52-9の蓋は完形品で、内面にヘラミガキと黒色処理が施されている。高台付杯は底部の細片が2点出土しており(図52-7・8)、内外面ともに黒色処理が施されている。

比較的多く出土した杯は、底径が小さく外面の再調整が手持ちヘラケズリとなるものが主体である。遺物の年代については、木本編年(木本 1990)の第3段階に相当すると思われ、9世紀中葉前後を中心とした時期と推定される。なお、3号住居跡から出土した「赤焼土器」の図16-3については、9世紀末葉頃の年代が与えられる。

墨書土器 墨書は18点確認され、その全てが土師器の杯である。墨書は判読できたもので、「南合」・「南」・「南貳本」・「□田合」・「文」・「又」・「分」が認められた。中でも「南」という字に関連するものが12点あり、大半を占める。1号住居跡から出土した「南貳本」に含まれる「本」という字は、「奉」の省略である可能性が高いことが指摘されており(平川 2000)、本来の字義は「南貳奉」の可能性が考えられる。「奉」が記される土器は宗教的な奉斎に用いられ「官衙的色彩の強い遺跡」から出土する傾向も指摘されており(有富 2016)、本遺跡の性格を考える上で示唆的である。

また「南合」と墨書された土師器杯は、可能性があるものを含め6点出土している。明治大学墨書データベース(明治大学 2010)によると、「南」が使用されている墨書には「南館」など方角、位置を示すものが多い一方、「南富皆」、「田本南」など祭祀的な意味と取れるものも認められる。また「合」には、「立合」・「合子口」・「得合」といった行為を表すものがある。本遺跡例の「南合」は、「南貳本」の墨書土器があることから、祭祀的な意味合いの墨書と考えられる。

「南合」と記された墨書土器の類例は南相馬市広畠遺跡にあり、その年代は9世紀第2～3四半期とされている(南相馬市 2011、原町市 2000)。広畠遺跡は4棟の掘立柱建物跡が整然と並んで確認され、泉官衙遺跡に隣接していることから行方郡家に関連する施設であったとされている。官衙もしくは寺院の中核ではなく、縁辺に立地している点において、植松C遺跡との共通性が認められる。また二遺跡は同じ新田川沿いに立地し、その距離は4kmと近く年代も重なる。ともに「南合」の墨書土器が出土していることは、遺跡の性格も相まってこの二遺跡間に密接な関係があった可能性を示している。

瓦 出土した瓦の種類は平瓦、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦が認められ、平瓦が最も多く出土している。遺構から出土したものがほとんどであるが、調査区内から瓦葺の建物跡は確認されていない。平瓦はいずれも凸面にタタキ目、凹面に布目が確認される。凸面のタタキ目は格子状のものが大半を占め、わずかに回字状、菱形の斜格子状、樹枝状のタタキ目が認められる。いずれも一枚作りで成形されたものとみられるが、菱形格子状および矢羽状のタタキ目が施されるものは、細片であるため詳細は不明である。

丸瓦は、凸面は縱方向のナデ・ケズリによって調整される。凹面は布目と、4～5cmほどの間隔で粘土紐巻き上げの痕跡が認められる。軒平瓦は7号住居跡から1点出土している(図29-4)。平

瓦の凸面に粘土を継ぎ足して顎段を成形している。瓦当面と顎部は3本の蕊を伴う蓮弁文が型押しされており、「有蕊弁蓮華文軒平瓦」と呼称される瓦（藤木 2006）に分類される。軒丸瓦は12号土坑から図49-5が出土している。凸面にはナデが、凹面には瓦当の剥離痕と布目が認められる。

これらの瓦は、植松C遺跡の東側に位置する植松廃寺跡で確認された瓦と共通する特徴を有している。植松廃寺跡の瓦は、軒丸瓦の文様からI群とII群に分類されている（南相馬市 2011）。I群は「有蕊弁蓮華文」を統一意匠とする軒丸瓦・軒平瓦と、格子状タタキ目が施される一枚作りの平瓦、粘土紐巻き作りの丸瓦、鬼瓦で構成される。これらの瓦は、植松C遺跡の北西方向に位置する入道迫瓦窯跡で生産されたものであることが判明しており、ともに焼かれた須恵器から9世紀初頭～中葉の年代が想定されている。

II群は、「単弁蓮華文軒丸瓦」に唐草文が施される軒平瓦が伴う。また桶巻き作りで斜格子状のタタキ目が施される平瓦と、一枚作りで樹枝状・矢羽状・回字状のタタキ目が施される平瓦もII群に伴うと推定されている。II群の瓦について生産地は判明していないが、桶巻き作りの平瓦が伴うことから、I群の瓦にやや先行して焼成された可能性も指摘されている（戸田 1984）。今回の調査で出土したものは、軒平瓦、丸瓦、格子状タタキ目の平瓦がI群に相当し、菱形格子状・回字状・矢羽状タタキ目の平瓦がII群に相当するものと考えられる。

鉄 淬 鉄滓は遺構内から5,410g、遺構外から4,579g出土している。遺構内では平安時代の大部分の遺構から出土し、中でも9号住居跡とこれに隣接する3号溝跡からの出土量が多い。遺構外では、1号建物跡があるE8グリッドで2,608gが出土するなど、平安時代の遺構が集中する調査区北寄りから出土している。鉄滓はほぼ全て鍛冶滓とみられ、一次製錬に伴う流出滓や炉壁は認められなかった。5号土坑からは羽口も出土していることから、調査区外の近隣に平安時代の鍛冶関連遺構がある可能性が高い。

遺構について

竪穴住居跡 竪穴住居跡の平面形は、方形を基調としている。規模は一辺の長さが5m前後と比較的大きなもの（1・3号住居跡）と、3.9～4.5mのもの（2・4・7・9号住居跡）とに分けられる。主軸方位の傾きは、真北から10°以内のものが大多数である。カマドは、東壁（1・3・4・6・7・10号住居跡）と、北壁（2・9号住居跡）に設置されるものが多く、一定の規範があった可能性が窺える。このうち3・7号住居跡は北壁から東壁へ、2号住居跡は東壁から北壁へのカマドの付け替えが行われている。またカマドの燃焼部に、意図的に遺物を遺棄したと思われる事例が確認された。3号住居跡のカマドでは、土師器杯（図16-6）が伏せられた状態で出土し、火床面を覆うように瓦片が9点敷き並べられていた。同じ住居跡の旧カマドでは、燃焼部埋土から土師器杯（図16-1）と鉄製鎌（図20-9）が出土した。これらの出土状況は、カマド廃絶時に何らかの祭祀行為があったことを示すものと推測される。

貯蔵穴の平面形は、隅丸長方形または梢円形を基調とする。いずれもカマド脇に設けられ、カマ

ドに向かって右側に位置するもの(1・3・4・6・7号住居跡)と、左側に位置するもの(5・10号住居跡)に大別される。柱穴は1・10号住居跡で確認された。中でも1号住居跡は唯一、長方形に配された4基の主柱穴と周壁に位置する小規模な壁柱穴が認められた。住居の規模も比較的大きく、他の住居と一線を画す特徴を持っている。なお、これらの堅穴住居跡はある程度の間隔を保つて位置し、相互に重複する例は認められなかった。また、各住居跡から出土した遺物の年代幅もほとんど見られないことから、比較的近い時期に機能した住居跡群であると考えられる。

掘立柱建物跡 6棟の掘立柱建物跡が検出されたが、いずれも調査区外に延びており、遺構全体を確認したものはない。比較的多くの柱穴を検出した建物跡の規模は、東西3間以上×南北2間(2・6号建物跡)、東西2間以上×南北2間(3号建物跡)、東西2間以上×南北2間以上(5号建物跡)である。各建物跡の主軸方位は、真北からの振れ角が2~8°に納まり、おおむね揃っている。柱穴の平面形は、隅丸方形または長方形を基調とする1~4号建物跡と、楕円形を基調とする5・6号建物跡に分けられる。

1~4号建物跡の柱穴は、長径が69~137cm、深さ46~90cmと大型である。底面には柱の当たりが認められるものがあり、その直径は20~35cmである。柱間は1号建物跡が23m、2号建物跡が1.6~21m、3号建物跡が24~30m前後、4号建物跡が28mである。柱材を切り取りまたは抜き取った痕跡は、全ての建物跡で認められた。また2号建物跡のP1の底面からは、燈明皿の可能性がある土師器杯(図44-1)が伏せられた状態で出土した。これらの建物跡は、調査区北寄りの最も標高の高い、標高35.6mの平坦地に立地している。

一方の5・6号建物跡の柱穴は、長径が42~76cm、深さ21~49cmとやや小ぶりで浅い。柱間は5号建物跡が1.6~24m、6号建物跡が1.8~2.5mで1~4号建物跡と大差がない。柱の当たりが確認できた柱穴は6号建物跡のP8のみで、その直径は15cmである。1~4号建物跡に比べ柱の底面に掛かる荷重が軽く、細い柱材が用いられたと考えられる。5・6号建物跡は調査区中央付近から西寄りの、標高35.0mの平坦地に立地し、1~4号建物跡からやや離れた所に位置している。

2号と3号、5号と6号建物跡には各々重複関係が認められ、掘立柱建物跡は少なくとも2期にわたって存在したことが考えられる。2・3号建物跡の新旧関係は、柱穴の重複関係から2号→3号の順である。また3号建物跡と5号住居跡も重複関係が認められ、3号建物跡の柱穴を埋めた後に5号住居跡が構築されていた。5・6号建物跡の新旧関係については、5号建物跡には柱痕跡が認められなかったのに対し、6号建物跡では遺存していたため、5号→6号の変遷が考えられる。

植松庵寺跡との関連

植松C遺跡の調査からは、東側に隣接する植松庵寺跡との関連を窺わせる成果が確認された。植松庵寺跡は、発掘調査は実施されていないものの、古くから多数の瓦片や瓦製獸脚が採集されており、かつては礎石が存在したことが知られている。性格については、瓦のあり方や獸脚の出土から「有力な氏族の私寺」とする説(藤本 2006)や、「行方軍團の所在地」とする説(戸田 1984)がある。

植松廃寺跡との関連を窺わせる遺構として、掘立柱建物跡が挙げられる。中でも1～4号建物跡は柱穴の平面形が隅丸方形を基調として、規模が大型であるという特徴を持つ。また重複関係が認められることから、少なくとも2期にわたって建物が存在したことが考えられる。植松C遺跡の北西に隣接する植松B遺跡においても掘立柱建物跡が確認されており、東西2間以上×南北4間の規模で、柱穴は50cm前後の方形である。柱穴が重複する状況から2度にわたる建て替えが想定されている（原町市 1997）。

出土遺物の中では、瓦や3号溝跡から出土した円面鏡（図52-11・12）が植松廃寺跡との関連性を窺わせる。中でも瓦は、植松廃寺跡で採集されたものと同様の特徴が認められた。しかし今回の調査では瓦葺建物の存在は確認されず、出土した瓦の多くは、竪穴住居跡から破片の状態で出土している。また3号住居跡などでは、焼成時の自然釉が割れ口に付着している「ハネモノ」が確認されている。よって今回の調査で出土した瓦は、植松廃寺跡や入道迫瓦窯跡で不要になったものを二次的に持ち込んだものが大半であると考えられる。植松廃寺跡の瓦の特徴からは、最低2期にわたって瓦葺建物が存在した可能性も指摘されている（戸田 1984）。このように植松廃寺跡周辺では、建物跡や瓦のあり方から、複数期にわたって建物跡が存在した可能性が指摘されている。今回の調査で確認された掘立柱建物跡も2期にわたって存在しており、植松廃寺跡に関連する建物である可能性が高い。

竪穴住居跡については、出土土器の傾向から植松廃寺跡とほぼ同時期であると推測される。中に「赤焼土器」が伴う3号住居跡など植松廃寺跡で想定される年代より、やや新しいものも確認される。しかし、宗教的な意味合いが想定される墨書き土器や、多くの瓦が持ち込まれていることから、植松廃寺跡と関連する可能性は高いと思われる。

以上のことから植松C遺跡で確認された遺構群は、植松廃寺跡に関連する建物跡と、それらに関連した人々が生活した集落跡であると推測される。限られた範囲内での成果であり、植松廃寺跡の性格など多くの課題が残されているが、今後の調査・研究の進展が待たれる。

(神林)

引用・参考文献

会津美里町教育委員会 2007 「油田遺跡」

有富純也 2016 「『奉』『本』などと記された墨書き土器に関する予備的考察」『アジア太平洋研究』第41号

今村啓爾 2010 a 「大木6式土器の諸系統と変遷過程」『土器から見る縄文人の生態』同成社

今村啓爾 2010 b 「松原式土器の位置と築場系土器の成立」『土器から見る縄文人の生態』同成社

今村啓爾 2010 c 「五箇ヶ台式土器の編年」『土器から見る縄文人の生態』同成社

今村啓爾 2010 d 「東関東と東北地方の中期初頭土器の編年と動態」『土器から見る縄文人の生態』同成社

小高町教育委員会 2005 「浦尻貝塚1」小高町文化財調査報告書第6集

本木元治 1990 「福島県内の黒色土器（平安時代）」『東国土器研究』第3号

小林圭一 2016 a 「会津地方の大木6式土器と沼沢火山の噴火」『研究紀要15』東北芸術工科大学東北文化研究センター

小林圭一 2016 b 「宮城県七ヶ宿町小栄川遺跡出土の大木6式土器」『研究紀要第8号』（公財）山形県埋蔵文化財センター

小林謙一 1989 「千葉県八日市場市八戸貝塚出土土器について－東関東地方中期初頭段階の土器様相－」『史学』第58卷

- 2号三田史学会
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000 「池田B遺跡」
- 縄文セミナーの会 2009 a 「中期初頭の再検討」「第22回縄文セミナー」
- 縄文セミナーの会 2009 b 「中期初頭の再検討—記録集—」「第22回縄文セミナー」
- 戸田有二 1984 「入道迫瓦窯跡」「考古学研究室発掘調査報告書 群馬県吉井町下五反田・末沢窯跡 福島県郡山市針生・原田瓦窯跡 福島県原町市・入道迫瓦窯跡」考古学研究室報告甲種第3冊
- 内藤政恒 1937 「我が見たる歴史に就いて」「考古学雑誌」第27卷第1号
- 中野幸大 2008 「東北地方南部地域における縄文中期初頭から中葉の土偶」「第5回土偶研究会発表資料」土偶研究会
- 中野幸大ほか 2008 「小林達雄先生古稀記念企画 総覧 縄文土器」「総覧 縄文土器」刊行委員会
- 原町市教育委員会 1997 「植松B遺跡」「原町市内遺跡発掘調査報告書2」原町市埋蔵文化財調査報告書第15集
- 原町市教育委員会 2000 「下高館跡・正福寺跡・広雲遺跡」「豊原高平地区は場整備事業関連遺跡発掘調査報告書1」原町市埋蔵文化財調査報告書第21集
- 平川 南 2000 「墨川土器の研究」吉川弘文館
- 藤木 海 2006 「有志弁護華文證瓦の展開とその背景」「福島考古」第47号
- 福島県教育委員会 2016 「東日本大震災復興関連遺跡調査報告3」
- (財)福島県文化センター 1983 「母猪地区遺跡発掘調査報告13 菓師堂遺跡 蓬入遺跡 栗木内遺跡」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1984 「真野ダム閘門遺跡調査報告V 上ノ台A遺跡(第1次)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1987 「真野ダム閘門遺跡調査報告X 羽白D遺跡(第1次)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1988 a 「真野ダム閘門遺跡調査報告XII 羽白D遺跡(第2次)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1988 b 「真野ダム閘門遺跡調査報告XIII 羽白C遺跡(第1次)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1989 「真野ダム閘門遺跡調査報告XIV 羽白C遺跡(第2次)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1990 a 「真野ダム閘門遺跡調査報告XV 上ノ台A遺跡(第2次)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1990 b 「真野ダム閘門遺跡調査報告XVI 上ノ台B遺跡」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1990 c 「相馬閘門遺跡調査報告II 郡山遺跡」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1991 「東北横断自動車道遺跡調査報告11 法正尻遺跡」福島県教育委員会
- (財)福島県文化センター 1999 「福島空港公園遺跡調査報告2 関林A遺跡」福島県教育委員会
- (財)福島県文化振興事業団 2007 「一般国道6号相馬バイパス遺跡発掘調査報告VI 山中B遺跡(調査I・III区)」福島県教育委員会
- (財)福島県文化振興事業団 2008 a 「常磐自動車道遺跡調査報告46 原B遺跡」福島県教育委員会
- (財)福島県文化振興事業団 2008 b 「常磐自動車道遺跡調査報告51 小池田遺跡(1・2次調査)」福島県教育委員会
- (財)福島市振興公社 1989 「愛宕原遺跡」福島市教育委員会
- (財)福島市振興公社 1994 「月崎A遺跡」福島市教育委員会
- (財)福島市振興公社 1995 「大平・後園遺跡」福島市教育委員会
- 松田光太郎 2003 「大木6式土器の変遷とその地域性—縄文時代前期末業の東北地方中・南部の土器編年ー」「神奈川考古第39号」神奈川考古同人会
- 松本 茂 1995 a 「東北南半の様相」「第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相」縄文セミナーの会
- 松本 茂 1995 b 「東北南半の様相」「第8回縄文セミナー 中期初頭の諸様相—記録集—」縄文セミナーの会
- 松本 茂 1996 「五領ヶ台式土器から阿玉台式土器へ—福島県内出土土器からー」「論集しのぶ考古」論集しのぶ考古刊行会
- 松本 茂 2006 「縄文時代中期前半土器の研究」「平成18年度まほろん文化財研修資料」(財)福島県文化振興事業団
- 南相馬市教育委員会 2008 「福井貝塚3」南相馬市埋蔵文化財調査報告書第11集
- 南相馬市教育委員会 2011 「原町市史」第三巻 資料編I「考古」
- 宮城県教育委員会 1986 「七ヶ宿ダム閘門遺跡調査報告書I 小梁川遺跡遺物包含層土器編」
- 宮城県教育委員会 1987 a 「七ヶ宿ダム閘門遺跡調査報告書II 小梁川遺跡」
- 宮城県教育委員会 1987 b 「東北横断自動車道遺跡調査報告書II 中ノ内A遺跡・本屋敷遺跡」
- 宮城県教育委員会 2003 「嘉倉貝塚」
- 明治大学古代学研究所 2010 「明治大学蔵書データベース」

付 章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

株式会社 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

植松C遺跡は、福島県南相馬市原町区上北高平字植松(北緯 $37^{\circ}39'27''$ 、東経 $140^{\circ}57'43''$)に所在し、段丘面の端部に立地する。測定対象試料は、L II・L III a 2~6で出土した縄文土器から採取した土器付着炭化物5点と炭化物5点の合計10点である(表4)。

土器付着炭化物は、いずれも縄文土器から採取した。L III a 6から出土のFB-UEM・C-01(図106-14)は口縁部下部内面、L III a 3から出土のFB-UEM・C-02(図199-1)は胴下半部内面(接合部に近い)、L III a 2から出土のFB-UEM・C-03(図187-16)は口縁部外表面、L III a 2上面から出土のFB-UEM・C-04(図106-7)は口縁部内面、L IIから出土のFB-UEM・C-05(図189-13)は口縁部外表面から採取した。

炭化物は、L III a 2~6の各層から1点ずつ採取された。

2. 測定の意義

土器付着炭化物と炭化物の年代を測定することで、土器型式と土層の年代の対応関係を確認する。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表4に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4. 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C 濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(%)で表した値である(表4)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2)¹⁴C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3)pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい(¹⁴C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が100以上(¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表4に、補正していない値を参考値として表5に示した。
- (4)暦年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3 較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表5に示した。暦年較正年代は、¹⁴C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

6. 測定結果

測定結果を表4・5に示す。L II・L III a 2~6で各層から1~2点ずつ測定した土器付着炭化

物(FB-UEM・C-01～05)と炭化物(FB-UEM・C-06～10)について層の古い順から示す。なお、年代については、「総覧縄文土器」(小林編 2008)の編年を参考とする。

L III a 6 の試料の¹⁴C 年代は、FB-UEM・C-01(土器付着炭化物)が 4790 ± 30 yrBP、FB-UEM・C-06(炭化物)が 4890 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、FB-UEM・C-01が $3637 \sim 3534$ calBC、FB-UEM・C-06が $3695 \sim 3646$ calBC の間でそれぞれ 2 つの範囲で示される。FB-UEM・C-01 は縄文時代前期後葉から末葉頃、FB-UEM・C-06 は前期後葉頃に相当する。

L III a 5 の FB-UEM・C-07(炭化物)の試料の¹⁴C 年代は、 4900 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、 $3695 \sim 3651$ calBC の範囲で示される。縄文時代前期後葉頃に相当する。

L III a 4 の FB-UEM・C-08(炭化物)の試料の¹⁴C 年代は、 4670 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、 $3510 \sim 3372$ calBC の間で 3 つの範囲で示される。縄文時代前期末葉から中期前葉頃に相当する。

L III a 3 の試料の¹⁴C 年代は、FB-UEM・C-02(土器付着炭化物)が 4670 ± 20 yrBP、FB-UEM・C-09(炭化物)が 4490 ± 20 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、FB-UEM・C-02 が $3512 \sim 3373$ calBC の間で 3 つの範囲、FB-UEM・C-09 が $3329 \sim 3101$ calBC の間で 4 つの範囲で示される。FB-UEM・C-02 は縄文時代前期末葉から中期前葉頃、FB-UEM・C-09 は中期前葉から中葉頃に相当する。

L III a 2 の試料の¹⁴C 年代は、FB-UEM・C-03(土器付着炭化物)が 4590 ± 30 yrBP、FB-UEM・C-10(炭化物)が 4460 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、FB-UEM・C-03 が $3486 \sim 3346$ calBC の間で 2 つの範囲、FB-UEM・C-10 が $3321 \sim 3029$ calBC の間で 5 つの範囲で示される。FB-UEM・C-03 は縄文時代中期初頃から前葉頃、FB-UEM・C-10 は中期前葉から中期中葉頃に相当する。

L III a 2 上面の FB-UEM・C-04 の試料の¹⁴C 年代は、 4740 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、 $3632 \sim 3387$ calBC の間で 3 つの範囲で示される。縄文時代前期後葉から中期前葉頃に相当する。

L II の FB-UEM・C-05(土器付着炭化物)の試料の¹⁴C 年代は、 4610 ± 30 yrBP、暦年較正年代(1σ)は、 $3491 \sim 3356$ calBC の間で 2 つの範囲で示される。縄文時代前期末葉から中期前葉頃に相当する。

FB-UEM・C-01～05 の土器付着炭化物は土器の内面または口縁部外面に付着し、調理による焦げ付きや吹きこぼれなどにより残存した食物に由来する可能性が高い。食物はその種類によって含まれる炭素の由来が異なり、それが年代値に影響する場合があるため注意を要する。測定した土器付着炭化物 5 点のうち、4 点の炭素安定同位体比 $\delta^{13}\text{C}$ は、 $-28.04 \pm 0.18\%$ (FB-UEM・C-04) から $-25.25 \pm 0.24\%$ (FB-UEM・C-03) の間にあり、C 3 植物や草食動物の範囲に含まれる。残りの 1 点 (FB-UEM・C-02) の $\delta^{13}\text{C}$ は、 $-21.76 \pm 0.24\%$ と明らかに他の 4 点より高い値となっている。これは、C 3 植物の範囲では高い値で、淡水魚の値あるいは海生生物の値に近い (Yoneda et al. 2004)。このため、海洋生物由来の炭素が含まれることで、海洋リザーバー効果により年代値が実際より古く見積もられている可能性がある。FB-UEM・C-02 の年代値は、同層から出土した炭化材 (FB-UEM・C-09) よりも古い年代値であることから、土器の型式学的特徴と合わせて検討をする必要がある。

試料の炭素含有率は FB-UEM・C-02～10 で、54% (FB-UEM・C-02) ～ 72% (FB-UEM・

C-09)の適正な値、FB-UEM・C-01はそれよりやや低く42%である。FB-UEM・C-01・02は、胎土の可能性が高い砂粒が混入していたために炭素含有率が相対的に若干低い値となっているが、FB-UEM・C-02は適正な範囲内、FB-UEM・C-01も適正かそれより若干低い程度であり、測定結果に影響するほどではないと考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1), pp.337-360.
- 小林達雄編 2008 「総覧縄文土器」 総覧縄文土器刊行委員会 アム・プロモーション
- Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0–50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55 (4), pp.1869–1887.
- Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion : Reporting of $\delta^{13}\text{C}$ data. *Radiocarbon* 19 (3), pp.355–363.
- Yoneda, M. et al. 2004 Isotopic evidence of inland-water fishing by a Jomon population excavated from the Boji site, Nagano, Japan. *Journal of Archaeological Science*, 31, pp.97–107

表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正値)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	(試料名の頭部「FB-UEM・C-」を省略記)	
						$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
IAAA-170123	01	遺物包含層 (K 21 c) L III a 6	土器付着炭化物	AaA	-27.23 ± 0.19	4,790 ± 30	55.09 ± 0.18
IAAA-170124	02	遺物包含層 (L 22 a) L III a 3	土器付着炭化物	AaA	-21.76 ± 0.24	4,670 ± 20	55.91 ± 0.17
IAAA-170125	03	遺物包含層 (L 22 b) L III a 2	土器付着炭化物	AaA	-25.25 ± 0.24	4,590 ± 30	56.50 ± 0.18
IAAA-170126	04	遺物包含層 (L 22 b) L III a 2 上面	土器付着炭化物	AaA	-28.04 ± 0.18	4,740 ± 30	55.43 ± 0.18
IAAA-170127	05	遺物包含層 (K 19) L II	土器付着炭化物	AaA	-26.31 ± 0.23	4,610 ± 30	56.35 ± 0.19
IAAA-170128	06	遺物包含層 (K 22 c) L III a 6	炭化物	AaA	-29.14 ± 0.18	4,890 ± 30	54.42 ± 0.18
IAAA-170129	07	遺物包含層 (K 22 c) L III a 5	炭化物	AAA	-27.26 ± 0.18	4,900 ± 30	54.37 ± 0.18
IAAA-170130	08	遺物包含層 (K 22 c) L III a 4	炭化物	AaA	-27.83 ± 0.18	4,670 ± 30	55.96 ± 0.18
IAAA-170131	09	遺物包含層 (L 22 a) L III a 3	炭化物	AAA	-27.19 ± 0.20	4,490 ± 20	57.21 ± 0.17
IAAA-170132	10	遺物包含層 (L 22 a) L III a 2	炭化物	AAA	-33.67 ± 0.19	4,460 ± 30	57.41 ± 0.19

表5-1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正値、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 曆年年代範囲	2 σ 曆年年代範囲	[参考値]
	Age (yrBP)	pMC (%)				
IAAA-170123	4,830 ± 30	54.84 ± 0.18	4,789 ± 26	3637calBC – 3600calBC (8.5%) 3580calBC – 3534calBC (59.7%)	3643calBC – 3621calBC (15.7%) 3606calBC – 3522calBC (79.7%)	
IAAA-170124	4,620 ± 20	56.29 ± 0.17	4,670 ± 24	3512calBC – 3491calBC (17.0%) 3470calBC – 3424calBC (43.2%) 3383calBC – 3373calBC (8.0%)	3519calBC – 3369calBC (95.4%)	
IAAA-170125	4,590 ± 20	56.47 ± 0.17	4,586 ± 25	3486calBC – 3473calBC (12.8%) 3372calBC – 3346calBC (55.4%)	3496calBC – 3461calBC (19.9%) 3376calBC – 3323calBC (63.2%) 3214calBC – 3187calBC (6.9%) 3156calBC – 3129calBC (5.4%)	
IAAA-170126	4,790 ± 30	55.08 ± 0.18	4,740 ± 26	3632calBC – 3562calBC (49.8%) 3536calBC – 3517calBC (13.8%) 3395calBC – 3387calBC (4.6%)	3635calBC – 3561calBC (57.2%) 3542calBC – 3505calBC (19.8%) 3428calBC – 3381calBC (18.3%)	
IAAA-170127	4,630 ± 30	56.2 ± 0.18	4,607 ± 26	3491calBC – 3470calBC (35.7%) 3374calBC – 3366calBC (32.5%)	3500calBC – 3433calBC (53.5%) 3380calBC – 3346calBC (41.9%)	

表5-2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

[参考値]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし Age (yrBP)		曆年較正用 (yrBP)	1σ 曆年代範囲	2σ 曆年代範囲
	pMC (%)				
IAAA-170128	4,960 ± 30	53.96 ± 0.18	4,887 ± 26	3695calBC - 3678calBC (26.8%) 3670calBC - 3646calBC (41.4%)	3704calBC - 3641calBC (95.4%)
IAAA-170129	4,930 ± 30	54.12 ± 0.18	4,895 ± 26	3695calBC - 3651calBC (68.2%)	3708calBC - 3642calBC (95.4%)
IAAA-170130	4,710 ± 30	55.62 ± 0.17	4,665 ± 25	3510calBC - 3487calBC (17.2%) 3473calBC - 3425calBC (43.2%) 3382calBC - 3372calBC (7.8%)	3518calBC - 3395calBC (84.0%) 3387calBC - 3309calBC (11.4%)
IAAA-170131	4,520 ± 20	56.95 ± 0.17	4,486 ± 24	3329calBC - 3264calBC (32.8%) 3246calBC - 3216calBC (14.4%) 3181calBC - 3159calBC (10.3%) 3123calBC - 3101calBC (10.7%)	3341calBC - 3092calBC (95.4%)
IAAA-170132	4,600 ± 30	56.39 ± 0.18	4,458 ± 26	3321calBC - 3272calBC (20.9%) 3267calBC - 3215calBC (17.6%) 3170calBC - 3164calBC (2.4%) 3115calBC - 3086calBC (13.5%) 3061calBC - 3029calBC (13.8%)	3334calBC - 3212calBC (48.6%) 3191calBC - 3153calBC (8.9%) 3136calBC - 3022calBC (37.9%)

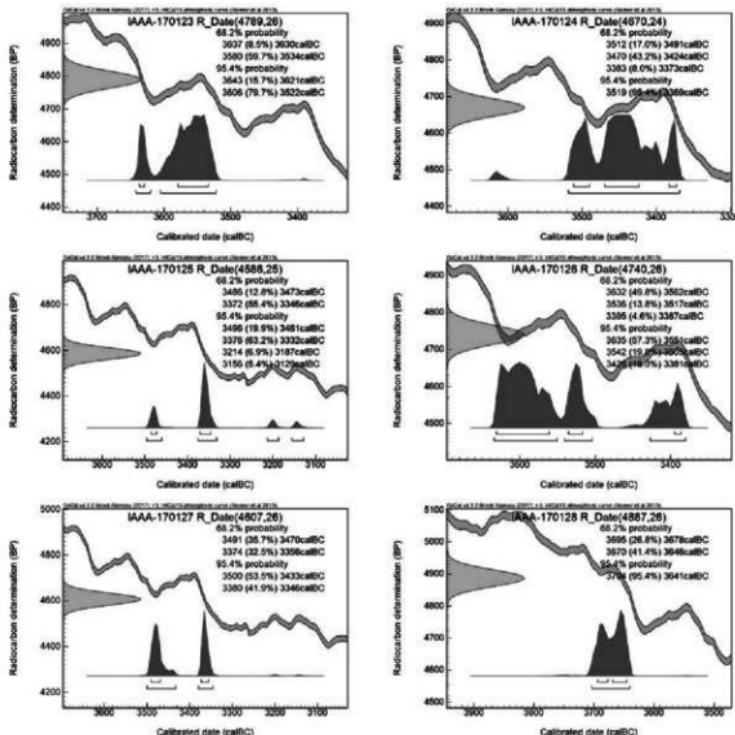


図231 曆年較正年代グラフ（1）

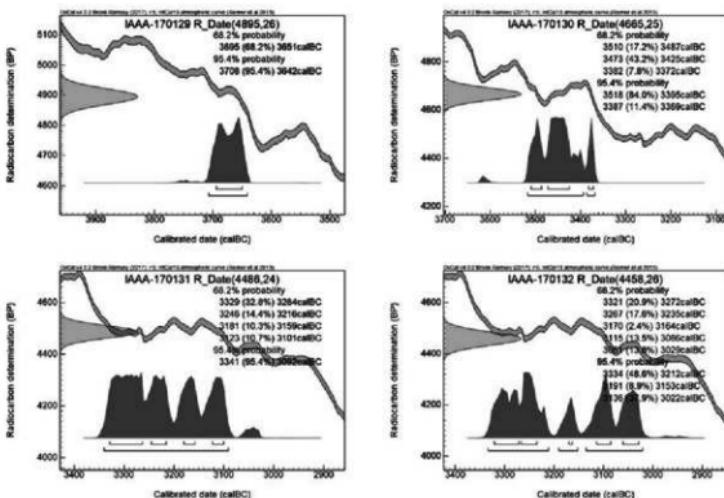


図232 歴年較正年代グラフ（2）

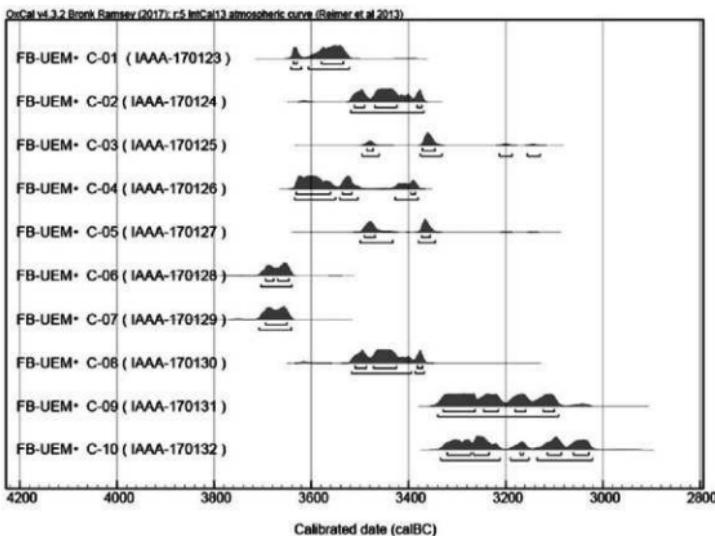


図233 マルチプロット図

第2節 出土動物遺体の同定

株式会社 バレオ・ラボ
中村賢太郎

1. はじめに

福島県南相馬市原町区上北高平字植松に所在する植松C遺跡において、縄文時代の遺構や遺物包含層から動物遺体が検出された。ここでは、動物遺体の同定結果について報告する。

2. 試料と方法

試料は、縄文時代の1号土器埋設遺構から採取された1試料と、同じく縄文時代の遺物包含層から採取された84試料の、計85試料の動物遺体である。1試料につき、1片ないし2片が含まれていた。試料の観察は肉眼および実体顕微鏡下で行い、同定は現生標本との比較により行った。

3. 結 果

表6に、植松C遺跡で同定された動物の分類群一覧を示す。魚類では、軟骨魚綱のアオザメ属(アオザメ、バケアオザメ)、板鰓亜綱(サメ・エイ類)、硬骨魚綱のコイ科(コイ、フナなど)、タイ科(マダイ、クロダイなど)が同定された。哺乳類では、シカ、イノシシ、ノウサギが同定された。また、鳥類も見られた。

表7に、各試料の分類群、部位の同定結果と観察所見を示す。ほとんどの試料は、真っ白になるまでよく焼けていた。

・魚類

軟骨魚綱のアオザメ属は歯が1点、板鰓亜綱(サメ・エイ類)は椎骨が9点同定された。

硬骨魚綱のコイ科は尾椎が1点、タイ科は歯が16点、腹椎が1点、尾椎が1点、椎骨破片が2点同定された。また、タイ科の可能性がある左右不明の前上顎骨あるいは歯骨の破片が1点、椎骨が2点見られた。その他に、硬骨魚綱までの同定に留まった左右不明の歯骨?が1点、椎骨9点、不明破片が1点見られた。

・哺乳類

シカは、左右不明の角が6点、左脛骨1点、左右不明の中手骨あるいは中足骨が1点、前後左右不明の中節骨2点、前後左右不明の末節骨1点が同定された。シカの角には、縱方向の溝切りが施されたものが見られた。

イノシシは、右脛骨1点、左右不明の中手骨あるいは中足骨が2点、左右不明の末節骨1点が同定された。また、イノシシの可能性がある左右不明の上顎骨1点、左右不明の中手骨あるいは中足骨1点、前後左右不明の末節骨1点が見られた。

ノウサギは、右上腕骨1点が同定された。

その他、哺乳綱までの同定に留まった椎骨や四肢骨などが14点、哺乳綱の可能性があるものが4点見られた。

・鳥 類

鳥綱は、右脛足根骨1点、四肢骨1点が同定された。また、鳥綱の可能性がある四肢骨2点、末節骨1点が見られた。

4. 考 察

同定された動物遺体はいずれも食用可能であるため、今回検出された動物遺体の多くは食料として利用された後の残滓が燃やされ、土中で残存したと考えられる。ただし、加工の痕跡があるシカ角も見られ、骨角器の材料としての動物利用も認められる。

なお、動物遺体のはば全てが焼けており、生の動物遺体がほとんど見られない点から、焼けた骨でなければ土中で保存されない埋没環境だったと考えられる。今回、同定された動物遺体が示しているのは、楨松C遺跡で利用された動物の一部だけであると考えられる。

表6 出土動物一覧

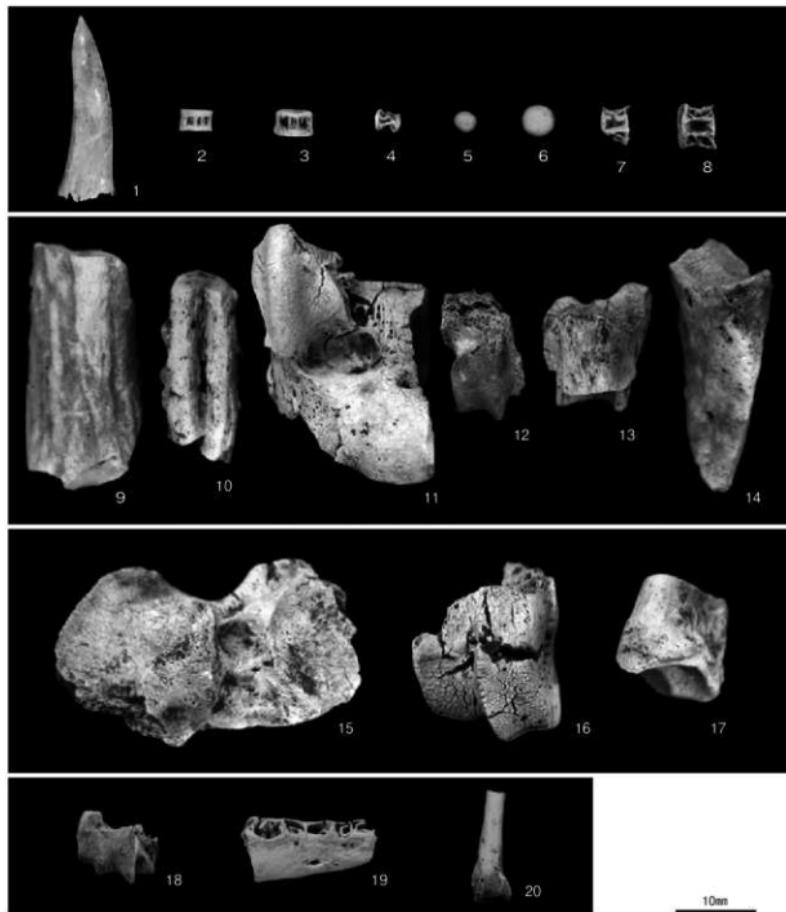
軟骨魚綱 Chondrichthyes		哺乳綱 Mammalia	
板鰓亞綱 Elasmobranchii		シカ Cervus nippon	
アオザメ属 <i>Iurus</i> sp		イノシシ <i>Sus scrofa</i>	
板鰓亞綱の一種 Elasmobranchii ord. fam. gen. et spp. indet.		ノウサギ <i>Lepus brachyrurus</i>	
硬骨魚綱 Osteichthyes		哺乳綱の一種 Mammalia ord. fam. gen. et spp. indet.	
コイ科 Cyprinidae		鳥綱 Aves	
タイ科 Sparidae		鳥綱の一種 Aves ord. fam. gen. et sp. indet.	
硬骨魚綱の一種 Osteichthyes ord. fam. gen. et spp. indet.			

表7-1 出土動物遺体同定結果

No	出土遺体	グリッド	層位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
1	1号土器遺跡追跡	L22a	#1	タイ科	歯	不明	遮断面	1	焼
2	遺物包含層	K22c	L III a5	タイ科	歯	不明	遮断面	1	焼?
3	遺物包含層	L22a	L III b	タイ科	歯	不明	遮断面	1	焼?
4	遺物包含層	L22a	L III a2	タイ科	歯	不明	遮断面	1	焼
5	遺物包含層	L22a	L III a2	板鰓亞綱(サメ・エイ類)	椎骨	-	椎体	1	焼
6	遺物包含層	L22a	L III a2	板鰓亞綱(サメ・エイ類)	椎骨	-	椎体	1	焼
7	遺物包含層	L22a	L III a2	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体	1	焼
8	遺物包含層	L22a	L III a3	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体	1	焼
9	遺物包含層	L22a	L III a5	板鰓亞綱(サメ・エイ類)	椎骨	-	椎体	1	焼
10	遺物包含層	L22a	L III a2	板鰓亞綱(サメ・エイ類)	椎骨	-	椎体	1	焼
11	遺物包含層	K22c	L III a6	コイ科	尾椎	-	椎体	1	焼
12	遺物包含層	K22c	L III a5	タイ科?	椎骨	-	椎体破片	1	焼
13	遺物包含層	K22b	L III a5	アオザメ属	歯	不明	ほぼ完存	1	焼
14	遺物包含層	K22c	L III a6	鳥綱?	四肢骨	不明	破片	1	焼
15	遺物包含層	L22a	L III a3	鳥綱?	四肢骨	不明	破片	1	焼
16	遺物包含層	L22a	L III a3	鳥綱?	末端骨	不明	ほぼ完存	1	焼
17	遺物包含層	L21a	L III a2	鳥綱	胫足根骨	右	遮断面	1	焼
18	遺物包含層	L21d	L III a3	哺乳綱?	四肢骨	不明	破片	1	焼
19	遺物包含層	K22b	L III a5	シカ	角	不明	破片	1	焼、丸剥、表面剥落
20	遺物包含層	K21b	L III a3	シカ	中節骨	不明	近位端	1	焼、丸剥
21	遺物包含層	L22a	L III a3	哺乳綱(大型)	頭椎/仙椎	-	破片	1	焼、丸剥
22	遺物包含層	K21a	L III a2	シカ	蹠骨	左	破片	1	焼
23	遺物包含層	K22c	L III a6	イノシシ?	末跗骨	不明	ほぼ完存	1	焼
24	遺物包含層	K22b	L III a5	シカ	角	不明	破片	1	焼、加工?

表7-2 出土動物遺体同定結果

No.	出土遺体	グリッド	部位	分類群	部位	左右	部分・状態	数量	備考
25	遺物包含型	K22 c	L III a 6	哺乳綱	四肢骨	不明	骨幹破片	1	焼
26	遺物包含型	L22	L III a	シカ	角	不明	破片	1	焼、亀裂
27	遺物包含型	L22 a	L III a 1	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼
28	遺物包含型	L21 a	L III a 2	イノシシ	齧骨	右	近位端	1	焼、骨端未融合
29	遺物包含型	K22 c	L III a 3	哺乳綱(小型)	下顎骨	右	破片	1	焼、小型
30	遺物包含型	L22 a	L III a 2	哺乳綱?	不明	不明	破片	1	焼
31	遺物包含型	L22 a	L III a 2	哺乳綱?	指骨	不明	完存	1	焼
32	遺物包含型	L22 a	L III a 2	哺乳綱(大型)	四肢骨	不明	骨幹破片	1	焼
33	遺物包含型	L21 d	L III a 3	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼
34	遺物包含型	L22 a	L III a 3	イノシシ	末段骨	不明	近位端	1	焼
35	遺物包含型	L22 a	L III a 3	哺乳綱(大型)	四肢骨	不明	骨幹破片	1	焼
36	遺物包含型	K21 c	L III a 3	哺乳綱(大型)	腰椎/?肋椎	-	破片	1	焼
37	遺物包含型	L22 a	L III a 3	鳥綱	四肢骨	不明	骨幹	1	焼
38	遺物包含型	L21 d	L III a 3	シカ	角	不明	破片	1	焼、亀裂
39	遺物包含型	L22 a	L III a 3	哺乳綱(大型)	椎骨	-	破片	1	焼
40	遺物包含型	L21 d	L III a 3	哺乳綱(大型)	不明	不明	破片	1	焼、亀裂
41	遺物包含型	L22 a	L III a 3	シカ	角	不明	破片	1	焼、焼
42	遺物混合型	K21 c	L III a 3	イノシシ?	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼
43	遺物包含型	L21 d	L III a 3	シカ	末段骨	不明	完存	1	焼
44	遺物包含型	L22 a	L III a 3	哺乳綱	四肢骨	不明	破片	1	焼
45	遺物包含型	L22 a	L III a 3	哺乳綱	不明	不明	破片	1	焼、亀裂
46	遺物混合型	L22 a	L III a 3	タイ科	角	不明	遮離面	1	焼
47	遺物包含型	L22 a	L III a 3	イノシシ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼
48	遺物包含型	L22 a	L III a 3	ノウサギ	上顎骨	右	遠位端	1	焼
49	遺物包含型	L22 a	L III a 3	哺乳綱(大型)	四肢骨	不明	骨幹破片	1	焼、亀裂
50	遺物混合型	L22 a	L III a 4	哺乳綱(大型)	不明	不明	破片	1	焼、亀裂
51	遺物包含型	K22 b	L III a 5	シカ	中手骨/中足骨	不明	遠位端	1	焼
52	遺物混合型	K22 b	L III a 5	シカ	角	不明	破片	1	焼、縦方向の溝切り
53	遺物包含型	L21 c	L III a 6	イノシシ?	上顎骨	不明	破片	1	焼
54	遺物包含型	K21 b	L III b	シカ	中顎骨	不明	遠位端	1	焼、亀裂
55	遺物包含型	L22 a	L III b	哺乳綱	指骨?	不明	破片	1	焼
56	遺物包含型	L22 a	L III b	哺乳綱(大型)	椎骨	-	破片	1	焼
57	遺物包含型	L22 a	L III b	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼
58	遺物包含型	L22 a	L III a 1	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼
59	遺物包含型	L22 a	L III a 1	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼
60	遺物混合型	K22 c	L III a 5	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体破片	1	焼
61	遺物包含型	K22 c	L III a 5	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼?
62	遺物包含型	K22 c	L III a 5	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体破片	1	焼
63	遺物包含型	K22 c	L III a 5	板腮海綱(サメ・エイ科)	椎骨	-	椎体	1	焼
64	遺物混合型	K22 c	L III a 5	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼
65	遺物包含型	K22 c	L III a 5	板腮海綱(サメ・エイ科)	椎骨	-	椎体	1	焼
66	遺物包含型	K22 c	L III a 5	硬骨魚綱	歯骨?	不明	破片	1	焼
67	遺物包含型	K22 c	L III a 5	哺乳綱?	不明	不明	破片	1	焼
68	遺物混合型	L22 a	L III a 4	硬骨魚綱	歯骨?	-	椎体破片	2	焼
69	遺物包含型	L22 a	L III a 4	タイ科?	前上顎骨/歯骨	不明	破片	1	焼
70	遺物包含型	L22 a	L III a 5	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼?
71	遺物包含型	L22 a	L III a 5	板腮海綱(サメ・エイ科)	椎骨	-	椎体	1	焼
72	遺物包含型	L22 a	L III a 5	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体	1	焼
73	遺物包含型	L22 a	L III b	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼?
74	遺物混合型	L22 a	L III a 3	硬骨魚綱	不明	不明	破片	1	焼
75	遺物包含型	L22 a	L III a 3	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体	1	焼
76	遺物包含型	L22 a	L III a 3	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼
77	遺物包含型	L22 a	L III a 3	タイ科	尾椎	-	椎体	1	焼
78	遺物包含型	L22 a	L III a 3	タイ科	腹椎	-	椎体	1	焼
79	遺物包含型	L22 a	L III a 3	タイ科?	椎骨	-	椎体	1	焼
80	遺物包含型	L22 a	L III a 3	板腮海綱(サメ・エイ科)	椎骨	-	椎体	1	焼
81	遺物包含型	L22 a	L III a 3	硬骨魚綱	椎骨	-	椎体破片	1	焼
82	遺物包含型	L22 a	L III a 3	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼?
83	遺物包含型	L22 a	L III a 3	タイ科	椎骨	-	椎体破片	2	焼
84	遺物包含型	L22 a	L III a 3	板腮海綱(サメ・エイ科)	椎骨	-	椎体	1	焼
85	遺物包含型	L22 a	L III b	タイ科	歯	不明	遮離面	1	焼



- | | | |
|-----------------------------|-------------------------|---------------------------|
| 1. アオザメ属歯 (No.13) | 2・3. 板鰐亜綱椎骨 (No.5・6) | 4. コイ科尾椎 (No.11) |
| 5・6. タイ科歯 (No.1・2) | 7. タイ科腹椎 (No.78) | 8. タイ科尾椎 (No.77) |
| 9・10. シカ角 (No.38・52) | 11. シカ左距骨 (No.22) | 12. シカ左右不明中手骨／中足骨 (No.51) |
| 13. シカ左右不明中節骨 (No.20) | 14. シカ左右不明末節骨 (No.43) | 15. イノシシ右脛骨 (No.28) |
| 16. イノシシ左右不明中手骨／中足骨 (No.33) | | 17. イノシシ左右不明末節骨 (No.34) |
| 18. ノウサギ右上腕骨 (No.48) | 19. 哺乳綱(小型)右下顎骨 (No.29) | 20. 鳥綱右脛足根骨 (No.17) |

図234 出土動物遺体